
冒険者ライフ！

作者X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者ライフ！

【Nコード】

N33020

【作者名】

作者X

【あらすじ】

とある世界を旅する三人の冒険者の『物語』。
魔物や魔法が当然のように出てきます。
まるでゲームのような世界を生きる彼らですが、
彼らにもちゃんと生活があるわけで……。

ただいま第五章です！

プロローグ

ここは皆さんの住んでいる世界とは、少し…いえ、だいぶ違う世界……。

魔法や魔物、精霊、はたまた神なんてものがその存在を認知され、もはや知っていて当たり前前の存在になっています。

世界を滅ぼす魔王なんて物騒な者はいないけれど、庶民の平和を脅かす物騒な魔物はいます。

人間より弱い魔物ならともかく、鬼や悪魔、ましてやドラゴンなんてものが出てきたら、普通の人ではとても対処できません。

そこで登場するのが『冒険者』という職業に就いている者たち。彼らは多くが厳しい訓練を重ね、人間離れた筋力、魔力を持っています。

一般人は困ったことがあれば、彼らが集う『酒場』に依頼を出し、報酬を出す代わりに解決してもらおうのです。

もちろん依頼は魔物退治だけではありません。離れた土地までの護衛、貴重な魔草の採取、もしかしたら子守りなんてものもあるかもしれないですね。

ちなみに、冒険者達はほとんどが旅人です。自由気ままに旅をし、依頼を見つけては解決して生活費を稼ぎます。こんな彼らの生活スタイルが『冒険者』という職業名の由来なのかもしれません。

……さて、これから紡ぐのは、ある三人組の冒険者達の『物語』。故郷を離れ、根なし草の冒険者として生きることを選んだ彼らは、一体どんな生活を送っているのでしょうか……。

プロローグ（後書き）

初投稿です。

ノリで書いていきますので、皆様に少しでも笑って頂ければ幸いです。

メインキャラ設定(前書き)

軽くネタバレを含みます。

メインキャラ設定

ハデイ・トレイト

年齢：21歳 性別：男

身長：176cm 体重：65kg

髪：短めの茶髪 瞳：黒

主人公。『D級^{クラス}冒険者』の資格を持つ。

とある農村で育ったが、幼いころから父親に剣の修業をつけられていたため、どうせならそれを使って生きていこうと冒険者になる。長剣を得物とする一刀流の剣士。低位魔獣ぐらいなら一人で倒せる程の実力者。

顔はそこそこ良いが、イケメンというほどではない。

メインキャラ三人の中では一番まともな性格で、メリスやグリーンにいつも振り回されている。少し短気で（原因は他二人にあるが）よく怒る。それでも一緒にやっていけているので、なんだかんだで人よし。

また、家計はハデイがやりくりしているが、他の二人が全くお金を気にしないため、いつも頭を悩ませている。

メリス・テーナス

年齢：19歳 性別：女

身長：158cm 体重：??kg（一応

女なので）

髪：腰まである長い赤茶色の髪 瞳：茶色

ヒロイン。一人前の魔法使いの証である『魔導師』^{ウィザード}の称号を持つ。ハデイと同じ村で育ったが、ハデイが旅に出ると聞いて同行した。武器はなし。炎と水の魔法を得意とし、炎は基礎魔法レベル3、水はレベル2までを習得している。特に『ブレイアム』は全力でやれば大木を一撃で焼き尽くす程の威力を持つ。

明るい性格で、いつもハデイを（時には道具や魔法を使って）からかっている（本人いわく『お茶目』）。アクセサリーが大好きで、気に入った物があると勝手に家計からお金を出して買う。そしてハデイに怒られる。

グールド・テーナス

年齢：23歳

性別：男

身長：180cm

体重：68kg

髪：肩まである灰色の髪

瞳：茶色

愛称グリー。ハデイと同じ『D級冒険者』^{クラス}の資格を持つ。

メリスがハデイについていくと聞いて思いとどまらせようとしたが、説得しきれず、それならばと同行した。

武器は銃。腕前はいいが、弾が高いからあまり撃つな、とハデイに言われている。

いつも茶色の帽子を被り、黒いマントを羽織っているのが特徴。いわゆる美形だが、いつも妹にかかりきりだったせいか、村ではあまりもてなかつた。本人は気にしてない。

三人の中で一番物知りで、よく本を読む姿が見られる。読む本は主に魔物図鑑、魔術書、医学書、そしてエロ本。

年下二人のことをいつも見守っている心優しい青年。暴走さえしな

ければ、良い人。
暴走さえしなければ。

第1話 やりたい仕事に就いたからって、いつもやりたいことができるとは限

「……………何故だ？」

普段からは考えられないような暗い声で俺、ハディ・トレイトはそ
うつぶやいた。

「……………何故なんだ……………？……………何故なんだあああああああ！？」

ボゴオツ！！

「いつてえええ！？」

「ハディうるさい！赤ちゃんが起きちゃうでしょ！？」

「口で言え！！いきなり後頭部を殴るな！！！」

どうも皆様おはようございます、こんにちは、こんばんは。
俺はD級^{クラス}冒険者のハディ・トレイトだ。

「あつ！ほら、起きちゃったじゃない！よしよーし……………」

ちなみに、さつき辞書という名の凶器で、俺の後頭部を殴ってきた
この暴力女はメリス・テーナス。
俺の冒険者仲間だ。

「……………ねえ、ハディ」

「ん？何だ？」

あれ？なんかメリスの周囲が赤く光っているような

「燃やされちゃうなら、右腕と左腕、どっちがいい？」
「ちよつと待て！！まず質問がオカシイ！！」

燃やされちゃうならって何だ！？
燃やすな！！素敵な笑顔で何言ってるんだこいつ！？

「冗談だよ、もー」
「……そうか、冗談か。……目が笑ってなかったが」

冗談じゃないよな？俺が『暴力女』って言ったから怒ったんだよな？

………待て、俺は心の中で言ったはずだぞ。

「それより、どうしたの？いきなり大声で叫びだしたりして……」

「……何かその言い方だと、俺が頭おかしい奴みたいだが……」

「大丈夫ハデイ！あなたの頭がどうにかなっちゃったとしても、私はずっと仲間だからね！！」

「ちよつと待て！！俺の頭は別にどうにもなつてねえぞ！？そのキラキラした目やめる何を期待してるんだお前は！！」

さつきみたいに赤ん坊を起こさないよう、声を抑えて言い合う。

横目でちらつと見ると、メリスがあやしたおかげか、ぐっすりと寝ていた。

……おいメリス、つまらなさそうな顔するな。俺の頭は正常だ。

「話を戻すが……、叫びたくもなるだろ、この状況」

「？」

メリスは分からない、といった顔をしている。……お前それでも冒険者か？

今の状況を簡単に説明しよう。

ここはスイーツ王国の中にある、ビスケット町という小さな町の中である。

今俺達は、その町の中にある一軒家の中にいる。ちなみに、他人の家だ。

……そこ、勘違いするなよ。不法侵入じゃないからな？

「あのお、俺達は冒険者なんだぞ？」
「うん、そうだよ？」

「だったら何で……、何で『子守り』なんてやってるんだっ！？」

そう、俺達は今、『子守り』という依頼の真っ最中なのである。

ちなみに俺の仲間はメリスの他にもう一人いて

「あれ、グリーはどうしたんだ？」

「え？兄さんなら」

と、そこでタイミング良く玄関の扉が開く。

「ただいまー！」

見計らったかのようなタイミングで、グリーことグルード・テーナスが帰ってきた。

セカンドネームから分かる通り、グリーはメリスの実の兄である。年上だし、俺にとっても、頼れる人だ

「おかえりなさい、兄さん」

「おお！ただいまメリス！！二人っきりで大丈夫だったか！？ハデイクんに迫られたり、襲われたり、押し倒されたりしなかったか！？」

「うん、大丈夫！」

「獣か俺は！？」

この強烈なシスコ　妹好きさえなければ。

つつーか、俺とメリスはそんな関係じゃないんだが……。

「どこ行ってたんだ？グリー」

「ああ、ちよつと買い物にね」

そう言っつてグリーは手に持っている買い物袋を見せてきた。そついやそろそろ昼時だな……。

「わーい！お昼ご飯！何なに？」

メリスもお腹が減っていたのだろう、嬉しそうだ。

その期待の眼差しを受けて、グリーは買い物袋から食べ物を取り出した……。

「おにぎりだよ。一人二個！」

……うん、ひどいな。まあ、仕方ないんだが。

「あ、あはは……」

さすがのメリスも苦笑いをしている。

そう、今俺達は金欠なのだ。

今日の朝、酒場で依頼がないと言われた時は、また野宿しなきゃならないかと思っただぜ……。

せっかく町に着いたのに、野宿なんてごめんだったの。

不幸中の幸いと言うべきか、困っていた所に一つの依頼が来た、それが『子守り』だったわけだ……。

……文句言ってもしょうがねえな。
小さなおにぎりでも、何も食べないよりはマシだ。

赤ん坊が寝ている内に食べてしまおうと、三人でイスに腰掛ける。

『いただきまーす!』

「「ちそうさまー!」

早っ!?

「ちょっと待てメリス、いくら小さなおにぎり二個でも、十秒で完食って早すぎないか!？」

「お腹減ったー!」

「だったらもつと大事に食べー!」

「そうだよメリス、よく噛んで食べた方が体にもいいし、満腹感が出るんだよ。それに……」

珍しくグリーがメリスに意見してる。

……それに？

「もっとゆっくり食べてくれないと、食事中のメリスをゆっくり観察できないじゃないか」

「お前メリスが関わりと途端に変態に変わるよな!!」

「失敬な、兄として当然のことをしているまでだ」

「んなことしてる兄はお前だけだ!!」

「何を行ってるんだい？妹を観察しない兄など、兄じゃないだろう!!」

全世界の妹がいる兄全員に、土下座して謝れ!!

「メリス、お前も何か言ってやれ……」

「えへへ、もー、兄さん、照れちゃうよー」

「照れるな!!」

いつもながら何なんだよこの兄妹!?

「いっつも思うんだけど、ハディは気が短すぎるよ、怒ってばっか」

「ハディくん、カルシウム不足じゃないのかい？もっと牛乳を飲んだり、小魚を食べたほうがいいよ?」

俺か！？俺が変なのか！？

「ううゝ……お腹減った……」

メリスが机に突っ伏して、呻いている……つつつても、他に食料はないしな……。

「じゃあメリス、僕の分をあげようか？」

「え、いいの！？」

メリスが凄まじい速さで起き上がり、キラキラした目でグリーを（正確にはグリーが持っているおにぎりを）見つめる。

「ああいいよ、はい」

「わーい！ありがとう兄さん！！」

グリーからおにぎりを二個もらい、喜んで食べ始めるメリス。

ふと、グリーは食べなくてもいいのか、と思ったが、グリーが嬉しそうにメリスを見ていたので、気にしないことにした。

喜んでる妹が見ればそれでいいってか？……さすがだよお前は。

第1話 やりたいたい仕事に就いたからって、いつもやりたいたいことができるとは限ら

こんな感じで続いていきます！

第2話 金が全てではないけれど、やっぱりお金は大切だ

「「ちそう様ー！」

「……まあ、腹の足しにはなったな」

十分後、とりあえず腹ごしらえは済んだ。

おにぎり二個じゃとても満腹にはならないが、ないよりはいい。

「そついえば、この依頼って報酬どれくらいなの？」

「ん？どうしたメリス、お前が報酬を気にするなんて珍しいな」

「いつも金なんて全っ然気にしないでしょ。」

「えーっと、なんだか今回は本当に困ってるみたいだから……」

なるほど、おにぎり四個じゃ満足できないってわけか、こいつ見かけの割によく食うしな。

「6000Gだ」

「……え？」

メリスの表情が固まる。

「えつと……、ここの宿屋の代金って、いくらだっけ……？」

「……一人部屋2000Gゴールド、二人部屋3800Gゴールド」

「ちよつと待って!？」

おお、さすがにメリスでも気づいたか。

「それじゃ、今日宿屋に泊ったら2000Gゴールドしか余らないよ!？」

ちなみに、さつき食べたおにぎりは六個合わせて600Gゴールドだったらしい。

200Gゴールドか、小学生のお駄賃より少ないな。

「いや、そんなことはないよメリス」

慌てるメリスに、グリーが優しく声をかける。

「僕達は『冒険者』なんだ。

冒険者の資格を持っている人は、宿屋の代金が半分になるんだよ」

グリーの言うとおりだ。

まあ、A級クラスやB級クラスの冒険者はさらに安くなるみたいだが、C級以下クラスは半額だ。

俺達はD級クラスだから半額になる。

ちなみにメリスは資格を持ってないが、資格を持ってる人と一緒なら『仲間』と見なされて半額になる。

「だから、余るのは200Gゴールドじゃなくて、3100Gゴールドだ。
まあ少ないが、道中の食料ぐらいは買えるだろ」
「逆にいえば、食料だけで精一杯……だね」

……痛い所突いてくるな、グリーン……

「まあ、そうだな。だからメリス、もう勝手にアクセサリなんて買
うなよ………?」

少し殺気を出してそう言う。

あ、目をそらしやがった。

「ご、ごめんってば……、あの時はつい……」
「つい、で済んだら軍はいらねえ」

実は、今俺達が金欠になったのは、メリスのせいだったりする。
元々あまり金に余裕がなかったのに、
昨日この町に来る途中、メリスが勝手に家計から金を出して、
旅の商人からブローチを買ったんだ。

5000G^{ゴールド}の。

一般感覚からいえば安物の部類に入るかもしれないが、俺達からしたら大金だ。

おかげで旅費がなくなっちまった。

もちろんそのブローチは、今もメリスの左胸で輝いている。

……いや、きれいだけど、似合うけど。

「だって、かわいかったんだもん……」

しゅん、とうなだれて、上目づかいで俺を見てくる。

やめろ！そんな目で俺を見るな！！

「あ、いや……」

俺は思わず目をそらしてしまう。

落ちつけ俺！相手はメリスだぞ！？

いや、メリスはかわいいけど……ってそうじゃない！！

赤くなるな俺の顔！早くなるな俺の心臓！！

そして俺に銃を向けるなグリーー！！

「ハデイくん……………？
何をメリス相手に赤くなってるのカナー……………？」

怖い怖い怖い！！！！
何かグリーーの周りに悪魔が見える！？

「いや！過ぎたことを気にしてもしようがないよな！..」

とりあえずこの話はもう終わりにしよう！..
俺の命に関わる！..

「ふう.....、何とか終わったな.....」

午後六時、『子守り』という依頼を無事終えた俺達は、
宿屋に向かっていた。

……無事、かどつかは微妙だが、
おむつを変えるのに手間取ってたら、しっこをかけられたり。
メリスがミルクを温めたら、人肌の温度だって言ったのに、
80 にしたり。(後でグリーが冷まして温度を調整した)
セールスマンに俺とメリスが夫婦だと間違えられたり。
……殺されるところだった。グリーに。

……最後のは赤ん坊関係ないけど……。

赤ん坊の世話って大変だな。世の中のお母様方は偉大だ……。

「でも、いい経験になったよ。私もいつか母親になりたいし！」

メリス、ごく自然に爆弾発言するな！！

待てグリー！何故俺を見て殺気立つ！？

「そういえば、明日にはこの町を発つんだよね？」
「うん、そうだよ」(何事もなかったかのような笑顔で)

ナイスメリス！よくこの空気を変えてくれた！

宿屋に到着した俺達。

とりあえず部屋頼んで、少し休むか……。

「二人部屋一つと一人部屋一つお願いします」

「はい、では5800Gユルドルになります……」

「あ、いえ」

女将の言葉をさえぎり、左腕につけた鉄製の腕輪を見せる。

女将が一瞬、驚きの表情を浮かべる。

これは『冒険者の腕輪』、これを見せることで冒険者であることを証明できる。

ちなみに級クラスによって腕輪ウラが異なり、Aは金、Bは銀、Cは銅、Dは鉄、Eはアルミで作られている。

俺はD級クラスだから鉄製で、Dという文字が刻まれている。

「失礼しました。冒険者の方でしたか。」

では、確認させていただきます」

「あ、はい、お願いします」

女将は何事もなかったかのように平然と振る舞っている。さすが、プロだな。

腕輪を外して、女将が取り出した、幾何学模様が描かれた白い箱の中に入れる。

ふたをして数秒後、箱が青く光った。

「はい、確認できました。お返しします」

「はい」

返してもらった腕輪を左腕につける。

冒険者の腕輪には、特殊な魔力が込められているらしい。それを調べることで、その腕輪が本物かどうかを確認することができる。

今の箱はその魔力を調べ、本物だと確認できれば青く、できなければ赤く光って教えてくれる魔導具だ。

「では、2900Gゴールドになります」

お金を渡し、帳簿に名前を書き込んで、鍵をもらう。

「夕食は食堂でご用意いたします。」

時間は七時から九時までとなっておりますので、その間にお越しください」

「はい、分かりました」

後40分か。

……そう思いながら歩いていると、ひそひそと話す声が聞こえた。

「……おい、今の奴冒険者だつてよ……」
「しかも、鉄製の腕輪つてことはD級……、
マジかよ、あの若さで……!?!?」

「ねえねえ、今何か話されてたね!」
「……ま、冒険者は『国家資格』だからな。
こんな小さい町では珍しいんだろ」

部屋に向かう途中、メリスと話す。
でも、一応ここ町だろ?そんなに珍しいか?

「それより、ハディくんの年でD級クラス、
つてことに驚いてたんじゃな

「いか？」

「あゝ、なるほど」

確かに、普通俺ぐらいの年なら、

E級クラスか、

もしくは冒険者の資格をとれてもいないか、だ。

「つつてもよ、冒険者は完全実力主義だし、

俺より年下で俺より格上って奴もいるだろ？」

「それは世に言う『天才』とか、『化け物』ってやつだろうね」

だろうな。まあ、D級クラスぐらいじゃ天才なんて呼ばれないだろ。

俺ぐらいの年でC級クラスだったら、たぶん呼ばれるだろうけど……。

そんなことを話していると、部屋が見えてきた。

ま、今日は疲れたし、荷物の整理でもして、

夕食までゆつくりしてるか……。

第2話 金が全てではないけれど、やっぱりお金は大切だ（後書き）

冒険者の設定を出しました、が、そのせいで後半、ギャグがありませんね……。

次回からもこんな感じで、ギャグの中に、真面目な話が混ざってくると思います。つまらなかったら、適当に読み飛ばしてやって下さい。

……え？ギャグがつまらない？

………精進します。

では、これからも

『冒険者ライフ!』をよろしくお願いします!!

第3話 後先考えずに行動すると、たいてい後悔する

「やっほー！」

「……子供か、お前は……」

部屋で荷物を整理していると、メリスが遊びに来た。さっき別れてから、五分ぐらいしか経ってねえんだが……。

「お前、荷物整理終わったのかよ？」

「うん、大丈夫！」

「そうなのか？ずいぶんと早……」

「後でやれば大丈夫……」

「大丈夫じゃねえ……」

何怠けてんだこいつ!?

普通女の方が荷物の整理って大変なんじゃねえの!?

「え〜？だって一人でいるとつまんないよ……、

そっだ！ハデイ手伝って？」

「あ〜？……まあ、俺の方はもうすぐ終わるし、別に良いけ……」

「服とか下着とかの整理！」

「却下……」

何でこいつはちよくちよく爆弾発言するんだよ!?

ほら!俺の後ろで恐いお兄さんが俺を凝視してるんだけど!?

振り向くな俺!振り向いたら死ぬ!!

「冗談だって、じゃ、行つてきまーす!」

「……冗談もほどほどにしてくれ……」

笑顔で去って行ったメリスに対し、俺は心身共に疲れていた。

……飯食ったら即、寝ようかな……。

半分真剣にそう考えていると、背後から声が聞こえた。

「……メリスも、もう大人になったってことか……」

そう呟く声は、少しさびしそうに聞こえた気がした……。

……何なんだ?

「ごちそう様ー!!」
「……………」

夕食後、…………いや、正確にはまだ食べ始めて30分しか経ってないんだが…………。

「…………お前さあ、ご飯何杯食った？」

「え？二、三杯かな？」

「嘘つけ!!絶対八杯以上食ってただろ!!」

その細身の体のどこに入ったんだ一体!?
従業員の人も唾然としてたぞ!!

「えー?だって、今日お昼が少なかったし…………」
「それでも食いすぎだ!!」

俺も食う方だけど、それでも三杯だぞ!?

「でもメリス、ハデイくんの言うことも、もっともだよ?」

おお、グリー!兄として妹に一言、言っつけてやってくれ!

「お米ばかりじゃ栄養偏っちゃうからね、肉や野菜もちゃんといっぱい食べなきゃ」

「いや！俺が言いたかったのはそういうことじゃなく！！！」

「そっか！すいませーん！おかずのおかわりくださーい！！！」

「お前まだ食えんの！？」

こいつが大食いなのは知ってたけど、ここまでかよ！？

「大盛でお願いします！！！」

「お前それでも女か！？むしろ人間か！？」

どんだけでかいんだよお前の胃袋は！？

「ハデイくん、女の子にそんなこと言っちゃだめじゃないか」

「ハデイひつどーい！！！」

「普通の奴はそう言っつーの！！！」

こいつらには常識が全然通用しねえ……………！！

「うお！？そんなことを考えているうちに、
従業員が持ってきたメシがどんどん減っていく！！」

「ふう、久しぶりにお腹いっぱい！」

「……この宿の夕食が食べ放題だったことに、心から感謝したい」
「あはは、大げさだよハデイ！」

大げさじゃねえよ！

お前たぶん、今の全財産で買える以上の食料食べたからな！？

「これで二、三日食べなくても大丈夫だよ！」

「ラクダかお前は……」

「ラクダ？」

「ラクダは一度に80L^{リットル}以上の水を飲んで、
一週間から10日くらい水なしで生きていけるらしいよ」

疑問符を浮かべるメリスに、グリーが補足する。
俺もそんな詳しいことは知らなかったな。
さすがグリー、いつも本を読んだけのことはある。

「あう、負けた」
「いや、ラクダと張り合うなよ!？」

体の構造上、勝つのは不可能だからな!？
……っつーか、勝つてどうする!？

「それじゃ、お風呂に入った後、僕達の部屋で今後の話をしようか」
「はい!」
「元気だな、お前……」

普通、あの量食べたなら腹が痛くなるぞ……。
つて、普通はまず食えないけど。

「ん、まあこんなに食べたのは久しぶりだけど、食べようと思えばまだいけるよ?」

「………そうか。」

お前人間じゃなかったんだな」

「何でそうなるの!？あれ、ハディどうしてそんな宇宙人を見るよ
うな目で私を見るの!？」

「大丈夫だよメリス！たとえ君が宇宙人でも、君は僕の妹だ！！」

「私宇宙人じゃないよ！？人間だよ！？」

「メリス、宇宙人も人間だぞ？人ってついてるだろ」

俺がからかい半分でそう言うとは……。

「あ、そっか。じゃあ、いつか！」

「自分で言っというてなんだけど、いいのか！？」

ダメだ！俺がボケに回ると、ツッコミがいなくなる！！

「お邪魔ー……………」

「お邪魔します、な。別に言わなくてもいいけど」

一時間半後、風呂を終えたメリスが部屋に来た。

え？俺ら？男の風呂なんてそんなにかからねえよ、俺は10分（シャワーだけ）、グリーは一時間（湯を張る時間込み）で終わったぞ。

「……………」

「ん？どうしたメリス？」

何か元気がねえ…………、
つか、顔色が悪い…………？

俺は一応心配した、程度だったが、次にメリスが言った言葉に、驚きを隠せなかった

「…………お腹痛い……………」

「薄々分かってたけど、バカだろお前……………」

うん、ビビった、マジで。

人が食える限界以上の量を勝手に食って、
まだ食えるとか言つといて、結果腹痛つて……………。

「だ、大丈夫かいメリス！？ハデイくん医者を！！早く医者を！！
メリスが死んでしまう！！」

「落ち着け！！医者呼ぶ程のもんでもないだろ！？」

ただの食いすぎだろうが！

「に、兄さん…………私…………死んじゃうの…………？」
「メリスー！！」

崩れ落ちるメリスを、グリーが抱きとめる……………。

俺は握った拳にハーツと息を吹きかけながら、
バカ二人にそう聞いてやった。

『すみませんでした!!反省してます!!』
「分かればいい」

仲良く頭に一つずつタンコブをつけたバカ兄妹が、
直角に腰を曲げてきた。

え?どつちから殴ったかって?
二人同時だ。右手と左手で。

「だってメリスが腹痛だよ！？心配するに決まってるじゃないか！
！」
「し過ぎだお前は！！！」

しかも、後半は絶対ふざけてたたる！！

「腹痛ぐらい、ほっときゃ治るだろ！？」

「苦しんでる妹を、放っておけるわけないじゃないか！！」

「それはそうだろうけどよ……お前、メリスが風邪ひいたりしたら
どうなるんだよ……」

「世界中を駆け回って、

世界一の医者連れてくるに決まってるだろう！！」

「……連れてきたころには、もう治ってるだろうな」

こいつのシスコ　妹好きも、重症だな……。

「メリス！てめえも悪ふざけしすぎだ！」

「だって、本当にお腹痛いし……」

見ると、メリスは腹をさすっていた。

……まあ、腹が痛いのは理解できるけどよ……。

「んじゃ、その辺座って休んでろよ。」

「あ、うん……」

メリスは傾いて、ベッドの上に寝っ転がる。

……そこ、俺のベッドなんだけど……。

「さて、それじゃあ今後のことを話そうか」

あ、よかった。グリー気付いてない。

「とりあえず、明日にはもうこの町を発つぞ」
「え？今日の朝着いたばかりなのに？」

寝っ転がってたメリスが、驚いて起き上がる。

……お前、そんな動いてて、大丈夫かよ？

「しょうがないよメリス、依頼がないし、お金ももうないしね」
「そっかあ……」

残念そうにするメリス、
店とか見たかったのかもな。

「一応明日の朝もう一度酒場に行ってみるけどな。

まあ、期待はできないだろ」

「ん〜、じゃあ次はどこに行くの？」

「ここから一番近い町は、チョコレート町かな。

かなり大きな町だから、依頼も期待できると思うよ。」

「チョコレート町!？」

うお、どうしたメリス？

「チョコレート町ってスイーツ王国の中でもお菓子、特にチョコレ
ートが有名なんだよ！」

一回食べてみたかったんだー!!」

……お前、今さっきまで腹痛で苦しんでたよな？

まあいいけど……そういや、

この国ってお菓子が有名なんだっけ？

「ただ、たぶん向こうに着くのは夕方頃になっちゃうんだ」

グリーが困ったような顔で言う。

夕方から依頼を始めるってのはな……。

「……じゃあ、向こうで依頼を探すのは難しいな……」

「え？別に明日探せば……」

「メリス、向こうで一泊する金があると思っか？」

大きい町だし、たぶん、宿代もここより高いぞ？

「……そっか。道中の食費だけで精一杯だっけ……」

ちなみに一番食費使ってるのはお前だからな？

「となると、道は一つ、だね」

グリーが苦笑いを浮かべながら言う。

……アレか。

「ま、しょうがねえな。」

……『魔物狩り』、やるぞ」
「ええ！？や、やるの！？」

メリスが嫌そうに声を上げる。いや、気持ちは分かるけど。

「しょうがねえだろ？それ以外に金を稼ぐ手段がないんだ」
「安心してメリス、『処理』は僕達がやるからさ」
「うう……、わ、分かった……」

しぶしぶながら、メリスも了承。
んじゃ、これで決まったな。

「まとめると、まず明日の朝、酒場に行つて依頼を探す。
目ぼしいものがあればそれをやる、なければこの町を発つ。
向かうのはチヨコレート町、向こうで最低一泊できるだけの金を
稼ぐために、道中『魔物狩り』をする。

これでいいな？」
「うん」

「チヨ、チヨコレート町に行くためだもんね！がんばる！！」

いや、まだ明日行くとは決まっていけないけどな……。
とりあえず、今日は早く寝て、明日に備えよう。

「……ないな。依頼」
「……うん」

翌日、目ぼしいものどころか、依頼は一つもなかった。

「んじゃ、決定だな」
「……うん」

メリスはまだ少し乗り気じゃないようだが……。

「……って、いつまでも嫌がっててもしょうがないよね！
うん！チョコレート町に行くためだもん！」

「どンドン魔物狩って行こう！」

「いや、一泊分の金稼げりやいいんだけど……。
まあでも、稼いでおくに越したことはないか」

いきなり元気になったなメリス、

まあ、落ち込んでるよりはいいけどな。

「それじゃ行くぞ！目指すはチョコレート町だ！」

「うん！」

「そうだね、行こうか！」

こうして俺達は、ビスケット町を発ち、
チョコレート町へ向かった……。

第3話 後先考えずに行動すると、たいてい後悔する(後書き)

次回、ようやく魔法が出てきます。

キーワードに魔法つてあるのに、
今まで出てきませんでしたからね……。
やっと思ける……！

ただ、魔物を狩るので、
少し残酷な描写があるかもしれません。
特に動物好きの方はご注意ください……。

第4話 魔物と書いて、獲物、もしくはお金と読む(前書き)

やっと戦闘や魔法が出てきます。

ただ、魔物を『狩る』ので、

特に動物好きの方はお気を付け下さい……。

第4話 魔物と書いて、獲物、もしくはお金と読む

「さてと、ここからだな……」

ビスケット町を後にしてから二時間程歩き、
見えてきたのは、小さな森。

「『小人の遊び場』だっけ？この森の名前……」

「うん、この森を抜けて、三時間ぐらい歩けば、チョコレート町に着くよ」

グリーが地図を見ながら言う。

この森抜けてからも、結構かかるんだな……。

「この森を抜けるのに、どれぐらいかかるの？」

「普通に歩いて、三時間弱って所かな？」

「森三時間、道三時間、か。」

今10時ちよい過ぎ、普通に歩いたら向こうに着くのは、休憩入れて五時頃ってところか」

「普通に歩いたら、ね」

クスツと笑って、グリーが言う。

「『魔物狩り』に、どれくらい時間をかけるかが問題だね」

「そうだな……。暗くなると森は危ないし、日が沈む前に森を出た方がいいな」

一般的に暗くなると凶暴な魔物が増えるし、
周りが見えにくいから、奇襲とかされたら危険だ。

「じゃあ、五時ぐらいまで魔物狩りってこと？」

「体力が持てば、な。」

限界までやるなよ？森抜けた後、三時間歩かなきゃいけないんだからな」

久しぶりに魔法が使えてうれしいのか、やる気満々のメリスに、一応忠告しておく。

……あれ？こいつ魔物狩り嫌がってなかったか？

「『処理』が嫌なの！！『戦闘』はどっちかというところ好きだよ？」

「それはそれで物騒だな、おい。」

……っつーか、ごく自然に人の心を読むな！！」

「ハデイは顔に書いてあるんだよ！」

何い！？くっ、成程そういうことか！

これからは気をつけないと……。

「気をつけても無駄だと思っつよ？」

「うわ、また読まれた！！」

メリスにまた指摘される。

俺そんなに分かりやすいか！？

「……………ほら、二人とも、

「じゃれてないで早く行こう……？」

後ろにいたグリーに言われて、
止めていた足を動かす。

……何かグリー、殺気立ってないか？

十数分後、俺達は、森の入口に着いた。

「グリー、この森にはどんな魔物がいるんだ？」

歩きながら、後ろにいるグリーに話しかける。

一応知っておいた方がいいからな。

「森だからね。いるのはやっぱり、魔獣や魔草だよ。

この森にいるのは、低位の奴ばかりみたいだから、そんなに警戒する必要はないと思うよ」

魔物には大きく分けて、

魔草・魔魚・魔獣・魔族・竜の五種類がいる。

この分け方で、魔草や魔獣は弱い部類だ。しかも低位。

それなら大して危険じゃねえけど……。

「……でも、それじゃ稼ぎも少ないんじゃない？」

メリスの言うとおりだ、

低位の魔獣や魔草なら、

それこそ一般人でも狩れるからな。

危険度が低く、誰でも狩れるから稼ぎも少なくなる。

「そうだね、だから多く狩る必要があるよ」

……やっぱりそうなるか。

荷物と臭いが大変になりそうだ……。

「あ、でも」

グリーが思い出したように付け加える。

「この森の『王者』が、バトルプラントっていう中位魔草なんだ。危険度はD、そいつには気をつけた方がいいね」

「危険度Dかよ……」

危険度つてのは、その魔物の危険性と戦闘力を表すものだ。危険度Dだと、D級クラス冒険者が三、四人で戦って、ギリギリ倒せるぐらいの強さってことになる。

「ま、ギリギリなんかなるかもしれないけど、できるだけ危険は冒したくないしね」

同感だな。

……そう思っていると、近くの草むらから、俺に向かって何かが飛び出してきた。

「グオオオオオオオオ!!」

「おっと!!」

とっさにかわし、腰に差した剣を引き抜いて、襲いかかってきた魔物と対峙する。

「狼……『ワイルドウルフ』か!」

ワイルドウルフ、低位魔獣の代表的な奴だ、茶色い毛並みを持つ、名前の通り狼の姿をした魔物。

大きさは体長1m、高さ50cm程。

危険度はE以下、E級クラス冒険者は、最低でもこいつを一人で倒せなきゃいけないっていわれてる。

一匹では大したことないが、10〜20匹ほどの群れを作り、旅の商人や冒険者を襲う魔物だ。

………ってことは………。

次の瞬間、草むらから次々とワイルドウルフが現れ、俺達を取り囲んでいく。

15匹つてどこか………。

「ちっ、いきなりワイルドウルフの群れかよ……」

「肩慣らしに丁度いいんじゃないか？」

「まあ、油断大敵だけどね」

グリーが、銃に弾を込めながら言う。

そう言う割には余裕だな。

「あんまり撃つなよ、弾高いんだから。」

「それより指示を頼む！」

「はいはい……」

グリーは少しつまらなさそうにそう言い、周りを見始めた。

「やつちやっついていいんだよね？」

「……森燃やすなよ？」

やる気満々のメリスに、もう一度忠告する。

「分かってるって！」

メリスはそう言うと、目の前のワイルドウルフを見て、『準備』を始める。

まず、メリスの周りが赤く光り始めた……。

魔法の手順、その第一段階、『集中』だ。

それを見て、一匹のワイルドウルフが、メリスに襲いかかってきた。

「遅えよ……！」

俺は横から、剣でワイルドウルフの横腹を切りつけた。
ワイルドウルフは崩れ落ち、そのまま動かなくなる。

「……火よ、集え……」

そうこうしている内に、メリスが『集中』を終えたようだ。

第二段階の『詠唱』を始める、と同時に、メリスの手のひらに、直径20cm程の火の弾が現れる。

「フレイ！」

第三段階、『呪文』をメリスが紡ぐと、火の弾は目の前のワイルドウルフに向かって飛んでいく。

ゴオオオッ！！

「グオオオ！！」

避け切れなかったワイルドウルフが、
炎に包まれ、叫び声を上げる。

今のは、炎属性の基礎魔法レベル1、『フレイ』だ。
レベル1でこれだもん……。魔法ってすげえ。

他のワイルドウルフがそれに怯んでいる隙に、俺は突進し、三匹を
先程と同じように切り倒した。

「キャン、キャン！」

生き残ったワイルドウルフ達も、さすがに不利だと感じたのか、悲鳴（？）を上げながら逃げていく。

「ふう、まつ、余裕だな」

俺は剣についた黒い血を払い、切れ味が落ちないよう、最低限の手入れをしながら言う。

「出だしはまずまず、だね」

グリーが、ワイルドウルフの死体を運んでくる。

「つーか、その焼いた奴はどうすんだ？」

「うーん……、ちよつと無理かな……」

「あゝ、水魔法の方が良かったかな？」

黒焦げになったワイルドウルフを見て言う。
ワイルドウルフって肉食えないんだよな……。

「それじゃ、小川でも探そうか。」

「……ここでやるのはちよつと……ね。」

グリーはメリスを見て、少し気まずそうに言う。

メリスは嫌そうな顔で、ワイルドウルフの死体を見ていた……。

10分後、小川を見つけた俺達は、そこでワイルドウルフの『毛皮』をナイフではぎ取り始めた。もちろん、はぎ取った毛皮についた血は、水で洗い流す。

「今さらだけど、死体そのまま持つてくのはダメなのか……?」

「別にダメじゃないけど、かさばるし、臭いがひどいし、『処理』を向こうに任せるから、売値も安くなっちゃうよ?」

デメリットばっかだな。

30分後、四匹全ての『処理』を終えた俺達は、毛皮を専用の袋の中に入れた。

この袋は特殊な加工がしてあって、よっぽどひどい臭いじゃない限

り、外にもれなくなっている。
しかも、中がいくつかに分かれていて、魔物の種類ごとに分けることもできる。

魔物狩りの必需品だ。

「おいメリス、終わったぞー！」

俺は草むらに隠れているメリスを呼ぶ。

「……………あれ、ワイルドウルフの死体は？」

「あゝ、一応埋葬しといた」

殺しといて埋葬するのも変な話だが…………。

「グリー、これどれぐらいの値で売れるんだ？」

「全部で1000Gゴールドつて所かな」

1000Gゴールドか…………。

まだ宿代には、足りないだろうな。

「うん、じゃあ次…………あれ？あれ何？」

メリスが、小川の方を見て言う。

見てみると、小川の中から緑色のつるのような物が五本、うねうねと動きながら伸びていた。

「…………『水のカズラ』だね。低位魔草だよ」

低位魔草か、んじゃ、楽勝だな。

一般的に低位魔獣より、低位魔草の方が弱いつて言われてるしな。

「ただし、戦闘力はワイルドウルフより上らしいから、さっきも言ったけど、油断大敵だよ？ハディくん」

う……また顔に出てたのか？

「メリス、魔法の準備を、植物だから炎に弱いはずだ、一気に灰にしちゃっていいよ。」

ハディくんは正面から相手をして、時間を稼いで。

川の中に引きずり込まれないようにね？」

「了解ー！」

「任せときな！」

グリーの指示通り、メリスは魔法の準備を、俺はメリスと水のカズラの間立ち、剣を構える。

グリーもメリスの近くで、装填の済んだ銃を握り締めている、いざという時すぐ援護できるように、だろう。

メリスが『集中』を始めると、それを察知したのか、水のカズラがメリスに向かって伸びてくる。

……川に引きずり込む気か？

「遅いつての……！」

その間にいた俺が、五本全てを切り裂く。

切り裂いたつるの先端はぼとぼと落ちていくが、川の中にある本体はまだ生きているらしい。

五本のつるは、俺から一定の間合いを取り、うねうねと動いている。

「…… 大気より火の集いを呼ぶ……」

と、後ろからメリスの『詠唱』が聞こえてきた。

「ハデイくん！下がって！」

グリーの指示が飛ぶ。

それを聞き、急いでメリス達の所まで下がる……。

すると、水のカズラ達も追いかけてきた。

……こういうのを、『飛んで火に入る夏の虫』って言うんだよな。

……虫じゃないけど。

すでにメリスの両手の間に、大きな炎がゆらゆらと揺れていた。

「燃える フレイア！！」

『呪文』と同時に、その炎が水のカズラに向かって放たれ、瞬く間に五本のつるを飲み込んだ。

炎属性の基礎魔法レベル2、『フレイア』……。

……まるで火炎放射機だな……。
いや、機械じゃないけど。

「楽勝、楽勝！」

「つて、ちよつと待てー!!」

「え？」

勝ち誇るメリス、いや、それはいいけど……。

「魔物全部灰にしてどうすんだよ!？」

水のカズラはフレイアによって、燃やされ、灰と化していた。

俺達の目的は、魔物を狩って金を得ることだぞ!？

ただ魔物倒しても、意味ねえだろ!!

「それなら大丈夫だよ」

グリーの方を見ると、さっきまで水のカズラがいた所に座り込んでいた。

……何だ？

「ほら、これ」

戻ってきたグリーが、手の平を見せてくる。

灰？

「魔草の灰は、良質な肥料の材料になるんだよ」

グリーは灰を袋に入れながら言う。

成程、だからさっき、一気に灰にしていって言ったのか……。

「それと、さっきハディくんが切り落としたつるの先端部分、これは傷薬の材料になるんだ」

グリーが切り落とされたつるを拾い集めながら言う。

「ん〜でも、灰にした方が持ち運びやすいんじゃないの？」

「傷薬の材料として売った方が、少しだけだけ高いんだよ」

高く売れるなら、少しでも高く売ろうってことか。

その上で灰にしていって言ったのは、戦闘を楽しむためだろうか。

つるの先端部分を、灰とは違う場所に入れる。

同じ魔物でも、違う物だからな。

「これでどれくらいだ？」

「さっきのと合わせて1800Gゴールドってところかな。

水のカズラは、川の中にいた本体を逃がしちゃったし」

いや、それ狩るの無理だろ……。

「最低でも、5000Gは欲しいな……」

「だね、それじゃあ魔物狩りを続けようか」

「ねえハデイ、もしお金が余ったら、高級チョコレートとか買いたい……」

「却下」

無駄づかいすんなっつーの。

……何かメリスがふくれてるけど、とりあえず無視だ。

魔物狩りを続けよう、五時までに十分狩つとかなないと、下手すりゃ今日はチョコレート町の公園で寝ることになるぞ……。

それから、俺達は魔物狩りを続けた……。

ワイルドウルフを狩ったり、ハチトリソウを狩ったり、ワイルドウルフを狩ったり、ビッグマウスを狩ったり、ワイルドウルフを狩ったり……、

この森、ワイルドウルフ多くね？

「……なあ、グリー、ワイルドウルフ何匹狩ったっけ？」
「これで14匹目だよ」

ワイルドウルフの『処理』をしながら話す。

「一匹分の毛皮で250Gゴルトが相場だからね。
普通に考えれば3500Gゴルトで売れるんだけど……」

……普通に考えればそうだけだよ……。

「同じ物を大量に売ると、安く買い叩かれるんだよね……」
「そうなんだよね……」。
だから、せいぜい3200Gゴルトくらいだと思っよ」

300G程度……って思つかもしれないが、
俺達にとってこの差はでかい。

「って言っても、僕達は冒険者だから、まだマシなんだけどね」
「ああ……」

これも冒険者の特権なんだが、冒険者が狩った魔物は、『冒険者ギルド』が買い取ってくれるんだ。

絶対とは言わないが、基本的に業者よりも高く買い取ってくれる。

ただ、『酒場』と違って『冒険者ギルド』は大きい町にしかないんだよな……。

「チヨコレート町にはあるのか？」

「うん、ただ、依頼は扱ってないみたいだけどね」

冒険者ギルドには、依頼を扱っている所と、いない所がある。

チヨコレート町にあるのは後者みただから、依頼は酒場で探すしかないな……。

「つと、そろそろ一時だな。昼飯にするか」

「お昼ご飯！？ やったー！！」

草むらに隠れてたメリスが出てきた。

「おいメリス、まだワイルドウルフの死体、埋葬してないぞ？」

「……！！」

毛皮をはがれたワイルドウルフの死体を見てしまい、慌ててメリスは草むらに身を隠す。

……まあ、普通は見たくないよな。

「それじゃ、埋葬が済んだら、少し離れた小川沿いでお昼ご飯にしようか」

「……だな。さすがにここじゃ食う気になれない……」

地面に血が付いてるし、臭いもけっこうひどいし。

とりあえず、

この死体の埋葬が済んでから移動するか……。

第4話 魔物と書いて、獲物、もしくはお金と読む（後書き）

すみません、一週間空きました！

現実の方がちょっと忙しくて……すみません、言い訳ですね……。

本編ですが、なんかまたギャグが少ないような……。

どうでもいいですが、どんどん一話の文字数が増えてますね……。

一応、一話4000〜6000字ぐらいを目指してますが、

……これって少ないのでしょうか……それとも多い？

第5話 虎穴に入らずんば虎児を得ず、間違って入っちゃったこともあるだろうっは

ワイルドウルフの埋葬が終わった後、俺達は川を少し上った所で、昼食の準備に取り掛かる。

……ちなみに、料理はグリーとメリスが作る。

俺も作れないことないけど、この二人の方が上手いからな。

「今日のお昼ご飯は野菜と魔物の肉のスープだよー！」

「……たまに思っただけど、

『魔物の肉』って何の肉なんだろうっな？」

俺はメリスが煮込んでいるスープを見ながら言う。

もちろん狩った魔物の肉ではない、野菜も肉も、今日の朝ビスケット町を出る前に買った物だ。

「え？『魔物』の肉でしょ？」

「いや、それは知ってるって。」

『何の魔物』の肉なのかって言ってんだよ」

普通、店とかに売ってる肉には、『魔物の肉』としか書いてないことが多いんだよな……。

「一般的に詳しく書いてない場合は、ピンクピッグとかマイルドカウ、あとはチキチキンの肉が多いみたいだよ？」

近くの石に腰を下ろしているグリーが言う。

ちなみにピンクピッグは豚、

マイルドカウは牛、チキチキンは鶏の姿をした魔物だ。
温厚で、よつぽど怒らせない限り人を襲うことはないため、
牧場で飼われてることが多い。

「おいしい魔物だったら、隠さずに書いておくだろうしね、宣伝の
ために」

「……そういや、ツノセンボンの肉はでっかく名前が書いてあった
な」

ツノセンボン。

無数に分かれた二本の角が特徴の、牛の魔物だ。
上位魔獣で、危険度はB。

しかし、体長5m、高さ3mを超えることもある大型の魔物だから、
一匹で肉が大量に手に入る上にめちゃうくちゃうまい。

ビスケット町で売ってたのは、
肉一切れ800Gゴールドだったな。

……ちなみに今煮込んでる肉は、
一切れ150Gゴールドだ……。

「まあ、牛の肉に比べたら安いんだけどね」
「いや、比べる対象がおかしいだろ……」

牛の肉なんて、一切れ2000Gゴールド近くするぞ……。
それ以前に魔物の肉と動物の肉を比べることがおかしいって。

……でも、ツノセンボンも肉一切れ800Gゴールドだもんな……。

「……………ツノセンボン一匹狩ったら、どれぐらい金が入るんだろうな……………」

「うん、処理を冒険者ギルドに任せても、相場で二万Gだよ、確か」

「二万!？」

魔物一匹で!？

「……………俺達の今のところの稼ぎって……………」

「合計4600〜4800G^{ギルド}って所かな……………」

……………俺達が狩った魔物、合計20匹超えてるんだけど……………。

なんか悲しくなってきた……………。

「ほら!しょんぼりしてないで!スープできたよ!！」

「あ、おう」

メリスが出来たてのスープを皿に盛ってくれる。

いただきます、と手を合わせて言い、一口……………。

「ん〜、うまい!！」

「ね?別に高級なお肉じゃなくてもおいしいでしょ?」

「いや、別にメシに文句言ってた訳じゃないんだが……………」

でも、うまいメシを食つてると気分が明るくなるよな。

「いや、本当にメリスは料理が上手いね！

これなら、いつでもお嫁に出せるよ！」

「え、本当？兄さ……」

「嘘！！嘘だよ！！お前は嫁になんて出さない！！！」

……やっぱりアホだなこいつ……。

俺はメリスにすがりつくグリーを見ながらそう思った……。

「「ごちそう様ー！！」

「「……ごちそう様」

笑顔でそう言うメリスと、それを呆れた目で見る俺。

「ん？どうかしたのかい？ハディくん」

「……いや、どうかしたのかじゃなくて……」

俺は空っぽになった鍋を見る。

この鍋一杯に作ったスープの内、実に三分の二がメリスの腹の中におさまったのだ。

「……あの体のどこに入るんだろうな……」

「な！？ハディくん！！メリスをいやらしい目で見て……」

「見てねえ！！銃を出そうとするな！！」

なんでとっさに銃に手が行くんだよこいつは！？

「それじゃ二人とも、魔物狩りの続き！」

鍋や皿の片づけを終えたメリスがこっちに来る。

「そうだな、まだ二時だし、もう少し稼いどくか！」

「無理はしないようにね？」

「分かってるって」

グリーにそう返し、森に向かおうとした。
そのとき、

「つつ!!!?」

森の中から、太いつるが襲いかかってきた。
間一髪右へ跳んでかわし、体勢を整える。

「なんだ!?!」

警戒する俺達。

と、森の中から出てきたのは……。

「……………ウツボ?」

出てきたのは、高さ3mはある、巨大なウツボカズラだった。
赤い円筒形の袋のような体、上にある口の周りには、八枚の黄色い
花びらがついていて、体の下からは十数本の、緑色の太いつるが出
てきている。

「なんだこいつ……………」

「バ、バトルプラント!?!」

向こうから、グリーの驚いた声が聞こえる。

ちょっと待て！バトルプラントって……！！

「森に入る時言ってた、危険度Dの奴かよ!？」

「ええ!？」

戸惑う俺達に、バトルプラントのつるが襲いかかってくる。

「ちっ!!！」

剣を引き抜き、その勢いで向かってきたつるを切り裂く。

グリーとメリスは……。

ドンッ！ドンッ！

銃声が出た、と思ったら、メリス達の方へ向かって行ったつるが吹き飛んだ。

「ハディくん！時間を稼いで！援護するから!!！」

見ると、銃を構えたグリーの後ろで、メリスが『集中』をしていた。

「おうー!!」

返事をしながら、バトルプラントに向かって走り、一閃！

「ギシャアアアアアア!!」

切りつけられたバトルプラントが悲鳴を上げる。

……こいつ、声とか出せるんだな……。

当然、バトルプラントが反撃してくる。

振り回されるつるをギリギリかわし、間合いをとる。

「うおおおおお!!」

向かってくるつるを切り裂いていく……が、くそ、数が多い!!

ドオンッ!!

俺がさばき切れなかったつるが、吹き飛ばす。

「援護するって言ったでしょ?」

バトルプラントの向こうにいるグリーが、銃に弾を装填しながら、
そう言った。

……相変わらず良い腕だな……。

「あんまり撃つなよ？弾高いんだからな！」

「最低限度しか撃たないからご心配なく！」

なおも向かってくるつるを、俺が剣で切り裂き、グリーが銃で吹き
飛ばす。

……よし！これでもう、つるはねえ！！

「危険度Dって言っても、大したことな……」

俺がそう言いかけた時、バトルプラントの体が曲がり、上にあった
口が俺の方を向いた。

……何だ？俺を飲み込む気か？

いつでも動けるよう、気を引き締める……。

「シャアアアアアアア！」

ビュビュビュビュッ……

「いつ!?!」

バトルプラントの口から、無数の白い弾が俺に向かって放たれる。

俺は慌ててその場から逃げ出した。

トトトトオオオン!!

凄まじい音と共に、俺がさっきまでいた場所が、吹き飛んでいるのが見えた。

なんだよあれ!?! エネルギー弾!?!

「そんなのありかよ!?!」

逃げる俺に、続けてエネルギー弾が降り注ぐ。

……いや、竜とかは炎吐くらしいし、ありかなしか、って言ったらありなんだろうけど……!!

俺はそんな文句を心の中で言いながら、必死にエネルギー弾をよけ

続けた……。

（グリーンサイド）

「……まずいね……」

エネルギー弾をかわし続けるハデイくんを見て、眩く。

バトルプラントがこんな攻撃法を持ってたなんて……。

まあ、つるだけなんて、危険度Dにしちゃ弱いと思ってたけど……。

いくらハデイくんでも、ずっとかわし続けることなんてできない。

そのうち体力が尽きてしまうだろう。

銃で相殺することも考えたけど、向こうの弾が多すぎる……。

後ろで魔法の準備をしているメリスを見る。

「……まだ、『集中』か……」

さすがに今回の魔法は時間がかかるな……。

そう思っていると……。

「…… 大気より、炎の集いを呼ぶ……」

「!?!」

メリスがそう紡ぐと、両手の間に、大きな炎が現れる。

『詠唱』が始まった!

ハデイくんもそれに気付いたらしく、バトルプラントから少し離れたつ、交戦を続ける。

「…… 我は炎を束ねる者なり……」

メリスが手を頭の上まで上げ、さらに『詠唱』を続ける。

手の、いや、両手の間にある炎の周りに四つの炎が現れ、旋回しながらメリスの手に集束する。

次の瞬間、それは1mを超えるほどの巨大な炎の塊と化した。

「ハデイくん! 離れて!」

交戦を続けていたハデイくんに、合図を送る。

「燃え盛れ ブレイアム!」

俺は崩れ落ちたバトルプラントを見て、そうつぶやいた。

さすが危険度D、今回はきつかったな……。

そう思っていると……。

「……………っ!？」

俺は目を疑った……。

なんと、灰の中にバトルプラントの黄色い花びらが残っていたのだ。

「ウソだろ!? ブレイアムが直撃したのに……………!!」

「いや、大丈夫だよ」

慌てて剣を構えようとしたとき、グリーの声が聞こえた。

「バトルプラントの花びらは熱や炎に強いんだ。

でも、本体は普通の魔草と同じく炎に弱いよ」

グリーが花びらを手に持って、言う。

なるほど、確かに花びら以外の部分は全部灰になってるな。その花びらも、なんとか燃え残ったって感じでボロボロだ。

「……しかし、まさかこんな奴に襲われるなんてな……」

全員大したケガはしてないけど、正直、疲れた……。

「あゝ……うん、ちょっと、疲れちゃった……」

見ると、メリスが少しフラフラしている。

ただでさえ、この森に入ってから魔法を使いまくってたんだ。しかも今回使ったのは、メリスの最強の魔法だからな……。

「魔法は魔力だけじゃなく、集中力も使うからね。」

メリス、少し座って休んでた方がいいよ」

グリーにそう言われ、メリスは木陰の岩に座り込む。

……そっぴや魔法って、多用しすぎると失神したり、最悪、寿命を削ることすらありえるんだっけ……？

あんまり無茶させないようにしないとな……。

「確かに、危なかったね……」。

……でも、これは嬉しい誤算だよ」

グリーが、灰を袋に入れながら言う。

「あ、それも肥料の材料になるのか？」

「うん、それも、水のカズラよりも良質な、ね」

それなら、高く買い取ってくれるかもな……。

「それに、この花びら」

グリーが、ボロボロの花びらを手に持つ。

「これはすり潰すと解熱剤の材料になるんだよ」

「……ボツロボロだけど、大丈夫なのか？」

「表面が焦げただけだからね、これぐらいなら大丈夫だよ。」

……まあ、やっぱり価値は下がっちゃうけど」

そりゃそうだろ、表面だけとはいえ、焦げてるものと焦げてないものなら、普通は焦げてない方が価値が高い。

「それでもバトルプラントだけで、4200……、いや4500Gゴールドはいくかな」

「マジで!？」

そんなに!?!さすが危険度D……!!

「これで合計9000ちょい、ってどこか……」

「だね。……ハデイくん」

グリーが少し真剣な顔になる。

「魔物狩りはこれぐらいにしない？
……そろそろ疲れが出てきてるし……」
「ん……」

岩に座っているメリスを見る。

……確かにな……。

「森を抜けても、まだ三時間歩かなきゃいけないんだ。
……それも考えると、ね……」
「………だな」

メリスはそんなに体力がある方ではない。
それに、俺達の戦い方は、メリスが要^{かなめ}だ。
メリスがダウンすると、かなりきつくなる。

「よし。おい、メリス！」
「ん……」

メリスを呼ぶ、………やっぱ、少し疲れてるな………。

「一応金はたまったし、魔物狩りはこれぐらいにするぞ」
「え、本当？」
「ああ、もう少し休んだら出発するぞ。
ここから森を抜けるのに二時間ぐらい、
遅くても八時までには着くだろ………」

時計で時間を確認して言う。

現在時刻、二時半だ。

少しゆっくりめに歩けば、それぐらいだろ……。

「大丈夫だよメリス、疲れたら僕がおんぶするから！」

「あ、うん！ありがとう兄さん！」

……子供か、お前は……。

思わずそう思う俺。

……あれ？こいつ確か来年成人だよな……？

「……んじゃ、行くか！」

「そうだね」

数分後、休憩を終了し、歩きだそうとする……。

「……」

「ん？どうかしたのかい？」

「いや、グリー、それ……」

俺はグリーの背中で、ぐっすり眠っているメリスを見て言う。

「む、代わらないからね!!」
「いや、んなこと言ってるないだろ……」

まあ、メリスは疲れてたし、グリーも別にいいみたいだし、
……いいか。

「疲れたら言えよ?」

「大丈夫!僕は背負うのがメリスなら、何十時間でも背負えるよ!
!」

……何だろう。

何故か冗談に聞こえない……。

「……分かった分かった」

「それじゃあゆっくり行こう。」

メリスが起きないように!」

……それは『起こさないように』気をつかっているのか、それとも『起きてほしくない』のか、
……どっちだ?

「……まあ、どっちでもいいか。」

そう思い直し、『小人の遊び場』の出口へと歩きだした……。

第5話 虎穴に入らずんば虎児を得ず、間違っ入っちゃうこともあるだろうは

やっぱりザコ戦よりボス戦の方が書いてて楽しいですね！

……ただ、なんだかグリーのシスコ……妹好きが、
想像よりひどくなってます……。

ネタがやりやすいので、つい……。

本編で出ましたが、

この世界の魔法は、強力な代わりにリスクが大きいです。

詳しくはその内、

魔法や冒険者についてまとめたものを書こうと思ってます。

まあ、この章が終わってからですが……。

第6話 人を判断する上で、一番間違っではいけないもの

午後八時……。

俺達がチヨコレート町に着いた時には、当然ながら日は落ちていた……。

「……めっちゃくちゃ明るいな……」

しかし、チヨコレート町は明るい、っつーか眩しい！

「……繁華街って奴か？」

「わー！人がいっぱいいるよ！」

メリスは元気そうだ、

そりゃさつきまで寝てたからな……。

メリスが起きかける度に、グリーンが子守唄を歌って寝かしつけてたが、さすがにこの町に着くまではもたなかったみたいだ。

「……まず、冒険者ギルドに行くか……」

一方、俺とグリーンは疲れ果てていた……。

早い所、買い取ってもらわないとな……。

魔物狩りで重くなった袋を担いで、俺はそう思った……。

「9300G、^{「ギルド」}か……」

冒険者ギルドに着いた俺達は、早速今日狩った魔物を買って取った。

グリーがうまく交渉してくれたおかげで、おそらく、最高値と云っていいほど、高く買い取ってもらったことができた。

「これだけあれば、宿は大丈夫だね」

「うん！余った分でいろいろ買えるね！！」

二人もほっとしているが……。

「メリス、あんまり無駄遣いするなよ？」

「む、いいでしょ？私の取り分なんだから！」

俺達は、宿代や食事代など共通の出費と、万が一の時の貯蓄を除いた分のお金は、三人で分け合うことにしている。

……まあ、勝手に貯蓄から使う奴もいるが。

「……そういや、お前この前勝手にアクセサリー買ったよな。

……お前の取り分から引いてやるのか？」

「ごめんなさい！無駄遣いしないようにします……！」

速攻で頭を下げてきた。

……いや、そこまでしなくていいけど。

「くっ……、ごめんメリス。」

それだけは力になるわけには……!!」

グリーが、悔しそうな顔をしている。

少し意外だが、グリーはお金だけは、メリスを甘やかさないようにしている。

……まあ、金まで甘やかしたら、ロクな奴にならないしな。

「いいの、兄さん。……私が悪いんだから……」

おう、まさにその通りだ。

「くっ!!……メリス……!!」

必死に涙をこらえるグリー……、

……あれ、何か泣くような出来事あったっけ？

「……とりあえず、早い所宿を探そうな……?」

さっさと、宿で寝たいんだよ、俺は……。

俺達は、できるだけ安い宿を求めて、町を歩き始めた……。

「……………何故だ？」

俺は、力なく呟いた……………。

「……………何故だ、何故なん……………」

ドガッ！

「いつてえ！？」

「こらハデイ！町中で大声出しちゃダメでしょ！」

「まだ出してねえ！」

頭をグーで殴ってきたメリスにそう返す。

「まだ、ってことは出そうとしてたんだね？」

「うぐ……………」

グリーンが呆れた声を出す。

……だつてよお……!!

「おかしいだろ!!何でどこの宿屋も満室なんだよ!？」

……そう、宿を探し始めて数十分、回った宿屋は今の所で五軒目、その全てが満室だったのだ。

「……確かに、妙だね。」

グリーンも、神妙な顔をしている。

「だろ!?!いくらここがそこそこ大きい町だからって……!!」
「いや、そうじゃなくてさ、………気付かない?」

グリーンが、周りを見渡して言う。

「あ?」

「気づかない、って、何に?」

メリスも分かってないようだ。

俺はとりあえず、グリーンにならって周りを見渡してみる。

仲間と話す冒険者らしき男。

買い物帰りの主婦。

武器屋に入っていく冒険者らしい男。

アクセサリーを見ている冒険者風の女。

……別に、特に変なところは……、

……ん？

「………冒険者、多くね？」

その俺の呟きに、グリーンが傾く。

「ここは冒険者ギルドもあるし、冒険者がいるのは分かるけど。

……いくらなんでも、それらしい人が多すぎるよ」

言われてみれば、今町を歩いている人は、一般人より冒険者の方が
多いように思える。

「ん〜……でも、単に試験か審査が近いんじゃないの？」

とりあえず、思いついたことを言ってみる。

冒険者の資格を得る試験や級の昇格審査は、冒険者ギルドで行われる。クラス

だから、その日が近ければ、当然その町には、それを受けようとする者達が集まってくる。

「いや、この町で試験があるのは二ヶ月後、昇格審査があるのは三ヶ月後だよ」

グリーンにそう返される。

さっき冒険者ギルドで見たのか？

「……何か、大きな依頼でもあるのかもね……」

グリーンがそう呟く。

「なるほど、確かに大人数が必要な大きな依頼があれば、そこに冒険者が集まるよな……」

それならチャンスかも知れないな。

周りを見る限り、冒険者達がつけている腕輪は、鉄と銅が多く、たまに銀がある、ぐらいだ。

ようするに、その大きな依頼は、C級クラス、D級クラスの冒険者に適任なんだから。

「とりあえず、依頼に困ることはないと見ていいだろうね」

「……でも、宿には困ってるよ？」

……メリスの言うとおりだ、
とりあえず、今必要なのは依頼ではなく、宿なんだ。

金があるのに公園で野宿なんて絶対嫌だ……！！

「……じゃあ、酒場に行こうか」

「……最後の手段……ってか？」

俺とメリスがあつくりと肩を落とす。

実は、酒場の二階は宿になっていることが多い。

ただし、冒険者しか泊まることができない上に、下から酔っ払いの
叫び声が聞こえてくるため、基本的に空室なのだ。

……その代わり、料金は安いが。

俺達は少し肩を落として、酒場へと向かった……。

「はあっ!!!??」

酒場に到着し、部屋を取ろうとして、俺は思わず叫び声を上げた。

……なんと、満室……!!!

「ありえねえだろ！酒場の宿が満室とか!!」

「そうだよ！こんな冒険者しか泊まれない上に、深夜まで叫び声がうるさくて眠れないような宿が!!」

「落ち着いて二人とも、あとメリス、さすがに言い過ぎだよ？」

動揺する俺達とは違い、落ち着いているグリー。

ちなみに、今も建物の外まで聞こえるような叫び声が酒場中に響き渡っていて、会話するのにも一苦労だ。

「……わりいな」

酒場のおやじが、少し引きつった顔で言う。

「ついさっき最後の部屋が埋まっちゃまって、満室になっちゃったん

だよ
「

ついさっきかよ！くそ！！

「…………弱ったな…………」

グリーンがそう呟く。

…………さすがに、酒場の宿まで満室だとは思ってなかったらしい。

くそ！今日は野宿確定か！？

「…………そんなに困ってるなら、相部屋にするか？」

「…………え？」

酒場のおやじが言った言葉に、思わず聞き返す。

「いや、さっき言った最後の部屋なんだが、四人部屋を一人が取ったんだ」

「はあ！？何で！？」

「他に部屋が空いてなかったからじゃないかい？」

ああ、なるほど…………。

「だから、そいつに話をつけて、相部屋にしてもらったらどうだ？」

「相部屋か……、部屋代を半分持つって言えば、オーケーくれるかもな……」

普通、見知らぬ他人と相部屋なんて……、と思うかもしれないが、冒険者同士ならば話は別だ。

冒険者は名前と血が登録されているため、何かしでかそうものならば、即刻指名手配されてしまう。

……まあ、それでも絶対安心とは言えないから、貴重品は持ち歩いた方がいいけどな……。

「そいつならそこにいるぜ、ほら」

酒場のおやじが、クイツと指で示す。

「……？」

酒場のおやじが言った方を見ると、そこには……、

「……………子供？」

茶髪の子供が、賑わいとは少し離れた場所で、一人、麦茶を飲んでいた。

「おーい！レイラ！」

酒場のおやじがその子供に声をかける。

それに気づき、レイラと呼ばれた子供はこっちにやって来た。

女の子！？

俺は、その子の顔を正面から見て、驚愕した。

今、夜の九時だぞ！？

何でこんな時間に、しかも酒場に女の子がいるんだよ！？

……………ん？

……っつーか……。

……この宿を取ったってことは……。

……この子、冒険者なのか!?

メリスやグリーも驚いているのか、一言もしゃべらない。

そうこうしている内に、その少女は俺達の目の前に来て、
「っつー言っ
た

「何か用かよ、おっさん」

はい？

……もう一度言おう。
俺達の目の前にいるのは、小学生ぐらいの少女である。

俺にはそういう趣味ないけど、顔はそこそこかわいい部類だろう。肩より少し長い茶髪を、首の後ろで結んでいる。そして瞳だが……緑色。見たことないけど、磨き上げたエメラルドはこんな色なんだろうな、と思えるような色だ。

「お前さんの部屋だが、こいつらと相部屋にしてくれねえか？」
「相部屋？」

「ああ、さっき言ったが、お前さんの部屋が最後だったからな」
「あゝそっか、俺で満室になっちまったのか」

レイラは俺達を見て、そう言う。

「いいぜ別に、困った時はお互い様だしな」

レイラは、ニツ、と笑みを浮かべて、そう言った。

……いや、なんつーか、さっきから少女少女って言ったけど……、

……こいつ、女か……？

声は高いけど、言動があまりにも男らし過ぎて、自信がなくなってきた……………」。

「……………」どうかしたか？」

「あ、いや……………」

レイラが俺達の様子を見て、声をかけてくる。

そして、何か思い当たったのか、こう言った。

「あゝ分かった、何でこんな所に子供がいるんだ？とか思ってたんだろ」

「いや……………」

まあ、それが一番気になるが……………」。

「まったく、これが目に入らねえのかよ？」

レイラはそう言って、左腕につけた腕輪を見せてきた……………」。

「^{クラス}C級!？」

そう、レイラの腕につけられている腕輪は銅製……、
つまり、C級^{クラス}冒険者の証だ。

ちなみに、冒険者は腕輪をもらう時に、同時に『血の契約』を結ばなければならぬ。

それにより、『契約者』以外の者が腕輪をつけると、『拒否反応』
によって、腕輪が勝手に外れてしまう。

つまり、腕につけることができているということは、この腕輪は間違
いなく、レイラ自身の物だということだ。

「自己紹介が遅れたな。

俺はレイラ・エラルド、見ての通りC級^{クラス}だ。

……歳は13だけど、あんまガキ扱いすんなよ?」

『13歳!?!』

俺、メリス、グリーンが同時に驚きの声を上げる。

ちよつと待て!!

13歳でC級^{クラス}なんて、聞いたことないぞ!?

「ま、驚くのも仕方ねえな、俺だって初めて見たぜ」

酒場の親父がそう言う。

マジかよ……。

「んで?そつちは自己紹介とかねえの?」

「あ、悪い……、俺はハデイ・トレイト。D級だ」クラス

「私、メリス・テーナス！」

冒険者の資格は持ってないけど、『魔導師』だよ！」ウェイザード

「僕はグールド・テーナス、グリーンでいいよ。」

ハデイくんと同じ、D級冒険者だ」クラス

俺達も、それぞれ自己紹介をする。

「へー、その年でそれなら、けっこうすごいんじゃないの？」

レイラが少し驚いた顔をする。

……お前に比べたら普通だけどな……。

「それじゃ、三人で2250Gだ」ゴールド

レイラには、部屋代の半分、750Gを返すぜ」ゴールド

めちゃくちゃ安いと思うかもしれないが、これは泊まる奴が冒険者、つまり最低でも半額になることが前提だからだ。

しかも今回は部屋代さらに半額だし。

……それでも元々安いけど。

「おっし、サンキュー。」

それじゃついてきな、こっちだぜ」

レイラが持ってきた麦茶を飲み干して、そう言った。
案内してくれるらしい。

まあ、同じ部屋だしな……。

……っーか、なんかこいつ、男にしか見えなくなってきた……。

「んじゃ、一風呂浴びてくっか」

夕食後、部屋で荷物の整理をしていると、レイラがそう言った。

「あ、じゃあ一緒に行こうよ!」

「ん、いいぜ別に」

メリスが楽しそうにそう言う。

……何かいつの間にか仲良くなってるな、この二人。
っーか、一緒に行っても風呂は別々だろ……。

ちなみに、夕食時の豪快な食べっぷりにより、俺はレイラを男だと

断定していた。

食べるのが早いとかじゃなくて、食べ方が豪快すぎる。
おっさんか、とツツコミそうになったぐらいだ。

「それじゃ、僕達はまだ整理があるから、先に行っておいでよ」

「つつーかメリス、まだお前整理終わってないだろ……」

「む、後でいいでしょ？」

メリスがふくれてそう言う。

……まあ、今回はサボってるわけじゃないからいいけど……、そんなにレイラと一緒に風呂行きたいのか？

……あれ、何だろ、何か面白くない……。

「それじゃ、行ってきまーす！」

「んじゃ、後でな」

「お、おう」

俺は二人を見送る時、何故か複雑な心境だった……。

「……あれ？あの二人、部屋の鍵持ってた？」

「……あ」

「ただいまー！」

「おっす」

一時間後、二人が同時に戻ってきた。

俺達は荷物整理は終わっていたが、二人が部屋の鍵を持っていつてなかったため、戻ってくるのを待っていた。

……風呂場でレイラに渡してもよかったけど、すれ違つかもしれないしな……。

「お帰り……、そろって戻って来たのか」

もしかして、どっちかが外で待ってたのか？

「え？当たり前でしょ？」

メリスが不思議そうな顔で言う。

……当たり前？

「いや、なんで当たり前なんだよ？

一緒に風呂に入ったわけじゃあるまいし」

俺がそう言った瞬間……

部屋が、凄まじい殺気で包まれた……。

「……え……、ハ、ハデイ、何、言って……」
「おい………」

戸惑うメリスの声を、レイラの、ドスのきいた声がかき消す。

殺気は、レイラから放たれていた……。

ちよつと待つて、恐っ！！

「てめえ……、それ、どういう意味なのか教えやがれ……」

レイラは拳を握りしめ、怒りに満ちた声で、そう言った。

え、何、もしかしなくても怒ってる！？

俺何か変なこと言ったか！？

見ると、メリスはレイラの殺気におびえていて、グリーは俺を呆れた目で見ていた。

「い、いや、だつて……」

そして、恐怖のあまり冷静な判断力をなくした俺は、

「こつ言ってしまったのだった……」。

「お前、男だろ？メリスと同じ風呂に入るなんておかし……」

……薄れゆく意識の中で、俺は、なんとかその声を聞くことができた……。

「あ、ハデイ、気がついた？」

気がついた時、俺は自分のベッドで寝ていた。
横にはメリスがいて、俺の顔を覗き込んでいた。

……顔が近い……。

と、その瞬間、二つの殺気が同時に俺に襲いかかって来た。

「一つはもちろんグリー、そして、もう一つは……。」

「よお、起きたかよ？」

レイラである。

そうだ、性別間違えてぶっ飛ばされたんだっけ……。

「あゝ、レイラ……。」

俺は起き上がって言う。

「ごめん」

「……………」

まあ、完全に俺が悪いしな。
性別を間違えるとか……。

レイラは、ため息をついて、言った。

「まったく、たまに間違えられるけどよ……………」

あ、よかった、俺だけじゃなかったのか。

「俺のどこが男に見えるんだ？」

……………間違えられねえように髪伸ばしてんのに。」

レイラが、結んだ髪を手に持って、言う。

確かに髪型、顔、声は女に見えるけど……。

「いや、何か言動が男らし過ぎて……」

「ハデイくん!!」

グリーの声に、ハツとする。

しまった！男に間違えられて怒ってる奴に、男らしいとか言ったら

……!!

「なーんだ、じゃあ良いぜ、別に」

……あれ？殺気が消えた……。

「ただし……」

レイラは俺の胸倉をつかみ上げて、言った。

「俺は男勝りなだけで、女だ。」

次、間違えたら股間蹴りあげんぞ……」

再び、凄まじい殺気に当てられる。

「う、ういっす……」

俺はそう言った……。

女が言うセリフじゃねえ……！！と、心の中で思いながら……。

「ただいま……」

「ただいま、二人とも」

それから、俺とグリーはとりあえず風呂に入った。

俺は30分ぐらい気絶していたらしく、起きたのが11時半、風呂が閉まるギリギリの時間だったからな……。

「おかえりー！」

「おかえり」

それを女性陣が迎えてくれる。

「んで、お前らは明日、どうするんだ？」

自分のベッドに座っていたレイラが、そう聞いてきた。

……とりあえず機嫌は直つたらしい……。

「とりあえず、依頼を探そうと思ってるけど……」

と、そこで、この町に冒険者が多かったことを思い出す。

「そうだ、レイラ、この町に大きい依頼でもあるのか？」

「あ？」

レイラは疑問符を浮かべる。

「さあ、俺は今日の夕方この町に着いたばっかだからな」

じゃあ、知らなくても無理ないか……。

「まあ、明日酒場のおやじさんに聞けばいいんじゃないか？」

グリーがそう言う。

ま、そうだな……。

「それじゃ、そろそろ寝るか、……もう12時近いしな……」

時計は11時50分を指していた。
もう明日になっちまう。

「そうだね、おやすみー！」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

「おう、おやすみ」

電気を消し、俺も自分のベッドにもぐる。

「……ハデイくん」

「ん？」

目を閉じて数秒、隣のベッドにいるグリーが話しかけてきた。

「一応言っておくけど、同じ部屋だからって、メリスに夜這いかけたりしたら……」

「しねえよ!!寝ろ!!」

思わず大声で言い返す。

……何か、レイラの笑い声が聞こえた気が……。

「く、く……」

あ、気のせいじゃねえ……。

静まり返った部屋……、何の声も、音も、聞こえない……

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」
「おんどりゃああああああああ！！！！」
「うおっじゃあああああ！！！！」

あああああ！！下から酔っ払いどもの声がうるせええ！！

だから、酒場の宿は嫌なんだよ！！

とりあえず、来るべき明日に備えて、俺は必死に寝ようとしていた
……。

……大きな依頼、か……。

この時俺は、その依頼がとんでもないもののような気がして、なら
なかった……。

第6話 人を判断する上で、一番間違っではいけないもの（後書き）

というわけで、新キャラ登場と共に、第一章は終了となります。

次回投稿は第二章の前に、幕間として、『魔法などの設定』と、レイラの紹介を書きたいと思っています。

魔法の設定（前書き）

本編で出てきた、

もしくはこの先出てくる予定の設定をまとめてみました。

色々考えてたら、

めちゃくちゃ複雑でややこしいものになってしまいました。

しかも、この設定が全て本編で出てくるとは限りませんし、
後で変更する可能性もあります。

そのため、適当に読み流して、

「あゝ、こんな感じなんだ」ぐらいに思っ頂ければ結構です。

また、ネタバレを含みます。

魔法の設定

『魔法』

魔力を使い、火、水、風などの自然現象はもちろん、光や闇の具現化など、自然ではありえない現象までも作り出し、自在に操る力。

こう言うと、なんでもできる万能の力に思いかもしれないが、実際にはこの力を使いこなすのは困難を極める。

人間の場合、

割合でいって、100人中90人以上は、平均前後の魔力を持って生まれる。

平均的な魔力を持つ者の場合、基礎魔法レベル1の魔法を使えるだけの魔力を得るのに、最低でも一年、『習い事』程度ならば二年以上の修練が必要となる。

しかも、これは魔力を得るのに必要な時間で、実際に魔法を使うのには、魔法を習得する修業が必要となる。これにかかる時間は習得する魔法や本人の魔力によって異なるが、十分に使いこなせるようになるには、普通にやって一年以上の修業が必要だと言われている。

「魔法の属性」

魔法には、炎・氷・雷・風・水・地・光・闇の八属性と、決まった型のない無属性の、合計九属性がある。

「基礎魔法と応用魔法」

基礎魔法は、その名の通り基礎となる魔法。

普通の魔法使いは、まず基礎魔法を覚えることから始める。

基礎魔法には、無を除いた八属性がレベル1〜5までである。ただし、人の力だけで使うことができるのは、レベル3まで。

基礎といえど、

レベル1でも十分な殺傷力があるため、注意が必要。

応用魔法は、基礎魔法以外の魔法。

基本的に魔術書などで気に入った物を買ひ、

自力で習得することになるが、

応用魔法の本質は、

自分で新しい魔法を作り出すことである。

しかし、完全オリジナルの魔法を作り出すのは難しく、

『ウィザード魔導師』でも、オリジナルの魔法を使える者は少ない、

ましてや、使いこなせる者などほとんどいない。

だが、上手く作り出し、なおかつ使いこなすことができれば、自らの想像を現実にするにとすら可能なため、オリジナルの応用魔法に憧れる魔法使いは多い。

「魔法の手順」

魔法には、

- 1、『集中』
- 2、『詠唱』
- 3、『呪文』の三つの手順が必要となる。

『集中』は自らの気を練り上げ、自分の魔力を使う準備をする。この時、完全に無防備になってしまう。

『詠唱』は目に見えない精霊に呼びかけ、魔力を貸してもらつ。借りられる魔力は周りの環境、術者の魔力、精霊との関係性によって変わるが、

基本的に『集中』で準備できる魔力よりも弱い。

『呪文』は魔法を発動する合図であり、この合図によって、魔法が発動する。

なお、これらの手順は、全て魔力を消費する。

魔法のレベルに対して術者の魔力がある程度高く、

さらにその魔法を使いなれていれば、
『詠唱』は省略することができる。
それにより、魔法を素早く発動することができる。

ただし、その場合威力が段違いに下がり、
さらに『呪文』に必要な魔力が多くなるため、
全体として必要になる魔力は同じぐらいか、もしくは少し多くなる。

ちなみに、『集中』時には、
術者の周りに集束した魔力が光となって見えるため、
『事前動作なし』^{ノーマーション}で魔法を使うのは、
不可能だと言っている。

「魔力」

魔法の源となる力。

この世界には大気中に魔力が存在し、
瞑想などによって、それを人体に取り込むことが可能である。

大気中に存在する魔力は場所によって質・濃さが異なるが、
神佑地や龍穴の近くは格段に質が高く、魔力が濃い。

通常、魔力は目に見えない（魔法を使う時は別）が、
特殊な訓練を受け、魔力に馴染んだ者ならば、
見ることも不可能ではない。

魔法使いが、消費した魔力を回復する方法は、主に瞑想と休憩に限られる。

ただし、魔力を多く含むものを食べたり、他の者の魔力を奪い取ったりすることで、魔力を補給することもできる。

「魔法の代償・負担」

魔法に必要な物は、魔力と集中力である。

例えば、魔力はもちろん、集中力も削られるため、よほどの魔力を持つ者、もしくは魔法を使い慣れている者でなければ、

魔法の多用は難しい。

しかも、魔法を無理に使い、魔力を消費しすぎると、頭痛や吐き気、目まいなどに襲われ、

さらに続ければ失神、

最悪の場合、寿命を削ることすらあり得る。

そのため、

魔法使いは魔法を多用した場合、

しっかり休んで、体力と魔力を回復することが必要である。

「魔法使いの称号」

魔法を使う者には、その能力の高さに応じて、称号が与えられる。

・マジシャン魔術師

まず初めに魔法使いが手に入れられる称号。

魔法を一つでも使うことができれば、

『マジシャン魔術師』として認められる。

・ウィザード魔導師

この称号を手に入れれば、魔法使いとして一人前と認められる。

基礎魔法のレベル3を一つの属性で、

もしくはレベル2を二つ以上の属性で使えることが、

この称号を手に入れる最低条件である。

ただし、魔法専門の冒険者や、魔法学校の講師など、

魔法の専門家でもない限り、この称号を手に入れるのは難しい。

しかし、ある程度才能があり、長期に渡って修練を積んでいけば、

魔法を『趣味』としている一般人でも、この称号を持っている者はいる。

・ハイウィザード大魔導師

この称号を持っている者は、世界に100人いるかどうかと言われている、

『天才』の証。

最低でも基礎魔法のレベル4か、それに値する程の応用魔法を習得し、
なおかつ人間離れた魔力を持っていなければ、
審査を受けることすらもできない。
そのため、よほどの才能と努力、そして経験を積まなければ、
この称号を手に入れることはできない。

エンチャンター
・賢者

『最強』の証。

この称号を持つ者は、世界に七人しかいない。
その七人は例外なく、軍隊を一人で壊滅させられる程の力を持った
め、
人々からは尊敬と畏怖の二つの目で見られている。

ロド
・神

過去、神話の時代において一人だけ、
この級の魔力を持つ聖女がいたとされている。
現在、世界最強の魔法使いとされる『虹の賢者』ですら
エンチャンタカラス
『賢者』級のため、
この称号を持つに値する者は存在しない……、と、言われている。

「魔塔」

魔法において、最強の力を持つと言われる者達のこと。
現在は七人の賢者エンチャンターと一人の大魔導師ハイウィザードの合計八人で、
『八つの魔塔』と呼ばれている。

ただそう呼ばれているだけであって、
何かの組織というわけではない。

冒険者の設定（前書き）

注意事項は「魔法の設定」と同じです。
ネタバレを含みません。

2011/4/30 設定を少し変更しました。

冒険者の設定

『冒険者』

主に酒場で依頼を探し、

その依頼を解決することで生活費を得る者達。

そのほとんどが旅人であり、世界各地を放浪している。

冒険者になるには、各国の『国家資格』が必要なため、

冒険者＝荒くれ者というより、

冒険者＝エリート、という認識が一般的。

ただし、彼らはやはり豪快な者が多く、

依頼が終わったあかつきには、

酒場で飲み、暴れていることすらあるため、

冒険者＝荒くれ者という認識が全くないわけではない。

冒険者には、全ての宿屋が割引きになるという特権がある、
この特権が、冒険者に旅人が多い理由の一つになっている。

ちなみに、C級クラス以下の冒険者は半額、

B級クラスは八割引き、

A級クラスは無料（ただし、食事の分は八割引き）となる。

（宿によっては、

食事代を計算するのが困難、面倒などの理由により、

A級クラスは完全に無料にしている所もある）

冒険者の連れは、資格を持っていなくても割引きを受けられるが、
その場合は級クラスに関係なく半額となる。

ちなみに、世界中の冒険者、約50万人の内、
おおよその割合で、四割がE級クラス、
三割がD級クラス、二割がC級クラス、
残り一割がB級クラスで、
A級クラスは150人前後（冒険者全体の約0・03%）しか存在しない。

「冒険者の昇格」

冒険者は例外なくE級クラスから始まり、依頼を多く解決することで、
昇格審査を受ける権利を得る。

そのため、冒険者として地位を築くには、
実力や根気はもちろん、
良い依頼を受けられるかどうかの『運』が必要となる。

ちなみに、冒険者の試験に学力審査はないため、
冒険者は一般的にあまり学力はない。
その反面、世渡りがうまかったり、勘が鋭い者が多い。

「冒険者ギルド」

冒険者達を管理する組合の総称。
主に国家試験や昇格審査、
冒険者が狩った魔物の買い取りを行う。

一つの国に一つの本部と、四〜六ほどの支部があり、
本部は基本的に国の首都に置かれる。

冒険者の試験は本部でなくとも受けられるが、
試験を受ける権利があるかどうか、
最終的な試験の合否の判断などは、全て本部で下される。

「冒険者の腕輪」

その名の通り、冒険者の証となる腕輪。

依頼や、宿屋で割引きを受ける際には、提示を求められる。

級クラスによって腕輪が異なり、

Aは金、Bは銀、Cは銅、Dは鉄、Eはアルミでできていて、
級クラスの文字が刻まれている。

また、冒険者は必ず、『腕輪と『血の契約』を結んでおり、
契約者以外の者が腕輪をつけると、
拒否反応を起こし、勝手に腕から外れるようになっている。

これは、冒険者ではないものが腕輪を何らかの方法で手に入れ、
冒険者になりすますことを防ぐためである。

そのため、酒場や宿屋で提示する時は、
その前後に、腕輪をつけて見せなければならぬ。

魔物の設定（前書き）

注意事項は「魔法の設定」、 「冒険者の設定」と同じです。
ネタバレを含みます。

魔物の設定

『魔物』

人を襲う『動物』の総称。

そのため、広い意味ではクマやサメ（クマやサメの魔物ではなく）も魔物に入る。

魔草・魔魚・魔獣・魔族・竜に大別され、
戦闘力によって低位・中位・上位・最上位に分かれる。

・魔草

植物の姿をした魔物。

一般的に弱いが、普通の植物にまぎれていることが多いため、
奇襲には注意が必要。

・魔魚

魚類の姿をした魔物。

陸上では息ができないものが多いため、
人が襲われることは基本的に少ない。

・魔獣

最も種類の多い魔物、獣の姿をしている。
獣といっても陸上のものだけではなく、
海獣や鳥も含まれる。

・魔族

比較的人に近い姿をした魔物。
主に悪魔や鬼などだが、中には元々は人間だった者や、墮天使などもいる。

・竜

魔物の中で最強を誇る。
最も弱いと言われるプチドラゴンでも危険度Dであり、ましてや最上位竜となると、もはや人が戦えるレベルではなくなる。

「危険度」

魔物の『危険性と戦闘力』を示すもの。
そのため、戦闘力がそこまで高くななくても、狂暴な魔物は危険度が高くなる。

危険度E〜Aまであり、
危険度Eだと、E級冒険者が三、四人がかりで
なんとか倒せるぐらいの強さ。

実際にはE以下やA以上もあり、
一般人でも倒せる魔物や、
A級冒険者が10人がかりでも倒せない魔物も存在する。

「家畜」

この世界には、牛、豚、鶏、羊などの家畜も存在するが、これらの動物は、現存数が少ない上に飼育が難しいため、最先端の設備と、最高のエサ、ストレスを感じさせないよう配慮の行き届いた警備が必要となる。

一般に家畜の肉は魔物の肉よりも格段に美味で、栄養価も高いが、上記の理由で非常に高価な代物となっている。

例外は毎日採ることのできる牛乳や鶏の卵だが、それでも、毎日口にするには難しい値段である。

サブキャラ設定1（前書き）

メインキャラ設定と同じく、軽くネタバレを含みます。

サブキャラ設定1

レイラ・エラルド

年齢：13歳 性別：女

身長：145cm 体重：42kg

髪：肩より少し長い茶髪、首の後ろ辺りで結んでいる

瞳：明るい緑色（エメラルドグリーン）

めちやくちゃ男勝りな性格の少女、口より先に手が出る。

顔はそこそこかわいい部類なのだが、性格と話し方があまりにも男らしいため、

たまに男子に間違えられる（そしてキレル）。

13歳にしてC級^{クラス}冒険者の資格を持つ『天才』。

その資格に恥じぬ実力を持つ。

魔力を纏うことで筋力を上げることができる、特異な力の持ち主。
しかし、魔法を一切使うことができない。

さらに、特異な力を持つせいか精霊に嫌われていて、

『詠唱』をすることができない（しても意味がない）。

常識外れの力を持ち、素手で岩を殴り壊すことができる。

前述の通り、魔力を纏えばさらに威力は上がる。

また、魔力を纏っている状態ならば、手で魔法に対抗することができる。

他にも魔力の塊を飛ばす『闘気弾』や
拡散させることで広範囲を攻撃する『闘気波』などを使う。
普通、魔力そのものを飛ばしても、大気中の魔力に紛れてしまっは
ずだが、
レイラの場合はなぜかそうならない。

サブキャラ設定1（後書き）

実は、今構想中の別の物語の主人公だったりします。
ただ、全然まとまってませんし、
書くとしても相当先だと思えますが……。

第7話 依頼と魔塔（前書き）

7 / 9 誤っていた箇所を訂正しました。

第7話 依頼と魔塔

「おはよー!」

次の日、俺が起きると、すでにメリスが起きていた。

……まあ、昨日夕方に二時間ぐらい寝てたしな……。

「おっす」

声の方を見ると、レイラがベッドに座り髪を結んでいた。

「おはよう」

グリーも、銃の手入れをしながらあいさつをしてきた……。

……って、起きたの俺が最後かよ。

「珍しいねー、ハデイが寝坊なんて!」

「疲れてたんだ……、っつーかまだ七時じゃねーか!

寝坊じゃないだろ!」

七時に起きるのが寝坊なら、いつもは八時以降に起きるメリスはど
うなるんだよ……。

「いいでしょ別に、寝坊してないし」

「なら俺も寝坊じゃないよな？んで、心読むなっつーの！！」

なんか最近心読まれてばっかなんだが……。

「文句があるならハデイが起こしてよー！」

「別に文句なんて言っていないだろ。」

……一応言わせてもらうが俺はいつも起こしてるぞ、なのに起きないだろお前……」

「んー……、じゃあさ、おとぎ話の王子様みたいな起こし方してよ！それなら絶対に起きるから！」

「はあ？お前何言ってる……！！！」

俺の言葉が、凄まじい殺気にさえぎられる……。

「……………ハデイくん……………？」

その殺気を放つグリーは、巨像のごとく鎮座していた。

……なんかドス黒いオーラが見えるのは目の錯覚だと信じたい。

「落ち着けグリー！なんで怒ってたんだ！？」

グリーの怒りの原因が分からない。

「何だよ、分かってねーの？」

動揺している俺とは違い、冷静なレイラが、ニヤつきながらそう言

ってきた。

「王子様がお姫様を起こす方法といえば、キスしかねえだろ？」

あー、なるほどキスカ！

それでグリーが怒ってんのか、そりゃあ俺がメリスにキスを……。

「しねえよ！！」

「よっ！この強姦魔！」

「ハデイ最低ー！」

「しねえつつつてんだろ！！」

その前にメリス！お前が言いだしつぺだよな！？」

どの口が最低なんて言うんだ一体！？

「ははは……、ハデイくん、撃ち抜かれるなら右目と左目どっちがいいんだい？」

「どっちもいやだ！！待てグリー！笑いながら銃を向けるな！！」

「恐いから！マジで恐いから！！」

狂人のように笑うグリーに手の平を向け、なんとか説得しようとする。

「大丈夫だよハデイくん、痛くないから……、

……痛みを感じる時間なんてないから……」

「即死させる気が!？」

誰か!!この常時殺人未遂男をなんとかしてくれ!!

「ねえ、それより朝ごはん行こうよ!おなかすいちゃった!」

「そうだね、そうしようか」

メリスの言葉を聞いた瞬間、グリーは銃をしまい、メリスにっこりと笑いかけた。

……助かった……。

「助けられたな」

「……感謝する気はないけどな?」

そもそもの原因はメリスだ。

「ってか、お前もおっただろ……」

「わりいわりい、つい悪ノリしちまって」

レイラは頭をかいて、おどけてみせる。

「まあ、お前はまだ、悪ふざけしてるだけだからいいけど……」

目の前で談笑している兄妹に目を向ける。

「グリーは冗談の度を越してるし、メリスは何故かグリーをけし
けるし……」

「は？」

ため息をつく俺に、レイラは驚いたような声を出す。

「ん？なんだよ？」

「いや……、気づいてねーの？」

気づく……？何に？

「んー……まあいいか」

「いや、勝手に納得されても俺は良くないんだが……」

「気にすんなって、まっ！できるだけ早く気づいてやれよ？」

ポンツ、とレイラが軽く背中を叩いてくる。

……何なんだ？

「二人ともー！ご飯行こうー！」

メリスが手を上げて呼んでくる、グリーもこちらに微笑みを向けていた。

……冗談だとしても銃を向けていた相手に、微笑むことができる。いつは、本当に大物だと思う。いろんな意味で……。

「ごちそう様ー！」

「だから早えよー!!」

食べ始めて20分、メリスはご飯を二回、おかずの焼き魚を一回、さらに味噌汁と納豆を一回ずつおかわりし、朝食を終えた。

こいつどんな速度で噛んでんだ!?
むしろ本当に噛んでるのか!?

「当たり前でしょ? 噛まないと飲み込めないよ?」

「オーケー、もう心を読まれることにはつつこまないからな?」

人間は慣れる生物だって、どっかで聞いたことがある。

「たしかにメリスは食うの早えよな……」

「良い食べっぷりだね」

「おいグリー、そこは『健康に悪いからゆっくり食べてね?』とか言う所だろ……」

「ハデイ、声マネ似てないよ?」

「悪かったな!」

他愛もない会話をしながら、朝食を進める。

ちなみに、他の奴らはどうと、レイラがご飯を一回、俺も同じくグリーはおかわりなしだ。

……っつーか、普通の奴は一回もおかわりしない量なんだが……。

「さて、メシも食い終わったし……」

「依頼の話、おじさんに聞かなきゃね!」

暇そつに煙草を吹かしている酒場のおやじを見て、言う。

俺達は酒場の宿屋に泊まったため、朝食は酒場の一階で食べた。

……少し酒臭いが、まあ、そこは我慢した。

おやじの方も俺達の声が聞こえたのか、こっちを向いたのが見えた。

「依頼……か……」

おやじはそう呟き、少し考え込んでいた。

「なんだよ、ないのか？」

しびれを切らしたレイラが言う。

「いや、あるぜ、……とんでもねえのがな」

おやじは一拍置いてから、真剣な表情で続ける。

「……だが、正直お前らにはおすすめできねえ」

「なんでだ？」

「それぐらい危険なんだ。」

……お前らの予想通り、この町に来てる冒険者は大半がこれ目当てだ。

……だが、このヤマはD級クラスや、例えC級クラスでも子供には無理だぜ？」

……なんか、相当やばいっほいな……

「話だけでも聞かせてもらえませんか？」

受けるかどうかは聞いてから考えます」

グリーンがおやじにそう言う。

「……………そうだな。」

それぐらい自分で判断してもらわねえとな！

おやじは笑ってそう言うと、

依頼の詳細を話し始めた……………。

「……………お前ら、『ジェネラルドラゴン』って知ってるか？」
『?』

おやじの言葉に、俺達は疑問符を浮かべる。

「知らないけど……………ってグリーン、どうした？」

唯一疑問符を浮かべなかったグリーンは、青白い顔で何かを呟いていた。

「そんな……………まさか……………！」

「ど、どうしたんだ？何か知ってるのか？」

レイラの言葉に、グリーンは顔を上げる。

「……………『ジェネラルドラゴン』……………危険度Aの中位竜だよ……………！！！」
「き、危険度A!？」

なんか強そうな名前だと思ったけど、マジで!?

危険度Aっていったら、

A級^{クラス}冒険者なら数人、

B級^{クラス}冒険者なら十数人がかりで、

やっと倒せるレベルだぞ!?

「『竜』がすげえのは知ってたけど、中位でも危険度Aがいるのかよ……」

魔物を5つに大別した時、『竜』はその中で最強だって言われてる。

「……いや」

俺の呟きをグリーが否定する。

「『ジエネラルドラゴン』自身の戦闘力はそこまでもないんだよ、危険度Bの魔物と同じくらいらしい。

……ただ、その習性が厄介なんだ……」

危険度Bって十分恐ろしいけど……。

「……ジエネラルドラゴンは、弱い魔物を引き連れる習性があるんだ」

「はあ!?!」

引き連れるって……何だそれ!?

「つまり、自分よりも弱い魔物を下僕として従えるんだよ。」

……そうして、巨大な群れを作る……」

「巨大なつて……、ぐ、具体的にどれくらい？」

「……大きいものだと、総勢300匹を超えることもあるらしいよ

……」

「300!？」

何だその数!？もはやちょっとした軍隊じゃねえか!!

「本当に怖いのは数じゃないよ。

ジェネラルドラゴンが引き連れるのは、危険度C〜Eの奴ら、つまり一匹でも危険な魔物が大量にいるんだよ……。」

まさに大軍勢の『ジェネラル將軍』って感じだね……」

「……そついや、危険度は魔物の『戦闘力と危険性』によって決められるんだっけか？」

……なるほど。

その魔物一匹の戦闘力はBぐらいでも、群れを作る危険性から危険度Aになつてるのか……。」

「おいおい……。」

そんなのに出くわしたら一巻の終わりだな……」

……ん？ちよつと待て、俺達は今依頼の話を聞いてるんだよな？

なんでそんな恐ろしいドラゴンの話……。」

「……おい、まさか……!!」

当たって欲しくない予感ほど、当たってしまうと聞いたことがある。

……できれば、この予感は外れて欲しかった……。

「……その、まさかだ」

酒場のおやじが、真剣な表情で言った……。

「200匹を超える魔物の群れが、この町に向かってきている。」

……その親玉がジェネラルドラゴンなんだ……!!」

「ウソ……だろ……!？」

俺達は驚愕に目を見開いていた……。

「だ、だって……、この町に、そんな様子は全然……!!」

「そうだ!!そんな魔物の群れが向かってきてるなんて、この町の危機だろ!？」

なのになんで、町で騒ぎになってないんだ!？」

「ああ、それは……」

おやじが俺の質問に答えようとした時……、
入口の扉が開いて、人が入って来た。

「あっ、マウロさん、少しよろしいですか？」

「ランディア中将!どうかしましたか？」

……へ?……中……将……?

ランディアと呼ばれた女性は、軽く駆け足でこっちに向かって来た。

「はい、人数の確認をしたくて……、その子達は……?」

女性は、俺達を不思議そうな目で見ていた。

……まあ、俺達はまだしも、13歳のレイラは絶対に不思議がられ

るよな……。

「ああ、こいつらも冒険者なんですよ」

「ええ！？あつ、本当！腕輪！！」

女性は、口に手を当てて、驚きの声を出す。

……何か子供っぽい人だな……。

改めて女性をよく見てみる……。

背はメリスとだいたい同じぐらいで、暗い茶髪を背中で二つ網にしている。

毛先が黒いけど、染めたんじゃないやなくて地毛って感じだな、瞳はメリスやグリーンと同じような、普通の茶色だ。

……なんか、雰囲気かメリスに似てる気がする……。

「それじゃあ、この子達も作戦に？」

「いや、それはまだ話してる所で……」

「あ、あのー！！」

女性とおやじの会話をメリスがさえぎる。

なんか、メリスの顔が紅潮してる……、
つてか少し興奮してるように見えるような……。

「も、もしかして……イア・ランディアさんですか！？」

「えっ！？」

「イア・ランディアって……、あのー！？」

メリスの出した名前に、グリーとレイラも驚く。

……え〜と……。

イア・ランディア……、何か聞いたことはあるんだけど……。

「は、はい、そうです」

「わあぁっ!!」

それを聞いた瞬間、メリスがもの凄くうれしそうな顔になる。

「わ、私、メリス・テーナスっていいます!!」

ランディアさんにずっと憧れてました!!」

「え、えつと、あ、ありがとう……」

完全に興奮状態のメリスに、

ランディアさんは少し困惑気味だ……。

……ん？メリスが憧れてた……？

「あああああああー!!!!」

突然大声を出した俺に、その場にいた全員が、ぎよっとする。

「思い出した!!」

俺達が冒険者を始める少し前から、メリスがよく言ってた……！！

最強の魔法使い『魔塔』に、史上最年少で選ばれ、現在は23歳にしてスイーツ王国軍魔法部隊隊長を務め、八人の魔塔、通称『八つの魔塔』の一角に、唯一『大魔導師』ハイウイザードで君臨する鬼才！！

「『星の賢者』イア・ランディア！？」

またも大声を出す俺。

「……え、えーと……はい」

イア・ランディアさんは、苦笑しながらそう答えた。

第7話 依頼と魔塔（後書き）

またも新キャラ登場です。

こちらの設定はこの章が終わったら書こうと思っています。

第8話 賛成と反対

（二年と少し前）

「ねえハデイ、『魔塔』って知ってる？」

「『魔塔』？」

剣の修業をしている俺に、メリスが話しかけてきた。

「知らないの？『最強の魔法使い』のことだよ！」

「最強？なんだそりゃ、そんな組織なんかがあるのか？」

「冒険者ギルドみたいに」

「違う違う、ただそう呼ばれてるだけみたい。

……でも、すごいよね！最強か……」

メリスは持っている本の表紙を眺めながら言う。

「なんだその本？」

「週刊魔法ブック！」

メリスは本を俺に見せてくる。

本の表紙には20歳ぐらいの女性が載っていた。

週刊魔法ブックとは、魔法の基礎や上達法、魔術書の紹介、他には有名な魔法使いのエピソードなどが載っている本だ。メリスはこれが大好きで、毎週欠かさず買っている。

「お前も物好きだな……」

「だって私が魔法使えるようになったの、これのおかげなんだよ？」

そりゃ、その本も助けにはなっただろうけど……。

「……で？なんでいきなり『魔塔』の話なんてしてきたんだ？」

「だから、今週の特集で『魔塔』の人が載ってるの！！」

グイツと俺に本を押しつけてくる。

「……まさか、この女の人が『魔塔』？」

俺は本の表紙を指差して言う。

……もちろん冗談だ。

こんな若い人が『最強』なんて呼ばれるわけ……。

「うん！！よく分かったねハディ！！」

「はあ！？」

ウソだろ！？

魔力は筋力と違って歳をとっても衰えないから、普通、強い魔法使
いって歳とった人ばっかなのに……。

「このイア・ランディアさんは21歳、史上最年少で『魔塔』にな
ったんだって！！」

「……世に言う『天才』って奴か……」

「『天才』じゃなくて『鬼才』って書いてあるよ！」

メリスが特集のページを見せてくる。

……よく分からないけど、とりあえずすごいんだな。

「すごいよね……私もいつかこんなふうになりたい……！」

「お前、十分強いだろ……」

向上心があるのはいいことだが、
メリスは十分すごい魔法使いだ。

この村で魔法において、メリスの右に出る奴はいないから……。

「それはこの村の中の話でしょ？」

世界にはもつとすごい魔法使いが、いーっぱいいるんだから

……

……それに私、こんな小さな村で一生過ごす気なんてないよ？」

「あ、それは俺もだ」

別にこの村が嫌いなわけじゃないけど……、やっぱり、村の外に出てみたい気持ちはある。

「そういえばハディ、冒険者目指してるんだよね？」

「『そういえば』ってなんだよ……」。

俺一応この村じゃ、一番冒険者に近いっていわれてんだけど……」

「じゃあさ！冒険者になったら私もパーティに入れてよ！」

「……はあ？」

メリスが顔を輝かせて突拍子もないことを言ってきた。

「いいでしょ？私魔法使いなんだから！

絶対役に立つって！」

「……まあ、そうだろうけど……。」

グリーがなんていうだろうな……。」

「兄さんもきつと賛成してくれるって！」

「いや、それはない」

絶対反対してくるぞ、あの人は……。」

「ってか、何でいきなりパーティに入ろうなんて思ったんだ？」

「だって、強くなるには実戦が一番でしょ？」

私、もっともつと強くなって……、いつか『魔塔』の一人になる
！！」

そりゃ大層な夢だな……。」

「だから、ハデイも私に釣り合うぐらい強い剣士になってね！」

「なんだその勝手な言い草は……。」

そりゃあ、男の立場から言わせてもらつと、仲間を守るぐらいの
強さは欲しいけどな……。」

……なんでこいつ上から目線なんだよ。

「いいからいいから！」

はい、指切りげんまーん……。」

メリスは勝手に俺の手をとって、小指を絡ませてくる。

「切った!!」

「ちよつと待て!!略すな!!」

……俺達二人が旅に出るのは、この少し後の話だ……。

〈現在〉

「……………」

少し回想が長くなったが……、その、イア・ランディアさんが、今、俺達の目の前にいる。

……メリスが興奮するのも無理ないな……。

「あ、すみません。」

「マウロさん達お話の最中だったのですね……」

「あ、いや……」

ランディアさんがマウロ……酒場のおやじに、ペこりと頭を下げる。

「……成程ね」

ランディアさんを見て、グリーがそう呟く。

「国の方から大きな援護が来てるんですね。」

「……それで町も騒ぎになっていない、と」

「そういうことだ」

え〜と、つまり……。

まだ俺とメリスはよく分かっていない。

「挨拶が遅れました」

そのことに気付いたのか、ランディアさんが話しかけてきた。

「私はスイーツ王国軍から派遣されました、イア・ランディアと申

りたいのです」

「なるほど、数には数を、ってことか」

レイラがニッと笑って言う。

……っつーかさ。

「俺らまだ、詳しい依頼内容聞いてないんだけど……」
『あ』

いや、こんだけ話せば大体分かるけどな？

「え？まだだったのですか？」

「そっぴゃそっぴゃだったな」

ランディアさんは驚いていた。

……まあ、普通に話してたからな。

「依頼内容は『魔物軍団の殲滅』だ。

報酬はD級クラスが一人二万Gゴルド、C級クラスは一人三万Gゴルドだ」

「うわ、報酬すごいな……」

二万とか三万……、

しかも人数分もらえるのか……。

「それだけ危険な依頼だと、そう思っして下さい」

ランディアさんは、少し心配そうな目をしていた。

「依頼は『殲滅』なんですか？『防衛』ではなく……？」

「はい、『防衛』は『ソレイユ』から五名があたります」

たった五人……と思わなくもないが、まあ、『ソレイユ』なら大丈夫なんだろうな……。

「じゃあ、『殲滅』の方に来る『ソレイユ』は残りの五人なのか？」

「いえ……」

レイラの質問に、ランディアさんは首を横に振る。

「残り五名の内、三名はビスケット町に向かっています」

「……え？」

ビスケット町？なんで？

「万が一、魔物の群れが方向を変えてビスケット町に向かった時のため。」

また、取り逃がしてしまった魔物がビスケット町に向かう可能性があるため、です」

「あ、そうか、ビスケット町も近いもんな……」

ここからビスケット町まで徒歩で八時間ぐらいだ、ドラゴンが飛んでいけば、もっと早く着くだろう。

その万が一のとき、自分達が駆け付けるまで時間を稼げるように、か。

ちなみに、この近くにある人里はチョコレート町とビスケット町だ
けだ。

……って、ちょっと待て。

「『殲滅』に来てくれるの、たった二人!？」

いくら『ソレイユ』でも、ちょっと少なすぎないか!？」

「いえ、三名です」

ランディアさんが、にこつと微笑む。

「私も『殲滅』にあたります」

……そうか、この人がいた。

考えてみれば当然か、指揮を執るって言ってたし。

「ま、そういうわけで、この国最強の兵士が出向いてきてくれるんだ。

おかげで町の奴らも安心してる」

「だから騒ぎになってないのか……」

そりゃあ、軍隊も壊滅させられるって噂の『魔塔』だもん……。味方にすりゃこれ以上に頼もしい奴はいない。

「それで？お前さん達、この依頼を受けるのか？」

「はい！！」

「おいメリス、勝手に決めるな」

勢いよく手を上げるメリス、……理由はなんとなく分かるけど……。

「だって、ランディアさんと一緒にお仕事できるんだよ！？」

やっぱそれが……。

「ん〜、でも確かに……」

報酬は二万×三……、いや。

「なあ、メリスは『冒険者の資格』持っていないんだけど……」

「資格を持ってない『仲間』は、一人一万Gゴールドだ」

ってことは、二万×二＋一万＝五万Gゴールドか……。

これだけあればしばらく楽になるし、いろいろ買いたい物も買える

な……。

「……………僕は反対だよ」

声の方を見ると、グリーが眉をひそめていた。

「二人とも、この依頼がどれだけ危険なのか、よく分かってないんじゃないか？」

「いや、まあ危険なのは分かってるけど……………」

それを聞いて、グリーは小さくため息をつく。

「ハデイくん、バトルプラント覚えてるよね？」

「そりゃ、覚えてるけど」

「あれが危険度Dなんだよ？」

『小人の遊び場』での戦いを思い出す……………。

大したケガはしなかったけど、今思えば少し危なかった。

「それよりも強い魔物が、少なくとも100匹以上いると思った方がいい」

……危険度C〜Eの魔物の群れだっけ、そっいちゃ……。

「……………危険すぎる、だから僕は反対だよ」

グリーはもう一度、真剣な目でそう言う。

「大丈夫だよ!!」

メリスが、大きな声でグリーに言った。

「他の冒険者もいるし、何より、ランディアさんがいるんだから!!」

「……………メリス、確かに町は守れるかもしれないけど、僕達個人が大怪我をする可能性が……………」

「大丈夫!!」

メリスがゴリ押しでグリーを納得させようとする、が、さすがにグリーも今回は譲れないらしい。

「んじゃ、とりあえず俺は依頼を受けるぜ?」

そんな二人をしり目に、レイラが酒場のおやじに言う。

「……かまわんが、明日の昼集まった時に、他の冒険者と組むようにしてくれ。」

いくらなんでも、お前さん一人じゃ無理だ」
「分かってるって!」

レイラはニツと笑って言う。

一人旅してるからか、こういうことには慣れてるみたいだな。

「……で、お前らどうするんだ?」

手続きを済ませたレイラが、未だに言い争っている二人に言う。

「もちろん受けるよ!」

「ダメだつて言ってるだろう!」

「大丈夫だつてば!」

「大丈夫じゃないよ!」

「……どうすんだ?」

「うん……」

二人を無視して俺が勝手に決めるわけにもいかないしな……。

「……まあいいや、俺は少しづらついでくるな」

レイラはそう言つと、酒場から出て行った。

……さて、どうするか……。

「……お前ら」

俺が悩んでいると、おやじが声をかけてきた。

「魔物の群れは早ければ明日の16時頃に町に着くらしい。

だから、13時30分ごろには町を出て、町から五?ぐらい離れた場所で迎え撃つんだ」

そりゃそうか、町の目の前で戦うわけにはいかないもんな。

流れ弾とか危ないし。

「集合は明日の13時に町の広場だ。

受けない場合は明日の朝に町の避難所に避難することになる。

それまでに決めてくれ」

おやじは俺に手続きの紙を三枚渡した。

「……はつきり言つて、D級クラスには荷が重いだろつ。

無理だと思つたら、おとなしく避難するか、今日の内にさつさと

町を出て遠くに行っちまうかな
「……………」

手続きの紙を見て、俺はどうするべきか悩んでいた……。

「とりあえず!」
「うおっ!」

いきなり現れたメリスに、俺は驚く。
忍者かお前は……。

「今日は町を見て回ろうよ!」
「話はどうなったんだよ?」
「一時休戦、だって兄さん全然納得してくれないんだもん」

こういう時、二人とも頑固だからな……。

「で、ハデイ! お金ちょうだい!」
「は?」

何言い出すんだこいつ……。

「私の取り分！せっかくだから自由に見て回りたいの！」
「あ、そういうことか」

合点がいった。

「ほら、じゃあお前の取り分、1500G^{ゴールド}」

「……少ない？」

「全員同額だ、少ないのは貯蓄に回してるからだって」

最低宿代だけでも持つておかないとまずいからな……。

「うん、じゃあ夜には戻るから！」

「変な奴について行ったりするなよ？」

「むー、子供じゃないんだから！」

いや、お前ならアメとかにつられてさらわれそうだし……。

「アメなんかじゃつられないよ……！……チヨコだと迷うけど……」
「迷うな……！」

成人近くせにお菓子につられるなよ……。

「分かったって！それじゃ行ってきまーす……！」
「行ってらっしゃい」

元気よく酒場を飛び出していくメリスに、一応言っておく。

「……で、お前はどうすんだよ？グリー」

「……ハデイくんは、依頼受けたいのかい？」

「そりゃあな、報酬良いし」

「……………」

少し黙っていたが、グリーは小さくため息をついた。

「多数決なら僕の負けだね……………」

「一人でも納得しないなら依頼は受けねえよ。」

もちろん、ちゃんとした理由があれば、だけどな」

俺達はずっとそうやってきたんだ。

……………まあ、金欠時とかは例外だけど。

「とりあえず、せつかくだから町を見て回ろう。」

そうすりゃ考えも変わるかもしれないし」

「……………この町に愛着がわく、とか？」

いや、そこまでとはいわないけど……………。

「……………そうだね、せつかく大きな町に来たんだから、観光ぐらいゆ

っくりしようか」

「おう！あ、おやじ！俺達の部屋取っておいてくれ」

「応おやじに言うっておく。」

部屋取られて今日野宿とか嫌だからな……………。

「同じ部屋でいいな？レイラもそう言っていたが」

「ああ！」

……いつ言ったんだ？手続きした時か？

「夜までには戻るから。」

「……あ、昼飯どうするかな……」

「それじゃ、昼飯の分の金は返そうか？」

「あ、頼む」

見た目によらず、気が利くな。

「ほれ、三人で600Gだ^{ゴルド}」

おやじから金を受け取って、ふと思う。

「……メリスの分は……、ん、会ったら渡せばいいか。
会えなくても、一応1500G渡したから大丈夫だろ^{ゴルド}」

少し心配だけどな……。

「よし！じゃあハデイくん！

今から僕が町中駆け回ってメリスを捜……」

「そこまでしなくていいだろ……。」

「ってか、さつき少しケンカっぽかったけど、大丈夫か？」

俺の言葉を聞いて、グリーはハツとなる。

「ケンカっぽかった……？」

「ま、まさかメリス、僕に気を使って一人で行ったのか！？」

「……くっ！メリスに気を使わせてしまうなんて……！」

「……いや、それは知らないけど……」

「確か、『夜には戻るから』と言っていた……！」

夜まではお互いに頭を冷やそうということか!？」

「落ち着け!!」

頭を抱えてなんか変な妄想を始めるグリーの肩をつかみ、揺する。

落ち着けっつーか、正気に戻れ!

「よし!! 僕は夜までに全力で頭を冷やすぞ!!」

「………… おやじ、冷蔵庫持ってきてくれ」

「ハデイくん!? 冷蔵庫に入れられたら全身凍ってしまっよ!？」

よし、正気に戻った。

「そんじゃ、行ってくるな」

「おっ」

おやじに一声かけて、俺達は酒場を出た。

さてと、何から見て回るかな…………。

くサイドアウツく

ハディとグリーが出て行き、酒場の中はおやじとイアだけになった。

「……それで、ランディア中将、何か話があったのでは？」

「あ、そうでした！」

イアは思い出したように手を打った。

「現在依頼を受けている冒険者の数を確認したいのですが……」

「ああ、はい」

おやじはゴソゴソと紙を取り出した。

「……先ほど依頼を受けたレイラを合わせて、45名です」

「……そうですか……」

イアはそれを聞き、少し顔をしかめた。

「依頼を受けにきた冒険者は300名ほどいたんですが、……『ジエナルドラゴン』ですからね。」

実際に依頼を受ける度胸がある奴は少ないです」

この町に来た冒険者は、どうやら『報酬の良い仕事がある』、とだけ聞いて来たらしく、依頼内容を聞いたら、ほとんどの奴は怖気づいてしまった。

「……無理もありません……」

イアは小さく呟く。

「『ジエネラルドラゴン』が親玉の群れは、通り道に存在する町や村を全て滅ぼしてしまうといえます。」

……怖がるのも無理ありません」

「……『魔塔』らしからぬ台詞ですな」

イアはフツと笑う。

「大丈夫ですよ。」

……この町は、絶対に守ってみせますから！」

イアはにっこり笑ってそう言うと、おやじにぺこりと頭を下げ、酒場から出て行った……。

第8話 賛成と反対（後書き）

なんだかまたギャグが少ないですね……。

次回はもう少しギャグやお笑いを入れたいです。

第9話 束の間の休息と決意

「……………なあ、グリー……………」

「ん？なんだい？」

酒場から出た俺達は、とりあえずチョコレート町を見て回っていたのだが……………。

「いや、『なんだい？』じゃなくて……………」

「ハデイくん、声マネ似ていないよ？」

「それはどうでもいいから……………！」

俺はグリーが持っているものをにらみつける。

「町中で堂々とエロ本を読むなああああ！！！」

……………そう、グリーは堂々とエロ本を読みながら歩いていたのだ。
ブックカバーも何もつけずに。

「ははは、何を言ってるんだいハデイくん。

エロ本は紳士のたしなみだよ？」

「紳士は人前でエロ本なんか読まねえ！！！」

せめて隠せ！！さつきから道行く人々の視線が痛いんだよ！！

「それはハデイくんが大声を出したからじゃないか？」

「その前からだ！！そしてごく自然に心を読むな！！」

メリスだけじゃなく、グリーにまで……。

「ハデイくん顔に出やすいからね」

「……っつーか、普通に会話が成り立ってるんだけど……」

顔に出やすいとかそういうレベルじゃないだろ。

完全に心読まれてるぞ……。

「それよりハデイくん、早くメリスを捜さないと！」

「あ？別に昼飯代渡す必要ないだろ、夜また集まってから渡せば……」

……

「何を言ってるんだい！？」

グリーが大きな声を上げる、エロ本を持ったまま。

「いや、メリスには1500Gユーロ渡してあるんだから……」

「ハデイくん！！」

メリスはそれっぽっちのお金、あつという間に使ってしまうに決まっているだろう！！」

「おいおいグリー、いくらメリスでも……」

そんなに使うわけない……と言いかけて、口ごもる。

この町に来る前、お菓子が有名だと、メリスはうれしそうに言っていた……。

周りの店を見る限り、確かにお菓子の店が多い、見た所かなり良心的な値段だ。

……だが、メリスなら凄まじい量のお菓子をたいらげ、さらに昼飯、その後におやつをも食べかねない……！

「……確かに、メリスなら……」

足りなくなるかもしれない……いや、絶対に足りなくなる！

あいつは一食だけで1500Gコールドぐらい、余裕で使い切る奴だ！！質じゃなく、量で……！

「ほら！早く捜さないと……！」

「お、おう」

と、捜し始めようとする、………が。

………待てよ？

「いや、金が足りなくなっただとしても、自業自得じゃ？」

1500Gコールドあれば、一食とおやつ、それに少しぐらいなら、みゃげなんかも買えるはずだ。

それが足りなくなるってのは、要するに使い過ぎ。
つまりは自業自得だ。

「ハデイくん!!なんてひどいことを……」

「グリー、お前『金に関してはメリスを甘やかさない』って言うてたよな?」

「うっ……け、けど!!」

「まあ、確かに心配だけだよ。」

いくらメリスでも、少しは大切に使うだろ……たぶん」

グリーが本気で心配そうな顔をしている……。
正直な所、俺も少し心配だが……。

……大丈夫だよな?メリス……。

くメリスサイドく

「助かったよ〜！レイラ！」

「ったく……」

レイラは呆れたように声を出す。

「残金500Gコールドしかねえのに、1000Gコールドの買い物するなんての

私達は、あるお菓子屋さんの中にいる。

おいしそうなお菓子ばかりだから、つい買い過ぎちゃって……。

「ごめんね、後でちゃんと返すから！」

「お〜、いつでもいいぜ」

レイラはそう言って、小さなチョコレートを口に放り込む。

今は店の中にあるテーブルで、お菓子を食べながら二人で話してる。

「でも、お菓子が好きなんでちょっと意外、レイラもやっぱり女の子なんだね〜！」

「『やっぱり』ってなんだコレ」

レイラが顔をしかめて言う。

おっと、女を否定するようなことは、禁句だったよね。

「え〜と……ほら、レイラって言動が男の子っぽいから！」

「別に男でも菓子好きはいくらでもいるだろ。」

……え〜と、ってなんだよ

うん、うまくごまかせない……。

「でも、そんなにいっぱい買う人は、あんまりいないんじゃない？」

私は机の上に置いてある袋を見る。

私の袋ほどじゃないけど、その袋は大きくふくらんでいた。

「まあ、そうかもな」

レイラはそう言うと、次は袋からロールケーキを取り出し、素手で豪快に食べ始める。

私は机の上にあったメニューが目にとまり、それを見始めた。
お菓子屋さんだけど、スイーツ全般も注文できるみたい。

「……………わ、このパフェおいしそう……………」

メニューの中にあった『ジャンボチョコパフェ』を見て、思わず呟く。

……………でも、450Gロール下かあ……………。

買えないことはないけど、そうしたら50Gロール下しか残らない……………。

お昼ご飯もまだだし……………。

あきらめかけたそのとき、視線を感じて、レイラの方を見る。

「……うん！ありがとう！」
「待て、まだ何も言ってるねえ」
「え、だって、今『おごってやるつか？』って顔してたよ？」

私がそういうと、レイラは驚いた顔をする。

「……ハデイが心読まれる理由が分かった気がする……」
「？」

レイラは小さくため息をつく。

「んで、どのパフェだ？」
「あ、この『ジャンボチョコパフェ』！」
「ん、すみませーん！ジャンボチョコパフェ二つ！」

レイラが店員さんに注文をする。

……あれ？二つ？

「ひょっとして、レイラも食べるの？」
「おう、うまそうだからな」

レイラは中身のなくなったロールケーキの袋を大きな袋に戻していた。

「にしても、お前プライドとかねーの？」

「え？」

「いや、年下におごられるのって普通嫌がりそうじゃね？」

少なくとも俺は嫌だ、とレイラは言う。

「え、だって、誘われたらちゃんと食べなきゃ！」

ほら！『据え膳食わぬは男の恥！』って言うし！！

「待てメリス！いろいろとおかしい！！」

え？おかしい？

「どこか間違ってた？」

「むしろ、あってる所が全くねえ！誰に教わったんだそれ！？」

「兄さん」

「妹に何教えてんだよ……」

レイラは呆れた顔で呟く。

……ひょっとして……。

「ごめん、おごってもらって悪かったかな……？」

「いや、そういうんじゃないよ。」

おごるって……言っただけでねえけど、おごることにしたのは俺だし

レイラは笑って言った。

「ただ気になっただけだし、別に否定する気もねえぜ？」

年下からおごられちゃいけない、なんて決まりねえしな」

そう言っつて、ニツ、と笑う。

レイラっつてよくこっついう笑い方するよね。

「お待たせしました。

ジャンボチョコパフェでございます」

数分後、店員さんがジャンボチョコパフェを持ってきた。

おいしそう〜!!

「いったただつきまーす!」

「いただきます」

ちゃんと手を合わせてから、ジャンボチョコパフェを食べ始める。

「おいしー!!」

「うん、うまいなこれ!」

これならいくらでも食べられるね!

あ、そうだ。

私はとりあえず半分ぐらい食べて、一旦手を止める。

「ねえ、レ」

「ちよっと待て!〜!早い早い!〜!」

レイラが私のパフェを見て、驚いていた。

「どうしたの？」

「早すぎるだろ食うのー！！」

そのパフェ今来たばっかだろ！？」

「え、おいしくって、つい……」

「いや、味の問題じゃねえだろー！！」

見ると、レイラはまだ二口ぐらいしか食べていなかった。

「レイラって意外とゆっくり食べるんだね」

「……いや、どっちかっつーと、食べるの早い方なんだが……」

レイラはとりあえずスプーンを置く。

「まあいいや……、んで、何？」

「あ、うん」

さっき私が話しかけようとしてたことに、気づいてたみたい。

「レイラは依頼、受けるんだよね？」

「っつーか、もう受けたっての、手続きも済んだしな。」

「……お前らはどうなったんだ？」

依頼を受けるかどうかでもめたの、

レイラも聞いてたんだっけ……。

「まだ決まってるない。」

兄さんがどうしても納得してくれなくて……」

「おいおい……」

「一応、明日の朝までに決めるように言われてるんだけど……」

それまでに、なんとか兄さんを説得しなくちゃ……！！

「……まあ、俺がどうこう言えることじゃねえんだけどよ」

レイラは手を頭の後ろで組んで、言う。

「俺としては、お前らにも受けて欲しいけどな」

「え？」

「味方は多い方がいいだろ？」

それに、俺は一人だから誰かと組まなきゃいけねえんだよ。せつかくだし、お前らと組んでみてえ」

レイラはまたニツ、と笑ってそう言った。

「本当！？」

「おう、……何だよ、俺じゃ不満か？」

「全然！！……でも、レイラクラス級のクラスなのに、私達でいいの？」

もつと強い人達と組んでももらえそうだけど……。

「あのなあ……、例えクラスC級でもこんなガキと組む物好き、そんなにいねえんだよ。

……強い奴は特にな」

そっか、年齢で判断されちゃうんだ……。

「お前らだって、俺の実力まだ知らねえだろ」

「え？C級クラスなんだから、すつごく強いんでしょ？」
「すつごく、って何だよ」

レイラが呆れたように言う。

「とにかく、レイラがそう言ってくれたからには、絶対に兄さんを説得して見せるからねー!!」
「おう、頼むぜ」

とりあえず、腹が減っては戦はできぬ!!

私は残りのパフェを勢いよく食べ始めた。

「……………あんま食うと太るぞ？」
「大丈夫！私太らない体質だから!!」
「……………確かに、栄養が全部そこに行ってるんじゃないの？」

レイラはそう言って、私の胸をしげしげと見る。

「せ、セクハラだよレイラ!!」
「なんでだよ、俺女だぞ」

真っ赤になって胸を隠す私に、レイラは呆れたように言う。

「お前それを武器に誘惑すれば、一気に恋愛成就できんじゃないの？」
「っ!?!?」

レイラはニヤつきながら言う。

うっ…、何でレイラ気づいたんだろう…。

「ってか、なんであいつ気づかねえんだろーな、今朝話したけど、全く気づいてなかったぞ。」

お前ももっとアプローチしたらどうだよ？」

「も、もっっ、いいでしょ、別に!!」

私はそう言って、またパフェを食べ始める。

………そういえば、ハディと兄さんは何してるのかな………？

くハディサイドく

「ん、本当につまいな、この町のお菓子」
「うん」

俺達は適当にお菓子を買い食いしながら、いろいろな店を見ていた。

「……ん」

俺はある店に目が留まる。

それは……。

「武器屋……」

ここはけっこう大きい町だし、今使ってるのよりも良い剣が売ってるだろうけど……。

……金がねえ。

まあいいが、今の剣まだ十分使えるし……。

……ただ、ドラゴン相手となると心許ないけどな……。

そう考えていた俺を、グリーは横目で見ていた……。

「なんだかんだで、だいぶ買っちゃまったな……」

俺が買ったお菓子の総額は800G、取り分の半分以上をお菓子に使っちゃった……。

俺、そこまでお菓子好きじゃないんだけど、それでもこの町では、ついつい買っちゃまう……。

……メリス、大丈夫か……？

俺達はとりあえず、小さな公園のベンチに座って、お菓子を食べていた。

「……………ハデイくん」

ドーナツを食べていたグリーンが話しかけてきた。

「依頼のことなんだけど……」

「……………おう」

「僕は、やっぱり反対だよ……」

「……………グリーン」

俺はお菓子を食べる手を止めて、グリーンを見る。

「確かに魔物の大群が相手だし、危険なのは分かるけどよ。

……………こっちにだって、強力な味方があるんだし……」

「『星の賢者』かい？」

『星の賢者』……………ランディアさんのことだ。

ないんじゃない……。

「魔法使いの弱点は知ってるよね？」

「……スピード、だよな？」

魔法は、強い。

剣や銃火器よりも威力が高い魔法なんていくらでもある。

だが、『集中』、『詠唱』と、発動するまでに時間がかかる。

「いくら『魔塔』でも、魔法使いなんだ。

魔力が高ければ強い魔法を短時間で発動させることもできるけど、それだと、どうしても威力が低くなる」

そういや、特に『集中』にかかる時間は、使い手の魔力や経験次第なんだっけ。

『魔塔』であるランディアさんなら、短い『集中』で強力な魔法を使えるだろうけど、やっぱり『集中』は長くやった方が、魔法の威力は高いよな……。

「要するに、相手を足止めしてくれる人がいた方がいいんだよ」

「……じゃあ、冒険者達の役目は……」

「『殲滅』ではなく、『時間稼ぎ』……だろうね」

………時間稼ぎ、か。

ん？

「いや、そっちの方が助かるんじゃないか？
無理に倒せって言われるより」

強い魔物が相手なら、倒すより時間稼ぎの方が断然楽だし、安全だ
ろ。

つてか、これ、
いつも俺達がやってる戦法とかなり似てるぞ……。

「時間稼ぎが不満なわけじゃないよ。」

……問題は、その後だ」

「……その後？」
「……『魔塔』が時間をかけて溜めた魔法……、とんでもなく強力
なものだろうね。」

……それこそ、辺りの景色が一変するぐらいに」

グリーは少し皮肉っぽく言う。

……なんとなく、

グリーの言いたいことが分かってきた……。

「つまり……、ランディアさんが冒険者達ごと、魔物を攻撃するか
もしれない……、って言いたいのか？」

……そんな人には見えなかったけどな」

「僕もそう思うよ。」

……なんたって、メリスの憧れの人だからね」

俺の指摘に、グリーはあっさり同意した。

「……でもね、巻き込まれる可能性は、ゼロじゃない。」

……そして、万が一巻き込まれたら……ただじゃ、済まない」

グリーは、目を鋭くする。

……なるほど、確かにな……。

「でも、だからって……」

「分かってないのか？ハディくん」

グリーはため息をつく。

「一番巻き込まれる可能性が高いのは、君だよ」

「！」

「魔法使いのメリスはもちろん、僕だって銃を使っただから、魔物から離れて戦える。」

……でも、剣士の君はそうはいかない」

「……………」

「まあ、君が大ケガをしても、僕は構わないんだけど……」
「冗談だよな？」

俺は思わず顔を引きつらせる。

……何かグリーの顔に、『ハディくんがいなくなれば、僕とメリスは二人きりに！』とか書いてあるように見えるけど、きっと気のせいだ、うん、そうに違いない。

「だって、君がいなくなれば僕とメリスは二人きりになれるだろう？」

うわ！言いやがった！！

「……でもね……」

グリーは、フツと切なげな顔をする。

「メリスの悲しむ顔は、見たくないからね……」
「まあ、そりゃ仲間が大ケガすりゃな」

普通悲しむだろ、『構わない』とか言う奴はおかしい。

「……………」

グリーはなぜかため息をつく。

「とういうわけで、僕は依頼を受けるのは反……………」
「ようするに、だ」

俺はグリーのセリフをさえぎる。

「俺がランディアさんの魔法に、巻き込まれなきゃいいんだろ？」

話を聞く限り、グリーが一番恐れているのは、魔物の軍団ではなく、ランディアさんの方みたいだ。

「……………あのね、ハディくん。
そんな簡単に……………」

「そもそもランディアさんは、俺を巻き込もうとなんてしないだろ。それに、グリー気づいてないのか？」

グリーは疑問符を浮かべる。

「グリーが言った戦い方は、いつも俺達がやってるやり方と、ほとんど同じだろ」

剣士が魔物を足止めして、その間に魔法使いが魔法の準備をする。
俺達はずっとやってきた戦い方だ。

「俺はいつつメリスが準備してる間魔物を足止めして、準備が整ったらずくに退いてる。」

俺がメリスの魔法に巻き込まれたこと、今までにあったか？」
「……………」

一度だつてないはずだ。
少なくとも、冒険者として旅に出てからは。

「……………だけど、それとは規模が違い過ぎるよ。
乱闘にでもなつたら……………」

「そうなつたら、当然ランディアさんだつて気をつけるだろうし、規模の大きい魔法を使う時は味方を下がらせるだろ。」

さつきグリーも言つてたように、なんたつて、メリスの憧れの人なんだ」

そんな人を恐れるのは、間違つてるだろ。

「ついでに、あの人軍人だろ？」

しかも『中将』、戦闘のプロだ。

そんな人が、『魔法で味方を巻き込む』なんてへまするか？」

ランディアさんは、味方なんだ。

「……………はあ」

グリーは、大きくため息をつく。

「まさか、ハディくんに言い負かされるなんてね……………」
「……………」

それじゃ……………!!

「……………反対を撤回するよ。依頼、受けよう」

自分の意見を否定されたのに、
その時のグリーは、どこかすがすがしい顔をしていた……………。

第9話 束の間の休息と決意（後書き）

あゝ、ギャグ多めを目指したんですが、後半ほとんどギャグないですね。

……まあ、話の内容的に仕方ありませんが……。

次回はまだ休息なので、今のうちに入れられる所でギャグを入れます。

第10話 合流と最後の晩餐？

「んじゃ、話もまとまったことだし……昼メシでも食うか」
「だね」

公園の時計を見ると、12時半を指していた。
ちやうど腹も減ってきたしな。

「……メリス、大丈夫かな……」

「だ、大丈夫ろ。……たぶん」

そこまでお菓子好きじゃない俺でも大量にお菓子を買ってしまった
この町……。

……お菓子好きなメリスは一体どれだけ買ったのか……。

………やっぱ、大丈夫じゃないかも。

「あ！ハデイ！兄さん！」

「お、メリス……に、レイラ？」

飲食店を捜していたら、メリスと、なぜか一緒にいるレイラに会った。

……メリス、そんなに手を振らなくても見えてるから。

「えへへ、途中でレイラに会ったから、一緒にお菓子食べてたんだ

」！」

「……ほお、んで？」

「？」

俺の質問に、メリスは首をかしげる。

「どんだけ金使ったんだ？」

まさかもうなくなっていたりしないだろうな？」

「そんなわけないじゃん！！」

ほら！あと800Gゴルド残ってるよ！！」

「な、何い！！？」

つてことは、こいつ700Gゴルドしか使わなかったのか！？

あ、ありえねえ！！俺ですら800Gゴルドも使っちゃったのに！！

「すごいねメリス！！僕は感動したよ！！」

「えへへー！！」

「……そうだな、悪かったメリス。
てつきりお前はお菓子を買いまくってるかと思ってた」
「もー、ひどいよハディ！」

正直、昼メシ分の金は残ってないと思ってたんだけど……。
メリスも、金の節約ぐらいはできるようになったってことか……。

「……あゝ、感動してる所わりいんだけど……」
「ん？どうした、レイラ」

レイラが頭をかきながら言った。

「メリス、俺から2000Gゴールドほど借りて、全部菓子に使ったぞ」
「レ、レイラ！ー！」

………はい？

思わず敬語になっちまった。

「……………は？2000……………コールドG……………？」

「おう、そこからさらに自分の金も使って……………」

「レイラ！言わないで！お願い！！」

ペラペラと白状するレイラを、メリスが必死で止めようとする。

……………ほう？

「……………メ・リ・ス？」

「わ、ハ、ハデイ？」

「なんだか、全身から黒いオーラが出てるよ！？」

「そーか、そーか……………それが意味するものは、何だと思っ？」

「に、兄さん助けて！！」

「ハデイがいつになく本気で怒ってる！！」

「……………ごめん、メリス。今回はかりは……………」

「兄さん！？やだ、見捨てないで！！」

「……………メリス？」

「え……………」

俺はおびえるメリスに、にっこりと笑いかけた……………。

「……………覚悟はいいな？」

「本当は最初のパフェだけのつもりだったんだけどよ。」

「チョコクッキーを捨てられた子犬みたいな目で見てたから、つい

……」

「甘すぎるだろお前!!」

ほほをかくレイラに、ハデイが言う。

「う、うう……ひどいよレイラ……黙ってくれって言ったのに…

…」

「んなこと言ってるねえ!!」

「……そうだっけ?」

おいメリス、勝手に事実をねつ造するな。

「いや、本当は黙ってるつもりだったんだけどよ。」

メリスの得意げな態度にイラッときた

「レイラひどい!!」

「あゝ、なるほどな」

「ハデイ!? 納得しちゃうの!?!」

「大丈夫だよメリス!

「どれだけメリスが僕達を欺あざむき、騙し、利用したとしても、僕はメリスの味方だ!!」

「兄さん! 私そこまでやってないよ!?!」

おゝ、珍しくメリスがツツコミになってるな。

「そう思うならハデイもツツコミやってよ! 私ポケるから!!」

「よーしわかった、がんばるぞー」

「落ち着けハデイ!! ツツコミに剣を使ったらメリスが死ぬ!!」

「いや、さすがに冗談だけど」

レイラに言われて、剣の柄から手を離す。

「まあとにかく、これにこりて人から大金借りたりするなよ？例え知り合いでも」

「うん……ごめん」

しゅん、と気を落とすメリス。

……まあ、分かったんならいいか。

「まあいいじゃないか。

借りたお金は依頼の報酬で返せば、ね」

「うん！……え？」

依頼の報酬、と聞いて、メリスがきょとんとした顔になる。

「に、兄さん……？」

「とりあえず、昼メシ行こう、メリス達もまだだよな？」

「おう、つつつても、菓子だいぶ食ったからそんなに腹減ってねーけど」

メリスはもちろんだけど、レイラもそんなにお腹は減ってないみたいだな……。

「ハデイ！私ラーメンの特盛が食べたい！！」

「お前菓子2000G分食ったんだよな！？」

ゴールド

また腹壊すぞ!?

「大丈夫!!甘い物は別腹だから!!」

「先に別腹を使うなよ……」。

「……まあ、そこまで言うなら好きにすりゃいいけど……」

俺はそう言って、サイフから金を取り出す。

「ほれ、200G^{ユルテ}、昼メシ代だ」

「少ないよ!？」

「そりゃ、酒場の昼メシはめちゃくちや安いからな。足りなかつたら自分の取り分から出せ」

さすがに200G^{ユルテ}じゃまともに食えないからな……。

「分かった……」。

「じゃあ、さっそくラーメン屋搜そう!!」

「……あるのか?」

俺は周りを見渡してみる。

お菓子屋、雑貨屋、食料店、後は軽食もある喫茶店ぐらいしかないぞ……。

「こんな大きな町なんだから!

搜せば一つくらいあるって!!」

「んじゃ、搜してみるか」

とりあえず全員で搜してみることにした。

甘いものばっか食べたから、ラーメンとか食いたくなるのも分かるしな。

「あつた!!!」

「早っ!?!」

意外とあっさり見つかったな!!

「ほら、あそこ!」

「お、本当だ。」

……なんか、めちゃくちゃ浮いてるな……」

メリスが指差した方を見ると、きれいなお菓子屋やおしゃれな喫茶店に囲まれて、小さなラーメン屋があった。

「気にしない気にしない!お邪魔ー!」

「お邪魔します、だろ」

前も言い間違えてたよな、こいつ。

「おう!?!いらっしやい!?!」

店に入ると、店長らしき大男がこちらを向く。

「何名様だ!!?」

「よ、四人!!」

「四名か!!よし、そのカウンターでいいか!!?」

「いいよ!!!!」

「メリス、張り合わなくていいから」

店長の大声に、メリスも負けじと声を張り上げる。

「はあ、はあ………水下さい」

「あいよ!!!!」

店長が水とメニューを持ってくる。

……この人ホントでけーな。

身長180cmのグリーよりでかいぞ………2m超えてるんじゃないか………?

「ん、普通のラーメンが300Gコールドか、結構安いな」

「そうだね、僕はそれにしよう」

「俺もそれでいいや、メリスとレイラは?」

「俺もそれでいいぜ、さすがに大盛食う余裕はねえ」

「ん、メリスは?」

「………」

「メリス?」

メリスがメニューの一点を凝視している。

「ハデイ、これ!!」
「ん?.....ああ」

メリスが指差したところには、『大食い勝負!!超特盛ラーメン!君は30分以内に食べることが出来るか!?』と、書かれていた。

たまにある、食べ切れたらタダだけど、残したら罰金5000Gとゴルドか、そういうのか。

.....まあ、メリスなら余裕.....、いやでも、こいつお菓子大量に食べてるんだよな?

そんなに大量に食べたら、また前みたいに腹壊すんじゃない.....。

「完食したら賞金1万Gだゴルドって!!」
「行けメリス!!ぶちかましてやれ!!」

「何を!？」

というわけで注文決定。

「ラーメン三つと大食い勝負をお願いします!」

「おう!10分待つてな!」

店長はそういうと、店の奥へと歩いていく。

んじゃ、その間に……。

「話の続きをするか」

「?話つて、何の?」

きれいさっぱり忘れてやがる……。

「依頼の話だよ、メリス」

「依頼?……あつ!」

本当にきれいさっぱり忘れてたのかよ……。

「そういやさつき、グリーンが『依頼の報酬』って言ったな。

お前依頼には反対だったんじゃねえの?」

「そうだったけど、反対を撤回したんだ。

……ハデイくんに言い負かされてね」

グリーンは小さく笑ってそう言った。

「そうなの!?ハデイすつごーい!」

「意外とやるじゃねえか」

女性陣が称賛してくれる。

……なんか、少し照れくさいな。

「ハデイ、絶対兄さんより頭悪いのに、頭悪くても言い負かせる」とつてあるんだね!!」

「はっはっは、表に出やがれコノヤロウ」

「よしハデイくん、僕が代わりに相手になろう!」

「待てグリー!銃は卑怯だぞ!!」

店の中で普通に銃を出すな!!

「あ、そうだ」

そんな俺達をしり目に、レイラが言った。

「ちよつといいか?」

「ん?」

「依頼のことだけだよ、俺一人だから誰かと組まなきゃいけないんだ。」

「……お前らのところに入れてくれねえか?」

「え……?」

レイラって確か、C級クラス冒険者だったよな?

「そりゃ大歓迎だけど……いいのか?」

もっと強い奴らと組んだ方が……」

「ああ、メリスには言ったけど、俺みたいながキと組んでくれる奴、あんまりいねえんだよ」

ああ、歳で判断されちまうのか。

「んじゃ、明日はよろしくな、レイラ」

「おう、よろしくな！」

俺が差し出した手を、レイラがグッと握る。

前から思ってたけど、こいつとは気が合いそうだな。

「ラーメンお待ち!!!」

店長が三つのラーメンをおぼんに乗せて持ってきた。

……………え？

「ちよっ……………でかつ!？」

ラーメンの器が普通より一回りでけえ!？

「具も結構多いね……………、食べきれるかな……………」

「安心して兄さん!余ったら私が食べるから!!」

「お前、今から大食い勝負するって忘れてないか……………」

「はい、超特盛ラーメンお待ち！！！！」

早っ！？

10分でラーメン三つと超特盛ラーメン作ったのか！？

「待った！！なんだそのラーメン！？」

俺達のラーメンの器より、さらに二回りほど大きいラーメンが運ばれてきた。

しかも具が異常に多い、器からあふれてるぞ！！

「わぁ！おいしそう〜！！！」

「のんきなこと言ってる場合か！？」

いくらメリスでも食べきれるのかこれ！？

「おいハデイ」

「ん？何だよレイラ」

「残したら罰金一万Gゴールドだつてよ」

「何iiiiiiiiiiii！！？」

ちよっ、待て！！

そんなに払ったら貯蓄がなくなる！！

「それじゃあお嬢ちゃん、準備はいいか！！？」

「いいよ！！！！」

見ると、すでにメリスは箸を、店長はストップウォッチを構えてい

た。

「よーい…………ドオン!!!」

店長のどなり声と同時にストップウォッチが押され、大食い勝負が始まった…………。

「ごちそう様…………!!!」

メリスが、スープまで飲みほしたどんぶりを机に置く。
俺達はそれを、啞然とした顔で見ている……。

「じゅ……………15分……………」

さすがの店長も、開いた口がふさがらないようだ。

……………あのラーメン、絶対メリスの胃よりでかかったと思うんだけど……………。
……………どうやって食ったんだこいつ……………。

「あゝ、お腹いっぱい！しあわせ……………」

そりゃあ、あれ食って腹いっぱいにならないのは、大型のドラゴンぐらいだろ……………。

「かつ……………」

声の方を見ると、店長の体がワナワナと震えていた。

……………おい、なんかいちゃもんつける気か？

「感動した……………！！！！！！」

……………は？

「感動したぞ！！まさか……まさかウチの自慢の超特盛ラーメンが、こんなお嬢ちゃんに破られるなんて！！」

……そりゃあ想像もつかなかっただろうしな……。

「賞金の一万Gだ！！」

お嬢ちゃん、今度はお嬢ちゃん用の特別最強ラーメンを用意しておくから、また来てくれ！！！」

「わーい、ありがとう！！」

店長がメリスに、大銀貨（一枚1000G）^{ゴールド}を10枚渡す。

「はい！ハデイ！」

「？」

と、メリスが何故か大銀貨を五枚、差し出してきた。

「ほら、前に私、勝手に貯蓄からお金出しちゃったでしょ？」

「……ああ」

覚えてたのか、勝手に5000G^{ゴールド}のブローチ買ったこと。

「だから、はい！」

「……いや、別にいいって」

「え？」

「結構前のことだしな、時効だ時効。」

これから気をつけてくれればな」

「そ、そう……?」

「つーか、その金はメリスが手に入れたものだからな。それを取り上げるようなマネはしたくないし……。」

「それじゃ、レイラ! はい、2000G!^{「コルネ」}」

「なんだ、早かったな。」

「俺は別に返すのいつでもいいんだけど」

「だったら早い方がいいでしょ? はい!」

「……メリスって節約とかは苦手だけど、金の貸し借りなんかはしっかりしてるよな。」

「まあ、グリーの教育の賜物、か?」

「ねえ、みんなラーメンのびちやうよ?」

「メリスが、俺達のラーメンを見ながら言う。」

「……しまった。」

「メリスの食べっぷりを見るあまり、すっかり忘れてた……。」

「それじゃ、また来てくんない!!」

「うん!!それじゃ!!」

「だから、張り合わなくていいっての……」

一時間半後、俺達はなんとかラーメンを食べきり、ラーメン屋を後にした。

……グリーは結局半分ぐらいしか食べられなくて、残りはメリスが食べてたけど。

「だって、一時間以上待ってたら、小腹がすいちゃって」

「消化早すぎるだろ!!」

本当にこいつの胃袋は人の域を超えてやがる……。

「んで、これからどうする？」

「さすがにもう菓子は腹に入らねーぞ」

「私は大丈夫だよ!!」

「お前だけだ!!」

まだ食う気がこいつは!?

「うん……それじゃあ適当に歩きながら、雑貨屋とかお土産屋に

行こうか」

「そうだな」

とりあえず、俺達は日が暮れるまで、この町を楽しんでおくことにした。

……別に、これが最後だなんて、思っていない。

絶対に、無事にこの町を守りきってやる!!

そのためにも、今はこの町を楽しんでおこう……。

……朝、グリーが言った言葉を思い出す。

『この町に愛着がわく』

……愛着なんて呼べるほどのものじゃないけど、これだけ楽しませてくれるこの町に、恩返しぐらい、しないと……

「サイドアウト」

日も落ちた午後六時……、チョコレート町のホテルの一室で、イア・ランディアは資料をながめていた。

……その顔は、決して穏やかではない。

「……………」

「コンコン……」

「あ、はい!!」

「失礼します」

イアが鍵を開けると、そこには銀髪の男が立っていた。

「あ、ロギさん」

「中将、作戦の打ち合わせに参りました」

「はい、どうぞ入って下さい」

無防備に部屋に入れようとするイアに、

銀髪の男、ロギ・シルムは心の中で呆れていた。

「……………失礼します」

ため息をつきたくなる気持ちを抑え、中に入る。

「では、早速ですが、まず敵の情報から……………」

「あの」

資料を取り出そうとするロギを、イアが言葉でさえぎる。

「何か？」

「……………二人の時ぐらい、敬語はなしにして下さい」

「……………」

ロギは、次は隠さずため息をついた。

「全く、いい加減に自分の地位を自覚したらどうだ？イア」

「でも、ロギさんも『准将』じゃないですか……………」

「お前は『中将』だろう？二階級の差は大きい」

ロギは目の前の幼馴染に、容赦のない言い方をする。

勘違いする人がいるかもしれないが、この二人は恋人ではない。

同じ故郷で育った、いわゆる幼馴染であり、歳も近いので親しい間柄だった。

「話を戻すぞ。」

敵の情報だが、魔物の総数は215匹。

危険度C以上の魔物が70匹ほどいるらしい」

「……………」
「ジェネラルドラゴンは群れの最後部に確認できたそうだ。」

「……まあ、ジェネラルドラゴンを討つた所で止まるものでもない。予定通り、魔物の群れは殲滅する」

「……………はい」

「……………それで、冒険者はどの程度集まったんだ？」

ロギの質問に、イアは浮かない顔で答える。

「……………45名、です」

「……………何？」

「おかしいな、確かこの町の宿がほとんど埋まるほど、冒険者が集まってきたと聞いたんだが……………」

「依頼の詳しい内容を知らずに来た人が大半だったようです。」

「……………その人達は、明日の早朝には、この町から避難するでしょう」

「……………」

「……………臆病者共が……………」

イアの話に、ロギは心の中で舌打ちする。

「何百人も集まってきたくせに、実際に依頼を受けたのはたった45人なのだ。」

「……………そういう意味では、この45人は、度胸だけはある、ということか。」

「……………まあ、ほとんどは力が伴っていないだろうがな」

「ロギさん、そんな言い方……………」

「……………イア」

眉をひそめるイアに、ロギは言った。

「明日の作戦、白兵戦では俺が先陣を切るう」

「え？」

「弱い者が前に出た所で、死ぬだけだ。」

ジェネラルドラゴンに立ち向かう度胸のある奴らならば……無駄死にさせるには、惜しい」

ロギの言葉に、イアは微笑む。

「……何だ」

「いえ、それでは細かい作戦の確認を……」

と、イアが言いかけたところで、
備え付けの電話が鳴りだした。

「構わない」

「すみません」

イアは一言断ってから、電話に出る。

「はい、イアですが……あ、マウロさん、……え、本当ですか？」

イアはうれしそうに声を上げる。

「はい、では！」

「……どうした？」

イアが電話を切ったのを見て、ロギが声をかける。

「ロギさん……」

イアはロギに、うれしそうに話した。

「三名、追加です！」

それを聞いて、ロギも、フツと笑みをこぼした。

「……足手まといにはならないのだろうな？」

「ええつと……、D級クラスが二人と、『魔導師ウィザード』が一人です」

「……とんだ命知らずだな……」

ロギは呆れた様子を見せた。

「大丈夫です！私もがんばりますから！」

「……前には出るな。」

いくらお前でも魔法使い、役割は後方支援だろう。

万が一お前にケガでもされたら、俺が隊長に殺される」

「……すみません」

しょんぼりと気を落とすイアを見て、ロギは付け加える。

「……だが、お前の力がなければ、こちら側に大きな被害がでるだろうな」

「ひ、被害なんて、出させません！！」

イアが目つきを鋭くして、言う。

「……そうだな。」

お前には、それができるだけの力がある」

「……ふふっ、任せて下さい」

イアはロギに向かって、にっこりと笑う。

「では、作戦の詳細を確認する」

「はい！」

二人は机の上に資料を広げ、

明日の作戦について話し合いを始めた……。

第10話 合流と最後の晩餐？（後書き）

サブタイトル失敗しました。

夕食じゃなくて昼食ですね……。

またまた新キャラが出てきましたが、

こいつの紹介も、イアと同じくこの章が終わってからです。

次回はついに、戦闘開始……予定です！

第11話 星の賢者と銀狼

「ん……」

翌日、俺はいつもよりかなり早く目が覚めた。

「……まだ六時じゃねーか……」

結局、昨日は散々町を探索した後、夜メシ食って、風呂入って寝たんだよな……。

緊張で眠れないかと思っただけど……逆に早く目が覚めちゃった……。周りをみると、メリスもグリーもまだ寝てる……。

……ん？

俺は一つだけ、空になったベッドを見つけた。

「レイラ……?」

「お、いた」

「ん？」

酒場の外に出てみると、レイラが筋トレをしていた。

「おっす、なんだ早いなハデイ」

「おう、なんか緊張で目が覚めちまって……何やってんだ？」
「筋トレ」

いや、それは分かるけど。

「物心ついたときから日課なんだよ。」

「毎日起きたら筋トレとランニングをするのかな」

「今日もやるのか。」

「……戦闘始まったら、嫌でも動かなきゃならないのに」
「だからだ」

レイラは俺の方を向いて、ニッと笑う。

「これやらねえと、逆に体調を崩しちゃう」
「……………」

13歳でC級^{クラス}。

こいつ、ただの『天才』じゃないみたいだな…………。

「でも、あんまりやりすぎると疲れるぞ」

「分かってるって、だから今日は軽く200回しかやってねえ」

……………ん？

「……………なんだって？」

「あ？だから、腕立ても腹筋もスクワットも200回しかやってねえって。」

……………やっぱりちょっと物足りないけどな」

いや、何言ってるんだこいつ!？

「んじゃ、ランニング行ってくる!」

「……………どんだけ走る気だ？」

「適当」

適当、って…………。

「朝飯までには戻るからな!」

「え、おい……」

俺の言葉も聞かず、レイラは走って行った……。

……速っ！？もう角曲がつていったぞ！！

あいつ、あの速度で走り続ける気か……！？

……いや、まさかな……。

「おはよー」

「おっ、メリスにしちゃ早いな」

起きたメリスは、眠そうに目をこすっている。

現在時刻7時20分だ。

メリスはいつも八時以降に起きるからな……。

「やっぱりメリスもあまり眠れなかったのかい？」

グリーがメリスに問いかける。

ちなみにグリーはいつも七時前後に起きるが、今日は六時半ごろに起きていた。

「……あれ、レイラは？」

「ランニングに行った。……一時間以上前に」

レイラはまだ帰ってきてない。

「……どこまで行ったんだか……」。

「そういえば昨日僕が起きたとき、ちょうどレイラさんが戻ってきたんだけど……」

「……だけど？」

「なんか、五時半から七時前まで走ってたって……」

「は！？ちよつと待て、俺が起きた時あいついたよな！？」

「だから、七時前まで走ってたんだって。」

その後、髪を結び直してたときじゃなかったかな？

ハデイくんが起きたのは「

……そういやそんな覚えあるな。

と、そこで部屋の扉が開いた。

「ただいまーっ」と

「おかえりー！どこ行ってたのレイラ？」

「いや、ランニングだって今俺が言っただろ……。でも遅かったな」

「わりの、ちよっと調子に乗って走りすぎた」

……そう言う割に、あんまり息乱れてないけど。

「朝飯行こうぜ、走ったら腹減った」

「あ、私もお腹ペコペコー！！」

メリスがレイラに同意し、大きく手を上げる。

……手を上げる必要はないだろ。

朝食……、やっぱりみんな緊張しているのか、あんまり食べてないな……。

あのメリスですら、今日はご飯一杯しかおかわりをしなかった。グリーに至っては、半分以上残している。

「……グリー、食べないと力出ないぞ」

「分かってるんだけどね……」

グリーが苦笑する。

「……にしても、なんか客少くないか？」

酒場の食堂には、俺達の他に数人しか人がいない。

そついや、昨日の夜は酔っ払いの声が聞こえなかったな……。

「そりゃあそつだよ。」

依頼を受けない冒険者は昨日、もしくは今日の早朝にでもこの町を離れてるだろうから」

グリーは人の少ない食堂を見渡す。

「なんでも、昨日この宿に泊まった人、僕達を含めて10人いるかどうかからしいよ」

「おいおい、二日前俺らが来た時は満室だったよな？」

最後の一室をレイラと俺らで泊まったんだよな。

「そついや、依頼受けた奴つてどれぐらいいるんだろうな？」

「最低でも100人はいるだろ。」

ほとんどの宿屋が満室になるぐらい人がいたわけだし……」

「48人だ」

俺とレイラが話していると、
横から声が聞こえた。
酒場のおやじだ。

「おやじ……。つて、え？」

「だから、依頼を受けたのは48人だ。

お前さんらを含めてな」

おやじは重々しくため息をつく。

「よ……48人!？」

「ど、どういうことだ!？」

驚く俺達。……いや。

『お、おい!今の聞いたか!？』

『たった48人!？相手は200匹以上の魔物の大群なんだろ!？』

どうやら、今の会話が聞こえていたらしく、食堂にいる他の冒険者達もざわつき始める。

……だが、一人だけ驚いていない奴がいた。

「……当然、かもね」

グリーだ。

「グ、グリー？」

「何を驚いてるんだい、ハディくん。

相手は200匹を超える魔物の大群。

こちらの味方は『星の賢者』に精鋭部隊『ソレイユ』。

それこそ人の域を超える『戦争』が起こるんだ。

……逃げ出すのが普通だよ」

「そういうことだな、……おい」

おやじは動揺している俺達を一瞥する。

「……依頼を取り消すか？」

「あ、いや……」

「取り消すなら早めにしろ。

どうせ今から町を出ても間に合わないからな、11時までには避難所に行った方がいいぞ」

おやじは俺達が食べ終わった食器を片づけながら言う。

「……………」

……何を悩んでるんだ、俺は……！！

昨日、決心したはずなのに……！！

「……依頼の取り消し？何言ってるんだ？」

「レ、レイラ……？」

レイラがおやじをにらみつけている。

その目は、『ふざけんな』と訴えていた。

「200匹を超える魔物の大群？『星の賢者』に『ソレイユ』？

……そんなの、昨日教えてもらっただろうが」

レイラはイラだった口調で言う。

……そうだ。

確かに昨日おやじとランディアさんに教えてもらった。

「確かにそいつらがどれだけ危険なのかとか、俺はよく分かってなかったし、味方がたった48人つてのも想定外だったけどよ。

だからって一度受けた依頼を、そう簡単に取り消すわけねーだろうが！」

レイラはそう言って、バン！と机を叩く。

「ビビって依頼を取り消すなんざ、冒険者が一番やっちゃいけないことだろー！」

……なめんじゃねーよ」

レイラ、本気で怒ってるな……。
なんかプライドに触ったのか……？

……でも、そっだよな……。

どの道、もうこの町から逃げる時間なんてない。
俺達にできるのは、避難所にこもっておびえているか、正面切って
魔物と戦うか、のどちらかだ。

……俺達は、冒険者なんだ。
選ぶ道は、決まってる！！

「……二人は、どうする？」

ちょうど、グリーンが聞いて来た。

……二人は、か。

グリーンはこのことを予想してたんだな。

……だから昨日あれだけ反対したんだろうし、今、おやじから聞か
されてもそんなに驚かなかったんだろ。

……グリーンはもう覚悟を決めてる。

例え俺とメリスが依頼をやめるって言いだしても、今度はグリーンが
反対するか、もしくは一人でも受けようとするだろ。

「と、取り消したりしないよ!!」

メリスが声を張り上げる。

「だ、大丈夫だよ!! イアさんがいるんだもん!!」

……って言う割には、少し震えてるけど。

やっぱり少しは怖いんだよな、俺だってそうだ。

「……ハデイくんは？」

グリーはメリスに微笑んだ後、俺に顔を向ける。

「……言わなくても分かってるだろ？」

「まあね。……でも、一応聞かせてくれないか？」

「取り消さない。」

依頼は受けて、絶対に成功させる!!」

俺がそう言つと、グリーはうれしそうに微笑んだ。

「……そういうわけだ」

俺はおやじの方へ顔を向ける。

すると、ちょうどどこっちを見ていたおやじと目が合った。

「悪かったな、動揺しちゃって。」

……でも、俺達は依頼を受けるからな!」

キッ、とおやじをにらむ。

別におやじに怒ってるわけじゃない。

俺達が情けなかったから、おやじも依頼を取り消さないか聞いたんだろうし……。

でも、俺達は本気でこの依頼をやるってこと、おやじに認めてもらわないとな！

「……良い目だ」

しばらくして、おやじは小さくそう言った。

「悪かったな、動揺させるようなこと言って。」

……どうせ味方の人数なんてすぐ分かるからな、集まってから騒がれるより、前もって知らせた方がいいかと思ったんだ」

「……俺らが依頼取り消したらどうするつもりだったんだ？
ただでさえ少ない味方が、余計減っちゃうぞ」

レイラがおやじに不満をぶつける。

「そんな臆病者は逃げ出した方がいいだろ。」

……ランディア中將も言ってただろう。

『今回は一般兵を出してない』って、あれは犠牲者を出さないためだ。

今回の依頼、ランディア中將は、一人の犠牲者も出さないつもりなんだ」

おやじは小さくため息をつく。

……まあ、甘い、よな。

200匹以上の魔物相手に、一人の犠牲者も出さないなんて。

「本気でそうするつもりなんだろうね。」

……『ソレイユ』から10人も連れてきてるんだから」

グリーは苦笑しながら言う。

……『ソレイユ』って、そんなにすごいのか……？

あんまりよく知らないけど……。

「それで、お前さんらはどうするんだ？」

おやじは、食堂にいる他の冒険者達に問いかける。

冒険者達は、やっぱり少し悩んだようだったけど。

『や、やるに決まってるだろー!!』

『そうだ！ビビって依頼を取り消すなんて、冒険者が一番やっちゃいけないことだ！！俺達をなめんな！！』
『子供に任せて逃げるなんてできるか！！』

……おい二人目、レイラの言葉をパクるなよ。
三人目、『子供』ってのはレイラのことか？
いや、あの人見た目三十代ぐらいだし、ひよっとして俺やメリスも『子供』扱いされてるのか？

「……そうか」

おやじはうれしそうな顔をしていた。

「前にも言ったが、集合は13時に町の広場だ！遅れるなよ……！」
『おう……！』

現在時刻は八時過ぎ、だ。

……あと、だいたい五時間って所か……。

「お、来てる来てる」

「そりゃあ、もうすぐ時間だからね……」

12時50分。

俺達が広場に来た時には、もう40人近い冒険者が集まっていた。

ふと、広場の周りを見ると、シャッターが下ろされ、無人になっている店が、いくつもあった。

「……………」

「ねえ、ハデイ……………」

俺がそれらを見てみると、メリスが話しかけてきた。

「この依頼が終わったら、みんなでおいしいお菓子食べようね!!」

そう言うメリスは、顔は笑っていたが、体は少し震えていた……………。

……………無理しやがって。

「おう!……………食い過ぎんなよ?」

俺は少し笑ってそう言ってやった。

敵は、200匹を超える魔物の大群。
それに対して、こちらは『ソレイユ』を含めてもたったの51人。

……怖くないといえばウソになる。
でも、もう俺に迷いはない!!

「……時間だね」

グリーが時計を見て言う。
時計の針は、13時を指していた。

「あっ、ハデイ、あれ！」

メリスに言われた方を見ると、冒険者達から少し離れたところに、赤いマントをはおった人が三人立っていた。

一人はランディアさん。

その両側に、銀髪の男と茶髪の男が立っている。

ランディアさんは手に杖を持っていて、銀髪の男は左肩から右腰に巨大な剣をかけている。

茶髪の男は特に目立った武器は持ってないな。

「あの赤いマント、確か『ソレイユ』の証だろ」

レイラがそう呟く。

なるほど、この三人が『殲滅』に参加する『ソレイユ』の人達なのか。

ランディアさんはゆっくりと冒険者達に近づき、声を張り上げた。

「冒険者の皆様！

依頼を受け、ここに集まってきて下さったこと、心より感謝いたします！！」

冒険者達はランディアさんの方へ顔を向ける。

「私はスイーツ王国軍、魔法部隊隊長、イア・ランディアと申します！」

この作戦において、皆様の指揮を執らせていただきます!!」
手を胸に当てて、名乗る。

その瞬間、一部の冒険者達がざわめき出した。

「どうしたんだ？」

「……『星の賢者』の外見を知らなかった人がいるのかもね」

ああ、確かに知らなかったら驚くよな。

『星の賢者』がこんなに若い女だなんて。

……いやでも、ランディアさんってけっこう外見も有名なんじゃない？
少し前に雑誌に載ってたし……。

と、俺が思っていた、その時だった。

「ふざけんな!!!!」

いきなり、広場に怒声が響き渡る。

と、冒険者達の中から、その声を発した男が、ズカズカとランディアさんの前まで出てきた。

右腕に銅の腕輪をつけてるから、C級クラス冒険者か。

「俺は『星の賢者』が参加するって聞いたからこの依頼を受けたんだぞ!？」

何なんだ、この小娘は!？」

「ですから、私が『星の賢者』です」

ランディアさんは、自分より30cm以上も背の高い屈強な男を前に、凜とした態度を保っている。

「こんな小娘に命を預けるってのか!？話が違う!！」

『星の賢者』に任せて俺達は適当に逃げてりゃ大金がもらえるんじゃないかねえのかよ!？」

……何言ってるんだこいつ……。

そりゃ、強い奴を頼るのは間違ってるけど、強い奴だけに任せるってのはおかしいだろ!

……C級クラスにも、こんな奴いるんだな……。

めっちゃくちゃなことをわめき散らす男を、ランディアさんはキツと睨みつける。

「……すみませんが、依頼内容に不満があるようでしたら今すぐ依

頼を降りて下さい。

今ならまだ避難所も開いていますので

「んだとてめえ!!」

怒った男はランディアさんにつかみかかろうとした。

その瞬間……ほんの一瞬、ランディアさんの周りが茶色く光った気がした……。

「い、いててて……!!は、放しやがれ!!」

……あれ？

気が付いたら、男は銀髪の男に手をひねられ、押さえつけられていた。

「……貴様のような奴の手など借りたくもない。

今すぐ消えろ」

銀髪の男は、狼のような殺気を出しながら、男を睨みつける。

「くそっ……お、覚えてる!!」

解放された男は、なんともマヌケな捨て台詞を残して、広場から立ち去った。

……どこのザコだよ。

「ありがとうございます、ロギさん」

「……」

ロギ、と呼ばれた男は、

ランディアさんを無視し、元いた場所へと歩く。

と、ランディアさんとすれ違った所で、何か耳打ちをした。

「! ……すみません」

ランディアさんは、少し気まずそうな顔でそう呟いた。

「なんか、すごかったな……」。

一瞬でC級冒険者クラスを押さえ込むなんて……」

「……流石は『銀狼』ってところだね」

……銀狼?

「あの銀髪の人、たぶん『銀狼』ロギ・シルムだよ。

スイーツ王国軍、騎士部隊副隊長」

「マジで!?!」

確かランディアさんが魔法部隊隊長だったよな!?!
それに加えて騎士部隊副隊長も来てんのか!?!

「……ところで、どーすんだよ?この騒ぎ……」

レイラは、未だにざわついている周りの冒険者達を見る。
あのザコ男が散々わめいたせいだ。

「……皆様!?!」

そこに、ランディアさんの声が聞こえた。
ざわつきが収まり、冒険者達はランディアさんの方を見る。

「お騒がせしてしまい、申し訳ありませんでした!

……これから作戦の詳細を説明いたしますが、その前に……」

ランディアさんは、少しうつむいた後、冒険者達をまっすぐ見た。

「……もし、先ほどの方と同じことを思っている人がいるのでしたら、今からでも、依頼を取り消して下さってかまいません」

静まっていた冒険者達が、またざわつき始める。

……いや、ランディアさん!?!

これ以上味方が減ったらやばいんじゃない?!!

「……しかし、もしもこの中に、迷っている方がいらっしやるのならば、心配はいりません!!」

ランディアさんは、冒険者達に呼びかける。

「私達と共に、魔物達に立ち向かって下さる方には、絶対の勝利をお約束します!!」

冒険者達のざわつきが収まる。

「私達『ソレイユ』と冒険者の皆様が力を合わせれば、魔物の大群など、敵ではありません!!」

力強い言葉に、

冒険者達の顔から不安の色が消えていく……。

「この町を襲う魔物達を、共に討ち滅ぼしましょう!!」

『うおおおおおおおおおおおー!!!!』

辺り一帯に、冒険者達の声が響き渡った。

もちろん、俺も声を張り上げたけどな。

『そうだ!! 魔物の大群がなんだってんだ!!』
『やってやるぜ!!!』
『人間様の底力を見せてやる!!』
『精鋭部隊ソレイユ万歳!!』
『俺、この依頼が終わったら結婚するんだ!!』
『よし! お前死んでこい!!』

………なんか最後の方、アホな会話が聞こえた気がするけど、

………気のせいだな。

「それでは、作戦の説明を始めたいと思います」

冒険者達の興奮が収まってきた所で、ランディアさんが説明を始める。

「といつても、大したことではありません。

……まず、魔物達を待ち伏せ、私の魔法で出来る限り数を減らします」

まあ、待ち伏せるなら魔法の準備もできるからな。

「その後は、できるだけ遠距離から魔法で攻撃しつつ、ある程度距離が縮まってしまったら、白兵戦となります」

……魔法だけで全滅させるってのはやっぱり無理だよな。

つてか、それなら俺達じゃないし。

「白兵戦では、できる限り多人数で魔物一匹と戦うようにしてください。」

パーティはすでに組んでいますね？」

そっぴゃ、レイラが酒場のおやじからそんなこと言われてたな。

「白兵戦の先陣は騎士部隊副隊長、『銀狼』ことロギ・シルムが切つて下さいますー!!」

ランディアさんは、斜め後ろに立っている銀髪の男を見て言った。

冒険者達から、おおっ、という歓声上がる。

「……では、皆様。

覚悟はよろしいでしょうか？」

ランディアさんの言葉に、冒険者達の間少し緊張が走る。

「これより、ジエネラルドラゴン及び魔物の群れの殲滅に向かいますー!!」

『おおおおおおおおおおおー!!!!!!!!!!』

俺達も含めた50人の冒険者が一斉に大声を上げる。

覚悟なんて、とっくにできてる。

もちろん死ぬ覚悟なんかじゃない、勝つ覚悟だ!!

「皆様、到着しました！」

現在時刻、16時少し前。

俺達はチヨコレート町から五?程離れた平原に到着した。

俺達の周囲には大きな岩がいくつかあるが、それ以外には、特に障害物は目につかない。

「それではロギさん、後はよろしくお願いします」

「承知しました」

ランディアさんは俺達から30m程離れた場所に立つ。
すると、ランディアさんの周りが、茶色く光り始めた。

……『集中』か。

『集中』の光の色は、使う魔法の属性によって違うんだよな。
茶色って何属性だっけ？

「はい、みんなよく聞けよー」

と、なんだか間の抜けた声が聞こえた。

『ソレイユ』の茶髪の男だ。

「俺は補助部隊のエンジ。」

基本、この辺にいるからケガした奴は来なー？」

……なんか軽そうな人だけど、『ソレイユ』の一員なんだから、すごい人なんだよな……？

「……地響きがするな……」

『銀狼』シルムさんが小さく呟いた。

「貴様ら、もう覚悟はできているな？」

後、20分もしない内に魔物共が見えるだろう」

目を鋭くして、シルムさんが冒険者達に言った。

……覚悟はできてるけど、やっぱり緊張するな……。

「おいおい、何震えてんだ？ハデイ」

「うっせえ！……武者ぶるいだっての」

そっいうレイラはよく平気だな……。

ん？

「おいレイラ、お前武器は？」

「は？今さら何言ってるんだ？」

「俺は武器なんて使わねーよ！」

……素手で戦うのかこいつ！？

いや、そういう奴もいるって聞いたことあるけど……。

「やっぱり、緊張するね。」

……誤射しないようにしないと」

グリーが装填の済んだ銃を持って言う。

……マジで気をつけるよ、怖いから。」

「メリス、敵はたぶん魔獣と竜が中心だと思っから、

基本、魔獣には炎、竜には水の魔法を使ってね」

「う、うん！！」

グリーの助言に、メリスは全力で傾く。

……あんまり緊張しすぎると、『集中』に悪影響あるんじゃないかなかったか？

魔法使いは緊張とも戦わないといけないよな……。

「見えたぞ！！あれだ！！！」

15分後、俺でも分かるぐらいに地響きが強くなったところ、地平線の辺りに、黒い影が現れ始めた。

……魔物の群れだ……！！

冒険者達の間には、大きな緊張が走る……。

魔物の速度なら、後10分もしない内に、ここまで来るだろうからな……！！

冒険者達は岩の前に立ち、それぞれ武器を取り出し始める。

……と、その時だった。

ミシツ……バキツ、バキツ……!!

「な、なんだ!？」

音の方を見ると、ランディアさんの足元から、大地に亀裂が走っていた。

「な、なあ、グリー。」

あれつて、まだ『集中』……だよな？」

「……『星の賢者』が15分間も『集中』してるからね。

あそこにはとてつもない魔力が集束してる……。

大地が割れるぐらい、当然なのかもね」

……どんな魔法使う気だよ、ランディアさん……。

「……………星の中心に存在せし、核のエネルギーよ……………。
……………我は地を治める者なり……………」

間もなく、『詠唱』が始まった。

大地の亀裂がさらに大きくなり、茶色い光も、その輝きを増していく。

「……………地の女神ガイアとの契約の履行を命ず、その姿を我が前に具現せよ……………!!」

突然、ランディアさんの隣に、半透明の……………身長二mぐらいある茶髪の女性が現れる。

その女性……………いや、『女神』は、四、五？離れている場所を走る魔物達に、哀れみの眼差しを向ける。

それは、今からそのモノ達を襲う、『災害』を予兆しているようだった……………。

「……………散り果てる グラス・ギガイア!!!!」

『呪文』と同時に、魔物達の黒い影が、真っ白な光に包まれた……………。

第11話 星の賢者と銀狼（後書き）

今までで一番長くなりました。

二話に分ければよかったですかね……。。

次回から、本格的に戦闘になります！

第12話 魔物の大群とレベル5

「す……げえ……」

思わずそんな言葉が口から出ていた。

俺以外の冒険者たちも、目の前で起きた『災害』にあ然としている。

ランディアさんの魔法によって現れたのは、半径600mにも及ぶ巨大な光の柱。

地から発射されたそれは、上空の雲までも消し飛ばした。

もう、ここから見えるのは……白い煙だけ。

魔物達がいた場所の周辺は、全て焦土と化していた……。

……これ、魔物の三分の一ぐらい消し飛んだんじゃない？

「流石……というべきかな……」

グリーがそんな声を漏らす。

「地属性、基礎魔法レベル5『グラス・ギガイア』……まさかこの目で見える日が来るなんてね……」

「え、き、基礎魔法？今の基礎魔法だったのか！？」

魔法には、大きく分けて基礎魔法と応用魔法がある。

基礎魔法はその名の通り、魔法の基礎として定められたもの。

それに対して、応用魔法は自由に人が作り出した魔法だ。

……まあ、普通はどっかの誰かが作ったのを魔術書なんかで見て習得するけど、すごい人は自分自身でオリジナルのものを作り出すとか。

……だから、てつきり『星の賢者』しか使えないような、オリジナルの応用魔法かと……。

「っていつてもね、基礎魔法のレベル4と5は、人間の力だけじゃ使えないんだよ?」

「あ、聞いたことあるなそれ」

人の力だけで使えるのはレベル3まで、だっけ?

「そう、詳しいことは知らないけど、そのせいでレベル4と5を使える人間なんて滅多にいないんだってさ」

グリーも詳しいことは知らないのか……。

「んー、少し煙も晴れてきたかな」

茶髪の男……エンジさんが、ランディアさんの近くまで歩いて行く。

「そうですね……、エンジさん、お願いします」

「オーケー、まっかせなー!」

言うのが早いか、エンジさんの周りが緑色に光り始める。

「……………我が眼にその姿を映し出せ 十里眼」

数秒後、何か魔法を発動したみたいだけど……………。
特に何も起こってないような……………。

「……………たぶん、遠くを見る魔法だと思うよ」
「遠くを？」

「うん、『千里眼』って聞いたことない？」

「あ、聞いたことあるー！」

メリスが手をあげて返事をする。

……………だから、手をあげる必要ないだろ。

「ようするに千里眼の劣化版、ってところか？」

「まあ、あの魔物達の様子を見るならそれで十分だろうしね」

そついやあの人、補助部隊って言ってたよな。
手当てとかを担当するのかと思ってたけど……………。

「ねえ兄さん、十里ってなに？」

「ん？昔使われてた距離の単位だよ。」

十里は大体39？だね」

「へー！そうなんだ！」

……………おい、そこののんき兄妹。

敵はすぐ近くに来てるんだぞー！？

「ん〜……」

「どうでしたか？」

「……あの魔法を使ったんだ。

残っているのはせいぜい130匹程度だろう」

魔物達の様子を見終えたらしいエンジさんに、『ソレイユ』の二人が話しかける。

「……まずいかもなー……」

「……え？」

「どうしたんだ？」

え？何かあったのか？

『ソレイユ』の様子に、冒険者たちからも不安の表情が浮かぶ。

「いやー、今『十里眼』使って残りの魔物を数えたんだけどー……」

「それは知っている」

「……180匹以上残っててなー……」

「……何？」

え、180匹以上!?

それを聞いて、冒険者たちがざわめき出した。

「数え間違えたんじゃないのか？」

「はっはー、俺に限ってそれはねえなー」

エンジさんは軽快に笑いながら言う。

……なんでこの人こんなに軽いんだ……？

「なら何故……！」

「ジエネラルドラゴンもバカじゃなかったってことだなー」

「……どういうことだ？」

「……『おん』おん』おん』を用意してみたいだなー……」

お、おとり！？

「……成程、待ち伏せを警戒しておんを先に走らせていたのか……！」

「そういうことだなー、本隊はおんのー？ぐらい後ろだ」

魔物の方を見ると……確かに、魔物の黒い影が見える……！

「……何故昨日の時点で気付かなかった？」

「怒るなよー？」

昨日『千里眼』で視た時はおんなんてなかったからなー」

「……町が近づいた今日になってから走らせたのか……」

シルムさんが舌打ちをする。

「……………」

険しい顔をしていたランディアさんが、三？程離れた場所を走る魔

物達を見据え……『集中』を始めた……。

「中将、お待ちください！」

「……もう一度、『グラス・ギガイア』を放ちます……！！！」

「無理です！魔物はすぐそこまで来ています。」

『集中』の間、あなたは無防備になってしまうでしょう！」

「くっ……！！！」

シルムさんの説得に、ランディアさんは『集中』を中断し、悔しそうな顔で魔物達を見る。

その時だった。

「な、何だあれ！？」

冒険者の声がする。

……っ！？

なんか、魔物達から炎やら光の弾やらがこっちに向かってきてるぞ！？

「魔物って遠距離攻撃できるのかよ！？」

「そりゃできる奴もいるだろ！！」

魔法は人間の専売特許じゃねえし、竜は炎吐いたりするからな！
！」

冒険者達は慌てて岩の後ろに隠れる。

……なるほど、このために岩があるこの辺りで待ち伏せたのか。

「イ、イアさん!？」

メリスの声が聞こえて、ランディアさんの方を見ると……、

「な、何やってんだ!？」

『ソレイユ』の二人、ランディアさんとシルムさんは先ほどまでいた場所に立っていた。

そこにいたら魔物の攻撃が当たるぞ!？」

「あー、だーいじょうぶだつて」

後ろから声が聞こえた。

振り向くと、そこはエンジさんがいた。

「だ、大丈夫つて……」

「あの二人は『ソレイユ』の中でも指折りの実力者だからな」。

……まあ、イア中將は少し精神的に未熟な所あるけど、ロギ准將がカバーしてるからな」

「……あなたは隠れてていいのかよ？」

レイラがいぶかしげな目でエンジさんを見る。

「俺は補助部隊だからな、戦闘は専門外だし、そもそも今回の俺の仕事は『敵の偵察』と『味方の治療』だからな」。

「お前らもケガしたら俺の所来いよー？」

なおも軽快な笑みを浮かべるエンジニアさん。

「……だから、なんでこの人こんなに軽いんだ！？」

「地底より岩石の集いと呼ぶ……」

「……え？」

前から、『詠唱』が聞こえた。

「……この声、ランディアさん？」

「我は地を治める者なり……！」

ボゴツ、ボゴオツ……！

ランディアさんの周りに多数の巨大な岩が現れ、くるくると術者の周りを旋回する。

「……打ち砕け ギガイアス！！」

ランディアさんが『呪文』を紡ぐと、多数の岩は魔物達へと向かっていった！

すぐそばに魔物達が放った炎やら光の弾やらが迫っていたが、岩はそれらを吹き飛ばし、魔物達へと向かう。

ドゴ、ドゴゴオオオオオン！！！

一？程先まで迫っていた魔物達に、多数の岩が直撃した。

……今でも数匹ぐらい倒せたんだろうな……。

「……今、ランディアさん五秒ぐらいの『集中』で基礎魔法レベル3使ってたよ……」

「五秒！？」

グリーの言葉に驚いた、ってかビビった。

『ウィザード魔導師』のメリスでも基礎魔法レベル3使うのに三分ぐらい『集中』必要なのに……。

「皆様！！心配はいりません！！」

ランディアさんの言葉に、岩に隠れていた冒険者達が出てきた。

「出発前にも言いましたね？」

私達『ソレイユ』と冒険者の皆様が力を合わせれば、魔物の大群など、敵ではないと！！」

ランディアさんは杖を掲げ、冒険者達に呼びかける。

『そ、そうだ!!俺達には最強の兵士がついてるんだ!!』
『流石は星の賢者!!』

冒険者達から不安の色が消え、一気に士気が上がる!

「魔法使いの方は魔法の準備を!

銃や弓を使う方は射程内に入り次第攻撃を開始!

剣士や戦士の方はいつでも戦闘に入れるよう、武器と心の準備を
しておいて下さい!!」

『おおおおおおおー!!』

ランディアさんの指示が飛ぶ。

冒険者達はその指示に従い、数人は前に出て『集中』を開始、他数
人が銃や弓を構え、残りは魔物達の攻撃に警戒しつつ、武器を構え、
臨戦態勢に入っていた。

「メリス、僕の後ろから出ないようにね」

「う、うん!」

銃を構えたグリーの数歩後ろで、メリスも『集中』を始める。

……その時だった。

「クカカ！カカカカカ！！」

「な、何だ！？」

突然、空から不気味な声が響く。

四枚の羽を持つ緑色のドラゴンが、その羽を高速で動かしながら、冒険者達の前まで降りてきた。

「あれは……！」

グリーの顔が険しくなる。

「ちっ、単身乗り込んでくるとはいい度胸だ！！」

一人の冒険者がそのドラゴンに向かって、剣を振るう！

「クカカカカカ！！」

「なっ！？」

ドラゴンは目にも止まらぬ速さで飛び回り、冒険者の剣をかわす。

ザクツ！！

「ぐあああああ！！！」

ドラゴンの鋭利な爪が、冒険者の左腕に突き刺さる。

「氷よ集え！ フリーズ！！！」

仲間らしき冒険者が、三つの氷の欠片をドラゴンに向かって放つ。

「クカカカカ！」

ドラゴンはそれを余裕でかわし、氷魔法を放った冒険者へと向かっていく！

「させるか!!！」

「レイラ！」

レイラがその間に入り、ドラゴンに向かって殴りかかる。

しかし、ドラゴンはとっさに後ろに下がることでそれをかわす。攻撃をかわされたレイラも後ろに下がり、間合いを取る。

「ちっ！ちよろちよると動き回りやがって!!！」

「レイラさん気をつけて！そいつは『フライドラゴン』！最高時速150？で飛ぶ魔物だ!!！」

「150?!?!？」

それでこんなに早くここまで来れたのか……!!！

「カカカカカ!!！」

「う、うわああああ!!！」

フライドラゴンはさっき腕を刺された冒険者に向かう！

ドオン!!！

それをグリーが銃で狙うが、フライドラゴンは上空へと移動し、か

わす。

「ダメだ、なんとか動きを止めないと……！」

「そんなこと言っただって……！」

「彼の者に重き制裁を グラビディア……！」

ズシャアアツ……！

その瞬間、上空にいたフライドラゴンが、地上へと墜落した。

「ク……ガツ……！」

「な、何だ……！？」

フライドラゴンの体が地面にめりこんでいる。

よくみると、体の周りが黒く光ってるような……。

「……重力を強化する魔法……かな」

「重力……！」

魔法を発動したランディアさんの方を向く。

あの人、重力まで操れんの……！

「ハア……ハア……！よくもやってくれたな……！」

腕を刺された冒険者が、剣を振り上げ、フライドラゴンの首を斬り落とした。

「……一匹で、これかよ……」

「まあ、フライドラゴンは危険度Dの中でもかなり強い方だからね……」

危険度Dか……それでも最後はランディアさんに頼ったしな……。

「大丈夫？」

「あ、ああ、これぐらい、どうってことねえ……」

「無理はいけないな」

エンジさんは冒険者の刺された腕に手を向ける。

数秒、エンジさんの周りが淡い虹色に光る……。

「……ヒール」

刺された所が白い光に包まれ、次の瞬間傷はほとんど治っていた。

「お、おお!!」

「応急処置だけど、痛みはなくなったはず。

ただし、その腕はあんまり使わないようにー、あと、この仕事が終わったらちゃんと医者に行きなー？」

「ありがとよ!!」

冒険者は左腕を軽く回す。

少し動かしすらそうだが、利き腕じゃないみたいだし、そこまで問題はないだろうな。

「治癒魔法か……」

治癒魔法って全部応用魔法だから、使える人多くないんだよな、確か。

「まあ、『ヒール』が一番簡単な部類だけだね。

……それより、ずいぶん近づいてきちゃったよ？」

グリーは魔物の方を見る。

げっ！もう一匹一匹が認識できるぐらい近い！！

距離にしてー？ないんじゃない？！？

「……仕方がないな」

シルムさんは、背負っている剣を固定している器具を外し、その巨大な銀色の剣を引き抜いた。

……なんだあの剣！？刀身2mぐらいあるぞ！！

その様子を見て、ランディアさんは冒険者達に向かって指示を飛ばす。

「皆様ー！これより白兵戦に入ります！

魔法、銃、弓などを使う方は、味方に十分注意して下さいー！」

白兵戦……となると、俺達も行かないとな！

「さーて、ここからが本番だな！」

レイラがグッと両手に力を込める。

すると、レイラの拳からひじま度を白いオーラのようものが纏う。

「え、レ、レイラ？」

「あ？」

それ何……と言おうとした、その時。

「来たぞー!!」

冒険者の声が出た。

前を見ると、二匹の黒い狼の魔獣が迫っている。

「尖兵つて所かな。」

……それでもけっこうな強敵だけどね……!!」

グリーが苦々しく呟く。

やっぱりこいつらも危険度Dとかなのか……!!」

「お、おい、あいつー!!」

冒険者の一人が叫ぶ。

見ると、シルムさんが二匹の魔獣に、一人で向かっていた。

「な、何考えて……!!」

「大丈夫だと思うよ?」

「グリー!?!」

「……あの人は、『銀狼』ロギ・シルムだからね」

「グガアアアアアア!!」

二匹の魔獣がシルムさんに牙を向ける。

シルムさんと魔獣がぶつかり合った、その瞬間。

……二匹の魔獣は、真っ二つになった……。

「は……!!?」

俺は思わず、そんな声を漏らした。

……え、な、何が起きたんだ今!?

斬ったのか!? 剣閃が全く見えなかったぞ!?

「……久しぶりの戦闘だ」

俺が、いや、冒険者ほぼ全員が驚いていることなどももちろん知らず、シルムさんは目の前に近づいている魔物達へと顔を向ける。

「……この『銀狼』、存分に牙を振るわせてもらおうか……!!」
冷たい笑みを浮かべ、『銀狼』ロギ・シルムさんは剣の切っ先を魔物達へと向けた。

第12話 魔物の大群とレベル5（後書き）

サブタイトル『魔物の大群とソレイユ』にした方が良かったような

……。

まあ、今さら言っても仕方ありませんが。

次回も、というか後数話は戦闘が続きます!!

第13話 3 + 1人組と43人の冒険者

「…………『キラールルフ』が一撃なんてね…………」

グリーは真つ二つになった魔物を見て呟いた。

「キラールルフって、あの黒い狼か？」

「うん、…………危険度Dの中位魔獣だよ」

うわ、やっぱり危険度Dだったのか…………！

「それを一瞬で二匹も倒すなんて…………」

「おい、貴様ら」

『！！』

前から声がした、…………シルムさんだ。

「何をしている？…………敵はもう目の前だ、さっさと前に出ろ」

シルムさんは顔を魔物達へ向けたまま、静かに言い放つ。

「…………へっ…………！」

それを聞き、一人の冒険者がシルムさんの横まで出た。

「レ、レイラー!!」

「……………」

「そんなこと言われたら、前に出るしかねえじゃねーか!!」

レイラはパキパキと白いオーラをまとった拳を鳴らし、ニッと笑う。

……………つて、見てる場合じゃないな、俺も行かないと!!

「……………貴様、それは……………」

「あ?」

シルムさんはレイラの拳を見て、少し驚いた顔をする。

「……………いや」

シルムさんは無表情に戻ると、魔物達へ視線を戻す。

「真っ先に前出るなんて、威勢がいいな坊主!!」

二人の後ろには、十人近くの冒険者がいた。

その中の一人の冒険者が……、

……レイラに言ったんだよな？今の……。

……ってことは……。

ゴッ……！

「いつてえー!!?」

「……口に気いつける。『坊主』じゃねえ『小娘』だ!!」
「いや、その言い方はどうなんだよ……ってか殴るなよ!!」

今げんこつですごい音したぞ……。

まあ、俺の時よりはマシだろうけど。

「ああ？戦闘前だからちゃんと手加減したぞ」

「それでもすごい音したけどな……」

「んなことより、遅えぞお前ら！」

レイラは俺と、俺の後ろにいるメリス、グリーを見て言う。

「お前が早いんだろ……」

「レイラ、一番に飛び出したもんね〜！」

「やる気は十分みたいだね」

……ん？

「つておい、メリスとグリーは前に出ていいのか？」

「えー？なに言ってるのハデイ！」

これから乱闘になるんだから、前に出ないと魔法使えないよ！」

「味方に当てるなんて論外だからね」

あゝ、そりゃそうか。

よく見ると魔法使いっばい人達もけっこう前に出てきてる。

いつの間にかほとんどの人が前に出てるな……。

「……死ぬ自信がある者は私のそばにいる。

命ぐらいは守ってやる」

「けっ！何寝言言ってるんだ？」

シルムさんの言葉に、レイラが顔をしかめる。

「……まあ、ついてこられたら、だが」

その瞬間、シルムさんは魔物達の方へと走り出した。

って速っ！？あんなでかい武器持ってんのに！！

「って、だから見てる場合じゃないな！俺達も行くぞ！！」

「おう！！」

「うん！！」

「無理はしないようにね？」

俺の声に、三人が応えてくれる。

……………行くぞ！！

「うわっ!?!」

魔物達の方へと向かっていった俺達が最初に相対したのは……。

「キラールルフ……!!」

さっきシルムさんが真つ二つにした、黒い狼……!

こうして近くで見るとでかいな、2m以上あるぞ……!!

「グガアアアアア!!」

「っ!!」

キラールルフが右前足を振り上げるのを見て、俺は慌ててその場から飛び退く。

その直後、地面が音を立てて砕けた。

「危ねえ……な!!」

少し地面にめりこんでいるキラールルフの前足に、思いっきり剣を振り下ろす!

「ガアアッ!!」

「うおっ!!」

一太刀を受けたキラールルフは前足を振り回す。

危ない危ない、剣が弾き飛ばされそうだった……！

ってか、ぶった斬るつもりだったのに、半分も切れなかったな……！！

「うおりゃあっ……！」

「グガッ!?!」

レイラがキラールーフに飛びかかり、顔面を殴りつける。

って、キラールーフが数m吹っ飛んだ!?!

さらにレイラはキラールーフの方を向き、手の平を向かい合わせる。すると、その間に白いオーラが集まり、直径20cm程の球体ができあがった。

「闘気弾!?!」

レイラの叫びと共に、その白い球体がキラールーフへと放たれる。

ドッパアーン!!

「いつ!?!」

球体はキラールーフにぶつかった瞬間破裂し、さらにキラールーフは吹き飛ぶ。

「大気より火の集いを呼ぶ……燃える フレイア!!」

そこにメリスが炎を放ち、キラールーフを火だるまにした。

「……………うん、倒せたみたいだね」

グリーが黒焦げになったキラールーフを見て、言う。

「三人がかりでこれか……………」

「そりゃあね、『ソレイユ』の人達と同じようにやるのは無理だよ」

「とつと次行こうぜ、敵はまだまだいるんだ！」

「おう……………なあ、レイラ」

「ん？」

「さっきから気になってたんだけど……………それ、何？」

俺はレイラの拳からひじまでを包む、白いオーラのようなものを見て言う。

「これか？」

「……………ねえレイラ、それもしかして……………『魔力』？」

「おっ正解!さすが『魔導師』!」

レイラはグイツと白いオーラをまとった腕を突き出す。

「こつやって魔力をまとうことで筋力を上げてんだよ」

「き、筋力を上げる？」

「……そんなことできるのかい？」

「実際こうしていると殴る力が強くなるんだ。」

「さっきキラールーフとやらを吹っ飛ばしただろ？」

「……確かに、あんなでかい魔物を殴り飛ばすなんて、人間業じゃないよな……。」

「ほら、いいから次行こうぜ！」

と、その時。

「……！」
「……！」

レイラの後ろから、奇妙な声が聞こえた。

見ると、木製の杖を持った紫色のドラゴンが宙に浮いている。

大きさ1.5 m程のドラゴンは、周りが赤く光っていた……！！

「『マジドラゴン』……！」

「レイラ……！よけて……！」

「……！」

そのドラゴンが何かを叫ぶと、直径20 cm程の炎が現れ、レイラへと放たれる。

あれは……『フレイ』!?

「レイラ!」

「しゃらくせえ!」

レイラは振り向きざまに左腕を振り、向かってきた炎を拳で振り払った!

「レ、レイラ!」

何でよけないんだ!?
炎を手で直接触ったりしたら……!!

ドオンッ!!

銃声と同時に、マジドラゴンがよろめく。

「ハデイくん!」

「お、おう!」

その隙をつき、俺はマジドラゴンに迫り、斬りかかった!

ガギインー！

「ちいつー！」

首に剣を振り下ろすが、固い鱗のせいで斬ることができない。

「闘気弾！」

「な！？」

俺の後ろから飛んできた白い球体が直撃し、マージドラゴンが吹き飛ばされる。

「おい！動いて大丈夫……」

「大丈夫に決まってるだろうが」

俺はレイラの左手を見て……目を疑った。

「……無傷……！？」

炎を直接手で振り払ったのに、レイラの手には、火傷の一つもなかった。

「な、なんで……」

「ハデイくん！後ろー！」

振り向くと、起き上がったマージドラゴンが『集中』をしていた。

「水よ集え！アクア！」

バツシャアアア！！

メリスの水魔法が勢いよくマジドラゴンに直撃し、その衝撃でマジドラゴンの『集中』が途切れる。

「ハデイくん！鱗のない腹を狙って！！」

「おう！！」

俺は一気にマジドラゴンに迫り、腹に剣を突き立て、さらに斬り上げる！

…………… ちょっと残酷だけど、しょうがないよな。

俺は絶命したマジドラゴンを見て、そう思った。

「……………で？レイラ、その左手……………」

「だから大丈夫だったの」

「いや、なんで大丈夫なんだよ！？」

さっきマジドラゴンの炎魔法を素手で振り払っただろ！？
無傷なんてありえないぞ！！

「……魔力をまとってたから、だね？」

「そういうことだ！」

ま、魔力……？

「魔力つてのは『魔法の元となる力』だろ？」

だから魔力をまとった拳なら、魔法とも張り合えんだよ！

無傷なのはあの炎魔法より、俺のまとってる魔力の方が強かったからだ」

「そんなことできるのか！？」

驚いたな……！

魔法に対抗できるのは魔法とか兵器だけかと思ってた。

「でも、魔力をまとうなんてめっちゃ難しいよ？」

「え？」

メリスはうーん、と小さくうなる。

「『集中』見れば分かるでしょ？」

少しでも気が散ったら集まった魔力は散っちゃう」

「魔力をまとって、しかもその状態を維持しながら戦うなんて……
よっぽど魔力のコントロールが上手くて、さらに集中力を維持する
気力がないとできっこないね」

「あいにく俺にはそんな気力ねーよ、ただ単に慣れてるだけだ。

……つつつても、ずっとまとってるのはやっぱり無理だけだな」

レイラが軽く腕を振ると、白いオーラは一瞬で散り、消える。

「これで倒したの二体目だね！兄さん、今のも危険度Dなの？」

「うん、マジドラゴンは危険度Dの下位竜だよ。」

「……でも、今までは多対一だからなんとかあったけど、敵も大量にいるんだから、気をつけないと……」

『うわあああああ！！！』

「なんだ!?!」

「あ、あれ!?!」

メリスの指差した方を見ると、十数m程離れた場所で、二人の冒険者が三匹の魔物に囲まれていた。

「ちっ！急ぐぞ!?!」

しかし、俺達が走り出したちょうどその時、大きな緑色の竜が腕を振り上げた。

くそっ！！間に合わ……。

ドオオンッ！！

竜の頭に、銃弾が直撃する。

鱗があるせいで大したダメージはないだろうけど、その際に俺達は二人の冒険者の元へ着くことができた。

「加勢する！！」

「あ、ありがてえ！助かった！」

「……あれ？あんたら……」

さっきフライドラゴンと戦った二人だ。

剣士の方は腕を刺されてケガしてたよな……まあ、エンジンさんに治してもらってたけど。

「腕は大丈夫か？」

「けっ！どうってことねえ！」

「おしゃべりはそのぐらいにしてね！」

グリーにしかられる。

そうだ、今魔物に囲まれてるんだった！

「『レックスードラゴン』に『ブレードキャット』……それに『ミドルドラゴン』……!」

グリーが三匹の魔物を見まわして、呟く。

どうやら、体長2mぐらいの緑色の竜が『レックスードラゴン』。しっぽの先と爪に鋭い刃が生えてる体長1mぐらいの……ヒョウ？が『ブレードキャット』。で、さっきグリーが銃弾を当てた、体長3mぐらいの角のある竜が『ミドルドラゴン』か……!

「六対三……だけど、決して有利とはいえないね……!」

グリーが冷や汗をかきながら、苦笑する。

……やっぱりというか、こいつらもけっこう強い魔物なんだな。特にこの『ミドルドラゴン』は……やばそうな気がする。

俺はちょうど目の前で相対している、大きな竜を見る。

その竜は、赤い瞳でこっちを見ていた。

「っ!っぶねえ!」

レイラの声が聞こえた。

見ると、ブレードキャットがレイラに飛びかかり、それをレイラが

よけたみたいだ。

攻撃の隙をつき、レイラがブレードキャットに一撃を叩き込む。
ブレードキャットは吹き飛びながらも体勢を整え、地面に着地した。

「おい！こいつは俺がやるぞ！文句はねえな！？」

「レ、レイラさん！？『ブレードキャット』は危険度Dの中位魔獣だよ！？」

「けっ！知るかっての！！」

レイラは白いオーラを腕にまとい、走り出した。

ブレードキャットも爪を振り上げ、レイラに飛びかかる。

その爪をレイラは横に飛んでかわし、ブレードキャットに殴りかかる。

それをブレードキャットは跳んでかわし、爪を振り下ろす、とレイラはしゃがんでかわし、さらに前に転がって少し距離をとる。

「す、すげえ……！危険度Dの魔物と互角に……！！」

「感心してる場合じゃないよ……！！」

グリーの声にハッとす。

そうだ、後二匹いる！

俺は目の前数mの位置にいるミドルドラゴンと、後ろの方にいるレスサードドラゴンを確認する。

「……………なああんたら、そっちのレスサードドラゴン二人で倒せるか

？」

「ハ、ハディくん!？」

「……おう!!任せろ!!！」

「二対一なら、なんとかか……!!！」

俺の声に、二人の男は不安げながらも応えてくれる。

明らかにこのミドルドラゴンの方がやばそうだからな、この二人に任せるのは無理だろ。

「……全く、正気かい？ハディくん……」

「ん？」

「……ミドルドラゴンは、危険度Cの中位竜だよ？」

「うえっ!!!？」

き、危険度C!？

「……まあ、危険度Cの中では最弱の部類だし、中位竜の中では一番弱いから、絶対無理だとは言わないけどね……」

「……ど、どうするの？ハディ……」

「くっ……!!！」

やばい、危険度Cなんて戦ったことないぞ……!!!

「……グギヤアアアアアア!!!!！」

「っ!!!!！」

ミドルドラゴンが咆哮を發し、俺達三人を一瞥する。

……なんだろう、なんか見下された気がする。

「……メリス、グリー」

「……え？」

「全く……挑発に乗ったわけじゃないよね？」

「違う、……どっちにしろ、こいつの相手は俺達がしないとだめだろ」

レイラは一人で危険度Dの魔物と戦ってる。

二人の冒険者もレッサードラゴンと戦ってる。

……だから、俺達の相手は残ったこいつだ!!

「危険度C……上等だ、やってやる!!」

身長の倍ほどある竜をまっすぐ見据え、俺は剣を握る手に、力を込めた。

第13話 3 + 1人組と43人の冒険者（後書き）

レイラを活躍させすぎた気がします。

……次回は主人公達が活躍します！！

……予定です。

第14話 無茶と無理

（サイドアウト）

「……………キリがないな……………」

『銀狼』ロギ・シルムは、愛剣シルバーファングについた黒い血を振り落とし、呟いた。

彼はすでに20匹近くの魔物を斬り捨てていたが、周りにはまだ大量の魔物がいる。

「……………ん？」

ふと周りを見ると、ロギは五匹の魔物に囲まれていた。魔物達も、一匹では倒せない相手だと理解したらしい。

ロギは小さくため息をつき、剣を下へ向ける。

次の瞬間、魔物達は一斉に、ロギに飛びかかった……………。

「……………銀舞陣」

ロギは魔物達が射程内に入ったことを確認し、その場で体を一回転させる。

剣閃が円を描き、五匹の魔物を一瞬で切り裂いた。

「おー、すげー！すげー！」

魔物が絶命したのを確認し、ロギが簡単に剣の手入れをしていると、パチパチと手を叩きながら、一人の男がやってきた。

「……何故ここにいる？エンジ」

「そーんな怖い顔すんなって！」

俺、岩陰でケガ人を治療してたんだけどなー」

「……それがお前の役目だろう」

「いやなー、よく考えたら動けないような大ケガしてたら岩場まで戻ってこれねーだろー？」

だからちよっくら出張中ー」

「……ならば、少しは戦闘の役にも立つたらどうだ、『魔眼』」

「はっはー、俺戦闘専門外だしなー」

『魔眼』エンジ・アイラーは軽快に笑う。

「……エンジ、中將は今どうしている？」

「おっ？幼馴染が心配かー？」

いいねー青春だねー！20過ぎなのにー」

「……早くしろ」

「はいはい、少し待てよー」

エンジはそういうと、準備に取りかかる。

「……我が眼にその姿を映し出せ 十里眼」

『十里眼』を使い、イアを捜す。
そんな遠くにはいないだろうが、『十里眼』は上から見ることで
きるため、捜しやすい。

「……………あ、発見。

うわ、すごいことになってんなー！」

やはりというか、イアはすぐに見つかった。

……………なぜなら、彼女の周りは凄まじい威力の魔法により大惨事にな
っているからだ。

パツと見ただけでも30匹以上の魔物がイア一人に倒されていた。

「でも、一人も味方を巻き添えにしてない辺り、やっぱり流石だなー」

「何を今さら……………当然だろう」

「はっはー、なんたって『魔塔』様だもんなー」

エンジもロギも、『星の賢者』イア・ランディアの実力は十分に知
っている。

だから二人は、イアのことを尊敬し、信頼していた。

「……………でも、やっぱり頼りきりってのもなんだしなー、少し手伝うか
ー！」

と、丁度いい所に一匹の竜がエンジに向かってきた。

……………時間にして一〜二秒、エンジの周りが淡い虹色に光る。

「……彼の者の動きを封じよ 縛視」

魔法を発動し、その竜を睨む。

その瞬間、竜の動きがピタリと止まり、浮いていた体が地に落ちる。

「はい、じゃあ『銀狼』ちゃん、とどめよろしくー！」

「……」

「おーおい、何その『自分でやれ』って目……？」

俺は補助専門だぜー？」

「……『死眼』を使えばいいだろう」

「はっはー！冗談きついなー。」

この乱闘の中そんなの使ったら味方も死ぬぜー？」

「……全く」

ロギは小さくため息をつき、動けなくなった竜に近づくと、首を斬り落とした。

「そんじゃ、俺は適当にケガ人を治したら岩場に戻るなー」

「ああ、……エンジン」

「んー？」

歩きだそうとしたエンジンを、ロギが呼び止める。

「……一人も死なせるな」

「……はっはー！まっかせなー！」

エンジンは軽快に笑うと、ケガ人を捜して歩き始めた。

「……さて、次はお前か」

ロギは目の前の体長3〜4 mある魔獣を見据える。

……ワイルドキング、危険度Cの上位魔獣だ。
赤い毛並みを持つ狼の魔物……。

「……危険な魔物から、優先して倒さなければな」

ロギはそう呟き、シルバーファングをゆっくりと構えた……。

くハディサイドく

「ハア……ハア……!!」

俺は息を荒げながら、目の前のミドルドラゴンを睨みつける。
ミドルドラゴンも、赤い瞳で俺を睨み返してきた。

「くそっ……、全身鱗なんて反則だろ……!!」

さっき倒したマジドラゴンと違って、ミドルドラゴンは腹も白い鱗で覆われている。

そのせいで、さっきから何回も斬りつけてるのに、大してダメージを与えられない。

「グウウウウウウウ……!!」

ミドルドラゴンはうなり声を発し、大きく息を吸い込み始めた。

「やべっ……!!」

俺は慌ててその場から逃げだす。

ゴオオオオオオツ!!

ミドルドラゴンの口から炎が吐きだされる。

俺はなんとか逃げるのが間に合い、事なきを得た。

……よかった、俺の後ろに誰もいなくて。

「グリー、なんとかこいつを倒す手段ないのか？」

俺が逃げた先にグリーがいたので、グリーが狙われないよう少し距離を取って聞く。

「いくら鱗があっても、全くダメージを受けてないってことはないよ。」

ほら、鱗に傷がついてるでしょ?」

見ると、確かに俺が斬りつけた所には、小さいけど傷がついていた。

「……でも、それだけじゃ倒すのは難しいからね。」

ハデイくん、腹の同じ場所を集中して狙って!」

「お、おう!」

と、少し後ろでメリスの体が赤く光っていることに気づく。

なるほど、そういうことか!

俺はグリーの考えを理解すると、ミドルドラゴンに向かって走る。

「グギヤアアアアアア!」

「うおっと!」

飛んできたミドルドラゴンの腕をなんとかかわし、懐に入って腹を斬りつける!

ガギイイイン!」

……やっぱ、斬るのは無理だよな……。

「ハデイくん!」

グリーの声に、ミドルドラゴンの拳が迫ってきていることに気づく。

「っ!!」

さすがによけることはできず、とっさに剣を盾代わりにして防いだ、
が……。

「うわっ!!」

耐えきれず、俺の体は吹き飛ばされた。

なんとか受け身を取り、もう一度ミドルドラゴンの方を向く。

「まだまだあっ!!」

俺は一気に距離をつめ、さっきと同じ場所を斬りつける。

「グオオオオオオオ!!」

「うおっ!!」

と、ミドルドラゴンはよろめきもせず、そのまま体当たりしてきた。

俺は慌てて身をひるがえし、それをかわす。

「危ない、な!!」

ミドルドラゴンがこっちを向き直った時を狙い、もう一度同じ場所
を斬りつけ、すぐに距離を取る。

……うん、こつこつヒット&アウェイ戦法でいった方がいいな!

「……………グオオオツ!!」
「ん？」

突然ミドルドラゴンは咆哮を上げながら、背中にある羽を大きく広げ、羽ばたき始めた。

「……………っ!？」

少しして、異変に気づく。

こいつ……………風を起こしてる!

初めは大して気にならなかったが、その風はだんだん強くなっていった。

「くっ……………!!」

強風に体をあおられ……………俺に隙ができてしまった。

風が止んだその時、ミドルドラゴンは俺の目の前で腕を振り上げていた。

「しまっ……………」

とっさに体が動かなかった、

やばっ……………!!

ドンッ！ドオンッ！！

俺の右後ろから二発の銃弾が飛んでくる。

銃弾は正確にミドルドラゴンの頭部に当たり、一瞬ミドルドラゴンの動きが止まる。

俺はその隙をつき、腹を斬りつけると、急いで後ろに下がる。

「ナイス、グリー！」

「気をつけなよ」

グリーは銃に弾を装填しながら言う。

「グウウウウウウ……」

ミドルドラゴンはグリーをギロツと睨みつけると、走り出そうとする。

「お前の相手は俺だ！！」

俺はもう一度腹を斬りつけ、グリーとは逆の方向へ走る。

「グギヤアアアアアアア！！」

ミドルドラゴンは大きく咆哮を上げ、腕を俺に向かって振り下ろす。

俺はそれを横に飛んでかわし、ミドルドラゴンの腕を斬りつけ、急いで後ろに跳ぶ。

腹に『ブレイラム』が直撃したミドルドラゴンは、その場にうつずくまる。

「へっ！さすがにあれをくらったらただじゃ……」

「ウウウウウウ……グギヤアアアアアアアアアアアツ！！」

「うえっ！？」

なんと、ミドルドラゴンは大きく咆哮を上げながら、起き上がった！

その目は怒りに満ちていて、俺達三人を睨みつける。

「……大丈夫！かなりダメージは与えたはずだ！あと一息だよ！」

「んなこと言っても……！！」

とりあえず俺がここにいちやメリスとグリーンが危ない。

そう思い、俺が二人から少し離れた、その時。

「グギヤアアアアアアアツ！！」

「っ！？」

ミドルドラゴンは俺には目もくれず、一直線にメリスとグリーンの方へと向かっていった。

「メリス！グリーン！」

二人は慌てて逃げようとするが、ミドルドラゴンの方が早かった。

二人の所まであと数歩、その時……。

「凍れ フリズム!!」

ガキイイーン!!

ミドルドラゴンの右足が凍りつく。

突然足が動かなくなったミドルドラゴンは、その場に倒れる。

「あ、あんた……!!」

氷魔法を使ったのは、レッサードラゴンと戦っていた冒険者の一人だった。

すでにレッサードラゴンは倒せたらしい。

「加勢するぜ!!」

もう一人の冒険者も、少しケガをしていたがそれに構わず、ミドルドラゴンの首へ剣を振り下ろす。

しかし、やはりというか、鱗に弾かれ、斬ることはできない。

「ちっ! さっきの奴は斬れたんだがな!」

「……グオオオオオオオツ!!」

ミドルドラゴンは顔を起こし、右手でその冒険者をつかもうとする。

「アクア！」

そこに、メリスの水魔法が勢いよく放たれ、ミドルドラゴンの顔に直撃した。

『詠唱』を省略したみたいだから大して威力はないが、それでも一瞬動きを止めることはできる。

「おいあんた！一旦下がれ！」

「お、おう！」

俺の声に、慌てて冒険者は後ろに下がる。

「グウウウウウウウ……！！！」

ミドルドラゴンは地面に手をつき、体を起こそうとする。

「……極地より氷の集いを呼ぶ……凍れ フリズム！！！」

冒険者の一人がさっきの氷魔法を、ミドルドラゴンの顔面向かって放つ。

そうか！メリスの魔法でぬれてるから、確実に凍る！！

しかし、ミドルドラゴンは後ろに退き、飛んできた冷気をかわす。

「ちっ！」

「やっぱりそう簡単には倒せないな……」

二人の冒険者がミドルドラゴンを睨みつけた、その時。

「うおりゃあぁっ!!」

「ガッ!!」

ミドルドラゴンは後頭部を殴られ、再び地に伏せる。

「レ、レイラ!!」

「わりーわりー、ちよっくら手こずっちまった」

レイラは多少傷を負ってはいたが、まだまだ動けるようだ。

……つてか、本当にブレードキャット一人で倒したのか!!

「んで、後はこいつだけ、か!？」

レイラはそう言いながら、ミドルドラゴンの頭にアッパーをくらわせる。

さらに宙に浮いた頭と同じ高さまで跳び、顔面にもう一撃をくらわせた!

ミドルドラゴンは後ろに倒れこみ、そのまま動かなくなった……。

「……………レイラ、そいつ全身鱗でおおわれてたけど……………手、大丈夫か……………?」

「あゝ?まあ、やっぱ少し痛いけどな。

これぐねーどってことねえよ」

レイラは右手をパタパタと振りながら答える。

「……一応これで三匹とも倒せた、な……。」

「ふ……。」

俺は気が抜けてしまい、その場に座り込む。

「おいおい、魔物はまだまだいるぜ？」

「少しは休ませろよ……。」

俺はもちろん、メリスやグリー、二人の冒険者も一息ついている。

メリスは『ブレイラム』使ったしな。

「……むしろなんでレイラは全然疲れてないんだ？」

「そうだ、礼を言ってなかったな。

助かったよ、サンキュー」

「ありがとう」

二人の冒険者が頭を下げてきた。

「気にするなって、俺達もさっき助けられたし」

「そーそー、困った時はお互い様だ」

俺とレイラが笑ってそう言った。

……さて、もう少し休んでたいけど、今魔物に襲われたら一たまりもないからな……。

俺が立ちあがった、その時。

「困った時のエンジさんタイムー！」

「エ、エンジさん！？」

突然、どこからともなく『ソレイユ』の一人、エンジさんが現れた。

「はい、じゃあケガ人は集合ー！」

「あ、はい」

エンジさんにそういわれ、俺と冒険者の一人……剣士の方がエンジさんに近づく。

「おーいおい、何してんだー？お譲ちゃんあんたもだぜー？」

「あ？」

エンジさんはレイラの方を見ていう。

「俺は別にケガなんて……」

「はっはー、俺を騙そうなんて10年早いなー。少しだけど、拳を痛めてるだろー？」

「……………」

凶星だったのか、レイラは黙り、エンジさんの方へ歩いて来た。

やっぱり鱗におおわれた竜を殴るのはきつかったみたいだな……。

と、エンジさんの体が、数秒淡い虹色に光る。

「……………ヒールレイン」

白い光が俺達三人に降り注ぎ、傷が消えていった……。

「よし、後がんばってるからサービスなー」

エンジさんはメリスの方を向き、数秒間『集中』をする。

「……………彼の者の失われし力を呼び戻せ マジックリロード」

エンジさんの手から紫色の光が放たれ、メリスを包んだ。

「っー!!……………え、これ……………」

「少しだけ魔力を回復させたぜー」

「これあんまやると俺もきついから、こんぐらいで勘弁なー」

魔力を回復させる魔法!?!……………初めて見た。

「そんじゃー、がんばれよー!」

エンジさんはそういうと、スタスタと歩いて行った。

「……………なんか、変わった人だよな」

「でも、すごい人なのは確かだよ」

グリーはそう言うのと、俺達三人の顔を見る。

「さて、休憩はこれぐらいにしよう」

「……………だな」

「なあお前ら」

二人の冒険者の、剣士の方が話しかけてきた。

「俺達も一緒にいていいか？人数は多い方が安心だしよ」

「それもそうだな……………」

「よっしゃ、俺はワール、ワール・ストングだ」

「俺はリスタル・ラワー、よろしくな」

二人の自己紹介を聞き、俺達四人もそれぞれ自己紹介をする。

「それじゃ……………」

魔物の方へ向かおうとした、その時。

周りが、急に暗くなる。

「え……………？」

上を見ると、俺達の頭上10mぐらいの所に……………巨大なドラゴンがいた。

「な、なんだあれ……………！？」

遠くてよくわからないけど、少なくとも体長4mはある……………！！

「……ジエ、ジェネラル、ドラゴン……!?!」
「っ!?!」

そう呟いたグリーは、顔が真っ青になっていた。

「……ジェネラルドラゴン……!?!」

俺はもう一度、上空にいるドラゴンを見る。

ジェネラルドラゴンはどこか遠くを見ていて、俺達には気づいていないようだった。

「お、おい、やばいだろ!?!」

「みんな!気づかれないうちに逃げ……」

グリーが言いきらないうちに何かに気づき、口を閉ざす。

「そ、そうだな」

さっきのミドルドラゴンも十分無茶だったけど、ジェネラルドラゴンなんて無理にも程がある!

ドオンッ……!

…………え？

突然、グリーが銃を撃った。

…………上空に向けて。

「お、おい…………！？」

グリーが撃った銃弾は、ジェネラルドラゴンの頭に直撃した。

俺達に気づいたジェネラルドラゴンは、上空から一直線に落ちてきた。

「あ、危ねえ…………！」

俺達は慌ててその場から退避する。

ズドオオオオオオオオオオ！！

隕石でも落ちてきたかのような音がし、大地が砕け、砂が煙のように舞った。

「っ…………！！！」

それにもかかわらず、ジェネラルドラゴンは平然とした様子で、俺達を見下ろしていた。

「お、おいグリー！？何やって……」
「ダメだ……！！」

グリーはギリッと歯を食いしばる。

「こいつ……町へ行こうとしてる……！」
「なっ！？」

そういえば、ジェネラルドラゴンが見ていたのは、チョコレート町の方角だった……！！

「で、でもよ！チョコレート町にも『ソレイユ』が五人……！！」
「……確かに、壊滅することはないと思う」

グリーはボソッと、呟くように言った。

「……でも、町が無傷でいられるとは思えない……！！」

グリーはそういつと、ジェネラルドラゴンに銃を向ける。

「……ったく、お前らしくない行動だな。グリー」
「……」

最初は、この依頼を受けることにも反対してたのに……。

「……でも、俺は間違っと思ってないと思う……！」
「そ、そうだよ……！私もそう思う……！」
「いっちょ、やってやるっじゃねーか……！」

俺、メリス、レイラはそう言うと、ジェネラルドラゴンの方を向き、戦闘態勢に入る。

「……俺達だけ逃げるわけにはいかなーよな！」

「どの道、今から逃げて遅いな」

ワールとリスタルもそれにならう。

「……ごめん」

「へっ！俺は死ぬ気なんてないぞ！！」

ミドルドラゴンだってなんとかなったんだ！

こつなりや、無理を通してや……

ゴッ！……

「っ！？」

……気づいたら、俺はジェネラルドラゴンの拳をくらっていた。

「ハデイー！！」

飛びそうになる意識の中で、メリスの声が、聞こえた……。

ふと、ジェネラルドラゴンが、大きく息を吸いこんでいる姿が目に入った。

やべ……、この、ままじゃ……みんな……も……。

ジェネラルドラゴンの口から、ミドルドラゴンとは比べものにならない程の、巨大な炎が、吐きだされた……。

「ギガイアス!!」

「え……?」

飛んできた巨大な岩が、ジェネラルドラゴンの炎を食いとめた。

「パワーヒール!!」

俺の体が、白い光に包まれる……。

痛みがやわらぎ、意識がはっきりしてきた。

「ハデイ!!大丈夫!?!」

目の前に、メリスの泣き顔が見えた。

「お、おっ……」

「ったく、無理すんなよな」

と、すぐ隣にエンジさんがいることに気づいた。

「皆さん……ジネラルドラゴンを引き止めてくださったこと、感謝します……！」

「……ふん、無謀な行動は寿命を縮めるぞ。」

だが、助かったのは事実だ、感謝はしておこう」

「はっはー！ロギ准将がお礼を言うなんて珍しいなー！」

エンジさんは、二人の横へとゆっくり歩いて行く。

もちろん二人というのは、『星の賢者』イア・ランディアさんと、『銀狼』ロギ・シルムさんのことだ。

「後は……我々『ソレイユ』にお任せを……！」

ランディアさんは杖を、シルムさんは剣をそれぞれ構え、エンジさんは軽快に笑い、ジネラルドラゴンを見据えた……。

第14話 無茶と無理（後書き）

結局レイラがとどめ刺しちゃいましたね、ミドルドラゴン。

……なんか、

主人公がミドルドラゴンを倒すところが思い浮かばなくて。

第15話 将と将

「……………」

ジェネラルドラゴンは対峙する三人を無言でジッと見つめる。相手の力量を計ろうとしているみたいだ。

「……………ふん」

しびれをきらした『銀狼』ロギ・シルムさんが、刀身2m程ある剣を構え、凄まじい速さでジェネラルドラゴンに迫る！

それと同時に『星の賢者』イア・ランディアさんの体が茶色に光り始める。

……………『集中』だ。

「はあっ！」

シルムさんがジェネラルドラゴンに斬りかかる……………が、ジェネラルドラゴンは上空に飛び立ち、それをかわす。

「星の化身よ その姿を槍と化し……………
彼の者を貫け！ ガイアランス！！」

そこに、ランディアさんが鋭く上がった岩を複数放つ。

対するジェネラルドラゴンは、飛んでくる岩の槍に向かって巨大な炎を吐きだした！

岩の槍と炎のブレスがぶつかる。

岩の槍は炎を貫き、一直線にジェネラルドラゴンへ向かっていった。

「ガッ……！！」

ジェネラルドラゴンはとつさに腕で防ぐ……が、鋭い岩は固い鱗を貫き、ジェネラルドラゴンを負傷させる。

「わー！二人ともかつこいいー！！」

「……だから、あんたは行かなくていいのかよ」

一人戦わず、応援？に徹するエンジさんに、レイラが呆れ声を出す。

「はっはー！俺は補助専門だからなー」

エンジさんは軽快に笑う。

……行く気ないな、この人。

俺がそう思った、その時。

「あ、危ない！！」

メリスの声が聞こえた。

見ると、シルムさんに向かって、右方向から大きな炎が飛んできていた。

ゴオオオツ！！

ジェネラルドラゴンと戦っていたシルムさんは反応できず、炎に包まれる。

「……………危ないなー」

しかし、シルムさんは無事だった。

いつの間にも移動したのか、割って入ったエンジさんが炎を受けたからだ。

もちろんエンジさんも無事だ。

半透明の壁によって、炎を防いだから。

「結界魔法……………！！」

壁を作り出す魔法、結界魔法。

確か回復魔法と同じで、全種類応用魔法なんだよな……………。

「おい、今の炎どこから……………」

レイラがそう言って、周りを見る。

そうだ、今の炎は明らかにジェネラルドラゴンのものじゃない。
一体誰が……………。

「げっ……………！！」

俺は周りを見回して、思わず声を出す。

いつの間にか30匹近くの魔物が、俺達と『ソレイユ』、ジェネラルドラゴンの周りを取り囲んでいた。

くそっ！そういうえば今は乱闘状態だったんだ。

周りに魔物はいっぱいいたし、ジェネラルドラゴンは群れの親玉、援護しに来て当然か！！

「ちっ……………」

「あっちゃー……………」

「……………」

『ソレイユ』の三人も、周りの状態に不安げな表情を浮かべる。

いくらこの人たちが強くても、この状態じゃ多勢に無勢だ！

「…………… 大丈夫ですよ」

そんな中、ランディアさんが小さく微笑んだ。

「私達は負けてなんていません。

…………… 力も…………… 数も！！」

ズバアアッ！！

「グガアアツ!!」

突然、取り囲んでいた魔物の一匹が、背中から黒い血しびきを上げて倒れる。

「急に魔物が少なくなったと思ったら、こんな所に集まってやがったか!!」

魔物を斬り倒した剣士は、そう言って剣についた血を振り払う。

「天空より雷の集いと呼ぶ……痺れる サンダガ!!」

バリバリイッ!!

その隣にいたキラールルフに、球体に集まった雷が直撃する。

「うおらあああああつ!!」

キラールルフが痺れているところに、走ってきた剣士が胴体を切り裂く。

「いつちよ上がり!!……って、まだこんなにいるのかよ!？」

「……いい加減魔力がもたないわ」

「大丈夫だろ。」

「……こつちにだって、これだけ人数がいるんだからな!!」

そこにいたのは、今魔物を倒した三人だけじゃなかった。

30人近くの冒険者達が、それぞれ武器を構え、戦闘態勢に入っていた！

「す、すげえ……………」

俺は思わず呟いた。

初め、魔物達と戦い始めた時、冒険者の数は俺達を含めてたった47人、対する魔物は180匹以上いたはずだ。

それなのに今は、冒険者は少なくとも30人以上、魔物はもう、ここにいるのを含めても、せいぜい50匹いるかないかだ。

「はっはー、頼もしい援軍だなー！」

「エンジさん、残りの方は……………」

「安心しなーイア中将。

他の人もその辺で戦っていたり、岩陰にいたりするぜー？」

エンジさんの言葉を聞き、ランディアさんはほっとした表情を浮かべる。

「……………一人も死なせてないだろうな？」

「はっはー！」

……………二、三人、大けがしちまった奴はいるけどな……………」

「……………仕方ないか」

エンジさんとシルムさんは不満そうな顔をする。

え、まさか犠牲者0!?マジで!?不満そうな顔してるけど、十分とんでもないだろ!!

「おら!何ぼーっとしてんだよ?
俺達も行くぞ!!」

レイラの声で我に返る。

そつだ、まだ魔物はいるんだ!

俺は立ち上がり、落ちていた剣を拾い、ぐっと手に力を込める。

「ハデイ……、大丈夫?」

メリスが心配してくれる。

「ああ、エンジさんのおかげだな」

軽く剣を振ったり、ジャンプしてみたりする。

さすがに少し違和感はあるが、動けないほどじゃない。

……まだ、やれる!!

「……全く、無理はしないようにね」

グリーはそう言って、銃の装填を済ませる。

「分かってるって、……みんな、行くぞ!!」

メリス、グリー、レイラ、

そしてワールとリスタルを見る。

「うん！」

「援護は任せなよ」

「待ちくたびれたっての！」

「おうよ！」

「ちょうど、来たみたいだぞ！」

リスタルに言われて見てみると、一匹の竜がこっちに向かってきていた。

「……ミドルドラゴン!!」

さつき苦戦した、危険度Cの竜だ!!

「グギヤアアアアア!!」

ミドルドラゴンは走ってきた勢いのまま、一番近くにいたリスタルに襲いかかる!

「させるかあっ!!」

ミドルドラゴンが振り下ろした腕を、ワールが剣で受け止める。

「氷よ集え! フリズ!!」

リスタルがミドルドラゴンの顔を狙い、三つの鋭い氷を飛ばす!

しかし、ミドルドラゴンは後ろに跳び退いてかわし、さらに息を吸

い込み始める。

「遅えよー!!」

レイラが一気に距離をつめ、ミドルドラゴンの顔にアッパーをくらわせる。

ミドルドラゴンの吐いた炎は、誰もいない上空へと飛んでいった。

「グオオオツ!!」

「うおつとー!!」

目の前に着地したレイラに、ミドルドラゴンはかみつこうとする。

レイラが慌てて後ろに下がると、ミドルドラゴンの牙は大地に突き刺さった。

レイラと入れ替わるようにして、俺はミドルドラゴンの首に斬りかかる。

しかし、ミドルドラゴンは首を戻してかわし、拳を俺に向けてくる。

「悪いけど、その速さはもう慣れた!!」

俺は横に跳んでかわし、ミドルドラゴンの胴体に斬りかかる!

……でも、鱗があるからな……!!

「パワーブレス！」

剣がミドルドラゴンの胴体を捕える寸前、剣に赤いオーラが纏った。

ズバアッ！！

「えっ！？」

俺の剣がミドルドラゴンの胴体を切り裂いた。

なんだ！？いきなり剣の切れ味が増した！？

「ハデイー！！」

メリスの声にハッとす。

「グオオオオオオオオッ！！！！」

体を斬られたミドルドラゴンは、怒りのままに両腕を振り上げ、俺に向かって振り下ろしてきた！

俺は思い切り跳び上がってそれをかわし、そのままミドルドラゴンの肩口から、袈裟切りにする！

ミドルドラゴンから黒い血が吹き出し、ミドルドラゴンは倒れ、事切れた。

「はぁ……………はぁ……………、倒……………した……………？」

「はっはー、お疲れー！やるなー、青年！」

呆然としていた俺に、エンジさんが話しかけてきた。

……なるほどな。

「……ええ、おかげ様で」

俺はエンジさんに笑いかける。

この人だ、さつき俺の剣に、鋭さを増す魔法をかけたのは。

「はっはー！そーんなことはないなー、俺がやったのはあくまでも補助、それだけだからなー！」

エンジさんは相も変わらず、軽快に笑ってみせる。

……その補助が大きかったんだけどな。

「……ってか、あんたここにいていいのかよ？」

レイラがエンジさんに言う。

……そういえば、『ソレイユ』はジェネラルドラゴンと戦ってたはずじゃ……。

「おー、あの二人に任せてきたからなー」

「なっ！？い、いいんですか！？」

いくらなんでも、ジェネラルドラゴンを二人で相手するなんて！！

「はっはー！おかしなことを言うなー青年」

エンジさんは軽快な笑みを浮かべたまま、俺の方を見る。

「あの二人なら、ジェネラルドラゴンぐらい余裕だぜー？」

エンジさんはそう言って、次に補助する人を求めて、歩いて行った……。

くサイドアウトく

二十数匹の魔物と、34人の冒険者達が戦っているその場所の中心当たりで、二人の男女と、三匹の魔物が対峙していた。

二人の男女とは、もちろん『星の賢者』イア・ランディアと、『銀狼』ロギ・シルムのことだ。

そして、三匹の魔物……一匹は、この群れの親玉である、危険度Aの上位竜、ジェネラルドラゴン。

もう一匹は、危険度Cの上位魔獣。体長3m、高さ2m以上ある、黒い体に赤いたてがみを持つ馬の魔物。

ナイトメアホース。

最後の一匹は、危険度Cの中位竜。

四足歩行で体長3m、高さ1.5m程あり、全身が鎧のような鱗で覆われている恐竜のような魔物。

アーマードドラゴン。

ナイトメアホースとアーマードドラゴンは危険度Cの中でもかなり強い部類であり、この群れにおいて、ジェネラルドラゴンを除けば、最強の魔物だった。

「……………ずいぶんと警戒されているようだな」

「そうですね……………」

ジェネラルドラゴンがこの二匹を呼んだのは、目の前にいる二人の人間の力を恐れているからだだった。

自分だけでは敵わない、そう思ったのだろう。

「……………ふん、ならば、逃げればいいだろうに」

ロギはそう呟き、剣をゆっくりと構えると、目の前にいる魔物達を

睨みつける。

魔獣よりも魔獣らしいその気迫に、アーマードドラゴンは一瞬たじろぐが、竜としてのプライドに負けたのか……、その男に向かって突進した。

……それが、間違いだとも知らずに。

ロギは突っ込んでくるアーマードドラゴンを、正面から相手取り、剣を振るう。

ガギイイイーン!!

「!」

巨大な銀の剣、シルバーファンゲは、正確にアーマードドラゴンの頭部を捕えた。

しかし、中位竜の中では最高の硬度を誇るアーマードドラゴンの鱗を切り裂くのは、さすがに無理だったようだ。

「ブゴオオオオオオオツ!!」

アーマードドラゴンは、頭を振って、頭部に生えている闘牛のような角をロギに突き刺そうとする。

しかし、その瞬間ロギの姿が消え、角はその勢いのまま、地面に突き刺さる。

「……………」

両者の体が、ほぼ同時に光り始める。
イアは茶色く、ナイトメアホースは黒く。

「ギガイアス!!!」

イアの周囲の地面から大きな岩が複数浮かび、ナイトメアホースへ放たれる。

一方でナイトメアホースの前に黒い霧が現れ、そこから黒いガイコツのような形の闇が、イアに向かって放たれる。
闇属性、基礎魔法レベル3『シャドネス』だ。

複数の岩と巨大な闇がぶつかる。

しかし、一瞬で闇は打ち破られ、岩はそのままナイトメアホースへ向かう。

『シャドネス』が弱い魔法なのではない。
イアとナイトメアホースの魔力が、あまりにも違いすぎるからだ。

「!?!」

ナイトメアホースはとっさに高く跳び上がり、ギガイアスをかわす。

「……彼の者に重き制裁を グラビディア!!!」

しかし、イアは間髪いれず、ナイトメアホースに重力強化の魔法をかける。

ナイトメアホースにかかる重力が一気に三倍近くまで上がり、地上三m程の高さにあったナイトメアホースの体は、一直線に地面へ落ちていった……。

「……………後は、貴様だけだ」

二人がそれぞれの相手を倒したのは、ほぼ同時だった。

「……………！！」

それを見ていたジェネラルドラゴンは、焦りと驚愕で目を見開いていた。

「……………ふん」

そんなことは知ってか知らずか、ロギは剣を構え、容赦なくジェネラルドラゴンに迫る。

ジェネラルドラゴンは慌てて羽を広げ、上空へと逃れる。

「……………まだ、未完成だが」

ロギはそう呟き、すでに剣の届かない位置にいるジェネラルドラゴンに向かって、凄まじい速さで剣を振った。

「……………飛空閃！！」

ザッ！！

第15話 将と将（後書き）

今更ですが、なんか『ソレイユ』が目立ち過ぎてるよつな。

……まあ、相手が相手なので仕方ありませんが。

第16話 戦いの終結と宴

「ジェネラルドラゴンを……倒したぞ!!!」

周りで戦っていた冒険者達から、歓声上がる!

すげえ!!!本当にすげえよあの人達!!!

30匹近くいた他の魔物も、もう20匹いるかどうかだ!!!
この戦い……勝てる!!!

ドスッ!!!

「……………え?」

肉が裂ける嫌な音と共に、空から、ポタポタと赤い液体が降ってきた……。

「ロギさんっ!!!」

ランディアさんの悲痛な叫びが辺りに響いた。

俺は数秒間、何が起ったのか理解できなかった。

「ぐっ……!!」

空中にいるシルムさんの右肩を、ジェネラルドラゴンの爪が貫いていた……!!

何で……!!?

いくらなんでも、首を切り落とされて生きてられる生物なんていない……!!

ジェネラルドラゴンも、もう絶命してる……。

つまり……、首を斬られる寸前に、一矢報いようと攻撃を仕掛けたのか!?

ランディアさんの爆発魔法が、頭部に直撃してたのに!!

「クカカカアッ!!!!」

その隙を突こうと、二匹の魔物が凄まじい速さでシルムさんに迫る。

やばい!!

「くっ!!」

ランディアさんが『集中』を始める……が。

ダメだ!間に合わない!!

「…………… 見くびるな」

シルムさんが、両手で持っていた大剣を素早く左手に持ち替える。

「この命……………、貴様ら程度にはやれん!!」

シルムさんに迫って行った二匹の魔物は、一振りで、真つ二つになった……………。

「ロギさん!!」

着地したシルムさんに、ランディアさんが駆け寄る。

「…………… この程度、問題ありません」

「魔物に刺されて問題ないわけではないでしょう!!」

「すぐに治療します!!」

「……………」

シルムさんは、刺さっていたジェネラルドラゴンの爪を、力任せに引き抜いた。

出血を抑えていたものがなくなり、血がドパッと流れ出す。

「……豊穡の大地よ、大いなる力を以て、彼の者を救う優しき光を
……
命を育む土地！！」
ナクター・アース

シルムさんの足元に、淡い緑色に光る魔法陣が浮かび上がる。

その光がシルムさんの右肩に集まっていき、次の瞬間、傷は完全に塞がっていた。

……見た目には治ったみたいに見えるけど、まあ、流石にそれはないよな……。

シルムさんは、右肩を軽く回す。

「……無理か……」
「あ、当たり前です！！応急処置ですよ！しばらく安静に……」
「……いえ」

シルムさんは、左手に持った大剣を見る。

「こっちは動きます」
「バ……バカ言わないで下さい！！そんな体で戦う気ですか！？」
「ロギ准将、止めとけて」

ランディアさんだけじゃなく、エンジさんも止めに入る。

「まだ、魔物はいます。私だけ休むわけには……！！」
「……もっつー！！」

心配しなくても、残りは全部私が片付けますから、ロギさんは安静にしていして下さい……！！」

……………え？

いや、ランディアさん？

まだ魔物、十数匹はいますよ……………？

「……………それじゃ、僕達は下がってた方がいいのかな？」

「……………『魔塔』が直々にやるってんなら、邪魔にならねえようにした方がいいかもな」

グリーとレイラはそう言うと、魔物達から離れる。

他の冒険者達も、示し合わせたように魔物達から離れ始めた。

「ほ、ほらハディっ！早く！」

「い、いや！俺達も手伝った方が……………」

言いかけて、俺は気づいた。

思わず背筋も凍るような、とんでもない殺気が辺り一帯を覆っていることに。

……………何だ、これ……………！？

俺は、殺気が放たれている方を向いた。

そこには、いつの間にか『集中』を始めている、ランディアさんの姿があった……………！

……えー、これはあれか？

仲間を傷つけられてぶち切れてるとか、そついう……。

「ハデイ！早く！！」

「巻き添えになったら、骨も拾ってあげられないよ？」

「いや、巻き添えってそんな……」

「地底より脈動の集いを呼ぶ……我は地を治める者なり……！！」

ボゴゴオツ！！

『詠唱』を始めたランディアさんの、前方2mぐらいの所で、大地が盛り上がり始める。

「ゲガアアアアアッ！！」

と、殺気に威圧されていた魔物の中の一匹が、ランディアさんに襲いかかった。

「……縛視」

しかし、エンジさんが間に入る。

……何をしたのかよく分からないけど、その魔物は動きが止まり、地に崩れ落ちた。

「悪いけど、しばらく待っててなー」

エンジニアさんは軽快に笑いながら言う。

……その後ろで、ランディアさんは『詠唱』を続ける。

「地の精霊ノームとの契約によりて……その力を我の前に現せ……
！！」

さらに大地が盛り上がっていき……5mぐらいの大きさになった。

……その形は、まるで……！

「押し潰せ ガイア・ギガス！！！」

ランディアさんが『呪文』を紡ぐと、『それ』の目に、赤い光が宿る！

「岩の……巨人……！？」

それは、大きな両腕をゆっくりと持ち上げると、凄まじい勢いで大地に叩きつけた！

「うわっ……！！！」

大地が砕け、衝撃波が辺りに広がる。

……まるで、ちょっとした地震が起きたみたいだ。

魔物達も、その巨大な敵を呆然とした様子で見っていた。

「……………覚悟……！！！」

ランディアさんの叫びと共に、岩の巨人が大きく跳躍する！

そして、容赦なく近くにいた二匹の魔物を踏みつぶした！

「グ、グオオオオオオオオオオ！！！」

一匹の竜が、咆哮を上げながら巨人に向かって突進する。

しかしその竜は、巨人の腕の一振りで吹き飛ばされた。
鱗が砕け、黒い血が辺りに飛び散る。

巨人は振り切った腕をゆっくりと戻すと、まだ生き残っている魔物達へと、視線を向ける。

そして、空気が揺らぐほどの大きさで、竜とも、獣ともつかないような、異質な咆哮を上げた。

「……………」

俺は、その一部始終を呆然と見ていた。

気がつくくと、まだ10匹ぐらいはいたはずの魔物も、少し離れた場所ですぐに倒れて戦っていた魔物も、姿を消していた。

役目を終えた岩の巨人は、ゆっくりと地中へ還っていった……。

「……まあ、今更だけど……。

流石……だよな……」

グリーは苦笑いを浮かべている。

「地属性、基礎魔法レベル4『ガイア・ギガス』。

……まあ、レベル5も使ってたし、使えて当然か……」

「……なんていうか……」

改めて、『星の賢者』のすごさを見せつけられた気分だ……。

「……あれ、兄さん。

魔物達がいなくなってる……?」

「そりゃあ、あんなものが出てきたら一目散に逃げ出すよ。

自分達の大将はやられちゃったんだし……」

……魔物がいなくなった……。

……ってことは……!!

「……皆さん」

ランディアさんが、今しがたまで戦っていた34人の冒険者達と、少し離れた場所にいる数人の冒険者達を見回す。

「……殲滅はできませんでしたが、ほとんどの魔物を倒すことができました。」

……逃げた魔物の中には危険度が高いものもいるため、絶対、とはいえませんが、仮にあの魔物達が町へ向かったとしても、脅威とはなり得ないでしょう」

ランディアさんはそこまで言って、一呼吸置き、そして高らかに宣言した！

「私達の、勝利です！！！」

その瞬間、呆然としていた冒険者達から、大きな歓声が上がった……！！

魔物の大群との戦いは、俺達、人間の勝利という形で、終結した！！

「……なんつーか、あの三人だけでなんとかなったんじゃねーの？
今回の襲撃」

戦いの終わりから少し時間が経ち、興奮も収まってきた所で、レイラがそんなことを言った。

……確かに、『ソレイユ』の三人だけで相当魔物倒してたもんな……。

「はっはー！それは違うなー！」

「わっ！」

いつの間にか、目の前にエンジさんが来ていた。

「確かに俺達『ソレイユ』、……まあ俺は補助しかしてないから、
正確にはイア中将与ロギ准将だけで、90匹以上の魔物を倒してた
けどなー」

うわ、改めて数を聞くとホントとんでもないな……！！

「……だが、魔物は200匹以上いたんだぜー？」

「……え？」

そういえばそうだな……。
ってことは……。

「つまり、お前達47人の冒険者は、合計100匹以上の魔物を倒

してくれたってことだなー！」

エンジさんは、俺達だけじゃなく、周りにいる冒険者達にも聞こえるような、大きな声でそう言った。

『そ、そうだよな！俺達だって戦ったんだ！！』

『ああ！あの町を守ることができたんだ！！』

『うおおー！！やってやったぞー！！！！』

冒険者達から、そんな声が聞こえてくる。

……やっぱりみんな、少なからずレイラと同じことを思ってたんだろっな。

俺だってそうだ。

……それぐらい、『ソレイユ』の人達はすごかった。

国の精鋭部隊は伊達じゃない、ってことだよな……。

「エンジさん、お疲れの所申し訳ありませんが、急いで岩陰に戻って負傷者の手当てを……」

「はっはー！安心しなーイア中将。」

戦えないようなケガをしてた人達はとっくに治療しといたからな
ー！」

俺が適当に腰を下ろして休んでいると、『ソレイユ』の二人の声が
聞こえた。

……そういや、エンジさんって戦場歩き回って治療とか補助してた
んだよな。

それに加えて岩場に避難した人達の治療も、って……。
やっぱあの人もとんでもないな……。

と、パンパンツ！という手を叩く音が、エンジさんの方から聞こえ
た。

「はーい！注目ー！！！」

周りで俺と同じように休んでいた冒険者達が、エンジさんとランデ
イアさんの方を向く。

「皆さん、本当にお疲れ様でした！」

町までの道を歩くのは大変でしょうから、しばらく休んでから町
へ戻りたいと思います」

……そういや、チョコレート町まで五？ぐらいあるんだっけ……。

「ただ、負傷者の応急手当では先にしておきたいので、ケガをして
いる人は集まって下さい」

ランディアさんの言葉に、十数人の冒険者が立ち上がる。

全員、打撲や切り傷、刺し傷など、そこまで大きくはないが、ケガをしていた。

俺は……ジェネラルドラゴンにやられた傷はもう治してもらったし、大丈夫だな。

メリス、グリー、レイラ、ワール、リスタルも、ケガをしてる様子はないし……。

俺は近くで休んでいる、さっきまで一緒に戦っていた仲間達を見る。

「あ、それと……気分が悪い方は、岩陰まで戻って下さって構いません」

ランディアさんは、少し気まずそうに言う。

……気分が悪い？

「……ここは、血の臭いが充満してますので」

あ、そういうことか……。

改めて見回すと、周りには魔物の死体。

地面は魔物の血で黒く汚れてる。

……臭いも結構ひどいな、気づかなかった……。

「メリス、大丈夫か？」

「……うん」

メリスの顔は、少し青かった。

……元々、こういうのあんまり得意じゃないもんな、こいつ。

「よし！それじゃあケガ人は全員集合ー！」

エンジさんの、間の抜けた声が聞こえる。

……本当、テンション変わらないなこの人……。

「……巡りめぐる生命の力よ……螺旋を描きて、その力を行使せよ

……

ヒーリング・サークル！」

集まった冒険者達の足元が白く光り出す。

光が冒険者達を包み込み、消える。

冒険者達は、傷が消えているのを見て、感嘆の声を上げた。

「おいおい、あんまり動かすなよー？」

治癒魔法つてのは、あくまでも応急処置だからなー」

ケガをしていた部分を平気で動かす冒険者達に、エンジさんは呆れ声で注意する。

「それでは皆様、そろそろ町へ戻りましょう」

十数分後、ランディアさんが休んでいた冒険者達に言った。

まあ、いつまでもここにいてもしょうがないしな。

……っつか、あんまり長くいると、メリスみたいに気分悪くなるかもしれないし……。

メリスはやっぱり気分が悪いみたいだったから、岩場まで戻っている。

グリーンも付き添いで一緒だ。

「今から戻ると……まあ日は暮れてるだろーな」

「あゝ、もう6時過ぎてるからな……」

見ると、もう日は西に傾いていた。

チョコレート町まで、歩いて一時間ちよいかかるからな……。

「あれ？グリーン、メリス寝たのか？」

「うん、……やっぱり疲れてたみたいだね」

岩場まで戻ると、メリスがグリーンに背負われていた。

「今から帰るわけだけど……やっぱりグリーンが背負ってくか？」
「当然!!」

当然か、当然なのか。

「不満そうだなハディ、背負いたいのか？」
「は？」

レイラがニヤついた顔で言ってくる。

いや、俺は別に不満なんて……。

「オーケー、落ち着こうか。」

……メリスを背負ったままこっちに銃を向けるなグリーン!!」
「はっはっは……。」

冗談に決まってるじゃないか……!!」

「冗談で人に銃を向けるな!!」

とりあえず下ろしてくれ怖えよ!!」

……なんか、このやりとりも久しぶりな気がする……。

実際にはそんなに時間経ってないけど、今回の依頼はホント長く感じたな……。

「全くハデイくんも油断ならないね……！」

僕以外の男がメリスを背負うなんて許さないよ！」

「いや、だから俺は……」

「メリスを背負って柔らかかな体を堪能するなんて許さない！」

「グリー代われ。お前に背負わせとくとメリスの身がキケンだ」

レイラはそういうと、無理矢理グリーからメリスを引きはがした。

「な、何故だいレイラさん！？

僕はただメリスを背負って僕にもたれかかるその体をじっくりと堪能しているだけ……」

「性犯罪者一歩手前だ！！」

レイラはメリスを背負い、歩きながらグリーに言う。

あゝ、やっぱりレイラとは気が合いそうな気がする。

……シッコミとして。

「……やっぱり明るいな……」

俺は、夜にもかかわらずまぶしい光を放つチョコレート町を見て、二日前、この町に来た時と同じことを思った。

「つまり、無事ってことだろ」

レイラはニツと笑って言った。

……そうだ、光が灯ってるってことは、ちゃんと町を守れたってことだ！

「中将！良かった、ご無事でしたか……」

「え？」

町に入ると、赤いマントをはおった男が、ランディアさんに話しかけた。

赤いマントをはおってるってことは、『ソレイユ』の人……だよな？

「いえ、数匹魔物が町に来たものですから……」

「……！ だ、大丈夫でしたか！？」

町に来たって……逃げた魔物か！？

それを聞き、冒険者達からもどよめきの声上がる。

「はい、危険度Cの魔物が二匹、危険度Dの魔物が一匹だけでしたので。」

「この方も手伝って下さいましたし」

『ソレイユ』の人は、そう言って近くにいた男性の方を向く。

……あれ？あの人って……。

「マウロさん！」

「ランディア中将！」

……その様子だと、無事魔物を殲滅できたようすな

そこにいたのは、マウロごと、酒場のおやじだった。

「マウロさんも手伝って下さったのですか？」

「はっはっ！まあ、自分の住んでいる町ですからな」

よく見ると、酒場のおやじは右手に一振りの刀を持っている。

……さらにその刀は、魔物の黒い血で汚れていた。

「おやじ、あんた戦えたのか？」

近くにいた冒険者が、酒場のおやじに話しかける。

「まあな」

「マウロさんは、元A級^{クラス}冒険者なんですよ」

……はい？

「……え、エー……級^{クラス}……？」

とんでもねえことさりとはいやがった!!

「A級と組んだことあるのか!？」
クラス

「別に大したことじゃねーよ。」

難しい依頼に冒険者が集まったら、弱い奴は死なないように強い奴と組まされることがあるだろ」

「あ、そういうことか……」

……そういう意味じゃ、今回D級の俺達とC級のレイラが組んだのってどうだったんだろうな……。

まあ、レイラ強かったし、終わったことはもういいか。

「まあでも、ご無事で本当に良かった。」

……せつかくの準備が台無しになるかと思いましたよ」

「準備……ですか?」

酒場のおやじの言ったことに、ランディアさんは首をかしげる。

「ええ。さ、中に入って下さい!」

……お前らも、なんたって主役なんだからな!」

……主役?

『ソレイユ』の三人に続き、俺達冒険者も、チョコレート町の中へと進んだ。

……そんな俺達を待っていたのは……。

町の住人達の、大きな歓声だった！

『よくやってくれたぞー！ー！』

『ありがとうー！ー！』

『お前らみんな、この町の英雄だああー！ー！』

「……………」

俺を含めたほとんどの冒険者達は、その光景を呆然と見ていた。

「おいおい、何呆けてんだ？」

それを見て、酒場のおやじは笑いをもらす。

「自覚ないのか？」

「………… お前らは命を懸けて、魔物の大群からこの町を救ったんだ！」

……………そっか。
そう、なんだよな……………！

なんていうか……………魔物と戦ってる時は無我夢中で、そんなこと考えてる余裕なんてなかったけど……………。

あの魔物達は、この町を襲おうとしていた。

……………俺達は、この町を守るために戦って、そして、勝ったんだ！！
この光景を見てると……………、本当に、この町を守ることができたんだって、実感がわいてくる……………！！

「この町に住む一人の人間として、礼を言わせてくれ。
……………ありがとう！！！」

酒場のおやじは……………いや、マウロさんは、満面の笑みでそう言った。

「さあ！！宴の準備は整ってる！！今日は朝まで飲んで騒げ！！！」
見ると、町中……………ではないだろうけど、とりあえず、ここから見える限りの場所に、大きなテーブルが配置され、おいしそうな料理や酒が並べられていた！

それを見た冒険者達は、うれしそうな声を上げ、我先にと走り出した！

「……………全く」

「はっはー！負傷者は無理すんなよー！」

「ほらロギさん！エンジさん！私達も行きましょう！」

『ソレイユ』の三人も、ランディアさんを先頭に、宴へと参加した。

「……………なあ、グリー」

「ん？」

俺は、隣にいたグリーに声をかける。

「俺さっきまで、今日は町に戻ったらすぐに寝よう……………とか考えてたんだけどさ」

「そう、……………僕もだよ」

グリーは楽しそうに笑って言った。

「……………でもこういう場合、騒がなきゃ損だよな！…！」

俺はそう言っつて、早くも料理がなくなり始めているテーブルへと、急いで向かうのだった……………。

第16話 戦いの終結と宴（後書き）

本当は宴の様子まで入りたかったのですが……、
予想外に戦いの終結に時間がかかりました。

第17話 酔いと平和

「……………うまい!!」

俺は大皿に盛られたフライドチキンを口にして、思わずそう言った。

「この料理って町の人を作ったんだよな？」

……………お菓子屋とか喫茶店とかが多かったけど、こつこつのを売ってる店もあったのか」

「ん〜、分かんないけど、案外主婦とかが腕を振るってるのかも。おいしい〜!」

俺の疑問に、隣に来たメリスが答える。

メリスは早速と言わんばかりに両手にフライドチキンを取り、おいしそうに食べ始めた。

……………ん?

「……………いつ起きたんだお前？」

「さっき!!おいしそうな香りに目が覚めたよ!!」

ふと見ると視界の端に、心底悔しそうな顔をしているグリーを見た。

グリー、あきらめろ。

こいつはメリスだ、あのメリスなんだ……。

「どうしたのハディ？」

「いや、別に……」

「そう？なんか『あきらめろ』って顔してたけど……」

「どんな顔だ!？」

なんかメリスは俺の顔から考えを読めるらしいけど……。

もうなんつーか、別に顔に出てるとかじゃなくて、メリスは心が読めるんじゃないかと思えてきた……。

「なに言ってるの？心なんて読めるわけないよ」

「言ってるねえよ!!!連続で人の心を読むな!!!」

普通に会話が成立してるのが恐ろしい……!!!

「……………あ!あっちのサンドイッチおいしそう!!!」

獲物を見つけたメリスは顔を輝かせてそっちへ向かう。

「あ、おいメリス!」

「ん、何？」

と、俺はそれ呼び止める。

これだけは言っておかないとな……。

「お前まだ未成年なんだから、酒とかは飲むなよ!」

「分かってるっ!」

メリスはそう言うと、獲物に向かってまた走り出す。

……………大丈夫か？

「どうしたハデイ？あんま食ってねえじゃねーか」

「ん、いや今から……………っておいレイラ！？」

「あ？どうした血相変えて……………」

俺はレイラが持っている物を見て、思わず叫んだ。

その手には、テーブルに置かれているグラスが握られていた。

「何で酒なんて持つてるんだお前！？」

「あゝ？こんぐれーいいだろ。かたいこと言うなよ」

「良くないだろ！！お前未成年どころか子供だろ！？」

「そんなの今更だろ。」

急性アルなんとかにはならねーから安心しろって。

仕事の後の宴やら打ち上げやらで飲み慣れてるからな」

そう言っつてレイラは手に持ったグラスを口へ運ぶ。

「だからダメだったの！！」

「あー、なんだよ。」

……………ってか、俺はダメであつちはいいいのか？」

……………あつち？

俺はレイラが指差した方へ目を向ける。

次の瞬間俺の目に映ったのは、メリスが酒を飲んでいる姿だった……。

「……………メ・リ・ス……………!!!」

俺はダツシユでメリスの元へと向かい、丁度メリスが口へ運んでいたグラスを取り上げる。

「あーハディー」

「『ハディー』じゃねえ!!!なんで酒飲んでるんだお前は!?さつき飲むなって言ったばっかだろ!!!」

「えー?それはお酒じゃなくてジュースだよ」

「酒だこれは!!!」

確かに味がジュースに似ている種類だったが、ちゃんとアルコールの入った飲み物だ!

「だって、あのおじさんたちがこれはジュースだって」

「うおいあんたらああー!!!」

俺は近くにいた二人の冒険者につめ寄る。

「ハツハツハ!かてえこというなよ兄ちゃん!!!」

「そうそう!!そんなのジュースみたいなもんだろ!」

「それはあんたらにとっては、だろ!!!」

その二人はもう酔っぱらってるのか、赤くなった顔で俺の肩をバシバシ叩いてきた。

「あのなー！ガキじゃあるまいし、宴の席で酒を飲まねえ方が変だろー？」

「メリスはまだ未成年だったの！！」

俺がそういうと、二人は驚いた顔をする。

「なんだ、その嬢ちゃん未成年だったのか？」

悪い悪い、あんまり立派だったからとつくに成人してるかと思っただぜ！」

「おう！未成年にしちゃ立派なもんだ！！」

二人は笑い声を上げて、ニヤついた目でメリスの体を見る。

こ、このエロおやじ共……！！

ドオンッ！！

と、背後で銃声がした。

何事かと、俺達だけでなく周りの人もそつちを向く。

そこには、銃を上空へ向けたグリーが、鬼の形相で仁王立ちしていた……。

「そのの二人！！！僕のメリスをいやらしい目で見ると許さないよー！！」

「おうおうなんだ兄ちゃん!!やるつてのか!?!」

グリーが冒険者の一人につかみかかると、その冒険者も両手でグリーのえり首をつかむ。

「お、おいグリー落ち着け!!」

「止めるなハディくん!!男にはやらなきゃいけない時があるんだよ!!」

「いや確かに助かったけど!暴力沙汰はまずいだろ!!」

俺がなんとか二人の仲裁をしようとしていると……。

「おー!なんだなんだ!?!」

「あの二人がやるみてえだぞ!!」

「いいぞー!やれやれ!!」

周りの酔っ払い共がはやし立ててきやがった!!

「ハッハッハ!!茶髪の兄ちゃんどいてやれ!!」

そっちの兄ちゃん俺と決着をつけなきゃ気が済まねえよつだ!!」

「そういうことだよハディくん!!」

二人はすでに臨戦態勢に入っていた。

……ダメだ、もう止められねえ!!

「……………ふっ、この俺にサシで挑んで来るとは……………。
その意気込みだけは買ってやるぜ!!」
「この勝負、僕は退くわけにはいかないんだ!!」

そう言っつて、二人は手に持ったものを同時に構えた!

『飲み比べだ!!!!』

二人はお互いのジョッキをガチン!とぶつけ合う。

「……………おい、グリー?」

「止めないでくれハデイくん!!」

男にはやらなきゃいけない時が!!」

「それは勝手にやりゃいいけどな!?!」

目につつすら涙を浮かべるグリーに、俺は全力でどなる。

いつから飲み比べの話になったんだ!?

さっきまでの緊張感を返せ!!

……………つてか、よく見るとグリーも少し顔が赤い……………酔っばらってやがる……………!!

「さあ！二人とも位置について……よおい、ドオンー！！」

合図と共にものすごい勢いで酒を飲み始める二人……。

俺はとりあえず、酔っぱらったメリスを連れて、その場を後にした
……。

「……ふう、ここまで来ればいいか……」

「んー……」

俺達は、昨日俺とグリーが来た小さな公園まで来ていた。
とりあえず、ベンチにメリスを座らせる。

……まあ、いくら酔っぱらってるからって、宴の席で暴力沙汰はこ
法度だよな。

最初にグリーが撃ったのも空砲だったみたいだし。

今更ながら安どのため息をつき、ふと、周囲に人っ子一人いないこ
とに気づく。

流石にここは宴の範ちゅう外らしいな。

俺は騒ぎ声が聞こえてくる方を見ながら、そう思う。

「ほら、大丈夫かメリス？」

「んー……………」

ボーっとした様子のメリスに、移動中に取った水を渡す。

テーブルの上には料理や酒だけじゃなく、水も配置してあった。

……………まあ、こうなった奴のためだろうな……………。

俺は水を飲むメリスを見て、そう思った。

「ぶはあ……………うー……………頭痛い……………」

水を飲み終わったメリスは、そう言って手で頭を押さえる。

グリーはすぐ顔赤くなる割にけっこうな量飲めるんだけど、メリスはそうもいかないみたいだな……………。

「大丈夫……………じゃなさそうだな。だから飲むなって言っただろ」

「……………うー……………」

俺はメリスの隣に腰かける。

メリスは頭を押さえたまま、ベンチの背にもたれかかっていた。

俺は小さくため息をついて、空を見上げる。

「……………あんまり星見えないな……………」

俺はそう呟く。

俺達の村は田舎だったから、夜には空いっぱい星が見えたもんだけど……。

やっぱり街灯とかあると、見える星の数が減るみたいだな……。

……こういう時漫画とか小説だと、星空を見て男女が良い雰囲気になったりするんだけど。

「……………ん？」

いや待て、俺は何を考えてる！？一緒にいるのはメリスだぞ！？
良い雰囲気ってなんだ良い雰囲気って！？

「……………ハデイ」

「お、おう！？」

急にメリスに声をかけられて、俺は思わず大きな声を出してしまっ

メリスの方を向くと、メリスは茶色い瞳で、まっすぐ俺を見ていた。

「……………ハデイは……………」

「え？」

「……………ハデイは……………私のこと、どう思ってるの……………？」

……………え？

俺が固まっていると、メリスは目を閉じ、俺の方に倒れこんできた。

「お、おいメリス!!?」

慌ててしまい、どうすることもできない俺の耳に、スー……スー……
…、という寝息が聞こえてきた。

「……………なん、なんだ一体……………」

俺の小さな呟きは、誰の耳にも届くことなく、静かな夜へと消えて
いった……………。

くサイドアウトく

「あ、ロギさん。こんなところにいたんですか」

「……………中将、どうかされましたか?」

「……………今は二人です。イアって呼んで下さい」

イアは少し頬をふくらませて、通りのベンチに座っているロギに言い、自身も隣に座る。

実際には宴の中にいるから二人きりではないが、少なくとも声が聞かれる程の距離には人はいない。

「ふふつ、皆さん楽しそうですね！」

「……………全く。本当に騒がしいな、冒険者という奴は……………」

少し離れた場所でも、冒険者達が集まってなにやら騒いでいる。

『いいぞー二人とも！』とか、『まだまだいけるぜ！！』とかいう声が少し聞こえてくる。

「ロギさんはちゃんと楽しんでますか？」

「……………料理と酒はうまいからな」

「それもそうですけど……………、もっと冒険者や『ソレイユ』の皆さんとも交流を深めないとダメですよ？」

イアはロギに向かって、笑ってそう言った。

ロギはただでさえぶっきらぼうで、とっつきにくい性格をしている。

イアは軍の中でも、ロギが好かれているという話はあまり聞いたことがなかった。

頼りになるけど厳しい、怖い、という話ならよく聞くが。

「……………最低限の交流はしているつもりだが」

「最低限じゃダメだって言ってるんです！……………仲間なんですから」

イアがそういうと、ロギはイアから目を背けた。

今回の仕事は、一人ではとてもできなかったものだ。

『ソレイユ』と冒険者が力を合わせたからこそ、魔物の大群に勝ち、全員が生還できた。

今、宴で騒いでいる人達は、『仲間』と言つに相応しい者達だ。

それが分からないほど、ロギはバカではない。

「……………ふん」

だから、ロギはエアに言い返すことができなかった。

「本当、昔から不器用ですよね、ロギさんって！」

「……………不器用？」

ロギは訝しげな顔でエアの方を向く。

「ロギさん、助けられるのが嫌いなんですよ？」

……………いえ、苦手と言った方が良くもしませんね」

「……………」

クスクスと笑うエアに、やはりロギは何も言い返せなかった。

実際、エアの言う通りだった。

『銀狼』ロギ・シルムは、協調が苦手な人間だ。

人と関わるのが苦手なのではない、助け、助けられる関係が苦手なのだ。

ロギはいつでも、自分は誰かを助ける立場に居たかった。

「……………そういってお前は、楽しんでいるのか？」

いたたまれなくなったロギは、話題を変えようとエアに言った。

「……………」

「……………エア？」

突然うつむき、黙ってしまったエアに、ロギは声をかける。

「……………はい、楽しんでます。……………でも……………」

カタカタと、エアの持っているグラスが音を立てて震える。

「……………私は……………、楽しんでても、いいのでしょうか……………？」

「……………！！」

うつむいたエアは、消え入りそうな声でそう呟いた。

ロギには、どうしてエアが急にこうなったのか、心当たりがあった。

……………だから。

「だって……………！！私は、『反逆……………」

だから、それ以上言わせるわけにはいかなかった。

ロギは手でエアの口を塞ぎ、それ以上しゃべるのを許さなかった。

「……………そんな言葉を使っているのは……………」

手を離し、ロギはエアの目をまっすぐに睨みつける。

「この国を妄信している奴らの一部と、お前のように、過去に囚われている者だけだ!!」

ロギに怒鳴られ、イアの目から涙がこぼれ出した。

「……………私……………!!」

「……………イア」

ロギはイアの頭に手を乗せ、語りかけるように言った。

「お前は、何のために軍に入った?……………罪滅ぼし、それだけなのか?」

「……………っ!!」

イアは、グイッと袖で涙を拭う。

「最初は……………そうでした……………!!でも、今は違います!!」

イアはロギの灰色の瞳を、まっすぐに見据える。

「私の力で……………助けられる人がいる。」

……………その人達を助けるために、私は……………!!」

「……………だったら」

ロギは、フツと笑みをこぼす。

「お前は、過去に囚われる必要などない」

いつもとは違い優しい口調で、ロギはイアにそう言った。

「……………本当、変わりませんね、ロギさんは……………」

「……………?」

「昔から……………、いつもそうやって、私を助けてくれます」

イアはそう言って、満面の笑みを浮かべるのだった。

「……………」

そんな二人から五m程離れた場所に、一つの影があった。

普通、二人なら目を向けなくとも気づくだろうが、今に限っては気づいていないようだ。

気づかれないうちに、その人影はその場を立ち去る。

茶髪に、精鋭部隊『ソレイユ』の証である赤いマント。

エンジン・アイラー、その人だった。

エンジンがここに来たのは少し前、イアが泣き出した頃だった。

普通なら、『あー！ロギ准将がイア中将を泣かしてるー！』とか言
って話に参加する所だが、不穏な空気を感じ取ったため、盗み聞き
するだけにしておいたのだ。

「……………反逆者、か」

エンジは、小さく呟く。

「そんなこと、気にしなくていいのになー」

……なんたって、その罪は許されてるんだから」

エンジはハーと息を吐く。

でも、そう言いながらも分かっていた。

イアは、例え他者から許されても、自分で自分を許すことができないのだ、と。

「……………まっ！その辺はロギ准将がなんとかするだろうけどなー」

エンジは笑い、今頃二人はどうなってるかなー、とか無駄な期待をしたりしていた。

「……………ふう」

小さな公園から宴へと戻る道の途中、俺は何度目か分からないため息をついた。

チラッと、背負っているメリスを見る。

メリスは、俺の心情なんて知りもせず、静かに夢の世界にいた。

『私のこと、どう思ってるの……………?』

さっきメリスに言われたことを思い出す。

……………どう思ってるか? 決まってる、仲間だ。

でも、何でメリスはそんなことを……………?

そう不思議に思いつつも、俺は自分の中で、こんな疑問が沸いていることに気づいた。

『仲間。……………本当に、それだけなのか?』

迷いを振り払うように、俺はぶんぶん顔を振った。

……………仲間以外に、なんだっていうんだ?

と、その時。俺は通りに見知った顔を見つけた。

「あれ、エンジさん?」

「ん？おー青年！」

エンジさんは軽快な笑いを浮かべながら、俺の方を向く。

「おー？どうしたんだその子？ひよつとしてお持ち帰りかー？やるなー青年！」

「いや、意味が分かりません。……酒飲んで寝ちゃったんですよ」

「はっはー！未成年の飲酒はよくないぞー！」

うっ！な、何でメリスが未成年だって分かったんだ！？

「まあ、今回は大目に見るけどなー！」

違法な飲酒の取り締まりも兵士の仕事だってこと、忘れるなよー

「？」

「は、はい……」

良かった、話が分かる人で……！

「いやー！にしても、今回は久々の大仕事だったなー！」

エンジさんは伸びをしながらそう言う。

「やっぱり、『ソレイユ』でも今回みたいな仕事は滅多にやらないんですか？」

「そりゃそーだ！」

「こんな命懸けの仕事が毎日あったら、『ソレイユ』に来た人全員辞職するぜー？」

「……………命懸け、ですか？」

正直『ソレイユ』の人達なら、命の危険なんてほとんどなさそうな

んだけど……。

「おいおい青年、勘違いするなよー？

今回お前らが見たのは『ソレイユ』じゃない。

『この国最強の兵士』だからなー？」

「……………え？」

……………どういう意味だ？

この国最強の兵士、つてのはランディアさんのことだろうけど……………。

「前にも言ったるー？

ロギ准将とイア中將は、『ソレイユ』の中でも指折りの実力者つて」

「……………そういえば」

「『ソレイユ』全員が、

あの二人みたいな『化け物』なわけじゃないんだぜー？」

エンジさんは軽快な笑みを浮かべながら言う。

「今、精鋭部隊『ソレイユ』に配属されてるのは全部で34人。

全員が最低でもB級冒険者以上の実力を持つてる」

「び、B級！？」

俺は思わず声を上げる。

B級クラス、A級クラスに比べれば当然劣るけど、それでも相当な実力者だ。

……………逆に言えばそれぐらいの実力がないと、この国の精鋭部隊には入れない、つてことだよな。

「……………が、その中でも4人、ずば抜けた実力を持つてる人がいるん

だなー」

エンジさんは右手の指を四本立てる。

「騎士部隊隊長、『黄龍』エルド・ドラゴニス。

騎士部隊副隊長、『銀狼』ロギ・シルム。

魔法部隊隊長、『星の賢者』イア・ランディア。

補助部隊隊長、『戦の支配者』アジル・ロディア。

……この4人の力と残りの30人の力が、大体同じぐらいだからなー」

「なっ!?!」

ま、マジで!?!

「お前達が見たあの二人は、『ソレイユ』の中でもN01とN04だからなー」

そういう意味じゃお前達、けっこう良い経験ができたのかもなー」

「……………」

「どうしたー? 青年」

「いや、いいんですか?」

そんなこと言っちゃって……………」

『ソレイユ』の人数とか、隊長達のフルネームとか。

「はっはー! 別に機密情報でもなんでもないぜー?」

『ソレイユ』の人数や各隊の隊長達が配属されていることは、世間に公表されてるからなー」

だからって、あんまりペラペラしゃべるのもどうかと思うけど……………。

「それじゃ、俺はそろそろ宴に戻るなー！
青年、まあその子も気にかかるだろうが、自分もちゃんと楽しめ
よー？」

エンジさんはそう言うと、宴の方へと歩いて行った。

……………自分も楽しめ、か……………。

俺は小さくため息をつく。

「……………ちょっと、そんな気分でもないんだよな……………」

こんなこと言うのは俺らしくないだろうけど……………本当に、今はそんな気分じゃ……………。

その時、グーという音がした。

……………何のことはない、俺の腹の音だ。

「……………夜メシだけは、食っとくか」

俺はそう言って、メリスを背負い直し宴で騒がしい方へと歩き出した……………。

第17話 酔いと平和（後書き）

『反逆者』については、

第四章で詳しく出てくる予定です。

……そこまで行くのはいつになるだろうか……。

本当は次回第二章完結予定でしたが、
それだと一話が長くなりそうなので、
あと二話書こうと思います。

なので、あと二話で第二章完結！

………予定です！…！

第18話 大食いと別れ

「……………う……………」

俺が目を覚ますと、そこは酒場の部屋だった……………。

って普通だな。

軽い頭痛を感じながらゆっくり起き上がり、周りを見渡す。

「……………昨日と同じか」

俺は小さく呟いた。

部屋には今起きた俺と、まだ寝ているメリス、グリーの姿がある。

つまり、レイラの姿がない。

昨日と同じで、外で筋トレでもしてんのか？

俺がそう思っていると、ふと視界の端に時計が見えた。

「……………あゝ、やっぱり同じじゃないな」

そう言って、ポリポリと頭をかく。

その時、時計の針は12時丁度を指したのだった。

「……やっと起きたのかお前ら」

メリスとグリーを起こして一階に降りると、レイラが呆れた顔で俺達を迎えた。

「悪い、めっちゃくちや寝坊した……」

「……頭痛い……」

「……いつもの元気はどうしたお前ら」

見事に二日酔いになった俺達を見て、レイラはさらに呆れたようだ。

「まったく、成人してるくせに情けねーな！」

「……私成人してない」

「俺よりは成人に近いだろーが」

そりゃ13歳に比べたらな……。

「ってかレイラ、お前何でそんなに元気なんだよ……」

俺は二人も思っているであろう疑問を口にする。

こいつ一番年下なのに……。

「昨日言っただろ、飲み慣れてるってよ」

「……お酒に耐性がついてるの？」

「それもなくてはねーけどな。」

「どれぐらい飲んだら明日やばいか、とか体が覚えてんだ」

「どれだけ飲み慣れてるんだお前……」

感心するべきか呆れるべきか迷う。

「……おい、グリー大丈夫か？」

「……」

やばい、さっきからグリーが一言もしゃべってない。

こいつ昨日飲み比べで泥酔状態になってたもんな……。

「兄さん、大丈夫……？」

「だ、大丈夫だよメリス……」

おお、メリスの呼びかけには答えるか。流石だグリー。

「メ、メリスの膝枕で休めば、すぐに良くなるんだけど……」

「どさくさに紛れて何言ってるんだグリー!？」

「うん、分かった」

「メリス!!お前もやるうとするな!!」

こいつらまだ酔ってやがる!!

つか、大声出したせいで頭痛がひどくなったんだけど!?

「やっぱお前らおもしれーな!」

「見てる方はいいだろうけどな!」

やってる方は疲れるんだっての!!」

レイラの方が元気なんだから代わりにツッコんでくれ……!!」

「ね、そんなことよりお腹すいた」

「イスでも食つとけ!!」

そんなことってなんだこの野郎!!

俺がどれだけ苦労してると……

「……待てメリス!! 本当に食べようとするな!!」

イスの脚を持って口に運ぼうとするメリスを慌てて止める。

やばい!こいつ目が本気だった!!

「おいおやじ!!なんか料理持ってきてくれ!!このままじゃメリスが無機物を食べ始める!!」

「お、ついに人の域を超えるか」

「それはとっくに超えてるけどな!!」

レイラだってメリスの胃袋のデカさは知ってるだろ!!

「構わないが……、足りるのか?」

酒場のおやじが渋い顔をする。

……確かに、昨日帰ってから十時間近く空いてるからな。

今の様子から見ても、メリスの胃袋はおそらく空。

下手すりゃ酒場の冷蔵庫が空になる!

「言っておくが、料金はちゃんと払ってもらおうぞ?」

うわ、酒場のおやじ容赦ねえ!!

依頼金総額5万Gはもうもらったけど、こんなことで一気に使うのは嫌だ!!

「……じゃあよ」

レイラが何かを思いついたようだ。

「外に行こうぜ」

「……外?」

「あるだろ。そこそこお値打ちで量がとんでもねー店がよ」

レイラはそう言って、ニツと笑みを浮かべた。

「いらっしゃー……い……!!」

店に入ると、前と同じ……いや、それ以上の大声が響き渡った。

……そう、俺達が来たのはおとこの昼食に来た、あの小さなラー

メン屋だ。

「こんにちはー！また来ました！！」

「おう！！お嬢ちゃんよく来たな！！！！」

身長2m程ある店長が、メリスを見てうれしそうに顔をやる。

……ってか、何かメリスが元気になってるな。そんなに好きか、食べるのが。

「好きな席で待っていてくれ！！今お嬢ちゃん用の特別最強ラーメンを作るからな！！！！」

「うん！！！！」

店長の大声に張り合い、声を張り上げるメリス。

……特別最強ラーメンか、そついやそんなこと言ってたな……。

「後ののは並盛ラーメンでいいか！！？」

「おう！！」

「あゝ、俺とグリーンはミニサイズをお願いします」

正直この店の『並盛』は食べ切れる気がしない……！！

「おう！！それじゃあ20分待ってな！！！！」

店長はとても良い笑顔でそう言うと、奥へと入っていった。

……なんだろう、とつても不吉な予感がする……！！！！

「ほらハデイ！早く座ろう！」

メリスに背中を押されて、俺は店の中に入る。

……と、カウンターに見知った三人を見つけた。

「……あら、あなた達！」

「……」

「はっはー！奇遇だなー、青年！」

そう、ランディアさん、シルムさん、エンジさん。

『ソレイユ』の三人だ！

「わーイアさん！！」

「メリスさん、こんにちは」

目を輝かせて隣に座るメリスに、ランディアさんはにっこり笑いかける。

「……すみません、勝手に」

「……構わんがな」

「え？」

シルムさんは俺達に目を向けることなくそう言うと、またラーメンをすすり始めた。

……まあ、いいんだよな？

メリスが座った方にはもう席がなかったので、俺達はエンジさんの隣から座った。

「はっはー！よく会うなー青年！」

「はい」

「運命かもなー？」

「すみません、俺にはそっちの趣味はないです！」

「はっはー！冗談だ！俺にはもう愛する奥さんがいるしなー！」

エンジさんはそう言って、左手を見せる。

その手の薬指には、白く輝くプラチナの指輪がはめられていた。

……既婚者なのか、この人。

まあ、結婚しててもおかしくない年だと思っけど。

「どうした青年？……そうか！俺と奥さんの馴れ初めが聞きたいのかー！」

「いや、そんなこと言ってま……」

「あれは十年前のことだったなー。」

俺が新米兵士として赴いた土地で……」

ダメだ全く聞いてない……！

っていうか昨日といい、この人話をするのが好きなのか！？

助けを求めようと周りを見ると、ランディアさんとメリスは会話に花を咲かせていて、シルムさんは無視、グリーは机に突っ伏していて、レイラは任せたとサインを送ってきた。

こうしてラーメンが運ばれて来るまでの間、俺はエンジさんのノロケ話を聞いていたのだった……。

「お待たせえ!!!」

20分後、店長がミニラーメン（普通の店の並盛ぐらいの量）二つと、並盛ラーメン（普通の店の大盛りぐらいの量）を一つ持ってきた。

た、助かった！正直これ以上ノロケ話は聞きたくねえ!!

「それでなー、その時俺は言っただ。」

『俺の女に手を出すなー!!』ってなー」

ダメだ!!!この人話をやめる気ねえ!!!

「エ、エンジさん？早く食べないとラーメン伸びちゃいますよ?」

「おー、本当だなー。」

青年のラーメンも来たみたいだし、これぐらいにしとくかー」

エンジさんはそう言うと、ラーメンを食べ始める。

た、助かった……。

良かった、一応良識が少しはある人で……。

「おーい兄ちゃん!!!大丈夫かー!?!」

と、店長が机に突っ伏しているグリーに声をかける。

……常人の怒鳴り声ぐらいの大きさで。

「う……」

流石にグリーも起きたみたいだ……ってか、起こされたって感じだよな……。

「グリー、大丈夫か？」

「ああ……うん。少しは楽になったよ」

確かにグリーの顔色は、起きた時に比べればだいぶ良くなっていた。

「料理来たけど、食えんのか？」

「……まあ、これぐらいの量なら……」

グリーは目の前に置かれたラーメンを見て、少し顔を引きつらせる。

……そもそもあんまり食べないもんな、グリー。

「そういうレイラは大丈夫か？その量……」

「あゝ、お前らと違って二日酔いもねーからな」

レイラはそう言うと、いただきます、と言って並盛ラーメン（この店の基準で）を豪快に食べ始める。

「ほれ、兄ちゃん……」

「あ、どうも」

俺にもミニラーメン（この店の基準で）が運ばれてきた。

……まだ少し頭痛がするけど、この量なら食べ切れるな。

俺が箸を割ろうとした、その時。

「そして！！これがお嬢ちゃん用の特別最強ラーメンだ！！！」

ドゴオン！！！！

……待て、何だ今の音？

俺はそれが置かれたであろうメリスの方を見て………硬直した。

そこにあったのは、金属だった。

円筒形の胴体と、それを上から押さえるふた、そして胴体の上の方には運びやすいように取っ手がついていて、ふたも外しやすいように、中央に同じ物がついている。

……世間一般では、それをこう呼ぶ。

「……………鍋！！？」

そう、メリスの目の前に置かれているのは、文句のつけようがない程立派な鍋だ。

もちろん大きさも立派だ！！つか、ついに器に盛るのをやめやがった！！！！

「……え〜と……」

「……………」

「はっはー！……何の冗談だー？」

『ソレイユ』の三人ですらまさかの鍋に驚きを隠せていない！！
この人達をここまで驚かせるなんて、この店長………できる！！

なんて冗談言ってる場合じゃねえ！！

「ふつ……俺が丹精込めて作った一品だ！！いつちまってくれお嬢ちゃん！！！！」

「いや！！器からして一人が食べる量じゃねえだろ！！そんなもん無理矢理食べたら冗談抜きに逝くぞ！？」

食べすぎて死ぬなんて聞いたことないけど、これを一人が食べたらそんな奇跡が起こる気がする！！

「……………お」

と、それを見て呆然としていたメリスが、何かを呟いた。

「おいしそうー！！！！！！」

「お前には危機感つてものがねえのか！！！！？」

問題なのは味じゃねえ！！量だ量！！

「それじゃあお嬢ちゃん！！勝負を受けてもらおうか！！！！」

……勝負？

「時間無制限！！お嬢ちゃんがこれを食べ切れたらお嬢ちゃんの勝ち！！！残しちまつたら俺の勝ちだ！！！」

バン！と具がはみ出してしまりきつてないふたを叩く店長。

「と言っても！！俺が勝ってもお嬢ちゃんにペナルティはないがな！！」

お嬢ちゃんが勝つたら、この店の無期限無料券を進呈しよう！！

「！」

「ほ、本当！！？」

顔を輝かせるメリス。

……いや待て。

「メリス、俺達いつまでもこの町にいるわけじゃないぞ？」

「……あ、そっかー……」

それを聞き、メリスはがっくり肩を落とす。

いくら無期限無料でも、この店でしか使えないんじゃないじゃ持ってもあんまり意味ないからな……。

「そっか！！お前らこの町の奴じゃないのか！！！」

「は、はい！！！」

「……ならば！！これをやるう！！！」

ビツ！と店長は自分の後ろを指さす。

そこにあつたのは、大きなダンボールいっぱいのお菓子だった。

「…………お菓子!!!!」

メリスがうれしそうな声を上げる。

「俺の息子は菓子職人でな!!!!」

たまに作った菓子を送ってくるんだが…………俺は甘い物が苦手で残
しちまう!!!!

残り物で悪いが、お嬢ちゃんには良い賞品だと思つたんだ!!!!」

「うん!!!!すつごくうれしい!!!!」

メリスは顔をキラキラ輝かせる。

…………つてか、店長の息子菓子職人なのか、この大男の息子が…………。

…………血筋つて分からないな…………。

「…………あ、あのメリスさん？」

「はい！なんですかイアさん？」

「…………それ、食べ切れるのですか？」

ランディアさんは苦笑いを浮かべて、メリスの前に置かれた鍋を見る。

…………まあ、当然の疑問だよな。

つてか今気づいたけど、ランディアさんの器、大盛り用なような…………。

…………この人見かけによらず結構食べるのか？

「…………イアさん」

「はい？」

メリスはランディアさんに真剣な眼差しを向け、こう言った。

「何事も挑戦です！！！！！！」

「無謀すぎるだろ！！！！」

食べる自信ねえのかよ！？

そんなんでよく食べる気になったな！！！！

「……が、がんばって下さい！」

ランディアさんは苦笑いを浮かべたまま、拳を握り、ガッツポーズを見せる。

「それじゃ！！時間無制限だが一応計るぜ！！！！」

店長はストップウォッチ、そしてメリスは箸を構える……！！

「よおい……ドオオン！！！！」

ドラゴンの咆哮並みの大声と共に、勝負が始まった……！！

……俺は、いや俺を含めた全員は、その光景を、啞然と見ていた。

……え？勝敗はどうなったのかって？

野暮なことを聞くんじゃないよ。

……強いて言うなら、俺達は、『人が人を超える所を見た』……それだけだ。

（サイドアウト）

「……すっげーなメリス……」

レイラはその光景を見て、思わず呟いた。
他の全員も啞然としている。

……と、その時。

「……小娘、一ついいか？」

レイラが声の方を向くと、誰もいなかった席に、いつの間にかロギが座っていた。

「なんだ？」

レイラは心なしか上機嫌で対応する。

……もちろん理由は、『坊主』や『小僧』ではなく、『小娘』と呼ばれたことだ。

「お前が戦う時に纏っていた、あの白いオーラ。……あれはどこで身につけた？」

「どこかって……ウチの道場で、親父から教わったものだけ？」

レイラは質問の意図が分からず、内心首を傾げつつ、答える。

「……そうか、やはりな」

ロギはそれを聞き、小さく呟く。

「……お前、『拳魔一同流』の跡取りか」

「……ウチの道場を知ってんのか？」

レイラは少し驚きつつ、ロギに問う。

「俺は知らないが……隊長から聞いたことがある」「隊長？」

「……スイーツ王国騎士部隊隊長だ」

「……」

レイラは驚き目を見開いた。

「……そついや、親父がそんなこと言ってたな……」

「……話はそれだけだ」

ロギはそついうと、ゆっくりと自分の席へ戻ろうとする。が、レイラを通過する所で、一旦止まる。

「……その緑色の瞳。お前も、『あの体質』を受け継いでいるのか」

「……悪いかよ？」

「……いや、同情をする気もない。『それ』が役に立つこともある
だろうからな」

「へっ」

短い会話を終え、ロギは自分の席へと戻る。

「……」

レイラは誰にもばれないよう、小さくため息をついた。

「……別に、『精霊』に嫌われたって、死ぬわけじゃねーんだから
な」

狭い店内だったが、ロギ以外はメリスに気を取られていたため、その
喧騒が耳に入った者はいなかった。

くハディサイドく

『ごちそう様でしたー!!』

「おう!!また来てくんない!!」

俺達は勘定を終え、外へと出た。

……にしても、本当にすごかったなメリス。
正直夢だったんじゃないかと思えて仕方がない……！！

しかし、メリスが持っているダンボールいっぱいのお菓子が、俺を
現実に引き戻した。

「ハデイ！ぼーっとしてないで手伝ってよ……！」

「あ、ああ、悪い」

俺はそう言っつて、店長がくれた大きな袋にダンボールの中のお菓子を
半分ほどつめる。

「そーいや、あんたら兵士なのにいつまでもこの町にいいの
か？」

レイラが『ソレイユ』の三人に質問をする。

「あ、いえ、明日からはまた仕事がありますので、今日の夕刻には
この町を発ちます」

「ええ！？」

ランディアさんが行ってしまつと聞いて、メリスはショックを受け
たみたいだ。

「そ、そんなあ………」

「仕方ないよメリス、仕事なんだから」

そんなメリスをグリーがなだめる。

「……でも、夕刻に出て明日の仕事に間に合うんですか？」

俺は疑問に思ったことを聞いてみた。

ここから首都までって、歩いたら一週間以上かかるって聞いたけど……。

「大丈夫ですよ、空間転移テレポートを使いますから」

あ、なるほど、それなら一瞬だもんな。

「……あれ？空間転移テレポートってそんな長距離できるんですか？」

「この町の物は可能みたいです。魔力は私が補給しますし」

グリーの疑問に、またもランディアさんが答える。

魔力を補給するってことは、魔法じゃなくて、魔導装置が何かを使うのか？

一応説明すると、空間転移テレポートってのは離れた場所へ一瞬で移動する時空魔法の一種だ。

当然応用魔法だけど、その中でもかなり難しく、基礎魔法レベル4ぐらい難しいって言われている。

それと同じことができる魔導装置があって、むしろこっちの方が一般的だな。

……ただし、それは個人で買えるような代物じゃないし、大きすぎて持ち運べないらしいけど。

「今日の午後5時に発つ予定だからなー！良かったら見送りに来てくれなー！」

「あ、はい！」

「絶対行きますー！」

「ありがとうございます。それでは、また！」

『ソレイユ』の三人は、俺達から離れ、町を歩き始めた。

「……………ここでいいんだよな？」

午後五時、俺達は広場に来ていた。

そう、昨日出発前に冒険者達が集まった広場だ。

「……………魔導装置っぽい物なんてないけどな……………」

俺はきよろきよろと周りを見るが、それらしいものは見当たらない。

……代わりに、『ソレイユ』を見送りに来たであろう、たくさんの冒険者と町の人達が目に入った。その人達は丁度店が並んでる前にいて、広場を取り囲んでいた。

俺達もそれにならって広場の周りに座る。

たぶん、中央に『ソレイユ』が来るんだろうな。

「……やっぱり、みんな来てるな」

「そりゃそうだよ!!」

「今回の依頼は、『ソレイユ』の力なしじゃ絶対成功しなかったからね」

グリーの言う通りだ。

『ソレイユ』がいなかったら、犠牲者0どころか、下手すりゃ全滅してた。

ランディアさん達だけじゃない。

この町の『防衛』についた五人と、ビスケット町の『防衛』についた三人。

その人達がいたから、気兼ねなく『殲滅』に取り組めたんだ。

「……あ、来たよ!!」

メリスの声が聞こえ、それとほぼ同時に広場が歓声に包まれた。

『英雄達のお出ましだあ!!!!』

『精鋭部隊ソレイユ万歳!!!』

『あなたたちのおかげで生き残れたぞ!!!』

『感謝しても感謝しきれねえ!!!』

『本当にありがとう!!!』

ランディアさんを含めた11人の『ソレイユ』に、冒険者と町の人
が感謝の声を上げる。

『ソレイユ』はそれを聞いて、誇らしげな様子だったり、照れてい
たりした。

……なんか、シルムさんも少し照れてるように見える、ような……？

「皆さん!!!」

と、先頭にいたランディアさんの声が聞こえ、歓声が一旦止む。

「私達『ソレイユ』の見送りに出向いて下さり、ありがとうございます
ます!!!」

ランディアさんは頭を下げるのではなく、人々の顔を見回し、本当
にうれしそうな笑顔でそう言った。

……なんか、若い男冒険者が数人顔を赤くしてるような。

「私達から、皆さんに伝えたいことがあります!」

……伝えたいこと?

疑問に思ったが、口には出さずにおいた。

他の人も同じみたいだ。

ざわめきは起こらず、全員がランディアさんの次の言葉を待っていた。

「まず、チョコレート町在住の皆さん！

今回の危機は去りました！そのことについてはご安心下さい！！

そして、もしかたこのようなことが起こったとしても、スイーツ王国軍が総力を以て、皆さんをお守りいたします！！」

ランディアさんの力強い言葉に、町の住人達から歓声が上がる！

「そして、冒険者の皆さん！

今回は皆さんのお力により、誰一人の犠牲もなく、この町を守ることができました！！本当に、ありがとうございました！！」

「感謝するのはこっちの方なのにな」

レイラがそんなことを呟く。

でもその顔は、まんざらでもない、といった感じだ。

「これから先も、皆さんのお力を借りることがあると思います。

その時は、どうかお力添えをお願いします！！」

『もちろんだー！ー！！！！』

『あんたらのためなら何でもするぜー！ー！ー！』
『イアさー！ー！ー！ー！』

……最後のメリスだな。
気持ちは分かるけど、名前呼ぶだけってお前……。

歓声が治まると、チョコレート町の町長が、ランディアさんに感謝の花束を渡した。

「ありがとうございます！」

「いえいえ、こちらこそ！この町を守って下さり、本当にありがとう！ー！ー！」

町長とランディアさんは堅く握手をし、町長は下がった。

……なんか若い男冒険者が数人、村長に妬みの視線を送っているよ
うな……。

「中将、お願いします」

「はい！」

と、シルムさんが広場の中央に行き、そこにあったくぼみに手をかけ、引き上げた。

その穴の中には、直径30cm程の紫色の丸い玉があった。

「あれは……？」

「……魔宝玉だね。」

魔力を蓄える性質のある宝石の一種だよ」

ランディアさんがそれを持ち、『集中』を始める。

『集中』によつて集まった茶色い光は、その魔宝玉に吸い込まれていく。

そして、魔宝玉は紫色に発光し始めた。

「はい、これで十分だと思います」

「ありがとうございます」

シルムさんはそれを受け取り、穴の中に入れ、ふたを戻す。

「マウロさん！お願いします！」

「了解！！」

酒場のおやじは広場にある一番大きな女神像のそばにいた。

おやじは像の背中にあるレバーを降ろす、と。

広場の中心から半径5m程の地面が淡い紫色に輝き、そこに淡い虹色の魔法陣が浮かび上がる。

さらに、紫色の光は地面の浅いくぼみに合わせて、広場全体へと広がる。

それもまた、複雑な魔法陣を描いていた。

「これは……！？」

「……そうか」

驚く俺達を尻目に、グリーが呟く。

「……この広場全体が、魔導装置なんだ」

淡い虹色の魔法陣から白い光が立ち上り、『ソレイユ』11人を包み込む。

「それでは皆さん！」

……またいつか、お会いできる日を楽しみにしています!!」

ランディアさんの声が聞こえたその直後、白い光が消え、同時に『ソレイユ』の姿もその場から消えていた。

「……行っちゃったね……」

「……ああ……」

メリスの呟きに、俺も呟くように答える。

『ソレイユ』の見送りはもう終わった、が。

冒険者も町の人も、しばらくの間広場に留まっていた。

そして、『ソレイユ』が、自分たちの恩人がさっきまでいた場所を、誇らしげに見つめているのだった……。

第18話 大食いと別れ（後書き）

なんか思ってた以上に長くなりました！

二話じゃなくて三話に分けた方が良かった気がしてきた……。

まあなんとか書きたい所までは行けたので、

予定通り次回で第二章は終了できると思います！

ちなみに、レイラの『体質』については

『冒険者ライフ！』ではあんまり掘り下げない予定です。

第19話 別れと約束

「俺、明日この町出るわ」

……………え？

『ソレイユ』がチョコレート町を去った次の日の朝、酒場の部屋で、突然レイラがそう言った。

「で、出るって……………」

「おう、この町もうあんまり依頼ないからな」

とまどうメリスに、あっけらかんと言うレイラ。

「……………お前らとも、今日でお別れだ。まっ！そういうわけで、最後の一日よろしくな！」

「あ、ああ……………」

ニツと笑うレイラに、俺は生返事しか返せなかった……………。

メリスも、グリーも、少しうつむいている。

「……………どうした？別に今生の別れって訳じゃねーだろ！冒険者同士、そのうちまた会えるっての！」

「う、うん……………。……………そうだね！」

メリスはそう言って無理やり笑顔を作る。

……俺達三人の中で、一番レイラと仲良かったのメリスだもんな……。

「……そんじゃ、今日は四人で観光でもするか！」

「今日も、だろ？」

「って言っても、もう目ぼしい場所はあらかた回っちゃったよ？」

まあ、昨日と三日前の二日間はほとんど観光してたからな。

そもそもこの町はお菓子が有名ってだけで、別に観光スポットってわけでもないし。

「ラーメン屋！！」

「まだ飽きてねえのかお前！？」

「ってか、そこ観光する場所じゃねーだろ！」

朝食終えてすぐラーメン屋に行くっていう、その発想がすげえ。さすがメリス。

「んー……つかさ」

「レイラ、行きたい所とかあるのか？」

「お菓子屋！！」

「お前には聞いてない！！」

横やりを入れるメリスにキツパリ言い放つ。

……レイラとのお別れ会も含んでるって、分かってるよなこいつ？

「俺観光とかじゃなくてよ、依頼やりてーんだけど」

「依頼？」

「おう、お前らともう一仕事やってみてえ！」

ニツと笑うレイラ。俺達三人も異論はなかった。

「到ー着ー！！！」

「言わなくても分かってるって」

大声で騒ぐメリスに一応ツツコミを入れる。

……あんまり意味ない気もするけど。

「ここが『カカオの森』か……」

町を出て徒歩20分。

俺達は、チヨコレート町に行く時に通った『小人の遊び場』よりも少し小さい森、『カカオの森』に来ていた。

名前の通りカカオの木が多い、というか森のほとんどの木がカカオの木らしい。

……そう、俺達の受けた依頼は『カカオの採取』だ。

「この袋全部一杯にすりゃいいんだよな？」

レイラは依頼主から渡された袋を広げる。

……けっこうでかいな。

袋は全部で五つ。これ全部にカカオの実を入れればいいらしい。

ちなみに持つのは俺が二つ、レイラが二つ、グリーが一つ、メリスはなしだ。

……いや、メリスは持つって言ったんだけど、グリーがだったら自分が二つ持つって言い始めて……。

「……グリー、これ一杯に詰めたらけっこうな重さになるぞ。

二つも持てるのか？」

「何言ってるんだいハディくん。言うまでもないだろう？」

「……ああ、聞くまでもないな」

聞くまでもなく無理だ。

「そんな重い物をメリスに持たせるわけにはいかないじゃないか！

！」

「あのな……」

「なら俺とハディが二つ持てばいいんじゃないか？グリーも一つぐらいなら持てんだろ？」

……というわけだ。

まあ、俺もレイラも異論はなかったんだし、いいか。

「ねえ兄さん、カカオって何？」

「いや、それは知つとけよ」

お前の好物の原料だぞ……。

「カカオは木の名前だよ。その木になる種子がチョコレートの原料になるんだ」

「チョコ、チョコレート!？」

途端にメリスは顔を輝かせる。

……本当菓子好きだなこいつ……。

訂正、食べ物全部好きだよこいつ。

「どれどれ!？どれがチョコレートの材料になるの!？」

「材料じゃなくて原料だけだね。ほら、これだよ」

グリーは近くの木の幹からぶらさがっている、直径20cmぐらいの緑色の果実を取って見せる。

……あ、メリスのテンションが下がった。

「……おいしくなさそう……」

「いや、それそのまま食べるわけじゃないからな？」

「正確にはこの中に入ってるカカオ豆が原料になるんだよ」

グリーはそう言って、それを袋の中に入れる。

「……30個ぐらいは入りそうだな」

「詰めればもうちょい入るだろうな。」

報酬は重さによるって言われてるから、できるだけ詰めるようにするか」

その分重くなるし時間がかかるけど。

「それと、この森には低位の魔獣、魔草が生息してるらしいから、気をつけてね」

「別に低位ならどーってことねえけど？」

そう言うレイラに俺も傾く。

低位魔獣にも危険度Dとかいるかもしれないけど、俺達四人なら中位魔獣のキラールフでも倒せるからな。

「……その袋を持ちながらでも？」

「あ」

しまった、そうだ。

今は大丈夫だけど、カカオの実を詰めたこの袋を抱えて戦うつてのはきつい……ってか無理だ。

「……まあ、戦う時は置いておいて、僕やメリスが見ておけば大丈夫だと思うけど……」

あ、そうか、その手があった。

……ってグリーなんか思いつめてるけど……。

「何か問題でもあるのか？」

「……いや、考え過ぎだね。それじゃ、そろそろ始めよう」

「おう！」

「いっぱい採っておいしいチョコレート作ろうね！」

「いや、俺達を作るわけじゃないだろ！！」

話をしながら、俺達は森の中に入っていった……。

「……ふう、やっと後二つか……」

二時間後、ようやく三つの袋が一杯になり、残るは俺とレイラの袋一つずつだ。

ちなみに、途中何度か魔物に襲われたけど、グリーの言った通り、袋を置いて戦えば楽勝だった。

……本当は魔物の毛皮とかもとりたいけど、この近くには川がないし、毛皮とるのに時間かかるからな……。

「それじゃ、少し休憩しようか。二人は疲れただろうし」

「俺はまだ大丈夫だぜ？」

「……悪い、俺少し休みたい」

え？何で疲れてるかって？

戦闘も木の上に登ってカカオの実を採るのも、俺とレイラがやってるからだ！

「もう疲れたのかよ？」

「逆に何でお前疲れてないんだよ……」

別に動けないほどじゃないけど、少し休みたい……。

「別にそんなに急いでるわけでもないしね、この辺で少し休もうか」

グリーはそう言って、近くの岩に腰を下ろす。

あ、この辺ちようどいい岩がけっこうあるな。
だからこの辺で休もうって言ったのか。

「ねえレイラ！」

「ん？」

「レイラって何才で冒険者になったの？」

休んでいると、メリスがそんな質問をした。

……確かに、13才でC級クラス冒険者だもんな。

一体何才で冒険者になったんだ？

「E級クラスになったのは10才、家を出てすぐだな」

「10才!？」

「ちよ、ちよっと待て!!!家を出た!？」

10才で冒険者つてのもすごいけど、それ以前に10才で家を出たつて何だよ!？」

「あゝ、ちよっと説明長くなるけどいいか？」

「あ、ああ」

「俺さ、『拳魔一同流』つていう流派の跡取りなんだよ」

「『拳魔一同流』?」

「おう、それで、『跡取りは10才で家を出て、旅をしなければならぬ』つて決まりがあるんだとよ」

「はあ!？」

俺は思わず声を荒げる。

「死ぬだろそんなことしたら!!」

魔物もそうだし、何より収入がない。

普通に考えたら、のたれ死ぬのがオチだ!

「まーな、俺も初めはふざけんなって思ったぜ。……けど、今はどつちかつつーと感謝してるな」

「……感謝?」

「おう、おかげで冒険者つていう天職になれたからな!」

俺の疑問に、レイラはニツと笑って答えた。

「でも、何で冒険者になんてなったんだい?」

冒険者は完全な実力主義……子供だからって、妥協なんてしてくれないよ?」

「だから、だな。」

完全な実力主義ってことは、裏を返せば、力さえあればガキでも認められるってことだ」

レイラはそう言って、グツと右手を握り締める。

「家を出る前から、出たら冒険者になろうって決めてたからな!」

レイラはニツと笑う。

本当に、レイラにとって冒険者は天職なんだな。

「でもすごいね。」

10才で冒険者になったのも、たった三年でC級クラスになったのも

「まっ! けっこう運も良かったと思うぜ?

俺が行く先々でいつも事件が起きてたからな」

普通に考えたら運が悪い、だろうけど、冒険者にとっては運が良いとも言える。

依頼がないと冒険者は仕事ができないからな……。

「それで、旅っていつまでしなきゃいけないの?」

「自由、だってよ。」

自分が納得できるまで旅をして、強くなったら帰って、当主と実戦をして、認められなきゃいけない」

「レイラは十分強いと思うけど……」

「サンキュ……。……でも、俺はまだまだ納得できてねえからな。

もうしばらくは一人で旅をして、冒険者として強くならねーと！」

……………一人で、か。

「レイラは、誰かと組もうとか考えてないのか？」

「ん〜……」

レイラは少し考え、言った。

「今の所は、な。まだ俺は未熟だからな……他の奴に頼りたくねーんだよ」

「……………そうか」

レイラの表情は、あんまり明るくなかった……。

本当は仲間が欲しいんじゃないか、とも思うけど、たぶん、今レイラが言ったことも、本当のことなんだろうな……。

「さて、これでいいか……」

五つ全ての袋が一杯になったのは、さらに一時間後だった。

俺は一杯になった袋の口を固くしばる。

やっと集めたのに、こぼれたり、魔物の血がついたりするのはいじめ
んだからな！

「それじゃ、帰ろうか」

「なんだグリー、別に急がなくても……」

早速歩き出すグリーにそう言った、

その時。

「……………ん？」

「気づいたか、ハデイ」

不穏な気配を感じ、辺りを見渡す。

レイラは袋を下ろし、コキコキと手を鳴らした。

「……………困まれてるぜ」

周りの木の影や草むらに魔獣がいるのが分かった。

数は……………10……………15……………20、匹ぐらいか……………。

「……………やっぱりこうなったね……………」

「グリー？」

「この森の魔物、ほとんどがカカオの実を食べるんだよ」

……っことは。

「俺達はいいつらのエサを大量に持つてるってわけか……」
「どうする？」

「……この袋抱えて逃げるってのは逆に危険だしな。
メリス、グリー、袋頼んだ」

四つの袋を二人の近くへ軽く投げる。

「二人で大丈夫かい？」

「大丈夫……だとは思っけど」

「やばそうだったら援護頼むぜ！」

レイラは言い終わるや否や、向かってきたワイルドウルフを殴り飛ばす！

吹き飛んで木にぶつかったワイルドウルフは、そのまま動かなくなつた。

そしてそれを合図に、周りから一斉に魔物が飛び出してくる！

「ちっ！」

俺は剣を引き抜き、向かってきた魔物に斬りかかる。

「気をつけて！ワイルドウルフだけじゃない！！」

グリーの言った通りだ。

実際俺の前にいるのはクマとイノシシの魔物だし。

「うわっ!!」

振り下ろされるクマの爪を跳んでかわし、懐に飛び込んで袈裟斬りにする。

竜に比べれば大したことないな!

「ハデイ危ない!!」

「え?」

その時、すでに目の前にイノシシの魔物が来ていた。とっさに剣を盾にする……が、抑えきれずに吹き飛ばされる。

「うわっ!!」

起き上がるうとした時には、もう目の前にその魔物が……!!

ドゴオッ!!

魔物が俺にぶつかる直前、レイラがその魔物を殴り飛ばした。

「油断しすぎだ!!」

「悪い!」

「二人とも!そいつは『バイオレントボア』!低位魔獣だけど、危険度Dだ!!」

うわ、低位でも危険度Dって本当にいるんだな……。

そんなことを思っていると、バイオレントボアは起き上がり、また突進してきた!

「フレイア!!」

と、俺達の後ろから火炎が発射され、バイオレントボアに直撃する!

しかし、バイオレントボアは炎に包まれながらも突進してきた!

「うわっ!!」

俺とレイラ、そして後ろにいたメリスとグリーも慌ててよける。

バイオレントボアは後ろにあった岩にぶつかり、倒れて動かなくなった。

「つて、おい!袋大丈夫か!」

「あっ!!……良かった、大丈夫だよ!」

ギリギリ踏みつぶされはしなかったみたいだ。

と、ほっとする間もなく、他の魔物が襲ってくる!

「ったく!さっさと片付けて帰るぞ!!」

「おう!!」

俺は剣、レイラは拳を構えて、襲い来る魔物へと向かっていった。

その後、魔物を撃退した俺達は、依頼主に袋を渡し、報酬を受け取った。

「あゝ終わった……」
「楽しかったな！」

レイラはニツと笑う。

……本当、こいつには冒険者って天職なんだな……。

「それじゃ、報酬を分けようか」

酒場のイスに座って、報酬をテーブルの上に乗せる。

今回の報酬は1万Gだ。

「まあ、普通に考えたらこうだよな」

レイラの方へ半分の5000Gを移動させる。

「いや待てよ、普通こうだよ！」

レイラは1万Gを四等分し、俺、メリス、グリー、そして自分に分けた。

「……いいのか？レイラ」

「何がだよ？」

レイラはわけわからん、とでも言いたげだ。

俺達三人、とレイラ、で分けたんだけど……まあ、本人がいいならそれでいいか。

その後、俺達とレイラは他愛もない話をしたり、町で買い物をした
りして……気づいたら、もう夜になっていた。

「ごちそう様ー!!」

「……どうしよう、だから早えよ!!」ってツッコむのが面倒に
なってきた」

「おい、サボるなツッコミ！」

「いやだって、最近メリスの食事のスピードが人外のものになつて
るだろ……」

今日の夕食はご飯、みそ汁、肉を入れた野菜炒め、漬け物、デザー
トにチョコアイス。

さあ問題、これを完食し、なおかつご飯を四杯、野菜炒めを二杯お
かわりする。

それを10分でできる人間は存在するのだろうか？

「まあ、もしいたらそいつは人間じゃないな」

「ハデイ!？」

何でそんな呆れてるような目で私を見るの!？」

「呆れてるんじゃない、呆れ果ててるんだ」

「よりひどくなっちゃった!？」

いや、分かってたけど、メリスの食欲の異常さは分かってたけど…

…!!

「お前、遠慮って言葉知らないのか……」

「失礼な！意味ぐらい知ってるよ！」

「いや、意味を知ってるかなんて聞いてない!!」

さつきから酒場のおやじの視線が痛いんだよ。

そりゃあこんだけ食われたらな……。

「おい、お前からこれ以上食べるなら追加料金取るぞ……」

「ええっ!?!? そんな!!」

「……すみません。」

ってかメリス、お前まだ食べる気だったのか!？」

「ごちそう様って言ったよなこいつ!？」

「……食べるつもりだったけど、今日は我慢するね……」

どう考えても『我慢』の使いどころを間違えてる……!!

いや、メリスにとっては『我慢』なんだろうけど!!

「ごちそうさん!!」

「お前も早いなレイラ……」

ちなみに俺は後ご飯と野菜炒めを少しとチョコアイスが残ってて、

グリーはまだ半分ぐらいしか食べていなかったりする。

……言つとくけど、俺達が遅いんじゃないぞ!?

光陰矢のごとし、ってことわざあるけど、あれ本当だな。

風呂に入って、また四人で話をしていると、気づいたら、12時を回っていた……。

「そんじゃ、そろそろ寝るか!」

「……………うん」

メリスの表情は、朝と同じで暗かった。

『俺、明日この町出るわ』

朝のレイラの言葉を思い出す。

明日になったら、レイラはこの町を出ていく。

……別れが嫌なら、俺達も出ていってもいい、俺達だって冒険者なんだからな。

……でも、そうやってなんとなくついていく、ってのは、何か違う気がする。

もやもやした気持ちで、答えを出すこともできないまま、俺の意識は闇の中へ消えていった……。

「……………ん……………」

俺が起きた時、外はもう明るくなっていた。

体を起こし、周りを見る。

……………そして、レイラの姿がないことに気づいた……………。

「メリス！！グリー！！」

俺は慌てて、まだ寝ている二人を起こす。

「んー……何ー……？」

「どうしたのさ……」

「いいから起きろー！！レイラが……いないんだー！！」

まだ寝ぼけている二人にそう言うと、二人も慌てて飛び起きた。

「レ、レイラ！？」

「そんな……」

二人は空になっているレイラのベッドを見て、愕然とする。

何でだ……ちゃんと、別れもしてないのに……！！

……と、その時だった。

「おっ、全員起きてたのか、おはよー！」

開いた扉から聞こえてきたのは……レイラの声だった。

「レイラーー！！」

「お前どこ行ってたんだ！？」

「どこって、筋トレとランニングだぜ？」

……。

「おい、どうし……どうしたお前ら！？なんで一気に脱力するんだ！？」

「そうだったな、そーいや朝は筋トレとランニングしてたなお前……」

「良かったー！！」

勝手に出ていっちゃったかと思ったよ！！」

メリスの言葉を聞き、レイラの表情が固まる。

「……………」

「……レイラ？」

「いや……俺、別れとか苦手だからよ、実はそれも考えたんだけどな。」

「……やっぱりお前らとは、ちゃんとさよならを言って別れたかったんだ」

レイラはニツと笑う。

「……だが、それはいつもより少し寂しげな笑みだった……。」

朝食後、レイラはまとめてあった荷物を持って町を出る。

俺達は、町の入口までそれを見送りに行った。

「……………そんじゃーな」

レイラは俺達に笑みを向ける。
らしくない、寂しげな笑みを……………。

そして、外へ歩き出した、その時。

「レイラ！！！！」

メリスがレイラの元へと走り、そして、右手の小指を突き出した。

「約束！！！！」

「……………え？」

「約束しようよ！！また……………また、会おうね！！！！」

必死に涙をこらえるメリス。

レイラは少しきょとんとしていたが、ニッと笑い、小指を絡ませた。

『指切りげんまん、嘘ついたら針千本のーます！指切った！！！！』

指切りをして、二人は手を離す。

レイラはメリスに背を向け、数m歩き、そしてまた振り返った。

「メリス！ハデー！グリー！！」

レイラは『いつもの笑い』を浮かべ、右手を大きく振る。

「またな！！！！」

大声でそう言うと、再び俺達に背を向け、歩き出す。

メリスは、泣きながら大きく手を振り続けた。

俺は涙をこらえて、グリーも少し目頭を押さえて、見えなくなるまで、戦友を見送ったのだった……。

第19話 別れと約束（後書き）

というわけで、第二章終了となります。

今回は幕間2を挟んで、第三章に入ります。

最後ということ、

今まで活動報告でやっていた次回予告を、
今回から後書きでやろうと思います。

ではどうぞ！

「どーも！レイラ・エラルドだ！

俺の出番はここまですてーだけど、

ハデイ、メリス、グリーの話はまだまだ続くから
楽しみにしてくれよな！

そんじゃ次回予告だ！

三人は新しい町で依頼を捜し、

一つの依頼を受けることにする。

そこから、新しい『物語』が始まるみてーだな！

次回、冒険者ライフ！第三章『弱肉強食』

第20話『天地開闢』
てんちかいびやく

「そんじゃ、またいつか会おうぜ!」

次回予告はこんな感じですが、

あくまで予定なので、

予告と実際の内容が違ってることがあるかもしれません。
ご了承ください。

サブキャラ設定2 (前書き)

設定なので、軽くネタバレを含みます。

サブキャラ設定2

イア・ランディア

年齢：23歳 性別：女

身長：160cm 体重：??kg（女なので）

髪：背中まである暗い茶髪を三つ綱にしている、毛先は黒

瞳：茶色

『八つの魔塔』の一人、『星の賢者』の異名で知られている。
現在の『魔塔』において、唯一の『大魔導師』^{ハイウェイザード}であり、
史上最年少の『魔塔』でもある。

性格は少し子供っぽく（ハデイいわく『少しメリスに似てる』）、
顔も歳の割りに幼く見える。

スイーツ王国軍魔法部隊隊長にして、
精鋭部隊『ソレイユ』の副隊長でもある。階級は『中将』。
階級では上がっているが、実力はスイーツ王国どころか、
全世界の兵士の中でトップといっても過言ではない。

地属性の魔法を得意とし、基礎魔法はレベル5まで、
応用魔法も十数種類習得しており、
その内のいくつかは、基礎魔法レベル5並みの魔法である。
地属性だけでなく、無属性の魔法も数種類習得している。

ロギ・シルム

年齢：25歳

性別：男

身長：185cm

体重：70kg

髪：短めの銀髪

瞳：灰色

スイーツ王国軍騎士部隊副隊長、階級は『准将』で、異名は『銀狼』。

また、精鋭部隊『ソレイユ』の一員でもあり、^{クラス}A級冒険者を超える戦闘力を持つ。

愛剣は『シルバーファング』。

刀身2m、幅60cmの銀製の大剣。

常に無表情で冷静沈着な性格。

弱い者を見下すような言動を見せることがあるが、

これは『弱い者は強い者に守られるべき』、

『弱者が出しゃばっても死ぬだけ』という考えによるものであり、一人の強者として、弱者を守ろうとする気持ちは人一倍強い。

イアとは故郷が同じで幼馴染。

三年前、ある事件により決別したことがあるらしい。

現在は同じ職場で働く者同士として頼りにしているが、同時にイアよりも弱い自分に不甲斐無さを感じている。

エンジ・アイラー

年齢：27歳 性別：男

身長：178cm 体重：63kg

髪：茶髪 瞳：鈍色（濃い灰色）

スイーツ王国軍補助部隊所属、階級は『中佐』。

『魔眼』と呼ばれ、悪党に恐れられている。

精鋭部隊『ソレイユ』の一員、本人いわく『補助専門』。

いつも軽快な笑いを浮かべていて、お気楽な性格。

語尾を伸ばす癖がある。

神出鬼没で、いつの間にかいたりする。

回復魔法、結界魔法などの補助魔法を得意とする。

異名の通り、目を通じて相手に効果を発する

『魔眼』・『邪眼』と呼ばれる魔法を多用する。

武器はもっていないが動きが早く、

敵の攻撃をよけつつ、魔法を使う。

『十里眼』や『千里眼』など、

離れた場所を見る魔法を使えるため、

指名手配犯などの捜索に活躍していて、

それらの犯罪者には恐れられている。

ちなみに既婚者。

PV1万突破記念番外編 季節外れのバレンタイン（前書き）

PVが1万を超えました！！

ということで、

短いですが記念小説なんてものを書いてみました！

PV1万突破記念番外編 季節外れのバレンタイン

（サイドアウト）

「バレンタインチョコを作ろう!!」

「……………え？」

「はあ？」

突然妙なことを言い出したメリスに、イアとレイラは首を傾げる。

「あのメリスさん、バレンタインは2月ですよ……………？」

2月、つまり冬だ。

しかし、今の季節は夏、もうすぐ秋である。

「だって！せっかくチョコレート町に来てるんですから!!バレンタインやりたいじゃないですか!!」

「いや、意味が分からねーけど」

レイラは呆れた顔をする。

「よーするに、手作りチョコを男共にプレゼントしてーのか？」

「そう!!」

「…………バレンタイン関係ねえじゃん」

「チョコをプレゼントといえばバレンタインでしょ？」

「時期外れにも程があるだろ……………」

要するに、メリスがしたいのはバレンタインの名を借りた手作りチ

ヨコのプレゼントだ。
それにイアとレイラを巻き込んだのである。

「まーお前らには世話になってるし、俺は別にいいけどよ」

「えっと、私は……」

「イアさんにも！！気になる異性の一人ぐらいはいますよね!？」

ズイツとメリスはイアに顔を近づける。

「……………はい、まあ……………」

「わー！！誰！？誰ですか!？」

「聞くなよ……………」

レイラはそう言って、興奮状態のメリスをイアから引き離す。

「そんで？まあ材料はお菓子屋とかでいくらでも売ってるだろーけど、場所はどすんだよ？」

「……………」

レイラの質問にメリスは口を閉ざす。
考えていなかったようだ。

「あの、場所ならなんとかありますよ」

「本当ですか!？」

顔を輝かせるメリスに、イアはにっこりとほほ笑んだ。

「それじゃ、自由に使ってください」

「はい、ありがとうございます。マウロさん」

「いえいえ！こんな汚い所で良ければいくらでも」

マウロこと酒場のおやじはそう言うと、三人を残して部屋から出ていった。

「なるほど、酒場の厨房ね……」

「でも、いいんですか？借りちゃって」

「はい、昨日の宴で冒険者の方達はみんな寝ているみたいで、夕方までなら自由に使っていいそうです」

イアは材料をテーブルに並べながら言う。

チョコレート、生クリーム、ココアパウダー。

そう、今回作るのは『トリュフ』だ。

「トリュフって、チョコにココアパウダーまぶしたやつだよな？」

「うん！簡単だし、おいしいし！」

「そりゃ材料がうまいからな。失敗さえしなきゃうまいだろ」

「そうじゃなくて！愛情！！大切なのは愛情だよ！！」

メリスは話しながら、チョコレートを細かく刻んでいく。

「何やってんだ？」

「何って……チョコレートを刻んでるんだよ？」

「湯煎にかける前に刻まないと、溶けるのに時間がかかりますからね」

「……直接火で溶かせばいいんじゃないの？」

とんでもないことを言い出すレイラに、二人は仰天する。

「レ、レイラ！？何言ってるの!？」

「え、何かまずいのか？」

「まずいって!!絶対焦げるよ!!」

「……マジで？」

驚くレイラ。

どうやら本気で言っていたようだ。

「……レイラひょっとして、チョコ作ったこと……ない？」

「……」

凶星だったのか、レイラは明後日の方を向く。

「だ、大丈夫ですよ！」

今回作るのは簡単な物ですし、初めてでも上手くできると思いますが!

「お、おう!!」

少し不安げながらも返事をするレイラ。

「それじゃ、溶かしたチョコに生クリームを混ぜるよ！

レイラ、ゴーー!!」

「おうー!」

ポチャンッ!!

レイラは溶けたチョコに生クリームを豪快に突っ込んだ。

全部、一気に。

「ストップレイラ!!!!」

「え?」

「ごめん何でもない!!早くかき混ぜて!!!!」

「お、おう!!!!」

グルグルグルッ!!!!

「レイラっ!!!!もう少しゆっくり!!!!こぼれてるこぼれてる!!!!」

「あ、悪い!!!!」

勢いを落とし、ちょうど良い速さでかき混ぜる。

メリスはその間に、こぼれたチョコを指ですくってなめていた。

「おいしー!!!!」

「いや、こぼれたのなめんなよ!!!!」

「まあ、テーブルは拭いたので大丈夫だとは思いますが……」

「そういう問題じゃねーだろ……」

呆れながらもレイラは仕事をこなす。

「おっし！こんぐらいでいいだろ」

「それじゃ、冷水で冷やすよ。」

「……水に直接ぶちこむんじゃないからね!？」

「いや、それは流石に分かるって」

チョコを冷やし、少し固まったら手でまるめる。

チョコの量がけっこう多いので、この作業は三人で行った。

「後はココアパウダーをまぶして……できあがり!!」

こうして、途中少し問題はあったが、なんとかトリュフが完成したのだった。

「簡単なわりにはうまそうなのができるな」

「……レイラ？」

「悪い、俺足手まといだったな……」

苦笑いを浮かべるレイラ。

「……まあ少し問題はあったけど、成功したから別に良いと思うよ」

「はい！三人でがんばって作ったのですから！」

「……そうだな、サンキュー!!」

二人の言葉を受けて、レイラはニツと笑うのだった。

「それでは、今日はありがとうございました！」

「こちらこそ！イアさんがいなかったら、場所がなくて作れませんでした！」

「材料とかもそろえてくれたし、ありがとな！」

できあがったトリユフは三分し、三人で分けた。

……まあ、メリスとレイラは一緒に渡すのだが。

「……イアさん、誰に渡すのかな？」

「さーな、それよりお前はいいのかな？」

「え？」

「ハディに」

「ふ、二人！！渡すのは二人に、だからね！？」

からかい口調のレイラが言い切らないうちに、メリスは真っ赤になっ
って否定する。

二人は袋につめたトリユフを持って、ハディとグリーのいる部屋へ
と向かうのだった……。

PV1万突破記念番外編 季節外れのバレンタイン（後書き）

カッとなってやりました。後悔はしていません！

ということで、PV1万突破、および第二章終了記念。さらにいうと、

少し遅れましたがバレンタイン小説でもあります。

時期的には第18話の途中です。

……実際にはこんなことしてる時間あるか微妙ですが、まあそこは番外編ということ……。……。

第20話 天地開闢（てんちかいびやく）

「ここが港町ヨーグルトか……」

レイラと別れて数日後、俺達は新しい町へと来ていた。

港町ヨーグルト。

海に面していることから、貿易や造船、漁業などが盛んな町だ。

「港町だから……やっぱり魚料理かな!？」

「なんでいきなり昼食の話してんだよ……」

メリスはすでに昼食が楽しみなようだ、まだ宿も決まっていけないのに。

「とりあえず宿を取って、それから依頼を見に行こうか」

「そういえば、ここはギルドでも依頼を扱ってるんだよね?」

町の地図を眺めているグリーンが傾く。

冒険者ギルドには、依頼を扱っている所とない所がある。

チヨコレート町は後者だったけど、この町は前者らしい。

「でも、ギルドに寄せられた依頼はギルド所属の冒険者に優先されるから、僕達みたいな旅の冒険者は酒場に行った方がいいかもしれないよ?」

「ん〜でも、やっぱり良い依頼は冒険者ギルドの方にいくよな?」

「ギルドが信頼されていれば、ね」

どこの誰が受けるか分からない酒場より、町に根付いてるギルドの方に依頼は多くいく。

……でも、俺達が受けられるのは余ったものなんだよな……。

「まあどっちでも良いと思うけど、参考までに、この町のギルドはとっても信頼されてるみたいだよ？」

グリーはそう言って、町のパンフレットを見せてくる。

パンフレットの最初の方に、ギルドが大きく載せられていた。

「ボランティアとかもしてんのか……」

「宣伝も兼ねてるんだろうけど、良い心がけだよな。」

……それと、この町のギルド長は『大魔導師』らしいよ」

「ハ、『大魔導師』!？」

「兄さんそれ本当!？」

グリーの言葉に、俺とメリスは驚く。

『ハイウェイザード大魔導師』。

魔法使いの称号の一つだけど……この称号を持つてる人は、世界に100人いるかどうかって言われてる。

少なくとも魔法方面においては、A級クラス冒険者よりも上だろう。

「すっごーい!!こんな短い間に『ハイウェイザード大魔導師』に二人も会えるなんて……!」

……二人?

「前に誰か会ったっけ？」

「……………何言ってるのハディ」
「そういえばハディくん、最初に会った時名前聞いても分かってなかったね」

なんかバカにされてるような……………。

「イアさんだよ！イアさんも『大魔導師』なの！！」ハイウィザード

「え？あれ、でも、魔法使いの称号ってまだ上があったような……………」

ランディアさんは『魔塔』だろ？

当然一番上の称号を持つてるはずじゃ……………。

「ランディアさんは『魔塔』で唯一の『大魔導師』なんだよ。」ハイウィザード

……………だから、こういうのはなんだけど『魔塔』においては末席なんだ」

「末席！？」

あのランディアさんが！？

「といつても、彼女は『大魔導師』では間違いなく頂点だから。」ハイウィザード

比べたらやっぱり劣るだろうけど……………」

「それでも！『大魔導師』なんて滅多に会えるものじゃないんだから！どんな人なのかな？」ハイウィザード

「……………そうだね」

うれしそうなメリスに、グリーは苦笑いをしながらこう言った。

「『紫黒の魔女』。結構厳しい人らしいよ？」

「いらっしゃーい！」

適当に宿を取って冒険者ギルドに入った俺達を、なんとも変わったあいさつが迎えた。

ギルドなのにいらっしゃいって……。

「見ない顔だけど、冒険者の人かな？本日はどんなご用で？」

その人はニコニコと笑みを浮かべて俺達に近づいてきた。

肩より少し長い金髪を一つに束ね、亜麻色の瞳でこちらを見ている。顔は中性的だけど、声は少し低めだからたぶん男だろう。

「あの、依頼を見に来たんですけど」

「依頼！？うわーナイスタイミングー！」

ナイスタイミング？

「ギルド長ー！！冒険者の人達が依頼を受けたいそうでーすー！」

ギ、ギルド長！？

いきなり『紫黒の魔女』に会えるのか!!

「……………ふうん？」

奥から出てきたのは、……………正直予想外なことに、若い女の人だった。

年齢はおそらく二十代半ばだろう、かなりの美人だ。

紫黒色の髪は背中よりも長いストレート、瞳は……………なんと赤紫色、初めて見た。

ちなみに、髪の色も瞳の色も黒か茶色が一般的だ。

髪はたまに金色とか灰色とかいるけど、瞳はほとんどの人が黒か茶色、もしくはその系統だろう。

レイラといいこの人といい、珍しい瞳の人によく会うな……………。

「……………」

その人は俺達三人をじっくりと見て、こう言った。

「帰んなさい」

……………え？

それだけ言うと、その人はまた奥へと下がっていく。

「ちよっ!!…!!ごめんちよっと待ってて!!」

男の人は俺達にそう言うと、慌ててギルド長を追いかけていった。

『なんであんなこと言っんですか！？せつかくのチャンスなのに！』

『あんな小童共に受けさせる依頼なんてないわ』

『そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！！』

『今どれだけ依頼がたまってると思ってるんですか！？？』

『あなたがやればいいでしょ、コウル』

『俺だけでこなせる量じゃないですって！！』

『期限が迫ってる依頼だつてあるんですよ！？？』

『休日返上で働きなさい』

『ここ二週間休日ゼロですってば！！』

……なんか奥から会話が聞こえてくる。

苦労してるっばいなあの人……。

『あの三人にやらせれば俺の負担が減るんですから、こき使いたいならあの三人をこき使って下さい！！』

何か奥で勝手なこと言ってるないか！？

『……仕方ないわね』

了承した！？

二人は俺達の前へ戻ってきた。

「どーも、ギルド長のプラム・ブラックネスよ。よろしく」

プラムさんはめんどくさそうに自己紹介をする。

……この人が『ハイウェイザード大魔導師』、なんだよな？

「ごめんね君達。この人こんな人だから」

「どういう意味かしら？」

「決まってるじゃないですか。ギルド長は性格がぶっきらぼう過ぎるんですよ。」

そのせいで旅の冒険者は依頼を持っていつてくれないし、新人はあまりに仕事ができすぎてすぐに辞めちゃうし。

この前の町のボランティアだって断ればいいのに受けて俺達にやらせて、しかもその後依頼もこなさなきゃいけないくて。

それなのにギルド長は仕事そっちのけで研究研究！

本当に自分勝手っていうかわがままっていうか自己中っていうか

……」

何かグチ言い始めてる……。

……あ、プラムさんの周りが黒く光った。

「ダークネスソード」

ジャキッ！

「………どういう意味かしら？」

「いえなんでもありません！！ギルド長はとても素敵なお人です！！」

首に黒い剣を突き付けられて男の人は態度を180°変えた。

プラムさん今『詠唱』なしで魔法使ってたな。

応用魔法でそんなマネができる辺りさすが『ハイウェイザード大魔導師』ってところ

だけど、

完全に脅しだ!!

「それで、依頼を受けたいんですって?」

「え、あの俺まだ自己紹介……」

「仕方ないわね、10秒あげるわ」

「短すぎますって!!」

「9、8……」

「コウル・フレディア22才男!!このギルドのエース!!まあギルド所属俺一人だけどね!!」

「……ちっ、3秒残ったわ」

「何で舌打ちしたんですか!？」

大変そうだなこの人……。

「と、俺ハデイ・トレイト。D級クラス冒険者です」

「私メリス・テーナス!!『ウィザード魔導師』です!!」

「僕はグールド・テーナス。ハデイくんと同じD級クラス冒険者です」

忘れないうちに俺達も自己紹介をする。

「ふーん、で、依頼を探しに来たのよね?」

「あ、はい!」

「悪いけどよそ者に受けさせる依頼なんてないわ。

酒場と違って、ギルドは信頼が第一なの、万一不祥事なんて起こされたらたまったもんじゃないのよ」

プラムさんはいぶかしげな顔をする。

いきなりそんなこと言われてもな……。

「僕達は一生懸命依頼をこなすつもりです。

いきなり疑われてもどうしようもないのですが？」

「そうですねよギルド長！この人たちをこき使いましょう！！」

真剣な顔で言うグリー。

コウルさんも言い方がちょっと気になるけど味方みただ。

「コウル、あんたは楽をしたいだけでしょう？」

「はい！！」

「……………ホルターガイストダークネスソード・浮遊する剣」

空中に3本の黒い剣が現れ、

コウルさんの顔、首、左胸に突き付けられる。

「楽というかなんというか！！今日中にやらないとまずい依頼が二件もあるので！！」

「両方あんたがやりなさいよ」

「両方一日がかりの依頼なんです！！！」

剣を突き付けられつつコウルさんが必死に懇願する。

……………大変そうだな、この人……………。

「……………仕方ないわね」

プラムさんは小さくため息をつき、黒い剣を消す。

「それじゃ、そのうちのどちらかをあんた達にお願いするわ」

「え、いいんですか!?!」

「依頼の期限に遅れるなんて論外だもの」

なるほど、そりゃそうだ。

「これがその二件の依頼だよ」

コウルさんが二つの資料を持ってくる。

『近海の魔物調査』と『アクアポニックスの収穫手伝い』か……。

「……アクアポニックス?」

「へえ、この町は養殖も有名って聞いてたけど、そんなのもやっってるんだね」

「兄さん、アクアポニックスって何?」

興味を持ったのか、メリスがグリーンに聞く。

「農業と養殖を組み合わせたものだよ。」

養殖排水を水生植物に与えることで環境汚染を少なくして、同時に植物への肥料代を浮かせることができるんだ」

「……ごめんグリーン、もうちょい分かりやすく」

「分かりやすく言っただつもりだけど……」

グリーンは苦笑いを浮かべ、詳しく話し出す。

「流石に養殖は知ってるよね？」

「魚を育てて売る職業だろ？」

それぐらいは誰でも知って……あ、メリスが顔を背けた。

「養殖って水が大事なんだけど、ずっと同じ水で魚を育てたら水が汚れるでしょ？」

「そりゃ生物を育ててるんだからな」

「だから定期的に水を入れ替えるんだけど、それを川や海に直接流したら環境汚染になっちゃうんだよ」

「あ、なんか聞いたことあるな、それ」

「でも、その汚れて植物の肥料になるんだよ。」

だから、汚れを植物に吸収させることで環境汚染を少なくして、なおかつ植物に栄養を与える。

そういう利点があるし、植物と魚両方を収穫できる。

それがアクアポニックスだよ」

「なるほど、なんとなくだけど分かった」

「……………つまり？」

ダメだ、メリスは分かってない。

「……………つまり植物と魚を同時に育てる職業ってことだ」

「な、なるほど！！」

大ざっぱに概要だけを話す。

さすがにこれなら分かるみたいだ。

「おもしろそう！！この依頼受けようよ！！！」

メリスが資料を持って言う。

なんか興味がわいたみたいだな。

「そうだな、俺もやってみたい」

「うーん……」

「どうしたグリー？」

グリーが顎に手を当てて何かを考えている。

何か引つかかることでもあるのか？

「いや、どうしてわざわざギルドに依頼を出したのかと思ってね…

…」

そういえば……、収穫なんて別に冒険者に頼む必要ないよな。

「簡単な話だよ。依頼を出さなきゃいけないような収穫物ってこと」

コウルさんがニコニコと笑いながらグリーの疑問に答える。

「そこでは魔草と魔魚を育ててるんだよ。両方低位だけだね」

「あ、なるほど」

それなら納得だ。

そっぴや牧場とかでも、冒険者を雇ったりするって聞いたことあるしな。

「低位ならそこまで危険でもないかな。問題は数だけ……」

「一日がかりでやらなきゃいけないぐらいの数、だよ。」

ただ、慌てる必要はないから、ゆっくり確実にやってくれば構

わないよ」

「あれ、でも今日中にやらなきゃまずいんじゃない……」

「まあ、いくらゆっくりやっても夕食までには終わると思うよ」

ってことは、八時間もあれば終わるのか。

「依頼料は1万5000Gだよ」
「ゴルドだよ」

「おっ！けっこうな額ですね！」

「その分しんどい作業だけだね。」

俺としてもこの仕事をやってくれるとありがたいかな」

さっきから思ってたけど、正直だなこの人。

「……この依頼主はお得意様だから、できればコウルにやって欲しいんだけどね」

「何言ってるんですかギルド長！！『近海の魔物調査』だって大事でしょう！！」

ひょっとしたら危険な魔物がこの町を襲うかもしれないんですよ

！？」

「で？」

「要するに、『近海の魔物調査』の方が楽ができるじゃないですか
！！」

言った！？聞かれてもいないのに隠すべき本心を言った！？

「……たまにあんたの脳が心配になるわ」

「え？」

「……仕方ないわね。コウルも疲れてるみたいだし、たまにはいいか」

「本当ですかギルド長！？」

「ただし、手を抜いたら承知しないわ。

万一そんなことしたら、あんたの睡眠時間を半分にするから」
「絶対に手抜きなんてしません！！！！」

なんでギルド長が冒険者の睡眠時間を管理してるんだ……？

「ほら、受けるなら契約書を書きなさい」

「あ、はい」

契約書に必要な事項を記入してプラムさんに渡す。

「それじゃ、これが地図だよ。

町の外れだから少し遠いけど、せっかくだから町の観光もしてい
つたらどうかかな？」

「あーそうしたいところですけど、依頼の方が優先しないといけま
せんし」

町を観光してて依頼に遅れた、なんてシャレにならない。

つてか、どうせなら依頼を受けてない時に思いっきり遊びたいしな。

「殊勝な心がけね。

……実行できるかどうかは別問題だけど」

なんか、プラムさんはまだ俺達を信用してくれてないみたいだな。
まあ、行動で示せてることがか。

「連絡はこつちでしておくよ。

依頼主を不安にさせるといけないから、1時間以内には着くよう
にしてね」

「……大丈夫だと思います。」

「この距離なら30分あれば着きますから」
「まあ、途中迷うかもしれないけどな」

今日来たばかりだから道なんて知らないし。
地図があるから大丈夫だとは思うけど。

「それじゃ行つてきます」

「行つてきまーす!!」

「行つてらっしやーい!!」

コウルさんに見送られ、俺達は依頼主の所へと向かった。

今回はそんなに危険な依頼でもないみたいだし、けっこう気楽にやれるかな？

第20話 天地開闢（てんちかいびやく）（後書き）

サブタイトル解説

てんちかいびやく
天地開闢

天と地ができた世界の始まりのこと。

ちよつと極端ですが、第三章の始まりということでした。

アクアポニックスについては、

魔物を使っているため実際のものとは違っていたり、

ありえないようなことをしてたりするかもしれません。

広い心で見えて頂ければと思います。

というわけで次回予告です！

「ハデイだ。

……あんまり前置きが長いのもなんだし、

さっさと次回予告するか。

俺達は話をしながら依頼の現場へと向かう。

現場に到着した俺達は

初めて見る養殖場、農場を楽しみつつ、依頼を始めるんだけど、

……なんか、見たことある奴がいるぞ。

次回、冒険者ライフ！第20話『共存共栄』。

思ったよりも、この依頼大変かもな……」

第21話 共存共栄（きょうぞんきょうえい）

「んー、この町ってけっこう都会っぽいよな……」

現場に行く途中、家や街灯を見てそう思った。

後、屋台の準備をしてる人がちらほらいるな。祭りでもあるのか？

「まあ、スイーツ王国は貿易でも有名だからね。

この町は港町だけあって貿易もしてるし」

「へえ……」

「……あれ、兄さん、それ何？」

メリスがグリーの持っている本を見る。

表紙には『魔法入門』と書かれていた。

「何って……」

「兄さんにしては珍しい本読んでるかなって」

「そうか？」

グリーは魔物図鑑とか魔術書とかよく読んでるけど……。

「だって、それ図鑑とかじゃなくて入門書でしょ？魔法を使う人が読む本だよ？」

「そっぴやそうだな」

「いや、魔法を覚えてみようと思ってね」

「え？」

「僕は普段から本を読んでいるのと、昔メリスの修業に少し付き合ってたおかげで普通の人より魔力が高いみたいなんだ。」

「だから、治癒魔法の一つでも使えるようになれば、仕事で役に立つんじゃないかと思ってね。」

そう言っつてグリーは本を閉じる。

「治癒魔法か……、確かに助かるけど。」

「でも兄さん、魔法なんてそんな簡単に使えるようにならないよ？」

「一朝一夕でどうにかなるとは思ってないよ。」

「まあ少しずつ、ね。僕だって、二人の役に立ちたいんだ。」

「いや、グリーには十分助けられてるって！」

戦闘でもグリーの補助には助けられてるし、依頼を受ける時や狩った魔物を売る時にもグリーの交渉には助けられてる！

「それに、何より……。」

グリーはフツと笑みを浮かべてこう言った。

「僕が治癒魔法を使えば、メリスが怪我をした時すぐに治してあげられるじゃないか！」

「ああうん、言うと思った。」

実にグリーらしい理由だ。

「ってかそつちが本音だろ。」

「そのうち披露したいと思ってるよ。楽しみにしててね。」

「……おう！」

「がんばってね兄さん!!」

グリーもがんばってるんだな……。
俺も、もっと剣の腕を上げないと。

『銀狼』ロギ・シルムさんを思い出す。

……あのレベルになるのはまだ無理だけど、いつかは、あの人も
負けないぐらいに……!!

「そついや、プラムさんってなんか俺達に冷たかったよな」

数分歩きながら話しているうちに、ふと『紫黒の魔女』プラムさん
の話になる。

「ひよつとして旅の冒険者に嫌な思い出でもあるとか」

「……確かに、それも考えられるね。」

依頼料の前金だけ持ち逃げしたり、失敗した後謝罪もせずに逃げ
る悪質な冒険者とかもいるし」

「ええ!?! 私達はそんなことしないよ!!」

「それが信じられるかどうかってことだろ」

俺達を信じてくれ!!なんて言ったら余計怪しいし。

「それよりも、ギルド長って立場があるから、じゃないかな」

「立場?」

「うん。前に言った通り、この町のギルドは住民からの信頼が厚い

んだ」

そういや、パンフレットにも大きく載せられてたっけ。

「だから、ギルド長であるプラムさんはその期待に応えないといけない。

……よそ者だと、その辺りは信頼しきれないんだろっね。

コウルさんのことはなんだかんだで信頼してる感じだったし」

「結局、信頼を得るには行動で示すしかないってことか……」

「そうなるね。

……僕達がこの町にいる間に信頼を得られるかどうかは分からないけど」

グリーはそう言って苦笑いを浮かべる。

とりあえず、俺達がやるべきことは受けた依頼を全力でこなすこと、だよな！

「……」

ギルドを出てから30分ほど歩き、俺達は依頼主のニームル養殖場

に到着した。

名前が養殖場つてことは、農場よりも養殖の方を重点的にやってるのかな？

「『危険、関係者以外立ち入り禁止！！』つて書いてあるね……」

施設の周りは柵で囲まれていて、メリスの言うとおり、警告が出されている。

まあ、低位とはいえ魔物を育ててるんだもんな。一般人が入ったらやばい。

と、その時、入口から一人の男の人がやってきた。

藍色の髪に黒い瞳。

歳は二十代後半つてところか。

「あ、冒険者の方達ですか？」

「はい、依頼を受けてきました」

「そうですか……」

その男の人は一瞬、少し落胆したような表情になる。

「申し遅れました」

私はこの施設を管理しているクアル・ニームルと申します」

クアルさんは愛想笑いを浮かべてそう言う。

……なんか、あんまり歓迎されてないような……？

「あ、俺はハディです。こっちは仲間のメリスとグルードです」

「初めまして！」

「よろしく願います」

俺達もクアルさんに自己紹介をする。

……メリスは気にしてないみたいだけど、グリーンは気づいてるっばいな。

「それでは、中を案内します」

クアルさんに先導されて、俺達は施設の中へと入っていった。

「わぁー！！すっごーい！！」

メリスは中に入るやいなや、目を輝かせる。

そこにあつたのは、一面に広がる生簀いけすだ。

ここが養殖場なんだろうな。

「ここでは『メニーフィッシュ』を養殖しています」

「メニーフィッシュ？」

「危険度E以下の低位魔魚だよ。

ワイルドウルフより弱いけど、繁殖力と生命力が強いし、食用になるんだ」

柵に手をかけて生簀をのぞいてみると、中には多数の魚影が見えた。

「……ハディくん、あんまり乗り出すと危ないよ?」

「え? ひよっとして飛び出してきたりするの?」

「水から出てくることはありませんが、万が一、生簀に落ちたら……」

「……」

「………気を付けます」

絶対ケガじゃすまないよな、それ。

「それで、メニーフィッシュを収穫すればいいんですか?」

「あ、いえ、メニーフィッシュはまだ育てている途中です。」

収穫していただくのはこちらの方です」

クアルさんが手で指し示す。

その先……生簀の向こうには、小さなビニールハウスのようなものがいくつか並んでいた。

そこだけ天井がガラス張りで、光が入りこむようになっている。

またよく見ると、生簀からポンプのようなもので、その中に水を送っているみたいだ。

となると、そっちが農業の方なのか。

「皆さんに収穫していただくのは、この魔物達です」

クアルさんに促されて、俺達はビニールハウスの中をのぞき見る。

………そこには、見知った魔物がいた。

「……水のカズラ？」

「はい、ご存知ですか？」

「ええ、前に狩ったことがあるので」

『小人の遊び場』で狩った低位魔草だ。

ここでは栽培してるんだな……。

「それでは、注意事項をいくつかしておきたいと思います」

そう言われて、俺達はクアルさんの方を向く。

「これから皆さんには水のカズラを収穫していただきますが、まず、
一つ残らず狩り尽くして下さい。」

栽培用の種はもう採ってありますし、残してしまうと、次の栽培
に支障が出てしまいますので」

前の奴が残っていると、種をまいてもそいつらに食べられるかもしれ
ないし、そもそも種をまく人が危険だから、ってことか。

「それと、メリスさんは魔法使いだと聞いていますが、どんな魔法
をお使いになるんですか？」

「あ、炎魔法と水魔法です！」

「……メリス、手は拳げなくていいって」

「では、炎魔法は使わないで下さい」

「……え？」

メリスが目を丸くする。

一応、メリスは炎魔法の方が得意だもんな。

「この水のカズラは、傷薬の材料として出荷する予定なんです。それに、この中は深さ5cm程の水が張ってますので、灰にしてしまつと回収できないと思います」

そつか水が張ってるのか。

……動きにくそうだな……。

「すみません、質問いいですか？」

「はい、どうぞ」

「水のカズラはどのように狩ればいいですか？」

………？

グリーの言ってることがよく分からない。

「焦がしたり、燃やしたりしなければ、どのように収穫されても構いません。

できれば本体だけを倒して、つるはきれいなままにしているだけとありがたいですが、どの道すり潰すので、斬ったり撃ったりされても問題ありません」

クアルさんは俺とグリーを見て言う。

……あれ？俺は剣を腰に下げてるから分かるだろうけど、グリーが銃を使つてよく分かったな。

「あ、はい！質問いいですか！？」

メリスが手をビシッと上げる。

珍しいな、メリスが質問なんて。

「はい、何でしょう?」

「ごつて、クアルさんしかいないんですか?」

依頼と全く関係ねえ。

……でも確かに、クアルさん以外に人がいないな。

「……実は、現在ここで働いているのは、私を含めてたった三人なんです」

クアルさんは苦笑いを浮かべながら、メリスの質問に答える。

「アクアポニックスはまだあまり有名ではありませんし、それに育てているのが魔物なので、少し敬遠されているみたいなんです」

「怖がられてるってことですか?」

「はい、最悪命の危険もないとは言えませんし」

そりゃ魔物だから……、魔物は『人を襲う動物』だ。

人喰い……は言い過ぎかもしれないけど、それに近い奴らばかりだ。

「給料はかなり良いと思うんですが……」

クアルさんは小さくため息をつく。

……まあ、誰だって命の方が大事だよな。

「人が少ないせいで、今日は私の他は、午後から一人が来るだけなんです。」

私も出勤したのはついさっきで、それ以前は誰もいませんでした」

「……いいんですか？動物を育ててるのに」
「大丈夫ですよ。」

餌以外はほとんど自動ですし、魔物だから生命力が強いですし。
……ただ、あまり餌をやらないと共食いを始めるのですが……」

基本的に魔物は食欲がすごいもんな……。

メリスに比べたら全然だろうけど。

「ハデイ、今なんか失礼なこと考えなかった？」

「いや、別に……」

慌ててメリスから目をそらす。

「それと、養殖のものは弱いと思われがちですが、このビニールハウスの中で餌の取り合いなど、同族との競争で鍛えられてますので、野性程ではありませんが強いです。」

お気をつけ下さい」

「え、水のカズラにも餌やってるんですか？」

「はい、植物ですが雑食性ですし、排水中の栄養分だけじゃ足りないんです」

なるほど……。

「最後に一ついいですか？」

「はい、どうぞ」

グリーが質問をする。

「このビニールハウスですが、耐久性はどれくらいあるのですか？」

「一応魔物用のものなので、それなりに耐久性はあります。」

極端な話、銃で撃つたり、魔法をぶつかけたりしても、そう簡単に破れることはありません」

じゃあ、思いつきりやつても大丈夫だな。

「……ただ、メリスさんは『魔導師』ウィザードだと聞いています。

メリスさんの全力の魔法をぶつけれたら、流石に危ないと思います」

「だってよ、メリス」

「はい！火事にしないように気をつけます！！」

「それ以前に炎魔法使うなって言われたろ！！」

ブレイアムを建物にぶつけたら火事じゃ済まないぞ！！

「水のカズラには水魔法があんまり効かないから、今回メリスには補助を任せるよ」

「んー……がんばるね！」

グリーの指示に、少し不満げながらもにっこり笑うメリス。

「説明は以上ですが、他に質問はありますか？」

「いえ」

「大丈夫です」

クアルさんは俺達に確認すると、鍵を取り出し、ビニールハウスの入口を開ける。

「それではよろしく願います。

一応1時に昼食を用意しておきますので、キリの良い所まで終わ

りましたら出てきて下さい」

あ、まかない付きだったのか今回の仕事。

「すみません！！質問いいですかっ！？」

「え、はいどうぞ」

突然大きな声を上げるメリスに、少し驚くクアルさん。

メリスは真剣なまなざしで、クアルさんに質問をぶつけた。

「まかないっておかわり有りですか！？」

「少しは自重しろ！！」

「えー……申し訳ありませんが、お弁当なのでおかわりはありません」

メリスの欲望まるだしな質問に、クアルさんは苦笑しながらそう答えるのだった。

第21話 共存共栄（きょうぞんきょうえい）（後書き）

サブタイトル解説

共存共栄きょうぞんきょうえい

自他共に生存し、繁栄すること。

魔草と魔魚、

また冒険者と依頼主の関係を表すのにいいと思い使いました。

では次回予告です！

「メリスです！

いよいよ仕事を始める私達！

でも相手は危険度Eだし、楽勝だよね！！

そして、クアルさんからギルドの話を聞くんだけど、

これって私達にはあんまり関係ないような……？

次回、冒険者ライフ！第22話『芳声嘉誉』！！

確か……、気にし過ぎてもダメだけど、

気にしなさ過ぎてもダメだって、兄さんが言ったたよ？」

第22話 芳声嘉誉（ほうせいかよ）

（サイドアウト）

ここはヨーグルト港町の近くにある海岸。
ギルドのエース、コウル・フレディアはその辺りを歩き回っていた。
そのそばには火を纏う赤いトカゲ、サラマンダーが浮遊している。

「ん〜……おつかしいなあ……」

コウルは頭をかきながら、不満そうにうめく。

「ねえヒビ、近くで変な気配とか感じる？」

ヒビと呼ばれたサラマンダーは、それに応えるように辺りをうかがい始める。

と、何かを探知したらしく、ヒビは近くの波打ち際を注視する。
コウルも気づき、それにならう。

次の瞬間、大きさ1m程のカニが砂の中から現れ、コウルに襲いかかってきた。

レッサークラブ、危険度Eの低位魔獣だ。
危険度Eの中でも危険度Dに近い強さを持ち、カニなのに前にも走ることができる。

「頼んだよヒビ！」

コウルの周りが赤く光る。
すると、それに呼応するようにヒヒの体が赤く光った。

「行け！！」

コウルの声を聞き、ヒヒは口から炎を吐きだす。
レッサークラブはあつという間に炎に飲み込まれ、黒焦げになって倒れた。

「お疲れヒヒ！」

コウルのねぎらいの言葉に、ヒヒは目を細めて傾く。

「……でも、こいつも違うね……」

事切れたレッサークラブを見て、コウルは小さく嘆息する。

「おつかしいな、目撃情報は多いのに、これだけ探しても一匹も見つからないなんて……」

落胆するコウルを励ますように、ヒヒが周りを飛び回る。

「ん、大丈夫だよヒヒ、ありがとう」

コウルはヒヒに笑顔を向けてそう言つと、大きく伸びをする。

「さつてと、がんばりますかね。」

「……手を抜いたらギルド長に殺されるし」

コウルは少し自嘲的に笑い、調査を再開するのだった。

くハディサイドく

「はあああつ!!」

気合いと共に水のカズラの本体である、緑色のつぼみのようなものを切り裂く。

「ふう……これで何体目だっけ」

「丁度30体目だよ。」

「……まだたくさんいるけどね」

グリーはうねうねと周りをただよっているつるを見て呟く。

「確か一つのビニールハウスに、50体ぐらいいるって言ってたよな……」

「じゃあもう半分以上終わったの?」

「……このビニールハウスは、な。」

「ビニールハウスは全部で五つあるからな？」

ほっとした表情のメリスに釘を刺しておく。

「お昼休憩までに、できれば二つ終わらせておきたいかな。

……後半は休憩も必要だろうし」

銃声と共に、少し離れた場所にいた水のカズラの本体が吹き飛ぶ。

「ハデイ後ろ！！」

メリスの声に慌ててしゃがむ、と、さっきまで俺の頭があった場所を、緑色のつるが通っていった。

振り返り、その水のカズラに迫り、斬り伏せる。

「サンキューメリス！」

「気をつけてよ！」

メリスはそういうと、『集中』を始める。

メリスの周りが青く光るのを見て、二本のつるが襲いかかった。

しかし、それがメリスに届くより早く、俺とグリーがそれぞれ本体を倒す。

「……海底より水の集いを呼ぶ……」

メリスの両手の間に、水が大きな球体となって現れる。

そして四つに分裂し、メリスの周りを囲む。

「流せ アクアム!!」

四つの球体それぞれから水柱が飛び出し、凄まじい勢いで水のカズラを襲う。

上から押しつぶしたり、押し流してビニールハウスの壁に叩きつけたり。

……あ、今ので五体目だ。

「アクアムは一つ一つの威力は低いけど、長時間操れるのが強みだよな」

「いや、十分威力高いだろ」

つぶされた水のカズラを見て呟く。

うーん、植物だからまだいいけど、これ動物だったらけっこうグロいよな……。

「と、おしゃべりしてる場合じゃないか!」

剣の柄を握り直し、近くにいた水のカズラへ向かって走る。

……やっぱ水が張ってて走りにくいな。

一応防水加工されたたくつを貸してもらったから、これでも少しはマシなんだろうけど。

向かってきたつるを右へ跳んでかわし、距離を詰めて本体を切り裂く。

「よし……つわっ!!」

右から飛んできたつるを慌てて前へ跳んでかわす。

あつぶね、油断した……！

その水のカズラに狙いを定め、一気に肉迫して斬り伏せる。

水のカズラの武器は長いつるだ。

遠くから飛んでくるのは厄介だけど、その分一度伸ばしたら戻すのに時間がかかるからな、その間無防備になるのが弱点だ。

さらに近くに二体の水のカズラを発見し、そっちに向かって走る…

…と、向こうも俺に気づき、つるを伸ばしてきた。

……足元に水が張ってるからな。

やっぱりその音で気づかれるか……！

一本目をしゃがんでかわし、二本目を切り裂いて本体に迫り、二体とも真つ二つにする。

「さて、後は……」

周りを見ると、もう生きている水のカズラは見当たらない。

「ここはもう終わりみたいだね」

「それじゃ、次に行くか！」

「水のカズラを回収してから、ね」

グリーは大きな袋を出す。

そういえば、回収もするんだっけ。

「あれ、もう終わったんですか？」

回収し終えてビニールハウスから出ると、クアルさんに驚かれた。

「はい……あ、これここに置いておけばいいですか？」

「あ、はい」

水のカズラが入った三つの袋をビニールハウスの近くに置く。

「それじゃ、次行くか！」

「うーん、今12時前だから、ちょっとギリギリかもね」

12時前か……。

始めたのが11時少し前だったから、やっぱり1時間はかかるな……。

「お弁当は少しぐらい食べるのが遅れても大丈夫ですので、ゆっくりで構いません。残りもよろしくお願いします」

クアルさんが笑顔でそう言った。

なんか、少し態度が軟化したような……？

「ハデイ、寒いよ？」

「心の声にダメ出しすんな！ってか、別にダジャレ言ったつもりは

なかつただけだ」

「ほら二人とも、じゃれてないで行くよ……?」

「分かった!!分かったからグリー、その黒いオーラをしまえ!!」

依頼主の前だからさすがに銃は突き付けてこないけど、殺気だけで十分怖い。

とりあえず崇られないうちに仕事を始めよう。

グリーも仕事中はそっちに集中するだろうし……。

「ハデイくん、無駄なことを考えてないかい？」

「バカな!?!心を読まれた!?!」

「……カマかけたただけなんだけどね？」

「ハデイ、無駄だつて認めちゃダメでしょ」

次々にダメ出しをしてくる二人。

こういう時ホント息びつたりだよなこいつら……。

「ラスト!!」

二つ目のビニールハウス最後の水のカズラを斬り倒す。

これで後三つ、大体150体ぐらいか……。

「……多いな」

「そんなの今更でしょ。ファイト!!」

「なんだその他人事みたいな言い方!？」

「何言ってるんだいハデイくん! メリスもしっかり働いているじゃないか!!」

「いや、サボってるなんて言っていないけど」

「ハデイひどーい!!」

「人の話聞け!! むしろ聞いててわざと言っててるだろお前ら!!」

グリーはともかく、メリスは絶対わざとだ、絶対。

「絶対」

「なんで三回も言うの!？」

メリスめ、やっぱり心読んでやがったか。

見切った! 見切ったぞ! これでもうメリスの読心なんて怖くな……

「ハデイ、果たしてそうかな？」

「うわ、また読まれた!!」

くそ! やっぱりに常に読まれてるんじゃないやどうしようもない!!

「二・人・と・も? じゃれてないで仕事してね……?」

グリーが殺気を向けてきた……俺に対して。

グリーが銃を向けてきた……俺に対して。

「待てグリー！！メリスは！？」

「僕がメリスに殺気や銃を向けるわけないだろう？」

「分かってたけど理不尽だ！！」

「ほらハデイ！早く仕事しなきゃ！」

「おいコラ元凶！！いつの間に仕事始めたんだ！？」

既にメリスの持っている袋は大きくふくらんでいる。

油断も隙もない……！！

「『大きくふくらんでいる』だって！？ハデイくんメリスのどこを見ているんだい！？」

「そこだけ！？中途半端に心読むなグリー！！」

こうして、俺はグリーに追われながら水のカズラを回収していくのだった。

「あ、皆さんお疲れ様……、どうしました？」

「……いえ、何でもありません」

ビニールハウスから出ると、クアルさんに心配された。

たぶん俺が疲れているように見えたんだろう。

正直自分でもそう思う。

「もう100体程相手にしているわけですからね。疲れていて当然だと思います」

違うんです、仲間を追われていたんです。とはとても言えない。

「先程お弁当が届きましたので、お昼にして下さい」

「はいー!!」

「メリス、手は上げなくていい」

興奮気味のメリスをなだめて、クアルさんについていく。

案内されたのは小さな休憩室だった。

小さいっていつでも飯食べるぐらいなら十分だけど。

「すみません、休憩室はここしかないもので、私も一緒にしますがよろしいですか？」

「はい、もちろん」

机には四つの弁当が置かれていた。

……普通の大きさだけど、メリス足りるか……？

「それでは、いただきます」

クアルさんにならって、全員いただきますと言い、弁当を食べ始める。

んー、やっぱり仕事の後の飯って格別だよな！

ここまでビニールハウス一つ一時間ぐらいで終わってるからあんまりあせる必要もないし。

ここはゆっくり昼飯を堪能するとし……

「ごちそう様ー！ー！」

ツッコまない！ー！ツッコまないぞー！

「え、あ、あの……」

「気にしないでください、こつという奴なんです！」

戸惑うクアルさんに弁明しておく。

そりゃ飯にも女が弁当を5分足らずで食べ終わったら驚くよな！

「そういえば、クアルさんは僕達のこと、ギルドからどのくらい聞いていらしたんですか？」

「どのくらい……と言つと？」

「いえ、初めに僕達を見た時、少し不安そうな顔をされていたようなので」

グリーの言葉を聞き、クアルさんは気まずそうな顔をする。

「はは……申し訳ないです。」

いつもはギルドのエースの方に来て頂いているもので、少し不安だったんです」

「エースって、コウルさんですか？」

確かプラムさんはギルド長で、エースはコウルさんだったよな。

……まあ、ギルド所属の冒険者はコウルさん一人だつて言つてたけど。

「はい、コウルさんはC級^{クラス}冒険者で、実力もあるし、町のみんなから信頼されていますよ」

「C級クラス!？」

あ、あの人が!？」

「レイラさんに比べたら普通だけど、十分天才の部類だね……」

「…… プラムさんに脅されてた姿からは想像できないけど」

「それと、プラムさんはB級クラスですよ」

「B!？え、あの人冒険者なんですか!？」

「当たり前だよハデイクン。」

基本的に冒険者ギルドの職員は冒険者しかねないんだから」

そっぴやそっぴだっけ……。

「プラムさんはコウルさん以上に町の人に慕われていますよ。」

あの人は実力はもちろん、この町のことを本当によく考えてくれていますから」

クアルさんはうれしそうに話す。

『魔女』なんて異名だと悪いイメージがありそうだけど、プラムさんは町の人達にちゃんと信頼されてるみたいだ。

ギルドに多く依頼がいつてるのも、そのおかげなんだろうな。

……その分コウルさんが苦労してるけど。

「あなた達のこともプラムさんに聞いたんですよ。」

剣士一人、『魔導師ウィザード』一人、それと銃使いが一人って」

「……見抜かれてたんだね」

グリーが小さく呟く。

どうやらプラムさんはかなり俺達のことを見抜いてたみたいだ。実力とかも計られてたのかも……。そう考えると、最初追い払われそうになったのって、俺達が力不足だと思われたから、だよな……。

「あの、私達のことどんな風に聞いてたんですか？」
「え……っと、そうですね……」

クアルさんが少し言い淀む。
やっぱり、きつい評価なのか……。

「お願いします、俺も気になりますし。
少しぐらいひどいことを言われても大丈夫です！」
「……分かりました」

クアルさんが真剣な表情になる。
一体なんて言われたんだ？
……いや、どんな風に言われたって俺はくじけたりしない。
さあ、どんと来い！！

「『バカそうだけど仕事はたぶん大丈夫』、と……」
その評価はあんまりでしょプラムさん！？

「それで少し不安だったんです」
「はは……」

そりゃ不安になりますよ!!
もう少し言い方ってものが……。

「何でも、顔がバカそうだから初め追っ払おうかと思ったらしくて……」
「そんな理由!?!」

俺達そんな理由で最初『帰れ』って言われたのか!?!

「『實力は申し分ない』とも言われたんですが、やっぱり少し不安で……」
「ははは……」

どうしよう、實力は認められてるって喜ぶべきか、バカってなんだ!?!
って怒るべきか判断に困る。

「そっかー、じゃあ最初追い返されそうになったの、ハデイのせいだったんだ」

「待てコラメリス!! 誰がバカ面だ!?!」

「むっ! じゃあ私のせいだっていうの? 責任転換はよくないよハデイ……!」

「それを言うなら責任転嫁だ! 絶対お前の方がバカだろ!」

「バカって言う方がバカなんだよ!」

「子供かお前は!?!」

「……止めなくてよろしいんですか?」

「放っておけばその内止まりますよ」

「そ、そうですね?」

「はい、なんだかんだであの二人は仲が良いですから。
……仲が、良いですから……」
「グ、グリーンさん？なんだか声が怖いのですが……」

な、なんだ！？外野から殺気を感じる！？

「二人とも、食べ終わったのならさっさと仕事に戻るよ……？」
「はい！」
「お、おう……」

とりあえずグリーンに黙らさ……止められて、俺達は仕事に戻るのだ
った。

「これで最後、か」

最後、一番奥のビニールハウスを前に、俺は呟いた。

「二人とも、休憩は必要ないかい？」

「うん！大丈夫！」

「疲れてないわけじゃないけどな。後50体ぐらいなら大丈夫だ」

「それじゃ、行こうか」

「おう！これで最後だ！」

やる気満々でビニールハウスの中に入る俺達を、一番に迎えたのは

……

異臭、だった……。

「え……？」

思わず、そんな言葉が口からもれる。

俺達の目の前に広がっているのは、大量の、水のカズラの死体。

「な、なんだこれ……！？」

手に取ってみると、まるで何かに食い散らかされたように見えた。水が張ってて分かりにくいけど、ぐしゃぐしゃになったつるや本体からは汁が出ていて、異臭の正体はこれみたいだ。

「ハ……ハデイー！」

メリスが震えた声を出す。

その指の差す先にいたのは……。

「何だ……こいつ……！？」

そこにいたのは……、巨大な赤い魔物だった。

巨竜の咆哮のような音が響き、二本の赤いつるが、凄まじい勢いで俺達に襲いかかってきた。

第22話 芳声嘉誉（ほうせいかよ）（後書き）

サブタイトル解説

ほうせいかよ
芳声嘉誉

意味は良い評判。

主人公達や町の人から見たギルドの印象です。

では次回予告です！

「グリーだよ。

突如現れた危険度の魔物、ブラッディヴァイン。

戸惑う間もなく、僕達は戦うことを余儀なくされる。

僕達に勝機はあるんだろうか？

次回、冒険者ライフ！第23話「こくふんとう孤軍奮闘」！

あの時とは違つかもしれない。

でも、きつと無理なんかじゃないはずだ！」

第23話 孤軍奮闘（二）ぐんふんとく

「っ！！」

俺達がなんとか赤いつるをかわすと、つるはその勢いのまま、床に叩きつけられる。

ボゴオオオン！！

「いつ！？」

水と共に、床のコンクリートが小さく砕け、飛び散る。

一撃でコンクリート砕きやがった！？

「っおおおおお！！！」

剣を思い切り振り上げ、赤いつるに向かって振り下ろす！

「っ！？」

赤いつるが切り裂かれる……が、太すぎて完全に斬ることができず、途中で止まってしまふ。

「ハデイ上！！！」

慌てて剣を抜き、思い切り右に跳ぶ。

直後、もう一つのつるが上から降ってきて床を叩き砕く。

なんつー力だ……！！

「ギリユルルルル……」

ブラッディヴァインは不気味な音を発しながら赤いつるを手元へ戻す。

どうやら向こうも警戒してるみたいだな……。

「……グリーあいつは……」

「危険度Cの上位魔草、ブラッディヴァイン。

戦闘力はミドルドラゴンより少し上って所かな……」

「攻撃方法はあのつるだけか？」

見た所、バトルプラントみたいにエネルギー弾を撃ってきたり、ドラゴンみたいに炎を吐いてくるような様子はない。

「そうだよ……ただ、つるの力がとんでもない上に、ほら」

グリーに言われてさっき俺が斬りつけたつるを見る……と。

斬られた部分が肉塊のようなものでふくらみ、次の瞬間、斬られる前の状態に戻っていた。

「再生！？」

「切断しても燃やしても、何度でも再生するよ」

「……弱点は？」

「本体の中にある核。人でいう心臓みたいなものだから、そこをつぶせば終わるよ、ただ……」

「あの、赤い葉か？」

グリーは苦々しい顔で傾く。

五本の赤いつるが出ている赤い葉がくるまれたような物体。たぶんあれが本体なんだろう。

となると、あの赤い葉は核を守る壁つてところか……。

「あの葉はコンクリートよりも硬い上に、耐火性・耐熱性もある。

……メリスのブレイラムが直撃しても壊せないかもしれない」

「おいおい……」

「どうする？逃げた方が得策かもしれないよ？」

「……………」

逃げる、か……。

確かに相手は危険度C、D級クラス冒険者の俺達の手に残る相手だ。

前に同じ危険度Cのミドルドラゴンを倒したことがあるけど、あれはレイラとかエンジさんとか、手を貸してくれた人達のおかげでなんとかなっただ。

…………でも今、その人達はいない…………！

「グリー、逃げた方がいいと思うか？」

「……………」

グリーは少しうつむき、考えた後話し出した。

「仮に逃げたとして…………すぐに救援を求めることができるのは、ギルドぐらいだよ。」

…………一般兵じゃ、こいつの相手はきついだらうしね」

「コウルさんは別の依頼に行ってるけどな」

「で、でも！プラムさんなら……！！！」

「プラムさんはいるだろうね……ギルドに」

グリーの言った意味を理解したんだろう。

メリスも顔を伏せる。

ここからギルドまで徒歩で30分、その間は町中だ。

もしこいつが俺達を追ってきたら、ヨーグルト町は多大な被害を受けることになる。

「僕達を追ってこなかったとしても、最悪この施設が壊滅するね」

グリーの言う通りだ。

町も、この施設も守るには、俺達がここでこいつを倒すしかない…

…！！

メリスも、グリーも、同じ結論に達したんだろう。

決意を秘めた目で、ブラッディヴァインを見る。

「……できれば、こんな危険な魔物の相手なんて、したくないんだけどね」

「ジエネラルドラゴンに銃弾撃ち込んだ奴が何言ってるんだよ」

グリーはフツと小さく微笑む。

「ハデイくん、一つ言い忘れてたよ。

この魔物、ジエネラルドラゴンに比べたら、雑魚だ！！」

「了解！！やってやるうじゃねえか！！」

ブラッディヴァインに向かって、剣を構える。

体の震えは、もう起こる気配もない。

俺達の戦意に気づいたのか、ブラッディヴァインも二本の赤いつるをゆっくりと持ち上げる。

「グリー、作戦は？」

「作戦なんて呼べる程のものじゃないけど、つるを斬って斬って斬りまくって！」

相手も生物なんだ、再生には限界があるし、何よりブラッディヴァインは、体のエネルギーが不足すると赤い葉がもろくなる！」

「要は持久戦か！！！」

俺達がやられるのが先か！

こいつがエネルギー切れを起こすのが先か！

一直線にブラッディヴァインに向かって走ると、向こうも赤いつるを振り上げる。

二本の赤いつるが振り下ろされるのと同時に右に跳び、床を砕き先端が埋まっているつるを斬りつける！

「ギシャアアアアアア！！！」

「っ！！！」

悪寒を感じて体を伏せると、俺のすぐ上を赤いつるが通っていき、今俺が斬りつけたつるに直撃する。

「大気より火の集いと呼ぶ……燃える フレイア！！！」

メリスから燃え上がる炎が掃射され、重なった三本のつるを包み込む。

「ギュラララララ！！！」

「こっちだ！！」

残った二本のつるがメリスに向かうのを見て、俺は核を包んでいる赤い葉に剣を向ける。

ガギイイーン！！

ちっ！！やっぱり斬れねえ！！

ドラゴンの鱗と同じで、傷をつけるのが精一杯か！

でも注意を引き付けることはできたみたいだ。

三本の赤いつるがこっちに……。

……………三本？

「うおおおっ！？」

まとめて上から降ってきた三本のつるを、跳び退いてぎりぎりかわす。もう再生したのかよ！？

「メリス！大丈……………」

「フレイア！！」

俺に意識がいったせいか動きを止めていた二本のつるを、メリスが炎でまとめて焼き払う。

「ハデイくん後ろ!!」
「っわ!!」

後ろから飛んできた赤いつるを身をひるがえしてかわし、敵から間合いを取る。

危ねえかすった!!

「ギリユルルルルル……」

ブラッディヴァインは黒焦げになった二本をゆっくりと持ち上げる。次の瞬間、その二本は肉塊のようなものでふくらみ、あっという間に再生する。

「ギシャアアアア!!」

叫び(?)と共に振り下ろされるつるを右に跳んでかわす。

速いし、威力はとんでもないけど、戦法がワンパターンだ!!

これなら簡単にかわせ……

「ハデイ伏せて!!」

剣を振り上げようとした瞬間、メリスの声が聞こえ、とっさに前のめりに倒れ込む。

バチイイイイン!!

直後、俺の頭のすぐ上で二つのつるがぶつかりあい、空気が弾ける。

ゾツとしながらも床に手をつき、すぐに跳び退いて間合いを取る。

ドドドオオンー！

三発の銃声が響き、床にめりこんでいるつるに、一直線に並んだ穴が空く。

「ハデイくん！」

「おうー！」

剣を振り上げ、その穴をなぞるように切り裂く。
これなら切断できる！

「ギリユルルルルー！」

切断されたつるが持ち上げられ、断面から肉塊のようなものが伸びていく。

そして、完全に再生されてしまった。

「……本当に限界あるんだよな？」

「そのはずだよ……ただ、ここの水のカズラを食べ尽くしてるから……」

「腹いっぱいエネルギー満タンってことか……」

「さらにいうと、床に張ってる水、これ栄養が含まれてるでしょ」

「……まさか、そこから補給するとか？」

「そのまさかだよ。」

ただ、補給はそんなに早くはないと思う。補給するより早く減らすしかないね」

「俺達にとっては動きにくいだけだし……環境は最悪だな」

でも、時間を置くと相手が栄養を補給するなら……。

「なあグリー、いつそのこと全力で攻撃しまくった方がいいんじゃない？」

「……その場合、賭けだね。」

それで倒せなかったらかなりマズイ状態になるよ。

具体的にはメリスの魔力とか」

グリーがメリスに目を向けて言う。

メリスは魔力が高い割に、魔力が少ない。

休憩したおかげでほぼ回復してただろうけど、それでも、もうフレリアを二回使ってる。

「メリス、後どれくらいいける？」

「……ブレイアムを使ったら、もうほとんど魔力なくなっちゃうと思う。」

フレリアなら後3〜4回くらい」

「……できればブレイアムで一気に消費させたいんだけど……」

メリスの魔法がなくなるのはかなり厳しい。

どうしたものか……。

「メリス、ブレイアムを使う分を残したら、どれくらい使える？ 炎魔法限定で」

炎魔法限定なのは、ブラッディヴァインは植物、つまり炎が効きやすくて水が効きにくいからだろうな。

幸いつるは宙に浮いてるから床の水も邪魔にならないし、それを使

って消火する頃には黒焦げだ。

「フレイアなら一回、フレイなら……なんとか三回、かな」

「そうか、それなら……ハデイくん!!」

「っと!!」

突き出されるつるを跳んでかわす。

「作戦会議ぐらい、ゆっくりさせろっての!!」

そのつるを剣で斬りつけ、さらに上から降ってきたつるを跳び退いてかわす。

「それじゃ、頼んだよメリス！」

「うん！任せて兄さん!!」

間合いを取って剣を構えていると、指示を出し終わったらしいグリーが前へと出てくる。

見ると、メリスが『集中』を始めていた。

「グリー、メリスを一人にして大丈夫か？」

「僕達がこいつをしっかり抑えていれば、ね」

そういつてグリーは銃を構える。

「抑えるってたって……」

「ハデイくん、こいつ再生する時は動きが止まるみたいなんだ」

「……なるほど、再生で手一杯にさせて、その間にメリスが魔法の準備をするのか」

でも、そんなに長い準備が必要になるってことは……。

「ブレイアムか？」

「うん、ブレイアムで本体を狙うよ」

「でもさっき本体はブレイアムでも敵しいって……」

「万全の状態だったらね。今はだいぶ消耗してるはずだし、今からも削るんだ。」

最低でも穴ぐらいは空くはずだよ」

「そういうことか……来るぞグリー、前にいて大丈夫かよ？」

「なめないで欲しいね、僕だってD級^{クラス}冒険者なんだ。」

前衛が本職の君よりは劣るけどね」

赤いつるが持ち上げられるのを見て、軽口を言い合つ。

グリーはメリスと同じで後衛にすることが多いけど、身体能力もけっこう高い。

「ハデイくん、撃ちまくるけど構わないよね？」

「んなこと構ってる場合じゃないだろ」

振り下ろされる三本のつるを、同時に跳んでかわす。

グリーは着地する前から銃を構え、一気に連射し、一本のつるを分断する。

「……やっぱり分断するとなると、五発は必要だね」

「切り離れた方がいいのか？」

「そっちの方が再生量が多くなるから、エネルギーを多く消耗させられるんだよ」

銃弾を装填しながらグリーが言う。

じゃあ、できるだけ切断するようにするか……。

と、つるが横から薙ぐように向かってきた。

やべ、横から来られると横っ跳びじゃかわせねえ、しゃがむか跳び上がるかでなんとか……！

焦りながらも剣を構えていると、グリーがそのつるに向かって三回撃つ。

「ハデイくん！」

「おうー！！」

先ほどと同じように三つの穴が空いたつるを、向かってくるタイミングに合わせて切断する。

攻撃は最大の防御ってな！

「ギリユルルルルル……！！！」

「でもすぐに再生するよな……！！」

嫌気が差しながらも剣を構えていると、ブラッディヴァインは五本のつるをゆっくりと振りかぶってきた。

……おい、まさか！？

「ギユラララララララアアア……！！！」

三本のつるが上から振り下ろされ、二本のつるが左右から地を這う軌道で向かってくる！

後ろに跳んで……ダメだ！リーチが長くてよけきれねえ！！

「ハデイくん右を頼むよ!!」

グリーが叫びながら、左から向かってくるつるに銃を連射する。

……やるしかないか!!

「うおおおおおお!!」

俺は右から向かってくるつるに突進する。

とりあえず移動しないと上から叩きつぶされるからな!

左はグリーがなんとかしてくるはずだ、俺は右をなんとかする!!

……切り裂くのは無理だ。

なら、正面から抑えつける!!

ドスッ!!

まっすぐ構えた剣が、赤いつるに突き刺さった。

重い衝撃が腕にのしかかり、吹き飛ばされそうになりつつも、なんとか耐え切る。

直後、すぐ後ろからコンクリートが砕け散る音が聞こえる。

危ない危ない……!!

刺さっていた剣を引き抜き、空洞目がけて振り下ろす!

一回じゃ無理だけど、二回あれば切断できるな!

「グリー無事か!?!」

「当然だよ!!」

あれだけ消耗させてたんだ！絶対無事じゃ済まないはず！！

「……………なっ！？」

しかし、目に飛び込んできた光景を見て、俺は驚愕に目を見開く。

ブラッディヴァインの本体は、無事だった。

……………なぜなら、五本の赤いつるが本体の盾になっていたから。

そのつるは全て半分ほど吹き飛び、根元近くまで炎に包まれていた。

しかし、赤いつるはまたも再生し始める。

「くそっ！！まだ再生するのか！？」

毒づきながら剣を構える。

文句を言っただけでも、仕方がない……………！！

そのとき、俺は異変に気づいた。

またすぐに全部再生してしまうと思っていたのに、赤いつるは二本しか再生せず、残りは焼け焦げたままだった。

これは……………！！

「エネルギー切れ！！」

思わず口元がほころぶ。

そうか！そうだよな！！

いくらなんでも、あれだけ再生していれば、エネルギー切れを起こして当然だ！！

これなら赤い葉も相当もろくなってるはず!!あと少しだ!!

「ハデイー!!」

「……え」

我に返ったその瞬間、赤いつるが、目の前まで来ていた……。

ドッ……!!

「っ……!!」

当然よけるのは間に合わず、ギリギリ剣の柄で受け止める。
とんでもない衝撃に腕が悲鳴を上げる。
危ねえ、直接くらってたら絶対折れてた……!!

「っああああアアアア!!」

大声で叫び、なんとか赤いつるを押し返す。

「フレイア!!」

メリスが最後の魔力を使って、赤いつるを焼き払う。
つるは後一本だけだ!!

「ハデイくん、つるは任せて!君は本体を頼む!!」

「おう!!」

痛む腕にむちを打ち、剣をしっかり握りしめて本体へと駆ける。
途中最後のつるが襲いかかってくるが、グリーの射撃により、食い止められる。

「はあああああああ!!」

核を守る赤い葉を切り裂き、その先にある核に目を向ける。

そこにあつたのは、1m程の大きさのいびつな黒い球体。

…… 本当に人の心臓みたいな形だな。

「これで…… 終わりだ!!」

振りかぶった剣を全力で振り下ろし、核を切り裂く。

魔物特有の黒い血が勢いよくあふれてきて、全身が真っ黒になるが、そんなのどうでもいい。

これで……!!

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアア……」

ブラッディヴァインは断末魔の叫びを上げ、つるも、残っていた赤い葉も、水の張る床へと崩れ落ちる。

これで……!!

「終わった……!!」

大きく安どのため息をつき、俺も床へとしゃがみこむのだった……。

第23話 孤軍奮闘（こくんふんとう）（後書き）

サブタイトル解説

孤軍奮闘

孤立した中でよく戦うこと。

……そのままですね、

たった三人で戦ったハデイ達を指しています。

では次回予告です！

「ハデイだ！

いや、なんとかなるもんだな。

……マジで死ぬかと思っただけ。

まあとにかく、ブラッディヴァインを倒した俺達は
クアルさんにそのことを報告する。

……そういや、何でこんな奴がここにいたんだ？

次回、冒険者ライフ！第24話『真相究明』！

何事にも理由はあるもんだよな。

……聞いたら分かりやすいようなものかも知れないけど」

第24話 真相究明（しんそうきゅうめい）

「……………これは……………！！」

クアルさんは目の前の惨状を見て、驚愕に目を見開く。

なんとかブラッディヴァインを倒した俺達は、急いでクアルさんにそのことを報告した。

初めは疑い半分だったクアルさんも、実際に目にして、俺達を信じてくれたみたいだ。

「これを……………あなた達が……………？」

「あ……………はい。なんとか」

クアルさんはブラッディヴァインの死体を見て、そう聞いてきた。

……………無理もないよな、俺もまだ実感わかないぐらいだし……………。

「……………そう、ですか……………。」

……………まずは、お礼を言わなければいけませんね。

この施設を守ってくれて、ありがとうございます！

「い、いえ！俺達の仕事ですから」

頭を下げるクアルさん。

やっぱり、この施設は大切なんだろうな……………。

「でも、どうしてこんな魔物がここに？」

「……………分かりません」

グリーの疑問に、クアルさんは首を振る。

そう、それが一番の問題だ。

何でブラッディヴァインがこんな所にいたのか……やっぱりクアルさんも知らないよな。

「一体どうということなんだ……？」

「あ、突然変異とか！」

「メリス黙ってる」

「ひどいっ！？」

突然変異って……まあ見た目は似てなくもないけど。

「……………あ」

「グリー、分かったのか？」

「確証はないけど……二人とも、コウルさんが受けた依頼、覚えてる？」

「確か……『近海の魔物調査』？」

「そう」

「それが関係あるの？」

グリーの話に、メリスは疑問符を浮かべる。

……………もしかして、

「その調査の対象が、ブラッディヴァイン……？」

「たぶん、そうだと思うよ。」

わざわざギルドに調査の依頼がいくつてことは何か危険な魔物の目撃情報があったんだろうし、ブラッディヴァインは普通河川に住

むんだけど、川と海の間、つまり汽水域や、陸地に近い沿岸だった
ら、たまに住みつくことがあるらしいんだ」

「ってことは、沿岸に住みついたブラッディヴァインが、この中に
入り込んできた、ってことか？」

「……そうなるね」

グリーはそう言って、クアルさんに顔を向ける。

「クアルさん、この施設の警備状況を教えてくれませんか？」

「……はい」

クアルさんは気まずそうな顔で話し出す。

「……もう、お気づきだとは思いますが、実はこのビニールハウス
の中に、監視カメラの類は一切ないんです」

「そうなの!？」

「気づけよ!」

ブラッディヴァインがビニールハウスの中にいるって気づけなかつ
たんだから、そりゃあ監視カメラとかはないんだろ。

「それは何故？」

「昔一度つけたんですが、翌日、水のカズラに壊されていました」

「あ、なるほど」

水のカズラのつるは長いからな……。

確かに、天井近くにつけても壊されるかもしれないな。

「じゃあ、警備とかは全くないんですか？」

「まさか! 養殖場には監視カメラが設置してありますし、施設の扉

は人の力では壊せない頑丈な物で、
鍵はピッキングのできない特殊な物にしてあります。
なので、今まで盗難などは全くなかったんです。

ただ……」

「警備員がいないんですね？」

グリーの指摘に、クアルさんは傾く。

「前にも話しました通り、この施設は人手不足で……職員から警備
を出す余裕はないんです」

「本職を雇えばいいんじゃない？」

「ハデイくん、『普通の人』からしたら魔物っていうのは脅威なん
だ。」

……家畜でも、ね」

「……敬遠されてるってことか」

「はい……冒険者なら雇えるんですが、この施設の専属となると……
……」

「契約料だけで赤字になりそうだね」

グリーはそう言って嘆息する。

やっぱ、冒険者は旅をしたがるもんな。

宿屋代の割引とか、そういう特典も持ってるわけだし。

それを押して専属にしようと思ったら、それなりに大金を用意しな
きゃならない。

それに、今まで盗難がなかったんなら、わざわざ大金を払ってまで
雇う必要性なんて感じなかったのかもな。

「あれ、でも、扉とか鍵はしっかりしてるんですよね？」

じゃあどうやって入ったのかな……」

「メリス、しっかりしてるって言っても、

それは相手が人間なら、だよ」

そう、確かにさっき、クアルさんは『人の力では壊せない頑丈な扉』
って言ってたけど。

あくまでも『人の力では』、だ。

ブラッディヴァインのつるは、

コンクリートを一撃で破壊するぐらいの力だった。

それなら……。

「クアルさん大変です!!」

「どうした?」

と、その時、一人の青年が慌てた様子で走ってきた。

この施設の従業員か?

「裏口が……壊されてます!!」

「何!?!」

「ええ!?!」

驚くクアルさんとメリス、それに対してグリーはやっぱり、
と言っような顔をしていた。

……え、俺?

俺は……まあ驚いたけど、ある程度は予想してたしな。

従業員に先導されて裏口に着くと、そこには無残にひしゃげた鉄の扉、そして扉があったであろう位置には、それを超える大きな穴があった。

「うわ……」

「間違いないね、ここから侵入したんだ」

「クアルさん、この裏口ってあんまり使わないんですか？」

「……はい、普段は正面か、もしくは従業員用の入口を使いますので」

それで気づくのが遅れたのか……。

……なんていうか、とんだ災難だったな……。

「申し訳ありませんでした!!」

休憩室に戻ると、クアルさんと従業員の青年がそう言って頭を下げた。

「今回のことは、完全にこちらの不手際によるものです。」

皆さんを危険な目に遭わせてしまいました、本当に、申し訳ありませんでした!!」

「あ、え、えつと……まあ、俺達も無事だったんですし」
再度頭を下げるクアルさんにかかる言葉が見つからず、しどろもどろになる。

「そうだね。ただ、できれば扉に警報が何かを取り付けるなりして、侵入された時、気づけるようにすることをお勧めします。」

そうすれば、何らかの対処もできるでしょうし」

「はい！ 今後はそのようにします」

なるほど扉に警報か、流石グリー。

「……そういえば、依頼の方は」

「ご心配はいりません。あなた方は依頼を完遂していますので」

あ、そっか。

最後のビニールハウスにいた水のカズラ、ブラッディヴァインが食い尽くしたもんな……。

……そう考えると、この施設に結構損害出たんだろうな。

……まあ、一応依頼は終了……かな。

「報酬の1万5000Gコールドです。」

……それと」

クアルさんは報酬とは別に、2万Gコールドを差し出す。

「これは、慰謝料ということですか……」

「え、ええっ!?!?」

2万!? 2万だと!?

そんな慰謝料なんて……。

でも2万……!

俺達も無事だったんだし……。

でも2万……!!

「……ハデイ、目がGゴルトになってる」

「うおつと!!」

メリスに指摘され、ゴシゴシと目をこする。
いかんいかん、流石に不謹慎だよな。

「せ、せつかくですけど、こんなの受け取れませ……」

「いえ! 私共の責任ですので!!」

「あ、そうですか? じゃあありがた……」

ボゴツ!!

「いつてえええ!?!」

手を伸ばしかけた瞬間、頭にまるでメリスのげんこつが落ちたかのような痛みが走る。

「ハ・デ・イ?」

「こんなの受け取れません!!」

全力で慰謝料をクアルさんに返す。

「し、しかし……」

なおも食い下がるクアルさん。

やっぱり、管理人としての責任感とか、そういうのがあるのか。

「クアルさん、それよりもブラッディヴァインの死体を頂けませんか？」

「……え？」

グリーの提案に、クアルさんは目を丸くする。

「そ、それはもちろん構いませんが……」

「グリー、ひよっとして……」

「ブラッディヴァインのつるつって、高級漢方薬や治療薬の材料として、高値で取引されてるんだよ。」

今回は限界まで再生させたから量も多いし……」

そう言っつてグリーは何かを考える素振りをし、そして、話し出した。

「そうだね、相場なら1万8000ってとこだけど、

2万まで引き上げてみせるよ」

「え……」

呆然としているクアルさんに、グリーは笑みを向ける。

「慰謝料の代わり……いえ、慰謝料として、ブラッディヴァインの死体を頂けませんか？」

と言った。

……グリー、お前って奴は……！

「し、しかし……」

「悪い話ではないと思いますよ。」

一般人よりも、冒険者であるこちらの方が、高く売ることができ
ますし」

「い、いえ！そうではなくて……」

クアルさんは、それでもまだ納得できないみたいだ。
責任を感じてるから、だろうけど……。

……なんていうか、

「……クアルさん、あなたに責任なんて、ないと思います」

「……え？」

「だって、一応ここ町の中なんだし、危険度Cの魔物が裏口をぶち
破って侵入してくるなんて、予想つかないじゃないですか」

空き巣とか強盗なら予想もつく。

その対策をしてなかったのなら、確かに不用心といえるし、責任の
一端もあるかもしれない。

でも、それらに対する対策はしっかりしてあった。

危険度Cの魔物なんて、普通は町の中にいるはずがない。その対
策をしておけ、なんて無理だ。

「で、ですが、グールドさんがおっしゃったように、警報でもつけ
ておけば……」

「いや、特殊な扉と鍵で十分だと思いますよ、普通は」

鍵を二重にする人はたまにいるけど、三重にする人なんてそうそういないだろうしな。

「まあでも、やっぱりこんなのもうごめんなので、警報はお願いしますね」

……なんか、ちょっとグダグダになった気がするけど、ようするに、今回の件でクアルさんに非はないと、俺は思う。

「……………」

「それじゃ、報酬確かに受け取りました！」

「あ……………」

クアルさんが戸惑っている内に退散しよう。

何か言われたら言い返せる自信ねえ！

「お待ち下さいー！」

呼び止められた……………。

「少し、入口で待っていて下さい」

「あ、いえ、慰謝料とかは……………」

「いえ、違います！とにかく、待っていて下さいー！」

クアルさんはそう言うと、従業員を連れて、休憩室を出ていった。

何だろ……………？

「いいから言われた通りにしてようよ。」

と、ブラッディヴァインを忘れないようにね」

「あ、ああ……」

グリーに言われて、俺とメリスは首をかしげつつ、ブラッディヴァインを回収し、入口へと向かう。

入口に到着し、待つこと数分。

……ブラッディヴァイン重いな……。

これ持って帰り30分歩くのか、戦闘で疲れてんに……！

「お待たせしました」

クアルさんと従業員が持ってきたのは、大きな密閉容器。中に入ってるのは……、

「魚の切り身？」

「はい、ウチで育てたメニーフィッシュです。」

育ちが早過ぎるものを数匹、ちょうど昨日収穫しましたので」

「でも……」

「慰謝料じゃありませんよ」

そう言っつて、クアルさんは笑顔になる。

一目見て、それは作りものではない、本当の笑顔だと分かった。

「お礼です、この施設を守って下さった」

「あ……はい！ありがとうございます！」

二つの大きな容器を受け取る。
結構な量だな……。

「その容器には『保存』の魔法がかかっているので、3、4日なら持ちますよ」

「あ、大丈夫です。1日でなくなりますので、なあメリス」

「はい！1日で食べます！！」

否定しろよ。クアルさん苦笑い浮かべてるぞ。

「それでは、お世話になりました！」

「なりました！！」

「こちらこそ……本当に、ありがとうございました！！」

手を振るメリスに、クアルさんも笑顔で応える。

こうして俺達は依頼を終了し、ニームル養殖場を後にするのだった……。

「お帰りー！」

「ただいまー！！」

ギルドに入ると、当然のようにコウルさんが声をかけてくれて、メリスは大声でそれに応える。

つてか、よく即座に反応できたなメリス。

「…………お疲れ様、依頼主から話は聞いてるわ」

声の方を向くと、プラムさんが机に片ひじをついていた。

「…………ブラッディヴァインが出たんですってね」

「あ、はい…………」

「一ついいかしら、どうしてそんな危険な相手に、ギルドに助けも求めず、自分達だけで戦ったのか。」

理由を言いなさい」

プラムさんは目を鋭くして言う。

理由って…………。

「ギルドに応援を頼んでも、来てもらうまでに時間がかかりますし、あのブラッディヴァインを野放しにしていたら、あの施設はもちろん、町の方にまで被害が及んでいた可能性があります」

「そう、そこまで考えていたことには感心するわ。」

でも、自分達が負けた時のことは考えなかったの？

倒せたから良かったものの、あんた達が倒されていたら、ブラッディヴァインのことが知らされず、それこそ甚大な被害が出ていたんじゃない？」

「いくらなんでも、施設に被害が出る頃にはクアルさんが気づいて、ギルドに連絡を入れていたと思いますか？」

「だったら戦闘の前に知らせておけば良かったでしょ？」

私が到着するのに時間がかかるんだから、なおさらね」

「あの時はそんな余裕はありませんでしたよ！」

バチバチと火花を散らしながら問答を繰り返すグリーとプラムさん。

何か……話に入っていけない……。

「ま、まーまー！二人とも落ち着いて！ね！」

見かねたコウルさんが仲裁に入り、落ち着くように言う。

プラムさんは少しの間顔をしかめた後、大きく嘆息する。

「被害を最小限にしようとしてくれたのは分かってるし、そのことには感謝してるわ。」

…… だけどね、勇氣と無謀は紙一重なの。

今回あんた達がやったことは、どちらかと言えば無謀の方よ？」

「う……」

正直それには返す言葉もない。

俺とグリーはD級だし、メリスは『魔導師』^{ウィザード} だけど、実力は俺達と同じぐらいだ。

どう考えても、危険度Cの魔物と戦っていい面子じゃない。

「グールド……グリーだったかしら？」

あんたは頭が切れるようだし、そのこの所はどう考えていたの？」

「……今言った通りです。」

あの時は事態を知らせに行っている余裕はありませんでしたし、もし僕達が負けていたとしても……いえ」

自らの疑念を払うように、グリーは小さく首を振る。

「倒せると、信じていました」

グリーはそう言って、俺とメリスの方を見る。

「……………そう」

プラムさんは少し微笑みを浮かべて、そう呟いた。

「……………ぶしつけな質問して悪かったわ。

とりあえず私が言いたかったのは、あんまり無茶はするな、ってことよ」

「プラムさん……………」

「応心配してくれてた……………のか？

「にしても、ブラッディヴァインをたった三人で、ね……………」

プラムさんは小さくそう呟くと、俺とグリーに視線を送る。

「あんた達、機会があったら昇格審査を受けるといいわ。

きつと……………いえ、確実に受かるでしょうから」

「え！？」

「……………何で驚くのよ」

思わず声を上げた俺を、プラムさんは呆れ顔で見る。

「最弱の部類とはいえ、あんた達は三人で危険度Cを倒したのよ？
つまり、平均的な実力はC級冒険者の域に達してること。」

まあ、依頼をこなした量は調べてないから、受けられるかどうかは知らないけどね」

「そう……なんですか？」

「私に聞いてどうするのよ」

まあ、考えてみたらそういうことだよな……。

俺達、旅を続けてる間にちゃんと強くなってるってことか……！

「そうそう、後これ」

そう言っつてプラムさんが渡してきたのは……1万4000G^{コールド}？

「……あの、これは？」

「報酬よ、コウルの」

「コウルさんっ!？」

全力でコウルさんの方を向くと、当の本人は笑顔で傾いていた。

なんで笑ってんだ!？

「コウルはブラッディヴァインを捜しに行ってたけど、見つけれなかったのよ」

「一応一通り調査して報告書まとめたから、報酬はもらえたんだけどね」

「……で、何でそれを俺達に……？」

「あんた達、ブラッディヴァインを倒したでしょ」

「いや、だからって……」

「気にしないで受け取って!俺金余ってるから!」

自慢ですか……。

「っていつか、金を使ってるような暇がないから！」

違った、自虐だった。

「それと、ブラッディヴァインの死体持って来たんでしょ？」

「あ、はい」

忘れてた。

大きな袋の口を開き、ブラッディヴァインをプラムさんに見せる。

「……これなら、相場で1万6000つてところかしら」

「え？」

確かグリーン、1万8000で、2万に引き上げて見せるって……。

グリーンを見ると、苦笑いを送ってきた。

……なるほど、あれはクアルさんを納得させるためのウソか。

「でもまあ、今回は特別に2万で買い取るわ」

「え!？」

「あら、依頼主にそう言ったんでしょ？」

う、しっかりとご存じだったか。

「……なんていつか、こんなにもらっちゃっていいのか?」

ブラッディヴァインだけでも相当なのに、コウルさんが受けた依頼

の報酬まで……。

「しつかり働いた人がそれ相応の報酬を得るのは当然のことよ。戸惑うのは勝手にすればいいけど、ちゃんと受け取りなさい」

「そうだよ、ハデイくん」

「……はい、ありがとうございます！」

報酬をしつかり受け取って、とりあえず貯蓄の中へ。
これでしばらくは余裕ができたな。

「それじゃ、そろそろおいとましようか」

「……だな」

「それじゃまた……」

「あ、ちよつと待って！」

ギルドから出ようとした所で、コウルさんに呼び止められる。

「明日は『英雄の日』だよ。」

この町ではけっこう大きな祭りが開かれるから、楽しんでいって
ね！」

「……『英雄の日』？」

「そついや、そんなのあつたな。」

「ただの祝日だと思つてたけど……」。

「そつだ、明日祭りの手伝い頼まれてるのよ。」

「暇だつたら手伝つてくれないかしら」

「そつか！三人が手伝つてくれれば俺はサボれ……痛い痛い痛い！
！」

「安心しなさい、あんたはケガでもしない限り強制参加よ」

コウルさんの手首をひねりながら、プラムさんは冷笑を浮かべる。

……怖っ！

「あ、つまりケガをすればサボれ」

「あら、ケガをしたいの？ダークネスソー」

「いえ、滅相もございません！！」

闇の剣が具現しかけた所で、コウルさんは凄まじい勢いで土下座をする。

剣って、絶対ケガじゃ済まないよな……。

「初めてじゃよく分からないでしょうし、手伝ってくれたら、簡単に案内ぐらいはするわよ」

「本当ですか、ありがとうございます！」

どれぐらいか分からないけど、あんまり大きい祭りだと迷ったりしそうだしな。

案内してくれるのは助かる。

「それじゃ、明日朝9時前にギルドに来てくれる？」

手伝いはそんなに多くないから、10時頃には終わって、祭りを楽しめると思うわ」

「夜8時までやるから、一日中楽しめるよ。神輿パレードや盆踊りもあるしね！」

結構いろいろあるみたいだな……。

「それじゃ、明日もよろしくお願いします」

「また明日〜！」

「お疲れ様でした！」

それぞれあいさつをして、ギルドを出る。

「祭りか……」

「ハデイ、今回けっこう収入あったんだし……」

「自重しろ」

「まだ何にも言っていないよ!？」

言われなくてもメリスが考えてることぐらい分かるっての。

「明日は最初に取り分渡すから、それで我慢しろ、暴食」

「暴食!？」

何でショック受けてるんだこいつ……。

ギャーギャーわめくメリスを適当になだめつつ、俺は今日あったことを思い出していた。

危険度Cの上位魔草、ブラッディヴァイン。

……シルムさんだったら、きつと一撃で、赤い葉ごと核を切り裂いて終わってたよな。

……強く、なりたい。

そう思ってるだけじゃ、ダメだ……! !

行動に移さなきゃ、強くなんなれない……。

いきなり、強くなることなんてできない。

……やれることから、始めてみるか！

右手を顔の前に出して、グッと力を込めてみる。

強くなれば……この手でできることも、きっと増えていくはずだ。

「ハデイ？」

「……ん、どうした？」

「ううん、何だか難しい顔してたから」

つと、また顔に出たか……。

まあ、心は読まれなかったみたいだけど。

「……プラムさんも言ってたけど、あんまり無茶はダメだよ？」

メリスは呟くようにそう言うと、数歩前にいるグリーの所まで、駆け足で向かった。

……心、読まれなかったんだよ……な？

第24話 真相究明（しんそうきゅうめい）（後書き）

サブタイトル解説

真相究明

本当の事情を、徹底的に明らかにすること。
ブラッディヴァイン出現の謎が明らかに！
……まあ単純に侵入してただけでしたが。

では次回予告です！

「メリスだよ！

明日は楽しいお祭り！！

りんご飴、たこ焼き、焼きトウモロコシ、焼きそば、わたあめ、
いか焼き、焼き鳥、フランクフルト、お好み焼き……、

次回、冒険者ライフ！第25話『牛飲馬食』！

誰かの代名詞だってハデイが言ってたんだけど……。
それより！お祭りって後は何が食べれるのかな！？」

第25話 牛飲馬食(ぎゅういんばしょく)

朝6時、いつもならまだ眠っている時間だが、俺は運動のできる服に着替えて外にいた。

「さて、始めるか」

そう呟いて剣の柄を持ち、ゆっくりと構える。

剣先が首の後ろにくるぐらいまで振りかぶり、力をこめて振り下ろす。

「……素振りなんて久しぶりだな」

思わずそう呟いた。

子供のころは毎日のように親父にやらされてたけど、冒険者になって仕事を始めてからは、こういう普通の修業なんて全然やってなかった。

理由は簡単、仕事で疲れてしまうこと。

そして、仕事だけで十分修業になってると思ってたことだ。

「それが、俺とレイラの一番大きな差だったんだろうな……」

素振りを続けながら、今はいない戦友を思い出す。

レイラは命懸けの大きな仕事の前でも、基礎的な鍛錬を欠かさなかった。

それも、常人なら疲れ果てるような量を、軽々とこなしていた。

13才でC級^{クラス}冒険者、レイラが天才なのは間違いないだろうけど、あいつはそれ以上に秀才なんだ。

「努力に勝る天才なし、ね。」

昔の人は本当、うまいこと言うもんだよな」

そう言った時、素振りの回数は丁度100回になっていた。

流石に少し汗が出てくるけど、まだまだ……！

一通り素振りを終えた後、俺は走り込みを始めた。

走るコースはあんまり考えてなかったから、とりあえず、海沿いを適当に走ることにした。

「……結構長いな、おい」

しばらく海を見つつ走っていたが、予想以上に道が長い。とりあえず適当な所で折り返し、元来た道を走っていく。宿屋まであと少し……の所で、妙な気配に気づいた。

「なんだ……これ」

町の外れの方向、人気がない道の先から感じる。

……これは、魔力……？

いぶかしげに思いながら、好奇心に負けてその方向へと歩いていくと、そこにいたのは……。

「……グリー？」

グリーの周りが微妙に淡い虹色に光っていたが、俺が声をかけると、光はすぐに霧散してしまう。

「びっくりした……。」

どうしたんだいハディくん、こんな所で」

「いや、グリーこそ」

「……見て分からないのかい？」

そう言っつてグリーは一冊の本を見せてくる。

『魔法入門』、昨日もグリーが読んでた本だ。

「なるほど、魔法の修業か」

「そうだよ、ハディくんは？」

「俺は普通の修業、素振りとか走り込みとか、後、筋トレもやるつもりだけど」

「へえ、そんなことしてたんだね、知らなかったよ」

「いや、知らなかったもなにも、今日からだ」

「なんだ、それなら知らないわけだよ」

「そういうグリーは？」

「三日前からだよ」

グリーが肩をすくめて言う。

俺もグリーも、まだ始めたばかりか、ってことか。

「……ところでメリスは？」

「まだ寝てるよ」

「メリスだけはいつも通りか」

まあ、朝早くからメリスが修業してるってのは、ちょっと想像しがたいしな。

「あのねハデイくん。」

昨日メリスはほぼ魔力を使い切ってたんだ。

魔法使いが魔力を回復する方法は、基本的に休憩ぐらいしかないんだからね？」

「そういうやそっだっけ……」

「瞑想で回復を早めるぐらいならメリスもできるけど、こっちは気が削れるしね。」

ただでさえ魔法は使うのが大変なんだ、そんなことしてたら倒れるよ」

「かといって魔力が回復してなかったら、いざという時困るからな。しっかり休んでもらわないと、ってことが」

「そういうこと」

グリーはまた本を開き、読み始める。

「どんな調子だ？」

「まだ始めて三日だよ？『集中』がやっつと。」

魔力を集束することすら上手くできてないから、当然魔法の発動なんて無理だよ」

「そっいや魔法って、基礎魔法レベル1でも習得に2年かかるんだっけ？」

「僕の場合、魔力はもう十分だから1年だよ。」

そもそもそれは『習い事』程度なら、だし、メリスのお手本をいつも見てるからね、もっと早く習得して見せるよ」

グリーはそう言って『集中』を始める。

グリーの周りが淡い虹色に光……らない。

微妙に光ってるような気もするが、正直、発光なんて呼べるレベルじゃない。

少しだけ強く光ったように見えたかと思えば、その光はすぐに消えてしまう。

……苦戦してるみたいだな。

「それじゃ、俺も修業に戻るな」

俺はグリーに軽く一声かけ、修業に戻った。

「おはようございまーす」

「うむいまーすー!」

朝食後、俺達はギルドに来た。

昨日祭りの手伝いを頼まれたからな。

「……おはよう、早かったわね」

イスに座ったプラムさんが応えてくれるけど……なんか、機嫌悪くないか？

「あれ、コウルさんは？」

「……休みよ」

「え、休み？どうして……」

確か昨日、『ケガでもしない限り強制参加』って……。

「バカだから」

「は？」

「バカだから休みなのよあのバカは……！！」

プラムさんは怒りゆえか、顔を真っ赤にして、体を震わせる。

メリスとグリーの方を見るが、当然二人とも首をかしげる。

……コウルさん、あんた何したんですか……？

1時間後、時間になったので、なんとか落ち着いたプラムさんと一緒に祭りの会場へ向かう。

「ここよ」

「なんか、屋台でいっぱいですね」

「当たり前でしょ、ちなみに神輿パレードも盆踊りもこの通りでやるわよ」

俺達が今いるのは、ヨーグルト町で一番大きな通りだ。

その両端には隙間もないぐらい多くの屋台が並んでいる。

ちらほらと人も来てるみたいだな。

まだ始まったばかりらしいから、これからもっと増えるんだろう。

「おいしそう……!!」

「後にしる後に!」

今にも屋台へと走っていかうとするメリスを引き止め、プラムさんについていく。

「それで、手伝いつて何をするんですか？」

「あれよ」

プラムさんが指差したのは、一つの無人の屋台のれんには大きく焼きそばと書かれている。

「……え？」

「助かったわ、コウル一人じゃ不安だったし、コウルは休みになっちゃったしね」

「あの、屋台の手伝い……ですか？」

「ええ、知り合いから頼まれたのよ」

「知り合い!? ギルドとして依頼を受けたとかじゃ……」

「あら、そんなこと言ったかしら？」

プラムさんはいたずらが成功した子供のような笑みを浮かべる。

「まあ確かに、『祭りの手伝い』ではあるね……」

「少し用事があるらしくてね、昨日も言ったけど、10時まででいいわ。」

焼きそばの作り方を書いた紙があるはずだから、しっかり頼むわよ」

「って、プラムさんは？」

「私？帰るわよ」

「他人任せですか！？っていうか、祭りの案内してくれるんじゃない？」

「……」

「はい」

プラムさんは笑みを浮かべて祭りのパンフレットを渡してくる。

「タイムテーブルはそこに書いてあるわ。」

後、祭りの会場はこの通りの端から端までよ。

以上」

案内いらねえ！？

「それじゃ、よろしく頼んだわよ」

プラムさんはそう言って帰ってしまった。

……なんか、してやられたって感じた……。

「ま、引き受けたからにはちゃんとやるつよ」

「うん！」

「なんか釈然としないけど……まあいいか」

「それじゃ、役割を決めようか。僕が焼きそばを作るから……」

「私味見役やりたい！！」

「却下！！つーか味見役なんていらねえ！！」

「ええー……」

「メリスは客寄せな！俺が接客やるから！」

「うん、分かった!」

そんなこんなで、俺達は祭り……というか屋台の手伝いを始めるのだった。

「それじゃ、後はよろしくお願いします!」

「おう!ありがとな兄ちゃん達!」

1時間後、俺達は屋台の持ち主に仕事を引き渡した。つてか、思ったよりあっという間だったな。

「いやー助かったぜ! プラムちゃんに感謝しないとな!」

「え?」

「屋台に少し遅れるって言ったなら、無償で手伝いを寄こしてくれたんだ。」

ホント良い子だよあの子は」

あれ、この手伝いってプラムさんから引き受けたのか? しかも無償で。

「ま、その分あんたら冒険者は大変だろうがな。」

あの子のことよろしく頼むよ!」

「あ、いえ、俺達はギルド所属じゃ……」

「そうだ。こいつは礼だ、持ってきたな!」

そう言っておじさんは焼きそばを3つくれた。

「あ、ありがとうございます」

「おう！今日はめでてー日なんだ！しっかり祭りを楽しんでいけよ
！」

がっはつはと笑うおじさん。

……めでたい日？今日は『英雄の日』……だよな？

「それじゃ、一旦解散するかい？」

「そうだな」

焼きそばを食べた後、俺達は分かれてそれぞれ祭りを見ることにした。

ちなみにメリスは焼きそばを30秒で食べ切った。

本当にこいつは人間じゃないというか、人間じゃないというか、人間じゃないというか。

「ハデイ、何で3回も言うの？」

「言っ
てねえ！！」

「ほらほら、ハデイくん、取り分は？」

「と、そうだったな。ほら」

俺は二人にそれぞれ3000G「トネ」を渡す。

「少ない？」

「祭りでそれ以上使う気かお前は」

確かに昨日の稼ぎからしたら、取り分は一人1万Gゴールド以上になるだろうけどな。

グリーはまだしも、メリスにそんな大金渡したら、絶対食い物だけで使い切るだろ！

「ん〜、まあいつか！これだけあれば十分食べれるし！！」

やっぱり食い物につき込む気だったか……。

「1時間後にこの周辺で集合、でいいかい？」

「おう」

「うん！それじゃまた後でね！」

メリスは走って、近くにあったりんご飴の屋台に行く。

「それじゃ、僕も行くよ」

「おう、また後でな」

グリーとも別れ、一人になる。

さて、どうしたもんかな。

腹はあんまり減ってないし。

ぶらぶらと歩いていると……。

「そこ行くお兄さん……。ちょっと寄って行かんかえ？」

声の方を見ると、ロープをはおった怪しげなおばあさんがいた。机の上には紫色に光る水晶玉がある。

のれんには、占いの館と書いてあった。

.....。

「さて、そろそろ何か食うかな」

「ちよっ!?!?何で無視するんだい!?!」

いや、何でって言われても.....。

「すみません、俺占いとか信じてないんで」

「そんなこと言わずに!!今なら一回たったの300Gユーブルだよ!!--!!」

300Gユーブルか。

それならまあ.....。

「じゃあ、せっかくだしお願いします」

「それじゃ、何について占おうか?」

「えーと.....、じゃあ総合運でお願いします」

「よしよし.....むむむ.....!」

おばあさんは手を水晶玉に当て、何やら念を送り始める。

まあ、よくある占い.....

「え?」

よく見ると、おばあさんの体がうつすら黒く光っていた。

.....まさか、『集中』?

もし魔法を使うんだとしたら、ひょっとしてちゃんとした占いだっ

たりするのか……？

「影によりて彼の者の未来を写し出せ デイヴィネーション！」

言葉に反応し、水晶玉が光り出す。

その中心には黒い闇がもやもやと動いていた。

「ふむふむ、これは……」

おばあさんは水晶玉を覗き込み、それをじっくりと観察する。

そして、ゆっくりと顔をあげて、真剣な顔で語り出した。

「近々、あなたの生活が大きく変わることになるだろう」

「え？」

「明日、明後日の話じゃない。

けれど、そう遠くない未来、あなたは『何か』を手に入れ、今の生活が大きく変わることになる」

「何か……？」

「それが何なのか、どんな影響を与えるのかは分からないけど……。

それを手に入れる直前、あなたは大きな危機に直面するだろう。

もしかしたら命を失うかもしれない」

「っ！？」

命を……失う！？

「その危機は、あなたにはどうにもできない程大きなもののような
ね……。」

けれど、大丈夫。あなたが諦めさえしなければ、その危機を乗り越えることは可能だ」

おばあさんがそこまで言うと、水晶玉は光を失う。

……なんか、不吉ってどうか……。
いや、そもも言い切れないか？
冒険者は普通に命懸けの仕事だし。

「さて、先程言った危機についてだが……」

おばあさんは真剣な面持ちで続ける。

「なんとかする方法があるよ」

「ほ、本当ですか？」

「ああ」

おばあさんは懐からネックレスを取り出した。

「この『魔除けのネックレス』さえあればね!!」

……ん？

「これさえあれば危機を乗り越えられるよ!!」

「今ならたったの2000G!!」^{ゴルド}

「お邪魔しました」

「嘘!!嘘だよ!!200Gだ!!」^{ゴルド}

いきなり10分の1かよ。

つてか、別に買いたくないし……。

「……でも、結構きれいだな」

宝石とかがつけられてるわけでもない、ただのガラス玉のネックレスだけ。
なんというか……。

……メリスに、似合いそう。

「って、何考えてんだ俺!？」

「どうしたんだい？」

いきなりブンブンと顔を振る俺を、おばあさんは怪しげな目で見る。

……まあ、200G「コルド」ならいいよな。

「買いますよ、せつかください」

「おおそうかい!なら1000……」

「さようなら」

「じゃなくて!!200G「コルド」だよ!!」

慌てて言い直すおばあさんに200G「コルド」を渡し、ネックレスを受け取る。油断も隙もないな……。

「それじゃ、あんたが危機を乗り越えられることを祈ってるよ」

「……ありがとうございます」

素直にお礼を言っておく。

……今の占い、魔法を使ったとしたら、信憑性高いよな……。

「ま、なんとかなるか」

俺はネックレスをしまつて、改めて祭りを楽しみ始めるのだった。

「あ、一番乗りか」

集合時間丁度、焼きそばの屋台に戻ってきたけど、メリスやグリーの姿はない。

「すみません、メリスとグリー見てませんか？」

「あの嬢ちゃんと帽子かぶった兄ちゃんかい？見てねえな」

屋台のおじさんも知らないみたいだ。
少し待つか……。

周りの屋台を見ながら数分待っていると、

「あ、ハデイー!!」

メリスが来たみたいだな。

「おう、メリ……」

声の方を向いて、俺は声を呑む。

「えへへ……どう？」

「……どこから持って来たんだ？その浴衣」

メリスは何故か浴衣を着ていた。

そんなの持ってなかったはずだけど……。

「近くに浴衣を貸してくれる店があったから、借りてきちゃった！」
うれしそうな笑顔に一瞬見とれる。

「……ハデイ？」

「い、いや！何でもない！！」

な、何だ！？顔が少し熱い！！何故！？

「それで？」

「え？」

「え？じゃなくて！！」

その……何か言うことないの？」

メリスは何故か顔を紅潮させて、そんなことを聞いて来た。

「あ、ああ、に、似合ってるぞ」

「本当？良かった……」

またメリスは笑顔になる。

それはさつきよりも魅力的に見えて……俺はまた、メリスに見とれていた。

「メ、メリス!?」

「あ、兄さん!!!」

グリーも戻ってきたな。

……一体どんな反応を……。

「そ、その浴衣はどうしたんだい!? いやそんなことはどうでもいい!! 似合う!! ものすごく似合っくてかわいいよメリス!! あまりのかわいさに僕の脳がどうにかなってしまいそうだ!! ああ、こんなかわいいメリスを見ることができなんて! 僕は今日という日を絶対に忘れないだろう!! はっ! このままではメリスが他の男達にも見られてしまう!! そんなことになったらナンパされまくるに決まっているじゃないか!! 仕方がない! 不穏な輩には僕が正義の鉄槌を……!!」

「落ちて着けグリー!!!」

銃を取り出そうとするグリーを慌てて引き止める。
やばい、こいつ目が本気だった!

「止めないでくれハディくん!!」

僕はメリスを守らなければいけないんだ!!」

「止めるに決まってるだろ!!」

こんな所で銃を乱射したらシャレにならねえぞ!!」

「兄さん、ナンパなんてされてないから大丈夫だよ」

メリスはのんきに笑っている。

……っっても、グリーの言うことも分からなくはないんだけどな。

男からしてみたらそんなに驚くことでもないんだけど……まあ、いや。

「そういや、なんかイベントとかあるんだっけ？」

「うん、最初は……12時から神輿パレードがあるよ」

「じゃあそれまでは適当にぶらついてるか」

そんなこんなで時は過ぎていき、気づけばもう辺りは暗くなっていた。

「ふう、いろいろイベントがあるな……」

「楽しかったよね！」

「神輿持った人間が闘牛みたいに走ってくるのはびびったけどな」

「でも盆踊りは普通だったよね。」

「ハデイも踊れば良かったのに！」

「いや、踊り方知らないし」

「別に周りに合わせればいいと思うよ？」

「グリー、お前も踊ってなかったよね？」

「さて、次が最後のイベントみたいだね」

「無視かこの野郎」

グリーはどこ吹く風でパンフレットを見ている。

「兄さん、次はなに？」

「花火だよ。」

「7時からだから、もうすぐ始まるみたいだけど……」
「どこで打ち上げるんだ一体……」

この辺りほとんど建物だけど……もしかして、屋上から打ち上げるのか？

と、その時、

ヒュウウウウ……ドーーーーーン！！

「あ、始まったみたいだね」

空を見ると、今の花火が消えていく所だった。

しかし、次から次へと新しい花火が打ち上げられ、暗くなった空に色とりどりの花を咲かせる。

「きれい……」

メリスはその光景を、うつとりとした表情で見ていた。

やっぱりこいつも女だもんな、こういうのは好きみたいだ。
ブローチとか、装飾品の類も好きだし。

「あ」

と、そこで朝買ったネックレスのことを思い出す。

「あーっと、メリス」

「ん、何？」

グリーに見つからないよう、こっそりとメリスに話しかける。

「これ」

そして、ガラス玉のネックレスを差し出した。

「それ……」

「『魔除けのネックレス』だってよ。」

……まあ、嘘っぽいけど、きれいだから、やるよ」

「……………」

押しつけるように渡すが、メリスは無言のまま。

……まあ、安物っぽいしな、こんなのもらっても別に……

「うれしい……」

「え？」

「ありがとう、ハデイ」

そう言ったメリスは、本当に、うれしそうな笑顔を浮かべていて、何でそんなに喜んでくれるのか、何でメリスは顔を紅潮させてるのか、そして……何で、俺の顔は熱くなってるのか。

そんなの、どうでも良くなるぐらい、かわいくて、魅力的だった……。

「終わっちゃったね、花火……」

花が消えた夜空を見て、メリスは悲しそうに呟いた。

「……だな」

「それじゃ、そろそろ帰ろうか」

「……うん」

まだ少ししよんぼりとしているメリス。

「……メリス、祭りぐらいまたあるって」

「でも、私達旅してるから……この祭りには、たぶんもう来ないよね……」

「来ればいいだろ」

「え？」

俺の言葉にメリスはあっけにとられる。

「いつ祭りがあるかは分かってるんだから、来年、またこの町に来ればいいだろ」

「そうだよ、メリス。僕達は、旅してるんだからさ」

「……うん!!」

メリスに笑顔が戻った所で、俺達は帰路についた。

「……そういえば、祭りでプラムさんもコウルさんも見なかったな」「私も見えないけど……、コウルさんは休みって言ってたよ?」

「いやだから、仕事を休んで祭りに行ったのかと思ってただけど」

「確かに、プラムさんとはかく、コウルさんはこういう祭りとか好きそうだしね」

「んーでも、大きな祭りだし、単に見なかつただけかもな」

俺は特に深く考えず、二人と一緒に宿屋へと帰るのだった……。

第25話 牛飲馬食(ぎゅういんばじょく)(後書き)

サブタイトル解説

牛飲馬食ぎゅういんばじょく

多量に飲み食いをすること。

メリスの代名詞です。

では次回予告です！

「グリーです。

今回は今回の舞台裏……かな？

ギルドの二人が中心のお話だよ。

次回、冒険者ライフ！第26話『あんちゅうひやく暗中飛躍』。

目立てば良いつてもんじゃないよ。

もちろんその逆も然り、だけどね」

第26話 暗中飛躍（あんちゅうひやく）

（プラムサイド）

あの三人を祭りに送った後、私は町から少し離れた海辺を一人歩いていた。

「この辺りにもいないわね。……もう少し奥かしら。

そういえば、この奥には小さな洞窟があったはず……」

首から下げた『紫黒石のネックレス』を握り締め、『集中』を始める。

黒い光が宝石の部分に吸い込まれていき、紫黒石は淡い紫色の光を放ち始めた。

……よし、行こう。

「……敵の戦力が分からないから、できればコウルにも来て欲しかったんだけどね……」

そう呟いて、今朝のことを思い出す……。

『よお』

『……?』

町を歩いていたら、急に声をかけられた。

振り向いてみると、そこには14、5歳ぐらいの少年がいた。

その少年を……正確には少年の毛髪を見て、一瞬、息を呑む。

……黒、確かに黒色だ。

しかし、その言い方では少し違和感を覚える。

……漆黒。

こっちの方が合っているような気がする。

それほど、不自然なほど黒い黒髪だった。

『……何か用かしら?』

『いや、別に』

少年はそう言っつて不敵な笑みを浮かべる。

……用がないなら、何で話しかけてきたのかしら。

『ただ……あなたはそれでいいのかと思ってよ』

『……は?』

意味が分からない。この子何を言っつてるの?

『生まれつき魔導師級の魔力……大した才能だな』

『……っ!?!』

自分の目が見開くのが分かった。

『……どこかで、お会いしたかしら？』

『いや、初対面だぜ？』

少年はからかうような笑みを浮かべる。

『見りや分かるさ、あんたは大して魔法の修業をしてない。

なのになりの魔力を持ってるってことぐらいな』

『……それで？』

『ちよつと気になっただけだ。

……それだけの才能がありながら、何で魔法の修業をそんな中途半端にしかしてないんだ？』

『……それは……』

言いかけて、気づく。

どうしてこんな初対面の子供にそんなことを言わなければいけないのか。

……しかし、拒絶することが、私にはできなかった。

本能……とでもいえばいいだろうか、それが、全力で警鐘を鳴らしていた。

……この少年に逆らうな、と……。

『強過ぎるから、よ……』

ほとんど無意識の内に、私は話し始めていた。

『魔力が強過ぎて……制御できないの』

『なんだ、修業中にケガ人でも出したのか？』
『っ！！』

思わず、少年を睨みつけてしまう。

『凶星か。』

……それで、お前は逃げてるわけだ』

『ち、違うわ！！私は！！』

『お前の考えはこうだろ？』

いくら強い魔力を持っていても、魔法として使わなければ周りに危害を及ぼすことはない。

だったら自分は魔法なんて使わなければいい、ってな』

『そ、そうよ！！私が魔法なんて使わなければ、誰も……！！』

『それが逃げだっつってんだよ。』

別にお前が魔法なんて興味ないってんならそれでも良かったんだけどな』

少年はイラついたような口調で言う。

『お前は逃げきれてねーんだよ。』

何か問題が起きたら、例えば不審者に襲われたりしたら、魔法を使えばなんとかなる、とか思ってんじゃねーの？』

『……それは……！！』

『人にケガをさせるぐらいの魔法は使えるんだろ？』

……今のお前は安全性のない爆弾と同じだ。

次はケガで済めばいいな』

『……………』

私は、何も言い返せなかった……。

『お前が天才的な魔力を持つてることも、もう魔法を覚えちゃまっていることも、揺るぎない事実だ。』

……その事実から逃げてんじゃねーよ』

『……あんたに……！』

キツと目の前の少年を睨みつける。

怒りで自分の体が震えていた。

『あんたに何が分かるの！？』

私だつて……逃げたくなんてなかった！！

魔法を、使いこなしたかったわよ！！』

『………』

少年は何も言わず、じつと私を見ていた。

『私があの時使ったのは……基礎魔法レベル1、一番殺傷力の強い閻属性とはいえ最も簡単な魔法よ……！？なのに、壁一つが吹き飛んだわ……！！』

話している内に、あの時の光景を思い出してしまう。

大きな風穴の空いた壁、余波でケガをして泣いてる友達、恐怖の目で私を見ている仲間や先生……！！

その時、理解した。

私は……魔法なんて使っちゃいけないって……！！

『あんたに……！！あんたに何が……！！』

『分からねーな』

少年の声が聞こえた、その瞬間。

私は凄まじい寒気に襲われた……。

『っ……！？』

『それだけの力と、力を発現する手段を持っていて、それを使いこなしたいと思っついていながら、

なんで制御する努力をしようとしなのか、分からねえ。

……魔力が強過ぎて制御できない？お前より強い魔力を制御できてる奴が、目の前にいるだろーが』

寒気の正体は……少年から放たれている、凄まじい魔力だった。

自分の才能なんて、魔導師級の魔力なんて、ほんのちっぽけなものに思えてしまう。

それほどの、膨大な魔力……。

『あなた……人間じゃ……！！』

『おいおい、失礼なこと言ってくるじゃねーか。』

一応俺は人間だぜ？ただ……』

少年は、不敵な笑みを浮かべた。

『ただ、化け物なだけだ』

寒気が、消える。

そして、理解した。

あれだけの魔力の波動を出したり消したりできるってことは、この子は本当に、完全に、魔力を制御できてるんだって。

『お前のそれは、叶えちゃいけない欲望か？』

それとも、そう思い込んでるだけの願いか？』

『それは……は……』

『……イラつくんだよ。』

叶えられる願いを勝手に無理だと決めつけて、自己完結して被害者ヅラしてる奴見てると』

『わ、私……は……！！』

何も言い返せず、震える私を、少年は漆黒の瞳で睨みつける。

『お前の選べる道は三つだ。』

一つ目は、このまま何もしない。

運が良ければ、特に何も問題ねーかもな』

『……悪かったら？』

『さーな、自分で想像してみる』

さっき言っていた、不審者とか、かしら。

……確かに、無理にでも魔法を使わなきゃいけないような事態になったとしたら、私は、きつと……。

『続けるぞ。二つ目は、魔力を封印してただの人間になる』

『！！ そんなこと、できるの……！？』

『できるぜ？俺ならな』

嘘だとは思えなかった。

この少年なら、本当にそれができるんだと、思った。

……でも、それで……いいの？

そんなの、それこそ逃げなんじゃ……。

『できればこれはやめて欲しいけどな。つまんねーから』

『……私は本気で悩んでるんだけど』

『俺だって本気で言ってるぞ』

……とりあえず二つ目は却下。

なんか負けた気がしてむかつくから……!!

それに、私が望んでいるのは、そんなものなんかじゃない。

『で、最後、三つ目』

少年は口元をゆがめる。

三つ目の内容は、なんとなく予想がついた。

きっと、それが私が選ぶべき答えだってことも……。

『俺の修業を受ける』

『……え?』

予想とは少し違う選択肢に、少しとまどう。

てっきり、勝手に修業しろって言われるかと……。

『当然魔力をコントロールする修業だ。』

まあ、俺は一週間後にこの町出るから、直接指導できるのはそれ
までだけだな』

『……』

『何まぬけ面してんだ?』

呆然としている私を見て、少年は不敵な笑みを浮かべる。

『まさか、これだけ口出ししておいて、俺が何の手助けもしない
でも思っただのか?』

自分よりも5、6歳は年下だと思つのに、その言葉も、笑みも、とても頼もしく感じた。

『いいわ、受けてやるうじやない。』

『あなたの修業……！』

『そりや良かった。』

ちなみに授業料はいらねえが、俺もまだ一応修業中の身だからな。付き合えるのは午前4時から7時までだ』

『あら、丁度いい時間ね。その時間なら私も暇よ』

正直、午前4時に起きるのは大変だけど、そんなことを言っている場合じゃない！

もう絶対に無理だと思っていた夢が、叶うかもしれないんだから！

『そういえば、名前まだ言っていなかったわね。』

私はプラム。プラム・ブラックネスよ』

『プラムか、よろしくな。俺の名前は………』

「……………長！！ギルド長！！」
「ん……………」

目を覚ますと、コウルが私の顔を覗き込んでいた。

「やっと起きた。

ギルド長、今日の朝は祭りの手伝いを頼まれてたじゃないですか。
遅れちゃいますよ?」

「……………今何時?」

「8時前です」

「……………まだ一時間あるじゃない。

9時にギルドを出れば十分間に合うわよ」

「朝ご飯食べない気ですか?」

そう言ってコウルは簡単な朝食を持ってくる。

うーん、毎朝作ってもらうと流石に少し罪悪感が……………

沸かないわね別に、コウルだし。

「……………ギルド長、今俺無性にご飯の中に毒を入れなきゃいけないよ
うな気が……………痛い痛い！！冗談です冗談！！」

「良いことを教えてあげるわ。

「冗談にも言つて良いものと悪いものがあるの」

「じゃあ今のはセーフだと思……………痛あつ!?!アウトですごめんなさ
い……………」

二度に渡って手首をひねり上げると、流石にこりたのか静かになる。

「ほら、着替えるから出ていきなさい」

「別に言われなくてもギルド長の着替えなんて見たくもな……いだだだだっ！！」

「ごめんなさい嘘です見たいで……」

ドゴオツ！！

ふざけた事をぬかすコウルを蹴り飛ばして部屋から追い出す。

全くあのバカは……！！

「それにしても、ギルド長が寝坊なんて珍しいですね。
いつも6時に起きてるのに」

朝ご飯を食べてると、コウルが戻ってきて質問をしてきた。

「……別に、ちょっと昔の夢を見てただけよ」

一旦手を休めて、コウルの質問に答える。

「昔って……ひょっとして『師匠』さんの夢ですか？」

「ええ、そういえば話したことあったかしら」

「はい、『地獄の修業』をさせられたんですよー！」

「違うわ、『地獄すら生ぬるく感じる修業』よ。」

……それと、何で嬉しそうな顔をしているのかしら？」

「いえ別に！ギルド長がひどい目にあっている所を想像してよろこんでいたわけじゃ……痛いー！」

変な妄想をしていたようなので、とりあえず頭に軽く一撃を入れておく。

「ま、師匠つて言つても、直接指導を受けたのは一週間ぐらいなんだけどね」

「あ、確か魔力や魔法を制御する修業を受けたんでしたっけ？」

「ええ、他にも体術とか、後は魔法も一つ教えてもらったけどね。」

「……あの人に会ってなかったら、私は魔法なんて一生使わなかったと思うわ」

言いながら、師匠の言葉を思い出す。

『今のお前は安全性のない爆弾と同じだ』、

「……確かにそうだったと思う。ただ……」

「とはいってもね、あの人の修業を受けてなくても、私は普通の人生を歩めたと思うわ」

だから、あの人は別に命の恩人とかそういうのじゃないし、はつきりいってあんまり恩も感じてない。

あの人自身、『俺はやりたいことをやってるだけだから、恩を感じる必要なんてない』って言ってたしね。

「……ただ、一つだけ、恩を感じていることもある。」

「でも、今ここにいて、あんたと一緒に仕事ができてるのは、あの人のお陰だけど、ね」

あの人に会わなければ、魔法を使うことなんてなかった。

つまりその後剣術を学んで冒険者になることも、このギルドのギルド長になることもなかったはずだから。

「ギルド長……」

コウルが少しづつるんだ目で私を見てくる。

……しまった、少ししゃべりすぎたわ。

「ギルド長……」

「な、何よ。うるさいわね……」

「俺ギルド長のこと、わがままで自分勝手に部下のことを考えてくれない最低の上司だと思ってますけど……」

「歯を食いしばりなさい」

「待つて……最後まで聞いて下さい……」

殴ろうとするのを止められる。

最後まで聞いたら殴っていいのね？

そんなことを思っていると……

「でも俺、ギルド長のこと大好きですよ……」

……一瞬、思考が停止した。

「ギルド長？」

いきなりコウルが顔を覗き込んできて、顔がカァツと熱くなる。

「ギ、ギルド長？なんか顔が赤いですけ……ちょ……？何で『集中』」

するんですか!？」

「うるっさいこのバカ!！闇よ集え シヤド!!!」

「えええ!？それシヤレにならな……ギャアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「………全く、あのバカは………!!」

思い出したらまた腹が立つてきた!

何であるバカは、ああも人を怒らせられるのかしら?

………人の、私の心を、かき乱せるのかしら………。

私が小さくため息をついた、その時だった。

「ギルド長!!!」

「っ!？」

後ろから、あのバカの声がした。

振り向くと、案の定そこには、コウルが笑顔で走ってきていた。

「あんた、何で………」

「俺も手伝います!!」

「…………ケガは？」

「あれぐらい、慣れっごですよ！」

コウルは、笑顔のままだ。

……………全く、本当に、こいつは……………。

「勝手にしなさい」

私はそう言って歩き出した。

後ろから、コウルがニコニコと笑いながらついてくるのを感じながら……………。

「そういえば、今日って『英雄の日』なんですよね」

しばらく歩いていると、コウルがそんなことを言ってきた。

「そうだけど……………祭りに行きたいのなら行けばいいじゃない」

「あ、いえ、そういうわけじゃないんですが。」

……………聞いた感じ、似てるなぁと思って」

「何が？」

「ギルド長の『師匠』と、その……………『英雄』が……………」

「……………」

『英雄』……………か。

「私は……………本人だと、思ってるわ」

「……………實在、するんですか？『黒の英雄』……………」

「確証はないわ。ただ、いろいろと重なるのよ」

そう言つて、今朝見た夢を……師匠のことを、思い出す。

「国王にタメ口聞く凶太さとか、3万人の軍隊をたつた二人で無力化するでたらめな力とか。

……憎まれ口を叩きつつも、結局見ず知らずの相手を救つてしま
うお人よしな所とか、ね」

「……でも、『黒の英雄』がいるってことは
「ええ、いるんでしょうね。

……『白の英雄』も」

たつた3年前の出来事にも関わらず、人物が特定できていないこと、
そして、やったとされていることが

にわかには信じ難いことのため、ただの伝説になってしまった『二
人の英雄』。

「そつちは心当たりとか……」

「ないわ。そもそも、私は師匠のことをほとんど知らないもの」

自分から話すことはあんまりなかったし、私も特に聞くことは思わ
なかった。

「あ、でも、師匠さんの名前くらいは知ってるんですよ？」

「そりゃあね。あんたも冒険者をやつてる以上、一度は聞いたこと
があるはずよ」

「え？」

「……『絶望』」

「っ！？」

師匠の異名を教えると、コウルは驚愕をあらわにする。

「ぜ、『絶望』って、あの……!?!」

「ええ、14歳で冒険者になり、それからたった半年でA級クラスにまで上りつめた、伝説の冒険者」

「1000人の大盗賊団を一晩で壊滅させたとか、危険度Aの上位竜を一人で倒したとか……」

「ある悪人はこんなことを言ったらしいわ。」

『ヤツは人間じゃない。人の恐れる絶望そのものだ』ってね」

それぐらい恐ろしかったってことでしょうけどね、気持ちはよく分かるわ。

「……でも、『絶望』って最近名前聞きませんよ。」

「死んだんじゃないかとも……あ、すいません!」

「それは絶対ないわよ。」

「師匠が死ぬ所なんて想像すらできないもの」

「ギルド長……」

なぜかコウルが感動したような目で見てくる。
うっとうしいんだけど……。

「ほら、見えてきたわよ!」

そう言って、前方の洞窟を指差す。

「いるとしたら、後はあそこぐらいよ」

「でも、ここって目撃情報があった場所からだいぶ離れていますよ?」
「移動したんでしょ。」

「……おかげで見つけるのが遅れたわ」

近づいて洞窟をそつと覗きこむと、そこには、3体のブラッディヴァインの姿があった。

丁度寝てるみたいね、ラッキーだわ。

「ほらね」

「でも、どうしてここだつて分かつたんですか？」

「別に、ブラッディヴァインの生態を考慮に入れて、ニームル養殖場から比較的近い場所を洗っただけよ」

ブラッディヴァインは基本的に一匹狼だけど、たまに少数の群れを作ることもある。

念のために調べておいて良かったわ。

「3体もいますけど……どうします？」

「殲滅するに決まってるでしょ。」

私が2体やるから、あんたは1体倒しなさい」

「……まあ、なんとかやってみます。」

それじゃ精霊を……」

「バカ、『集中』の時点で気づかれるわよ」

コウルにストップをかけて、紫黒石のネックレスを握り締める。

「それ……確か、魔力をためておけるネックレスでしたっけ？」

「ええ、さつきためておいたわ。」

これで『集中』を省略できる。

始め私が引き受けるから、その間に精霊呼びなさい」

「了解」

それだけ言って、私は気づかれないように気配を消しながら洞窟の中に入る。

「いや、よゆうで間に合ってるじゃないですか」

不満そうにいうコウルのそばには、少女の姿をした氷の精霊、オンディーナのナナと、少年の姿をした風の精霊、シルフのフルがいた。

「あら、2匹も呼んだの？」

1匹ずつしか攻撃できないのに。

それになんでサラマンダーを呼ばないのよ、こいつらの弱点炎よ？」

「攻撃はできなくても手助けはしてくれませうから。」

後、ヒヒには朝働いてもらったので休んでもらってます。

氷も効きやすいから大丈夫ですって！」

「そう」

と、その時赤いつるがまた迫ってきた。

バカの一つ覚えね……。

浮遊していた剣を両手に持ち、迎え撃つ。

「黒紫霧葬流、紫咲閃！」

紫電が閃き、つるを貫く。

一拍遅れてつるは分断され、黒い液体が飛び散る。

「ギュララララララ！」

さらに2本のつるが迫ってくるが、冷静に二振りの黒剣を構える。

「咲閃舞！」

紫電が舞い、つるを幾度となく切り裂いた。

私が走り抜けたのと同時に、2本のつるは先端からバラバラになる。

「相変わらず魔法使いとは思えない身体能力ですね……」

「魔法使いは身体能力が低い、なんて考えは偏見よ」

コウルと話してる内に、今切り裂いたつるが再生してしまっ。

……めんどろね、一気に終わらせようかしら。

「チエンジング
魔法変換！！」

私の声に反応して、5本の闇の剣が集まってくる。

「闇よその姿を具現せよ！

絶対たる力を以て我が前の敵を殲滅する力と為せ！！

ダークネスソード・シエノサイダー殲滅の巨剣！！」

闇が5本の剣を飲み込み、さらに広がっていく。

3m程の長さになった所で、闇は剣へと変化した。

「くらいなさい！！」

私の意思によって剣は浮かび上がり、切っ先をブラッディヴァインの核へと向けて突進する。

ブラッディヴァインの赤いつるが立ちはだかるが、それらをやすやすと切り裂き、巨大な剣は赤い葉ごと核を貫く。

「ギシャアアアアアアアアアア……」

断末魔の叫びを上げて崩れ落ちるブラッディヴァイン。

「次！」

コウルが1体を引き受けている内に、最後の奴も倒してしまいましたよ。

「ギュララララアアア！！！」

迫ってくる巨大な黒剣を止めようと、5本の赤いつるを飛ばすブラッディヴァイン。

「無駄よ」

でもそんなものは、ジェノサイダー殲滅の巨剣の前には紙切れも同然。
あっという間につるを切り裂き、巨大な剣は核へと向かう。

「悪いわね、私にはあの町を守る義務があるのよ」

最後の壁である赤い葉を貫き、剣を核に突き立てる。
敵が絶命したのを確認して、役目を終えた剣を消した。

……さてと、無事ブラッディヴァインも倒せたことだし。

「帰りましょうか」

「待ってギルド長！！俺は！？」

「何よ、まだ倒してないの？」

「最弱の部類とはいえ危険度Cですよ！？」

俺一人じゃ足止めが精一杯ですって！！！」

なげている割には結構優勢みただけど……まあいいわ。
『集中』を10秒ほど行い、

「冥界より暗黒の集いを呼ぶ 我は闇を作る者なり
消え去れ シャドネス！」

闇属性基礎魔法レベル3、シャドネスを発動。
黒い霧から現れた巨大な黒いドクロは、まっすぐブラッディヴァイ
ンの本体へと向かっていき、赤い葉と核を食い破った。

「ふいー……」。

ありがとう、ナナ！フル！またよろしく！」

コウルの呼びかけに応えた後、2匹の精霊は消える。

「全く、1体ぐらい倒しなさいよ」

「無茶言わないで下さいよ……」。

「って、ギルド長どこ行くんですか!?!」

「どこって、帰るに決まってるでしょ。」

「久しぶりに動いて疲れたしね」

「いやいや!!後始末どうするんですか!?!」

ブラッディヴァインの死体を指差すコウル。

何を言ってるんだか。

「あんたがやるに決まってるでしょ」

「俺一人でやるんですか!?!」

「任せたわよ、当然死体はちゃんと持ち帰ってきなさい」

諦めたのか、ため息をついて死体を集め始めるコウル。

……そうだ、あれをまだ言ってなかったわね。

「そういえばコウル、一つ朗報があるわ」

「朗報？」

「ええ、今朝電話があったのよ」

笑みを浮かべて、電話の内容を伝える。

「ギルドに所属したいって、冒険者からね」

「え！？ほ、本当ですか!？」

「本当よ。一応今日の夜に面接を受けてもらうけど、よっぽど問題がない限りは合格にしないさ」

「分かってますよ!!やったあ!これで俺の負担が減る!!」

天に拳を突き上げてガッツポーズを決めるコウル。

……面接を押しつけられてることには気づいてないのかしら?
まあいいけど。

……今度は、厳しくし過ぎて逃げられないように、気をつけないとね……。

第26話 暗中飛躍（あんちゅうひやく）（後書き）

サブタイトル解説

暗中飛躍

人に知られないように密かに活躍すること。

今回の二人の活躍のことです。

では次回予告です！

「プラムよ。

やっと新しい冒険者が来てくれることになったわ。

新米みたいだからしっかり教育しないとね。

…… あら、珍しいお客さんが来たわね。

次回、冒険者ライフ！第27話『臥竜鳳雛』。

世の中には、『大魔導師』より強い『魔導師』だっているもんよ」

第27話 臥竜鳳雛（がりょうほうすう）

「こんにちはー！」

翌日、俺達はまた冒険者ギルドに顔を出した。

お金は大丈夫だけど、稼げるときに稼いどいた方がいいからな。

「昨日の様子だと、このギルドまだ依頼ありそうだし。」

「あ、いらつしゃーい！」

「こんにちはー！」

「こ、こんにちは……」

あいさつを返してくれたのはコウルさん、そして見知らぬ二人の男女だった。

「コウルさん、この人たちもギルドの先輩っスか？」

「コウルだつてギナトくん。この三人は旅の冒険者だよ」

「昨日、ギルド所属は二人だけつて言つてたでしょ」

「そーいやそうだっけ？忘れてた」

「……やっぱり」

頭をかきながら軽快な笑い声を上げる黒髪の青年と、それに呆れたような声を出す黒髪の女性。

この二人は初めて見るけど……。

「紹介するよ。今日からギルドに所属することになった、ギナト・ブライアくとファト・ラメリさんだよ」

「よろしく！年近そうだし、気軽にギナトつて呼んでくれ！」

「よ、よろしくお願ひします」

さわやかな笑顔のギナトと、少しおどおどした様子のファト。
……なんか、対照的なコンビだな。

「俺はハデイ・トレイト、D級クラス冒険者だ、よろしくな」
「よろしく！私メリス・テーナス！『魔導師ワイザード』だよ！」
「僕はメリスの兄のグールド、グリーンでいいよ。ハデイくんと同じでD級クラスだよ」
「うえっ！マジで!?!」

自己紹介を終えると、ギナトが驚嘆の声を出す。

「てつきり同じE級クラスかと思ったのに！
その年でD級クラスに『魔導師ワイザード』ってすっげえな！
俺なんてまだ基礎魔法レベル1しか使えねえのに」
「あ、ギナトは魔法使いなのか？」
「おう！前線はファトに任せてるぜ！な、ファト！」
「う、うん……」

少し遠くから小さな声が聞こえた。
見ると、ファトは数歩下がっていた。

「こいつ少し人見知りなんだよ。おい！大丈夫だって」
「……………」

ギナトの声を聞くと、少し不安そうな顔をしながらも近づいて来た。
背負ってる長い棒が得物なのかな。

……本当長いな、良く見ると2m近くあるぞ。

「え、えっと、棒術をやってます……………」

「棒術？」

「その名の通り、長い棒を武器として使う武術だよ。
一般的に1・8 m前後の長さらしいね」

グリーの豆知識講座。

とりあえず、冒険者にはあんまり聞かない武術だな。

「こつ見えて強いんだぜ！町の不良100人ぐらい余裕だからな！」
「む、無理だよっ!？」

冗談だろうに本気に取って泣き顔になるファト。
100はいくらなんでもな……。

「え、無理なの？」

「絶対無理!!」

あ、本気で言ってた。

「とにかく！ファトが前線で敵を抑えて、俺が魔法で決める！これでも俺達けっこう恐れられてるんだぜ!!」

「……ギナトくん、」

私達まだほとんど依頼こなしたことないよ」

「……そうだったっけ？」

得意げな顔が一瞬で消えるギナト。

……誰に恐れられてるんだ一体。

「ねえねえ！二人は誰に恐れられてるの？」

うわ、メリスの奴聞きやがった!!

「え、だ、誰って……え……ふ、不良とか！悪ガキとか！ワイルドウルフとか！」

冷や汗をかきながら明後日の方向を見るギナト。

……おいメリス、キラキラした目をやめろ、逆に追い詰めてる。

「護衛の商人とか!!」

「待った!!」

出てきちゃいけない単語が出てきた気がする!!

「なんで護衛対象に恐れられるんだ!？」

「いやー！なんか頼りないとかなんとか!」

「う、ごめんなさい……」

あっけらかんと笑うギナトと、うなだれるファト。

…… 本当対照的だな、この二人。

「ま、まあとにかくこの二人はギルドの新入りなんだ！今日からビシバシ働いてもらおうよ!!」

ものすごくうれしそうだなコウルさん。

……人が増えても、プラムさんはコウルさんに容赦なく接しそうだけど。

「って、あれ、プラムさんは？」

今更ながらプラムさんがいないことに気づく。

「ああ、ギルド長なら残念ながらそろそろ……」

「コウル、何が残念なのかしら？」

「Nice（バッド？）タイミングでプラムさん登場。」

「……コウルさん、新入り二人を盾にしないで下さい。」

「お、おは、おはようございますギルド長……」

「震えまくってるなコウルさん。」

「コウル、ちょっと話があるわ。後で私の部屋に来なさい？」

「部屋に呼ぶとは大胆だな。きっと今コウルさんはドキドキしてるにとだろつ。」

「……もちろん恐怖で。」

「あの！ギルド長ってことは……あなたがあの『紫黒の魔女』!？」

「ええ、そうよ」

「マジっスか!?!うわ、ものすごい魔法使いつて聞いてたから、てつきりもつとおばさんかと思つてたのに!?!」

「誰がオバさんよ」

「額に青筋を浮かべるプラムさん。」

「……やつぱり、この年頃の女性つてこの単語に敏感なんだな……」。

「いや！全然おばさんなんかじゃないっスよ！予想外に美人でびっくりしただけで!?!」

「あ、あらそつ?」

「頬を緩ませるプラムさん。」

この人なら言われ慣れてそうだけど、うれしいものはうれしいんだろうな。

「ギナトくん、別にお世辞なんて言う必要……」

「あんたは黙ってなさい」

「はい!」

弱いなコウルさん!

「一応初対面だし、自己紹介しましょうか。」

私はプラム・ブラックネス。このギルドのギルド長を務めてるわ。ようするに、あんた達の上司よ」

「ギナト・プライア20歳!魔法使いつス!」

「ファ、ファト・ラメリです、よろしくお願いします」

「あら、珍しいわね、棒術士かしら?」

「え、あ、は、はい!」

背中の子を見て言い当てるプラムさん。

やっぱり冒険者には珍しい武術みたいだな。

「冒険者の武器だと、やっぱり剣とか槍が多いけど、硬い鱗を持つ魔物には棒術も有効よ。」

「もちろん、腕力は必要になるけどね」

「そうなのか?」

「まあね、硬度の高いものは、斬るより砕く方がやりやすいだろうし」

なるほど、確かに竜の鱗とか、そう簡単には斬れないもんな。

……っていつても、ただの棒で砕くのも簡単じゃないと思うけど。

「後は棒術の特徴といえば……」

プラムさんはファトの顔をチラリと見て、言った。

「不殺……かしらね」

「っ！」

その瞬間、ファトの目が見開いた。

「え、あ、あの……」

「さて、それじゃ、そろそろ仕事の話に移りましょうか」

うるたえるファトをしり目に、プラムさんは話を変えてしまった。

っていつか、いきなりどうしたんだ？急にうるたえたりして……。

「仕事ってことは依頼っスよね!？」

「そりゃそうだよ！ギルド長！今日はこの二人に任せて俺は休……」

「残念ながら期限が迫ってる依頼は一つしかないから、それはコウルにやってもらっわね」

「無視!？」

なげくコウルさんだけど、どっちにしろ休みってことはないだろ……。

…。

「ちなみに依頼は『町のドブ掃除』よ」

「何ですかその依頼!？」

うわ、よりによってドブ掃除か……。

「ギルド長!!そういう雑用は新入りにやらせるべきじゃ……」
「何よ?せっかく入ってくれたのに、いきなりドブ掃除をやらせる気?」

「う……」

痛い所をつかれて、ぐうの音も出なくなるコウルさん。

「あ、別に大丈夫っすよ!な、ファト!」

「え……う、うん」

一瞬嫌そうな顔をしたが、ギナトに押されてファトも合意する。

「大丈夫よ、優しい先輩がちゃんとやってくれるから」

「いや、俺はやりたくない……」

「冥界より闇の集いと呼ぶ……」

「やります!……!」

「またも脅し……、っていつかプラムさん、今の詠唱って、闇属性基礎魔法レベル2じゃ……」。

「そうスか?じゃあコウルさん、よろしくお願いしますっす!」

「よ、よろしくお願いします」

ギナトは特に気にした様子もなく言い、ファトは申し訳なさそうに言う。

「うう、今日は町中のドブ掃除をした後、ギルド長にポコポコにされるのか……」

「ああ、そっちはなしでいいわ」

「ドブ掃除を!?!」

「違うわよ、部屋に呼んだ方」

プラムさんが呆れ顔でそう言うと、コウルさんは顔を輝かせる。

「やったあ！！ギルド長の部屋に行かなくて済む！！」

「殴るわ」

「なぜ！？」

拳を握りしめたプラムさんからコウルさんが逃げ惑う。

……うん、まあ、確かに今の言い方は失礼だよな。

と、その時だった。

「こんにちはー！」

ギルドの扉が開き、中性的な声が響いた。

目を向けると、そこには一人の少年が立っていた。

声と同じく中性的だが、男だとは分かる顔立ち、瞳は普通の黒だが、毛髪は……クリーム色、といえばいいだろうか、少し黄みがあった白だ。

「あら、誰かと思ったらアザじゃない。どうしたの？」

「あ、うん。実は………何してるの？」

プラムさんとコウルさんの様子を見て、アザと呼ばれた少年は怪訝な顔をする。

……まあ、女が男の胸ぐらをつかみ上げて、今にも殴りそうな体勢になってるからな……。

「またコウルくんをいじめてるの？ダメだよプラムさん！」

「いつもそうだけど、悪いのはこいつよ」

「そうだったとしてもダメ！」

声を荒げられ、しぶしぶといった様子で手を離すプラムさん。

「コウルくんも、何があったか知らないけど、いたずらにプラムさんを怒らせないようにね？」

「はい……」

ケンカ両成敗、といった感じでコウルさんにも説教をするアザ。この二人を言葉だけで制するなんて、一体何者だ？

「それで？どうしたのよアザ。

獲物はいつも週末に持ってくるのに」

「あ、今日はそうじゃなくて、依頼を出しに来たんだ」

「依頼？あんたが？」

「うん、それで、えっと……その人達は？」

疑問符を浮かべて、俺達に目を向けるアザ。

まあ、初対面だもんな。

「ああ、黒髪二人はギルドの新人りで、残りは旅の冒険者よ」

「新しい人入ったんだ！良かったねプラムさん！」

うれしそうな笑みを浮かべるアザ。

……なんか、笑った顔女っぽいんだけど、男……だよな？

「黒髪の男がギナト、女がファト、茶髪の男がハデイ、女がメリス、

帽子かぶってるのがグリーよ」

なんかめちゃくちゃ簡潔に紹介された。

「僕はアザ・シーラー、よろしくね」

「……アザ・シーラー？」

名前を聞いて、グリーが反応する。

「君ひよつとして……『氷海の王』かい？」

「え？」

氷海の王……？

「あ、あはは、そう呼ばれてるみたいだね」

それを聞き、アザは苦笑いを浮かべる。

「グリー、『氷海の王』って？」

「この人の異名だよ。たまに武道大会なんかに出場しては、上位の成績を納めてるらしいね。」

「……ところで、君は冒険者なのかい？」

「え？うん、一応そうだけど」

冒険者？

「……そういやさっき、獲物がどうとか言ってたな。」

「いや、とんでもない実力者らしいのに、冒険者としての噂はほとんど聞いたことがないからさ」

「そりゃそうよ。アザはE級クラスだもの」

グリーの疑問にプラムさんが答える。

「っていつても、その実力はA級クラスとそんな色ないわ。魔力なんてこの私よりも上なのよ？」

「ええっ!?!」

グリーを除く初対面組四人の声が重なる。

「プ、プラムさんよりも上……!?!」

「ってことはこの人も……」

「この子は『大魔導師』じゃないわ。」

「っていうか、『魔導師』ですらないわよ」

「……え?」

ど、どういうことだ?

プラムさんよりも魔力が上なら、当然『大魔導師』のはずじゃ……。

「……なるほどね。」

「『大魔導師』はあくまでも称号、いくら実力があっても、本人が望まなければ取れないよね」

「そういうことよ」

「ってことは、冒険者の方もそうなのかい?」

「うん、僕冒険者としての地位なんて興味ないし」

なんか三人で勝手に話が進んで……。

まあでも、今のでなんとなくは分かったな。

「……………?」

約一名分かってない奴がいた。

「?????」

訂正、約二名だった。

ちなみに一人目がメリスで二人目はギナトだ。

「……ようするに、『ハイウェイザード大魔導師』の称号も、Aクラス級の地位も、取ろうと思えば取れるけど、取ってないってことだ」

「なるほど!……でも、何で?」

メリスが首をかしげる。

確かに、称号は取っておくに越したことはないと思うんだけど……。

「今言った通りだよ。僕は別に魔法使いとしての地位にも、冒険者としての地位にも、興味ないんだ。」

資格を取ったのは、ギルドに獲物を売り込むためだよ」

「獲物って……」

「漁師なのよこいつ。船でその辺にくり出しては、襲ってくる魔物を狩りまくってるわ」

「一応、一日に狩る上限は決めてるんだけど……」

つまり、魔物狩り専門の冒険者ってことか。

そっぴや、実力の高い冒険者だと、半端な依頼よりこっちの方が稼げるって聞いたことあるな。」

「それで?そんなお強いあんたが依頼を持ってくるなんて、一体どんな依頼なの?」

「正確には、依頼主は僕じゃないんだけどね。『海釣り船の護衛』。それが依頼の内容だよ」

「海釣り船？まさかあんたの？」

「まさか。僕の知り合いの漁師さんが、旅行客とかを標的に、海釣りツアーを組んだんだ。」

「それも、少し沖の方まで行くから、危険な魔物が出るかもしれない」

海釣りツアーか。

この町は魚とか有名だから、釣りをしたがる客もいるかもな。

「それで？」

「知り合いのよしみで、僕が護衛をやることになってたんだけど……さつき見てきたら、予想以上に大きい船だったんだ」

「つまり、あんた一人じゃ守り切れない、ってこと？」

「船に襲いかかってくる魔物はまだしも、お客さんが釣り上げた魔物までは処理しきれないよ」

「どれぐらいいるのよ？」

「予約してるだけで100人」

そう言っただけで肩をすくめるアザ。

その数のお客さんを一人一人見てるなんて、一人じゃ不可能だな……。

「それで、ギルドから応援が欲しいってこと？」

「頼むよ、船の出航は今日の11時なんだ」

11時って……後2時間ないな。

「あんたの『家族』に頼まないの？」

「家まで戻ってる時間ないって……」

「……そりゃそうね。いいわ、ちょうど労働力もそろってるしね」

プラムさんはそう言って俺達の方へ目を向ける。

「最初は簡単な依頼から始めるつもりだったけど、アザがいるんなら大丈夫でしょうし。」

「ハデイ達もお願いできるかしら？念のためにね。」

「はい！」

「よし！久しぶりの仕事だ！！がんばろうな、ファト！」

「う、うん」

「ちなみにアザくん、報酬は？」

「人数が必要だからって、一人5000Gゴールドだよ」

「ってことは、俺達三人で合計1万5000か！一昨日の依頼と同額だな。」

「それじゃ、ギルド長として命じるわ。あんた達五人で、依頼を完遂してきなさい！」

『はい！！』

さて、昨日は祭りを十分楽しんだんだ。今日は精一杯仕事に励むとするか！

「……あの、ギルド長、俺は？」

「何言ってるの？あんたはドブ掃除よ」

「やっぱり！？」

……「コウルさん、気持ちは分からなくもないですが、新入りの前で泣くのはやめた方がいいと思います。」

第27話 臥竜鳳雛（がりょうほうすう）（後書き）

サブタイトル解説

がりょうほうすう
臥竜鳳雛

将来大成する素質のある人物、

または、まだ世に出ない優れた人材のたとえ。

前者は新人という意味でギナトとファト、

後者は名誉や地位に興味のないアザのことです。

……使い方間違ってるかもしれない。

では次回予告です！

「コウルだよ！

依頼を受けた五人は船に乗って護衛を始めるんだ。

その間俺はドブ掃除……、おのれ悪のギルド長め！！

いつか俺が成敗してや……

ギ、ギルド長いつからそこに！？

じ、次回、冒険者ライフ！第28話『一騎当千』！

ご、ごめんなさい冗談で……いだだだだだだっ！！」

第28話 一騎当千(いっきとうせん)(前書き)

少し書き方変えてみました。

第28話 一騎当千(いきとひせん)

「これが俺達の乗る船……?」
「うん!」

とまどう俺達五人に、アザはにっこりと傾く。
え、何にとまどってるのかって?
船のデカさにだよ!!この船全長50mはあるぞ!!

「漁船……なんだよな?この船」
「そうだけど、沖の方に行く船は普通これぐらいの大きさだよ?」
「何い!?!」

バカな!?普通漁船つてもっとシヨボ……小さいんじゃないのか!?
「ハデイ、シヨボいなんて失礼だよ!」
「言い直したしそもそも口に出してねえ!っつーかわざわざ言つな
!?!」

くそっ……こういう時メリスの読心術は厄介だ!
なぜか俺しか読まれないし……。

「ハデイくん、海は魔物の巣窟だよ?
沿岸部ならまだしも、沖の方なんて、危険度DとかCの魔物がう
じゃうじゃいるんだからさ。これぐらいしっかりした船じゃないと
……」

「マジで!?!」

と、グリーの言葉に反応したのは、俺じゃなくてギナトだった。

「き、危険度Dとかかって……！俺達危険度Eとかそれ以下しか戦ったことないのに……」

「う、うん……」

ギナトとファトが不安げな顔をする。

と、その時、船の中から人が、笑い声を上げながら出てきた。

「ハツハツハ！安心しな！今回は少し沖の方に出るだけだからよ！それに万一の時は『氷海の王』がついてるしな！」

「あ、ベセルさん！」

「よおアザ！今日はよろしく頼むぜ！」

「うん、あ、みんな、この人はベセル・シーマンさん。この船の船長だよ」

「よろしくな！」

なんか、いかにも海の男って感じの人だな。

浅黒色の肌に真っ白な歯、頭には白いバンダナをまいてて、それがこれ以上ないぐらい似合ってる。

全員自己紹介を終えた後、俺達は船に乗り込んだ。

「……中は普通ですね」

「そりゃあそつだ！普段は俺達が漁に使ってる船だからな！」

豪快な笑い声を上げるベセルさん。

デカイ船〓豪華ってのは偏見か……。

「予定としては少し沖の方まで行って釣りをしてもらい、1時半に切り上げて港に戻るって感じだ」

「……釣るだけなんですな」

こんなデカイ船だから、他にもなんかあるのかと思っただけど。

「客の半数は顔見知りだからよ！あんたらも気楽にやってくれてかまわねえぜ！」

「顔見知り？」

「もしかして、この海釣りツアーって、定期的にやってるんですか？」

グリーがベセルさんに質問する。

てつきり思いつきでやったのかと思っただけど、よく考えると、それにしては予約客が多過ぎるよな。

「いや？つーか思いつきでやったからな」

つて思いつきだった！？

「ベセルさん顔広いからね」

「おう！知り合いの釣り人はもちろん、そいつらの知人・親戚・はたまた子供の通ってる学校にまで宣伝しまくったぜ！！」

漁師より向いてる職があるんじゃないかこの人。

「まっ、そういうわけだ。そいつらにもしものことがあったら、俺はもう立ち直れねえ。」

……よろしく頼むぜ？」

ベセルさんは笑顔でそういったが、それを聞いた俺達の間には緊張が走った。

……もし、もしも魔物にこの船を沈められでもしたら、100人以上の乗客の命が危険にさらされる。乗客全員の命が俺達にかかってる、ってのは言い過ぎかもしれないけど……絶対に失敗できない。それだけは、よく分かった。

「大丈夫だよ」

緊張感を破ったのは、アザだった。

「そんなに心配しなくても……僕が、ちゃんと守るから」

そして、真剣な顔でベセルさんに告げる。

たぶん、俺達六人の中で一番年下なのに、その言葉は、とても頼もしく感じた……。

「おう、よろしく頼むぜアザ！」

「任せて！」

笑顔で向き合う二人。

『守る』。

こういう時においては、使い古された言葉だ。

言うだけなら簡単、だけど、実行するのはとても難しい。

人によっては、この言葉を簡単に使うことは、軽率だと思うかもしれない。

……だけど、今のアザには一点の迷いすらも感じられない。信じられる、少なくとも、俺はそう思った。

「ほれ」

「え……釣り竿？」

客も乗り込み、出航し沖へと向かう途中、船内で暇を持て余していると、ベセルさんに2本の釣り竿とエサを渡された。

「あんたらもやるといい、魔物さえ出なきゃ暇だろうしな。

ただし、護衛はしっかり頼むぜ？」

「はい、ありがとうございます！」

お礼を言って釣り竿を受け取る。

つて、釣りなんてしたことないんだけど。

「2本だから、3人で1本かな？」

「いや、僕はいいよ。普段からよくやってるし」

「それじゃ、2人と3人に分かれて……」

「グリー、その前に俺、やり方分からないんだけど……」

「あ、私も！」

「すみません、私も……」

「俺は分かるぜ！」

「それじゃ、僕、メリス、ファトさんと、ギナトくん、ハディくん
で分かれようか。」

知ってる人がいた方がいいだろうからね」

言い方からして、グリーも知ってるんだろうな。

…… 本物知りだよなこいつ。

「ついたぞー……！！！！」

と、ベセルさんの大声が聞こえてきた。

案外早いもんだな……。

「おー………」

「海！！海だよ海！！！！」

「いや、海は港でも見たけどな？」

デッキに出ると、周りには大海原が広がっていた、まあ、メリスのはしゃぎたくなるのも分かる気がするな！水平線まで青一色だ。

もちろん周囲にはお客さんがもう来てて、早い人はもう釣りを始めているみたいだ。

「それじゃ、配置を決めておこうか」

グリーンに言われて集合する俺達。

簡単に説明すると、俺とギナトは船の進行方向右側、グリーン、メリス、ファトは逆側で釣りをしながらお客さん達の護衛。

アザはその辺を歩きながら護衛するみたいだ。

「うん、それじゃみんなしっかりね！散開！」

アザの号令で俺達は散り、担当の場所で釣りを始めた。

「それで、これどうすればいいんだ？」

「まずは……あれ？」

釣り竿を見て、ギナトは手を止める。

「これ、もうこのまま釣りできるぜ」

「え？」

「仕掛けも重りもついてるし……後はリールのロックを外して、放り込むだけだ」

「こっ、か？」

言われた通りにして海に放り込む。

さて、一体何が釣れるか……。

「うわっ！！」

と、すぐ隣で叫び声が聞こえた。

「ギナトこれ頼む！」

「え、お、おう！」

釣り竿をギナトに渡して、そっちに目を向けると、釣り糸の先の魚が釣り人に飛びかかろうとしていた。

とっさに剣を引き抜き、魚を切り裂く。

魔物特有の黒い血が飛び散り、魚は地に伏せた。

「大丈夫ですか？」

「はい、いやーすみません、焦って一気に釣り上げちゃって」

魔物に襲われかかったのに平然としてるような……。釣り人っぽいし、慣れてるんだらうか？

「あれ、魔物を釣った時って、ゆっくり引き上げた方がいいんですか？」

「そりゃそうですよ！」

魔物つたって魚ですからね、その方が空気を吸って弱るし、何より距離をとれば襲いかかってきても逃げられますからね」

これは良いことを聞いたな。

……いや、考えてみたら当たり前なんだけどさ。

ギナトの所に戻ると、ギナトが呆然としていた。

「ギナト？どうし……」

「すっげえ！！」

「え？」

「すげえよハディ！！とっさの一撃で魔物を倒しちゃうなんて！！」

しかもあれ危険度Eの魔物だろ！！？」

「いや、魔物にはあんまり詳しくないから分からないけど……」

「D級クラスって聞いてたから予想はしてたけど、やっぱりすげえな！！」

ダメだ、聞いてない。

……いやでも、こういうのも、なんか良いな。

最近、自分よりすごい人ばかりに会ってたから、ほめられるのが新鮮に感じるっていうか……。

「でも、ギナトだってこれぐらいできるだろ？」

「いや、俺は魔法使いだから、『集中』とかあるし」

「あ、そっか。じゃあ、ファトは？」

「あいつは……」

ギナトはそこで口をつぐむ。
そして、少し間をおいてから口を開いた。

「あいつは、殺しはちよつとな……」
「殺しって……魔物だぞ？」

そりゃあまあ、魔物だって生き物だから、殺しには違いないだろうけど……。

「魔物でもダメなんだよ、蚊でもためらうくらいだから……」

そう言つてギナトは顔を伏せる。

……そういえば、

「プラムさんが言つてたのって……」

棒術の特徴、不殺。

プラムさんは、見抜いてたのか……？

「でも、それなら何で冒険者に？」

「……分かんねえ。冒険者になる前から何回も聞いたけど、教えてくれねえんだ。」

なんか知らねえけど、俺と一緒に冒険者になるって

……ん？

「二人つていつから一緒にいたんだ？」

「いつって、物心ついたころからだぜ。いわゆる幼馴染ってやつ！」

「……じゃあ、ギナトが冒険者になった理由は？」

「そりゃ子供の時から夢だつて！男といえは冒険者だろ……！」

きっぱりと言い切るギナト。

……あー、なんとなく分かった。

「……苦勞してそうだな、ファト」

「え？」

「いや、別に」

ギナトには悪いけど、ここは適当にごまかしておく。

こつこつというのは当人同士の問題だからな……。

……つていうか、実際にいるんだな、こんな鈍感な奴。

普通気づくだろ、一緒にいたくて冒険者になつたんだって。

「ま、そんな感じでさ。あいつは弱いから、だから、俺が……」

と、ギナトが言いかけた、その時だった。

船の近くに、大きな水柱が立った。

そこから小さな波が起き、船が小さく揺れる。

持ち上げられた水が重力に従い、海へと落ちていくにつれ、それは姿を現わしていった。

「……竜……いや、へび……！？」

そこにいたのは、竜ともとれるような巨大な大蛇。

その大きさは、海から出ている部分だけでも5m近くある。

「『シーサーペント』……！」

後ろからグリーの声がした。

「シーサーペントって……」

「危険度Cの上位魔魚だよ……」

「危険度C!?!」

慌てて剣を引き抜き、シーサーペントに向かって構える。

「ギナト!下がってる……!」

「あ、お、おう……!」

いくらなんでも、新米には荷が重い相手だ。

つてか、俺達にも十分荷が重いんだけど……!!

と、そこで、俺はようやく違和感に気づいた。

「……………あれ?」

今の状況を改めて説明する。

ここは海の上、しかも沖で、逃げ場のない船の上だ。

しっかりとした船ではあるけど、目の前の魔物は、この船を沈めるのに十分な力を持つてるだろう。

つまり、絶体絶命の大ピンチ……にもかかわらず。

……………乗客に、ほとんどおびえた様子がない。

子供達でさえ、親の後ろに隠れてる程度だ。

「こりゃあまた、大物が出てきやがったな」

「ベセルさん!」

それは船長であるベセルさんも同じだった。

おびえるどころか、のんきに煙草をふかしている。

「あ、あのっ、な、何でみなさん、そんなに冷静、なんですか……？」

ファトがシーサーペントを見て、小刻みに震えながらベセルさんに問う。

そう、今のファトの反応が普通……いや、これでも冷静な方に入るだろう。

一般人だったら、パニックになってもおかしくない。

「まあ、いつもなら大騒ぎだけどな。

今日は大丈夫だ、……なんせ」

その時、一人の少年が、クリーム色の髪を揺らして、魔物の前に躍り出た。

「なんせ、あの『氷海の王』が護衛についでるんだからな！」

そういつてベセルさんはアザを見る。

その目には、確かな信頼が感じられた。

「お、おいアザ！？一人で何やって……」

「下がってて」

聞こえたのは、いつもの中性的なものより、少し低い声。気のせいかな、その声には威圧感が感じられた。

「ハディくん」

「あれは……!?!」

「輝ける生命の化身よ!その鋭き力を以て彼の者を貫け!」

アザの手に集まった氷は長細くなっていき、それに伴って先端は鋭く、そしてその後ろから段々と太くなっていく。

巨大なランス……といえは分かりやすいだろうか。

それをしっかりと手に持ち、アザは『呪文』を紡ぐ。

アイシクル・ジャベリン
「氷結の大槍!!!」

ガシユツ!!!

ミサイルのような速度で飛びだした巨大な氷の槍は、一瞬でシーサーペントの腹に大きな風穴を空けた。

「オオオオオオオオオオ……」

致命傷を受けたシーサーペントは、断末魔の声を上げながら……船に倒れこんでくる!?!

「お、おい!やばっ……」

俺が慌てる間もなく船に倒れ込んだシーサーペントの死体は、

「危ないなあ……」

アザが、しっかりとキャッチしていた。

……シーサーペントの体重って、何kgあるんだ……?!

せた……。

第28話 一騎当千（いっきとひせん）（後書き）

サブタイトル解説

一騎当千いっきとひせん

一人で多勢の敵に対抗できるほど強いこと。

アザのことですが……しまった！

戦ったのは強敵であって、多勢の敵じゃない！

……では次回予告です！

「ハデイだ！アザの実力をその目で見た俺達。

もちろん丸投げする気はないけど、

これならもう心配はいらないって感じだよな！

……と、ギナト？どうしんだんだ、浮かない顔して……。

次回、冒険者ライフ！第29話『陰陽和合いんようわごう』！

後輩の相談に乗るのも、先輩の務めだよな！」

第29話 陰陽和合（いんようわごう）

「……よーするに、リサイクル？」

「うん、まあそんな感じだよ」

疑問符を浮かべるメリスに、グリーが笑顔で答える。

シーサーペント騒動の後、メリスがグリーに一つの質問をしていた。内容は、アザが使っていた『魔法変換』チエンジングについて、だ。

「前に使った魔法を再利用して別の魔法を発動する魔法、それが魔法変換チエンジングだよ。

利点としては『集中』を省略できること、それと、普通に新しく魔法を使う場合に比べて、大幅に魔力を節約できることが挙げられるかな」

「へー、そんなのあるんだな」

今グリーが言った利点は、魔法使いにとってはかなり大きいだろ。魔法の弱点である、速さと魔力切れを補えるんだから。

「ただ、欠点もあるよ。」

『詠唱』が省略できないとか、全体の威力は前に使った魔法以下になるとか、あんまり遠くにある魔法は再利用できないとかね」

「万能じゃないってことか」

「そういうこと。でも、使いどころを選べばかなり有効な魔法でもあるよ」

「僕の場合はまず結界魔法で相手の攻撃を防いで、それを攻撃魔法に変えて反撃する、って戦法が多いかな」

「そっか！それなら一人でも戦えるもんね！」

それを聞いて、メリスはぼん、と手を打つ。

魔法使いは普通補助的な役回りが多いからな。

まあ、『魔塔』のランディアさんとか、『大魔導師』ハイウェイザードのプラムさんレベルなら、一人でも大丈夫かもしれないけど。

「いいなー！私も覚えてみよっかな……」

「うーん、少なくとも、今のメリスにはあんまり向いてないと思うよ？」

「え、何で？兄さん」

「この魔法は変換するだけだからね、状況によって魔法を使い分けるために使うものなんだよ。」

メリスは攻撃魔法……というか、基礎魔法しか覚えてないでしょ？」

「あ」

「そうか、結界魔法とか、もしくは同じ攻撃魔法でも形が違うものとか、そういうのを覚えてないと使っても意味ないんだな」

基礎魔法ってほとんど攻撃魔法だもんな。

しかも、相手に向かって飛ばすようなものばかりだし。

「それとこの魔法、同じ属性か、もしくは形が近いものじゃないと使えないんだ。」

例を挙げると、アクアムに魔法変換チェンジングを使ってブレイアムを発動、とかは無理」

「ええっ!?!」

メリスが驚きの声を上げ、その後、目に見えて落胆する。

こいつそれを狙ってたんだな。

アクアムで攻撃した後にはブレイアムでとどめ、か。

……確かに、できたらかなり強力そうだな。

「んー、それもしてきたとしても、ブレイアムの威力がアクアム以下になっちゃうよ?」

「あ、そうか」

「まあ、アクアムは分散する魔法だから、一つにまとめれば威力はそこそこあるだろうけどね」

アザにそう指摘される。

『全体の威力は前に使った魔法以下になる』んだっけ。
と、そこで違和感に気づく。

「……ちよつと待った、さっきアザ、魔法変換チェンジング使った魔法でシーサーペント倒してたよな?」

「うん、だから、その前の結界魔法を強力なものにしたんだよ」

そっぴやあの銀色の壁、シーサーペントの一撃を受けてもびびり入ってなかったな。

「つまり、一つ目を強力なものにすれば二つ目も強力に、逆に一つ目が弱かったら二つ目も弱くなるのか」

「後者は正解だよ、前者はそうとも限らないけど」

「前に使った魔法『以下』だからね」

アザとグリーの補足が入る。

となると、速さや魔力切れを補うっていうより、強力な魔法を連続で使っつて感じか。

あ、でも補助魔法も合わせられるだろうし、結構応用性が高そうだな。

……どっちにしろ、メリスには使いこなせないんじゃない? ……。

「ハデイ、今失礼なこと考えなかった？」
「いや、別に」

危ねえ！良かった、完全には読まれなかったみたいだ！

「メリスさんには、『魔法変換』^{チエンジング}より『魔法強化』^{ブースター}の方がいいんじゃないかな？

それなら基礎魔法レベル1をレベル2にしたりできるし」

「『魔法強化』？」

「ただ他の魔法に変換するんじゃないかと、より強力なものにする魔法だよ。」

……でも、そっちは魔力をめちゃくちゃ消費するんだ、しかも高度な魔法だから、習得するのも大変だしね。

僕としては、こういう魔法を覚えるのは、もっと簡単な応用魔法を覚えてからでいいと思うよ？」

「んー、そうだね！私まだ応用魔法一つも覚えてないし！」

結論、まだメリスには早いつてことか。

俺は別に良いけどな、今でも十分助けられてるし。

「おーいその四人！お前らが主力なんだからあんまり固まらないでくれよ？」

「あ、すみません！」

船長のベセルさんにしかられる。

固まったら人数がいる意味がないもんな。

「それじゃ、護衛を続けようか」

「おう！」

さっきと同じ配置に戻る俺達。

さて、また魔物が来るかもしれないし、

「いつでも戦えるようにしておかないとな……」

「っていつても、そんなに気負う必要はないよ」

「わっ」

釣りをしているギナトの後ろにいと、急にアザに声をかけられた。危ない、少しぼーっとしてたな。

「せっかく釣り竿も貸してもらったんだしさ、最低限警戒して、後は気楽にやればいいと思うよ。」

「気を張りすぎると疲れちゃうし」

笑顔でそう言ってくれるアザ。

……なんていうか。

「アザって、今何才？」

「え、16だよ？」

「16……」

いや、見た目からたぶんそれぐらいだろうとは思ってたけど、本当にそれぐらいの年なんだな。

俺なんかよりよっぽどしっかりしてる……。

「どうしたの？」

「いや、別に……」

少しふてくされていたその時、

「なあ、少しいいか？」

ギナトが声をかけてきた。

釣り竿はいったん引き上げたみたいだ。

「ん、どうした？」

「ちよつと、二人に聞きたいことがあるんだ」

「あ、僕も？」

ギナトは傾くと、

少し間をおいて、やがて決心したように口を開いた。

「冒険者が魔物を殺せないのは……悪いこと、なのか？」

いつもより少し小さな声、

だけど、それは確かに俺達の耳に届いた。

「……ファトのこと、か？」

「ああ」

ギナトは俺の目を見て傾く。

「さつき、アザがシーサーペントを倒したのを見て、すげえよな！

って声をかけたら、沈んだ声で、そうだねって、表情も暗くて……」

「それって、目の前で魔物が殺されたからか？」

「いや、違う。あいつは自分が殺すのがダメなだけだからな。

……でもあいつ、そのこと少し気にしてるみたいなんだ。

俺が魔物を仕留めた時とか、たまに謝ってくるし……」

……なるほど、自分ができないから、ギナトに殺させてしまってる、
って思ってるのか。

アザが魔法で敵を倒したのを見て、それを思い出したのかもな……。

「俺は……何も言っちゃれなくて、あいつは弱いから……だから、
俺が、守ってやらなきゃいけないのに……！」

ぎり、とギナトが歯を食いしばる。

その顔には、自責の念がありありと出ていた。

「……僕の知り合いに、ね。」

殺しが大っ嫌いな人がいるんだ」

「え？」

アザの話に、ギナトはきよんとする。

「その人はどんな悪人でも人は絶対に殺さないし、魔物でも、必要
な狩り以外は殺さない、襲いかかってきても追いついてあげないだけ。」

……その人の殺さない理由、なんだと思う？」

「え……」

ギナトは少し考えた後、分からないと首を振る。

正直、俺も分からない。

人を殺さないのはともかく、魔物にもそんな気をつかう理由なんて
……。

「『死ぬのを見るのが嫌いだから』、だよ」

「……え」

「それ、だけ？」

俺が聞くと、アザは少し笑って傾く。
いや、死ぬのを見るのが嫌いって……そりゃ、それは好きっていう方がおかしいだろうけど。

「魔物を殺せないのは、悪いことなんかじゃないよ、そもそも、生物は『死』を嫌うものなんだから。」

でもね、戦いで相手を殺さずに倒すのは、一番難しい勝ち方だよ。僕の知り合いは、とてつもなく強いからそれができる。

……ファトさんに、その強さはあるの？」

「っ！だから、俺が……！」

「例えギナトくんが代わりに強くなったとしても、ファトさん自身も強くならなきゃダメだよ。」

戦いに出ている限りは、ね」

アザの厳しい意見に、ギナトは顔をうつむかせる。

それを、アザはいつもよりも鋭い目で見ていた。

……結局、バラバラじゃダメってことなんじゃないか？

二人は、仲間なんだ、それなら……。

「一緒に強くなれば、いいんじゃないか？」

俺の呟きに、ギナトが顔を上げる。

「一緒に……？」

「お前らは仲間なんだろ？だったら、互いに助け合えばいいんじゃないか？」

力が足りないんなら、二人で協力すればいい、ファトが不安がってるなら、ギナトが励ませばいい、仲間って、そういうもんだろ」

「あ……」

ギナトはまた顔をうつむかせ、何かを考える。
何を思ってるかは……大体分かるけど。

「名案だね」

アザがギナトにほほ笑みを向ける。

「ギナトくん、君は、ファトさんを守りたいんでしょう？
だったら、心も守ってあげなよ」

「……………」

少し間をおいて、ギナトが顔を上げる。

それは、最初にあった時のような、さわやかな笑顔だった。

「おう！やってやるー！！」

ギナトの調子が戻ったのを見て、俺はアザと顔を合わせるのだった。

くメリスサイドく

「どーしたのファトちゃん、なんだか顔が暗いよ？」
「あ、いえ、何でもないです……………」

口ではそういうけど、とてもそうは見えない。

ひょっとして船酔いかな……？

「さっきのシーサーペントかい？」

「え……」

「シーサーペントがどうかしたの？」

アザくんが倒したから、もう心配はいらないと思うんだけど……。

「いや、プラムさんも言ってたでしょ、棒術の特徴は不殺って。

だから、ひょっとしてファトさんは、血とかが見るのがダメなんじゃないかと思ってね」

「え、そうなの？」

確かに私も苦手だし……女の子にはちょっとね。

「あ、いえ、確かにあまり好きではありませんけど、それほどじゃ

……」

「じゃあなんで、そんな顔してるの？」

「……私」

か細い声で、ファトちゃんは話し始めた。

「魔物を……殺せないんです」

「……え？でも、冒険者やってたら……」

「戦うのは、大丈夫なんです。

でも、殺すのは……どうしても、怖くて、いつも、ギナトくんに押しつけてて」

「さっきの魔物を見て、それを思い出してたのかい？」

傾くファトちゃん。

流石兄さん、すごい洞察力……！

「私、ギナトくんに迷惑かけてるんじゃないかって、思っちゃって……」

「そっか、それで悩んでたんだ」

傾くファトちゃんに、私は片手を頭に寄せ、なでる。

「あ、あの……？」

「大丈夫だよ！ギナトくんそんな顔してなかったもん！私これでも、人の心には鋭いんだから！」

「そうだね、大丈夫だと思うよ」

兄さんも太鼓判を押してくれる。

「迷惑かどうかはギナトくんが決めることだけど、もし迷惑だと思ってるのなら、二人は一緒にはいないんじゃないかい？」

兄さんの言葉を聞いて、ファトちゃんははっとした顔になる。そして、少しうるんだ目で、

「ありがとうございます……！」

と、言ってくれた。

「ほら、泣いちゃダメ！笑顔笑顔！」

「あ……はい！」

涙をぬぐって、笑顔になる。

うん！やっぱり女の子は笑顔だよね！

「ところで、ファトちゃんって何才？」

「え、えと、この前成人しました」

「あれ、じゃあ20才!? 年上じゃん! ごめんね、ちゃん付けなんてして!」

「い、いえ、別に……」

「って、何でファトちゃん敬語なの! 私の方が年下なんだから! キナトくんには普通に話してたでしょ!」

「え、ええっと……」

こんな感じで盛り上がっていた、その時。

「お、引いてるよ!」

「わ、本当だ!」

兄さんが急いでリールを巻き始める。

何かな、何かな!

「シャアアアアアアアア!」

……魔物でした。

って襲いかかってくる!?

ドガッ!

「え」

とっさに反応したのは、私じゃなくてファトちゃんだった。
長い棒で魔物を船の床に叩き落としたの。

「だ、大丈夫？」

「あ、うん！ありがとう！」

私がそう言うと、ファトちゃんも笑顔になってくれる。

……そういえば、

「今、敬語じゃなかったね」

「え、あ……」

「それでいいよ！ファトちゃん！」

「……………うん」

二人で笑い合った、その時。

「おのれこの魚……！よくもメリスに襲いかかったな……！」

直後、30回ぐらい銃声が響き続けた……。

（ハデイサイド）

「撃ち過ぎだアホ……！ホントお前こいつの時アホだよな分かってはいたけど……！」

「落ち着きなよハデイくん」

「てめえが言うな……！」

1匹の魔魚に30発って！八チの巢どころじゃねえよ！あの魔物原型留めてなかったぞ！！

つつか、俺が止めなかったらまだ撃ち続けてたたる！！

「下の部屋が倉庫で良かったよ。

人がいたらちよつと危なかったかも……」

流石のアザも少し呆れてるみたいだ。

いや、もっと大いに呆れるべきだと思っただけ。

「この船の全体図は覚えてたからね。人がいる所になんて撃たないよ」

「そんだけ冷静ならそもそも撃つな！！」

俺にどなられても笑っただけのグリー、ダメだ、ほとんど反省してねえ……！！

「おい！そろそろ港に帰るぞ！」

と、ベセルさんの声がした。

もう1時半か……意外と早いもんだな。

船体が港に向かって走り出すのを感じて、俺はそんなことを思っただった。

港に到着し、あれだけいた客も帰ってしまった後、俺達もベセルさんと一緒に、船から降りた。

「最後は少し問題あったが、お前らのおかげでケガ人も出ずに済んだ、ありがとう！」

「……すみません」

「面目ないです」

グリー笑うな、せめて反省だけでもしろ！

「そんじゃ報酬だ、受け取りな！」

ベセルさんが一人ずつ、報酬を渡していく。

「うおー！久しぶりの報酬だ！！」

……ギナト、喜び過ぎだ。

そりゃうれしいだろうけどさ。

「いやー、いきなり依頼して最初は大丈夫かと思ったがな！

助かったよ！プラムちゃんにもよろしくな！」

「はい、それじゃ！」

依頼を完了し、ベセルさん達と別れる。

……前の屋台のおじさんもそうだったけど、プラムさんっておじさん方にはちゃん付けされてるのか？

『お前もありがとなアザ！』

『いいよ、いつも乗せてもらってるからさ』

『ハツハツハ！今度キャティ嬢ちゃんやピユ坊も連れてこいよ！』
『家族』で釣りをするのもいいもんだ！』
『……うん、そうだね……』

港からギルドまでの帰り道、俺達三人が前に行き、ギナトとファトは隣り合って歩いていった。

「……ねえ、ギナトくん」

「ん？」

「私、ギナトくんに迷惑とか、かけてないかな……？」

「かけてねえよ」

「あ……うん……」

見えないけど、振り向かなくても分かる、今、ファトがどんな顔をしてるのか。

「なあ、ファト。どうしても、嫌か？魔物を殺すのは……」

「……うん」

「……そっか」

別に不満げでもなく、むしろ安心したかのように、ギナトは呟いた。

「ファト、一緒に強くなるうな！魔物を殺さなくても大丈夫なぐらいー！」

「……………うん！」

……………良かった、うまくいったみたいだな。

「ハデイ、盗み聞きはよくないよ？」

「うるさい……………つてか、お前も聞いてただろ」

後ろを歩く二人に聞こえないよう、小さな声でメリスと話す。

「でもあの二人、結構お似合いだな。

少なくともファトはギナトのこと好きみたいだし」

「……………え？」

「え？つてなんだよ？普通に見てて分かるだろ、ギナトは気づいてないみたいけどな」

話聞いた感じあからさまだと思っただけだな、
なんでギナトは気づかな……………、

「待てメリス、なんでいきなり俺を睨む！？」

「べっつに……………」

なぜか急に不機嫌になるメリス。

……………俺、なんか変なこと言ったか？

そうこうしているうちにギルドに到着する。

さて、プラムさんに依頼完了しましたって報告しないと！

第29話 陰陽和合（いんようわごう）（後書き）

サブタイトル解説

いんようわごう
陰陽和合

相對する二つのものが、ほどよく調和している様子。
夫婦仲が良いって意味もあります。

ギナトとファトのことですが、
ハデイとメリスにもあてはまる……でしょうか？

では次回予告です！

「メリスだよ！

全く、何でハデイは他の人のことは気づくのに、
自分のことは気づかないんだろうね！

……と、とにかく！

次回私達はついに港町ヨーグルトを発つんだよ！
っていつても、実際いたのは3日だけなんだけどね……。

次回、冒険者ライフ！第30話『行雲流水』！

風の吹くまま気の向くまま！私達は旅を続けるよ！」

「この町じゃないわ。タルト町のギルドであるのよ、5日後にね」

「え、タルト町って……」

「徒歩なら2日近くかかるわ。そして審査を受けるには、3日前、つまり明後日までにギルドに直接行って、申請を出さなきゃいけない。」

「受けたいなら今日にも出た方がいいでしょうね、明日じゃ間に合
うか分からないし」

そう、昨日グリーもまさに、プラムさんと同じことを言ったんだ。

明日出ても間に合わないことはないけど、1日ぐらい余裕を持って
おいた方が良く、って。

「え？2日で着くなら、明日でも十分……」

「到着は明後日の夜になるわ。ギルドが閉まるまでに間に合えばい
いわね」

コウルさんに説明するプラムさん。

申請にも時間かかるだろうから……相当ギリギリになるみたいだ。

「そもそも、審査を受けたいなら、もっと早くその町にいるべきよ。
そんなギリギリ入り込む方がおかしいわ」

「いや昨日知ったんですよ、審査があるの。」

それに、少し前までは審査なんて受けるつもりありませんでした
し」

俺もグリーも、今の所D級クラスで満足してたし、しばらくは審査を受け
るつもりなんてなかった。

……でも、

「でも、『紫黒の魔女』が、確実に受かるって言うてくれましたか

らね」

ブラッディヴァインを倒した俺達を、プラムさんはそう評価してくれた。

そこに審査があるって話を聞いたんだ、これはもう行くしかないだろってことで、急ぎよこの町を出ることになったんだ。

「……ただの社交辞令、とは思わなかったの？」

「プラムさん、社交辞令なんて言うんですか？」

「どついう意味かしら？」

嫌味っぽいグリーの言葉に、プラムさんはわざとらしくまゆをひそめる。

たぶん自覚はあるだろうなあ、俺達初見で『帰れ』って言われたし。

「ま、正解。あれは社交辞令なんかじゃない、れっきとした事実よ。

だからって天狗にならないようにね、私はあんた達が戦っている所を直接見てないし、そもそも、審査するのは私じゃないんだから」

と、プラムさんに釘を刺される。

それはもちろん分かってるけど、

「大丈夫です、受かってみせます！」

「私もがんばります！！」

メリスがプラムさんに向かってガッツポーズを作る。
そう、今回はメリスも試験を受けることにしたんだ。

「あら、あんたも受けるの？」

「はい！がんばります！」

「分かってると思うけど、いくら実力があっても冒険者の資格はE級クラスからよ？」

「今まであなたが『仲間』として依頼をこなしていてもね」

「はい！！がんばります！！」

「そ、そう……」

おお、あのプラムさんがメリスの迫力に押されてる……。

と、今プラムさんが言った通り、

メリスはE級クラスからのスタートになる。

ちなみに、『仲間』としてこなした依頼もすっかりカウントされるから、このまた次の機会があれば、メリスはすぐにD級クラスの審査を受けられる。

でも、試験と審査を同じ日に受けるのは無理だから、しばらくはメリスはE級クラスってことになる。

にも関わらず、メリスが今回試験を受けることにした理由、それは……、

「でも、今までは持ってなかったんでしょ？どうして急に？」

「だって！冒険者なら冒険者の資格欲しいじゃないですか！！」

……うん、単純明快だ。

「……逆に、何で今まで取らなかったの？」

「あ、それは……」

それは俺も今まで気になってたことだ。

だから、昨日の夜に聞いた。

メリスが今まで資格を取らなかったのは……、

「私、エアさんに憧れてるんです」

「イア……って、『八つの魔塔』の？」
「はい!!」

『星の賢者』の異名で知られ、魔法使いの中でも最強と呼ばれる使い手の一人、イア・ランディアさん。
メリスがずっと憧れてた人だ。

「イアさんが、冒険者の資格を持ってなかったから……」
「当たり前でしょ、あの人は冒険者じゃないんだから……って、それが理由？」
「……はい」

少し恥ずかしそうに言うメリス。

「ふーん……ま、それはただのマネ事ね、何の意味もないわ」
「ばっさり切り捨てるプラムさん。」
うん、この人はたぶんこう言うと思った。

「はい、私もそう思ったんです」
「あら、何かきっかけでもあったの？」
「きっかけていうか……。少し前にイアさんに会った時に」
「え、会ったの？……あ、ごめんなさい、続けて」
「なんていうか……遠過ぎるなあって」

メリスはそう言って、少し寂しそうに笑う。
俺はメリスも十分すごいと思うけど、ランディアさんはちょっと……格が違う。

「諦めるの?」

「い、いえ！！諦めません！！いつかは絶対イアさんに追いつきます！！」

言い切る辺り大物だよなこいつ……。

「でも、目標としてはちょっと遠過ぎるから、とりあえず、もう少し近い目標が欲しいなって」

「なるほど、それが冒険者の資格なのね？」

「ううん、プラムさんです！！」

「……私？」

「はい！」

にっこりと笑顔を向けるメリス、プラムさんは予想外だったのか、顔をきよとんとさせていた。

「プラムさんはB級クラスだって聞いたので、私もひとまずそれを目指します！！」

ピシツと言いつ切るメリス。

それに『大魔導師ハイウェイザード』でもあるからな、目標としては良いと思う。

「へえ、そう……」

それを聞いて、プラムさんはいたずら笑みを浮かべる。

「勘違いしてるみたいね」

「え？」

「確かに私が持つてるのはB級クラスよ。

でも、それはギルド長になってからは冒険者を休業してるから、そうじゃなかったら、たぶん今頃A級クラスになってるわ」

「え、えええ!?!」
「あら、私は『大魔導師』よ?当然と言えば当然でしょ?」

驚くメリスにあっさり言つてのけるプラムさん。
そつか、A級冒険者より大魔導師の方が人数少ないもんな……。
いや待て、でもA級冒険者全員が魔法使いつてわけじゃないし、でも、大魔導師全員が冒険者つてわけでもないもんな……。
なんか、わけわからなくなつてきた……。

「とりあえず、『大魔導師』で冒険者をやつてるような人は、大体A級だろつね」

グリーは分かっていたのか、俺と同じく混乱していたメリスに補足する。

「つまり、私に追いつきたいならA級を目指せつてことよ」
「な、なるほど?!」

…… 本当に分かつたのか?こいつ。

「分かりました!! A級を目指します!!」
「ええ、もちろん『大魔導師』も目指すのよ?」
『星の賢者』に追いつきたいならね」
「はい!」

やる気満々、といった顔をプラムさんに向けるメリス。
こいつのこついう、迷いのないところは、俺も見習わないとな。

「さて、話が盛大にそれたけど、あんた達、そろそろ行つた方がいいんじゃない?」

「ってギルド長！？自分だけしっかり話しといてそれはひどくないですか！？」

「そうっスよ！！俺達まだ全然話してないっス！」

「あら、いたの？コウル」

「俺だけ！？」

ギナトとコウルさんの抗議に、まるでコウルさんの存在を今知ったかのように返すプラムさん。

……さっきコウルさんにツッコんでなかったっけ？

「うう、みんな、本当に行っちゃうんだね……」

「……はい、お世話になります」

「せっかくこれからも、どんどん働いてもらおうと思ってたのに……」

「それは口に出さなくていいですよね！？」

感動の別れが台無しだ！！

「そうね、それは私も残念だわ」

プラムさん、あんたもか！！

「ハデイ！俺達もこれからがんばるから！お前らもがんばれよ！！」

「えっと、みなさ……」

「ファト」

「あ、うん……。みんな、また、会おうね」

しっかり別れを言ってくれるギナトとファト。

「おう！お前らもな！」

「ファトちゃん！またね！！」

「ちゃんと困った時は助け合うんだよ？」

「分かってるって！！」

グリーの言葉に笑顔で返すギナト。

……まあ、ファトの気持ちには気づいてないんだろっけ。

「タルト町に行くなら、まずはミカン村で一泊するといいでしょ
ね。」

野宿が好きならそっちでもいいけど

「ミカン村？」

「ここから徒歩8時間ぐらいの場所にある村よ。」

少しタルト町までの道から外れるけど、そこからは徒歩10時間
ぐらいだから、明日の朝に出れば、夜には着くわ

「それなら申請には十分間に合いますね」

野宿も大変だし、そっちの方がいいか。

「少し前に行ったことあるけど、平和な良い村よ。」

2日間歩き通しになるから、そこでしっかり休むことね

「はい！！」

「それじゃ、名残惜しいけど、そろそろ行くっか」

「そう、ウチは仕事ならいつでもあるわ。」

仕事が欲しかったらまた来なさい

「そうそう！！俺の代わりにいっぱい仕事を……」

「あんたは黙ってなさい」

「ひどい！！」

……大丈夫かなあ、このギルド。

「少なくとも、来年の今頃にはまた来ると思います。な、メリス」
「え……あ、うん!!」

それを聞いて、メリスは笑顔になる。
本当、こいつ祭り好きだな……。
違った、好きなのは屋台の食べ物か。

俺達がギルドの外に出ると、四人も一緒に出て、見送ってくれる。

「それじゃ、また。アザにもよろしく言うておいて下さい」

「ええ……そうね、最後に、旅立つあんた達に、一つ言葉を贈ろうかしら」

「言葉？」

「そう、よく聞きなさい」

プラムさんは少し間をおいて、再び口を開いた。

「『自分の力に誇りを持って、そして、それを絶対に裏切るな』」

そこまで大きな声ではなかったけど、その言葉は、辺り一帯に響いたような気がする。

「私の師匠がよく言うてた言葉よ。」

力を持っている者でも……いえ、力を持っている者だからこそ、自分の行動に責任を持たなきゃいけない。

あんた達がこれからどれだけ強くなったとしても、その力に溺れるようなことは、絶対にならないようにね？」

『……はい!!』

プラムさんの言葉に、俺とメリスが同時に返事をする。

誇り……か……。

「それじゃ、また会いましょう」

「またね!!みんな!!」

「次会う時は、俺達ももっとすごくなってるからな!!」

「私も……もっと強くなるから、みんなも頑張ってね!」

「じゃーな!!」

「またねー!!!!!!」

こうして俺達はギルドのみんなと別れ、港町ヨーグルトから出発した。

目指すは……ミカン村、そしてタルト町だ!

「この森か?」

「そう、ミカン村はこの森の中にあるんだよ」

港町ヨーグルトを出て6時間程歩き、俺達は森の前に立っていた。

「カラタチの森、その名の通り、カラタチの木が多く生えてるらしいね」

「カラタチ？そっぴや、柑橘系の匂いがするな……」

森を歩いていると、その匂いでいっぱいなのが分かる。

……なんかこの森の木、低いのが多くないか？

「これがカラタチの木だよ。

葉の付け根にトゲがあるから、刺さないように気をつけてね」

「はい……あれ、実がなってる……」

木に小さな緑色の実がなってるのを見つけ、うれしそうにもぎ取るメリス。

……ちょっと待て、柑橘なのに実が緑って……。

「メリス、それはまだ熟してないし、そもそもカラタチは食用にならない……」

「につがー……い……」

「話聞けよお前……」

苦々しい顔で実を吐きだすメリス。

……うん、自業自得だな。

「うー……なんで果物なのに食べられないの!？」

「そのままじゃ食べられないけど、カラタチは果実酒の材料になるんだよ」

「お酒か……」

「メリスはまだ飲めないな」

未成年者だし……ってか、前の泥酔具合を見る限り、メリスはもう飲まない方がいいと思う。

「ミカン村はその名の通り、ミカンが特産物らしいからね。

到着したらミカンが食べれると思うよ」

「本当!？」

「あれ、ミカンって収穫時期冬じゃなかったっけ？」

「温室もあるんだって、一年中出荷してるらしいよ。」

「この国のミカンの6割はミカン村のものだとか」

「すごいなそれ」

何度か出てきたけど、このスイーツ王国はお菓子が有名だから、当然、材料になるような果物は消費量が多い。

『村』ならそんなに大きな所じゃないと思うんだけど……。

「そういえば、森の中に村があるってのも珍しいよな。

魔物とか大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ、この森にはほとんど魔物がいないからね」

「……え？」

「気づかなかったのかい？」

「これだけ歩いているのに、全く魔物に出くわしてないじゃないか」

「そういえば……」

「チヨウとか普通の鳥とかはいるんだけどね、なぜか魔物はほとんどいないらしいんだ」

普通森とか洞窟って言ったら、多少なりとも魔物があるものなのかな。

ま、平和なのはいいことだよな。

「……ん、この音は……」

音の聞こえた方向に向かってみると、道から少し離れた所に小川を発見。

「ちょうどいいね、少し休憩しようか」

「だな」

一応途中で昼食兼休憩を入れたけど、それからまた3時間以上歩いてるからな。

「わー見て！魚、魚！」

と、メリスは小川の中に入って魚を取ろうとする。
元気だなこいつ。

「はしゃぎ過ぎて川に落ちるなよ？」

「分かってるって！」

ま、いくらなんでも大丈夫だよな、子供じゃあるまいし。
歩き通しで少し疲れたから、今のうちにゆっくり休むと……

バsshャー————ン！！

「……………」

ありえない音が聞こえた気がする。

「メーリースー？」

「あ、あはははは……」

川の方へ顔を向けると、予想通り、メリスがずぶぬれになっていた。

「なんで注意した瞬間に失敗するんだ!？」

「ってか、川ですべてって転ぶとか何歳児だお前は!!」

「うー、ご、ごめん……」

「ほらメリス!早く体をふいて!風邪ひいちゃうよ!!」

「大丈夫だグリー、バカは風邪なんてひかない」

「ハデイひどい!!」

急いでたき火を起こして、体を乾かさせる。

本当に風邪なんてひかれたら、シャレにならないからな。

「うゝ寒い……」

「まだ一応夏だけど……秋も近いしな」

「服着たまま水浴びなんて夏でもあんまりやらないって。

「……そうか!メリス!今すぐ着替えるんだ!!」

「『そうか!』じゃねえ!!下心丸見えだてめえは!!」

「うん、分かった……」

「分かるな!!ここで着替えるな!!せめて木の陰に隠れる!!!!」

「あ、うん」

着替えを持って木の後ろへ向かうメリス。

全く、こいつらは……!!

「……ハデイ、覗かないでね?」

「俺よりグリーに言えー!!」

俺より1000倍グリーの方が危険だろ!!

「大丈夫だよメリス!……その時は、僕がハディくんの後頭部を撃ち抜くからね」

「銃を構えるな!」

人を殺せそうなくらいの殺気が辺りに蔓延する。

……あれ、ここって平和な森じゃなかったっけ?

「お待たせー!」

「おー、着替えても火には当たったけよ、体温下がってるだろうし」

「うん!」

そうしてしばらく休み、そろそろ行くこうかという所で、

「あれ、そこにいるのはもしかして、旅人さん?」

道の方から声がした。

見ると、そこには10歳ぐらいの少年がいた。

「ひょっとしてミカン村に向かっているの?」

「そうだけど……君は?」

「俺ランジ・ビレン!旅人が来るの久しぶりだよ!今から帰る所だからさ、良かったら案内しようか?」

「本当か?」

「うん!」

明るめの茶髪をゆらして微笑むランジ。

なんか、人懐っこい感じの子だな。
道すがら俺達も自己紹介しておく。
ランジは川で釣りをして、その帰りらしい。

「へー、冒険者の人なんだ！冒険者ってすごいんだよね？」

「ま、一応国家資格必要だしな」

「俺はあんまり興味ないけど、村には、将来冒険者目指す！って奴も結構いるよ」

「やっぱり男の子？」

「男の方が多いけど、中には女もいるよ。ウチの姉貴とかさ！」

「ランジくんのお姉さん？」

「そーでも俺より弱いんだ！後10年は修業積まないと無理だって」

子供特有のいたずらな顔で笑うランジ。
でも、今の言い方からして……。

「冒険者になるのが無理、ではないんだ？」

「え、そ、そりゃがんばってるし……そうだ！ハデイさん達冒険者なら、ちよつと修業見てやってよ！」

「いいけど……俺達明日の朝には出発するぞ？」

「あれ、そんな早く行っちゃうの？」

「ああ、タルト町で昇格審査受けるんだ」

「ふーん……？よく分かんないけど」

子供にはちよつと分からないか？

「そーいや、この森って魔物いないんだって？」

村も平和で良い村だって聞いたよ」

平和だからこそ、こんな子供が一人で来れるんだろうな。
良いことだ。

「……ま、ね」

と思っていたのに、返ってきたのは歯切れの悪い言葉だった。

「ランジ？」

「確かに、ここ半年ぐらいは、普通に平和だよ」

「……半年ぐらいは？」

「そ……危険なのは、魔物だけじゃないってこと」

何か含みのある言い方だな……。

メリスは俺と同じでよく分からないって顔をしてたけど、グリーは何か知ってるのか、真剣な面持ちで聞いていた。

「さて、と！見えてきたよ！」

正面を見ると、開けた場所が見えた。
そして、たくさんの家や、人の姿も。

「ミカン村へようこそ！旅人さん達！」

森に囲まれた小さな村。

いかにも田舎って感じだけど、なんていうか、故郷を思い出すな……。

「もう夕暮れだし、行き先は宿屋でいいよね？案内するよ」

「いや、そこまでしてもらうのは……」

「いいって！俺も今から行く所だからさ！」

「そ、そうか？ありがとな」

お礼を言って、ランジについて行く。
田舎の風景を眺めつつ数分歩くと、

「ほら、あそこだよ！」

ランジが指差したのは、2階建ての小さな宿屋。
小さいっていつても、他の家に比べたらだいぶ大きいけど。
その時、中から30代ぐらいの女の人が出てきた。

「あら、ランジ。お帰りなさい、遅かったじゃない」
「ただいま！お母さん」

女性に走り寄るランジ。
お母さん………ってことは。

「あら、その人達は？」
「森で会った旅人さん達だよ。
ウチに泊まるだろうから、つれて来たんだ！」

やっぱり、宿屋の子だったのか。

「そうなの、偉いわね」
「へへっ！」

女性にほめられて、得意げな笑顔を見せるランジ。

「こんにちは、今日一晩お世話になります」
「なりますっ！」

「はい、こんにちは。旅人様方、ようこそミカン村へ」
「ようこそ！」

宿屋の親子は、二人揃って、笑顔で俺達を迎えてくれた。
なんか、田舎ならではの暖かみのある村だな。

明日の朝出てくのは、少しもつたいない気もするけど……ま、しよ
うがないよな。

第30話 行雲流水（ことうんりゅうすい）（後書き）

サブタイトル解説

ことうんりゅうすい
行雲流水

空を行く雲と流れる水に例えて、

物事に執着せず、淡々として自然の成り行きに任せて行動すること。

冒険者、特に旅をしている人は、大体こんな生き方をします。

では次回予告です！

「グリーだよ。

ミカン村で一泊した僕達。

翌朝にはすぐに村を出て、タルト町へ出発！

……する、はずだったんだけどね。

次回、冒険者ライフ！第四章『3年前の物語』、

第31話『半年前の事件』。

魔物を人の敵だとするのなら、

人間は人の何になるんだらうね？」

というわけで！無事第三章が終了しましたが、

次週は幕間3を挟み、

その次の週から第四章を始めようと思います！

魔法変換（チェンジング）及び魔法強化（ブースター）について（前書き）

本編に出てきた、
チェンジング ブースター
魔法変換と魔法強化の解説です。

魔法変換（チェンジング）及び魔法強化（ブースター）について

魔法変換^{チェンジング}。

自分が前に使った魔法を再利用して別の魔法を発動させる魔法。使えるのは基本的に同じ属性の時だけだが、形が似ていれば違う属性でも使用可能。

（例、風魔法と熱風を起こす炎魔法、水魔法と氷魔法等）

利点

- ・『集中』を省略できる
 - ・魔力を大幅に節約できる
- ただし魔法変換自体も魔法なので、そこまでではない。^{チェンジング}

欠点

- ・『詠唱』が省略できない 短縮は可能
 - ・全体の威力は前に使った魔法以下になる
 - ・前の魔法が遠くにあると、使えない
- 距離の限界は術者次第

魔法強化^{ブースター}。

魔法変換^{チェンジング}とは違い、前の魔法にさらに魔力を加えることで、より強力な魔法を発動する魔法。^{チェンジング}

概要は魔法変換と同じだが、

『集中』が必要、魔力が大量に必要な等、異なる点も多い。魔法が強くなるため、

基礎魔法レベル1 レベル2、といった単純な強化も可能。

利点

- ・強力な魔法を比較的低リスクかつ高速で発動できる
- ・全体の威力が前に使った魔法以上になる

欠点

- ・『集中』、『詠唱』が省略できない 短縮は可能
 - ・大量の魔力が必要になる
 - ・といっても、普通に強力な魔法を使うよりは少ない
 - ・前の魔法が遠くにあると、使えない
- 距離の限界は術者次第

なおこの二つの魔法の効果は、

前の魔法を再利用する、までなので、

術者は実質三連続で魔法を使うことになる。

そのため、魔力を節約できる魔法変換チェンジングでも、

集中力の観点でいえば、術者に大きな負担がかかる。

サブキャラ設定3 (前書き)

設定なので、軽くネタバレを含みます。

サブキャラ設定3

コウル・フレディア

年齢：22歳 性別：男

身長：170cm 体重：52kg

髪：肩より少し長い金髪を束ねている

瞳：亜麻色（黄みを帯びた茶色）

港町ヨーグルトにある冒険者ギルドのEース冒険者。
級はCで、十分天才の部類である。

頭にバカがつくほど正直な上に普通にバカであり、
わざわざ人を怒らせるような言動を取ることが多い。（無自覚）

C級クラスであることから分かる通り、実力は高い。

いわゆる精霊使いで、精霊を召喚し自分の魔力を与えて戦わせる。
現在召喚できるのは、

火精サラマンダーのヒビ、氷精オンディーナのナナ、
風精シルフのフルの三匹。

ブラム・ブラックネス

年齢：24歳 性別：女

身長：169cm 体重：??kg（女なので）

髪：紫黒色（紫がかった黒）、背中より長いストレート

瞳：赤紫色

港町ヨーグルトにある冒険者ギルドのギルド長。

『ハイウェイザード大魔導師』であり、『紫黒の魔女』の異名で知られている。

またB級クラス冒険者でもあり、冒険者としても有名だった。

現在はギルド長に就任していることと、

研究（呪い関係）に忙しいため、冒険者は休業中。

性格は厳しく、あまりの厳しさに

前にギルドに入った新米冒険者が全員辞めてしまった程。

一応反省はしているらしい。

また若くしてギルド長という役職についているため
プレッシャーを感じていて、少し疑い深い所がある。

魔力は高いが、『ハイウェイザード大魔導師』ギリギリであり、

強大な魔法より素早く発動できる魔法を好む。

魔法使いだが身体能力も高く、

一流に近い剣術を操ることができる。

剣の流派は黒紫霧葬流、こくしむそう素早い剣閃を操る速度特化の剣術。

ギナト・プライア

年齢：20歳 性別：男

身長：174cm 体重：62kg

髪：短めの黒髪

瞳：黒

新しくギルドに所属することになったE級^{クラス}冒険者。

『紫黒の魔女』がいると聞いてギルド所属を決めたらしい。

性格はお調子者。

調子に乗って、よく適当なことを言う。

魔法使いで、

闇属性の基礎魔法レベル1を使える。

ファト・ラメリ

年齢：20歳 性別：女

身長：155cm 体重：???kg（女なので）

髪：肩まである黒髪

瞳：黒

新しくギルドに所属することになったE級^{クラス}冒険者。

ギナトとは幼馴染で、ずっとギナトについてきている。

おとなしく、少し消極的な性格で、

誰かの後ろについていることが多い。

棒術を使うが、

これは魔物でも命を奪うのに抵抗があるため。

ギナトに依存している自分を変えたいと思っていた。

アザ・シーラー

年齢：16歳 性別：男

身長：160cm 体重：50kg

髪：クリーム色（黄みを帯びた白）、肩より短いぐらい

瞳：黒

魔物狩り専門の冒険者。

A級並みの実力を持つが、

冒険者としての地位は望んでいないため、E級にとどまっている。

たまに武道大会などにも出場していて、

『氷海の王』という異名をつけられている。

性格は真面目、というか生真面目。

『家族』が住む家は少し遠い所にあり、

毎日数十？走ってきているらしい。

テレポルト空間転移などを使わないのは、節約と修業のため。

魔法使いで、プラムいわく『自分より魔力が高い』。

しかし、魔法使いとしての地位も望んでいないため、

『大魔導師』どころか『魔導師』の称号も持っていない。

なお髪が白っぽいのが、瞳が黒なので、アルビノではなく白変種。

この世界には、アルビノとか関係なく、地毛が白い人もいます。

ただし、レイラやプラムの瞳のように、かなり珍しいです。

番外編 ある館の日常風景（前書き）

本編で少し出てきた、アザの『家族』の話です。
本編とはほとんど関係ありません。

番外編 ある館の日常風景

（サイドアウト）

「ハア……ハア……」

ここは港町ヨーグルトから数十km離れた場所にある大きな森、名を『四季の森』といった。

その森の入口で、一人の少年が肩で息をしていた。

彼の名はアザ・シーラー、クリーム色の髪と、中性的な顔立ちが特徴の少年だ。

「ふう……やっぱりこの距離を走るのは疲れるなあ。

でもま、これも修業の一環だしね」

あとお金の節約にもなるし、と小さく笑う。

そう、この男、そのために数十km離れた仕事場まで、走って行っているのだ。

「少し遅くなっちゃった……。みんな心配してるかな」

ぼそつと呟き、森の中に入っていく。

そして、いつも通っている道を通り、20分程歩くと、大きな館が見えてきた。

それは、一瞬ここが森の中だということを忘れてしまう程の、大きく、立派な館。

入口の横にあるボタンを押してチャイムを鳴らすと、ほぼ同時に、ドタドタと走る音が聞こえてくる。

そして勢いよく扉が開き、10代半ばの茶髪の少女が出てきた。

「アザさん!! おかえりなさい!!」

「ただいま、キャティさん」

決まって一番に出迎えてくれる少女に微笑むと、少女も可愛らしい笑顔で返してくれる。

少女の名はキャティ・ブロンドアイズ、名前通り、薄い金色の瞳が特徴の可愛い女の子だ。

「あ、アザさんおかえりなさい! 遅かったね」

「ただいまピユくん。ちょっと今日はいろいろあってさ」

続いて、奥から金髪の少年が顔を見せた。

年は10代前半のこの少年の名は、ピユ・グローブといった。

「そういえば、今日は知り合いの護衛をするって言ってたっけ。それ関係?」

「んー、まあね」

「ア、アザさん! 大丈夫でした!? ケガとかしてませんか!？」

「大丈夫だよ、ありがとうキャティさん」

そう言ってアザが笑顔を向けると、キャティは顔を紅潮させ、アザから顔を背ける。

「キャティさん?」

「わあっ!!」

「大丈夫? なんだか顔が赤いけど……」

「だ、ただ大丈夫です!! 何でもありませんっ!!」

アザが顔を近づけると、キャティはさらに顔を赤くして、館の奥へと走って行ってしまった。

アザが首をかしげていると、奥から高い声が聞こえた。

「ダメだよアザくん、キャティさんをいじめちゃ！」

「そんなつもりはなかったんだけど……あ、ただいま、ひつじさん
「おかえり、アザくん」

ひつじと呼ばれた人物は、光を思わせる白髪を携え、アザにっこりと笑いかけた。

「キャティさんはアザさんが好きなんだから！いい加減返事してあげたら？」

「そんなこと言われても、キャティさんは妹みたいなものだし……」

「ピユくん、こういうのは当人同士の問題だから」

「それもそっか。あ、ひつじさん、僕夕食運んでおきますね！」

「うん、お願い」

ピユは夕食の準備のために奥へと下がり、その場にアザとひつじが残った。

「それで？今日は遅かったけど、どうしたの？」

「それが、海釣りツアーを定期的にやろうって話が出てさ、その護衛にまた協力してくれないかって言われちゃって、その打ち合わせとかで時間がかかったんだ」

「なるほどね……、まあ君なら大丈夫だろうけど、あんまり無理はしないようにね？」

ただでさえ、いつも2時間以上走って仕事に行ってるんだから」

「大丈夫だって、僕はひつじさんの一番弟子なんだから！」

「でも、最近は僕の修業受けてないよね？」

「うっ……ごめんなさい」

「まあ、仕事が忙しいのは分かっているけど、このままじゃ、そのうちピユクんに抜かれちゃうよ？」

あの子の魔力、もう魔導師級までいっているからね」
ウィザードクラス

「え、もうそこまで!？」

「うん、元々魔力は高かったけど、それ以上に成長速度が異常だよ。このままいくと、後1年もしたら、君とともに戦えるレベルになるんじゃないかな」

その言葉を聞き、アザは一抹の危機感を覚えた。

弟弟子に追いつかれるかもしれない、と。

「っていつても、今は君の方が断然上だから、そんなに焦る必要はないよ?」

「う……見透かされてた」

「分かるよ、それぐらい」

「『家族』だから?」

「これぐらいなら、『家族』じゃなくても分かるけどね」

言って、互いに笑い合う。

おふざけのように言っているが、当人達は、『家族』という言葉の本気で言っている。

例え、本来の意味とは、少し違っていたとしても……。

「さて、ちょうどこれから夕食なんだ。間に合って良かったよ」

「それじゃ、手洗いうがいをしてからすぐ行くね」

「うん、それじゃ後で」

ひつじと別れ、洗面所へ向かう途中、アザは今日のことを思い出していた。

一緒に仕事をした、2人のギルドの新人りと、3人の旅の冒険者。

「今日は、話の種には困らないかな」

アザは笑ってそう呟くと、『家族』が待つ夕食の席へと急ぐのだった。

第30・5話 ある英雄の追憶

（サイドアウト）

ここはスイーツ王国の首都ケーキからのびる1本の道。
その道の真ん中に、2人の人物が立っていた。

「……………ねえ」

「ん？」

2人の内の1人、光を思わせる純白の髪を持つ子供の声に、もう1人の、闇を思わせる不自然なほど黒い黒髪の少年が返す。

「止められ……………ないのかな」

「はあ？何言ってるんだ、今から俺達が止めるんだろ？」

「そうじゃなくて……………」

「戦わないで、か？」

傾く白髪の子供を見て、黒髪の少年はため息をつく。

「無理だろ、決定的な証拠でも上がらない限り、もうあいつらは止まらねえよ」

「じゃあ、黒幕を……………！」

「あいつら止めるのが先だ。じゃないと、黒幕つぶしに行ってる間にあいつらが首都を襲っちゃう」

「……………そう、だよな。」

……………うん、僕達が止めないと……………！」

黒髪の少年の言葉に、白髪の子供の迷いが消える。

「何人だっけ？」

「3万人。ちなみにボロ戦車が1000台、乗り込み型の中古魔導兵器が50台だ。後は全員馬に乗ってる」

黒髪の少年の言葉に、白髪の子供はまゆをひそめる。

「勝てる……かな」

「はあ？何言ってるんだお前？この程度楽勝だろうが」

「……え？」

「え？じゃねえよ、お前自分の力まだ分かってねえのな。お前はあの人の修業を半年も受けて、生き延びてるんだ。

ただでさえ化け物じみてたが、お前の実力はもう、『化け物』をも超えてる」

「そう……かなあ」

不思議そうな顔をする白髪の子供に、黒髪の少年はため息をつく。

「それより厄介なのは、相手が一般人だってことだな」

「え、何で？」

「決まってるんだろ、手加減がめんどくせえ」

「めんどくさいって……」

顔をしかめる黒髪の少年を見て、白髪の子供は苦笑いを浮かべる。と、その時、遠方からの音に2人は同時に気づいた。

「と、来たぞ」

「あ、うん」

特に慌てることもなく、遠方へ視線を向ける二人。

それから10分程して、ようやく先頭集団が見えてきた。

「んじゃ、俺左半分やるから、お前右頼むわ」

「うん」

そう言っただけ黒髪の少年は移動を始めるが、ふと立ち止まり、白髪の子供を振り返った。

「そっだ、念の為に一つ言っとくぞ」

白髪の子供が顔を向けると、黒髪の少年は、真剣な顔でこう言った。

「殺すなよ」

「分かってるよ」

返事を聞き、黒髪の少年は移動を再開した。

黒髪の少年が遠くまで行ったところで、白髪の子供は、小さく呟いた。

「……普通、そこは『死ぬなよ』じゃないかなあ」

自分の命なんて全く心配していないことに、喜ぶべきか呆れるべきか迷っていると、もうかなり近い位置に、先頭集団が来ていた。

「……まずは、相手を止めるんだよね」

自分の為すべきことを確認しつつ、相手を待つ。

……そして、

「っ！！！？ と、止まれ！！！」

男の声と共に、馬に乗った先行部隊が足を止める。

白髪の子供から見える限り、人数は100人程度だろうか。

「おい君！こんな所で何してるんだ！？危ないからどこか遠くに避難を……」

「……あの」

自分の心配をしてくれる男の声を聞いて、白髪の子供の決心が揺らぐ。

……本当に、戦わないといけないんだろうか？と……。

それと同時に、ひよっとしたら……と、白髪の子供の瞳に、わずかな希望が宿る。

「やめて、くれませんか……？」

「……何？」

「あなた達は誤解をしてるんです。今からでも、遅くありません。

ちゃんと、話を……！」

「……国王の回し者か、こんな子供を戦場に出すなんてな……！」

男は怒りをはらんだ言葉を吐き捨てる。

「君、今すぐここから立ち去りなさい！ここだと、巻き込まれる可能性がある！」

「ま、待って下さい！！話を……」

「話し合いなんて、もう無意味だ！！！」

男は白髪の子供の言葉を一蹴する。

その時、白髪の子供は気づいた。

男達の後ろから、地平線を覆い尽くす程の戦車、魔導兵器、そして、

怒れる人々が迫ってきていることに……。

「……分かり、ました」

白髪の子供は顔をうつむかせる。

さっき、黒髪の少年の言った通り、もうこの人達は止まらないのだと、白髪の子供は理解した。

「それじゃあ早く遠くに行ってくれ。

悪いけど俺達は急いで……」

男の言葉はそこで止まった。

「おい？どうし……」

訝しんだ隣の男が声をかけるが、その言葉も途中で止まる。そして、次の瞬間、

ドサツ、ドササツ……

「なっ……おい！……どうした!？」

さっきまで白髪の子供と話していた男を筆頭に、十数人が落馬し、動かなくなる。

それを皮切りに、男達は次々に馬から落ちていく。

「な、何だ！？何が起きてる!？」

「わ、分からな……」

返事の途中で、その男もまた同じ運命をたどった。

「ひっ！！」

理由も分からないまま仲間が倒れていくのを見て、顔が恐怖に染まる男。

その時、一瞬男の視界に、緑色の刀が写った。それを知覚した瞬間、その男も意識が飛び、落馬してしまふ。

……1分、1分だ。

ほんの1分後、その場に立っているのは、白髪の子供ただ1人になっていた。

「……………」

白髪の子供は、先程までとは違い、暗い光を帯びた瞳を遠方へと向ける。

そして、子供の体が、黄色い光に包まれる。

「轟け サンライガ」

次の瞬間、空を裂く轟音と共に、多数の巨大な雷が人々に襲いかかった。

「……………」 『悲しい物語』にも意味はある。

『辛い物語』から、学べることだってある。

…………… だけどね」

人に直撃しようものなら、即死しかねない程の威力の雷。だがそれらは人ではなく戦車や魔導兵器に向かい、その動きを止めていく。

そして、轟音によって人々が乗っていた馬は錯乱し、軍勢は大混乱に陥っていた。

「『誰も救われない物語』なんて、僕は認めない……！！」

静かな殺気をはらんだ少年は、一振りの刀を手に、軍勢へと歩き出す。

「僕は、君達を止める。」

「こんなことをしたって、君達は誰一人救われないから」

第31話 半年前の事件

ミカン村に到着した翌朝、予定ではもうミカン村を出てタルト町へ向かっているはずなのに、オレ達はまだミカン村にとどまっていた。
……なぜなら、

「……37度5分か」

「(うう)……」

俺が告げると、メリスはベッドに寝たまま、悔しそうにつめき声を出す。

……そう、メリスが風邪をひいた。

「バカは風邪なんてひかないはずなのに……！」

「ハデイひどい……」

いつもならもつと大声で反論してくるのに、今はそんな元気もないみたいだ。

「ま、そんなに熱があるわけでもないし、今日1日寝れば治るだろ」

「……昇格審査、間に合う？」

「心配すんな、明日出れば間に合うって」

元気づけるようにできるだけ明るく言うと、メリスは安心してくれたのか、また眠り始める。

とは言ったものの、どうするかな……。

タルト町のギルドが閉まるのは夜10時らしい。

ここからタルト町まで徒歩10時間だから、明日の11時に出れば

十分間に合うけど、明日までに治ったとしても、メリスは病み上がりだ。
10時間歩き続けるのは無理だろうから、途中で休憩をはさみながら行くことになる。

その場合どれぐらい時間がかかるか……。

……まあ、別に急いで資格取る必要もないし、諦めることも考えておくか。

「ただいま……あれハデイくん、メリスはまだ寝てるのかい？」

「あ、お、おう」

しまった、朝の修業に行ってたグリーンが帰ってきた。

どう説明するか……いや、変にごまかすより、ありのままに言った方がいいよな。

「グリーン、ちょっと」

「ん？なんだい？」

念のためにグリーンを部屋の外に連れ出してから、話をする。

「グリーン、落ち着いて聞いてくれ」

「どうかしたのかい？」

たぶん無駄だろうけど、前もって一言言っておく。

そして、

「メリスが風邪をひいた」

ありのままに現状を説明……あ、グリーンが石化した。

と、やはりうるさかったのか、2人の子供が俺達に話しかけてきた。1人は昨日俺達を村に案内してくれた少年ランジ・ビレン。もう1人はランジの姉のリン・ビレンだ。

年は12、3ぐらいで、ランジと同じ明るめの茶髪を二つ結びにしている。

将来は冒険者になりたいらしくて、昨日いろいろと話をして仲良くなっただ。

「あー悪い、実はメリスが風邪をひいたみたいで」

「だから僕が今から首都まで走って行って……」

「やめろつつつてんだろ！！お前が帰る頃にはもう風邪治ってるぞ！？」

グリーならたぶん不眠不休で走り続けるだろうけど、それでも往復5日以上はかかる距離だ。

「風邪？なら風邪薬があるから取ってくるよ。ひどいの？」

「いや、熱もそんなにないし、別に薬なしでも明日には……」

「遠慮しなくていいって、別にお金なんて取らないしさ。」

うちの薬はよく効くから、軽い風邪なら半日で治るよ！」

「そ、そうか？じゃあ頼むな」

「うん！」

ランジは笑顔でそういうと、小走りで薬を取りに行ってくれた。

「あらリン、何かあったの？」

「あ、お母さん」

ランジと入れ違いに奥から女将さんが出てきた。

手には小さなかごを持っていて、収穫したてらしきミカンが入って

いる。

「それが、メリスさんが風邪をひいちゃったみたいなの！」

「あらあら、それは大変！」

「今ランジが風邪薬を取りに行ってるよ」

「あらそう、あ、それじゃ旅人さんこれどうぞ」

女将さんは笑顔でミカンの入ったかごを差し出してくれた。

「え、でも……」

「遠慮なさないで、風邪にはビタミンCが良いんですよ」

「そ、それじゃありがとうございます」

お礼を言ってみかんを受け取る。

なんか悪いな、こんなに物をもらうなんて。

「ランさんこんにちはー！」

お、あんたら噂の冒険者さん達かい？今日の朝出発するって聞いたけど」

「冒険者！？え、本物！？」

宿屋に2人の親子らしき人達が入ってきた。

30代前半ぐらいの色黒の男と、ランジと同じ年ぐらいの逆立った黒茶色の髪が特徴の男の子だ。

……っていうか、俺達の噂もう広まってるんだな。

「あらあら、エレルさんにクイトくんこんにちは」

「こんにちはー」

「よっリン！遊びに来たぜ！」

クイト？なんか聞いたことあるような……、
あ、思い出した。

「君ひよつとして、兵士志望の子？」

「え！？なんで知って……あ、リンしゃべったな！」

「別にいいでしょ？」

そう、昨日リンに聞いた兵士を指してる男の子だ。

精鋭部隊『ソレイユ』は言うまでもないけど、それ以外でもスイー
ツ王国の兵士は1人1人が強いって有名で、冒険者と同じように、
憧れてる子供は多いらしい。

「冒険者もかつこいいけどな！やっぱ男なら兵士だろ！」

「そう？冒険者の方がロマンがあると思うけど」

「分かってないなリン！男は誰かを守ってナンボだろ？」

俺は『黄龍』エルド・ドラゴニスみたいになかつこいい男になるん
だ！！！」

「クイト、『黄龍』は女の人だよ」

ちょうど戻ってきたランジが鋭い指摘を入れる。

「それに、そういう理由で憧れるなら『星の賢者』の方じゃないの
？」

「い、いいだろ別に！俺は魔法より剣の方が好きなんだよ！

……ところで、何持ってるんだランジ？」

「風邪薬だよ、冒険者の1人が風邪をひいたんだって」

「ええ！？冒険者って風邪ひくのか！？」

「そりゃ、俺達だって人間だから……」

そりゃ冒険者の戦闘力は人を超えてるとかよく言われるけど。

……そういう意味なんだよな？
全員バカだと思われてるとかそういうのじゃないよな？

「なんだ風邪ひいちゃまったのか？そんなじゃランさん！これ使って栄養のあるメシ作ってやりなよ！ウチの野菜は世界一だからな！！」
「あらあら、ありがとうございます」

エレルさんが持っていた色とりどりの野菜を女将さんに渡す。

「はい、これ風邪薬だよ。食後30分以内に飲んでね」

「ありがとなランジ」

「あら、それならお昼に野菜粥を持っていきますね。」

「ちょうど野菜をもらいましたし」

「ありがとうございます。」

「……なんか悪いな、風邪ぐらいでこんなにしてもらって」

「ハッハッハ！気にすることねえって！困った時はお互い様だ！」

「そうですよ！それに……」

笑い声を上げるエレルさんに続いて、リンはこんなことを言った。

「『人を助けるのに理由なんていらぬ』って、あの人から教わりましたから、ね」

リンの言葉に他の人達も力強く傾く。

……あの人？

疑問を口に出そうとしたその時、またも宿屋の扉が開いた。

「こんにちは」

「あ、村長！」

「村長さん、こんにちは！」

入ってきた60代ぐらいの老人に、子供達はうれしそうに駆け寄って行く。

「こちらに冒険者の方が来ていると聞きましてな。

村の長としてあいさつに来ましたぞ」

「わざわざすみません。僕はグルード、こっちは仲間のハディです」

「もう1人いるんですが、今風邪で寝込んでます」

「そうですか。いやようこそ旅の方々、我が村はあなた達を歓迎しますぞ」

村長さんにはこやかにそう言ってくれる。

っていつても、昨日からもう十分歓迎してもらってるけど。

「……失礼ですが、少し意外ですね」

「グリー？」

グリーが急に神妙な顔になる。

意外って……？

「僕の聞いた所、ミカン村は魔物のいない森の中にあるがゆえに、盗賊の標的になりやすい。とのことでしたので、もう少し警戒されるかと思つてました」

「盗賊!？」

グリーの言葉を聞いて、驚くと同時に昨日のランジの言葉を思い出す。

『危険なのは、魔物だけじゃないってこと』

あれは、そういう意味だったのか……。

「まあ、僕達が冒険者だから大丈夫だろうと判断したんでしようが、それでも、村の外の者にはもつと疑心暗鬼になってると思ってます。

でも、実際には疑心暗鬼どころか……」

「ふむ……グールド殿の言うことももつともですな」

村長さんはグリーの言葉を聞き、それを肯定する。

「確かに、我が村の者は外の者……特に素姓の知れない者に対して少し警戒するくせがありました。

半年前までは」

「半年前？」

グリーが聞き返すと、村長さんは大きくうなづく。

「半年程前、我が村は盗賊団に占拠されたのです」

「なっ!？」

占拠って……この村が!？」

周りの人を見ると、その時のことを思い出したのか、子供達はもちろん、大人達も苦い顔をしていた。

「しかし、我が村の者は死者どころか、ケガ人すら出ませんでした」

「え?」

「たまたま村に泊まっていた旅の冒険者達が、己を犠牲に村の者達を逃がしてくれたのです」

「犠牲って……!」

「……命は助かりましたが、冒険者生命を左右される程の大ケガを負いました」

……なるほど、話が見えてきたな。

「それで、同じ冒険者である僕達は警戒しなかった、と」

「そういうことですか」

「それにそもそも、冒険者さん達俺に何もしなかったでしょ？」

その時点で警戒する必要なんてないって分かってたよ」

ランジが得意げな笑顔で言う。

「ってことは、風邪をひいたメリスに良くしてくれるのも？」

「それはもう1人の影響ですか」

半年前我が村を救ってくれたのは、旅の冒険者の他にもう1人いたのです」

「それは？」

グリーが村長さんに尋ねるが、その顔にはもう予想はついてる、と書いてあった。

「私達は逃げる前に、我が村が盗賊団に襲われていると、国へ救助願を出したのです。」

それを受けた国は、軍から1人の兵士を寄こしてくれました」

「1人……？盗賊団相手にですか？」

盗賊団の規模は分からないけど、少なくとも村を占拠するぐらいの人数はいたはずだ。

なのに1人って……。

「1人で十分だったんですね？」

「ええ、その時我が村に来て下さったのは、かの『八つの魔塔』が一角、『星の賢者』イア・ランディア殿でしたからな」

「えっ!？」

ラ、ランディアさんが!？」

「なるほど、『星の賢者』なら盗賊団ぐらい、1人で片づけられま
すね」

「ええ、グールド殿の言う通り、ランディア殿はたった1人で盗賊
団を壊滅させ、殺されかけていた冒険者達を救い出し、森の奥へ避
難していた私達に、そのことを伝えに来てくれました」

流石ランディアさん……。

「その時に、確か言ったのはリンだったな？」

「……うん」

リンが少しこわばった顔で傾く。

「私……この村に少しコンプレックスがあっただんです」

「コンプレックス？」

「うん、こんな小さな村、国全体から見たら、あってもなくても一
緒なんじゃないかって」

リンは少しうつむいて、小さな声で話す。

……正直、リンの気持ちは少し分かる。

俺も、メリスも、グリーも、この村と同じぐらい小さな村の出身だ。
グリーはともかく俺とメリスは、こんな小さな村で終わりたくない
と思って村を出たんだ。

リンの考えは、辺境の村に住む子供が、一度は抱くものだと思う。

「それで私、イアさんにこう聞いたんです。

『なんであなたみたいなすごい人が、こんな小さな村に来てくれたの？』って。

そしたら、イアさんは私に周りを見るように言っ、それからこう言ったんです。

『人を助けるのに理由なんていりません。なぜなら、人を助けるということとは、それ自体が誇るべき、尊いことだからです。今日あなた達を助けることができたこと、私はそれを、誇りに思います』
って……」

そう話すリンは、とてもうれしそうな顔をしていた。
それを聞く周りの人達も同様に。

「その言葉を聞いてからというもの、俺達は困ってる奴をほっとけなくなっちまったのさ」

エレルさんが笑顔で言う。

きつとこの人達にとって、イアさんの言葉はとても胸に響くものだったんだろう。

今俺達が助けられてるのがその証拠だ。

「そうそう！あの人は俺達の恩人なんだ！

『反逆者』だろうがなんだろうか知ったこっちゃ……」

「クイト！！！」

突然、エレルさんがクイトを怒鳴りつけた。

「その言葉は、絶対に使うなと言っただろう！！！」

「え、あ……」「ごめん、親父……」

泣きそうな顔でエレルさんに謝るクイト。

ど、どうしたんだ、急に……。

「……落ち着きなさいエレルくん。」

クイトも他意があったわけではない」

「……そう、だな。悪いなクイト、いきなり怒鳴っちまって」

「う、うん……」

村長さんがエレルさんをなだめると、エレルさんも落ち着いたように、クイトに謝った。

でも、『反逆者』って、一体……？

聞こうにも、口に出せるような雰囲気じゃないし……。

「見苦しい所をお見せしてしまいましたな。」

「……さて、そろそろお昼時、お暇しますかな」

「あらあら大変、お昼の支度しなくちゃ！2人とも手伝ってくれら？」

「うん！」

「はい！」

「クイト、俺達も行くぞ。詫びにアイスクリームを買ってやる！」

「2本？」

「1本だ！よくばるな！！」

すぐに元の雰囲気に戻り、その場は解散となった。

ただ、俺の感じた疑問は残ったままだけど……。

第31話 半年前の事件（後書き）

次回予告です！

今回から対話形式でやってみます！

「ハデイだ」

「メリスだよ！

……ハデイ！今回私出番少くない！？」

「風邪で寝込んでるんだからしょうがないだろ。」

「それより次回予告だ！」

「あ、うん！」

風邪で寝込む私を2人が看病してくれるんだけど、

2人の子供がハデイを呼びに来るんだよね。

次回、冒険者ライフ！第31話『辺境の村』！

って待って！これ次回も私出番が少な……」

「絶対見てくれよな！」

「無視しないで……！」

第32話 辺境の村

「ほらメリス、女将さんが野菜粥作ってくれたぞ」

「……うん」

声をかけると、メリスは目を覚ましてゆっくりと体を起こした。朝よりは顔色良くなってるけど、やっぱりまだ調子悪そうだな。とりあえず野菜粥を手の届く位置に置き、俺とグリーは自分達の食事始めることにする。

「あれ、2人もここで食べるの……?」

「おう、邪魔なら下の食堂行くけど」

「そうじゃないけど……風邪うつつたりしたら」

「大丈夫だよメリス!!むしろ僕にうつして治してくれ!!」

「グリーちよつと黙れ。メリス、俺達より自分のこと考えろって」

「……うん、ありがとう」

力なく笑ってメリスは粥を食べ始める。

うんうん、まああんまり食欲ないだろうけど、食べておかないと体がもたないもんな。

「ごちそう様ー」

「待てコラア!!!」

「……どうしたの?」

十数秒で野菜粥をたいらげたメリスが首を傾げている。

……あれ?こいつ病人じゃなかったっけ?

「ハデイくん静かにしなよ!メリスは病気なんだよ!?!」

「てめえが言うな!!」

ついさつき、部屋の前で騒いでた奴に注意されるなんて思わなかったぞ!!

「メリスもう食べたのかい？」

「うん!おいしかったー」

「うんうん、これならすぐに治りそうだね」

「本当?やったー!」

……むしろもう治ってるんじゃないか、と思う俺は間違ってるんだろうか。

いや、もういいや。メリスだもんな。

「……なんだか今、ハデイに呆れられた気がする」

「気のせいだろ」

メリスがジト目で軽くにらんできた。

危ない危ない、風邪でも勘の良さは変わってないか。

……流石に心は読まれなかったみたいだけど。

「と、忘れてた、メリスこれ飲め」

「……何それ？」

「風邪薬。ランジがくれたんだ。これ飲めば軽い風邪ぐらい半日で治るってよ」

「……そっか、苦いの苦手だけだなー……」

そう言いつつも薬を受け取るメリス。

せっかくくれたんだし、人の好意を無下になんてできないよな。

「それと女将さんがミカンくれたぞ」

「わーい！」

「……食べるなら薬飲んでからな？」

かごを見せると同時に飛んできたメリスの手をかわしながら言う。
こいつ食い物のことになると本当早いな……。

「それと食べたらちゃんと言えよ？睡眠が一番の薬なんだからな」

「はい……なんだかハデイお母さんみたい」

「……俺は男だ」

百歩譲って保護者みたいなのは認めるとしても、お母さんはないだ
ろお母さんは。

若干傷ついていると、扉が開く音がした。

「こんにちはー」

「おっす！」

「リンにクイト、どうしたんだ？」

部屋に入ってきたのは、冒険者志望の少女リンと、兵士志望の少年
クイトだった。

「ハデイさんだっけ？あんたにちよつと頼みがあるんだ！」

「それと、メリスさんのお見舞いです」

「ありがとー、大丈夫だよ」

メリスはミカンを食べる手を一旦止め、2人に微笑む。

「良かったです、何かあったら言って下さいね」

「うん！」

「んで、俺に頼みって?」

「そうそう! ハデイさんあんた剣士なんだろ? 俺達に稽古つけてくれよ!」

「稽古?」

「はい! 昨日は断られましたけど、もう一度お願いに来ました!」

そう、実は昨日もリンに頼まれたんだよな。

昨日は明日には出発する予定だったのと、その時はもう夜だったから断ったんだけど……。

「ハデイ、行ってきたら?」

「そうだよハデイくん。メリスは僕が見てるからさ」

「……そうだな、2回も断るのも悪いし」

2人に促され、俺は稽古をつけることにする。
さて、それじゃあこれを言っておかないとな。

「メリス、グリーに何かされそうになったら大声を上げるんだぞ?」

「待ってくれハデイくん、それは僕を侮辱してないかい?」

「うん、分かった」

「メリス!? 僕は変なことなんてしないよ!? ただメリスの可愛い寝顔をじっくり見るだけだ!」

……どうしよう、グリーを見張っておいた方がいい気がしてきた。

「ほらハデイ、2人とも待ってるよ?」

「と、そうだな。それじゃメリス、いざとなったらこのナイフを使えよ?」

「ちよっと待ってくれ! 僕はそんなに信用がないのかい!」

グリーが何か騒いでるけどこの際無視だ。

「それじゃ行くか！」

「はい、お願いします！」

「この宿屋の裏に広い空き地があるからさ、そこで頼むぜ！」

というわけで2人と一緒に空き地に行くと、訓練用の木刀が3本置いてあった。
準備いいな。

「さてと、稽古って言ってもどうするかな……」

「あの、ハディさんの使う剣術って、どういうものなんですか？」

「我流」

「我流!？」

俺の答えにリンは驚く。

いや、今の言い方だと少し誤解されそうだな。

「我流っていうか、型とかあんまり知らないんだ。

昔から親父に教え込まれた剣術と、冒険者学校で習った剣術を適当に使ってる感じだ」

俺が知ってるのは剣の扱い方だけ、後は敵をしっかりと見て斬るだけ
って感じだからな。

技とかも知らないし。

「そういうわけだから、基本とか技とかは教えられないんだ。でき
るとしたら実戦稽古ぐらいかな」

「じゃあそれをお願いします！」

「実戦稽古か、腕が鳴るぜ！」

2人とも予想外に食いついてきたな。
普通大人と実戦稽古なんて怖いと思うんだけど。

「分かった、2人の実力も見たいしな。」

……子供だし、2対1でいいか」

俺がそう呟くと、2人は顔をしかめた。

「おいおい、子供だからってなめるなよ！」

「つと！」

言うや否や、クイトは木刀を振りかぶって突進してきた。

「参ります！」

それをかわすと、続けざまにリンが木刀を振りかざしてきたので、
自分の木刀で受け止める。

子供にしては結構重い一撃だ。

「まだまだあつ!!！」

後ろからクイトが襲いかかってきたので、リンを振り払って、クイトの木刀をかわす。

「隙だらけだぞ！」

「なんのっ!!！」

「っ!?!？」

攻撃をかわされ、体勢を崩したクイトに斬りかかると、クイトはそ

の場で1回転し、その勢いで木刀をぶつけてきた。遠心力もあるんだらうけど、この攻撃も重い。

……この2人、下手な不良なんかより強くないか？

「やあああっ！！」

それに驚いていると、いつの間にか後ろに回っていたリンが斬りかかってくる。

それを横跳びでかわして一旦引くと、2人は体勢を整え、木刀をまっすぐ構えてきた。

「軽くないなすつもりだったんだけど、ちゃんと本気でやった方が良さそうだな……」

「へへっ！俺達を甘く見るなよ！！」

クイトは満足げな笑いを浮かべた後、先程のように突進してきた。

「……悪いけど」

クイトが木刀を振り下ろすのに合わせて、下げておいた自分の木刀を振り上げる。

「それはもう慣れた！」

「うわっ！？」

当然力はこっちの方が上だ。

衝撃にクイトは耐え切れず、クイトの持っていた木刀は上空へと弾き飛ばされる。

「そっちなもな」

「えっ!?!」

振り返ると、ちょうどリンが木刀を振り上げて迫ってきているところだった。

腕の長さの分リーチはこっちの方が上なので、リンの頭に木刀を突き付けて動きを止める。

「う……」

リンは悔しそうな顔をした後、木刀を捨てて両手を上げた。

「くっそ! やっぱ本職には敵わないか……」

「流石です……」

「いや、2人も強かったぞ。正直驚いた」

流石に冒険者にはまだ届かないけど、この年でこの実力なら、十分見込みがある。

「それじゃ、稽古を続けるか。次は1人ずつな」

「はい!」

「おう!」

そんな調子で稽古を1時間ほど続けた後、一旦休憩をとることにした。

「あー疲れた!」

「2人ともお疲れさん」

「ハデイさんもお疲れ様です」

「あんたすげえな……一本も取れない」

「ま、一応冒険者だしな。2人も十分見込みあるぞ。

冒険者学校の試験ぐらい余裕で通過できるって」

「俺は兵士学校だけだ。」

でも、この国の兵士学校のレベル、冒険者学校と同じぐらいなんだってさ」

「スイーツ王国は兵士のレベルが高いからな」

と、学校について少し説明しておこう。

このスイーツ王国は世界でも珍しい『義務教育』があつて、小学校までは義務教育で絶対通わないといけないんだ。

それを卒業した後は冒険者を目指すなら冒険者学校、兵士を目指すなら兵士学校、みたいに専門学校に入ることが多い。

この専門学校は試験とか年齢制限があることがあつて、冒険者学校と兵士学校は共に、入学試験と15歳以上という年齢制限がある。

……ちなみに、学校に行かなくても実力さえあれば、冒険者の資格を得ることや軍に入るとは可能だ。

メリスは冒険者学校行ってないしな。

「っていつても、冒険者学校の生徒って半分ぐらいは素人だぞ」

「え、マジで？」

「おう、冒険者に憧れてるって子供は多いけど、実際本当に剣術とか習ってる子供は少ないからな。」

冒険者学校で初めて剣を持つって奴が大半だ」

「俺達も真剣は持ったことないけど……」

「じゃ、持ってみるか？」

腰に差している剣を引き抜くと、2人は声を上げる。

「い、いいんですか!？」

「すげえ!!!俺真剣持つの初めてだ!!!」

「ま、普通のロングソードだけだな。

……振り回したりするなよ？」

「わ、分かってるって……！」

剣の柄をそつと握ると、クイトはまたも歡喜の声を上げる。

「わ、お、重い！すげえ！！これが本物の剣か……！」

「ク、クイト！私も私も……！」

リンも剣を持つと、クイトと同じような反応をする。

「まあ興奮するのも分かるけど、興奮しすぎないようにな？」

冒険者学校で調子に乗って剣振り回して、先生に拳骨くらって1時間説教された上に1週間外出禁止になった奴いたから」

「し、しねえよそんなこと……！」

焦ってる所見ると少し怪しいんだけど……。

まあ、本当にやったりはしないだろ。

「あの、ありがとうございます……！」

「ん、おう。どうだった？」

「なんか、感激はもちろんなんですけど、本当に重いんですね。

冒険者はこんなのを軽々振り回してるんですね」

「兵士もな」

「使ってりゃ慣れるって。

まあ、子供の内は木刀とかの方がいいだろうけど。

危ないのはもちろん、重くてまともに使えないだろうからな」

危ないっていったら木刀も十分危ないけどな、この子達はそんなへマしないだろうし。

「そういうハディさんは、真剣いつから使ってたんだ？」

「俺は2人ぐらいの年から持ってた……ていうか親父に持たされた。た。」

素振りぐらいならまだしも、稽古で使うのは本当に危ないんだけどな……。

今思うとかなり無茶してた気がする」

「えーいいなー！」

俺親父に頼んでるんだけどさ、ガキには10年早いつて買ってくれないんだよ」

「いや、そっちが正論だろ。」

俺の親父がおかしいんだって……」

武器への憧れつてのもあるんだろうけど、扱い間違えるとケガじゃ済まないからな。

「さっきも怒られたし、やっぱり当分は無理かな……」

「あれはクイトが悪いんでしょ？」

「そうだけどさ」

ふくれっ面になるクイト。そういえばさっき怒られてたよな。

確か……、

「なあ、『反逆者』って何なんだ？」

俺がその言葉を口にするのと、2人はビクツと肩を震わせ、押し黙ってしまった。

そう、さっきクイトはこの言葉を言ってエレルさんに怒られてたんだ。

「……ごめんなさいハディさん。」

その言葉、この村ではタブーになってるんです」

「ああ、半年前からな」

「半年前って……盗賊に襲われた事件があつた頃だよな？」

何か関係あるのか？」

「ごめん、あんまりその話したくないんだ。」

それに、俺達も詳しいことは知らないし」

「あ……悪い」

無理に聞くのはよくないよな。

……帰ってからグリーに聞いてみるか、あいつなら知ってそうだし。

「そういえば2人とも、さっき村長さんと仲良さそうだったけど」

なんだか空気を悪くしてしまったので、とりあえず話題を変えることにする。

「うん！俺村長好きだぜ！！」

「私も！優しいし物知りだし、村のことを一番に考えてくれてるんです！」

2人は途端に笑顔になり、村長さんのことを話し始める。

「それにな！フッフッフ……」

「な、なんだ？」

含みのある笑いを上げ、少し間をおいてからクイトはこう言った。

「聞いて驚け！うちの村長はな、『ウイザード魔導師』なんだぜ！！」

「な、なんだってー！？」

『魔導師』!? 一般人が!?

「へへっ! すっげーだろ!?!」

「お、おう、驚いたぞ。メリスみたいに本職ならともかく、一般人が『魔導師』なんて……」

「あははハデイさん、その言い方だとまるで、メリスさんも『魔導師』みたいですよ?」

「いや、そうだぞ?」

『……え?』

2人の笑顔が固まる。

「だから、メリスは『魔導師』なんだって」

『……ええええええええええええ!?!』

大声を上げて仰天する2人。

……そういえば『魔導師』って結構すごいんだっけ?

メリスを見てるとあんまりそう思えないんだけど。

「だ、だって! 『魔導師』なんて、冒険者で言えばD級とかC級並だろ!?!」

「まあ、魔力だけならな。それと俺とグリーはD級だぞ。」

つまり俺達3人は大体同格……」

『D級!?!?!?!』

俺の言葉をさえぎって仰天の声を上げる2人。

……なんかこれで驚かれるの久しぶりだな。

「ハ、ハデイさんっておいくつですか?」

「俺？今年で21歳だけど」

「21!？」

「な、なあリン、それってすごいん……だよな？」

「あ、当たり前でしょ!!」

普通20歳でE、30歳でD、40歳でC、

凡人はそこまでで終わりだって言われてるんだから!!」

……そういやそんな通説あったっけ。

そう考えると13歳でCとか、レイラは本当すげえな。

コウルさんも見た目20歳前半ぐらいだったし、あの人もかなりすごいんだよな……。

「で、でも！昨日ランジがハデイさん達は昇格審査を受けに行くところだって……」

「おう、タルト町にな。間に合うかちょっと微妙だけど……」

「……あの、それって……」

「……C級の審査だ」

なんか自慢してるみたいで嫌だけど、本当のことだから正直に言うておく。

……と、また2人が固まった。

「C!？マジで!？無理だろ!？」

「失礼だなオイ」

いくら正論だからって、本人の前で言うなよ……。

「でも、もし受かったらすっごいですよ!？」

……あれ、あの、メリスさんも受けるんですか？」

「ん？ああ、あいつはE級クラスだけだな」

「メリスさん、風邪なのに大丈夫なんですか？」
「ん……まあ軽い風邪だから大丈夫だろ。」
審査そのものは4日後だしな」

流石にその頃にはメリスの体調も戻るだろう。

……問題は、明日の申請に間に合うかなんだけど。

「もしも受かったら、あんたそのうちA級クラスになるんじゃないか！
」？

「話が飛びすぎだ！ A級クラスなんて世界に150人ぐらいしかいないって言われてんだぞ！？」

ちなみにその下のB級クラスは世界に5万人前後って言われてる。

いきなり飛びすぎだよな……。

そのせいでBはピンキリがかなり大きいらしい。

まあ、どっちにしろすごいことには変わらないけど。

「でもさ、10代の若さでA級クラスになった人とかいるんだろ？ 『絶望』
とか『神童』とか」
「2人とも伝説の冒険者だろ……」

そんな『化け物』と比べられても正直困る。

「と、もうそろそろ休憩は終りでいいか。もう十分休めただろ？」
「おう！ よーし！ D級クラス冒険者から一本取ってやる！！」
「私もがんばります！！」

そう言って木刀を構える2人。

………そういえば、

「なあ、2人つてどっちの方が強いんだ？」

ふと思い立ったことを聞いてみる。
すると、

「俺」

「私です」

2人がほぼ同時に返事をした。

……ただし、内容は真逆だったが。

「何言つてんだリン！！俺の方が上だろ！！」

「クイトこそ！私の方が年上でしょ！！」

「年は関係ないだろ！！何なら証拠を見せてやるぜ！！」

「望む所よ！！」

バチバチと火花を散らして木刀を互いに向ける2人。

……どうしよう、これ止めた方がいいよな……？

俺が悩んでいると、2人に近づく人影が……。

ドゴツ！！

『つつつ！！？』

「2人ともやめなよ。ハデイさんが困ってるよ」

涙目で頭にできたたんこぶを押さえる2人に、呆れたような顔を向けるのは、今しがたここに来たランジだ。

……ちなみに2人にたんこぶを作ったのは、他でもないランジのげんこつだったりする。

「お、おうランジ、どうしたんだ？」

「姉貴とクイトが稽古つけてもらってるって聞いてさ。差し入れ持って来たんだよ」

ランジが持つてるのはいわゆるスポーツドリンクだ。

なるほど、秋に近いとはいえまだ夏だ。

熱中症とか気をつけないといけないもんな。

「ラ、ランジ、あんたね……！」

「不意打ちとは卑怯だぞ……！」

「何か言った2人とも？」

『いえ、何でもありません！！』

すげえ！！にらみだけで2人を黙らせた！！

そっぴや昨日、姉貴は自分より弱いって言ってたっけ……。とりあえずこの3人の中では、ランジが一番強いみたいだな。

「そんじゃ、稽古を再開するか」

「はい！お願いします！」

「よっしゃ！先手必勝！！」

「……さっき不意打ちは卑怯って言ってなかったっけ？」

始まるや否や突進するクイトを見て呆れ顔になるランジ。

「……何の考えもなしに飛びこむのはやめた方がいいぞ」

「わっ！！」

さっきと同じようにタイミング良く木刀を当てて弾き飛ばす。

純粋な腕力で負けてる相手に、正面から飛びこむのって自殺行為だろ。

「後、毎回後ろに回り込むのもあんまり良くないぞ。ワンパターンだと簡単に読まれるって」

「う……」

こっちもさつきと同じように、頭に木刀を突きつけて動きを止める。これじゃさつきと全く同じ……、

「隙あり!!」

「いてっ!?!」

突然背後から頭に衝撃が来る。

そう、クイトが後ろから殴りかかってきたのだ。

「やった! D級冒険者クラスに一発入れた!!」

「おい待て! 剣術の稽古だろ!?!」

いや、油断してた俺も悪いけどさ!!

「ほらクイト、ちゃんと木刀使いなよ」

「お、サンキューランジ! よっしゃ! 次は木刀で一発入れてやる!」

「いや、木刀で頭殴られたらシャレにならないだろ……」

木刀を拾ってきてくれたランジにお礼を言い、はりきるクイトに思わずそう言う。

一般人だったら最悪死ぬぞ。

「私もがんばります!!」

「いや、うん……まあいいや」

そんな調子で俺は夕方まで2人に稽古をつけているのだった。
ちなみにそれ以降は一発もくらわなかったぞ。

「ただいま」

「あ、おかえりー！！」

部屋に帰った俺を迎えたのは、昨日までと変わらないぐらい元気な
メリスの声だった。

「お、メリス。もう風邪は大丈夫か？」

「うん！全快だよ！！」

うん、顔色も良いし体調も良さそうだ。

メリスの身体能力は一般人と変わらないけど、旅をしてるおかげで
体力はあるからな。

それにランジのくれた風邪薬も効いたんだろう。

これなら明日の朝出発しても大丈夫そうだ。

「熱も下がってたしね。でもまだ病み上がりだから、油断は禁物だ
よ」

「兄さん、明日間に合う?」
「もちろん。でも無理はしないようにね?」
「うん!」
「と、そうだグリー。ちょっといいか?」
「ん、なんだい?」
「『反逆者』って知ってるか?」
「……………」

グリーはそれを聞くと、小さく嘆息してこう言った。

「ハデイくん、まさか知らないのかい?」
「え?」

「兄さん、何それ?」

「……………メリスも知らないのかい。」

「この国にいれば普通知ってるはずんだけどね……………」

なんか呆れられてる……………。

あれ、そんな常識的な言葉なのか?

「流石に、3年前に起きた『反乱』は知ってるよね?」

「あ、なんか聞いたことある」

「私も」

「……………分かった、その程度の認識なんだね2人とも」

グリーは今度は大きく嘆息する。

「『反乱』のことから話さないとダメかな。」

「……………少し長いけど、夕食までには間に合うと思うよ」

グリーはゆっくりと目を閉じ、語りかけるように話し始めた。

「それじゃ、話そうかな。」

3年前に起きた『反乱』……いや、『侵略』について、ね……」

グリーの真剣な雰囲気、俺とメリスは思わず唾を飲み込む。

そして、グリーはゆっくりと口を開き、話し始めた……。

「っていうか2人とも、何度も言うけど、普通は知ってるからね？」

グリーに呆れ顔を向けられ、俺とメリスは苦笑いでごまかすのだった。

第32話 辺境の村（後書き）

では次回予告です！

「ハデイだ」

「グリーだよ。」

「……全く、君の世間知らずには呆れてものも言えないね」
「そこまで言うか!？」

「『星の賢者』のことも忘れてたじゃないか。」

「……世間知らずっていうより、
物忘れが多いんじゃないかい？」

「俺はまだ21歳だつての！」

「あーもう、次回予告行くぞ！」

「まあ、今回の話から予想はつくだろうけど、
3年前に起きた『反乱』について、

僕が詳しく話をするんだよ。」

『反乱』というより、『侵略』と言った方が正しいんだけどね。」

「……それも、頭に卑劣な、とつくものだよ。」

次回冒険者ライフ！第33話『反乱という名の侵略』。

卑怯な手も、戦いにおいては評価せざるを得ないよ。」

結果が全ての戦争においては特に、ね」

「でも、やっぱそういうのは嫌いだな」

「同感だね。そもそも僕は戦争自体嫌いだよ」

「同感だな」

第33話 反乱という名の侵略

「ま、僕も全てを事細かに知ってるわけじゃない。

そもそも情報源が風の噂と本ぐらいしかなかったからね。

僕が話せるのは、あくまでも一般に広まっている概要だけだよ。」

「情報源は風の噂と本だけか。

なるほど、それなら俺とメリスが知らなくてもおかしく。」

「いや、少なくとも風の噂はみんな知ってるから。」

いくら君達が辺境の村にいても、ちゃんとあそこまで届いてたからね?。」

…… やっぱ知ってないと変なのか。

『反乱があつた』 ってのはなんとなく聞いた覚えがあるんだけど。

「と、とにかく教えてくれよ。」

『反逆者』 って何なんだ? ランディアさんと関係あるのか?。」

「え? イアさん?。」

メリスがランディアさんの名前を聞いて目を丸くする。

そっか、こいつ寝てたから聞いてなかったもんな。

「その前に『反乱』の方だよ。これを知らないとか全く分からないだ

ろうからね。」

「『反乱』って、この国で、だよな?。」

「そうだよ。今から……3年と1か月前、かな。」

少し間をおいて、グリーは話し始めた。

たぶん、思い出すのと話を整理するのに、少し時間がかかったんだろつ。

「まずは反乱が起きた原因から始めよう。」

3年と4カ月前、スイーツ王国の首都ケーキヤ、その近くの大きな町の周辺で、過去に例を見ないほど魔物の動きが活発になってたんだ」

「それが何か関係あるのか？」

魔物が活発になってたら治安維持が大変だろうけど、それで反乱が起きるなんて思えない。

そもそも反乱つて、国への不満が爆発して起きるものだろ。

……そう考えると、この国で反乱が起きたなんて信じられないんだけどな。

現国王カプチノ・ブラウ・スイーツは国民思いの優しい王様で、民からの信頼も厚いって聞く。

実際この前のチョコレート町防衛で、『ソレイユ』から11人も出撃許可出してたしな。

「これは反乱とは直接は関係ないよ。」

「だけど、これが原因で、反乱の原因を排除することができなかったんだ」

「……どういうことだ？」

「ハデイくん、単純に考えて、首都近くの魔物の動きが活発になった場合、国王はどうすると思う？」

「そりゃ、防衛とかを強化するだろ。」

「首都に魔物が入り込んだりしたら一大事だし」

「そう、つまり、首都やその周辺の町へ兵の人数を割くってことだよ」

「……つまり、それ以外の、辺境の町や村を見る余裕がなくなる……」

「そういうこと。それと、事件はもう一つ起きていたんだ。」

それが反乱が起きた原因……不作と干ばつだ」

「不作と干ばつ……？」

「そう、僕達の村は大丈夫だったけど、首都から離れた一部の町や村。」

特に農業を主な産業としている場所が、大きな不作と干ばつに見舞われたんだ。

……具体的には、全ての作物が枯れ果て、雨が月に1度も降らなくなつたそうだよ」

「はあっ！？何だそれ！？」

「今から4カ月前、季節は春だ。」

稲は出芽した直後、小麦は収穫まで後数カ月のものがすべて台無しになつたらしい」

驚く俺をよそに、グリーは続ける。

小麦も米も全部台無しって……！

そんなことありえんのか！？

「蓄えがあるそこそこ大きな町なら、まだ何とかなるだろうけどね、小さな村は……それこそ存亡の危機だ。」

ハデイくん、君が村長ならこういつ時どうする？」

「どうするって……」

「また植えれば！」

「小麦は時期が違い過ぎて無理だろ！あ、でも稲ならまだ……」

「実際、稲はすぐに植え替えたらしいよ。」

「……それもすぐに枯れたらしいけどね」

時期的に無理があつたのか……？

つてか、雨が月に1回しか降らなかつたらどの道無理か。

田舎の村の水って、雨に頼ってるもんな。

月に1回しか降らなかつたら、それこそ飲み水も危ないんじゃない……。

……あれ、つてか普通この国の夏つて、週に1回は雨が降るはずだよな？

「となると、国に援助を申し出るとか？」

なんとなく違和感を覚えつつも、俺は自分の意見を言ってみる。さっき言った通り、国王は民に優しいって有名だもんな。きつと快く援助を……、

「魔物の活発化」

グリーの言葉に俺はハツとなる。

そうだ、さっき言ってたよな。

この国の首都や首都周辺で、魔物達が活発化してるって……。

「……なあ、グリー。」

おかしくないか？流石に……」

今の話をまとめると……過去に例を見ないほど魔物が活発化して、国が辺境を見る余裕がなくなってるときに、その辺境の、特に農業を重視してる町や村で不作、干ばつ。

「そもそも、それ自体が不自然だろ。」

何で急に全ての作物が枯れたんだ？

何で雨が月に1度も降らなくなったんだ？

俺達の村ではそんなこと全然なかったろ！」

3年前……俺達3人が旅に出る1年前だ。

その頃俺も、メリスも、グリーも、普通に村で暮らしてた。

もちろん作物は順調に育ってたし、雨も週に1回は降ってた。

なのに……、

「そつだ、1つ言い忘れてたよ。」

その町や村はね、全て、冒険者学校がある所だったんだ」

「……………え？」

それが一体……………？

「話を続けよう。」

ハデイくんが言った通り、その町や村の長達は国に援助を申し出たんだ。

そして国王も、兵達からなんとか部隊を組んで、援助を出したんだよ」

「ん？空間転移テレポートとか使わなかったのか？」

「……………あのねハデイくん。」

何百kmテレポートもの空間転移にはとてつもない魔力が必要になるんだよ」

「でも確か、チョコレート町でランディアさんが軽々と……………」

「あれは『星の賢者』だからできた芸当だよ。」

この時はまだランディアさんは軍に入っていないからね。

まあ軍の魔法部隊全員が協力すればできたかもしれないけど、そんな余裕はなかっただろうしね」

なるほど、となると援助を出すにも持つていく兵士が必要だもんな。防衛に人数を割いてるから厳しかったんだだろうけど、それでもちゃんと援助を出す辺りが流石だ。

「つてグリー、それなら解決したんじゃない……………」

「……………そう、国王も、国の重臣達も、全員そう思っていたんだろっね。」

それからは元通り首都や付近の町の防衛に徹して、2カ月ぐらい

経って、ようやく魔物の動きも収まったらしい」

「援助も出せて、魔物も抑えられて。」

「全部解決したってことじゃないのか？」

「……ところがそうはいかなかったんだよ」

グリーが深刻な面持ちで呟く。

「解決しなかったのか？ 一体何が……。」

「魔物達の動きが収まった直後、とんでもないことが国王に耳に届いたんだ」

「とんでもないこと？」

「そう。町や村へ援助を出しに行った兵達が、突然、自分達は援助を届けていないと言い出したんだ」

「………は？」

「ちょっと待て、意味が分からない。」

「もちろんその兵達はちゃんと援助の品を持って城門を出て、想定された時間通りに帰ってきた。」

そして、自分達は仕事を完遂したと報告した。

「………にも関わらず、2カ月経ってから、急に自分達は援助を届けしていない。」

「なぜ2か月前に、ウソの報告をしたのか分からない、と、全員が口々に言いだしたんだ」

「待て待て待て!! どう考えたっておかしいだろそれ!？」

「そいつらがふざけるとしか思えな……。」

「忘却魔法……。」

メリスの静かな声が、俺の怒鳴り声をさえぎった。

「正確には、忘却魔法と操心魔法の組み合わせだよ。

忘却魔法で記憶を消し、操心魔法で心を惑わせることで、記憶の改ざんを可能にしたんだ」

「なっ……!?!」

記憶の……改ざん!?

「ちょ、ちょっと待って! 兄さん、その部隊の人達って、全部で何人いたの?」

「20名だよ。ただし、全員尉官以下の兵だけだね」

「に、20人!? 無理だよ! いくら2カ月間だけだからって、そんな大勢の記憶を書き変えるなんて!!」

そもそも忘却魔法も操心魔法もめつたに見かけない珍しい魔法なのに、それこそ、それ専門の『魔導師ウイザード』が5、6人が、そうじゃなかつたら……!」

「『大魔導師ハイウイザード』なら、1人で可能だよ」

「っ!!」

グリーの指摘にメリスは言葉を詰まらせる。

おいおい、なんか雲行きが怪しくなってきたな……!」

「続けるよ。当然国王はすぐにその町や村へ連絡を取ろうとした。

けど、何故か一切連絡が取れなかつたんだ」

「妨害……?」

「そういうことだね。

さらに直後、最初に援助を出しに行った部隊が、独断でまた援助を出しに行っちゃったんだよ」

「え?」

「……責任とか感じたんだろうな」

「だろうね。国王はその時嫌な予感がしたらしくて、すぐに援軍と

して尉官10名、佐官2名で構成した部隊を出発させた」

この国の尉官って、冒険者で例えたらC〜D級クラス、佐官はそれこそB級並だよな。

「……けど、町や村の付近で連絡が途絶え、それからいくら待っても両部隊……いや、1人たりとも帰ってこなかったそうだよ」

「まさか……！」

「全員、行方不明になったんだ」

ちよ、つと待て、マジで……！？

「流石にここまで来て、国をあげて本格的に動くことにしたらしい。

国王だけじゃなく重臣達も危機感を覚えたんだろう。」

あまりにもおかしい、とね」

「そりゃ、これでも動かないとかありえないだろ」

むしろもっと早く動けと言いたくなるんだけど、まあ、それは今、話として聞いているからそう思えるんだよな。

国王が援軍出した時点で動いてるとも言えるし。

「……けどね、遅かったんだ」

「……え？」

遅かった、って……。

「ハデイくん、この時点で、辺境の町や村で不作や干ばつが起きてから、どれぐらいの時間が経ったと思う？」

「あっ……！……！」

少なくとも2カ月……いや、部隊編成の時間や予想外の事態に対する混乱、それに行方不明になるまで待つてたならもつと……！！

「3カ月強……その間町や村への連絡は、最初の、すぐに援助を出すという一報のみだ。」

住民達は、どう思っていたんだろうね」

「け、けど、待てよグリー！いくらなんでもそれだけで……」

言いかけて、不意に背筋に悪寒が走った。

待て、待てよ。

今までの話をまとめると……。

農業を中心にしている、冒険者学校のある町や村。

そこで起きた不作と干ばつ。

何者かの妨害で国からの援助は一切届かず、連絡もつかない。

その妨害に使われたのは、忘却魔法と操心魔法……！！

「……お、い、グリー……！！」

「……そうだね。結論から言おうか」

当たって欲しくない予感ほど、当たってしまうと聞いたことがある。

「その数日後のことだよ」

できれば、この予感は外れていて欲しかった……！！

「……その町や村の人々、約10万人が、暴徒と化して、首都近くの町を襲い始めたのは。」

それも、冒険者学校の講師や生徒達が中心となって、ね……」

第33話 反乱という名の侵略（後書き）

では次回予告です！

「メリスです！」

「グリーだよ。……何か今回の話、

僕がずつとしゃべってただけのような気がするな……」

「兄さんずるい！！私ここ最近台詞少ないのに！！」

「ごめんよメリス……！」

「そうだ！ここから先はメリスが話してくれれば……」

「さあ次回予告だよ兄さん！！」

「え……うん」

「今回は今回の話の続きなんだけど……、

そういえば、今回の話ではイアさん出てきてなかったね」

「大丈夫だよメリス、次の話でちゃんと出てくるから。」

……ただ、メリスは少し

がっかりしてしまうかもしれないけれど……」

「え？」

「いや、何でもないよ」

「変な兄さん。」

それじゃ、次回冒険者ライフ！第34話『国王の誤算』！

今回はイアさんが大活躍！？」

「……まあ、ね」

第34話 国王の誤算

「それが、反乱か……」
「そういうことだよ」

確かに、反乱が起こるのも分からなくはない。

……ただ、これが自主的な反乱だとはどうしても思えない。
魔物の活発化と不作・干ばつだけなら、まだ不幸な偶然だと納得し
ようもある。

でも、兵士の記憶改ざんや行方不明は説明がつかない。

……誰かが、意図的にやってるとしか思えない。

「誰かの策略……なんだよな？」

「そうだね……先に話しちゃうとね、この国民達はだまされてたん
だ」

「だまされてた？」

「うん。反乱の起こる数日前、十数人の商人風の者達が国民達に、
この不作や干ばつは国王が魔法で、土地の栄養や雨雲を首都付近へ
集めているために起きた。」

そう言つて、怒った国民達に武器や兵器を与えたらしいんだ」

「って！ いやいやちよつと待て！！ なんだその露骨なやり方！？ 怪
し過ぎるだろ！！」

「そう、普通ならそう言つて、誰も取り合わなかったらどうね。」

でも、相手が悪かったよ」

「相手？」

「さっき言つただろうメリス？」

記憶の改ざんには忘却魔法と、操心魔法が使われたって」

「あつ……！！」

やっぱり……！

操心魔法ってのは文字通り、心を操る魔法だからな。それを使って反乱を起こさせたってわけか！

「で、でも兄さん！心を操るっていつても、実際は惑わせるのが精々でしょ？それに、反乱に参加した人は10万人もいるって……」

「確かにね。いきなり何の準備もなく人を、それも万単位の大人数を操って戦わせるなんて、例え『大魔導師』ハイウィザードでも、それこそ『賢者』エンチャンターでも不可能だよ」

『エンチャンター賢者』……魔法使いの称号の中でも最高のものだ。

その称号を持つてるのは世界でもたったの7人、当然、全員が『魔塔』の一員だ。

「でもね、さつきメリスが言った通り、心を惑わせることなら可能だ」

「惑わせる……？」

「……っ！グリー、まさか……！」

「たぶん、それが正解だと思うよ。ハディくん」

「え、何？なに！？」

「分からないのか！？不作や干ばつ、それにウソの情報を流したのも、国からの助けを妨害し続けたのも！

国民達の国への不信感を高めて、操心魔法をかけるための前準備だったんだ！！」

「そ、そっか……！……って、だから！それでも！

いくらなんでも10万人もの人を操るなんてそれこそ……」

「『ハイウィザード大魔導師』でもないといけない……かい？」

言いかけたことを先に言われて口をつぐむメリス。

ってか、『ハイウィザード大魔導師』が関係してるっばいことはさつきも言ってた

だろ……。

「さっき言った通り、相手が悪かったんだ。

その商人風の者達には、2人の魔法使いが手を貸していた」

「2人？」

「そう、1人はセイン・モーシン。

『脈動の魔導師』という異名で知られ、『魔導師』^{ウイザード}の中でも『大魔導師』^{イウイザード}に近い魔力を持つてゐるって有名だったらしい」

「その人が操心魔法を……？」

「いや、この人は地属性と風属性の魔法に長けていたんだ。

やったのは土地の栄養や雨雲を首都付近へ集め、不作や干ばつを引き起こしたことだよ」

「って、自分達でやってたのかよ!!」

よりによって自作自演かよ……!!

まあ、都合が良すぎるとは思ってたけど。

「忘却魔法や操心魔法の使い手はもう1人の方だよ。

『惑いの魔女』フュー・プレクス、『大魔導師』^{ハイウイザード}だ」

「っ!」

『大魔導師』^{ハイウイザード}……!!

「ただでさえ不作や干ばつに襲われ、頼りの国からも連絡がこない。人々の心は不安や怒りに支配されていただろう。

そんな人達の心を操ることぐらいなら、簡単だったんだらうね。

……何せ、世界に100人もいない『大魔導師』^{ハイウイザード}の1人なんだから」

「許せない……魔法を、そんなことに使うなんて!!」

メリスが珍しく怒りをあらわにする。

こいつは子供の頃から魔法が好きで、がんばって修業してたもんな。大好きな魔法が悪事に使われることが許せないんだろ。

「と、そうだ。グリー、話の続き」

「ああ、そうだったね」

商人風の者達と2人の魔法使いの策略で、反乱が起こってしまった。その後……どうしたんだ？

「国王は、やむを得ず兵士達に鎮圧を命じたんだよ」

「……まあ、しょうがないよな」

いくら操られてるからって、攻撃をしかけてきたからには、相応の対応をしないとイケない。

「ただし、相手は逆賊じゃないんだから、絶対に命は奪うな。って言うってね」

「流石、国王だな」

いくら10万人いても、冒険者学校の講師を除けばほぼ一般人だ。優秀なスイーツ王国の兵士なら、流石に犠牲者0は難しくても、最低でも鎮圧は可能なはず……。

「でもね、報告した兵は首を横に振ったんだ」

「……横？縦じゃなくて？」

疑問符を浮かべるメリス。

「ってか、横と縦じゃ意味が真逆になるぞ。」

「横に振ったんだよ、不可能です。ってね」
「不可能？なんでだよ？」

犠牲者0は不可能って意味か？

まあそれは国王も絶対ってわけじゃなくて、それぐらいの心構えで行けって意味じゃ……。

「人々は普通の武器はもちろん、戦車や魔導兵器を持って来たんだよ」

「戦車っ!？」

ちよつと待て何持って来てんだ!？」

本当に戦争やる気満々じゃねえか!！」

……ちなみに魔導兵器ってのは、魔力を燃料にする武器、兵器の総称だ。

魔導銃とか、普通の銃よりかなり威力が高いらしい。

「まあ、全部中古だったり旧式だったり、そんなに強力な物はなかったらしいけどね。」

それでも、数がそろえば十分脅威だよ」

「中古とか旧式でも十分怖いけどな……」

やっぱり、その商人風の奴らがそろえたんだろうか。

まともな戦車や魔導兵器を何万人分も用意するのは無理だった、ってことか？

「……そして、もう1つ。」

その人々に、とんでもない人物が手を貸していたんだ」
「とんでもない人物？」

おいおい、まだいたのかよ。
でも、『大魔導師^{ハイウィザード}』が手を貸してるんだしな。
ひよっとしてA級冒険者^{クラス}でも出てくるんじゃないか？
まあ、これ以上どんな奴が出てきてもそう驚かな……、

「『八つの魔塔』の一角」

「……え？」

メリスの顔がこわばる。

たぶん、俺と同じことを考えてるんだ。

……ウソ、だろ？

……いや、違う。むしろ、そう考えたら納得がいく。

ここまで聞けば、『反逆者』の意味はもう予想がつく。

あの人に助けられたこの村で、その言葉が禁句になっていたことを
考え合わせたら、この結論しかあり得ない。

「この時、反乱軍に手を貸したのは、『星の賢者』イア・ランディ
アだよ」

「……」

ちらりとメリスを見ると、ショックのあまり固まっていた。

……やっぱり、ショックだよな。

前から懂れてた人が、過去とはいえ、国に背いていたなんて。

「イア……さんが……どう、して……？」

震える口を懸命に動かして、グリーに疑問を投げかけるメリス。
そうだ、何でランディアさんは反乱軍に手を貸したんだ！？
操心魔法？ありえない！！

魔力は精神力にも大きく関わるからな、超一流の魔法使いであるラ

ンディアさんは、魔法への抵抗力も超一流なはずだ！
そんな簡単に操られるなんて……！！

「ランディアさんもまた、だまされていたんだよ」

「だ、だまされた？ランディアさんが？」

「正確には、だまされた人達を信じてしまったんだ」

「だまされた人達……って、不作や干ばつに苦しんでた人達だよな？」

「そうだよ。……2人とも、この時点でその人達にとって、国はどんなものだと思う？」

「……え？」

どんなもの……って。

「農業従事者にとって、土地の栄養や雨雲はそれこそ、自分達の命だろう。それを奪い、あまつさえ最初は善人面して助けると言ったくせに、それ以降は連絡をしてこない、こちらから連絡をしてもつながらない。当然、援助が来る気配は全くない」

「……最悪、だな」

そっか、その人達にとってはそうなるんだ。

……操心魔法なしでも反乱起こったんじゃないか？

いや、武器を取ったのはやっぱり極端か。

「残念なことに、ランディアさんはそんな人達と出会い、そしてその人達から話を聞いた」

「う……」

確かに、そこだけ聞いたら俺でも国が悪者だと思うな……。

「で、でも、この国の国王は国民思いつて有名だし……」

「そこだよ」

「え？」

「……あっ！に、兄さん！！」

「ん、メリスはやっぱり知ってるみたいだね」

知ってる……？

「ハデイ、その時のイアさんはたぶん、そのことを知らなかったんだと思う」

「知らなかった？」

「うん。イアさんの故郷、イアさんが10歳ぐらいの頃に、盗賊団に襲われて、たくさんの人が殺されたんだって」

「なっ……」

「それで、生き残った人はほとんどが国や孤児院に引き取られたんだけど、イアさんはその時助けてくれた魔法使いに弟子入りして、それから10年近く山奥で修業してたんだって」

「山奥？」

「うん、そのお師匠さんが、あんまり人が多いのは好きじゃなかったみたい」

「……つまり、国王の人柄とかは、その“国を最悪だと思ってる人達”に初めて聞いたってことか」

「人生初かどうかは分からないけど、少なくとも10年近く聞いてなかった上で、その人達に話を聞いたとしたら……」

「この国は最悪だって勘違いしてもおかしくないな……」

それで反乱軍に手を……、

「で、でも兄さん！イアさんは『星の賢者』だよ！？」

土地の栄養とか、イアさんなら本当のことに気づけたんじゃない……

「！」

「……むしろ、それが決定打になったのかもね」

「え……?」

「さっき言っただろうメリス。」

“村や町の土地の栄養、雨雲は首都へと集まっている”って。

たぶんランディアさんは、そのことに気づいたんだ」

「げっ……!!」

うわ、それは確かに決定的だな……。

それで商人風の奴らの言うことを信じちゃまったのか……!

「……とは言っても、ね。」

僕の個人的な意見としては、たぶんランディアさんなら気づけたと思うんだ」

「え?」

「彼女は『星の賢者』、地属性魔法のエキスパートだ。」

それが『脈動の魔導師』のしわざだと気づけたっておかしくない。

……本当なら、ね」

「でも、じゃあ何でランディアさんは……」

ランディアさんが黒幕の悪事に気づいていたんなら、なんで反乱軍に手を貸したりなんか……!!

「……気づけなかったんだと思うよ」

「……は?」

いきなりグリーが正反対のことを言ってきた。
ちよっと待て、どういふことだ?

「本当なら、ランディアさんは気づけたと思うよ。」

でも、いくつかの要因が重なって、ランディアさんは気づけなかつたんだと思う」

「要因？」

「そう、今話した中であつただろう。

“国が悪者”だという先入観。

“土地の栄養や雨雲が首都へ集まっている”という事実。

……そして、“操心魔法”」

「なっ……はあ！？待てよグリーー！！ランディアさんに操心魔法なんて……」

「確かに高い魔力を持つ者には、操心魔法は効きにくいことが多い。でも、操心魔法に抵抗するのは、魔力じゃなくて精神力だ。

そして、魔力と精神力は、必ずしも同じじゃない」

「イアさんの心が、弱かつたっていうの……？」

「……そうは言つてないよ。

ただ、これだけの要因が集まつてしまった結果、ランディアさんは真実に気づけず、反乱軍に手を貸してしまった。

僕はそう思つてる。本当の所は本人しか分からないよ」

……そうだよな。

結局、その人の心が分かるのはその人だけだもんな。

「さて、だいぶ脱線しちゃったね。

話の続きに行こう」

「つと、そうだな。……どこまで聞いたっけ？」

「人々が戦車魔導兵器を持ってきて、さらに『星の賢者』が手を貸している。までだよ」

「そうそう、それで？」

「報告した兵は、今すぐ全力を以てかからなければ、町が占拠されます。って国王に言つたんだ」

「……だよな」

一般人10万人＋普通の武器と戦車、魔導兵器＋『星の賢者』。
……考えるだけでも恐ろしい。
それに黒幕の奴らもいるんだろ……。

「でも、国王はそれを許可しなかった。

兵士は国民を守るためにいるんだ。って言ってね」

「……そうだよな、そういう人だもんな」

相手がそんな人達なら、鎮圧じゃなくて完全に殺し合いになる。
兵にも国民にも、かなりの犠牲が出るだろう。

「そして、今すぐ兵を退けと命じたんだよ。

相手は逆賊じゃない、襲うのは兵だけで、町の人達に無用な危害
は加えないはずだって言ってね」

「な、なるほど。でもグリー、それって……」

「そう、首都付近の町は、全て反乱軍に占拠されちゃったんだ」

「た、大変!!」

「大事件じゃねえか!!」

「……その大事件を、なんで君達は知らないんだい？」

グリーがジト目になったのを見て、俺とメリスはほぼ同時に明後日
を向く。

しょうがないだろ！知らないものは知らないんだ!!

「そ、それでグリー？その後どうなったんだ!？」

「少なくとも今は、もう反乱なんて影もないぞ!？」

慌ててごまかすように言ったけど、本当のことだ。

少なくともこうしてグリーに聞くまで、反乱があったなんて想像す

らしてなかったしな。

グリーは小さく嘆息した後、ゆっくりと口を開いた。

「『黒と白の英雄』だよ」

第34話 国王の誤算（後書き）

では次回予告です！

「メリスだよ！」

「ハデイだ……って、もう1周したのかよ、早いな！」

「チツチツチ、甘いよハデイ！」

前のは『ハデイと私の次回予告』で、

今回は『私とハデイの次回予告』なんだよ！！」

「……違いが分からん」

「あゝもうノリ悪いなあ！！」

「それよりメリス、早くしないと次回予告できなくなるぞ」

「あつ！え、えつと！次回も話の続きだよ！

そして！30・5話で出てきたあの人達が登場！」

「話の中で、だけどな。」

次回冒険者ライフ！第35話『黒と白の英雄』！

英雄ね、やっぱそういうのには憧れるよな」

「あはは、ハデイも結構子供だね！」

「お前には言われたくねえ！」

第35話 黒と白の英雄（前書き）

6 / 2 4

誤っていた部分があったため、書き直しました。

第35話 黒と白の英雄

（サイドアウト）

ここはスイーツ王国の首都ケーキ。

その中心に存在するスイーツ城の中心部にある謁見の間。

そこには2人の男女がいた、1人は五十台前半の男、だが年老いているとはいえず、むしろ年相応以上の気品と覇気を持っていた。

薄い茶色の髪に同色の瞳、頭部には証である金色の王冠を被っている。

そう、彼こそがこのスイーツ王国の国王、カプチノ・ブラウ・スイーツである。

もう1人は二十代の女、輝く金髪に包まれたその顔はいわゆる美人だが、赤い瞳が切れ立っており、その身を包む覇気も合わせて見る者に畏敬の念を抱かせる。

腰からは細身の長剣を下げており、その身のこなしからしてただ者ではないと素人でも分かるだろう。

彼女はスイーツ王国軍騎士部隊隊長エルド・ドラゴニス。

通称『黄竜』と呼ばれるこの国最強の剣士である。

その腕と国への忠誠心から、彼女は国王の側近に任命されていた。

「……エルド」

「はっ、いかなされましたか？」

「いや……月日が流れるのは、早いものだな。あれから、もう3年か」

国王はフツと目を閉じ、当時のことを思い出す。

『こ、国王陛下……!』

『……なんだ騒々しい』

『そ、それが、客人がいらしてしまして、今すぐに取り次げと』

『客人?後にしろ、今は国の一大事だ。人と会っている余裕など…』

…』

『つれないこと言うなって、国王様よ』

『っ!お、おい!』

『……ねえ、いくらなんでも国王様に失礼だよ』

『うつせいな。俺は自分が尊敬する人にしか敬語は使わねーんだよ』

引き止めようとする兵を無視して謁見の間に入ってきたのは、光を思わせる白髪の子供と、闇を思わせる不自然なほど黒い黒髪の少年。白髪の子供の顔を見て、国王は思わず声を上げる。

『おお……お前か。久しいな』

『お久しぶりです国王様』

白髪の子供は先程とは態度を変え、立派に礼を通し、かしずいてみせた。

『ご挨拶は省略でいいだろ、めんどくせえ』

『貴様!国王陛下に無礼であるっ!』

対する黒髪の少年は態度を一切変えなかったため、先程2人を引き止めようとした兵が、激昂し剣を抜こうとする。

『その者は……』

『彼は私の友人、そして兄弟子です』

『そうか。おい、剣を収めよ』

『しかし……!!』

『構わん』

『……はっ』

兵は国王の言葉にしぶしぶといった様子で納得し、剣を収める。

『それで、一体何用だ？知っての通り、今この町は反乱軍と一触即発の状態だ。』

『お前もすぐにこの町を離れるべきであろう』

『お心遣いありがとうございます。』

『しかし、今日はそのことでお話に参ったのです』

『話……？』

『簡単な話だ。俺達がこの町……いや、この国を救ってやる』

『……なん、だと？』

『具体的には、これから首都を襲いに来る3万人の軍勢と、本部にいる1万人を無力化して、黒幕共をあなたの前に晒し上げてやるさ』

『バ、バカを言うな!! たった2人で一体何が……』

『あんたさつきからうるせえよ。ちよつと黙ってる』

『貴様っ!!』

兵がまたも剣の柄に手をかけた途端、その手がピタリと動かなくなつた。

『っ……!!?』

『それでいい、少し黙ってる』

黒髪の少年は兵に嘲笑を浮かべ、視線を国王へと移す。

『スイーツ王国の兵士は優秀だ。』

「あんたらも相手を殲滅しようと思えばできるだろう？
だが、相手はこの国の民だからな。」

「お優しいあんたは国民を殺すことなんてできない。」

「そこで俺達の出番だ。さっき言った通り、相手を誰一人殺さず全員無力化してきてやる。」

「………可能、なのか？そんなことが………」

「できないじゃないじゃねえ、やるって言ってんだよ俺は。」

「そうやって不敵な笑みを浮かべる黒髪の少年。」

「そして、白髪の子供は薄い灰色の瞳を国王に向ける。」

「国王様、昨年あなたはこうおっしゃいました。」

「この国に凶事あらば、また力を貸してくれ、と。」

「今がまさにその時だと、私は思っています。」

「だが………！！！」

「あいにくだが、俺達が出しゃばるのは決定事項だぜ？」

「あんたに報告に来たのは、反乱軍が攻めてきても兵を出すなって
言いたかったからだ。」

「“邪魔なだけ”だからな。」

「………貴様、先程から目に余る言動が過ぎるぞ。」

「と、うなるような声が黒髪の少年に届く。」

「その声は静かな、それでいて激しい怒りがはらんでいた。」

「『おっと、騎士部隊隊長様か。』

「………なんか不機嫌だけど、嫌なことでもあったのか？」

「からかい口調の言葉を聞き、エルドは怒りが爆発しないよう、
歯を食いしばって耐えなければならなかった。」

「いくら力があってもエルドは若く、精神的にはまだ未熟だったのだ。」

『……流石にそんな簡単に挑発には乗らねえか』
『貴様が今言った話だが、貴様らに実行するだけの力はあるのか？
そのような夢物語を実行できる者がこの世にいるとは思えぬがな』
『力ねえ……』

黒髪の少年が小さく笑った、その瞬間。

『……っ！』

本能的に“それ”を感じたエルドは大きく一步飛び退き、反射的に剣を引き抜いた。

その反応が気に入ったのか、黒髪の少年はうれしそうに笑う。

『おっ、流石この国最強の剣士。』

並程度の奴なら指先一本動かせなくなるはずなんだけどな。

『……こいつみたいに』

そう言つて黒髪の少年は、剣の柄を握つたまま動けなくなっている兵を見る。

『なんだ、今のは……魔眼や邪眼とも違う、一体……！？』

『ただの“殺気による威圧”だけど、それがどうかしたか？』

『殺気……だと……！？』

エルドは目を見開き、驚愕をあらわにする。

それも無理はないだろう。

殺気だけで人の動きを封じるなんて、それもこんな子供が、実際に体験しなければ信じられないだろう。

『……ちよつと、おふざけが過ぎるよ』
『わりーわりー、面白くてな』

黒髪の少年が意地悪く笑うと、動けなくなっていた兵はハツと体の自由を取り戻した。

『これで、少しは分かったか？俺達には力があるってよ』

『……』

『……まあいいや。』

そもそもよく考えたら、あんたらの判断なんて待つ必要ないしな。いざとなれば首都の出入り口に結界張って兵が出れなくすりゃいいし。行こうぜ』

『あつ、うん……』

国王様、無礼ばかり申し訳ありません。

ですが、私共を信じていただけのならば、どうか……』

黒髪の少年は意気揚々と、白髪の子供はしっかりと頭を下げ、その場を去ろうとする。

『……託しても、いいのか？』

その時、ぽつりと国王が呟いた。

小鳥の鳴くような小さな声だったが、その声はしっかりと2人に届いていた。

『はい』

『本当にお前達は、そのような奇跡を起こせるのか……？』
『奇跡、か。いいね』

黒髪の少年は、不敵な笑みを浮かべる。

それでいて、頼もしさを感じさせる笑みを。

『今回は俺達が奇跡を起こしてやる。

それを受けてどうするかはあんた次第だが、できればハッピーエンドを期待するぜ？国王さんよ』

『……………』

国王はしばし目を閉じ、黙考する。

このままでは、王国軍と反乱軍がぶつかり合い、多くの罪無き国民の命が失われる。

果たしてこの子達に託していいのか。

この国の、未来を……………。

『……………頼む』

国王は目を開き、2人の目を見て、声を張り上げた。

『この国を、救ってくれ……………!!』

その言葉を受けて、黒髪の少年は不敵な笑み、白髪の子供は覚悟を決めた顔で応じる。

『おう！その言葉を待ってたんだよ』

『お任せを！国王様！』

そう言って、2人は謁見の間を出て行った。

……………この翌日、この国で起きた反乱は、あっけなく終焉を迎えることになった……………。

「……今は、はるか昔のことのように思える」

「あの時の黒髪の少年の無礼は、私は未だに許せません」

「そう言うな。あの2人こそこの国を救った英雄、『黒の英雄』と『白の英雄』なのだから……」

国王はそういつて窓から空を見る。

夕焼けに赤く染まった空を。

そして、思うのだった。

この国がこの色に染まらなくて、本当に良かった、と……。

くハデイサイドく

「……………マジで?」

「マジだよ」

グリーは小さく嘆息しつつ、傾いた。

たぶん、グリーも信じ切れないんだろうな。

そりゃ、たった2人で3万人を、それも誰一人殺さずに倒したって

……。
普通に考えて、ありえねえ。

「そしてその2人は、すぐさま反乱軍の本部があるストロベリー町へ向かい、そこで陣を構えていた『星の賢者』を含む反乱軍1万人を同じように倒し、黒幕をひっ捕らえて反乱を終わらせたんだよ」

「は……はあっ!？」

ちよ、待て!!

1万人をたった2人で……ってのもういい!!
『星の賢者』を含むって……!!

「ランディアさんに、勝ったのか……!？」

「……そうみたいだよ」

グリーは先程と同じように傾く。

そんな、バカな……!!

あの人は『魔塔』だぞ……。

身体能力はそこまでじゃないかもしれないけど、魔力に限っては世界屈指の実力者だ。

それが、

「たった2人に……!？」

「……ハデイ、2人じゃないよ」

「……え？」

俺のつばやきに、メリスは首を横に振る。

「イアさんが戦ったのは、『白の英雄』一人だよ」

「……………はい？」

えー……………つまり、ランディアさんは、1対1……………いや、むしろ多対1（もちろんランディアさんは多の方）で、負けた……………？

「……………グリー、正直に言っていていいか？」

「どうぞ」

「信じられねえ」

きつぱりと今の気持ちを断言する。

いや、事実を否定したってしょうがないのは分かるけど、あのランディアさんに、自分が不利な状況で勝った？しかもその2人って、話だと子供なんだから？

……………ありえない。

ランディアさんの強さを目の前で見たからこそ、断言できる。

「私も本当は信じられないんだけど。

でも、イアさん本人がそう言ってるんだもん」

「う……………」

……………だよな。

じゃなきゃ、そもそもメリスが信じるわけがなかった。

でもなあ……………。

「ってか！そもそもその『英雄』って誰なんだよ！？」

この国の危機を救ったんだろ！？」

だったら、もっと有名になってるはずなんじゃねえのか！？」

俺やメリスでも自然に耳にするぐらい！！」

確かに俺やメリスは世間知らずなところあるかもしれないけど、いくらなんでも、そんな人達の名前なら聞いたことがあるはずだ！！

「……分かってないんだよ」
「……は？」

思わず聞き返してしまった。
え、だって、分かってないって……。

「『黒と白の英雄』は、反乱が治まるのと同時に、こつ然と姿を消してしまっただ」

「姿を……消した……？」

「そう。……誰なのか分からない、そしてやったことが人間業とは思えない。」

国の危機に現れた、神の化身なんじゃないか、とさえ言われているそうだよ」

神の化身って……。

いやでも、確かにそうでもなきゃ説明がつかないような……。

「分かってるのは、髪の色」

「髪？確かに白は珍しいけど、黒って普通じゃ？」

「当時反乱に参加してた人達によると、普通の黒じゃなかったらしい。」

“闇を思わせる、不自然なほど黒い黒”、あんな色は初めて見たと、全員が口を揃えて言ったそうだよ」

……どんな色だよ。

「……ここからは、最も有力だと言われている、そして、僕自身も正しいと思ってる一説なんだけどね」

「ん？」

「『黒と白の英雄』じゃないかと、そう言われている人物がいるんだ」

「っ！だ、誰なんだ!？」

思わず大きな声を出してしまう。

だって、気になるだろ!!

一体誰なんだよその化け物は!?

「……『絶望』と『神童』だよ」

「っ！!伝説の、冒険者……!!」

グリーの口から出てきた2人は、冒険者なら一度は聞く異名なまえだった。『伝説』と呼ばれる割には、この2人が活躍したのは、そう遠い昔ではないらしい。

だが、2人は共にたった14歳でA級クラスになり、そしてある時、同時に消えてしまった。

ゆえに『伝説の冒険者』、そう呼ばれている2人だ。

「でも、なんで……確かに年齢とか、化け物染みた力とか、共通点が多いけど」

「その2つに加えて、さらに2つ。」

「1つは消えた時期が重なること。もう1つは髪の色だ」

「髪?……あ」

「思い出したかい?『絶望』は黒髪、そして『神童』は白髪、そして『絶望』の毛髪は、“漆黒”と言われるほど黒い黒だったらしい」「いや、ってか、そこまで共通してたら、もう確定じゃ……?」

俺がそういうと、グリーはひかえめに首を横に振った。

「本人達が消えてしまってるんだ。」

確認の取りようがないんだよ」

「でもよ……」

「もう1つあるよ。いくら『絶望』と『神童』でも、たった2人で3万人の軍勢、そして『星の賢者』を含めた1万人と戦うなんて、無理じゃないかって言われてるんだ」

「……伝説の冒険者でも、か？」

「確かにこの2人は、一晩で1000人の大盗賊団を壊滅させたとか、『絶望』1人で危険度Aの上位竜を倒したとか言われてるけどね」

「本当に人間かつ!？」

今さらつと出た話も十分信じ難いんだけど……。

「本によるとこの2人は、『絶望』が冒険者として最初の仕事をした時、『神童』もA級最初の仕事として同じ仕事を受け、それ以来一緒にいたらしい。

消えたのはその半年後みたいだよ」

「あ、本とかあるのか？」

「そりゃあ伝説の冒険者だからね、伝記ぐらいあるよ」

伝記……子供なのに。

つてか、『神童』この時点でAかよ。

「2人が行動を共にして3ヶ月後、『絶望』がちょうどC級冒険者になった時」

「3カ月でC!？」

さ、流石伝説の冒険者と言つべきか……!!

「当時『魔塔』の1人だった、『精魂の賢者』オルス・リバフォス

と戦ったんだ」

「た、戦ったって……なんで!？」

メリスが信じられないとばかりに声を張り上げた。

『魔塔』はメリスにとって目標であり、憧れだもんな。なんで『魔塔』と後の『英雄』が戦ってんだか……。

「『精魂の賢者』はね、死体をつなぎ合わせてより強靱な肉体を作り、そこに生きた人の魂を大量に注ぎ込んで、不死の人間を作ろうとしていたんだ。」

……そして、“材料”としていくつもの町や村を壊滅させていた「なっ……ちよつと待てよ!!そいつ『魔塔』なんじゃ……」

「『魔塔』は別に、善人の集団ってわけじゃないよ。」

と言つても、流石に『魔塔』にふさわしくないと判断されて、逮捕されてすぐに除名されたらしいけどね」

「……逮捕されて?」

「そう、『絶望』と『神童』が勝ったんだよ。」

ただし、2人がかりでなんとか、らしいけど」

「そ、それでもとんでもないよ!!」

『魔塔』にたった2人で勝つなんて!ねえハディ!」

「……確かにとんでもないけど……。」

グリー、それって反乱の起こる“3カ月前”だよな?」

「うん。さつき言った通り、『英雄』と『伝説の冒険者』は、消えた時期が重なってるからね」

「って、それがどうかしたの?ハディ」

「少しは自分で考えるよ……。」

あんな、『絶望』と『神童』は、反乱の起こる3か月前に、『魔塔』1人に、2人がかりでなんとか勝ったんだ」

「うん、すごいよね!!」

「そうそうすごい……って違う!!」

お前論点が分かってないだろ!？」
「論点?」

ダメだ、こいつ全く分かってない。

「反乱の時に『白の英雄』は1人で、『魔塔』であるエアさんに勝つてんだろ!!」
「白の英雄」が「神童」だとしたら、たった3カ月前には『絶望』と協力して勝ったのに、いきなり1人で勝てるようになるっておかしいだろ!!」

「あ、本当だ!!!」

やっぱり全然分かってなかったか……。

「……まあ、『賢者』^{エンチャンター}である『精魂の賢者』と『大魔導師』^{ハイウイザード}である『星の賢者』じゃ、同じ『魔塔』でも同格とはいえないだろうけどね。」

それでも、やっぱりおかしい、『神童』が、たった3カ月で強くなり過ぎてる」

「だよな。となると、やっぱり違うのか?」

「……でも、僕はそうは思わない。」

やっぱり、『伝説の冒険者』が『英雄』だと思っただ」

「って、いきなり意見変えるなよ……」

「変えてなんてないよ。」

最初に言っただろう?これは最も有力だと言われていて、そして、僕自身が正しいと思ってるって」

「っと、そうだったな」

話を聞くのに集中し過ぎて忘れてた……。

「でもよ、さっきお前が言った通り、力に矛盾があるんじゃない?……」

「それだよ」
「どれ？」

明後日の方を向いてるアホがいるけど、ここは無視で。

「……今、ハデイにバカつて言われた気がする」
「言っていないし思っていない」
「本当？」

メリスが不満そうな顔でにらんでくる。

……ウソは言っていない、ウソは。

「で、それってなんだよ？」

「この説における一番の欠陥は、君が言った“力の矛盾”なんだよ。逆に言えば、それさえ解決したら、もうこの説を否定する因子はほぼないと言っている」

「で、どう解決するんだ？」

「……まあ、本人達がいらないから完全な解決なんてできっこないんだけどね。」

僕は、その3カ月の間に、何かがあつたと思ってるんだ」

「……何か？」

「そう、何かがあつて、元から化け物染みてた2人は、本当の化け物……いや、化け物をも超えるような力を手に入れた。」

僕は、そう考えてる」

結局、結論なんて出ないんだな。

まあ、世間的に分かってないことの結論をここで出すなんて、無理に決まってるか。

……にしても、なんで『英雄』達は姿を消したんだ？
国を救ったんだから、国民全員から称えられるだろうに。

……まあそれも、今ここで考えたって、分からないことが。

第35話 黒と白の英雄（後書き）

では次回予告です！

「メリスです！！」

「グリーだよ」

「兄さん！！なんだかここ最近私セリフが少ないよ!？」

「うーん、ハデイくんは視点だし、

僕は説明のためにセリフが多くなってるからね。

……そうか！！視点をメリスにすればいいんだ!!

そうと決まれば、まずはハデイくんを排除して……」

「しちゃダメだよ!？」

「じよ、冗談に決まってるじゃないかメリス。

……やるなよ、我慢しろ僕……!!」

「兄さん？」

「いや、なんでもないさ。それよりメリス、次回予告は？」

「あ、そうだ！えーっとね、

次回！ついに3年前の話が終わりを迎えるよ!!」

「長かったね。……何週間かかったんだか」

「え？何言ってるの兄さん。

話が始まってまだ2時間経ってないよ？」

「……それは物語の中……」

「さて次回予告だよ！

冒険者ライフ！第36話『反逆者達の結末』！

……ねえ兄さん、『反逆者』って……」

「ここまでくれば大体察しはつくだろうけどね。

とりあえず今は一言だけ。
その人達は、罪人なんかじゃないよ」

第36話 反逆者達の結末

「サイドアウト」

スイーツ王国は、この世界で一番大きな大陸の東端に存在する。それはつまり、その大陸から東にある他の大陸、島へ向かう際、スイーツ王国から船を出すのが一番近いということだ。スイーツ王国で貿易が発展している理由はここにある。

しかし、利点を持つということは、同時に狙われる理由を持つということになる。

スイーツ王国は戦争を嫌っているが、軍、兵士のレベルは世界でもトップクラスだ。

その理由は、過去幾度となく他国に狙われ、侵略戦争を仕掛けられてきたからである。

現在は世界中で戦争を嫌う考えが普及し始めていること、また、過去の戦争を乗り越えてきた実績のおかげで、スイーツ王国と戦おうなどと無謀な考えを持つ国は少ない。

……しかし、あくまで“少ない”であり、全くないわけではない。それゆえ、スイーツ王国では今なお、軍のレベルが維持され続けている。

「……………」

ここはそんなスイーツ王国軍の本部。

普段から兵士達が己を鍛えるために使っている、血と汗が染みついたグラウンド。

……今のはあくまでも比喻だが、現時刻が夕方であるがゆえ、グラウンドは夕日の光に赤く染まっていた。

そのグラウンドの端にある段差に座り込み、ただグラウンドを見つ

めている女性がいた。
その目にはいつもの覇気がなく、思考を停止させているのが見て取れる。
実際彼女は考えを止めていた、理由はそう、3年前から続く、苦しみから逃れるために……。

「……中将」

声が聞こえ、女性は……イアは、思考を取り戻す。
振り向くと、彼女の幼馴染が険しい顔で立っていた。

「どうしたんですか、ロギさん？今は夕食の時間ですよ？」

「いえ、中将の姿が見えなかったので」

「……今は、2人です」

一瞬顔の険しさが増した後、ロギは小さく嘆息した。

“あの頃”が忘れられなくて、少しでもそれを望むイアと、そして、3年経つてもイアを救うことができない、自分自身に、呆れていた。

「お前は、この時期になるといつもそうだな。この前も言ったはずだ。」

お前は、過去に囚われる必要などない、と」

「……ありがとうございます。」

でも……そんな簡単に、割り切れないんです」

うつむいて力なく笑うイアの隣に、ロギは黙って座った。

「私が反乱軍に加わってなかったら、きっと、王国軍が撤退して、町が占拠されるなんてこと、ありませんでした」

「……」

「ロギさんは、3年前にはもう、軍にいたんですよね？」

「……ああ」

「それを知ってたら、私も国王様のこと、もう少し信じられたかも……いえ、たぶん、あなたに会いに行ってたと思います。」

「そうしたら……」

「……それを言うなら、俺も同じだ」

「え？」

「イアが驚き、顔を上げる。」

「その瞳には、わずかに涙が溜まっていた。」

「俺は、お前が国を恨んでいると思っていた。」

「……俺達の村を助けてくれなかった、とな」

「そ、そんなこと……！」

「……俺は、軍に入るまでは恨んでいた。」

「恨んでいたからこそ、軍に入ったんだ」

「私達みたいに、故郷を失う子供が出ないように、ですか？」

「……」

「図星だったのか、ロギは押し黙る。」

「それを見て、イアはうれしそうに微笑んだ。」

「とにかく、俺はお前を誤解していた。」

「その誤解さえなければ、お前の誤解を解くことができたかもしれない」

「で、ですが……」

「まあ、こんな仮定の話をいくら言った所で、何の意味もないだろう」

「あ……」

そこまで言われて、イアは気づいた。

ロギが自分を励まして、いや、激励してくれていることに。

「そーそー！仮定より俺は現実の話を知りたいなー！」

「……どこから沸いたんだ貴様」

「はっはー！俺は虫じゃないぜー？」

空気をぶち壊してきたのはエンジン。

2人と同じ精鋭部隊『ソレイユ』の一員だ。

「エ、エンジンさん、どうしたんですか？」

「いやー？お2人がなんだか話し込んでたみたいだから、気づかないようにこっそり聞いてたんだなー！」

「……盗み聞きか、いい度胸だな」

「おーいおい人聞きが悪いなー！俺はただ2人の話をこっそり聞いてただけだぜー？」

「それが盗み聞きだと言ってるんだ……！」

「ま、まあまあロギさん、落ち着いて下さい……！」

怒りで口調がきつくなっているロギを、なんとかイアがなだめる。

「それでエンジンさん、現実の話って？」

「おおーつとそうだった！」

聞いた話だとイア中将、かの『英雄』と一戦かましたんだろー？
その体験談なんか聞きたいなーつと思ってるなー！」

「おい、エンジン……！」

「……はい、構いません」

「しかし、中将……！」

ロギが心配するのももつともだった。

何せ、さっきまでイアはまさにそのことで苦しんでいたのだから。しかし、イアは首を横に振る。

「今、ロギさんが言ったじゃないですか。仮定をいくら話しても意味がないって。

……そろそろ私も、逃げるのはやめにしたいんです」

「……………」

イアの決意を知り、ロギは納得したのか、反論をやめた。それを確認し、イアは話し始める。

「3年前のあの日……私は、反乱軍の本拠地にいました」

反乱軍の本拠地で、イアは地平線を見ていた。

ここからは見えないが、この先ではきつと、反乱軍と王国軍が戦っているのだろう。

いや、もしかしたら、王国軍は降伏してくれるかもしれないが……。

『……………はあ』

自分でも無意識の内に、イアはため息をつく。

本当なら、イアは前線に出て戦うつもりだった、自分の力で、少しでも犠牲者を減らすために……。

しかし、そう願うイアに、反乱軍の幹部達はこう言った。

あなたは存在だけで相手を威圧できるんだ、危険に身をさらす必要はない。

それに、万一あなたがやられてしまったら、逆に王国軍を勢いづかせてしまう、と。

そう言われて、イアは本拠地にとどまった。

『……………』

おかしい、とイアは自分に疑問を感じていた。

人の役に立とうと魔法を習い、そして世に出てきたのに、反乱を起こした人達を救おうと、反乱軍に参加したのに。

……………自分は今、何をしてるんだろう。

疑問に答えが出ない。

そして、それを無意識の内に納得しようとしている自分がある。

そのことにも疑問を感じた。

何か……………何か、違和感を感じる。

もやもやとした感情の中で、イアはふと思った。

……………まるで、魔法をかけられているようだ、と……………。

その時、突然派手な爆発音と、大勢の悲鳴が聞こえてきた。

急いで現場へ駆けつけると、そこには倒れている反乱軍の人達と、そして……………。

「……………そして？」

不自然に言葉を区切ったイアに、エンジは聞き返す。

少しの沈黙の後、イアは再び話した。

「……………女の子が、立っていました」

「……は？」

「年はおそらく……13、4くらいだったと、思います」

その言葉に、ロギとエンジは顔を見合わせた。

今の話の流れからして、その子こそが『白の英雄』なのだろう。

話には聞いていたが、実際に当事者から聞くと……。

「なーイア中将。まさかとは思うけど、見た目に油断したせいで負けたってオチじゃねえよなー？」

笑いながら言うエンジだが、実際それは十分考えられた。

イアは優しい性格だが、戦場ではそれが甘さとなり、命取りになることだってある。

しかし、イアは首を横に振った。

「私は……油断なんて、していませんでした。

……いえ」

その時、ロギとエンジは気づいた。

イアの顔色が少し悪く、声が震えていることに。

「油断なんて……できませんでした。

その子と対峙した瞬間、私は、どうやって逃げようか、考えていたんです。

……本能、とでも言えばいいでしょうか。

それが、全力で警鐘を鳴らしていました。

……この子と戦っちゃいけない、と……」

イアの言葉と表情から、それが決して冗談じゃないと、ロギとエンジは感じていた。

「……………それで？」

ロギに聞かれ、イアは話を再開した。

逃げようと、そう思いつつも、イアは逃げられなかった。

正確には逃げられなかった半分、逃げなかった半分だ。

逃げられなかったのは、その子の威圧感があまりにも強く、逃げ出すような余裕がなかったから。

そして逃げなかったのは、その子によって、反乱軍の人達が倒されたからだ。

『……………すごい魔力だね。もしかして、君が『星の賢者』？』

少女特有の、高い声。

普通ならかわいいと思うような声だが、それすらも、今はイアに恐怖を与えた。

『いたぞー！あいつだー！』

その時、5人の反乱軍の人が来て、その子に銃を向けた。

それを見て、イアは極度の緊張で枯れたのどを使い、なんとか声を張り上げた。

『ダメー！』

しかし、男達はそれを無視して引き金を引いた。
この時イアが叫んだのは、男達の身を案じたからだったが、おそらく男達は、その子の安否を考えてだと、勘違いをしたのだらう。そのため、それを甘い考えと切って捨て、発砲したのだ。

『縮地』

瞬間、その子の姿がかき消えた。

……消えたのだ、本当に。

まるで、元々そこにはいなかったかのように。

当然発射された銃弾は虚空を横切り、誰も傷つけることなく壁へとぶつかる。

直後、人の倒れる音が聞こえた。

おそろおそろ目を向けると、今発砲した人達が倒れていて、その子はその人達の後ろに立っていた。

それを見て、ようやくイアは気づいた。

この子は消えたんじゃない。

“消えた”と錯覚するほどの速度”で、あそこまで移動したんだ。

……勝てない。

この子は次元が違う存在だと、イアは理解させられた。

しかし、イアの中から逃走の2文字は消えていた。

なぜなら、目の前で反乱軍の人達を倒された、仲間に、危害を加えられたのだから。

『……逃げないの？』

その子の声。それには応じず、イアは『集中』を始める。

それと同時に、頭の片隅で考え始める。

さっきこの子が消えたのとはほぼ同時に、凄まじい衝撃音がした。

……ソニックブームだ。

つまり、この子は“少なくとも音速以上の速度”で移動したということになる。それも、何の補助魔法も、道具も使っていない状態で……ありえない。人間はそんな速度で動ける生物じゃない。けれど、目の前の現実を否定した所で、何の意味もない！1秒にも満たない『集中』の後、できる限りの力を込めて魔法を発動させる。

『地底より地の集いを呼ぶ 砕け ガイアス!!』

直径1m強の岩が現れ、その子へと向かうも、それは一瞬で緑色の刀に切り裂かれ、バラバラにされてしまう。

しかし、それは予想内だ。元より今の魔法で倒せるとは思っていない。

イアの目的は、時間稼ぎ。弱い魔法で少しでも動きを止め、その隙に一瞬でも長く『集中』をする。

『星の化身よ その姿を槍と化し

彼の者を貫け！ ガイアランス!!』

多数の岩の槍が現れ、凄まじい速度でその子へと迫る。

発動ギリギリの魔力しか込められなかったが、ガイアランスは強力な魔法だ。

例え相手がA級冒険者でも重傷を負わせることが可能だろう。

イアはこれで決めるつもりだった。

しかし、

『……仕方ないかな。

これはまだ使いこなせてないから、できれば使いたくなかったんだけど』

一瞬、その子の体が純白の光に包まれた。

『属は正、力は滅び、型は信頼 ……』

その子が何かを呟いた、その瞬間。

白い光が岩の槍を包み込み、一瞬にして消滅させた。

エアが驚愕に目を見開いている隙に、その子はエアの後ろにいた。

『ごめんね、少し寝てて。』

目が覚めたら、きつと全部終わってるから』

首に衝撃が走り、エアの意識はそこで途絶えた……。

「私が話せるのは、ここまでです。」

その後、私が起きた時には……全て、終わっていました」

「……………」

「たっはー………すげえなあ、『白の英雄』。」

ホント聞いたただけだと、「冗談としか思えないなー」

「……………だが、事実なのだろう?」

「はい、私達は『英雄』達に倒され………いいえ、救われました。」

あの人達がいなかったら、本当に、全面衝突していたらと思うと

……………ゾツとします」

その時は、この国の大地が真っ赤に染まっていただろう。

今の、このグラウンドよりも、赤く……………。

「私達は……未遂とはいえ、それだけ罪深いことをしました。本当なら、許されることでは……」

「はっはー！ ホント真面目だなーイア中將は！」

「まあそれも魅力だけど、真面目すぎるのも考えもんだぜー？
な、ロギ准將！」

「……中將、何度も言ったはずです。その罪は……」

「ええ、分かっています」

そう言っつてイアは、にっこりと笑う。

……まだ少し無理をしている風にも見えたが、少しずつ、傷は治っている、ロギは感じた。

「私達の罪は、もう、“許されている”……」

くハデイサイドく

「さて、壮大に遠回りをしちゃったけど、話に戻ろうか」
「あ、忘れてた」

それを聞いて、グリーは大きく嘆息する。

「……言っておくけど、また最初からなんてごめんだからな？」

「いや！今までの話は覚えてるってちゃんと！！」

人々がだまされて反乱を起こして、その人達を信じたランディアさんも反乱に参加して、で、『英雄』がその反乱を治めた、と」

「うん、『反乱』のあらまは大体そんな感じだよ。」

その後、黒幕達は牢に幽閉されて、反乱に参加した人達は故郷へと帰った。

壊れた建物とかもそんなになかったらしいし、復興にもそんなに時間はかからなかったみたいだよ。

これはすぐに兵を撤退させた、国王のおかげかな」

「なるほど……あれ？」

「どうしたのハディ？」

「いや、幽閉って……普通、死刑じゃねえの？」

「ああ、それね……。」

本当なら死刑になるはずだったみたいだよ、でも、実際は終身刑になってるんだ」

終身刑……一生牢屋ってことだよな。

まあ、考えようによっては死刑よりきついけど……。

「それが『英雄』達……正確には、『黒の英雄』が出した条件だったらしいよ」

「『英雄』が？」

「うん。反乱を治めた後、2人の英雄は一度国王の元へ行ったらしいんだ。」

そこで『黒の英雄』が国王に、『俺は死が嫌いなんだ。俺が関わったからには1人の死者も出さな』。

って言っただってさ」

「……なんじゃそりゃ」

死が嫌いって……あれ、なんか聞いたことあるような。最近だと思っただけ、どこで聞いたっけ……？

「実際には、この反乱の犠牲者は0じゃないよ。

反乱に参加した人達の故郷で、餓死者は流石にいなかったみたいだけど、体調を崩したり、病気になった人もいる。

それに最初に反乱軍が町を占拠した時、王国軍との争いで、多数の負傷者と……3人の犠牲者が出てる」

「やっぱり、いるんだな、犠牲者……」

「……ただね、『英雄』が関わってからは、1人の犠牲者も出てないんだ。黒幕達を含めて、ね」

本格的な戦いはそこからだったはずなのに……それは正に『英雄』の活躍だよな。

「これにはやっぱり批判もあるんだよ。

黒幕達は死刑にすべきだ、ってね」

「……だよな。でも、なつてないんだろ？」

「そう、批判を言った人達も、『英雄』との約束だつて言われたら、ほとんどの人は納得したみたいだよ。

……その人達は、大半が占拠されてた町の人々や、黒幕達に利用された、反乱に参加した人達、つまり、『英雄』に救われた人達だったからね」

「なるほどな……」

「ねえ、そういえば、その黒幕達って、結局何がしたかったのかな？」

と、メリスがグリーに質問をした。
何がしたかったって……。

「だって、別にこの国を滅ぼしても、その人達に何の得もないんじゃない……」

「……そもそも、滅ぼすというのは言い過ぎだね。」

例え『英雄』達がいなかったとしても、王国軍と反乱軍じゃ、やっぱり王国軍の方が上だ。

首都1つ落とすことができなかつただろうから、この国を滅ぼすなんて無理だつたと思うよ」

「じゃあ、何で……」

「……メリス、その黒幕達だけど、どんな人達だつたか覚えているかい？」

「え……つとー……」

「商人風の人達、か？」

「そう」

「あ、あーうん！覚えてるよ！！」

いや、忘れてたろ……。

と思っただけど、口に出さないでおく。

「その商人風の人達なんだけどね。」

全員、レイド帝国出身者だつたんだ」

「レ、レイド帝国！？」

グリーの話に思わず大きな声が出る。

レイド帝国つてのは、この国のすぐ西にある、この大陸の半分を手中に収めている大帝国だ。

最近は侵略とかしないで、おとなしくしてるらしいけど……。

「そのこともあって、一説ではこう言われてるんだ。」

“黒幕達の目的はスイーツ王国を弱らせることで、その後ろにはレイド帝国があつたんじゃないか”つてね」

「なっ!?それって……!!」

「そう、レイド帝国による『侵略』の一端だった。

……ただ、僕はこの説の信憑性、微妙だと思うんだ」

「微妙?」

「終身刑になった黒幕達は、全員レイド帝国との関わりを否定してるんだよ。

レイド帝国も同様だ」

「しらばっくれてるんじゃない……」

「そこまでレイド帝国に尽くす理由がないと思うけどね……。

祖国のために、っていうなら、とんでもない愛国心だよ。

それならまだ本人達が言った、『国を乗っ取るつもりだった』の方が信憑性が高いと思う」

「国を乗っ取るって……首都すら落とせなかったんだろ?」

「本人達によると、本当はたった10万人じゃなくて、もつと大勢

……それこそ、町や村の人達全員を操るつもりだったらしい」

「全員って……」

「黒幕達が利用しようとした町や村の総人口は200万人以上、14歳以下の子供や65歳以上の老人を抜いても、120万人を超えてたからね」

「多っ!!……ってか、それならむしろ、反乱に参加したのが10万人って……」

「そう、少ないぐらいだよ。

その理由についてもいろいろ説があるけど、一番はおそらく、『

国王への信頼』だ」

「信頼?」

「反乱が起きた一番の決め手は操心魔法だよ。

だけど、操心魔法はあくまでも心を惑わせる魔法だ。

つまり、『国王へ怒りへ向ける』という操心魔法をかけられても、

“心の底から国王を信じてる人達”には、効果が薄いんだ」

「そっか……」

そういう意味じゃ、黒幕達の謀略からこの国を救ったのって、国王と国民達の信頼だったのかも……。

「……逆にいえば、操心魔法にかかって反乱に参加してしまった人達は、“国王を心から信じていることができなかつた”とも考えられるんだ」

「……え？」

いや、確かに、そうともいえるかも知れないけど、そんな言い方は……。

「そのこともあって、反乱に参加した人達は、愛国心の強い人達から、こう呼ばれることがあるんだ。」

……『反逆者』、とね」

「っー！やっぱり、『反逆者』ってのは……」

「そう、反乱に参加した人達を軽蔑して使う言葉だよ。」

……だから、この村では禁句になってるんだらうね」

この村は半年前にランディアさんに救われた。

ランディアさんも反乱に参加してたから、ランディアさんを軽蔑するよつな言葉を許さなかつたのか……。

「……あれ、でもさ、今ランディアさん、軍にいるんだよな？」

なんで……まさか、反乱に参加したから……」

あり得る、『星の賢者』は軍からしたら、のどから手が出るぐらい欲しい人材だらうし……。

と考えたのだが、

「いや、それはないよ」

その考えはグリーにあっさり否定された。

「反乱に参加した人達は、一切罪に問われていないんだ。

国王がその人達を集めて、直々に告げたんだって、『お前達の罪を許す』ってね」

「じゃあ、ランディアさんが今軍にいるのは……」

本人の意思……いや、

「罪滅ぼし……か」

「違う!!」

声と共に、バン!と大きな音がした。

メリスが机に自分の手を叩きつけた音だ。

「昔のことは、分からないけど……!」

でも!きつと今は違うよ!!

チヨコレート町で魔物と戦って、町を救って、みんなから感謝されて!

イアさん、うれしそうに笑ってた!!誇らしげに笑ってた!!

ただの罪滅ぼしなんかじゃ……絶対にないよ!!」

「メリス……」

メリスの目には、小さく涙が光っていた。

……良かった。反乱に参加してたって知っても、

メリスにとって、やっぱりランディアさんは憧れの人なんだ。

「……だな!きつと、人を助けたくて軍にいるんだろっな。

「この村を救ったみたいに」
「……うん！」

そう言っつてメリスは笑顔を見せる。

「さてと、長くなつたけど、僕の話はここまでだよ。

ちよつと夕食の時間だし、食堂へ行こうか」

「おう！」

「わーい！私お腹ペコペコーー！！」

「……お前病上がりだよな？」

いや、昼はメリスにしてはありえないくらい少なかったから、分かんなくはないんだけど……。

「だって明日はタルト町まで歩かなきゃいけないんだから、たくさん食べてたくさん寝て完璧に治さなきゃ！！」

「その意気だよメリス！」

相変わらずマイペースだなこの兄妹……。

「ま、いいか、元気が一番だしな」

元気に笑つメリスを見て、俺はそう呟いたのだった。

第36話 反逆者達の結末（後書き）

では次回予告です！

「グリーだよ」

「ハデイだ……ってまたこの組み合わせか」

「まあ、3人から2人を選んでローテーションしてるからな。
1周したらまた1人に戻すらしいよ」

「1周って……えー、今回が俺とグリー……じゃなくて、
グリーと俺、だから」

「次回の僕とメリスで最後だね」

「早いなおい！！」

「まあ、また気が向いたらやるらしいけどな。

それじゃハデイくん、次回予告」

「俺か……。」

えー、今回は第四章最終話！

俺達は早速当初の目的地であるタルト町へ向かう……

けど、その前にある場所へ向かうんだ。

次回、冒険者ライフ！第37話『星の賢者』！

過去を人を判断するための材料にするってのは、
間違っちゃいないだろうけどな」

「けど、過去はイコール現在ではないよ。

過去だけを見ては、

その人を本当に理解することなんてできないだろうさ」

第37話 星の賢者（前書き）

7 / 1 1 次回予告に少し付け加えました。

第37話 星の賢者

「……………」

「安心しろ、平熱だ」

不安げな顔をするメリスに、体温計を見せる。

その画面には、36.5 と映っていた。

「よかったー！！これなら大丈夫だよな？」

「ああ、つて言っても病み上がりだからな。あんまり無理はするなよ？」

「分かってるよ！」

そう言つてメリスはうれしそうに笑う。

にしても、風邪が治つて本当に良かった。

今日の夜10時までタルト町のギルドに行かなきゃ、審査が受けられないからな。

別に無理して受ける必要はないけど、これで受けられなかったらメリス気にするだろうし。

今は朝の7時30分、念のために10時にはこの町を出るつもりだ。

「あれ、兄さんは？」

「グリーなら外で魔法の練習してる。審査までになんとか形にしたいつてさ」

……………でも、グリーつてまだ練習始めて1週間ぐらいしか経ってないよな。

いくらなんでも無理なんじゃ……………。

「大丈夫だよきつと！兄さん昔よく私の修業に付き合ってくれたし、魔力高いから！」

「……そうか、ところで俺は今『無理なんじゃ』って思っただけで口に出してなかったんだけど」

「顔に書いてあったよ？」

さも当然というような顔をするメリス。

いや、普通の人間は読心なんてできないはずだろ。

「……前々から思ってたけど、お前実は異能者なんじゃねえの？」

「えー何言ってるのハデイ。『異能』なんてただの伝説でしょ？」

「いや、本当にいるらしいけどな。まあ、見たことないけど」

「100万人に1人程度の確率で生まれるんだってさ。一生に1人見るかどうかだよ」

と、グリーが戻ってきた。

相変わらず物知りだなこいつ……。

「お、グリー、どうだ調子は？」

「そうだね……」

グリーは目を閉じ、『集中』を開始する。

……お、結構いい感じに光ってるな。

「生命の力よ 光と化して彼の者の傷を癒せ ヒール！」

グリーが突き出した右手から、白い光が現れる。

「おおっ！……！」

成功……と思ったその瞬間、光は消えてしまった。

「……ま、こんな感じかな。」

「直接触れないと届かないし、効力もたぶんほとんどないよ。」

「いや、でも十分すごいだろ！」

「そうだよ兄さん！これでもうケガなんて怖くないね！！」

「そうとも！まあ、ケガをしないのが一番だけどね、戦闘だとしてもケガをすることがあるから、その時はすぐに僕に言うんだよ、メリス！」

「うん！！」

「待てグリー、俺は？」

「……バンソウコウならそこにあるよ？」

「魔法は！？」

まさかの差別。泣きそうだ。

「もう兄さん！ハデイが一番ケガをしやすいんだから！」

「わ、分かっているよメリス。ハデイくんもちゃんと治療するよ。」

グリーを説得してくれるなんて、いい所あるなメリス。

「ハデイはおつちよこちよいでケガをしやすいんだから！」

「余計なお世話だ！！」

「えーだって、この前ブラッディヴァインと戦った時、油断して攻撃に当たってたでしょ？」

「うぐっ……」

「それに昨日、稽古の時に油断して、クイトくんから一発くらったって聞いたよ？」

「しゃべったのかあいつ！！」

くそ！ちゃんと口止めをするべきだった！

「……あんまり心配させないでよ」

「あ？何か言ったか？」

「な、なんでもない！！」

ぼそつと何かを呟いたから聞いてみたけど、メリスはすごい勢いで首を振るだけだった。

どうしたんだ、一体？

「……さあ2人も、そろそろ朝ご飯に行こうよ」

「そうだな……ってグリー？何か怒ってないか？」

「はっはっは……何を言ってるんだいハデイくん。僕は全然全く少しもこれっぽっちも怒ってないよ……？」

「なら、銃に手をかけるな！！」

こわいコワイ怖い！！

朝なのにグリーの殺気で辺りが暗く見える！！

「どうしたの2人も？早く行こうよ！お腹空いちゃった！」

「そうだね、行こうか」

一瞬で辺りが明るくなる。

……殺気でここまでできるなんて、実はグリーも異能者なんじゃないだろうか。

「あ、みなさん、おはようございます！」

「おっはよー、メリスさん風邪の具合はどう？」

と、食堂に行く途中でビレン姉弟に会った。

「うん、もう大丈夫だよ！2人にも心配かけちゃったみたいでごめんね」

「いいっていいって！ほらみんな、朝ご飯できてるよ。それを知らせに行こうとしてたんだ」

「悪いなわざわざ……」

「いいってば！それに、みんなもうすぐ出発しちゃうんでしょ？

だったら最後までうんは、ね」

ランジは少しさびしそうに笑う。

会ってまだ3日目だけど、やっぱり別れてさびしいよな。

旅の冒険者なんてしてる以上、今まで何度も経験してきたけど、やっぱりさびしいものはさびしいし、これは別に、無理に慣れなくてもいいと思う。

「あ、あのハディさん！」

「ん？」

食堂で席に着き、料理を待っていると、リンが緊張した様子で話しかけてきた。

「朝食後にお時間ありますか？」

「え？まあ、少しぐらいなら……」

「それじゃ8時30分に、昨日の修行場に来てもらってもいいですか？最後に稽古をつけてもらいたくて……」

「そうだな……うん、少しだけならいいぞ。クイトも一緒か？」

「はい！ありがとうございます！」

8時30分からか、じゃあ1時間ぐらいはできるな。

……いや、待て俺。今日その後、10時間歩くんだぞ。

1時間みっちり稽古した後10時間歩くってのは……。

「……あ、あのハデイさん。稽古は一度お手合わせして頂ければ十分です」

「え？」

「タルト町まで歩いて行くと聞いてますから、これからそんなに歩くのに、何時間も稽古に付き合わせるわけにはいきません」

「そ、そうか？悪いな……」

「いえ、こちらこそ、勝手なお願いをしましてすみません」

「いや、それはいいけど……」

「……。つてか、今考え読まれたような……。そんなに顔に出やすいのか俺？」

「うん！ハデイは考えがすぐ顔に出るもんね！！」

「……黙ってる『読心のメリス』」

「何その異名！？かっこいい！！」

「気に入りがった！？」

「ほら2人とも、料理できたよ」

騒いでいるとランジが料理を運んできてくれた。

「悪いな、騒がしくて」

「いいよ、朝はあんまりお客さんいないしね」

「あ、なあランジ」

戻ろうとするランジを呼び止める。

「「どうしたの？」」

「お前は将来の夢とかあるのか？」

「将来の夢？」

「ああ、昨日リンとクイトを一撃で沈めてただろ。

お前もその気になってしっかり鍛えれば、冒険者とか兵士としてかなりいい線いくと思うんだけど……」

「んー……そういつてくれるのはうれしいけどさ」

ランジは照れくさそうに頬をかきながら言う。

「でも、やめとくよ。俺の夢は冒険者でも、兵士でもないから」

「じゃあ……」

「……俺の夢は、この宿屋なんだ。

今の内にお母さんをしつかり手伝って、大人になったらこの宿屋を受け継ぐ。それが俺の夢だよ。

冒険者も兵士も立派な職業だけどさ、お客さんをもてなす宿屋だつて、それに負けないぐらい立派な職業だと、俺は思ってるよ」

「……だな。ごめんな、急に变なこと聞いて」

「いいよ、認めてもらえるのはうれしいし」

ランジは屈託のない笑顔でそう言うと、奥へと下がって行く。

「でも、どうしたのハディ？急にあんなこと聞いて……」

「いや別に、ただ……あいつら見てると、子供の頃とか思い出してるよ」

「十年一昔って言うし、ちょうど一昔ぐらい前だよね」

「子供見ると、もう大人になったんだなって、嫌でも思い知らされるよ」

「なんか年寄りみたいなセリフ……」

「うるせえ」

「まあ、僕達はまだまだ若者だけどね。でも、先輩として子供達に教えられることぐらい、あると思うよ」

「……だよな。んじゃ、しっかりやらないとな！」

そうこうしている内に食事終了。

……まあ、メリスはもっと早く終わってたけど。

他愛もない話をしていると、気づけば時計は8時20分を指していた。

「それじゃ、行ってくる」

「行ってらっしゃーい!!」

「がんばってきなよ」

一応早めに来ただけ、クイトとリンはすでに到着し、素振りをしていた。

「あ、ハデイさん！」

「よっしゃ来たな！今日もよろしくお願いしますっ！」

「2人共やる気満々だな、それじゃ昨日と同じように……」

「あ、いえ」

「ハデイさん、今日は1人ずつ実戦稽古やってくれよ！」

「1人ずつ？」

確かに昨日も、1人ずつ稽古したりもしたけど、勝敗をつけるような実戦稽古は全部2対1だったのに。

「ほら、俺とリンって将来の夢違ったる？」

いつまでもつるんでるわけじゃねえからな、1人で戦うことも考えないと、ってさ」

「そういつわけです」

「……なるほどな、それじゃ、先はどっちだ？」

「もちろん俺だ!!」

昨日と同じように、言うや否やクイトは木刀を振りかぶって突進してくる。
相変わらず子供にしては……いや、小さい子供だからこそできる高速移動だ。

この『勢い』こそがクイトの武器だろう。
……だけど、

「悪いな、その速さはもう慣れた!!」

突っ込んでくるクイトの木刀に狙いを定め、タイミングを合わせて自分の木刀をぶつける!

「ぐっ!!……まだ、まだあ!!」

昨日とは違い、弾き飛ばされまいと意地を見せるクイト。
……だけど、

「悪いな!!」

「うわっ!!」

手に力を込め、力任せにクイトの木刀を弾き飛ばす。
全体重かけてきたけど、力は俺の方が上だったみたいだな。

「くっそお!!」

「それじゃ、次は私です!!」

悔しがるクイトの前にリンが出てくる。

昨日の稽古からすると、リンは『不意打ち』が得意みたいだけど、
1人で一体どうするのか……。

「参ります!!」

と、リンは木刀を振りかぶったまま高く跳躍した。ただジャンプして斬りかかってくるだけか？

不思議に思いつつも、それを受け止めようと木刀を構える。が、しかし、

「っ!?!」

リンは木刀を縦ではなく斜めに振り下ろすことで、わざと攻撃を外した。

当然、衝撃に備えていた俺は不意をつかれ、無防備な状態になる。

やべっ、フェイントか!!

「はぁあっ!!」

振り下ろした状態から木刀を反転させ、逆方向へと放つ。

その刃は確実に俺を捕える……はずだった。

ドガッ!!

「っ!?!」

「惜しかったな」

リンの手から叩き落とされた木刀が地面に落ちる。

俺はリンがわざと斬撃を外した瞬間、反射的に体を半回転させ、今まさに向かってこようとした木刀を、自分の木刀で叩き落としたんだ。

今のは正直危なかった、もう少し遅かったら確実にくらってたな。

「ダメでしたか……結構自信あつたんですが」
「俺もだよ、あーやつぱ現役冒険者は違うな……!!」
「いや、2人とも昨日より強くなつてたぞ。正直また驚かされてる」
昨日は子供なのに強かったことに驚いたけど、今日は成長具合に驚かされた。

「そりゃな！俺達だつて昨日の稽古をもとにいろいろ考えたんだぜ
!!」
「そうです！私達なりにがんばつたつもりです！」
「そっか……昨日の稽古がためになつたんなら良かったよ」
「はい!!……本当は、もっと稽古をつけて頂きたいんですが……」
「わがまま言うなつてリン！この人達にはこの人達の目的つてのが
あるんだからよ！」

暗い表情になるリンを、クイトがなだめる。

「ごめんな、けど、俺達はいろんな場所を旅して回つてるからな。
きつとまた会うこともあるつて」
「それじゃ、その時、また稽古をつけて頂けますか？」
「あ、俺も俺も!!」
「おう！約束する！その時までしつかり稽古しろよ！」

いつになるかは分からないけど、その時、この2人はもっと強くなつて
るだろう。
俺も負けないようにがんばらないとな！

「と、それじゃそろそろ行くな」
「あれ、もう行くのかよ？」

「まだ9時前ですが……」

「いや、村を出る前に、行く所があるんだ」

「ふーん……？」

「それじゃ、またな！2人とも！」

「おう、ありがとうございます！」

「また絶対会いましょうね！！」

手を振ってくれた2人に手を振り返し、俺はメリスとグリーの元へと急いだ。

「遅いよハデイ！」

「悪い悪い」

「それじゃ行こうか。場所は聞いてきたからさ」

グリーの指示に従って、その場所へと歩く。

「ここか？」

「うん」

到着したのは、この村の中ではかなり大きな家。チャイムを鳴らすと、返事が聞こえ、扉が開く。

「おや、あなた方は……」

「おはようございます村長さん」

「おつ、冒険者さん達じゃないか。」

村長に用事か？」

「あ、エレルさんも、ちょうど良かった。」

お2人に伝えたいことがあったんです」

「ほほう、どうされましたかな？」

「俺にも？」

不思議がる2人に、メリスが口を開く。

「私達、この村に来る少し前に、イアさん……イア・ランディアさんに会ったんです」

「！！！」

メリスの言葉を聞いた2人が驚きをあらわにする。

「その時、イアさんと一緒に仕事をしたんですが、その仕事で、イアさんは大きな町を1つ救いました。

それだけじゃないです。

イアさんがいなかったら、きっと私達はその仕事で死んでたと思います」

不意に、ジェネラルドラゴンと戦った時のことを思い出す。

イアさん達が助けってくれなければ、俺達は全員黒焦げになってたはずだ。

「イアさんは今も、兵士として国民を救い続けてます。

……『反逆者』だろうがなんだろうが、あの人はずい人です！

私の、憧れの人なんです」

「……………」

メリスが禁句を言ったにも関わらず、2人は怒ることなく、むしろ、穏やかな笑みを浮かべた。

「……………そうすな、例え他の者があの人をののしったとしても、あの人がこの村の恩人だという事実は何ら変わらない」

「禁句とか……少し神経過敏になってたのかもしれないね。」

まあ、恩人をのしられたら、やっぱり許せないと思いますかね」

「旅の方々、それを我々に伝えて下さり、ありがとうございます」

「い、いいえそんな！私だってイアさんの悪口を言われたら許せません！」

「それが嬉しいのです。我々と同じように、あの人を尊敬する人がいるということが、ね」

「あ……」

村長さんの言葉に、メリスはうれしそうな笑みを浮かべる。

「と、引き止めちまって悪いな。あんたらもう出発すんだろ？」

「あ、はい」

「そうですか……。また、ぜひこの村に立ち寄って下され。」

「歓迎いたしますぞ」

「ありがとうございます。それじゃ」

2人に別れを言い、村から出発する。

さてと、これから10時間歩くんだよね……。

まあ、途中休憩はさみながら行けばいいか。

「……ねえ、ハデイ」

「ん？」

と、隣を歩くメリスが話しかけてきた。

見ると、メリスは満面の笑みを浮かべていた。

「私の憧れの人は、やっぱり私の思った通りの人だったよ」

「……だな」

メリスの笑顔を見て、俺も自然に笑顔で返すのだった。

第37話 星の賢者（後書き）

では次回予告です！

「グリーだよ」

「メリスです！……兄さん大変！

もう第四章終了だよ！？」

「次の第五章が最終章だからね。

いよいよこの物語も終わりが見えてきたって所かな」

「むー……少しさびしいなあ……」

「仕方ないよメリス。

始まりがあれば終わりがあるものだよ。

逆に、終わりがあれば始まりがある。

受け入れて、前に進めばいいんだよ」

「……そうだね、兄さん！

それじゃ次回予告いってみよう！！

私達はやっとタルト町に到着して、

ギルドに申請へ向かうんだよ！

そして、ハディはこの町で、ある人と出会うの。

次回、冒険者ライフ！第五章『伝説』！第38話『タルト町』！！

兄さん、運命って信じる？」

「もちろん！僕とメリスが兄妹になったのは運命……、

コホン、ごめん、まじめに答えるよ。

運命を否定する気はないけれどね、

結局は考え次第だと思うよ。

運命を信じれば運命、

信じなければただの偶然、
って具合にね」

サブキャラ設定4（前書き）

設定なので、軽くネタバレを含みます。

サブキャラ設定4

ランジ・ビレン

年齢：10歳 性別：男

身長：148cm 体重：45kg

髪：肩より短いぐらいの明るい茶髪

瞳：茶色

ミカン村にある宿屋の長男。

釣りが趣味で、宿屋で出る川魚は彼が釣ってきたもの。

将来は宿屋を継ぎたいと考えており、それ以外にもいろいろと手伝いをしている。

姉のリンや友達のカイトに付き合わされているおかげで体力があり、また力も強い。

彼のげんこつを受けたら、大人でも泣くといわれているとかいないとか。

リン・ビレン

年齢：12歳 性別：女

身長：148cm 体重：??kg(女なので)

髪：明るめの茶髪 二つ結びにしている

瞳：茶色

ミカン村にある宿屋の長女。

将来は冒険者になることを夢見ていて、大人顔負けの力を持つ。
得物は剣で、『不意打ち』が得意。

クイト・アーミス

年齢：12歳 性別：男

身長：151cm 体重：42kg

髪：黒茶色 逆立っている

瞳：黒

ミカン村に住む少年。

将来は兵士を目指していて、リンと同じく大人顔負けの実力を持つ。
得物も同じく剣。

走るのが速く、迷いなく突っ走る『勢い』を最大の武器とする。

第37・5話 黒の青年

くサイドアウトく

ここは深い森の奥地。

一人の青年が、めんどくさそうにため息をついている。

「油断した。まさか、探知されるなんてな……」

青年は呟いた。

そして、ゆっくりと手を伸ばす……。

と、ある二本の木の間で、手が弾かれる。

侵入を拒まれた青年はもう一度ため息をつく。

そして、呟いた。

「……いつそのこと、『領域』ごとく消し飛ばしてやるのか……」

切れだつた漆黒の瞳が鋭く光り、青年の体が黒く光る……いや、黒い光に包まれる。

それとほぼ同時に、辺りから色彩が失われ始めた……。

巨大な魔力を解き放とうとした、その時、青年はあることに気づき、魔力を霧散させた。

「この生氣……ちっ、人がいるのかよ。となると、どうするかな……」

めんどくさそうにそう言い、またため息をつく。

そして、あごに手を当てて考え始める。

「認識阻害、時間操作、空間操作、遠距離射撃、弾かれるのは俺だけだから、使い魔に任せるのもありか……」

たつぷり1秒間、この状況を打開する策を考え、そして青年は結論を出した。

「めんどくせえからやめよ。」

中にいる奴は『あれ』を作った奴だろうからな。
完成して出てくるまで待ってやるか」

めんどくせえ、そう呟き、青年は森から立ち去った……。

第38話 タルト町

「ん……」

朝、窓から入り込む光で目を覚ます。時計を見ると、6時10分前だった。ゆっくり起き上がり、部屋を見渡すと、2人の仲間の内、1人の姿が見えなかった。

「ふぁ……グリーはもう行ったか」

静かに寝息を立てているメリスを見つつ、そう呟く。洗面所で顔を洗った後、剣を持って部屋を出ていく。もちろん、鍵をかけるのを忘れずに。宿屋の外でゆっくりと素振りをしつつ、昨日のことを思い出す。

昨晚、俺達は予定より少し遅れて、9時半にここ、タルト町に到着した。

まあ、30分あればなんとか間に合うと思ったんだけど、町の入口から冒険者ギルドが少し遠かったり、他にも申請書を書いている人が結構いたり、メリスが申請書を書くのに手間取ったりしたせいで、申請書を提出したのは10時5分前と、結構ギリギリになってしまった。

といっても、間に合ったんだから特に問題はない。後は明後日の審査に向けて、少しでも力をつけるだけだ！

「あ、おはよーハデイ」

「おはよう」

「おはよう……って早いな、メリス」

30分後、朝の修業を終えて部屋に戻ると、グリーとメリスがいた。グリーは分かるけど、この時間にメリスが起きてるって珍しいな。

「なんだか目が覚めちゃって。」

それより兄さんに聞いたんだけど、2人っていつも朝に修業してるの？」

「んー、まあな。」

実戦で十分修業になるけど、やっぱり基礎も大切だしな」

「僕は魔法を覚えるためだけだね」

「ふーん……じゃあ、これからは私もやるっかな！」

「え……？」

「待つてハデイ、なんでそんな信じられないって顔するの？」

「いや、お前が朝6時起きとか……無理だろ」

「ハデイひどい!!」

俺の返答に嘆くメリスだけど、そうは言ってもな……。

「メリス、あんまり無理はしない方がいいよ。」

魔法は、一歩間違えたら命を削りかねないものなんだから」

グリーも珍しくメリスに反対意見を出す。

筋力に瞬発力と持久力があるように、魔力には強さと多さがある、そして、メリスは魔力が強い割に少ない。

つまり、強い魔法を使える代わりに、すぐに燃料切れを起こしてしまっ。

実際1つの仕事だけでも、メリスが魔力を使い切るのは珍しくないからな。

そんな状態で無理に魔法を使ってしまえば、最悪寿命を削りかねないんだ。

それに、魔力を回復させる方法は、基本的に休憩だ。

その中でも一番魔力を回復できる睡眠を削るのはまずいだろ。

「だ、大丈夫だよ！

それに私がまずしたいのは、魔力を多くする修業なの！」

「え？」

「ほら、魔法が使えなくなったら、私足手まといにしかならないから、だから、もっと魔法を多く使えるようになりたいの！」

「メリス……」

もちろん、現状メリスは足手まといになんてなってない。

それどころか、俺達の戦いでメリスは要なんだ。

でも……いや、だからこそ、メリスがもっと強くなりたいと言ってくるのは、心強い。

そっぴや、グリーも前に似たようなこと言ってた気がする。なんだかんだで、この兄妹は似てる所が多いな。

「それに……」

「それに？」

「イアさんは魔力の強さより、多さの方が優れてるらしいから……」

……そっぴやが本音か。

「いや、まねりやいってもんじゃないだろ」

「分かってるけど……でも、少しでもイアさんに近づきたいの……」

「そっぴや問題か……？」

まあいいや、そっぴやのことなら反対はしないけど、無理はするな

よっ」

「うん！」

話が一段落ついた所で、時間を確認すると7時少し前。

「そろそろ食堂行くか」

「わーい！ご飯ご飯！！」

「……子供か」

ご飯を前に『わーい』っていう19歳ってあんまりいないと思う。毎度のことに呆れつつ、俺達3人は食堂へ向かう。

流石にまだ朝早いので、人はまばらだった。

この食堂はセルフサービスなので、適当な席に座り、自分で料理を持ってくる。

今日の朝ご飯はトースト2枚とサラダ、飲み物は牛乳、そしてデザートにミカンだ。

なんか、パン食べるの久しぶりだな。

「いただきますーす」

「いったただつきまーす！！」

「いただきます」

……。

「ごちそう様ー！！」

……やばい。

最近メリスの食事スピードが物理法則を超えてる気がする。
今ここで起きた出来事を簡潔に説明しよう。
メリスが5秒で朝ご飯を完食した、以上だ。

……異常だ。今更だけど。

まず単位がおかしいだろ、5“秒”って……。
食事にかかる時間の単位は普通“分”だろ“分”。

「どうしたのハディ？変な顔して」

「お得意の読心で分かるだろ」

「えーでも、このぐらいの量なら、普通1分もかからないと思うよ？」

「いくらなんでも1分はかかるだろ！っていうかやっぱ読んでやがったな！！」

油断も隙もない……！いや、油断とかそういうの関係ない気もするけど。

「それで、これからどうするの？」

「どうって……ああ、審査は明後日だもんな。

まあ、来たる審査に向けて、少しでも力をつけておく方がいいんじゃないか？」

「……妥当な考えではあるけどね。ハディくん、家計の方はどうなんだい？」

「一応、金のことはしばらく心配しなくて大丈夫だ。

ヨーグルト町でかなり稼げたから」

特にブラッディヴァインの事件で一気に5万近く稼げたからな。

その前にチヨコレート町でも結構稼いだし、最近は懐に余裕がある。

「だったら、この町を観光するのもいいかもね」

「か、観光？」

「いいの兄さん？そんなことしてて……」

「もちろん修業をするのが前提で、だよ。」

「あんまり気負い過ぎても仕方ないからね」

「……それもそうだな」

休んだり遊んだりすることも大切だもんな。

もちろん、サボるのは論外だけ。

「じゃあ兄さん、この町はなにか有名なものとかあるの？」

「このタルト町は、商人の町なんだよ。」

中央広場は出店で賑わってるらしいから、昼頃になったらそこに行こうかと思うんだ」

「へー、出店か。掘り出し物とかあつたらいいな」

「それもそうだけど……僕が一番捜したいのは、武器だよ」

「武器？」

グリーの発言に、メリスは首を傾げる。

「冒険者の審査や試験では、持っている武器の力も多少加味されるからね。」

「少しでも強い武器を持っていた方がいい。」

「メリスはそもそも武器を持ってないから、なおさら捜さないよ」

「そういうことか。」

流石グリー。口では観光とか言いながらも、しっかりと審査のことを考えてる。

「そついやそうだな、俺の剣も安物だし。」

「グリーの銃は、一応年代物なんだっけ？」

「まあね。でも、今はもつと強力な銃がいくらでもある。

C級の審査を受けるからには、この銃じゃ少し心許ないかな」

グリーは右手に持った銃を眺めながら言う。

肌に合った物が一番とも言っけど、やっぱり武器は強いに越したことはないもんな。

「でも、出店の商品って信用できるかどうか分からないんじゃないか？」

「その辺りは自分でしっかり判断するべきだね。

どうしても良い物が見つからなかったら町の武器屋に行けばいいし、それでもなければ諦めてもいい。良い武器がなくても、実力さえあれば審査には受かるからさ」

「だな。それじゃ、昼までは自由行動か？」

「そうなるね……」

「それじゃ、行ってきます!!」

「あ！メリスちよつとストップ！」

速攻で駆けだそうとするメリスを呼び止めるグリー。

「どうしたの兄さん？」

「ってか、まだ金を渡してないだろ」

「あ、そっか！」

「それもあるけど、2人に注意しておかなきゃいけないことがあるんだ」

「注意？」

俺達が顔を向けると、グリーは真剣な顔で話し出した。

「この町、表通りは安全なんだけど、裏通りは少し治安が悪いみた

いなんだ。

不良とか、たちの悪い連中がうるついでるそうだよ」

「別に不良ぐらい怖くないぞ。いつもは魔物相手にしてるんだし」

メリスは少し危ないかもしれないけど……。

それでも、魔力切れにでもならなければ、不良に遅れを取ったりしないだろ。

「それは分かってる。でも、ここ1週間ぐらい、路地裏で暴力事件が相次いでるらしいんだ」

「暴力事件？」

「そう。なんでも、かつあげをしてる不良達を人間離れた力でポコポコにしてる人物がいるらしい。」

そのあまりの強さに、『路地裏の悪魔』と呼ばれてるんだとか」

「『路地裏の悪魔』……？」

なんだその異名……。

つてか、

「なんで『悪魔』なんだ？かつあげしてる不良を倒してるってことは、かつあげされてる人を助けてるってことだろ？」

それなら、むしろ良い人なんじゃ……」

「……やり過ぎてるんだよ」

俺の言葉に、グリーは首を横に振る。

「ケガはそんなに大したことないらしいけど、中にはその時の恐怖を忘れられず、部屋に引きこもってしまう人もいるらしいんだ。」

もちろん、その不良達は自業自得なんだけど、そこまでやる『路地裏の悪魔』には、やっぱり気をつけた方がいい」

「そういうことが」

「……それと、その『路地裏の悪魔』の特徴なんだけど……」

グリーは少し言い淀んだ後、言いにくそうに声を出した。

「絵の具で塗りつぶしたような、不自然なほど黒い、漆黒の髪と目を持っていたらしい」

「……え？」

不自然な程黒い、髪と目……。

グリーも思い当たったんだろう。だから、言いにくそうな様子だったんだ。

「……でも、まさか……」。

「ねえねえハデイ！早くお金！」

と、メリスがシリアスな雰囲気をつ壊してきた。

「……こいつはあれか、2日前に聞いた話をもう忘れたのか。」

「……ほら、1000あれば足りるよな？」

「……」

「返事をしろ。……言っとくけどこれ、昼ご飯代は入ってないからな？」

つまり、今渡すお金は完全に自由に使っている金だ。

「……なのに、1000Gで足りないって、一体何買うつもりだいっつ。」

「さっき宿屋の売店に、かわいい髪飾りが3000Gで売って……」

「却下」

「即答!？」

「髪飾り1つ3000つて、どんな高級髪飾りだ一体!？」

「あ、小さいけど宝石ついてたよ!」

「自分で金ためて買え!!」

少し補足だ、俺達3人の金は基本的に俺が管理しているが、山分けした分のお金は当然個人のものだ。

だから、欲しい物ができた時のために、俺やグリーは自分の分の貯蓄をちゃんとしている。

……ようするに。

「金を山分けする度、どんどん食い物に費やすお前が悪い」

「うつ……わ、私だってちゃんとお金ためてるんだよ!？」

「へえ、今の残高は？」

「6Gゴールド!」

「はっ」

「鼻で笑われた!？」

逆にどうやったらそんな金額が残るんだか……。

……しょうがないな。

「ほら、メリス」

「……え？」

ご希望通り3000Gゴールドを渡すと、メリスは呆けた顔で固まる。

「い、いいの？」

「いいに決まってるだろ。それはお前の分の取り分だからな」

無駄づかいしないように渡さずにいたけど、欲しい物があるんなら、

やっぱり渡すべきだよな。

「……ありがとう、ハディ!!!」

「あんまり無駄づかいするなよ?」

「うん!」

メリスはお金をしっかりと持ち、笑顔で食堂を出ていった。

……さて、と。

「グリー、頼むから銃を下ろしてくれ。さっきからこめかみが痛い!!!」

「おのれハディくん……! そうやってピンチのメリスを救うことでポイント稼ぎをするなんて、なんてずる賢いんだ!!!」

「何の話だ!?!」

グリーが謎の呪詛を唱えながら、銃口をこめかみに押し付けてくる。痛い痛い痛い!!! 絶対跡残るぞこれ!!!

嫉妬だろうけど、少し話をしただけでここまでやんな!!!

「……つたく、お前のシスコ……妹思いも重症だな」

「失礼だねハディくん! 僕はシスコなんかじゃないよ!!!」

言った!?!

俺が今まで言わないように気をつけてた言葉をあっさり言いやがった!?!

「つて、え……?」

「待ってくれ、なんでそんな不思議そうな顔をするんだい?」

「いやだって、お前がシスコじゃないとか、ありえないだろ。」

グリーといえばシスコ、シスコといえばグリーだ」

「そこまで言うのかい!？」

なんかグリーが心外って顔をしてるけど、俺の中ではほとんど常識だぞ、これ。

「全く……いいかい、ハデイくん？」

確かに僕はメリスを世界で一番大切な人だと思っているよ」

「はい、確定」

「早いよ!!」

……だけど、それはあくまでも兄としての思いなんだ。僕はメリスに幸せになつて欲しいんだよ!」

「へえ、じゃあメリスが婚約者とか連れてきたらどうするんだ?」

「もちろん撃ち殺……祝福するよ」

「今撃ち殺すつて言いかけたよな!？」

ダメだこいつ、目が本気だった。

「そういうわけで、僕はただの妹思いの兄であつて、シスコンなんて変態ではないんだ。分かったかい?」

「ああ、分かった」

お前がまごうことなきシスコンだつてことが。

「さて、それじゃ僕も適当に歩いてくるよ。

この町の地理も知っておきたいしね」

「んじゃ、俺もぶらぶらしてくるかな」

「もう一度言っておくけど、路地裏には入らないようにね?」

君なら心配はいらないだろうけど、念のためだよ」

「分かつてるつて」

「一応こうやって俺の心配もしてくれるし、普段はいい奴なんだけどな……。」

「……待てよ。ハデイくんがやられてしまえば、僕とメリスが二人きりに……。」

「そういう所がなければいいのになー!」

それだけ言って、俺は宿屋から出ていった。

「武器屋、防具屋、雑貨屋はもちろん、土産屋、食料品店、骨董品屋に美術展、なんでもあるな、この町」

表通りを一通り歩くと、様々な種類の店が立ち並んでいた。

チヨコレート町はお菓子の店ばかりだったけど、この町は商人の町だけあって、店の種類がめちゃくちゃ多い。

……ふと気づくと、周りにあまり人がいなくなっていた。いつの間にか郊外の方へ来てしまったみたいだ。

そろそろ宿屋に戻ろうと、来た道へ歩き出した、その時。

ドガッ!!

……音が、聞こえた。
何かを……いや、

「人を、殴る音……！」

聞こえてきた方を見ると、そこは裏通りへの道だった。

……裏通りには行くなって言われたけど。

「そんなこと、言ってる場合じゃねえ！」

急いで路地裏へ入り、しばらく走ると、案の定、1人の少年が3人の不良らしき男に囲まれていた。

1人が少年の胸ぐらをつかみあげ、2人は少年の逃げ道を阻むように立っている。

とりあえずやめさせようと、声を出そうとした、その時。

「何やってんだ？てめえら」

俺の前に、制止の声をかける人物がいた。

その人物は、不良達の後ろ、俺から見て右手からゆっくりと、コツコツと足音を鳴らしながら、歩いてきた。

不良達は何事かと、後ろを振り返る。

その時、暗がりだった路地裏に光が差し、その人物の姿が照らし出された。

俺はその人物を見て、一瞬背筋が凍りついたような思いをした。

……不自然なほど黒い、髪と目。

太陽に照らされているにもかかわらず、それらは、漆黒の色を保っていた。

3人の不良のうち、1人が、つぶやくように声を出した。

「……ろ、路地裏の、悪魔……！？」

それを聞いたその青年は、切れだった漆黒の瞳で不良達を見て、口元をつり上げたのだった。

第38話 タルト町（後書き）

それでは次回予告です！

今回からまた1人に戻します。

「ハデイだ。

路地裏で出会った漆黒の青年。

……正直、かつあげしてる奴が何されても自業自得だとは思っただけど……！」

次回、冒険者ライフ！第39話『路地裏の悪魔』！

人助けは、人を助けるのが目的だから、人助けなんだ！」

第39話 路地裏の悪魔

「多人数で1人をボコるとか、そんなことしてて楽しいのか？」

『路地裏の悪魔』はそういつてまゆをひそめる。

しかし、それは不良達を非難しているというより、ただ単にバカにしているような言い方だった。

一方、不良達はというと、相手が『路地裏の悪魔』だと知って少しは驚いたものの、自分達の方が人数で勝っているからか、余裕の表情になっていた。

実際、そう思うのも不思議じゃない。光を全く反射していないかのような、漆黒の髪と目は正直不気味だけど、それを除けばただの青年にしか見えない。

不良の1人が下卑た笑みを浮かべる。

「楽しいに決まってるだろ。楽しいことをやって何が悪いんだ？」

そう言つて、3人の不良は笑い出す。

こいつら……！

怒りのままに不良達をにらみつけるが、3人は俺に気づいてもいない。

俺が歩き出そうとした、その時。『路地裏の悪魔』が口を開いた。

「楽しいことをやって何が悪い、ねえ。良いこと言うじゃねえか」

不良の言った言葉を繰り返し、不敵な笑みを浮かべる。

「だったら、今から俺がやることにも、文句なんて言うなよ？」

瞬間……『路地裏の悪魔』の姿がかき消えた。

……まるで、元々そこにはいなかったかのように。それに不良達が驚く……前に。

さっきまで少年の胸ぐらをつかんでいた不良が吹き飛び、壁に激突して気絶した。

「……………は……………？」

気づけば、不良達から8 m程離れた場所に立っていた『路地裏の悪魔』は、不良達の目の前に立っていた。手を開き、右腕をまっすぐ前に突き出した状態で。

……その瞬間、不良達は理解したのだろう。

今、仲間が吹き飛んだのは、『路地裏の悪魔』が……押したからだ。

「て、てめえっ!!」

「おいおい、何怒ってんだ？」

激昂する2人の不良に、『路地裏の悪魔』は嘲笑を向ける。

「さっきてめえらが言ったじゃねえか。『楽しいことをやって何が悪い?』ってよ。」

俺は、お前らみたいなクズをぶっ飛ばすのが楽しいんだ。

“楽しいことをやって何が悪い?”

「ふざけんなあっ!!」

不良の1人がナイフを取り出し、『路地裏の悪魔』に襲いかかる。しかし、またも『路地裏の悪魔』の姿がかき消え、ナイフは虚空を切るだけだった。

「なっ!?!」

驚いたのとほぼ同時に、不良の体が宙に浮く。後ろからえり首をつかまれた不良は、浮いた状態から地面へと叩きつけられた。

「がはっ……!!」

背中を強く打ちつけ、意識を失う。不良を片手で投げた『路地裏の悪魔』は、その不良が気絶したのを確認すると、残った1人へと目を向ける。

「ひいっ!」

漆黒の瞳で見据えられ、その不良は小さく悲鳴を上げる。

ここまできて、ようやく理解したんだろう。

目の前の青年が、自分達では手も足も出ないような、『化け物』だと。

「さて、後はてめえだけだな」

「ひっ……!」

その不良は気おされるままに後ずさるが、すぐに壁へとぶつかってしまっ。

逃げ場所を失い、へたへたとその場に座り込んでしまった。

「ま、待て! 助けてくれ! お、俺が悪かった!」

「……………」

「も、もうかつあげなんてしない!! 絶対しない!! だ、だから…」

…」

命乞いをする不良に、『路地裏の悪魔』は変わらず嘲笑を向けたままだ。

そして……『路地裏の悪魔』の体が、黒く光った。

「闇よ集え」

突き出された右手に、直径15cmぐらいの黒い球体が現れる。

……闇属性基礎魔法レベル1、シヤド。

それを理解した瞬間、俺は走り出していた。

「シヤ……」

「やめるー!!」

今にも魔法を発動しそうな、『路地裏の悪魔』の右腕をつかむ。

普通、予想外のことが起これば、魔法への集中を欠いてしまい、魔法は中断される。

しかし、俺が右腕をつかんでも、『路地裏の悪魔』は驚いた顔一つしなかった。

魔法も中断されず、右手には黒い球体が残ったままだ。

数秒、『路地裏の悪魔』とにらみ合いが続く。

と、『路地裏の悪魔』がめんどくさそうにため息をつき、黒い球体を霧散させた。

「なんだよお前。このタイミングで出てくるのか？」

「っ!」

俺に気づいてたのか。どおりで驚かないわけだ。

「もう、十分だろ。これ以上やる必要なんてない！」

「そうだな。でもやるぞ」

「何でだ!？」

『路地裏の悪魔』をにらみつけると、相手は不敵な笑みを返してきた。

「楽しいことをやって何が悪い？」

「っ!！」

瞬間、とてつもない寒気に襲われ、手を離してしまう。

今までも、戦いの中で何度か体験したことがある。

いや、今まで感じたものとは比較にならないくらい……とんでもない、殺気……!！」

「う、うおおおおおおおっ!！」

突然、へたりこんでいた不良がナイフを手に持ち、『路地裏の悪魔』に突き出してきた。

「危な……!！」

俺が言い切るよりも早く、ナイフは『路地裏の悪魔』に刺さる……はずだった。

『路地裏の悪魔』が、視線を俺に向けたまま、ナイフを素手でつかまなければ。

「なっ……!？」

奇襲に失敗した不良は、目を丸くしていた。

だが、これだけでは終わらなかった。

バギヤアアツ！！

『っ！！！？』

豪快な音と共に、ナイフの刃の部分が砕け散る。

不良の持ったナイフは、今や柄の部分しか残っていない。

何が起こったのか、理解するのに数秒かった。

『路地裏の悪魔』が、素手でナイフを握りつぶした、と。

「ひ、ひいいいいいいいつ！！！！ば、化け物っ！！！」

柄だけになったナイフを手から離し、不良は思い切り後ろへと走り出そうとした。

しかし、当然そこには変わらず壁があり、通れない。

次に俺が来た道へと走り去ろうとするが、その道には……。

「う、うわあああああっ！！！」

さっきまで俺の目の前にいたはずの『路地裏の悪魔』が、腕を組んで立っていた。

急いでまた別の道へと逃げようとするが、慌てていたせいか、足がもつれて転倒してしまう。

そうして動けなくなった不良に、『路地裏の悪魔』はゆっくりと近づいていく。

「く、来るな！！来るな、化け物！！！」

「化け物化け物って、そんなにほめんなよ。照れるだろ」

不良が悲痛な叫びを上げるが、『路地裏の悪魔』は歩みを止めない。

「た、頼む！！助け、助けてくれ！！俺が悪かった！！

も、もうかつあげなんてしない！！これからは、まっとうに生きる！！

だ、だから……！！」

「そのセリフ……」

『路地裏の悪魔』の体が、黒く光る。

「さつきも聞いたぜ？」

黒い球体が現れる……その前に。

俺は、もう一度『路地裏の悪魔』の右腕をつかんだ。

「やめろって、さつきも言っただろ！！」

「……………」

『路地裏の悪魔』は大きいため息をつき、めんどくさそうな顔を俺に向けてきた。

「おいおい、まだこいつをかばうのかよ？」

さつきので、こいつが反省してないってことぐらい、分かっただろ？」

「……………別に、これ以上そいつをかばう気なんてねえよ。

明らかに自業自得だし、俺はそこまでお人好しじゃない」

「じゃあ、これは何のつもりだ？」

ぐい、と俺につかまれた右腕を突き出してくる。
俺はつかむ力を緩めず、『路地裏の悪魔』をにらみつけた。

「もつと、周りを見る!!」

「あ?」

俺がその方向を向き、『路地裏の悪魔』にもそれを促す。
そこには、座り込み、おびえた表情で俺達を見ている、1人の少年
がいた。

……そう、この不良達にかつあげをされていた少年だ。

「この子が何におびえてるのか、分からないのか?」

最初は、間違いなく不良達におびえていたんだろう。
でも、今は違う。

「この子は……不良達に一方的に暴力を加える、お前におびえてる
んだよ!!」

初めは、助けってくれたんだと、喜んでいたと思う。
だけど、『路地裏の悪魔』は不良達に、必要以上に攻撃をした。
それを見て、おびえるなという方が無理がある。

「分かっただろ?もう、これ以上は……!!」

「それがどうかしたのか?」

「っ!?!」

『路地裏の悪魔』は特に驚きもせず、俺へ顔を戻す。

「何で俺がわざわざ、そんなことに気をつかわなきゃいけないんだ？」

「何で、って……。お前は、この子を助けようとしたんだろ！？」
「だったら……」

「おいおい、何勘違いしてるんだ？」

「お前、さっき俺が言ったこと聞いてなかったのか？」

「え……？」

思わず固まる俺に、『路地裏の悪魔』は不敵な笑みを向けた。

「俺はかつあげをする連中が気に入らなかつたからぶつ飛ばしただけだぜ？」

別にそいつを助けたくてやったわけじゃねえぞ」

「っ！！」

……確かに、そう言っていた。

“俺はお前らみたいなクズをぶつ飛ばすのが楽しいんだ”、“楽しいことをやって何が悪い？”と。

本当に、そんな理由で……！！

「だが、まあ……」

『路地裏の悪魔』は小さく笑みを浮かべると、『集中』を開始した。

「やめ……！！」

「スリープ」

ポウッ！と紫色の霧が不良をおおい、数秒後、霧が晴れた後には、眠りに落ちた不良が残っていた。

「これならいいだろ？」

「お前、なんで……」

俺の説得は失敗したはず。なのに……。

疑問に思っていると、『路地裏の悪魔』は不敵な笑みを浮かべた。

「『化け物』である俺に意見してきた、その勇気に免じてやる」

「……」

『化け物』。

確かにさっき、不良は『路地裏の悪魔』にそう言っていた。

だけど……普通、自分でそんなことを言うか？

別にふてくされてるような様子でもなく、まるで、自分が『化け物』だと言われることを、完全に受け入れているようだった。

「それじゃ、こいつらの後始末は俺がやっつくからよ。お前はそのガキを送ってやれよ」

「後始末……」

「なんだ、不安ならお前も残るか？その場合、そのガキは1人で帰ることになるぜ？」

「う……」

ちらつと少年を見ると、やっぱりまだおびえた様子だった。

怖がらせないよう、できるだけ優しく話しかける。

「なあ、家はどこにあるんだ？」

「え……町の、真ん中の方……宿屋の、近く……」

「……となると、ここからだいぶ距離があるな」

少年の様子からして、それだけの距離を1人で帰らせるってのは、

少し心配だ。

……うん。やっぱり、送っていくべきだな。

「それじゃ……任せて、いいんだな？」

「おー」

『路地裏の悪魔』は先程までとは違い、気の抜けた声を返してくる。

……まあ、これ以上暴力を加えたりなんて、しないよな。きつと。

「それじゃ、ついてきてくれ。家まで送るから」

「あ……はい……」

少年に声をかけ、路地裏から出ていく。

しかし、途中で少年は立ち止まり、『路地裏の悪魔』へ顔を向けた。

「あ、あのー！」

「あん？」

「……あ、ありがとう、ごさいました！」

突然お礼を言われ、『路地裏の悪魔』の顔が、一瞬だけ固まる。

「……礼なんて言う必要ねえぞ。」

俺は自分がやりたいことをやっただけだ」

「それでも！俺は、助かりました、から……」

数秒、その場を沈黙が支配する。

と、『路地裏の悪魔』が楽しげな笑みを浮かべた。

「おう。もうこんな所に来るんじゃないねえぞ」

「あ……はいー！」

青年の言葉を受けて、少年は笑みを返す。
その表情には、もうおびえた様子はなかった。

「うれしそうだな。助ける気はなかったなんて言ってたくせに」
「お礼を言われたら嬉しいに決まってるだろ」

からかうつもりで言ったんだが、呆れた様子で返される。
別に照れてるとかじゃなくて、この人にとっては、これが普通なように感じられた。

……でも、1つ確信できた。
この人は、『悪魔』でも『化け物』でもない。
れっきとした、『人間』だって。

「行こうか」
「あ、はい！」

少年は最後にもう一度、青年に頭を下げ、俺と共に、路地裏から出ていった。

「さて、と」

2人が去った後、『路地裏の悪魔』はおもむろに通信機を取り出した。

番号を押し、それを耳に当てる。

『はい、こちらスイーツ王国軍タルト町支部……』

「ターゲット大佐につないでくれ」

『失礼ですが、どちら様ですか？』

「カオス、そう言えば分かる」

『少々お待ち下さい』

数秒の沈黙の後、通信機の声が中年の男のものに変わる。

『はい、こちらターゲット。カオスくんかい？』

「よお、大佐。用件は分かるな？」

『……またかい。場所は？』

「郊外の路地裏」

『分かった、この時間なら近くに警邏けいろうの者がいるはずだ。すぐに向かわせるよ』

「ん、頼んだ。いつも通り、少しお灸をすえてやってくれ」

青年は意識のない3人の不良を横目で見ながら言い、通信を切る。

「さて、と、待ってる間暇なんだよな……」

壁にもたれかかり、大きくあくびをする。
ふと、彼はさっきの冒険者を思い出した。

「鉄の腕輪をしてたからD級^{クラス}。」

だが、見た感じ実力はCの下の中ってところか」

そこまで言って、ある考えにたどりつき、小さくつぶやく。

「……そういう手もあるな。」

こっちの方が面白そうだが……ま、今の所、そこまでやる理由はない、か」

第39話 路地裏の悪魔（後書き）

では、次回予告です！

「メリスだよ！……今回、私と兄さん出番なかったね。
気を取り直して！」

次回、私達はタルト町の中でも特に活気のある場所、出店でにぎわっている中央広場へ向かうの！

そこでいろいろと見て回るんだけど、ある店の前で、ハデイが驚いた顔で立ち止まって……。

次回、冒険者ライフ！第40話『伝説の冒険者』！！

この人が、あの……！？」

第40話 伝説の冒険者

「お、本当に賑わってるな」

少年を家に送り届けた後、俺は宿屋でメリス、グリーと合流し、出店で賑わっているタルト町の中央広場に来ていた。

出店だけあって種類はいろいろだけど、軽食やお菓子、手作りのアクセサリーとかが多いな。

後は似顔絵を書いてくれるのとか、植物を売ってたりとか、占いまである。

本当にいろいろな店が……。

「ストップメリス!!」

「ふえ!?!」

走り出そうとしたメリスのえり首をつかみ、強制的に動きを止める。

「離してハデイ!!! お菓子が! 焼そばが! フランクフルトが!!! 私を待ってるの!!!」

「まだ金を渡してねえだろうが!!!」

「あ、そっか」

……今朝もこんなことを言った気がする。

本当に学ばないな、こいつ。

軽く頭痛を覚えつつ、メリスに適当な金を渡す。

「ほい、10G^{ゴールド}」

「待ってハデイ!?!」

「冗談だ。ほい、20G^{ゴールド}」

「全然変わってない!？」

「おー、最近メリスもツツコミがうまくなってきたな。」

「うれしくない!！」

「心の声にはツツコむな!！」

ちくしょう、いつか見返してやる。

「つてかメリス、ここは3人で回るんだぞ」

「え? そうなの?」

「武器を捜すのが第一の目的だからね。2人はあんまり詳しくないだろう?」

「メリスは絶対だまされそうだしな」

「ハデイひどい!！」

ただでさえ魔法使いの装備って、魔力がどうこうとかで見極めるのが難しいからな。

俺は魔法に関してからつきだから絶対無理。

メリスは魔法の知識はあるし、魔法使いだから魔力とかも分かるだろうけど、実物をまともに見たことないだろうから、やっぱり心配だ。

「グリーは魔法の杖とか見たことあるのか?」

「……普通、2年も冒険者やってれば、見たことぐらいあるはずなんだけどね。」

「ついこの前も見ただじゃないか」

「え、いつ?」

「チヨコレート町だよ。『星の賢者』が持ってただろう?」

「……そういえば」

ランディアさんが持ってたのは、確か、茶色い星型の宝石が先端についた、長さ1.5mぐらいある杖だったな。

……気のせいかもしれないけど、先端の星が発光してた気がする。

「まあ、あのレベルは高望みしすぎだけど、できるだけ良い装備を捜そう」

「やっぱり、すごい杖なんだな」

「そりゃそうだよ！イアさんだもん！！」

んでこいつは、相変わらずの物言いだな。
ファンかなんかか。

「あ、あれ見てハデイ！」

「ん？」

メリスの指さす方を見ると……なんだあれ。

きれいな色の飾りがつけられた華やかな出店が多い中、その店は真っ黒に塗られ、黒いのれんがかけられている。唯一、のれんに書かれた『**適当屋**』という文字だけが、黒じゃなくて白だった。

……『**適当屋**』ってなんだ、『**適当屋**』って。

「ほら見て！剣売ってる！！」

「何いつ！？」

剣！？何で剣が！？武器を売ってるってことか！？
いや、それだったら武器屋だよな！？

「あ、見て！飲み物も売ってる！」

「『真つ黒ドリンク』って書いてあるね」

「……飲みたくないな」

はつきり言つて、墨汁にしか見えない。

なんだ、なんでここの店主はそんなに黒が好きなんだ。

「ん、客か？」

と、店主らしき人が奥から出てきた。

……なんか、この声聞いたことが……いや、ついさっき聞いたよう
な……。

「あ」

「……あああああああつ！！！！？」

その青年を見た瞬間、俺は驚きのあまり大声を出してしまった。

「よー、また会つたな」

「な、なんでお前がここに！？え、まさかここお前の店！？」

目つきは悪いが整った顔立ちに、めんどくさそうな表情。

そして何より、漆黒という単語がピッタリくる不自然なほど黒い髪
と目。

……そう、その青年とは、『路地裏の悪魔』だった。

「ハデイ、知り合い？」

「……………」

メリスは全く気にせず、のんきな質問を投げかけてきたが、グリー
は勘付いたのか、『路地裏の悪魔』に警戒の目を向けていた。

「そついや、自己紹介もまだだったな」
「え、あ、ああ」

『路地裏の悪魔』は不敵な笑みを浮かべ、自分の名前を名乗った。

「俺はカオス。カオス・スフィアだ」

「……………え……………?」

それは、冒険者なら、一度は聞いたことがある名前だった。中には異名しか聞いたことがない人もいるかもしれないが、俺も、そしてグリーも、名前の方をちゃんと知っていた。カオス・スフィア……………その異名は……………。

「『絶望』……………!?!」

グリーが思わず、といった様子で口に出す。

……………『絶望』カオス・スフィア。

14歳で冒険者の資格を手に入れ、それからわずか半年でA級クラスにまで上り詰めた、『伝説の冒険者』……………!!

「え……………マ、マジで?本当に、あんたが、あの……………!?!」

「そうだけど?……………ああ、そついやお前らも冒険者だろ?」

んじゃ、冒険者つながりで何か買ってつてくれ」

狼狽する俺達の様子も特に気にせず、カオスは不敵な笑みを浮かべるのだった。

「んで、お前らは?」

「あ、ああ……………俺はハディ・トレイト。D級クラス冒険者だ」

「わ、私メリス・テーナスです!」

『伝説の冒険者』と知ったからか、メリスは少し緊張してるみたいだ。

「……僕はグルード・テーナス。1つ、聞いてもいいかい？」

と、グリーは自己紹介に続いて質問を投げかけた。

その目は、また警戒の目に戻っていた。

「最近、この町で『路地裏の悪魔』って呼ばれる人が、不良達に暴行を加えてるらしいんだけど……」

「ああ、それ俺」

早っ！！認めるの早っ！！

「……やけにあっさり認めるね」

「本当のことだしな。それに質問とか言っついて、お前ほとんど確信してただろ。否定する意味がねえよ」

そう言っつてカオスはまた不敵に笑う。

「……正直、少しがっかりだよ。」

『伝説の冒険者』が、路地裏で不良達に暴力をふるってるなんてね」

グリーはそう言っつて落胆した様子を見せる。

まあ確かに、あんまり『伝説の冒険者』っぽくはないよな。

「批判したいなら好きにしな。俺は自分がやりたいことをやってるだけだからよ。」

今回はなんとなくかつあげが気に入らなかったから、ぶっ飛ばしただけだ」

と、カオスは全く気にしてない様子だ。

「なんか、そこだけ聞くとただの不良みたいだな」

「否定はしねえ」

「しろよそこは!?!」

…… 本当に『伝説の冒険者』かこの人……？

まあ、噂だけじゃ人は計れないってことか？

「そうだな、じゃあ一言だけ反論させてもらおうか」

「反論？」

「おう、グルードだっけか？」

「……何だい？」

カオスの不敵な笑みを受けて、グリーは緊張した面持ちで構える。

「お前は俺がやったことを、絶対に間違ってると言い切れるか？」

「っ!?!」

グリーは言葉を詰まらせる。

……カオスがやったことは、正しいとは言えないと思う。自業自得とはいえ、明らかにやり過ぎだったし、助けられた人にも恐怖を与えていた。

……だけど、絶対に間違ってるかって言われたら、それは分からない。

少なくとも、俺はそんなことは言えない。なぜなら、実際に人が助けられているからだ。

それに、さつき路地裏でカオスが来なかったら、俺はカオスとそんなに変わらないことをしたと思う。俺が何を言った所である不良達がかつあげをやめるとは思えなかったから、たぶん、殴ってでも止めていただろう。

グリーもカオスのことを非難しているが、同じ現場に居合わせたら、多少やり方は違えど、不良達を無理やりにも止めていたと思う。だからだろうか、グリーはカオスに言い返せずにいるみたいだ。

「ま、まあ、そんなに警戒すんなってグリー」

「ハデイくん……」

「別に、ちよつとやり過ぎってだけで、人を殺したわけじゃないんだからよ」

なんだか嫌な沈黙がこの場を支配していたため、なんとか雰囲気を変えようと、話を切り出す。

と、そこにカオスが乗ってきた。

「当たり前だろ。俺は死が嫌いなんだ」

「え？」

その言葉に、思わず声を出す。

死が嫌い……そういえば、やられた不良達はそんなに大したケガはしてないって、グリーも言ってたな。

なんだ、やっぱりそんなに警戒する必要な……

「例え」お願いだから殺して下さい」って言われても絶対に殺さねえし、『頼むから死なせてくれ』って言われても俺の前では死なせねえ」

「なんだその例え！？極端にも程があるだろ！！」

「そうだな、流石の俺も4回しか言われたことねえ」

「言われたことあるのか！？どんな状況で言われたんだ一体！？」
「なんだ、聞きたいのか？」

と、カオスは不敵な笑みを浮かべて話し出した。

「1回目は5年前会った、人生に絶望したとかいう自殺志願者を止めたと言われて、2回目はその2か月後に、不治の病を苦しみに自殺しようとしたやつを無理やり助けたと言われた。んで3回目は2年前に俺の前で人殺そうとしたクズを“5分の4殺し”にしたと言われて、4回目は去年、特に理由もなく10人殺した殺人鬼に、“自分の手足がバラバラになる幻覚”を見せたら言われた」

……なんか、急にこの人が極悪人に見えてきた。

つてか、なんでそんなに詳しく覚えてるんだ……？

「……話を变えていいか？」

「好きにしる。」

「つか、雑談はいいけどよ、お前ら買い物に来たんじゃねえの？」

「あ」

しまった、いろいろありすぎて忘れてた。

「えーと、ここは武器を売ってるのか？」

「いや？俺が趣味で適当に作った物とか集めた物を適当に売ってる」

「……なるほど、それで『適当屋』か」

確かに、剣、飲み物、飾り、お守り、植物の種……品物に一貫性がねえ。

「……質問をいいかい？」

と、グリーがまたもカオスに質問をする。

「どーぞ」

「君は冒険者じゃないのか？どうして出店なんてやってるんだい？」

「あ、確かに」

「それに作った物はともかく、集めた物売るんなら、ギルドの方が高値で売れるはずだ。この町にはギルドがあるんだから、利用しない手はないだろう？」

グリーの言い分はもつともだ。

何か理由でもあるのか……？

「あー、そうだな……」

と、カオスが質問に答え始める。

やっぱり、何か理由が……。

「説明面倒だから、省略でいいや」

「良くねえよ!!」

「んじゃ、“なんとなく”とか？」

「『とか？』ってなんだ』とか？』って!!」

「おー、ナイスツツコミ」

「わざとかこの野郎!!」

くっ……流石『伝説の冒険者』……。

話をするだけでこつも疲れるとは……！

「ハデイ、それは関係ないと思うよ？」

「ごめんメリス、お前にツツコんでる余裕ない」

「えー！？私なにかツツコまれる所あつた!？」

いや、今メリスに言われた所、俺声に出してないし。

「んじゃ、一応説明しとくか。

耳たぶかつぽじってよく聞け」

「……耳たぶに穴あけるっての？」

『耳』でいいだろ、『たぶ』はいらない。

「まず、俺は冒険者でもあるけど、本業は商人だ」

「……はあ!？」

商人!？あの『絶望』が!？

「そもそも俺が冒険者になったのは、冒険者じゃないと行けない所
に行つて、そこで冒険者相手に商売をやるためだ。

んで、せつかくだから極めてみようと思つて、A級^{クラス}まで取つてみ
た。以上」

「……………」

えー……そんな適当な理由……？

「なんていうか……ある意味本当に噂通りだね……………」

「グリー、噂通りって？」

「『絶望』カオス・スフィア。その異名通り、この人が有名になつ
た時、多くの人^が絶望にさいなまれたつて話だよ。

『絶望』に倒された悪人達はもちろん、努力してもなかなか報わ
れない人達もね」

「あー……14歳でA級^{クラス}だもんな。それもこんな適当な理由で」

絶望するのも分からなくもないな……。

「ま、なんでもいいが、話を戻していいか？」

「話？」

「……お前ら買い物に来たんじゃねえのか？」

「あ」

また話が脱線してたな。

「俺達は一応、武器を捜してるんだけど……」

置いてある商品の中から武器を捜してみる。

……血のりで流れるような返り血が描かれた剣。

……柄にドクロがついた剣。

……柄に苦しみに悶える人の顔が描かれた剣。

「……なんだ、これ」

一番マシな柄にドクロがついた剣を持って、思わずつぶやく。

「それか？それは剣っていつてな。主に鉄などの金属を鍛え上げて作る刃物だ。

使用用途は武器が多いが、他にも儀式とかで使われたり、宝剣みたいに飾りに使われるものもあるな」

「いや、剣の定義なんて聞いてねえけどな！？」

カオスは不敵な笑みを浮かべている。

正直、バカにされてる気しかない。

「つーか、その辺は遊び半分で作ったから、あんまり実戦向きじゃねえぞ」

「悪趣味だなお前!!」

遊び半分のくせに、絵がめちゃくちゃリアルだし!!

「武器……ねえ」

ぼそつとカオスが小さくつぶやいた。

次いで、俺とグリーの腰の辺りを見る。

「んじゃ、お前らの武器を鍛え直してやるつか？」

「……え？」

鍛え直す……？

「やっぱり使いなれた物の方がいいだろ。お前の剣も、グルードの銃も」

「まあ、確かにそうだけど……」

というか、よくグリーが銃使っつて分かったな。グリーはガンベルトに銃をつけてるけど、マントで隠してるから見えないのに。

……でも、前にプラムさんも見破ってたし、A級クラスやB級クラスの冒険者なら当然なのか？

「でも、鍛えるって……」

「鍛治も俺の趣味の1つだ。預けてくれるなら、明日までに鍛えてやるぜ？」

「……その剣とか見ると不安になるんだけど」

「嫌なら断ればいいだろ」
「うーん……」

どうしたものか……。

でも、この人はあくまで『冒険者』として有名であって、『商人』とか『鍛冶師』としての噂ってあんまり聞いたことないんだよな。

「……僕は、ハディくん任せよ」

「え？ てつきり反対してくると思ったのに」
「その剣」

グリーは商品として置かれている、3本の剣を見る。

「悪趣味だけど、しつかりした作りだ。実戦向きじゃないとか言ってたけど、剣としての完成度はかなり高いよ。」

それを本当に自分で作ったのなら、鍛冶師としての技量は相当なものだ」

「へえ、良い眼してるな。お前」

グリーの言葉に、カオスは不敵に、それでいてうれしそうに笑う。

……グリーがそういうんなら、間違いないだろうな。

「預けるよ。お前のこと善人だとはちょっと思えないけど、悪人でもなさそうだからな。」

信用はできると思う」

「……それじゃ、僕はハディくんの勳を信じようかな」

そういつて、俺とグリーはそれぞれ自分の武器をカオスに渡す。

「おう、任せな。そんで、そっちの女は？」

「あ、メリスは武器持ってないんだ」

「んじゃ、1から作ってやるうか。材料は持ってるからな」

「あ、お願いします!!」

ペコリ、とメリスは頭を下げる。

「敬語とかいらねーよ。俺の方が年下だし」

「あ、そっか」

3年前に14歳だから、今は17か18つてところか。

メリスが19だから、とりあえず年下なのは間違いな……、

「待て、なんでお前メリスの歳知ってるんだ？」

「知らねえけど、たぶん19だろ？肌の具合を見た感じでは」

「当たってる!？」

なんか、なんでもありだなこの人。

「で、お前の得意魔法は？」

「え？炎と水だけど……」

「了解、んじゃその2つに特化した杖にするな」

「……?」

メリスはそれを聞いて首を傾げている。

俺も分からないんだけど……特化って？

「魔法の武器はそれぞれに属性を持つんだよ。」

杖の場合、術者が使う魔法と同じ属性の方が効果が強くなるんだ」

「あ、そうなんだ」

「それ知らずに武器捜してたのかよ。」

ひよつとして、杖の効果も知らないんじゃないか？

「杖の効果？持っていると魔力が上がるんじゃないの？」

「んなわけあるか。まあそういう杖もあるけど、普通は違つぞ」
「違つもの！？」

驚くメリス……つて、俺も初耳なんだけど。

「杖つてのは、魔法を使う時の“触媒”なんだ。

普通、魔法のエネルギー変換効率はせいぜい20〜30%だ。

ま、術者の技量にもよるけどな」

「……それつて」

「『魔力』が『魔法』になる過程で、7、8割無駄になつてる」

「マジで！？」

そんなに無駄になつてるのか！？

「魔法使いの使う補助具……主に杖だけど、これはその効率を引き上げるための道具なんだよ。

最高級の物なら、60%以上まで引き上げることも可能らしいね」

「そういつこつた。効率が上がるから、魔力の節約にもなるしな」

「あ、魔力の節約になるなら、お前にはもつてこいだな。メリス」

と、メリスの方を見ると……、

「……………」

頭から煙を出してショートしていた。

「……………」つまり、杖を持つてると魔法が使いやすくなるんだ」

「な、なるほど……」

使う奴がこんな調子で大丈夫か……？
まあ、別に原理なんて知らなくてもいいか。

「そんじゃ、明日の昼頃また来いよ。それまでに作っとくから」

「明日の昼って……間に合うのか？」

「余裕余裕」

そういつてカオスはあくびをする。

……昼寝をしてて間に合わなかった、とか言わないよな？

「そんじゃ、早速取りかかるか」

「え、今から？店は……」

「安心しろ。なぜか分からねえが、ここ1週間で10人しか客来てないんだ」

「10人……って」

「おう、お前ら入れて10人だ」

「少なっ！？」

「なんでだろうな」

棒読みつぽい声でそう言っつて、カオスは店の裏へと歩いて行った。

……なんでって。

「店の色……じゃ？」

こんな不気味な店、物好きしか来ないだろ……。
いや、それだと俺達も物好きってことになるか。

「それじゃ、一応武器のあてもできたことだし、ここからは自由行動にしようか」

「ハデイ、お金ー!」
「はいはい」

それから俺達は日が暮れるまで、中央広場で出店を見て回ったのだ
った……。

くサイドアウトく

その日の夕方、深い森の奥にカオスは立っていた。

「……はあ、まーたミスった。俺としたことが、こんな勘違いをするなんてな。

念のために調べ直して正解だった」

大きくため息をつき、漆黒の瞳で森の奥を睨みつける。
その目には、ほんのわずかに、怒りの色が現れていた。

「となると、出てくるのを待つわけにもいかねえな。

使い魔にやらせるにも荷が重い……そもそも、後のことを考える

と、俺だけでやらない方がいいかもな……」

後半は小さく呟き、そして、口元に笑みを浮かべる。

「……やっぱり、こっちの方が面白そうだ。ちょっとばかし、
“利
用”させてもらおうか」

第40話 伝説の冒険者（後書き）

では、次回予告です！

「グリーだよ。『絶望』は、僕が思っていたのと違う感じの人だったね。」

……まあ、期待はずれだとは思わないけど、ね。

次回、カオスくんはハデイくんをはじめ、僕達3人に意図的な接触をしてくる。

一体、何が目的なんだろう……？

次回、冒険者ライフ！第41話『貸し』。

タダより高いものはない。

うまい話には、何か裏があると疑うべきだよ」

第41話 貸し

次の日の朝、俺はいつものように朝6時に起き、宿屋を出た。いつもならまず200回素振りをしてからランニングをするんだけど、昨日剣を預けてしまったから、今日はランニングだけだ。

走りながら、俺はあることを思い出していた。

それは、昨日見た戦いの情景。路地裏でカオスが見せた、瞬間移動。

……普通に考えたら、『空間転移』テレポートだろう。

あれでも『伝説の冒険者』なんだ。『空間転移』テレポートぐらい習得してても、何の不思議もない。

でも……それはありえない。

あの時カオスは、『集中』や『詠唱』はもちろん、『呪文』すら口にしていなかった。

『詠唱』は普通に省略できるし、『集中』も道具を使ったりすれば省略可能だ。だけど、『呪文』を省略して魔法を発動するなんて、ありえないはずだ。

……だったら、あれは一体どうやって……。

考えながらある角を曲がった所で、その声は聞こえてきた。

「よー」

聞き覚えのある声に、俺は走るのをやめて声の主を捜す。

と、そいつは人気のない公園の中にいた。……眠そうにあくびをしながら。

「……カオス」

「こんな朝早くからランニングか。偉い偉い」

からかうような口調でカオスは言う。

「何か用か？」

「用があるから待ってたんだろ。じゃなかったらまだ寝てる」

「……待ってた？ちよつと待て、なんで俺がここを通るって分かったんだ？」

「勘」

言い切りやがった！！

「なんだよその顔、勘つてのは大事だぜ？」

俺はどっちかという理論派だけだよ、面倒な時は大抵勘に頼るぞ。ほとんど当たるしな」

「……それは理論派っていうのか？」

「あー？なら適当な理論でもこじつけてやろうか？」

こじつけて自分で言った……。

俺が呆れていると、カオスは口を開いて話し出した。

「まず昨日路地裏でお前と会った時、筋肉の具合を見た感じでおそらくお前は早朝、時間にして午前6時から6時半頃に修業をしていると予測した。さらに使われた筋肉の部位および種類からお前がしている修業はおそらく剣を用いた素振りとランニングだ。次にこの町でランニングができそうなコースを地図で調べ、お前の朝の修業程度になりそうなコースを絞り込んだ結果、この公園の前を通るコースが一番多かった。だからここで待ってたんだ、以上」

「ごめん、全然分らない」

「まー今のは後付けなんだけどな」

「今の後付けなのか！？」

めちやくちや筋が通ってた気がしたんだけど……いや、長々と説明

されたからつい納得しちゃったただけか？

「……………で、用ってなんだよ？」

「おー、まあ大した用じゃないんだけどな。ちよっと手合わせしようぜ」

……………はい？

「……………手合わせ？」

「おう」

「……………なんでまた？」

「ちよっとお前の実力を見たくなつたから。ま、嫌なら無理にとは言わねえけどよ」

一拍置いて、カオスは不敵な笑みを浮かべた。

「お前は興味ねえか？『伝説の冒険者』の実力」

「っ！！」

ドクン、と自分の心臓が大きく脈打つのが分かった。

……………より強い敵と戦いたがるってのは、戦いに身を置く者の性さがでもいうべきものだろう。

しかも、今回はただの『手合わせ』だ。負けても死んだり、ひどいケガをしたりする恐れもない。

はっきり言って、俺がこれを断る理由は皆無だ。

……………だけど、

「何でだ？」

「あん？」

「何で、お前は俺と手合わせがしたいんだ？“自分より弱い相手”

と手合わせしたがる理由なんて……」

「……そうだな。月並みな台詞でも言わせてもらおうか？」

俺には俺の理由がある」

「……………」

何が狙いなのか……皆目見当もつかないけど。

「分かった。勝負だ、カオス！」

「手合わせな。間違えんなよ」

カオスは不敵に笑みを浮かべる。そして、その体が黒く光った。

「レポート空間転移」

「っ！！」

次の瞬間、俺達はタルト町の外にいた。

街道からも外れた草原の上、ここなら邪魔は入らないだろうな。

「町中で剣振り回すのは流石にまずいからな」

「剣……あ、そういえば俺、剣……」

「ほらよ、代わりの剣」

「……用意が良いな」

カオスが投げ渡してきたのは、俺がカオスに預けたのと同じ、安物のロングソードだ。

「ま、お前の剣はもう完成してるけどよ。せつかくだから後の2人と一緒に渡すな」

「後でのお楽しみか、まあいいけど」

剣を引き抜き、カオスと5m程距離を取って対峙する。

「で、お前の得物は？……まさか、素手？」

「素手じゃお前もやりにくいだよ」

そう言つてカオスはゆっくりと右手を前に出す。

次の瞬間、一瞬だけカオスの体が黒く光った。

「闇よその姿を具現せよ　ダークネスソード」

「っ！！」

魔法が発動し、カオスの右手に黒い闇の剣が現れる。

……今のは、プラムさんも使ってた……。

「そんじゃ始めるか。がんばって動けよ？」

「……どう……」

どういう意味だ？そう聞こうとして、俺の口の動きは止まった。……

……いや、止められた。

口だけじゃない。気づけば、俺の体は指一本動かなくなっていた。

次いで、全身からものすごい勢いで冷や汗が流れ出て、体がカタカタと震え始める。

「っ……！！」

まともに剣を構えることすらできないまま、俺は相手へ目を向ける。

……殺気。そう、殺気だ。

昨日、路地裏で感じたものがかわいく思えるぐらいの、とんでもない殺気。

そんな殺気を、カオスは俺をにらみつけることすらなく、放っ

た。

いや、正確には殺気ですらないか。カオスが俺を“殺す気”だった
ら、間違いなくもう俺は死んでる。

これは……ただの『威圧』だ。

「ぐっ……うっうっうっうっうっうっうっ……!!」

全身に力を込めて、必死に体を動かそうとする。

「……ああああああああああああ!!」

叫びと共に剣を振るい、切っ先をカオスへと向ける。

やっと……やっと、“剣を構える”ことができた……!!

「へえ、やるじゃねえか」

そんな俺を見て、カオスは嬉しそうな声を上げる。

と、同時に放たれていた『威圧』が消える。

「一応これで“合格”……俺の目的は果たされたんだが」

「……?何の話だ?」

「こつちの話。ま、せつかくだから少し実力も見とくか」

瞬間、カオスは俺の目の前にいた。

「……え?」

「ほら、ちゃんと対応しろよー」

「っ!!」

襲いかかってくる黒い刃を見て我に返り、とっさに後ろに跳んでぎ

りぎりかわす。

昨日と同じだ……魔法も使わないで瞬間移動を……！！

「はあああああつ！！」

剣を振り切った状態のカオスに、手加減なんて一切考えずに斬りかかる。

しかし、力いっぱい振り下ろした刃は、カオスの黒い剣によって簡単にはばまれる。

瞬間、カオスの姿が消えた。

「っ!?!」

消えたカオスの姿を捜すより前に、俺は背筋に寒いものを覚え、反射的にその場にしゃがみこんだ。

と、しゃがんだ俺のすぐ上を黒い剣が通っていく。

前転して背後に移動したカオスから距離を取り、すぐに立ち上がった剣を構える。

「おー、良い反応だな」

「つて、殺す気かお前!!」

「んなわけあるか」

「ウソつけ今思いつきり剣振つただろ!!」

「あーうん、ほら、お前ならよければって思ったんだ」

「なんだその適当な言い方!?!」

どこまで本気なのか全然分からないのが怖い……！！

「んじゃ、普通に斬り合ってみるか」

カオスはゆっくりと闇の剣を構え、そのまま突進してきた。俺も剣を構え、向かってくる刃に対応する。

少なくとも俺にとっては、速く、重い斬撃。でも、カオスは明らかに手を抜いている。

……いいさ。だったら、その油断につけこんでやる！

数回斬り合った後、俺が一旦距離を取ると、カオスはさつきとほぼ同じ速度で追いかけてきた。振り下ろしてくる刃の速度も、計ったかのようにさつきと同じだ。

「悪いけど……その速度には、もう慣れた!!」

カオスが振り下ろす刃に合わせて、剣を振り上げる。

ここまで同じなら、たぶん斬撃の重さも同じ。今度は勝ってやる!と、意気込んだのも束の間……2つの刃が重なる寸前、カオスの姿がかき消えた。

「しまっ……!!」

「……ま、こんなもんか」

俺の剣が空振ったのと、カオスの剣が俺の首に突き付けられたのは、ほぼ同時だった。

「くっ……」

敗北を悟り、俺は剣を手から離して両手を上げる。

「流石……『伝説の冒険者』だな。手も足も出なかった」

「一応、お前も予想以上だったぜ?そこそこ楽しめた」

「……汗すらかいてないくせによく言うよ」

「んー、ま、本気は全然出してないけどな」

「……やっぱりか」

剣を打ち合った時も涼しい顔してたもんな……どんな筋力してるんだこいつ……。

「あ、でも、これはちょっとだけ本気だったぞ」

「え？」

次の瞬間、カオスの姿が視界から消えた。

慌てて周囲へ目を向けると、カオスは俺の背後へと回っていた。

「……それ、一体……」

「ん、これか？『縮地』って言ってな。事前動作なしで高速で移動する体術だ」

「移動って……は、走ってたのか!？」

「そうだけど？」

平然と、さも当たり前のように言うカオス。

走って……あの瞬間移動を……!？

カオスの身体能力も異常なんだろうけど、『縮地』って……。

「興味があるって顔だな」

なんでもお見通り、といわんばかりに、カオスは笑っている。

「教えてやろうか？」

「………え？」

「だから、教えてやろうか？『縮地』」

「え……ええええええええええええ!!?」

「驚き過ぎだろ」

「お、驚くに決まってるだろ！！教えるって……な、なんで……！？」

「なんとなく」

「言い切った！！？」

「ま、技術つてのは誰かに伝えてなんぼだろ。」

「もちろん、お前が『縮地』を習得できるかどうかは別問題だが」

「……………」

少し、考える。

もし……もし、この『縮地』つて技を習得出来たら、俺は今よりも、間違いなく強くなれるだろう。

……だけど、習得できるのか？こんなすごい技……。

「ああ、先に1つ言っとくぞ。」

『縮地』つていろんな武道やスポーツに取り入れられててな。それによって内容が結構違ったりするんだが、俺が習得してる『縮地』は、さっき言った通り事前動作^{ため}なしで高速で移動する体術だ。

その速度は、当然本人の走力次第」

「……………つまり？」

「つまり、仮にお前が今すぐ『縮地』を習得したとしても、俺みたいに瞬間移動すんのは無理」

「……………まあ、そりゃそうだよな」

流石に、いきなりあんな速度で動けるようになるなんて思ってない。魔法じゃあるまいし……いや、魔法使っても無理か。

「それでもよければ『縮地』を叩きこんでやるぜ？今日1日でな……

「……………は……？い、1日……！！？1日で『縮地』を習得できるのか……！？」

「んなわけあるか。これ一応“奥義”レベルの技だぞ」

「…………だよな。じゃあ、1日って…………」

「“基礎”の話だ。今日1日で『縮地』の基礎を叩きこんでやる。もちろん1日じゃ“もどき”とも呼べないような代物になるけどな」

「でも、そんな中途半端な…………」

「何もやらないよりはいいんじゃないか？明日審査あるんだろ？」

「そうだけど…………って、何で俺が受けるって知って…………」

「C級並クラスの実力持ったD級冒険者クラスが冒険者の審査がある町にいたら、普通受けると思うだろ」

「……………」

「お前がさつき俺の手合わせに応じたのも、明日の審査のために、少しでも実戦をしておきたかったからだろ？」

そう言つて、不敵な笑みを浮かべるカオス。

……………なんか、何もかもお見通しって感じだな。

でも……………一体何が目的なんだ？ここまで俺に加担する理由って……………。疑惑の目でカオスを見てみるが、当人は不敵な笑みを浮かべているだけ。何を考えてるのか、さっぱりだ。

……………いや、少し考え過ぎかもな。今俺が確実に分かっていることは、“俺よりも実力の高い人間”が、“修業に協力してくれる”ってことだ。

単純にそう考えれば、これに乗らない手はない。

疑いと迷いを消し、俺はカオスに右手を差し出した。

「よろしく、カオス。いや、師匠って呼んだ方がいいか？」

「カオスでいいぜ。別にそんなしつかりした師弟関係になるわけじゃねえしな」

カオスも右手を出し、ぐつと握手をする。

「そんじゃ早速始めようと思うが、時間は大丈夫か？」

「一応、8時ぐらいまでなら」

「となると、1時間ちよいか。場所はここでいいよな」

「おう」

同意して、同時に覚悟を決める。

『伝説の冒険者』からの修業、一体どんなことをやるのか……！

「あ、そうだ。1つ言い忘れてた」

「え？」

ぼん、とのんきに手を打って、カオスは言った。

「俺の持論、“人は地獄の底でもがき苦しんでこそ強くなれる”だから。」

……覚悟はいいんだよな？」

背筋が凍るような笑みを見て、俺は提案に乗ったことを少し後悔した。

「あ、ハデイ、おかえ……り……？」

「遅かったじゃないか。どこに、行つて……」

午前8時過ぎ、帰ってきた俺の姿を見て、メリスとグリーンは絶句した。

「ど、どうしたのハデイ!? そんなボロボロになつて……!」

「危険度Dの魔物とマンツーマンでもしてきたのかい?」

「いや……ちよつと、修業、を……」

その日の朝飯はいつもの10倍程おいしく感じた。

……ああ、生きてるって素晴らしい……!!

朝食を終えて部屋で休んでいると、あつという間に時間は12時過ぎに……。

あれ、時間ってこんなに流れるの早かつたっけ?

「疲れてたから、休憩の時間が早く感じたんじゃない?」

「よし、疲れも取れたからツッコむけど、俺今何もしゃべってねえよ……!」

「顔に“あれ、時間ってこんなに流れるの早かつたっけ?” って書いてあつ……」

「文字でも書いてないと読みとれねえよな! そんな正確に……!」

まずい。昼からまたカオスの修業を受けるのに、メリスへのツッコミで体力を使い果たしそうだ。

「つて、そういえばそろそろじゃないか?」

「うん……! そろそろお昼ご飯の時間だね……!」

「いや、それもそうだけど。カオスに頼んだ武器のこと」

「昼頃って言ってたね。……昨日のあの適当さを見ると、忘れられ

てないか心配なんだけど」

「それなら大丈夫だ。今朝、俺の剣はもう完成してるって言ったから」

「どんな風になってるんだろうねー？」

「……とりあえず、血みどろになってたり、ガイコツがついてたりしなければいいや」

……本当にそれだけは心配だ。

せめて人前に出せるような代物になってればいいけど……。

昼食も終え、俺達は中央広場へと繰り出した。

たくさんのお店が並んでいる中、カオスの店はすぐに見つかった。

……まあ、探す時は分かりやすくいいな。あの黒い店。

「こんにちはー！！カオスさん武器できてるー！？」

「メリス、声がでかい。別にそんなでかい声出さなくても聞こえ……」

と、店のカウンターを見てみると。

「ZZZZZZZZ……」

カオスが寝てた。

……えー……？まさか、本当に昼寝してて完成してなかったり……いや、でも今朝、もう完成したって言ってたよな……。

「お、おーいカオス？」

「あれ、カオスさん寝てる？」

「起きた」

『うわっ！！びっくりした！！』

突然上半身を起こすカオスに思わず飛び退く俺とメリス。
なんか、動きが本当に起きてた人の動きだったんだけど……まさか、
タヌキ寝入り？

「いや、本当に寝てたぞ。一瞬で覚醒しただけだ」

「ごめん、お前まで読心しないでくれ。頼むから。ツッコミが追いつかないから」

「分かった、じゃあやめる」

「やろうと思えばできるってことか!？」

いかん、またこの人のペースになってる。
ってか、この人にいちいちツッコんでたら、それだけで日が暮れそ
うだ。

「武器だろ？ちゃんとできてるよ」

「良かった。……血みどろになってたり、ドクロがついてたりしな
いよな？」

「……どうボケてほしい？」

「ボケるな!!まじめに答える!!」

やばい、本当に心配になってきた。

せめて、せめて刀身だけにしてくれ!!鞘すら人前に見せられない
ようなものになってたら俺は泣く!!

「ほれ、お前の剣だ」

「あ、お、おう!!」

手渡されたのは、漆黒の鞘に納められた剣。

手に持った感じ、重さは以前のロングソードと大差ない。

だが、なぜか俺はこう感じた。“軽い”と。
はやる気持ちを抑えられず、俺はその剣を引き抜いた。

「っ……!!」

「元になるロングソードが弱過ぎたからな。素材とくつつけんのが大変だったぜ」

鞘から現れたその刀身は、まるで絵の具で塗りつぶしたかのような黒だった。

だが、カオスの髪や目のような、不自然な程黒い黒とはまた違う。黒の中に、鋭い光を宿している。

「剣の性能は俺が保証してやる。切れ味も耐久力も、ロングソードとは段違い。それと、微量だが“閻属性の魔力”を纏ってるから、“光”に対抗することが可能だ。

そうそう、その剣の名前、勝手につけちゃったけどいいか？」

そして……その黒い刀身の柄に近い部分には、大きく、だけど邪魔にならない程度に、桜の花が刻まれていた。

「『夜桜』。それがその剣の名前だ」

「夜、桜……」

あまりの存在感に、俺は剣から目を離せなくなっていた。
一目見た瞬間、分かった。この剣は俺が今まで見た中で、間違いなく、最高の物だと。

「これ……本当に、俺のロングソードだったのか……？」

「おー、ま、素材を奮発したからな」

「素材？一体、何を使っただんだ？」

「ん、『黒王竜ニーズヘグの牙』。ごく一部だけだな」
「黒王竜……？」

聞いたことのない名前に首をかしげていると、

「……………あ、あはははは！さ、流石『伝説の冒険者』！冗談が上手いね！」

「グ、グリー？どうした？」

「いや、今は冗談じゃねえけど」

カオスの言葉を聞き、グリーは笑いを止めて真剣な表情になる。

「……………いくらなんでも、信じられないよ。『黒王竜ニーズヘグの牙』なんて……………」

「つて、そんなに貴重な物なのか？」

「……………貴重、なんてレベルじゃない。」

『黒王竜ニーズヘグ』。『白皇竜セラフィム』と対をなす、世界最強の魔物だ」

「……………は……………？」

比喻でもなんでもなく、俺とメリスの目が点になった。

え、だつて……………世界、最強……………つて……………。

戸惑う俺達をしり目に、グリーはさらに続ける。

「黒王竜は白皇竜と違って、表にはほとんど出てこない魔物なんだけど、

19年前、少なくとも、記録されてる中ではたった一度だけ、黒王竜が人里を襲おうとしたことがあるんだ。

場所は、レイド帝国の帝都『ニブルヘイム』」

「レイド帝国……………」

この国の隣にある帝国の帝都か。
でも、いくらなんでも1匹の魔物が……。

「それに気づいたレイド帝国は、精鋭部隊を中心とした約50万の軍勢で黒王竜を迎え撃った。

そして、黒王竜を“なんとか追い払う”ことに成功したんだ」

「……“なんとか”？」

「そう、しかも“追い払った”、だよ。“倒した”じゃなくてね」

「……おい、おい……」

50万人vs1匹だろ……!？

しかも、軍勢ってことは当然兵器とかも使ってたんだろ……。

「その戦闘の結果、50万人中40万人以上が死亡、もしくは行方不明。生き残った人も、ほとんどが心身ともに再起不能なほどの傷を負ったって話だよ。

戦力を大きく削られたレイド帝国は、それ以来他国の侵略を一度もしていない。

……国としての在り方を変えられたんだ、たった1匹の魔物によつて、ね」

「……なんじゃ、そりゃ」

正直、それしか言葉が出てこない。

ミカン村で『黒と白の英雄』の話聞いた時もそうだったけど、にわかには信じ難い話だ。

「まあ、この国へ伝わる過程で多少おひれもついてるだろうけどね。

……それでも、『黒王竜』がとんでもない魔物ってのは、おそろく事実だ。

僕がカオスくんの話信じられないって言ったのは、それが理由だよ」

なるほど、確かにグリーの言い分も分かる。50万人でも倒せないような魔物なんだ。いくら『伝説の冒険者』でも討ち取るのは無理だって考えたんだな。

「おいおい、落ちつけよ。俺は倒して手に入れたなんて言ってないぜ？」

「え……あ」

カオスが少し呆れたような様子でそう言った。

そっか、言われてみれば、抜け落ちた牙を偶然拾ったとか、もしくは市場に流れていたのを手に入れたとかかも……。

グリーもそう予想したのか、納得いったような様子だ。

……だが、次のカオスの一言は、俺達の予想の斜め上に行くものだった。

「知り合いの黒王竜に頼んでもらったんだ」

『冗談？』

俺達3人は異口同音に即答した。

たぶん、カオスが言い終わってから俺達が聞き返すまで、0・1秒かかってない。

「ま、好きに考えろよ」

俺達の言葉を受けて、カオスは不敵な笑みを返す。

……どこまで本気なのかさっぱり分からん……！！

「んじゃ、次行くか。ほれ」

と、カオスがグリーに手渡したのは、グリーが長年使っている愛銃だ。

俺の剣と違って見た目はほとんど変わってないけど、1つだけ、大きく変わっているところがあった。

「……何だい？この玉」

グリーが指差したのは、銃の弾倉シリンダーのすぐ後ろについている、緑色の玉だ。

もちろん、預ける前はこんなものはなかった。

「それか？魔法玉っていつてな。魔法石を加工して魔力を蓄える機能を大幅に上げた物だ」

「それは知ってるよ。なんで僕の銃にこんなものがついてるんだい？」

流石グリー。イラだった様子もなく質問を続けてる。

「あー、そうだな。これは実際使ってみた方が早いかな」

カオスはそう言うのと、『集中』を始めた。

「テレポート空間転移」

『っ！！？』

気づけば、俺達4人はタルト町の外、今朝俺とカオスが手合わせをした場所に来ていた。

これ、いきなりやられると驚くよな……。

「んじゃ、試し撃ちだ。あそこの岩でいいか」

カオスが指差したのは、30mぐらい離れたところにある大きな岩。

「まず普通に撃ってみる」

「うん」

グリーは装填を済ませ、ゆっくりと銃を構えて引き金を引く。

ドンッ！！

銃声と共に銃弾が発射され、岩のほぼ中央に突き刺さった。

「おー流石、良い腕だな」

「……成程。確かに、前より威力も弾の速度も上がってるね」

「って、グリーそんなの分かったのか？」

「なんとなくだけだね。今までより速くなってる感じがする」

使い古してるから、撃った感じで分かるのかもな。

「そんじゃ、次。魔法玉の横についてるレバーをオンにしてみる」

「これかい？」

グリーは言われたとおり、銃の右側についている小さなレバーを切り替える。

「……なんだあのレバー？下からオフ、オン……は分かるけど、一番上……プラスチック？」

ドンッ！

短い破裂音がして、岩が砕け、砂煙が上がる。
今の……銃弾じゃ、ない？

「『空気弾』とでも名付けるか。銃にためた魔力を使って、実弾なしで空気の弾を発射する。」

当然威力は落ちるが、弾を補充する必要がない。ま、魔力が切れたら補充しないといけないけどな。

「んじゃ、ラスト。レバーをプラスチックに切り替えてみる」
「あ、ああ……」

グリーンが言われたとおりにすると、銃が緑色に発光し始めた。

「これは……？」
「ま、撃ってみろって」

グリーンは傾くと、銃口を岩へと向ける。

……ここで余談だが、普段前線へ出て白兵戦をしている俺は、常人よりも目が良い。

単なる視力もそうだけど、動体視力には結構自信がある。

グリーの撃つ銃弾も、流石に目視は難しいけど、銃弾の軌跡ぐらいならギリギリ判別できる。

……だけど、この時グリーンが撃った銃弾は、俺の目にも全く映ることなく、岩の中心より少し上の方に突き刺さり、

ドオオオオオンッ！！

着弾と同時に爆風を巻き起こして、岩を大きく削り取った。

「……………」

当人であるグリーすらも、その光景に唾然としている。
カオスはそんな俺達の様子を、不敵な笑みを浮かべて見ていた。

「『爆風の魔弾』。風の魔力を特殊な装置でエネルギーへと昇華し、火薬とエネルギーを同時に爆発させることで、普通の倍の速度で銃弾を射出する。」

さらに、銃弾の中に残ったエネルギーは着弾と同時に爆発、小規模の爆風を巻き起こす。

使い道には気をつけるよ？弱点をつまく狙えば、危険度Dの魔物でも即死だ」

「っ……………!!」

グリーが息を呑んだのが分かった。

当然といえば当然……………岩が大きく削られた様は、まるで爆弾でもぶつけたかのようだ。

「ま、強力な分リスクも多い。」

グールドは分かっただろうが、反動がでかいから狙いをつけるのが難しいし、手にもかなり負担がかかる」

「そういえば、さつき岩の中心から少し外れてたな」

「ま、あんだだけで済めば大したもんだ。」

後、『空気弾』と違って実弾も使うし、何より魔力の消費量がバカでかい。

満タンまで魔力をためても、これを2発撃てば魔力切れだ」

「2発……………」

「よーするに『切り札』ってわけだ。乱射したりすんなよ？」

「……………するわけないだろう。こんな危険な物」

グリーは呆れた様子でレバーをオフへと戻した。

「まさか、こんなとんでもない代物になって返ってくるとはね……」

「確かに、すつげえよな、その銃」

「銃？何言っつてんだハデイ、それはもう『銃』なんて生易しい代物じゃねえよ」

不敵な笑みを浮かべてカオスは言う。

「それは、『魔導兵器』だ。軍でもそこまで強力なものはないかねえぜ？」

「『魔導兵器』……」

確かに、魔力使ってるしな。

……にしても、魔力を利用した武器ってこんなに強力なんだな……。

「一応それにも勝手に名前つけたけど。聞くか？」

「……うん。元々この銃に固有の名前なんてないしね」

そう言っつて銃を両手で持つグリー！

……そういや、なんだかんだでグリーもカオスと打ち解けてきてる気がするな。

初めは『路地裏の悪魔』ってことで、警戒してたけど。

「『風切り』だ。その銃の名前」

「……『風切り』、か」

グリーはフツと笑みをもらし、銃をしまった。

「それじゃ、そう呼ばせてもらおうよ。」

……ちなみに、この銃の改良には何を使ったんだい？」

「素材か？『緑風玉』と『シルフの魂』だ」

ビシッ、とグリーが固まった。

……え？ひょっとしてその2つもとんでもない素材……？

「じゃ、ラストだ。メリス」

「あ、うん！！」

待ってましたと言わんばかりにメリスが飛び出してくる。

「これがお前の杖、『紫光』だ」

「うわあ！きれい！！」

差し出された杖にメリスは目を輝かせる。

その杖は長さ1mぐらいで、先には赤と青の宝玉がつけられている。

「カオスさん！！この杖には何かないの！？」

「何か？」

「ほら！！ハデイの剣は闇の魔力を纏ってるって言ってたし、兄さんの銃は『切り札』とかついてたから！！」

あーなるほど、そういうオプションにも期待してるのか。

「ない。魔法が使いやすくなるだけだ」

「……………」

うわカオスの奴即答しやがった！！

んでメリスは落胆してるの分かりやすいな！失礼だろ！！

「ああ、『紫光』って名前通り、持って魔法使つと杖全体が紫色に光るぞ」

「本当！？やったあ！！」

「それでいいのか！？」

杖が光るって……いや、雰囲気は出るけど。逆に目立って狙われやすくなるんじゃない？

「んじゃ、これで全部だな。それじゃ、お代だけ……」
「あ」

しまった、武器に感動するあまり忘れてた。

……ってか、とんでもない武器ばかりなんだけど、金足りるかな……。

「……1億」

「…………は？」

思わず間抜けな声が出ってしまった。

……落ち着け俺、今のはカオスの声じゃない。

「グ、グリー？どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも……僕の銃に使われた材料『緑風玉』と『シルフの魂』。それに、メリスの持つてる杖についてる宝玉……『紅蓮石』と『纏水石』を加工したものだろう？」

この4つを“卸値”で売った値段。それが1億G（一億千円）だよ

ビシッ！！と自分の体が凍りつくのが分かった。

「ああ、それな。昨日サイコロ振ったら3が出たんだ」
「サイコロ?!?!?」

何やってんだこいつ?!?!?

「つーか、普通3が出たら3億じゃねえのか!? 桁がおかしいだろ
!?!」

「なんだ、3億払いたいのか?」

「払えないけど!?!!」

「んじゃ、いいだろ」

「いや……だつて……えー……?」

助かったけど、助かったけどなんか納得できない……。
ホント、何考えてるんだ?こいつ……?」

「そつだな。じゃあこれは“貸し”だ」

「“貸し”……?」

「おう、今度返せよ。金以外で、な」

そう言つてカオスはまた、不敵な笑みを浮かべた。

……本当に、何考えてるかさっぱりだ……。

第41話 貸し（後書き）

では、次回予告です！

「ハデイだ。なんていうか……本当規格外というか常識外れというか……」。

考えが全然読めないな、カオス。

次回は今回もあつたけど、カオスの修業を受けるんだ。

……どうしよう、今から逃げたくなってきた。

次回、冒険者ライフ！第42話『修業』！

仲間は苦勞を共にするものだよな！……な！！」

第42話 修業

「それじゃ、せっかくここに来たんだし、このまま修業を始めるか」
「っ！！」

カオスの言葉を聞き、俺は思わず冷や汗を流した。
そつだ、昼からまた修業を受けるんだつた……！
また、あの地獄のような修業を……！！

「な、なあメリス！グリー！お前らもせっかくだからカオスの修業
受けないか！？」

「え？」
「いきなりどうしたんだい？」

俺の提案に、2人は首を傾げる。

「ほ、ほら！明日は審査があるんだし、今の内に少しでも力をつけ
といた方がいいだろ？」

「んー、それもそつだね！」
「確かにそれはそつだけど……」

あつさり乗り気になるメリスと、どこかひっかかるのか考え込むグ
リー。

別に俺は間違つたことは言つてない！
ただ……ちよつと1人でカオスの修業を受けるのは嫌なだけだ！！

「な、なあ！いいよなカオス！？」

「俺の修業を受けるのに必要なのは『やる気』だけだ。」

それさえあれば断る理由はねえよ。

……そういう意味じゃお前はちよつと微妙だな、ハデイ」
「うぐつ……」

くそつ、本当になんでもお見通しだな……！

「カオスさん！私も修業お願い！！」

「……まあ、どっちみち明日までにこの銃に慣れなきゃいけないからな。製作者に指導してもらえるなら、それに越したことはないかな」

2人ともやる気になってくれたみたいだ。

……後で謝った方がいいかもしれない。

「3人か。しかも全員違う修業だからな……」。

ま、1人1人指示を出して、適当に見回ればいいか。

一応確認だけど、お前から3人とも明日の審査受けるんだな？」

「ああ。俺とグリーはC級^{クラス}、メリスはE級^{クラス}のな」

「そんじゃ、修業は軽めにしとくか。」

無理な修業をして明日に響いたらバカみたいだしな」

「お、おう！！そうだな！！」

思わず大きな声を出してしまった。

そうか！軽めか！！いや良かった。また今朝みたいなことになるかと……。

「んじゃハデイ、お前はまずその剣に慣れる必要があるからな。素振りだ」

「おうー！」

カオスの指示に元気よく返事をする。
素振りぐらいならいくらでもやっつてやる！

「まず、軽く1000本な」
「任せ……」

……………ん？

「……………ごめん、よく聞こえなかった。もう1回言ってくれ」
「まず、軽く1000本な」

「……………1000?」

「1000」

「1000!!!?」

「……………何回繰り返し返す気だ?」

カオスが呆れたような声だしてくるけど……………1000って!!!

「なあ、カオス。これ真剣だぞ?竹刀とか木刀じゃないぞ!？」

「当たり前だろ。竹刀とか木刀なら10000はやらせてるぞ」

「……………」

冗談でも聞き間違いでもなかった……………!!!

確かに『夜桜』は『ロングソード』より軽く感じるし扱いやすいけど！素振り1000本はちょっときついつて!!しかもこいつさっき“まず”って言ったよな!？」

「んで、素振りが終わったら次はランニングだ」

「っ!?!?」

「ど、どうしたのハディ?顔、真っ青だよ?」

メリスが心配そうに声をかけてくるけど、それに対応する余裕は俺にはなかった。

「……な、なーカオス？その、ランニングって……」

「もちろん今朝と同じ、『狩人の庭』でだ」

「やっぱり!!」

予想通りの答えに頭を抱える。

ちくしょう!! やっぱり今朝と同じことに……!!

「兄さん、『狩人の庭』って?」

「……この町から徒歩20分ぐらいの所にある小さな森の名前だけど……」

メリスの質問に、グリーは戸惑った様子で答える。

流石グリー。やっぱり知ってるか。

「今のお前の体じゃ、とてもじゃないが『縮地』なんて使えないからな。」

ま、今回教えるのは“基礎”だけとはいえ、体力アップは必須だ。そのためには自然の中を走らせるのが一番だろ?」

「だからって……だからって、魔物がいる森を走らせるな!!!」

「えっ!?!」

「……………」

俺の叫びにメリスは驚愕し、グリーは顔をしかめた。

そう、今朝宿屋に戻った時、俺がボロボロだった理由はこれだ。

同じ理由で『狩人の庭』を走らされたんだよな……30分程。

「ハデイ、『火事場の馬鹿力』って知ってるか?

人に限らず生物つてのは、命の危機を感じた時一番力を発揮できるんだ」

「修業で死んだらどうすんだよ!？」

「安心しろ。あそこで一番強いのは精々、危険度Dの下の上程度の魔物だから。きつと大丈夫だ」

「てめえ今“きつと”って言いやがったな!？」

「月並みな台詞だが……物事に100%なんてねえんだよ」

「良い台詞でごまかすな!!」

「いいからとつとと修業始める。時間がもつたいないだろ」

「うぐっ……!!」

何を言っても取り合ってくれない以上、口論するだけ体力の無駄か……。

早々に諦めて修業をしよう。うん。

「そんじゃ、お前ら2人はあっちの岩場でやるぞ」

「あ、う、うん……。ハ、ハデイ!がんばってね!!」

「死んだら骨は拾ってあげるよ」

「うるせえぞグリー!!」

軽口をかわしつつ、3人を見送る。

一息つき、剣……。『夜桜』を鞘から引き抜く。

「……………やるか」

キツと前を見据え、ゆっくりと剣を振り上げた。

くサイドアウトく

「それじゃ、まずメリスからだな。」

魔法の修業って言ってもいろいろあるが……お前は具体的に魔法の何を強化したいんだ？」

「え、えっと……私魔力が少ないから、魔力の量を多くする修業がしたい!!」

「成程な。んじゃ、瞑想、集中、弱い魔法の繰り返しだな」
「うっ……」

カオスの提案に、メリスは顔をしかめた。

この修業は、筋力に例えれば筋トレのようなものだ。

必要なことではあるが、面白くない上に大変な修業だ。

「後はそうだな……。あ、そうだ。1回魔法を見せてくれ」
「え？」

「基礎魔法レベル1でいいから。的はあの岩な」
「う、うん……」

言われるままに、メリスは集中を開始する。

メリスの体が赤く光り……同時に『紫光』が紫色に発光し始める。

「火よ集え フレイ！」

突き出された杖の先から火球が現れ、岩に直撃する。

「……………」

「どうだいメリス？杖を使った感想は」

「なんだか……すつごく魔法が使いやすい！！」

笑顔になるメリスを見て、グリーも微笑みを返す。

「……成程。お前の場合、魔法のやり方を変えてみるのもいいかもしれねえな」

「魔法の……やり方？」

「ああ。知つての通り、魔法つてのはぶっちゃけなんでもありだ。

だが、なんでもありにするためには、相応のエネルギー、つまり魔力が必要になる。逆にいえば、常識的にありえることをする分には、そんなに魔力は必要じゃねえってことだ」

「……………」

首を傾げるメリスに、カオスはさらに続ける。

「お前が今やつてる炎魔法は、“魔力を直接炎に変換”してるんだ。単純だし、魔法の制御もしやすいが、魔力を一番消耗するやり方だな」

「そつなの！？」

「今知つたのかよ。……まあ、大抵の魔法使いはやり方なんて1つしか知らないしな。

他のやり方は、炎魔法だとよくあるのは、“分子振動の増幅によ

る加熱”と“魔力を可燃性のガスに見立てる”だな」

「……………??？」

「ま、実際見るのが一番早いか」

言うが早いか、カオスは集中を開始する。

「火よ集え フレイ」

ゴオツ！と指の先から火球が空へと放たれる。

「今のは魔力を可燃性のガスに見立てた上で、空気の分子振動を増幅させて加熱。ガスに引火させて火球を作り出したんだ。

これだと自然現象を利用してから、その分少ない魔力で魔法を発動できる。やってみろ」

「え、でも、どうやれば……………」

「ちよつと意識を変えるだけでいいぜ？魔法なんて結局は術者の意思次第なんだからな」

「うーん……………」

いつも通り集中をするメリス。

それを見て、カオスは助言を始めた。

「もつと手の先に意識を集中してみる。そこに魔力を集める感じだ」

「えーつと……………」

「できたら次はその周囲だ。魔力に引火させて球状に集束させる」

「……………」

「……………よし、後はいつも通りでやってみろ」

「……………火よ集え フレイ！！」

ゴオオツ！！

「わわっ!?!」

いつもより一回り大きい火球が手から発射され、前にあった岩へとぶつかる。

「おー、うまくいったな」

「で、でも、私あんなに強くするつもりなかったのに……」

「それがこの方法の欠点だな。自然現象……つまり、自分以外の力に頼る分、制御が難しい。」

お前がいつもやってた方法が制御が簡単なやつだったから、余計にな」

「うー……この方法、なんだかやりにくい……」

「慣れれば大丈夫だと思っただけだ。流石に明日までにこっちに慣れるのは難しいしな」

「……余計な知識を得ると、かえってやりにくくならないかい？」

「まあ、そうかもしれないけどな。だが、やっぱり知識つてのはあるに越したことはねえよ。」

例えば今の方法を知っていれば、いつもの方法じゃ魔力が持たないような状況でも、切り抜けられるかもしれないだろ？」

「……………」

「まあもちろん、その魔力そのものがもっと増えれば問題ないんだが」

カオスは不敵な笑みを浮かべる。

その直後、カオスの体が黒く光った。

「アンチマジック」

「っ!?!」

「メリス!!!」

カオスの右手から放たれた黒い鎖がメリスに巻きつく、しかし、巻きついた瞬間に鎖は消えてなくなった。

「カオスくん、今のは……!!!」

「簡単な妨害魔法だ。手加減したから、がんばればちゃんと魔法使えるぜ。それと、この修業中は杖を使うの禁止だ」

「ええっ!?!」

「当たり前だろ。せつかく妨害魔法で負荷をかけたのに、杖を使ったら意味ねえって」

「そ、そうだけど……」

「んじゃ早速、まずは瞑想で今消耗した魔力を回復。終わったら集中を最大の状態で10分継続。その後フレイを岩に向かって魔力が枯渇するギリギリまで撃て。その繰り返しをとりあえず5回」

「5回!?!」

「待つんだカオスくん!!! 魔力を短時間で5回も枯渇させたら……!!!」

「枯渇するギリギリまでって言ったろ。その後すぐ瞑想で回復すれば大丈夫だ。」

「……もちろん、体力と集中力は相当きついだろうけどな」

「だからって……!!!」

「……だ、大丈夫だよ兄さん!!!」

「メ、メリス?」

「ハデイだってがんばってるんだもん……私も負けてられない!!!」

メリスはそう言い放ち、その場で瞑想を始めた。

「……………」

「次はお前だな。グルード」

「……グリーでいいよ」

「んじゃ、グリー。覚悟の方はいいか？」

「当たり前だろう？メリスがこんなにかんばってるのに、僕ががんばらないわけにはいかない！！」

「……ハデイは？」

「メリスがこんなにかんばってるんだ！！僕はどんな試練でも乗り越えてみせる！！」

「……あー、うん。面倒だからツッコミやめよ」

カオスは呆れたような顔でそう言い、移動を始める。

グリーもそれに気づき、カオスの後についていく。

メリスが修業している場所から5分ほど歩き、岩場の中でもひらけた場所に出た。

「お前の修業はここでやる」

「……射撃の練習でもするのかい？」

「お、流石。よく分かったな」

「そりゃあね、ここなら万一僕が弾を外しても、誰かに当たったりしないってことだろう？」

「そうだった」

グリーの回答にカオスは満足そうに笑う。

今グリーが言った通り、ここはひらけているが周りを岩に囲まれていて、もし的外してもその岩に当たるため、誰かを誤射する危険がないのだ。

その直後、カオスの体が銀色に光った。

「オートアイスシューター
自動氷弾射出機」

魔法が発動し、場所の一角に銀色に光る氷の塊が現れる。

「……これは？」

「その名の通り、自動で氷の弾を射出する装置だ。」

お前の修業はズバリ、シューティングゲームだ。これから撃ちだされる弾を銃で撃ち落とせ。弾の大きさ、速度、撃ちだされる方向は完全にランダムだ。よく見て、必要に応じて弾の種類を変えるよ。」

「……なるほどね。確かに実戦でも、とっさの判断で弾の種類を変えながら戦う必要があるからね。」

「おう。銃の魔力がなくなったら自分で補充しろよ。見た所、お前も少しは魔力があるみたいだからな。」

「……自分の魔力がなくなったら？」

「実戦でそうなたらどうすんだ？」

「……もちろん、実弾だけで切り抜けるよ。」

「正解。んじゃ始めるぞ。」

カオスがパチンと指を鳴らすと、氷の塊の光が強くなる。グリーは銃の装填を済ませ、氷の塊に向けて銃を構える。

「そうそう、一つ言い忘れたけど。」

「なんだい？」

グリーは氷の塊の方へ意識を向けたまま、カオスに聞き返す。その時だった。

ドシュツッ!!

「っ!？」

氷の塊から、高速で氷弾が発射された。……グリーに向かって。とっさに身をかわすと、氷弾は後ろにあった岩に当たって砕け散る。

「氷弾はお前に向かってくることもあるからな。」

その場合、自分に当たる前に撃ち落とすか、今みたいにかわすかのどっちかにしろ。」

「……その言い忘れたところにいきなり来たのは、わざとかい？」

「ぐーぜんだ、ぐーぜん」

「……………」

不敵な笑みを浮かべるカオスに、グリーは宣言した。

「氷弾、全部撃ち落としてあげるよ」

「がんばれー」

なおも笑みを浮かべるカオスから目を離し、グリーは氷の塊へと意識を集中した。

（ハデイサイド）

「ぜえ……………ぜえ……………」

1時間後……………ようやくカオスから指示された素振りとランニングを

終え、俺は地面に、仰向けに倒れこんでいた。

……疲れた。マジで疲れた。つてか、『狩人の庭』でハンターウルフ（危険度Eの低位魔獣、ただし危険度Eの中では強め）の群れに囲まれた時は、冗談抜きに死ぬかと思った……。

「お疲れー、お、良い具合にボロボロだな」

「何が良いんだ何が」

倒れている俺の元にカオスがやってくる。
つてか、タイミング良すぎだろこいつ。

「ま、流石に疲労もたまってるだろうから、少し休憩にするか。休みも入れないと体が壊れるからな」

「おー……」

カオスの提案に生返事を返す。

……いつそのことこのまま寝たい。

「寝てもいいけど、起こす時『ナイトメア』で悪夢見せて起こすぞ」
「寝ません!!」

脅してきた!! つてかこいつが見せる悪夢ってとんでもなくタチが悪そうなんだけど!!

「で、次はなんの修業やるんだ？ 実戦稽古とか？」

「んー、ま、それでもいいけどな。ダークネスソード」

一瞬の集中の後、詠唱が紡がれ、黒い闇の剣が現れる。

……そういえば、

「なあカオス、その『ダークネスソード』って魔法、有名な魔法なのか？」

「いや？つてか、これ俺のオリジナルの魔法だぞ」

「……………え？」

オリジナルってことは……………。

「書物とかにも書いてないし、販売もしてないからな。使えるのは俺と、俺が伝授した奴だけだ」

「え……………いや、でも……………前に、その魔法使ってる人見たぞ？」

「あん？……………ああ、ひよつとしてそれ、プラム・ブラックネスか？」

「えっ！？な、なんで分かったんだ！？」

「俺がこの魔法を教えたのは、今の所そいつ1人だけだ。」

『紫黒の魔女』とか呼ばれてるんだって？あいつ」

「お前、プラムさんとは……………」

「一応師弟関係だ。ま、1週間だけだったけどな」

それからカオスはその頃のことを話し出した。

3年前、プラムさんが魔法を使いこなせず、くすぶっていた時、師匠として魔法の制御法と、ついでに体術を教え、さらに『ダークネスソード』を伝授したこと。

修業内容としては瞑想や集中といった魔法の基礎から、弱い魔法を何度も使い、魔法に慣れさせた。それでもプラムさんは魔法に苦手意識を持っていたため、魔法に頼らなくても戦えるよう、体術を教えたらしい。ただ武器を作り出すだけの魔法である『ダークネスソード』を教えたのも、同じ理由。

なお、朝4時からの修業だったため、初日はプラムさんが5分遅れたからバカにしたら、2日目はカオスが6分遅れてバカにされてケンカになり、3日目は2人とも10分前に来たとかなんとか……………つていうか。

「……お前、3年も前のことを、よくそんな事細かに覚えてるな」
「んー、まあな」

そういえば昨日も、『お願いだから殺して下さい』とか『頼むから死なせてくれ』って言われた時のことを詳しく覚えてたけど……。

「ま、俺は“一度記憶したことを忘れることができない”からな。覚えてて当然だ」

「……え？」

何、言ってるんだ？こいつ……。

戸惑う俺に、カオスは不敵な笑みを向けた。

「なあお前、『異能者』って知ってるか？」

第42話 修業（後書き）

では、次回予告です！

「メリスだよ！うう、まさか修業がこんな地味で大変だなんて……。で、でも！私達は負けないからね！！」

次回予告だけど、修業を続ける一方で、私達はカオスさんの話を聞いて、その正体に迫っていくの。

次回！冒険者ライフ！第43話『異能』！！

……少し違うのかもしれないけど、それでも、同じ人間だよ！！」

第43話 異能

「『異能者』……?」

カオスに言われた単語を口に出す。

ミカン村で少し話題に出たっけ。100万人に1人程度の確率で生まれる、“常人ではありえない力”を持った人間のことだ。

「お前、まさか……」

カオスが何を言おうとしているのか、それぐらい俺にも分かった。それが伝わったのか、カオスは不敵な笑みを浮かべる。

「『アブソリュートメモリー絶対記憶』。それが俺の能力だ。

さっき言った通り、俺はこの能力のおかげで、一度記憶したこと

を絶対に忘れない」

「『アブソリュートメモリー絶対記憶』……」

なるほど、それで何年も前のことを事細かに覚えてるのか。

……でも、

「言っちゃ悪いけど……あんまり『伝説の冒険者』っぽくないな」

「そうでもないぜ? 日常はもちろん、戦いでも間接的に役に立ってるからな」

「間接的に……?」

聞いた限りだと、とてつもなく記憶力が良いつてだけじゃないのか? あんまり戦いには関係なさそうだけ……。

「一度記憶したことは絶対忘れないんだ。
見たこと聞いたことはもちろん、“体が覚えた動き”もな。
そのおかげで俺の経験は劣化しない。ま、修行をサボったら筋力
とかは下がるけどな」
「……………」

笑いながら話すカオスだが、俺は1つ、気になることがあった。
それは…………、

「何で…………それを俺に話したんだ？」

「あん？」

「昔、グリーに聞いたことがある。」

異能者なんて、世間じゃほとんど伝説の存在だ。

それは生まれる確率があまりにも低いってことと、もう1つ、異
能者は自分が異能者だって隠すから。

なぜなら……………」

「“迫害されるから”だろ？」

あっけらかんとした様子でカオスはそう言った。

「俺の能力は平和的なもんだが、中には人の心を操るとか、寿命を
奪って自分のものにするとか、もっと凶悪な能力もあるからな。迫
害する奴がいたっておかしくねえ。」

つつてもよ、お前、俺が迫害を怖がるような繊細な人間に見える
かよ？」

「いや、見えない」

こいつなら相手が何万人いても、全員返り討ちにしそうだ。

「だろ。それに、お前は異能者を差別なんてしないだろうからな。なんせ、俺が『化け物』だって分かってても、普通に話しかけてきたからよ」

「あ……」

そうだ、こうして話してる分にはあんまり気にしてなかったけど、こいつ、『異能』とか関係なくとんでもない力を持つてるんだった。

「それどころかお前、かつあげしてた不良に同情して、俺を止めに入ってきただろうが。」

そんなお人好しが人を差別するなんて思えねえよ」

「……お前、ひよつとしてさ……今までそついう目にあつたこと」
「あるけど、それがどうかしたか？」

うわ、平然と……。

「『14歳でA級クラス冒険者』の時点で嫉妬やらなにやらめんどかつたけど、それに加えて『異能者』だからな。他人の視線は結構冷たかつたぜ？」

「……それ、あくびをしながら言ってるいい台詞じゃないだろ」

「まあ、他の奴が陰で愚痴ってるのを見るのは面白かつたけど」

「面白いか!？」

「面白いだろ。心にもないお世辞より、陰口だろうが本音を聞く方がな」

「……ポジティブなのか、ひねくれてるのか」

たぶん後者だろうけど。

「さて、話してるうちに10分だ。そろそろ修業を再開するか」

「えっ……」

「なんだその間抜けな声」

「い、いや、まださつき魔物と戦って負ったケガが痛……」
「パワーヒール」

ケガが全快した。

「さて、修業を再開するか」

「ちょっと待てなんだそれ!？」

「お前が修業でいくらケガをしても全部治してやる。
だから安心してケガをしろ」

「おかしい!! 治癒魔法を使う前提がおかしい!!」

治癒魔法はもつと暖かくて安心できるものであって、こんな残酷なものじゃないはずだ!!

「って言っても、あんまりやり過ぎると寿命とか縮む可能性があるからな。」

「1日3回しかやらねえ」

「今日あと2回やるってことか!?!あと2回、治癒魔法が必要なくらいのケガを負わせるってことか!?!」

「安心しろ。お前がいくらケガをしても、俺は痛くもかゆくもない」
「……師事する人を間違えた気がする」

「どうでもいいからさっさと修業始めるぞ。嫌なら逃げればいいだろ」

「っ……誰が逃げるか!!」

立ち上がり、カオスの顔をにらみつけると、カオスは満足げに笑った。

「そうこねえとな。んじゃ、『縮地』の基礎の続きだ。朝やったこ

とをやってみる、覚えてるな？」

「お、おお！！」

俺はまっすぐ前を見据え、全身……特に左足に力をためる。その力で地面を思いきり蹴りつけ、前方へと跳び、着地する。

「よし、基本はちゃんとできてるな」

「でも、『縮地』ってためのない高速移動術だろ？思いつきりためてるんだけど……」

「ためあげができないのに、ためなしができるわけないだろ」

「……そりゃそうか」

「一応言っとくけど、お前はそれすら全然できてねえからな。

ために無駄な力が入り過ぎだし、着地時の隙もでかすぎだ」

「うぐっ……」

自分は精一杯やってるつもりだが、カオスの『縮地』を思うと、カオスが言った通りなんだろう。反論ができない……。

「ま、その辺は慣れも必要だからな。とりあえず、あと50回やれ」

「50回！？これ1回やるだけでも結構疲れるんだけど……」

「もちろん数をこなすだけじゃ大して意味ねえぞ。」

俺がアドバイスするから、そこを少しずつ直していけ」

「俺の抗議なんて一切無視か！？」

「安心しろ。ちゃんと聞いている」

「聞いている上で無反応ってことかよ！！それを無視してるって言うんだよ！！」

「いいから早くやれ」

「くっそ……！！」

それから数十分。何度もカオスにダメ出しされつつ、俺は『縮地』

習得のための修業を続けた。
そして、50回が終わると、

「次、100な」

「鬼!？」

……そして、100が終わり、

「次、200……」

「死ぬ!!それはマジで死ぬ!!主に足が!!」

「冗談だ。流石に足ばっか負担かけるとまずいからな」

「あ、ああ……」

良かった。一応分かってくれてるみたいで。

足が重くて、正直立ってるのもしんどい……。

「パワーヒール」

足が軽くなった。

「さて、続けるぞ」

「悪魔かてめえ!？回復すりゃいいってもんじゃねえよ!!」

痛みや苦しみを味わったことはちゃんと記憶に残るんだぞ!？」

「おう。それを知った上でやってるんだ」

「最悪だこいつ!!!!」

「文句言つのはお前の勝手だけど、いくら言っても修業内容は変わらないからな?」

「うっ……!!」

くそ、本当に200回やらせる気がこいつ……!!!!

そんな俺の心中を察したのか、カオスは不敵な笑みを浮かべた。

「安心しろ。200回って言ったのは本当に冗談だ。

次は別の修業をする」

「ほ、本当か!？」

た、助かった……。

まあ、足はもう回復したし、同じ修業でも大丈夫っちゃ大丈夫だけど。

流石に同じ苦しみを何度も味わうのはきつい……。

「『狩人の庭』で走ってこい」

「また!？」

同じ苦しみを何度味わわせる気だこいつ!？

「安心しろ。前の2つとは違う修業だ」

「どう違うんだよ?」

「前の修業では、お前は魔物と戦いながら森を走ってただろ?」

今回は魔物と戦うな」

「………は?いや、戦うなって、向こうが勝手に襲いかかってくるんだけど……」

「戦うな」

「いや、だから……」

「簡単な話だ。魔物から逃げ続ける」

「………はあ!?!無茶言うな!?!逃げても魔物は追ってくるし、逃げ続けてれば数も増える!困まれることだってあるんだぞ!?!」

「知ってる。それでも逃げ続ける」

「………」

えー……いや、ただでさえ魔物のいる森を走れって無茶があるのに……えー……。

「終わるまでこれは預かつとくからな」

「え！？あれ！？夜桜！？」

俺が腰に差していた剣は、いつの間にか、鞘ごとカオスの手に渡っていた。

「つて、剣取り上げるのかよ！？」

「持ってたら、反射で使っちゃうだろ」

「そうかもしれないけど、そこまでするか……」

がっくりと肩を落とし、俺は今朝、カオスに言われたことを思い出した。

「……流石、なんだっけ？“地獄に落ちた人は強くなれる”だっけ？」

「“人は地獄の底でもがき苦しんでこそ強くなれる”な、俺の持論」

「そうそう、そんな持論持つてることだけのことあるな。幸せとか

全否定かよ、お前……」

「はあ？んなわけねえだろ」

「……え？」

予想外の答えに、俺は目を丸くする。

それが気に入らなかつたのか、カオスは少し不機嫌そうに言った。

「“一切の幸せを失ったら人は壊れる”、それが俺のもう1つの持論だ。

“苦しみ”も“幸せ”も、両方人になくてはならないものだから

な

「ま、お前は幸せ有り余ってそうだからな。ちょっと地獄じごくで苦しんでいけよ」

カオスの不敵な笑みに、思わず身震いする。

……少なくとも今日、俺に幸せはない気がする。

「んじゃ、これから森に空間転移テレポートで送るけど、その前に1つアドバイスだ」

「アドバイス……？」

「さっきお前が言った通り、丸腰で魔物の群れに囲まれたらきついだろうが……なんで『縮地』の修業をした後にこの修業をさせるのか、少し考えてみる」

「……？」

「んじゃな、空間転移テレポート」

「あ、おい……！」

首を傾げる俺に構わず、カオスは魔法を発動する。

瞬間、俺の前にカオスの姿はなく、代わりにうっそうとした森が姿を現した。

……正確には、俺の方が現れたんだけど。

「魔物の群れに囲まれた時の対処法……『縮地』の修業をした後に、この修業をする意味……」

さっき、カオスに言われたことを繰り返す。

……ここまで言われたら、流石にカオスが何を言いたかったのか、俺でも分かる。

「…………『縮地』を使って逃げろってことかよ。
確かに、高速で移動すれば、囲まれた状況から脱出できるだろう
けど」

俺の『縮地』はためが必要だし、使った後の隙も大きい。タイミン
グを間違えれば、隙だらけの姿をさらすことになる。…………そこを攻
撃されたら、ひとたまりもないだろう。

「全く…………本当に無茶させやがるな…………！
戻ったら、思いつきり文句言つてやる…………！！」

俺はそう呟き、『狩人の庭』へと入って行った…………。

くサイドアウトく

「はあ…………はあ…………」

岩場にへたりこんだ状態で、メリスは息を荒げていた。
数m前方にある岩は、『フレイ』を幾度となくぶつけられたせいで、
体積にして半分ほど溶けている。

「メリス！！大丈夫かい！？」

「あ……に、兄さん？うん、大丈夫……」

現れたグリーが心配そうにメリスに駆け寄ると、メリスも精一杯笑顔を作る。

「兄さんは、どうしてここに……？」

「僕は少し離れた場所で、修業をしてただけだね……」

「一旦休憩にするって言ったなら、一目散にお前の所に走ってっただよ」

少し遅れて現れたカオスは、グリーを呆れたような目で見ている。

「当然だろう！あんな無茶な修業をして、メリスが倒れていないかと心配で心配で……！！」

「心配するのはいいけどよ。何事もほどほどにしろよ？」

あんまり心配し過ぎるのは、そいつのことを信じてないみたいだぜ？」

「……そんなことはないさ。実際、君がやらせた修業は、ほとんどの魔法使いにとって相当に厳しいものだろう。メリスだって、まだ例外じゃない」

「なるほど、知識があるから説得力が出るな。」

だが、俺が言ったことも事実だぜ？聡明なお前なら分かるだろ」

不敵な笑みを浮かべるカオスに、グリーは何も言い返さない。いや、言い返せない。

グリー自身、全く自覚がないわけではないのだ。

自分が妹であるメリスに、世間一般よりも“少しだけ（グリー基準）”過保護だということに。

「ま、いいや。そんじゃ10分休憩な。」

次はまた別の修業をするから、覚悟しとけ」

「……待ってくれ」

言うだけ言って立ち去ろうとするカオスを、グリーが呼び止める。

「聞きたいことがあるんだ」

「ん？なんだよ？」

「……この際、単刀直入に聞こう。カオスくん……いや」

意を決した様子で、グリーはカオスに質問をする。

その内容は……、

「『絶望』カオス・スファイア。君は3年前に起きた反乱を終結させた、『黒の英雄』なのかい？」

「えっ！！？」

グリーの質問に、メリスが声を上げる。

一方、質問をぶつけられたカオスは、平然とした様子だった。

沈黙が流れたのは、数秒か、それとも数分だったか。

そんな折、カオスは口を開いた。

「俺はやりたいことをやるのが好きなんだ。」

必要以上の名誉や地位なんざ願ひ下げ。面倒だからな」

「……………」

「え、つと……？」

メリスは困惑していたが、グリーは分かっていた。

その返答は、暗に肯定を意味している、と。

幾分か余裕を持って答えるグリーと、やる気満々で返事をするメリ
ス。

……2人の顔は、直後に出される無理難題により、思いきりひきつ
ることになる。

「んじゃ、今日の修業はここまで」

『……………』

「おいこら、普通ここは『ありがとうございましたー！』って言う
所だろ」

『……………ありがとうございましたー』

心身ともにへとへとになった3人は、そんな声を出すのが限界だっ
た。

現在の時間は午後6時少し前。

太陽は西に傾き、空は赤く染まっている。

そんな時間までずっとカオスの修業を受けていたのだ。3人がそん
な状態なのは、むしろ当然というべきかもしれない。

「ま、いいや。んじゃ最後に」

一瞬、カオスの体が淡い虹色に光る。

「彼の者達に優しき祝福を　ブレスライト」

突き出された右手から、暖かな光が現れ、ハデイ達を包み込む。

「カオス、今のは……？」

「生物の回復力を長期に渡って補助する魔法だ。

明日の審査で、筋肉痛で動けない、とかシャレにならねーし」

「あ、それちゃんと覚えてたんだな……」

「俺は一度記憶したことは忘れないっての。ま、意識の外にあったら意味ないけど」

「……ダメじゃん」

「言われるまでもないだろうけど、今日は帰ったらメシ食って風呂入ってさっさと寝るよ？」

さっきの魔法はあくまで補助だからな。休まないと回復しねえぞ」

ハデイの抗議はさらりと無視されたが、当人にはそんなことを気にする余裕もなかった。

「そつえばカオスくん。授業料とか取らなくていいのかい？」

「あ？別にいらねーってそんなの。最初に言っただろ。俺の修業を受けるのに必要なのは、『やる気』だけだつて」

「カオス……」

「それに、お前らが修業ひんぎょうしてるのを見て、十分楽しめたからな」
「……見直しかけた俺がバカだつた」

ハデイのぼやきに、カオスは反応すらしない。

「さて、解散……の前に、1つ言っとくか」

カオスはいつになくまじめな顔で3人を見据えた。

「お前ら今日は辛かったろ、苦しかったろ。……だが、その代償に
相応の力を手に入れたはずだ。」

その力は“お前ら自身が”手に入れた力だ。だから、その力と、
その力を手に入れた自分に誇りを持って、そして絶対に裏切るな」

聞き覚えのある台詞に、3人は目をむいた。

「そんじゃ、解散。明日はがんばれよ」

そんな3人をしり目に、カオスは空間転移テレポートで消えてしまう。
残された3人の内の1人、メリスはハデイに問いかけた。

「ねえ、あの人って……」

「……ああ、プラムさんの師匠だってよ」

ハデイの返答に、少し間をおいて、メリスは小さく頷く。

「さて、そんじゃ帰るか」

「うん……メリス、歩けるかい？なんなら僕が背負っていくけど……」

「……俺は止めないぞ」

「大丈夫だよ、兄さん」

軽口をかわしつつ、3人は町の宿へと歩き始めるのだった。

「……………」

タルト町の中でも高い建物の上に、カオスは立っていた。
その漆黒の瞳は、今町に戻ってきた3人の冒険者を捕えている。

「……………それに、念のため、お前らには少しでも強くなつてほしいからな」

カオスのその呟きは、誰の耳にも届くことはなかった……………。

第43話 異能（後書き）

では、次回予告です！

「グリーだよ。」

冒険者に必要なのは、学力じゃなくて戦闘力だ。
だから当然、冒険者の審査、試験はそういうものだってことにな
る。

次回、冒険者ライフ！第44話『冒険者の試練』。
……やれやれ、冒険者は何をするにも命懸けだね」

第44話 冒険者の試練

「101……102……」

翌朝、俺はいつも通り外に出て、剣の素振りをしていた。

昨日あれだけ修業したから筋肉痛が心配だったけど……驚いたことに、体の調子は怖いぐらいに良い。筋肉痛どころか、全身に力がいまなぎつてる感じだ。

昨日力オスがかけてくれた、あの魔法のおかげか……？

「……200、っと」

200回の素振りを終えるが、いつもと違ってそんなに息が上がってない。まあ、昨日は1000回とかやらされたしな。

もう少し回数を増やすか……いや、今日は審査があるんだし、下手なことはしない方がいいか。

いつも通りの平常心で臨む、それが審査に受かる秘訣だ。

……まあ、やっぱり緊張はするし、少しぐらいなら緊張も必要だろうけど。

「さてと、次はランニングだ」

剣を鞘に収めると、俺は軽く屈伸してから、ランニングを始めた。

「おかわりー!!」
「……………」

今日3度目の台詞に、俺はため息をつきたくなった。
説明しよう。

- 1つ、今は朝食の時間である。
- 2つ、メリスのご飯をおかわりするのは3回目である。
- 3つ、朝食が始まってまだ1分しか経ってない。

「……………いっつもまして食ったな本当に人間じゃないなお前メリス」
「待つてハデイ、今2つの台詞が聞こえた気がする」
「気のせいだろ」

メリスの鋭い指摘を適当に流す。

……………ってか今どうやってしゃべったんだろう、俺。

「だって、昨日あれだけ修業したんだから。お腹ペッコペコー!!」
「それにしても限度ってもんが……………ないか、お前には」
「うん!!」

自信満々に言い切ったなこいつ。太るぞ。

「何か言った？ハデイ」
「言うてねえ!!言うてねえから『集中』すんな!!」

メリスの体が赤く光ったのを見て、急いでやめさせる。
建物の中で炎魔法とかシャレにならないだろ!…ってか、俺本当に何にも言うてないぞ!!

「とはいってもメリス。あんまり早く食べるのは感心しないよ?

そんなに急がなくても、食べ物には逃げたりしないんだからさ」
「う……」
「うめんなさい、兄さん」
「分かってくれればいいんだ」

反省した様子でメリスに、グリーがにつこりとほほ笑む。

……なんか、俺の時と反応が違いすぎないか。

「ハディは言い方がひどいんだよ。ケンカを売ってるみたい」

「ハディくん、同じ内容でも言い方次第で印象が大きく違うんだ。ちゃんと考えて話しなよ」

「なんで俺だけ責められるんだ!？」

俺なんか悪いことしたっけ!？

「ごちそうさまー!」

考えてるうちにメリスの食事は終わっていた。

……時間にして約30秒だ。

「兄さん、試験って何時からだっけ?」

「E級の試験は9時からだよ。C級は午後1時から」
クラス

「確か、EとD、CとBは同時にやるんだよね」

「うん。もちろん違う部屋でやるけどね」

「あれ、A級は?」
クラス

「ねえよ。今日やるのはEからBまでだ」

「え?なんで?」

「なんでって……」

小首を傾げるメリス。

そっか、こいつ今まで受けてなかったし、冒険者の試験について詳

しく知らないのか。

「A級クラスは他と違って、ギルドの本部で、年に1回しか審査が行われないんだよ」

「本部？」

「……それも知らないのかよ」

「冒険者ギルドは1つの国に4〜6つ程あるんだけど、普通のギルドとは別に、首都に本部が置かれてるんだ。」

当然、この国の場合は首都ケーキにあるよ」

「まあ本部って言っても、違いは建物が大きいのと、審査が他よりも頻繁に行われるってことぐらいだよ」

「後はさっき言った通り、A級クラスの審査が行われるってことだね」

「ふーん……そういえば、A級クラス冒険者って世界でもあんまりいないんだよな？」

やっぱり受かるの難しいのかな？」

「……難しいなんてレベルじゃないだよ」

「A級クラス冒険者の数は、現在約150人。」

去年この国で行われた審査では、300名以上のB級クラス冒険者が挑戦したけど、受かったのはたったの1名だそうだよ」

「1人!？」

「1000人受けて誰も受からないとかザラらしいからね」
「……………」

なんつーか、前も思ったけど…………。

「なんか……A級クラスだけ、他よりも異常に厳しくないか？

人数もめちゃくちや少ないし…………」

「まあ、ね。でも、それも仕方ないことだよ」

「……仕方ない？」

「そうだね……ハデイくん、E級クラス冒険者の戦闘力の目安、知ってる

「だろっ?」

「え、えー……ワイルドウルフを1人で倒せる、だっけ?」

「正解、あくまで目安だけだね。」

「A級にも似たような目安があるんだよ」

「……どなんだ?」

「前に、ジェネラルドラゴンと対峙したことがあるだろっ?」

「ああ、あるけど……」

「あれを1人で倒せる、それがA級冒険者の目安だ」

「……」

いや、無理だろ。

「他の例えだと……ブラッディヴァイン。あれを無傷で秒殺できる人間だ」

「人間じゃないだろそれ!!」

「『銀狼』や『星の賢者』ならできるだろっ」

「……」

あ、あーなるほどな。そういうことか。

“ああいう人種”じゃないとなれないってことが、A級クラス。そりゃ少ないわ。

「でも、それならB級クラスももっと少ないはずじゃ?」

浮かんだ疑問をグリーに言う。

B級冒険者は世界に約5万人だ。A級クラスと比べて多すぎないか?

「B級冒険者の目安は危険度C、つまりミドルドラゴンやブラッディヴァインを1人で倒せる、だよ」

「いや、それ十分化け物……」

「危険度Cと危険度Bの魔物では、少なくとも人間にとって、大きな違いがあるんだ」

「違い？」

「基礎魔法レベル3が効くかどうか、だよ。」

例えばブレイアム。ミドルドラゴンやブラッディヴァインには大きなダメージが与えられるけど、ジェネラルドラゴンにぶつけてもほとんど効かないだろう。

ジェネラルドラゴンを魔法で倒したいなら、それこそ基礎魔法レベル4でもないと、決定打にならない」

「……そっか、基礎魔法レベル4って、人間の力だけじゃ習得できないんだっけ？」

「そう。魔法使いでは、基礎魔法レベル4並の魔法を習得しているか、もしくは大魔導師ハイウィザードに近い魔力でも持っていない限り、A級冒険者クラスになるのは難しいんだ。」

一方B級クラスなら、基礎魔法レベル3を習得して、後は相応の魔力を持ってれば望める。一般レベルの魔法使いでは、B級クラスが終着点って言っても過言じゃないんだ」

もちろん、B級クラスも普通とは程遠いけど、とグリーが付け加える。

「剣士の例えだと……例えば君でも、コンクリートを斬るぐらいならできるだろうっ？」

「……まあ、無理ではないな。一太刀じゃ無理だけど」

「鉄を斬れって言われたら？」

「無理」

できるか、んなこと。

「A級冒険者クラスなら一刀両断だよ。でも、B級冒険者クラスは難しいだろうね」

「……なんとなく分かった。」

ようするに、A級は人間の域を超越してるわけだ。で、それに比べれば、B級はまだ人の域を出てないってことか」

「そんな感じかな。自分の得意分野を限界まで鍛え上げればB級にはなれる。だけど、A級はそれだけじゃなれない。だから数が異常に少ないんだ。」

……実際には他にも、A級は地位が高すぎるから多くなり過ぎないようにしてるとか、そこまで極めた後は引退する人が多いとか、いくつか理由があるんだけどね」

「……そういう裏の事情は、冒険者としてはあんまり聞きたくねえんだけど」

「まあ、その辺りは噂の域を出ないけどね。」

……さて、話し込んでる内に、そろそろ時間だ」

時計を見ると、針は8時30を指していた。

「メリス、心の準備はいいか？」

「もつちろん！！」

「まあ、そんなに気負わずに、平常心でね」

「うん！！」

宿屋を出て徒歩20分、冒険者ギルドの前に着く。

10分前だからか、結構人が集まってる。200……いや、300人はいるな。

「この人達みんな、E級の試験を受ける人達かな？」

「いや、D級を受けにきた人もいるだろ。中に入ってから分かれて、別の部屋で受けるんだ」

「それに、見送りの人もいるだろうけどね。」

……E級を受けにきた人達は、冒険者の卵ってところかな」

「私も？」

「……お前はもう、冒険者として依頼こなしてるけどな」

依頼こなしてるくせに冒険者の資格持ってないってのも、結構珍しいだろうな……。

と、そうこうしてるうちに、ギルドの扉が開いた。

集まっていた人達が、我先にと中に入っていく。

「がんばってねメリス！」

「油断して失敗するなよ？」

「分かってるって！それじゃ、行ってきまーす！！！」

俺達に笑顔を残し、メリスは試験へと向かって行った。

…… 1時間後。

「……ただいまー」

「おー、おかえ……」

「おかえりメリス！！どうだったんだい！？」

俺の言葉をさえぎり、グリーンが大声で叫ぶ。

…… 受験生の母親かお前は。

「えっと、それが……」

メリスが困惑気味な顔をする。

……まさか、失敗でもしたのか……！？

「ワイルドウルフを2匹フレイアで倒したら、もういいですって言われて……」

『……………』

メリスの返答を聞き、俺とグリーは顔を見合わせる。

ワイルドウルフ、危険度E以下の低位魔獣だ。E級冒険者は1人でこいつを倒せなきゃいけないって言われている。

逆にいえば、こいつを1人で倒せればE級冒険者並の戦闘力を持つてると考えることができる。

……ふむ、なるほどな。

「合格おめでとうメリス！！」

「ま、心配なんてしてなかったけどな」

「え、え！？」

「いや、正直驚くようなことじゃないだろ」

つてか、普通に考えて『魔導師』がE級に落ちるわけないし。

「……こんなに簡単に、受かるものなの？」

「簡単って……まあ、お前にとっちゃ簡単だろうよ。仮にも『魔導師』だろ、お前」

「そうだけど……」

「つてか、E級でつまずいてたら、いつまでたってもプラムさんやランディアさんに追いつけないぞ」

「あ……そ、そうだよね！！」

メリスの顔から戸惑いが消え、表情が明るくなる。

それを見て安心すると同時に、少し緊張してきた。

「さて、次は俺達の番か」
「っていつても、まだ3時間あるけどね」
「いやでも、ちよつと緊張してきた……」
「まだ緊張するには早いよ。まあ、仕方ないことだろうけど」
「そういうグリーはどうなんだよ？」
「……………」

返答がない。やっぱり緊張するよな。

「ほら2人とも！審査はお昼の後なんだから！いっぱいご飯食べて
がんばって！！」
「いや、早えよ！まだ10時だぞ！？」
「でも、お昼は早めに食べた方がいいかもね。食べてすぐだと、う
まく動けないし」
「うん！！それじゃ行こう！！」
「行かねえよ！！せめて12時まで待て！！」
「え……………」

話し合いの結果、お昼は11時半に食べることになった。
その後、町を歩いて緊張をまぎらわせていると、あつという間に時
間は12時半に。少し早いけど、冒険者ギルドへ向かうことにした。

「だいぶ集まってるな……………」
「午前の部に比べたら、人数は少ないけどね」

グリーの言う通り、集まってる人数は100人前後だ。
それに、午前と比べて年齢層も高いな。多くの人が見た目30代以
上だ。

と、その中に見知った顔を見つける。…………正確には、髪の色で分か

つただけだ。

俺がそいつを見つけたのとほぼ同時に、そいつは振り返り、俺達に不敵な笑みを向けた。

「よー」

「見送りに来てくれたのか？カオス」

「おう、「高みの見物」に来てやったぞ」

「……なんでわざわざ気に障る言い方するかな、お前は」

つてか、「高みの見物」つて……実際に審査を受けてる所を見るわけじゃあるまいし。

審査が公開されることもあるらしいけど、とりあえず今回はされていないはずだ。

「あれ、カオスさん。私E級^{クラス}受けてただけだ……」

「見てねえよ。受かると分かっているのをわざわざ見る必要ないだろ」

そついつてあくびをするカオス。

……寝てたのか？こいつ。

「ま、お前ら2人は受かるかどうか微妙だからな。見物に来ただ」

「……そりゃどーも」

「落ちたら腹を抱えて笑ってやる」

「……………」

落ち着け俺！殴っちゃダメだ！！

……とりあえず、話題を変えよう。

「カオスはC級^{クラス}の審査、受けたことあるんだよな？」

「おう、3年以上前だけだな」

「じゃあ、審査の内容とか……」

「覚えてるけど教えねえ。行ってからの楽しみだ」

「……………」

俺の言わんとしたことを察したらしく、先手を打たれる。……理由がちょっと納得いかないんだけど。

「そもそも、冒険者の審査は戦闘だろ。それに相手も毎回違う。

前の審査内容を知った所で、ほとんど意味なんてねーよ」

「でも、どれぐらいの強さの相手なのか、とか……」

「C級の審査なら、危険度Eの強い部類から危険度Dぐらいまでだろ。」

今言った通り相手は毎回違うから、弱点とか調べても意味ねえし」

「……………それもそうか」

と、少し話している内に、再びギルドが開く。

「2人とも、がんばってね!!」

「おう!」

「心配いらないよメリス。絶対に受かってくるからね!」

手を振るメリスに小さく振り返し、ギルドの中へと向かう。

「精々ががんばれよー」

「……………うるせえな。絶対受かってやるから待ってけ!!」

入る直前、聞こえてきた声に言い返し、ギルドへと入った。

少し奥まで進むと、左右に道が分かれている。左にC、右にBと書いてあるから、当然左へと進む。

と、角を曲がってすぐのところ待合室があったので、そこへ入る。

中は結構広く、70人ぐらい人がいるけど、席は半分も埋まっていなかった。

……半分ぐらいは、20代後半から30代ぐらいの人だな。後は40代以上っぽい……。

なんか、俺達より年上ばかりだ。D級の審査クラスの時は、同年代の人

も結構いたんだけど……。審査の前だからか、みんなピリピリしてるな。俺やグリーンももちろん緊張してるけど、その比じゃない。

座って少し待っていると、ギルドの職員らしき男性が入ってきた。

「皆様お待たせしました。早速ですが、審査を始めたいと思います。名前を呼ばれた方から順に、奥へと進んで下さい」

まず、5人の名前が呼ばれる。

……ってことは、審査会場は5つあるのか。

「確か審査を受けるのって、申請を出した順なんだよな？」

「うん。だから僕は最後の方になるだろうね」

「となると、結構待ちそうだな……」

と、1分も経たないうちに、また1人名前が呼ばれた。

「……早いな」

「メリスみたいにあつという間に実力を見せつけたか、もしくはその逆か、だね」

審査官が合格、不合格を判断するまで審査は続くため、審査時間は人によりけりだ。

短い人はそれこそ1分かからないし、長い人は20分以上かかる。

「まあ、C級だからまだそれぐらいだろうけど、B級やA級は1人クラスにもつと時間がかかるんじゃないかな。

その代わり人数は少ないだろうけど」

「じゃあ、全体にかかる時間は一緒ぐらいか」

「受験者にもよるだろうけどね」

雑談をしている内に時間は流れ……待ち始めて約1時間後、ようやく俺達の名前が呼ばれる。2人同時に。

「珍しいこともあるもんだな」

「ま、5つ会場があれば、こういうこともあるんじゃないかい？」

職員の人案内で廊下を歩いていると、小さく、魔物を斬る音や何かが叩きつけられる音が聞こえる。防音はしてるんだだろうけど、やっぱり少しは聞こえてくるな。

と、1つの扉の前で、職員の人が歩みを止める。

「グールド・テーナス様はこちらへどうぞ」

「はい」

言われるままに、グリーは扉を開ける。

「しつかりな」

「君もね」

最後に一声かけると、グリーは中へと入っていった。またしばらく歩き、一番奥にある扉へと案内される。

「ハディ・トレイト様はこちらになります」

「はい」

一度深呼吸して、扉を開く。
部屋の大きさは横、奥行き共に10mぐらいだろうか。床や壁は頑丈なコンクリートでできていて……一応掃除はされたんだろうけど、前の審査によってであろう、魔物の血痕が残っている。
俺から見て右側には小さな部屋があつて、この部屋とは透明な壁で区切られている。審査官はあそこから見て、審査するんだろう。部屋の中央に、1人の男性が立っていた。
その男性は俺の顔を見るなり、少し驚いた表情になる。

「おや、あなたは……」

「え？」

「ああ、いえ……こんにちは、私はギルド所属の冒険者、シント・ブライト。」

「この度、あなたの審査を担当させて頂きます」

人当たりの良い笑みを浮かべ、自己紹介をしてくれる。
薄い金色の髪は、髪質が固いのか逆立っていて、瞳は薄い栗色だ。歳は俺と同じぐらいだろうか。

「ハディ・トレイトです。よろしく願います!」

こちらも自己紹介をして、一礼をする。

「それでは早速審査を始めたいところですが、その前に……」

「あ、はい」

言われる前に、左腕につけた鉄の腕輪を見せる。

たぶん、念のため、本当にD級クラス冒険者なのか、確認をしたかったんだろう。

「はい、それでは始めましょう」

シントさんにはっこりと笑うと、透明な壁にある扉をくぐり、隣の部屋へと入る。

その直後、俺が入ってきた扉のちょうど向かい側にある扉から、2匹の魔物が檻から出され、部屋へと入れられた。

「ハンターウルフ……！」

ワイルドウルフと同じぐらいの大きさの、灰色の狼。危険度Eの魔物だが、その中では強い部類だ。

昨日は『狩人の庭』で散々苦しめられたんだよな……！

「グルルルルル……！！」

2匹は俺の姿を見るや否や戦闘態勢になった。そして、

「グオオオオオオオオ！！」

1匹のハンターウルフが俺に向かって飛びかかってくる。

身をひるがえしてかわすと、それを見計らったようなタイミングでもう一匹が飛びかかってきた。

普通なら、とっさに対応するのは難しいかもしれない。

……だけど、

「悪いな。それはもう慣れた！！」

1匹目をかわすのと同時に握っておいた剣の柄に力を込め、抜刀の

勢いでハンターウルフを切り裂く。

次いで、後ろから飛びかかってきたハンターウルフをかわし、一刀の下に斬り伏せる。

昨日もこんな感じで襲いかかってきたからな。それも、5匹とか8匹だった。おかげで、2匹ぐらいなら余裕だ。

一息つくくと、次の魔物が部屋に入れられる。

「げっ……!!」

入ってきた魔物を見て、思わず声を上げる。

体長2m程の黒い狼……!!

「キラーウルフ……!!」

間違いない、チョコレート町防衛戦で戦った魔物だ。

あの時は、レイラやメリスがいたから普通に倒せたけど、正直俺1人じゃ手に余る……。

「……いや、そんなこと言ったられないか」

ゆっくりと、夜桜を構える。

「こいつの強さは確か、危険度Dの中では、並より少し弱いぐらい。

クラス
C級冒険者なら、1人で倒せなきゃだめだ!」

俺の戦意に気づいたのか、キラーウルフも戦闘態勢になる。

「グガアアアアアアア!!」

咆哮と共に、もの凄い勢いで突進してきた。

これをまともに受けるのは、まずい！

ぎりぎりのところでかわすと、キラールルフは俺が入ってきた扉に激突する。

轟音が部屋に響き渡るが、特殊な加工でもしてあるのか、扉にはひび1つ入っていない。

それより、ぶつかった反動でキラールルフがよろめいてる！チャンスだ！

剣を振りかぶり、間合いを詰めたその時、キラールルフが振りかえった。

「っ！！」

突き出された爪が脇腹をかするが、それに構わず、剣を振り下ろす。横腹を狙いたかったけど、とっさに爪をかわしたせいで体勢が崩れ、左の前足を浅く切り裂くにとどまる。

「グガアアアッ！！」

「うおっと！！」

痛みに激昂したのか、牙を向けて襲いかかってきたため、左へ移動してかわす。

そのまま懐へ入り、ガラ空きの腹へ一閃！！

今度はうまく決まり、腹を深く斬りつけることに成功する。

しかし、

「ガアアアアアア！！！！」

「ぐっ！！」

キラールルフは怒りゆえか、腹を斬られたことなど意に介さず、体当たりしてきた。

当然、目の前にいた俺はよけられず、剣で受け止めてなんとか衝撃を緩和する。しかし、2mの巨体を持つ狼の体当たりだ。こらえきれず、後ろに吹き飛ばされる。壁にはぶつからずに済んだが、衝撃で体中が痛む。

「グウウウウ……」

「くっ……まだやるか……!!」

夜桜をキラールフに向けて。

……十数秒だろうか、俺とキラールフは互いに一步も動かず、荒い呼吸の音だけがその場を支配する。そして……キラールフは、ゆっくりとその場に倒れ伏した。

「……あ……」

……倒した、のか？

俺一人で、危険度Dの魔物を……。

なんだか実感がわかないでいた、その時。

パチパチ……と、小さく拍手の音が聞こえた。見ると、シントさんが隣の部屋から出てきていた。

「お見事です。キラールフを一人で倒せるとは」

「あ……ありがとうございます！」

審査官にほめられた……これは、もしかして……!!

「さて、お疲れの所申し訳ありませんが、もう一戦お願いいたします」

「え？」

もう一戦……！？

流石に、今からキラーウルフより強い魔物と戦うのはきついんだけど……。

俺が戸惑っている間に、ギルドの職員……もしくはバイトかなにかだろうか。3人の男がハンターウルフとキラーウルフの亡骸を片づけ、床についた血を水で洗い流す。

簡単に清掃が終わると、シントさんは俺の前に立ち、ゆっくりと剣を抜いた。

「……………え？」

「タルト町冒険者ギルド所属、クラスC級冒険者、『光芒の剣士』シント・ブライト。

……………参ります」

シントさんは『名乗り』を上げ、剣をまっすぐ、俺に突き付ける。その顔にさっきまでの笑顔はなく、薄い栗色の瞳には、好戦的な光が宿っていた。

第44話 冒険者の試練（後書き）

では、次回予告です！

「ハデイだ！

突然、剣を突きつけてきた審査官。

C級クラス冒険者との戦い、その結末は……！？

次回！冒険者ライフ！第45話『企み』！

勝負は時の運って言うしな。相手の方が強いからって、絶対負けるとは限らないだろ！」

第45話 企み

「グリーサイド」

「っ……！！」

僕は苦々しく、前方にいる敵をにらみつけた。

C級の昇格審査^{クラス}。簡単にはいかないと予想していたつもりだ。

だけど、最初に出てきた2匹のハンターウルフを思いのほか簡単に倒せたため、心のどこかで思ってしまった。いける、と。

だが、次に部屋に入ってきた魔物を見て、それは楽観のしすぎだと思いは知らされた。

「ブレードキャット……！！」

体長は1m程、しっぽの先と爪に鋭い刃が生えている猫の魔物だ。

危険度Dの中位魔獣で、戦闘力は危険度Dの中では平均並……以前、レイラさんが1人で倒していたけど……。

「フシャアアアアア……！！」

ブレードキャットは僕に向かって威嚇をしてくる。

そして次の瞬間、ものすごい速度で突進してきた。

予想通りの行動だったため、僕は慌てず、冷静に相手に銃を向ける。発砲。銃弾は正確にブレードキャットの額に命中するはずだった。

ギーン！！

「なっ!?!」

思わず驚愕の声を上げる。

放たれた銃弾を、ブレードキャットは難なくナイフのような爪で弾き飛ばしたのだ。

「くっ!?!」

立て続けに発砲するが、全てよけられるか弾かれるかだ。

普通の猫でも、その動体視力は人間の数倍だと聞いたことがあるけど、ブレードキャットはその比じゃない。

一発もかすらせることすらできず、弾切れになってしまっ。その瞬間に、ブレードキャットは飛びかかってきた。

ドオンッ!!

「ッ!?!」

直撃を受けたブレードキャットが吹き飛ぶ。しかしすぐに体勢を整え、器用に着地した。

「油断したね」

僕は銃に弾を装填をしながら、呟く。

このレベルの魔物なら、隙を見せれば即座に攻撃してくると思った。だから僕はあえて銃弾を全て放ち、相手の攻撃の瞬間を狙うことにしたんだ。

「思ったより便利だね。『空気弾』」

実弾なしで撃てるというのは大きい。切り替えがうまくできれば、弾切れのリスクがなくなるからだ。

……とはいっても、やっぱり威力が低いな。

近距離で直撃したのに、ブレードキャットには大してダメージを与えられてない。

「……攻撃より、相手をひるませるのに使うべきかな」

小さくつぶやきながら、レバーを切り替える。

その瞬間、銃が緑色に発光し始めた。

それを見て、本能的に危機を察知したのか、ブレードキャットは警戒を強める。

「……行くよ!」

発砲。“その弾”は先程の倍の速度でブレードキャットへと射出された。

人間なら反応することすら困難な速度。しかしブレードキャットはそれに反応し、ぎりぎり当たらない所まで移動してみせた。

……悪いね、予想通りだ。そうくると思ったから、足元に撃ったんだよ!

ドオオオオオオオオオン!!

「ッ!?!?」

先程までブレードキャットが立っていた所で、小規模な爆風が巻き起こる。

爆風のおりを受け吹き飛んだブレードキャットは、なんとか着地したものの、軽い錯乱状態に陥っていた。

その隙を逃さず、僕はブレードキャットの目の前まで走り、至近距離で銃を頭に突きつける。

「この距離なら、よけるのも弾くのも無理だよな」

ブレードキャットが振り向く前に、僕は容赦なく引き金を引いた。

「ハデイサイド」

「シ、シントさん……?」

俺は呆然と、シントさんを見る。

その表情は、きつと驚愕に染まっていただろう。

「……何をしてるんですか？ハデイさん」

「え?」

「名乗られたら、名乗り返すのが礼儀でしょう?」

「っ!」

冗談でも、なんでもなかった……本当に……!

「『名乗り』の意味、あなたも冒険者ならば、ご存じのはずです」
「……はい……！」

知っている。知っているからこそ、困惑してるんだ。

『名乗り』。

自分の所属、異名、本名を名乗り上げ、1人の戦士として、相手に戦いを申し込む。

遊びでも、稽古でもない。真剣な『戦い』だ。

「本気、ですか？なんで……！」

「……おかしなことをおっしゃいますね。あなたは今、ここで何をしているのですか？」

「っ……それは……！」

C級^{クラス}冒険者になるための審査。
だけど、おかしいだろ……！

「なんでそれで、C級^{クラス}冒険者と戦うんですか……！？」

シントさんの左腕につけられた銅製の腕輪を見て、やけくそ気味に叫ぶ。

これからC級^{クラス}になろうって奴が、すでにC級^{クラス}になってる人と戦うなんて……！

俺の声に、シントさんは小さく微笑んだ。

「簡単な話ですよ。私はC級^{クラス}冒険者です。

あなたが私に勝つことができれば、それはあなたがC級^{クラス}冒険者になるだけの力を持っているという証明になるでしょう？」

「……だからって……！」

「大丈夫ですよ。勝てなんて言いません。私と渡り合うだけの實力

を示せば、あなたがC級クラスを得る資格があると、判断できますからね」
「っ……………!!」

勝つ必要はない、シントさんと渡り合うだけの実力を示せばいい。……だけど、渡り合えなかったら？あつという間に負けてしまったら？

そんな不安が脳裏によぎる。

……いや、何を考えてるんだ、俺は。

さつきシントさんに言われたじゃないか。俺は、ここに何をしにきた？

C級クラスの審査を受けにきたんだろ!!それから逃げるなんて、できるわけない!!

「D級クラス冒険者、ハディ・トレイト!!」

まっすぐ夜桜をシントさんへ向け、言い放つ。

格上の相手だ。正直、勝てるとは思えない。だけど、逃げるわけにはいかない!!

「覚悟は、できたようですね」

シントさんは嬉しそうに笑い、姿勢を低くして構える。

次の瞬間、その顔から笑みが消えた。

「……………参ります」

シントさんは剣を振り上げ、突進してきた。

振り下ろされる刃に夜桜をぶつけ、受け止める。

……速い!!

数mの距離をほとんど一瞬で詰められた。剣閃の速度も相当だ。

……でも、重さはカオス程じゃない!

力任せに剣を押し返し、その勢いのまま斬りかかる。

しかし、シントさんは剣の側面で、簡単に俺の斬撃を受け流した。

「っ!!」

体勢が崩れかけたため、一步下がって間合いを取る。

「良い反応です」

シントさんにはっこりと笑う。

……まずいな、速さだけじゃない。この人の剣術、俺より数段上だ!

「しかし、距離を取ったのはまずかったですね」

「え……?」

……どういう意味だ……?

……剣士相手なら、距離を取るのには有効なはずだ。いくらすごい剣士でも、剣が届かないと攻撃できないからな。

……そんな俺の疑問は、すぐに解決することになった。

シントさんの体が、白く光ったことで。

「なっ!?!」

『集中』……!まさか!?

「光よ集え! ホーリ!」

複数の光の弾が、シントさんの周囲に現れる。

シントさんが俺に剣を向けると、それらは同時に襲いかかってきた。

「くっ!!」

即座にその場を離れ、光の弾から逃れる。

幸い、放たれた後の軌道修正はできないらしく、それらは俺の背後にあった、コンクリートの壁へとぶつかった。

……流石、魔法。コンクリートの壁がボロボロになってる。

「『魔法剣士』……!!」

「「明察」

シントさんにはっこりと笑った。

魔法剣士。その名の通り、剣と魔法、2つを使って戦う者のことだ。当然、2つの道の修業をするのはとてつもなく大変だけど、魔法剣士には大きな利点がある。

それは、『距離』だ。

普通、剣士は近距離でしか戦えない。理由は、攻撃が届かないからだ。剣を投げるって手もあるけど、それは最後の手段だ。普通やらない。

そして、魔法使いは遠距離でしか戦えない。理由は、準備に時間がかかり、近距離じゃ魔法を発動する前にやられてしまうからだ。…ランディアさんとかプラムさんレベルになれば別だけどな。

しかし、魔法剣士は近距離でも遠距離でも戦える。しかも、シントさんの剣術は俺より上だ。仮に接近戦に持ち込んでも、有利にならない!

「どうしました? ハデイさん。」

もし剣で敵わなくても、あなたは接近戦に持ち込むしかないでしょっ?」

「くっ……!」

シントさんの言う通りだ。純粹な剣士である俺には接近戦しかない。こうなったら一か八か、『集中』の隙を狙って……!

「つまり、接近戦に持ち込めなければ、それまでということですよ」

シントさんは服の中から、小さなガラス玉のような物を取り出した。

「それは……?」

「知らないんですか? 『マジックビーズ』ですよ。1つ500Gゴルドの安物ですがね。

簡単にいえば、人工の魔法石ですよ」

魔法石……? って、確か、魔力を蓄える性質のある……。

……まさか! ?

バリン!

シントさんがマジックビーズを軽く放り投げた。次の瞬間、空中でマジックビーズは砕け散る。

そして、そこから白い光が現れ、シントさんを包んだ。

「天界より光の集いを呼ぶ……」

「っ!」

この詠唱……やばい!!

「清めよ ホーリア!!」

再びシントさんの周囲に光が現れる。

ただし、さっきとは違い、球体ではなく槍の形をしている。

シントさんが剣を向けると同時に、光の槍は高速で俺に向かってきた。

「くうっ!!」

慌ててその場を離れてよけるが、今回は数が多い。さっきと違って複数同時ではないけど、次から次へと新たな槍が現れ、放たれる。

さらに、コンクリートの壁や床にやすやすと突き刺さっていることから、その威力の高さがうかがえる。これは当たっちゃまずい!! 辛くもよけ続けていたが、ただでさえ魔物との2連戦を終えた後なんだ。体力が尽きて……。

「っ!!」

1本の槍が俺の右足にかすった。それに動じて動きが止まってしまった。

その隙を逃さず、さらに1本の槍が放たれたのを見て、とっさに夜桜を槍へと向ける。

なんとか、弾けるか……!!?

バシユウウツ!!

『っ!!?』

俺とシントさんは、同時に驚愕の表情を浮かべた。
光の槍が夜桜にぶつかった瞬間、光の槍が消滅したんだ。

「それは、一体……!?!」

「そういえば……」

……カオスが言ってたな。この剣は『闇属性の魔力』を纏ってるって。

だから、光魔法を消滅させることができたのか……。

……つてか、今消滅させたの基礎魔法レベル2なんだけど。ひよっとして、この剣の魔力って相当すごいんじゃないか……?!

「……なるほど、その武器は……」

「え?」

「……いいえ、なんでもありません」

シントさんはそう言って小さく微笑む。

……とにかく、ラッキーだな。シントさんが使うのは光魔法。この剣なら対抗できる!

それに、もう1つあるじゃないか。俺があいつから教わった『武器』が!

ちょうどホーリアの効果も切れたのか、光の槍はもう来ない。シントさんとの距離は5m程。

今がチャンスだ!!

足の裏へと意識を、力を集中させる。

「……………?」

それに気づいたのか、シントさんは剣をゆっくりと構えた。

……真正面から行くのはちょっと無理か? いや、うまくいけば、大

丈夫なはずだ！

昨日、数えるのも面倒な程練習した。『狩人の庭』でハンターウルフの群れに囲まれた時は、これを使って危機を脱した。カオスの『本物』に比べれば、まだ未完成とも呼べないだろうけど、それでも、これは俺の力の1つだ！！

「縮地！！」

床を思いきり蹴りつけ、その反動で前方へと飛ぶ。その速度は普通に走った時とは比べられない程だ。

「っ！！」

流石のシントさんも不意を突かれ、対応が遅れる。もらった！！

ガギイイイイン！！

「っ！！」

「危ない所でした……！！」

俺が振り下ろした刃は、シントさんの剣によって受け止められていた。

くそっ！やっぱり真正面からは無理があつたか！悔しく思いながらも、一歩下がり、間合いを取る。

「……驚きました。まさか、『縮地』を習得しているとは「え？」

縮地を知ってる……？

そういやカオスが、縮地はいろんな武道やスポーツに取り入れられてるって言うてたっけ。

「といても、まだ『基礎』の段階のようですね。完成形には程遠いと思受けられます」
「うっ……」

悔しいけどその通りだ。

現に今、シントさんにあっさり防がれたもんな。

「ですが……それでも、十分力になっている」
「え？」
「……ハデイさん」

シントさんは剣を構え、まっすぐ俺を見据える。

……なんだ……？シントさんの雰囲気、変わった……！？

「申し訳ありません。正直な所、あなたの力を見くびっていました」
「え、は、はあ……」
「あなたの力と、そして、その剣に敬意を評し……」

シントさんはさっきと同じマジックビーズを取り出した。
それを放り投げると、また空中で砕け散り、シントさんに魔力を補充する。

「全力で、いかせてもらいます」
「っ！！」

ゾクッ！！と背筋に悪寒が走る。
なんだ……この人、何をするつもりだ！？

「邪を滅する聖なる光よ 我が剣に宿りてその力を示せ
その姿を光芒と化し 空を走りて彼の者を斬り裂け!!」

『詠唱』が進むにつれ、シントさんの剣が光に包まれ……終わる頃には、完全に光に覆われていた。

その光の剣を、シントさんはゆっくりと振りかぶる。

……やばい!!

本能的に危機を感じ、俺がその場から逃げだすのと、シントさんが剣を振り下ろすのは、ほとんど同時だった。

「光芒斬!!」

ズツシャアアアアアアアアアアアア!!

剣閃がそのまま光の刃となり、5 m以上先のコンクリートの壁に大きく、深い傷跡をつける。

……おい……マジか。なんだよ、この破壊力……!!

「『魔剣技』というやつです。

魔法はただでさえ威力が大きいですからね。それを剣に乗せて放てば、その威力は絶大です」

「……………」

俺は壁についた大きな傷跡を見て、呆然としていた。

『ホーリ』は壁をボロボロにしていた。『ホーリア』はコンクリートにやすやすと突き刺さっていた。

……でも、今のはそんなレベルじゃない。

ここが、戦いが行われることを前提に作られた部屋じゃなければ、おそらく壁1つを斬り碎いていただろう。

相手が格上だって、分かっているつもりだった。でも、甘かった……！

「どうしました？」

「っ……！」

ビクッ、と体が震える。

……まだ、勝負は終わってない。だけど……！！

「……戦意喪失、ですか？」

「…………！」

自分の状態を的確に指摘される。

……そりゃ、そうだろ。こんな力を目の当たりにしたら、どんなバカでも分かる。

……勝てるわけ、ないって。

俺の考えを察したのか、シントさんは小さく嘆息した。

「……ハデイさん。あなたはD級クラス冒険者ですよね？」

「え……はい、そうですけど……！」

「ならば、今までたくさんの依頼をこなしてきたはずですよ。」

……その中で、自分よりも強いものと戦う機会は、なかったのですか？

「っ……！」

シントさんの質問……答えはもちろん、“いいえ”だ。
特にここ最近はそのような機会が多かった。

チョコレート町で戦ったミドルドラゴン、ジエネラルドラゴン。
港町ヨーグルトで戦ったブラッディヴァイン。

普通に考えたら、俺達が勝てる相手じゃなかった。

……でも、俺達は勝った。勝てなくても、生き残った。

「あなたはその時、どうしました？あきらめて、おとなしく殺されようとしたんですか？」

「っ……………！！！」

……………違う。

確かに……………勝てるわけはないとは思った。逃げ出したくもなかった。

……………だけど、戦意は最後まで、失ってない！あきらめたりなんか、していない！！

キツとシントさんをにらみつけ、無意識に下ろしていた夜桜を、もう一度相手へと向ける。

「……………そこなくては」

シントさんは挑発的な笑みを浮かべ、再度マジックビーズを取り出す。

それを見て、俺は剣を構えてシントさんへと走り出した。

一か八かの策だけど……………！！

「っ！！」

シントさんは慌ててマジックビーズを放り投げ、魔力を補充する。
やっぱりな。

マジックビーズという道具を使うことで、『集中』を省略することはできる。

だけど、魔法の準備には後2つ、『詠唱』と『呪文』がある。さっきまでは、攻撃に備えるためにできるだけ距離を取ってたけど、魔法を使う人と戦う場合、やっぱり最善策は『先手必勝』だ！

「光芒斬!!」

後数歩という距離で、先程の『魔剣技』が繰り出される。間に合わなかった……けど、想定内だ！

「はあああああああ!!」

襲い来る光の刃に、夜桜を思いきり振り下ろす。

『ホーリア』と違って消滅させることはできず、重なった白と黒の刃が激しく火花を散らす。腕にかなりの衝撃が来たけど……これくらいなら耐えられる！『詠唱』を省略したせいで、さっきと比べてかなり威力が低くなってるみたいだ！

これなら……！

「うおりゃあああ!!」

気合いと共に最大限の力を込めて、光の刃の軌道を少しだけ左へそらすことに成功する。

よし!!しのいだ!!

「っ!!」

これには流石のシントさんも驚いたらしく、一瞬隙ができる。だけど、まだまだ。ここから普通に走っていったら間に合わない。た

だ接近戦に持ち込むだけじゃ、勝てない。
だから！

「縮地！！」

足のためにおいた力を解放し、至近距離まで一気に移動する。

俺がカオスに教えてもらった『縮地』。

その特徴は速度だけじゃない、ためがないということだ。

……正確には全くないわけじゃない。カオスですら、ほんの一瞬だけとはいえ、ためは必要らしい。

だから、そのために相手に気づかせない。それが『縮地』の真骨頂だそうだ。

俺はためも長くかかるし、隠す技術も未熟だから、普通に相對していたら、確実に気づかれるだろう。

だけど、シントさんの意識が他へと向いていれば。

例えば、“自分の放った攻撃を相手が受け止め、その結末がどうなるか見てる最中”とかなら。

気づかれずにためを作ることだって可能だ！！

真正面だと、さっきみたいに即座に対応される可能性が高い。

だから、俺から見てシントさんの左側、振り切った剣から一番遠い位置へと着地する。

同じ手が何度も通用するとは思えない。これがたぶん、最後のチャンスだ！

後は夜桜を、シントさんの首に突きつけるだけ……！！

「……っ！？」

「……………」

……想定外のことが、起こった。

俺は、いくらシントさんでも、あの必殺の一撃を放った直後なら、隙ができる。その隙を突けば、対応できないはずだ。……そう思っていた。

だけど、やはり流石はC級クラス冒険者というべきか。シントさんはきっちりと対応してきたんだ。

それも、俺と全く同じ動きで。

「うっ……………」

そう、俺が夜桜をシントさんの首へ突きつけようとした瞬間、シントさんの剣が俺の首に突きつけられた。

……実際、俺の剣もシントさんの首に突きつけている。はたから見たら、引き分けに見えるかもしれない。

……………でも。

俺は夜桜を手から放し、小さく両手を上げた。

……感覚的に、分かってしまった。コンマ数秒、シントさんの方が速かった……………」と。

「……………」

そんな俺の様子を見て、シントさんはフツと笑みを浮かべる。

「それでは、これで審査を終わりたいと思います。お疲れ様でした」

「……………はい。ありがとうございました」

俺は夜桜を鞘へと納め、最後に一礼して、部屋を出ていこうとした。その時、シントさんの声が聞こえた。

「結果発表を、楽しみにしてて下さい」

俺が驚いて振り向くと、シントさんは笑顔で一礼し、反対側の扉から出ていった。

「ハデイおつそーい!!」

「……いやいや、そんなこと言われてもな」

戻るや否や、いきなりメリスに文句を言われる。

「審査時間は人によりけりなんだから、しょうがないだろ」

「それはそうだけど……」

「でも、本当に遅かったじゃないか。20分以上かかってるよ」

「あー、うん。審査官と戦ったんだよ」

「……審査官と?」

グリーは目を丸くする。

うん、やっぱり普通は戦わないよな。

「……そんなこともあるんだね」

「グリーはどうだったんだ?」

「ハンターウルフ2匹とブレードキャット1匹。なんとか全部倒せたから、望みはあるかな」

「ハデイは？」

「ハンターウルフ2匹とキラールウルフ1匹。その後審査官と戦った。

……審査官には負けちまったけど」

「そりゃそうだよ。審査官は最低でもC級クラスだからね」

「一応、惜しいところまでいったんだけどな……。」

あれ、カオスは？」

今更ながら、カオスがいないことに気づく。

「少し前に帰ったよ。待つのが飽きたってさ」

「……何しに来たんだ。あいつ」

本当にマイペースっていうか、自由奔放っていうか……。

「まあいいや。疲れたから宿屋で休みたい」

「それじゃ、少し休んでから打ち上げにしようか」

「はい！！私焼肉が食べたい！！」

「かってこい」

「パシリ!？」

「違う。狩ってこい」

「狩り!？私1人で!？」

「却下だハデイくん!!疲れてるメリスを働かせるなんて論外だぞ
!!」

「いや、こいつ全然疲れてないだろ!!」

もちろん、本当に1人で行かせる気はないけど。

「そっぴやグリー、結果発表っていつだっけ？」

「3日後だよ。それまではこの町でゆっくりしよう」

「だな……」

「この町って何がおいしいのかな？」

「お前は1回食べ物から離れろ」

「死んじやうよ!？」

「死なねえよ!! どんだけ食べ物好きなんだお前!？」

ギヤーギヤーと軽口を叩きつつ、俺達は宿屋へと戻っていった。

さて、審査も終わったことだし、結果発表までどうやって暇をつぶすかな……。

くサイドアウトく

出店に戻ったカオスは、昼寝をしながら客が来るのを待っていた。と、その気配を感じ、カオスは目を開き、机に預けていた体を起こす。

店に入ってきたその人物を、カオスは驚くことなく迎えた。

「よー、久しぶりだな。シント」

「ええ、ギルドの前であなたを見た時は驚きました。

まさか、またあなたに会えるとは思っていなかったのよ」

「ま、縁があつたんだろ」

不敵に笑うカオスに、シントは笑顔のまま問う。

「何を企んでいるんですか？」

「……………」

「『絶望』カオス・スファイア。3年前にあなたが表舞台から消えてからも、あなたの目撃情報はたまにあつたようですね。

そして……………あなたが目撃された場所には、放っておいたら数百人以上の犠牲者が出ていたような、災厄の痕跡が見つかったそうです。普通なら、あなたがその災厄を排除したと考えるのが妥当でしょう。しかし、実際にはあなたではなく、あなたがその災厄に立ち向かうようけしかけた者達が、排除することが多かったようですね。私……………のように」

カオスの返答も待たず、シントは続ける。

「……………次はあの3人を、『主人公』に仕立てるつもりですか？」

「だったらどうする？」

「……………」

不敵に笑うカオスに、シントは小さく嘆息する。

「……………どうもしませんよ。あなたがバックについているのなら、何の心配もいらないうし……………」

「意外だな。てつきり手伝わせろって言うてくるかと思っただぜ」

「……一度剣を合わせれば、その者がどういう者なのか、少なからず分かります。」

あなたが選んだあの剣士は、信用に値する。そう判断しただけですよ」

では、と最後に一礼して、シントは店を出ていった。

シントが去ってから、カオスはポツリと呟く。

「イレギュラーはなし、か。まーいいや。」

あいつらならたぶん、あいつを救えるだろうからな」

大きくあくびをして、カオスは再び昼寝を始めるのだった……。

第45話 企み（後書き）

では、次回予告です！

「メリスだよ！

結果発表までどうやって時間をつぶそうかと思う私達に、カオスさんが頼み事をしてくるの。

その内容は……うーん、おとぎばなしみたいで、ちょっと信じられないかな。

次回！冒険者ライフ！第46話『よくある伝説』！！

でも、夢があっといういよね！本当だったらどうしよっかな……」

第46話 よくある伝説

「そうそう、お前らにちょっと頼みがあるんだ」
「頼み？」

眠そうにあくびをしながらカオスは言う。

この日、明後日にある審査の結果発表まですることのない俺達は、
適当に出店を見たついでに、カオスの店に顔を出していた。

……ちなみに、現在時刻は午前9時だ。なんで眠そうなんだこいつ。

「こ、この肉まんはあげないからね!!」
「違うだろ」

ついさつき、出店で買った肉まんを隠すメリスにツッコむ。

ちなみに、少し前に朝ご飯食べたのもう間食かよ、とはツッコま
ない。面倒だからな。

「少し前に朝ご飯食べたのもう間食かよ」
「お前がツッコむんかい!!」
「代わりにツッコんでやったんだ。感謝しろ」
「頼んでねえよ!!」

不敵に笑うカオスにツッコむ。
つてか、ナチュラルに心読むな!!

「……あれ?なんでカオスさん、私が朝ご飯食べたこと知ってるの
?」

「遅い!!んでツッコむところも微妙におかしい!!」

今の時間考えたら、少し前に朝食食べただろうってことぐらい察しがつくだろ！

「ハデイが言ってたぞ、心の中で」

「あーなるほど！」

「納得すんなあぁー!!」

なんでこいつらそろって読心できるんだよ!?!しかも俺ばかり!!

「それで、頼みごとって？」

話が脱線しかけていたのを見て、グリーンが話を戻す。

「そうそう、お前ら『願いの珠』って知ってるか？」

「『願いの珠』？」

聞いたことない単語に俺とメリスは首を傾げる。

「確か…… “どんな願いでも叶える、究極の魔法具” だと聞いたけど」

「……なんだ、そのうさんくさ過ぎる魔法具」

確かに魔法は結構なんでもありだし、そういう伝説の道具みたいなのも聞いたことあるけど、“どんな願いでも叶える” っていうのは、流石にな……。

「なんでも、20年程前にこの町に住んでた魔科学者が、そういう道具の研究をしてたらしいよ」

「ちよっと待ってグリーン、なんでそんな地元の話を知ってたんだ？」

「今朝、宿屋の人に聞いたんだよ」

「あ、なるほど」

それで詳しく知ってるのか。

「でも、こんなただの伝説だろう？」

その魔科学者がいたというのは本当らしいから、そこから噂に尾ひれがついただけのものだと思うんだけど」

「ま、普通に考えたらそうだな」

カオスはグリーの意見を肯定しつつ、不敵に笑う。

「だが、今お前が言った通り、その魔科学者は実在した。んで、その魔科学者が『願いの珠』を作ろうとしていたってのも事実らしい」

「……おい、まさか、その『願いの珠』を持ってこいなんて言わないよな？」

「んなわけないだろ」

カオスが呆れたような顔をする。

だよな。いくらなんでもそんな物が本当にあるなんて思う奴は、

「その『願いの珠』を捜してこい」

……いた。俺の目の前に。

「待てコラ、今お前そんなわけないだろって言っただろ!!」

「“持ってこい”なんて言ってるねえ。“捜してこい”って言ったんだ」

「大して変わらないだろ!!」

くそ、絶対わざと言ってるなこいつ……！

「……捜してこいなんて言われても、どこにあるのかなんて、僕達には見当もつかないよ？」

当時その魔科学者が住んでたアパートも、今は違う人が住んでるらしいし」

「安心しろ。ちゃんと調べてあるからよ。」

その魔科学者だが、町の連中の話によると、毎日朝早く町を出て、夜遅くに帰ってきてたらしい。

当時、気になった奴が後をつけていってみたら、そいつは『守護の森』へと入っていったんだってよ。

さらに、それから数年後、魔科学者は町を出ていったんだが、その後には『守護の森』でそいつを見たって情報もあるらしい」

「『守護の森』？」

「この町から徒歩30分ぐらいの所にあるでかい森だ。なんでも『守り神』が住んでるとかで、一般人はあんまり近づかないらしいぜ」
「……なるほど、確かに怪しいな」

まあ、本当にそんな魔法具があるとは、やっぱり思えないけど……。

「ま、俺はその伝説の真否が気になるだけだからな。別に手に入らなくてもいいし、仮に手に入ったらお前らが使っていていいぜ」

「ほ、本当!？」

「メリス、あくまで伝説の物だからな？」

「あ、うん……」

しゅん、となるメリス。

本当にあつたらそりやすごいけど、やっぱりなあ……。

「そうそう、伝説によると、『願いの珠』は『ディザイア・ガーディアン願いの守護者』とや

らが守ってるらしいから、一応気をつけていけよ?」

「ガーディアン? ゴーレムみたいなもんか?」

「確かに、財宝とか古代の遺産とかには、ゴーレムなどの『自立魔導兵器』が配置されてることが多いらしいからね。

もし本当に実在したら、そういうった類のものがあってもおかしくはないよ」

グリーンが俺の疑問に補足をくれる。

「ゴーレムか……そういう奴らって再生能力とか持つてることが多いらしいんだよな。あんまり戦いたくねえ。

「……というか、なんで僕達に頼むんだい? 君が行ったらいいじゃないか」

「やだよ、めんどくせえ」

「言い切りやがったこいつ!」

グリーの質問に悪気の1つもなく答えるカオス。

めんどくさそうにあくびをしつつ、さらに続ける。

「言っとくけど、理由はそれだけじゃねえぜ?」

「……まだあるのか?」

「ああ、考えてもみる。俺が『守護の森』へ行つて、『願いの珠』を見つけたとする。

伝説の通りなら、『ディザリア・ガーディアン願いの守護者』が俺に襲いかかってくるだろ?」

「まあ、そうだろうな」

「その時、俺だったらなんの苦労もなく、簡単にそいつを倒しちゃうだろ」

「……まあ、そうだろうけど」

自分で言うか、そういうこと。

「だが、お前らだったらかなり苦戦するだろ。なんたって伝説の魔法具を守ってる奴が相手だからな」

「……ごめん。何が言いたいのかよく分からねえ」

正確には、分かりたくねえ。

「ようするに、俺が行ってパパツと終わらせちまうより、お前らが苦勞してるのを見てた方が面白いだろ。俺が」

「逆に清々しいぐらい自分本位だな、てめえ!!!」

「俺はめんどくせえことを人に押しつけて、そいつが苦勞してるのを笑いながら見てるのが好きなんだ」

「人としてアウトだその発言!!!」

あつれー、こいつ確か『伝説の冒険者』じゃなかったっけ? いや、今更だけどな!

「おいおい、まさか拒否なんてしないよな? お前ら俺に“借り”があるだろ?」

「うっ……武器の件か」

「おう」

そっぴや、金以外のことで返せ、とか言ってたっけ……。

「頼みを聞いてくれたら、それはチャラにしてやるよ」

「……チャラ? この程度のことか、かい?」

「そっただけど?」

「……」

カオスの言葉に、グリーは訝しげな顔をする。

……確かに、下手すると数億^{ユーロ}G分の借りが、こんなことぐらいでチャラになるなんて、普通に考えたらありえないよな。

でも、正直、カオスの金銭感覚つてめっちゃくちやみいだから、こいつに限ってはあり得るんじゃないかと思う。

「んで、どうすんだ？」

「……まあ、やるけど」

不満がないと言ったらウソになるけど、これぐらいであの件がチャラになるんなら、やらない手はない。

「じゃ、行きは送ってやるからよ。準備ができたらまた来な」

「え？別に今からでもいいけど……」

「あのな、『守護の森』は『狩人の庭』の5倍ぐらいある巨大な森だぞ」

「……そんなにでかいのか？」

「この辺にある森の中では一番だな。」

そんなところを、あるのかどうかすら分からない手掛かり求めて歩き回るんだ。少なくとも、昼飯ぐらいは持っていくことをお勧めするぜ？」

カオスは笑いながら言った。

……なんか、カオスがめんどくせえって言った理由が分かった気がする。

つてか、本当に面倒事押しつけて楽しそうだなこいつ！

「それじゃあ、昼食と夕食の食材、あと、一応テントも持っていこうか」

「テントは別にいらないだろ。今日中に見つからなかったら、一旦

「帰ればいいんだし……」

「念のためだよ。最悪、遭難とかする可能性もあるからね」

「あ、確かに……」

「だったら、もっと食べ物持っていた方がいいんじゃないの？」

「あー、それは大丈夫だ。『守護の森』には食べれる魔物や動物が結構いるからな。調理器具さえあれば何ヶ月でも過ごせるぞ」

「いや、何ヶ月も過ごす気はないけどな!？」

「グリーなら食用になるかどうかぐらい判別できんだろ？」

「まあ、ある程度はね」

「うわ、無視された……」

とりあえず、宿屋から調理器具やテントを持ってきて、準備は完了と。

「んじゃ、頼んだぜ。適当にがんばれ」

「やる気なくすな、おい……」

「んじゃ、死ぬ気で頑張れ」

「極端だなてめえ!!」

「ほらハデイくん、これから下手すると一日中歩くことになるんだから、無駄な体力は使わない方がいいよ？」

「お、おう……」

それもそうだな。ツッコミも体力使うからな……。

「死んだら骨は拾ってやるよ」

「なんでそういうことばかり言うかなてめえは!!」

「んじゃ、拾わねえ」

「そういうこっちゃんえよ!!」

「ハデイくん、乗せられてる乗せられてる」

「あはは、ハデイって単純だもんね」

「お前には言われたくねえ!!」

「ほら、無駄話はこれぐらいにして、そろそろ送るぞ」

「てめえだ無駄話を始めたのは!!」

「あーはいはい、んじゃな。空間転移^{テレポート}」

カオスが魔法を発動し、次の瞬間、俺達は巨大な森の前にいた。

「っと、いきなりだとやっぱり驚くな、これ」

「……これが、『守護の森』だね」

「おう……正面からじゃよく分からないけど、とりあえずかなりでかっぽいな」

目の前には、無数の木々が茂っている。

森だから当たり前だけど、昼前にもかかわらず、中は薄暗いところからでも分かる。

「グリーン、そっぴやこっつてどんな魔物が出るんだ？」

「そんなに強力なのはないけど、キラーウルフが出ることもあるらしい。油断は禁物だよ」

「キラーウルフか……ま、3人なら大丈夫だよな」

俺1人だったら苦戦するけど、メリスとグリーンが一緒なら、普通に倒せるはずだ。

「それじゃ行くこうか。ここで立っててもしょうがないからね」

「おう！」

「出発進行ー!!」

「元気だなお前……」

無駄にテンションの高いメリスに呆れつつ、俺達は『守護の森』へ

と入っていった……。

「サイドアウト」

「……行ったか」

タルト町の出店の中で、カオスは呟いた。

「さて、ここまではおおむね計画通りだな。

……なんのイレギュラーもないのが、少しつまんねえけど」

小さくあくびをして、さらに続ける。

「後は釣れるのを待つだけか……あー、それまで暇だな。

……寝るか」

机に体を預け、カオスはその場で昼寝を始めた……。

第46話 よくある伝説（後書き）

では、次回予告です！

「グリーだよ。」

『願いの珠』の手掛かりを求めて、『守護の森』を歩く僕達。日も暮れ始めた頃、僕達は1軒の家を発見するんだ。

次回、冒険者ライフ！第47話『森の中の家』。

……とりあえず、無関係ではなさそうだね」

第47話 森の中の家

「うおりゃあっ!」

気合いと共に襲いかかってきたワイルドウルフを斬り伏せる。
森に入って早1時間……これで10匹目だ。

「……なんか、やっぱり狩りでもないのに殺すのってやだな」

「襲いかかってくるんだからしょうがないだろう。自然界は弱肉強食だからね」

グリーの言う通りだけど、後から死体を見ると、やっぱりいい気はしない。

「せめて毛皮とか取れればいいんだけど……」

「いちいちそんなことしてたら、あっという間に日が暮れちゃうよ
そう言いつつ、グリーはワイルドウルフの死体をわき道へと運ぶ。

「道のど真ん中にさらしておくのは、流石によくないからね」

「墓とか……」

「それは流石に時間がかかるよ。ほっといても、ちゃんと自然に還っていくから問題ないって。」

「……それにしても」

パンパンと軽く手を叩いて、グリーは呟く。

「手掛かりって言っても、何を捜せばいいんだろうね」

「何って、『願いの珠』でしょ？」

「……メリス、『願いの珠』がその辺にポンと置いてあると思うか？」

「ないの!？」

「ねえよ!!もしそうだったら、いくらなんでも他の誰かが見つけてるだろ!!」

この『守護の森』は守り神がいるからって、タルト町の住人はあんまり来ないらしいけど、全く人が来ることがないってことはないだろう。その証拠に、人が通れるような道がある。

だから、いくらこの森が広いからって、野ざらしにされてたら、流石にもう誰かが見つけてるはずだ。

「やっぱり、どこかに隠してあると考えるのが妥当だろうな」

「どこかって……どこ？」

「いや、それが分からないから困ってるんだろ……」

正直な話、見当もつかない。隠せるような洞窟でもあれば別だけど、そういうのも今の所見つからないし。

……あー、早くもカオスの頼みを聞いたことを後悔しそうだ。

「まあ、おそらく『隠れ家』に隠しているだろうけどね。

問題はその場所が全く分からないことだけだ」

「……『隠れ家』？」

グリーの呟きに、思わず問い返す。

「忘れたのかい?その魔科学者は、タルト町を出てからもこの森で目撃されてるんだ。

だったら、この森の中に住みこんでいる可能性が高いだろう」

「あ、なるほど」

つまり、この森とタルト町を往復するのが面倒……もしくはその時間が惜しくなって、この森に住むようになったってところか。

「……でも、なんでわざわざこの森に来てるんだらうな。研究なら、町の方がやりやすいんじゃないのか？」

「さあね……この森に必要な材料でもあったのか、もしくは、この森そのものが必要だったのか」

「……森が、必要？」

「ああ、ハデイくんは魔力がほとんどないから分からないだろうけど……メリスは分かってるよね？」

「うん」

グリーの問いかけに、メリスがいつになく真剣な顔で傾く。

「この森……『神佑地』だよ」

「……え？」

『神佑地』って、確か……。

「名前通り、『守り神』、もしくは『土地神』の存在する場所のことだよ。

『神佑地』は普通の場所と比べて、大気中の魔力がかなり多く、質も良い。

……にもかかわらず、強力な魔物が住みついてないってことは、おそらくここにいるのは『守り神』だらうね」

「……森を守るために、強い魔物が来ないようにしてるってことか？」

「そういうことだよ。『土地神』だったら、どんな魔物が来てもあ

んまり気にしないだろうからね」

確か……『守り神』はそこに生きる生命も土地も守るけど、『土地神』は土地さえ荒らされなければ、後は気にしないんだっけ？
まあ、その『神』の性格にもよるらしいけど。

「でも、なんだか変だよ、この森……」。

『神佑地』にしては、魔力に神々しい感じがしないっていうか……
「……」

「……そうなのか？」

「うーん……そういう感覚はメリスの方が上だから、僕にはなんともいえないけど……」。

確かに、『神佑地』にしては魔力が弱い気はするね。もともと、『神佑地』の魔力はそこにいる神の力に比例するらしいから、単純にここにいる神が、そこまで強くないってことじゃないかい？」

「……そういう話は、俺はさっぱりだな」

俺は魔力がほとんどないから、魔力を感じる力も当然ない。
そういうのは一応メリスが一番なんだよな、仮にも『魔導師』だし。

「ハデイ、“一応”とか“仮にも”とか失礼だよ!!」

「悪い悪い、今度から気をつけるな」

「……兄さん！ハデイが『心読むな!』ってツツコんでくれない!!」

「ハデイくん！なんでツツコまないんだい!!」

「うるせえ!!いつまでも同じネタにツツコんでももらえるとと思うなよ!??」

……なんだこの会話。

「話を戻すけど……まさか、『神』と戦うような展開にはならないよな？」

「……ならないでほしいね、シャレにならないから」

『土地神』とか『守り神』は『神』の中では弱い部類らしいけど、それでも俺達の手に負える相手じゃない。軍隊が出動するレベルの相手だ。

……勝てるか、死ぬわ。

「魔物で例えると、ほとんどは危険度AかA以上だよ、中には危険度B程度のもいるらしいけど。」

……そもそも、魔物じゃないんだから戦うことなんてほぼないんだけどね」

「危険度Bでも十分勝てないから。普通に秒殺されるだろ」

「仮に倒せても『神殺し』になっちゃうからね。勝てる勝てない以前に、戦いたくない相手だよ」

小さく嘆息し、グリーは続ける。

「でも、本当に『願いの珠』が実在したら……この森の神が関わってる可能性は大だね」

「……神の力なら可能だったのか？ “どんな願いでも叶える道具”が」

「それは流石に言い過ぎだろうけど……それに近いものなら、ね」「近いもの……か」

神の力を宿した道具……なんか、とんでもないものじゃないか？ それ……。

「ま、どっちにしろ『願いの珠』を捜すことには変わらないよ」「ま、どっちにしろ『願いの珠』を捜すことには変わらないよ」

「でも、場所が分からないだろ。その魔科学者の『隠れ家』も」
「そうだけど……とりあえず、今朝、宿屋の人に聞いた限りは『隠れ家』の情報はなかったよ。」

それは逆にいえば、そんなに簡単に見つかる場所にはないってことだ」

「……んじゃ、あんまり人が行かないような、奥の方を捜した方がいいってことか」

「そうなるね」

時間かかりそうだな……それに、迷わないように気をつけないと。

「あ、見てハデイ！あの木の实おいしそう!!」

「能天気だなてめえ!!」

俺とグリーの話聞いてたのか……？

いや、聞いてても理解してなさそうだ、メリスだし。

「手掛かりは少ないけど、捜してみるしかないね」

「……だな」

なんか、かなり面倒な頼みを聞いてしまった気がしてきた。

……まあ、どの道明後日までは暇だし、いいか。

その後、俺達は途中で休憩や昼飯を取りつつ、『願いの珠』を捜し続けた……。

「……………はあ」

だいぶ疲労がたまった足を軽く押さえて、思わずため息をつく。

「……………全っ然ねえじゃねえか！！」

いくら捜しても木しか見つからないし、魔物としか会わねえ！！」「落ち着いてハデイ、近所迷惑だよ」

「誰が迷惑するんだ誰が！？」

こんな深い森の奥地で騒音を気にする奴なんていないだろ！！途中で人が通るような道も途絶えて、そこからずっと獣道だし！！

「キラールフも出てくるし……………かなり奥まで来たみたいだね」「倒しても何の利益もないから、正直戦いたくねえんだけどな」

整備された道じゃないから戦いにくいし。まあ、死体をそのままにしておけるのはいいけど。

「ってか、もう相当歩いたよな……………今何時だよ」

「えーっと……………5時過ぎだよ」

「うわ、もうそんな時間になってたのか……………」

歩くのに集中してたのと、ここが森の中で太陽の位置がよく分からないから、全然気がつかなかった。

「……まずいね」

「どうした？グリー」

「……道が分からなくなった」

「……え？」

後ろを振り返る。

そこには、視界一杯の木や草しか見えなかった。足元にも草が茂っているため、自分達が歩いてきた道すらも分からない。

……え。

「ちよっ……おい、まさか……遭難……！？」

「……しかも、後1時間半もすれば日が落ちる。」

そうなれば辺りは真っ暗になってしまっ……危険過ぎるよ」

グリーの言う通り、この森は魔物の巣窟だ。

今はまだ薄暗い程度だから大丈夫だけど、真っ暗な中突然魔物に襲われようものならひとたまりもない。

「……ごめん。十分気をつけてたつもりだったんだけど」

「いや、無理もないって。こんだけ長時間獣道を歩いてたからな。」

しかも、時々魔物が襲ってくるんだ。俺なんて途中からすっかり忘れてたぞ」

「そっだよ兄さん！私なんて最初から全く考えてすらいなかったよ！！」

「お前には初めから期待してねえ」

「ハデイひどい……！」

「つと、漫才やってる場合じゃないな」

幸いテントは持ってきてるから、なるべく安全な場所にテントを建てて、今日は野宿にするか。

火でも焚けば魔物はそうそう近寄ってこないだろうし。まあ、念のため交代で見張りはするべきだけど。

「……………あれ？」

「ん、どうした？メリス」

「何だか、変な感じがして……………」

「って、おいメリス！」

まるで何かに引き寄せられるように進むメリスの後を慌てて追う。しばらく歩くと……………、

「って、あ！？」

なんと、人が通ったような道を発見した。整備されてるわけじゃないけど、獣道って感じでもない。長い間誰かが歩いてる内にできた道って感じた。

「グリー、これ……………」

「うん、人がいる可能性が高いね。

メリス、その変な感じは、どこからするんだい？」

「えっと……………こっち！」

メリスはその道の先を指差す。

もし、この道が『願いの珠』の研究をした魔科学者によって作られたものなら、その“変な感じ”ってのは、まさか……………！

「よし、行ってみよう」

「慎重にね」

「分かってるって」

そうして道を進むこと十数分……。

「……おい、これ……」

「……うん、見つけたね」

「うわあ……立派な家!!」

俺達の目の前に現れたのは、一家族ぐらいなら住めそうな大きさの一軒家だった。

森の中だけど、その家の周りにはちゃんと手入れがされていて、家庭菜園みたいなものもある。誰かが住んでるのは間違いない。

……ってというか、家の中に明かりがついてるし。

「で、メリス。その“変な感じ”って、この家の中からするのか？」

「えっと……あれ？」

俺の質問に、メリスは首を傾げる。

「消えちゃった」

「……え？」

「確かにこっちの方からしたと思うんだけど……」

メリスはきよろきよろと周りを見渡すが、やがて諦めたのか、もう一度首を傾げた。

「……とりあえず、扉を叩いてみるか」

「油断はしないようにね。極論、いきなりゴーレムの類が襲いかかってくるかもしれないし」

「怖いこというなよ……」

ありえそうだから余計怖い。

でも、ここまで来たからには行くしかない。何より、もうすぐ日が落ちるからな。

『願いの珠』と関係あるうがなかるうが、この家に泊めてもらうのが一番だ。……関係あったら、泊めてもらうのは逆に危険かもしれないけど、その時はその時だ。
チャイムはついてなかったので、コンコンと扉を叩く。

「……はい」

少し遅れて、女の人の声がした。

……女の人の人？

不思議に思っていると、がちゃ、と音がして、扉が少しだけ開く。

「……あの、何かご用ですか？」

「あ、えっと……」

しまった、なんて言えばいいんだ？

『願いの珠』のことは言わない方がいいよな。もし関係があったら、泊めてくれないかもしれない。

「突然すみません、道に迷ってしまって……」。

もうすぐ暗くなってしまいますし、よろしければ一晩泊めて頂けませんか？」

と、グリーが代わりに返答してくれる。

流石グリー、これなら怪しまれずにすむな。

「……分かりました、どうぞ」

女性は少し戸惑った様子だったが、扉を開き、中へと入れてくれた。

「ありがとうございます！あ、俺、ハディ・トレイトです」
「僕はグールド・テーナスです。突然押しかけてしまって、すみません」

「私メリス・テーナスです！よろしく！！」

家の中へと入り、女性に自己紹介をする。
それを見て、女性は小さく笑みを浮かべた。

「どうも……私はイリナ。イリナ・ガルディデス、です」

頬笑みながら、イリナさんは自己紹介してくれた。

グリーの髪よりも明るい、灰色というより銀色といった方がいい髪、瞳は俺と同じ黒色だ。

肩まで広がった銀髪もあって、“かわいい”とか“美人”っていうより、“きれいな人”って感じた。

歳は俺達と同じぐらいに見えるけど、落ち着いた雰囲気のおかげ、少し年上のような感じがする。

「はい、よろしくお願いします！」

「変わった苗字ですね！！」

「うんうん変わった……っておい！！」

いきなりメリスが失礼なこと言いやがった！！

「すみません、こいつバカなので！」

「ハディひどい！！」

「お前の方がひどいだよ！！」

「いえ、気にしないで。自分でもそう思うから」

さして気にした様子もなく、イリナさんは微笑みを浮かべたままだった。

良かった、機嫌を損ねたりはしてないみたいだ。

「ちようど、今から夕食を作る所なの。少し待っていて」

「すみません、夕食まで……」

「あ、手伝います!!」

びしっと手を上げるメリス。

その様子に、イリナさんはクス、と笑いをこぼした。

「ありがとう。……敬語はいいわ、歳、近そうだから」

「うん！あ、呼び捨てでもいいかな？私もそれでいいから!!」

「ええ、構わないわ」

……なんか、早くも打ち解け始めてるな。この辺りは流石メリスと言えるかもしれない。

そついやレイラとも、会ったその日に打ち解けてたもんな。

「お2人は居間で待っていて。少し時間がかかるかもしれないけれど」

「あ、僕も手伝……」

「いいてば！男は待つてなさい!!」

「なんだそのキャラ」

メリスに申告を却下され、グリーはしぶしぶ引き下がる。

「2階に上がってすぐ右の部屋が空いているの。」

後で布団を持っていくわ……部屋は一緒に良いかしら?」

「はい、大丈夫です。それじゃ、荷物置かせてもらいますね」

「ええ」

イリナさんとメリスは奥へと歩いていった。台所に行ったんだろうな。

んじゃ、俺達は荷物を……、

「って、どうした？グリー」

「いや……」

グリーがついて来ていないのに気づき、呼びかける。

グリーは少し考えるようなそぶりをした後、階段を上がってきた。

「……イリナさんか？」

「心配だけど……大丈夫だと思うよ。少なくとも、今のところは」

グリーは少し険しい顔をする。

さつき2人について行くこうとしたのも、メリスが心配だったから、つまり、イリナさんがまだ信用できないからだろう。今会ったばかりだし……何より、場所が場所だ。いきなり信用するのは不用心すぎる。

それでも大丈夫だと判断したのは、イリナさんから敵意を感じなかったからだろう。

そんなものを感じたなら、俺だってメリス1人で行かせたりしない。

「変に警戒したら、逆に怪しまれるかもしれないからね。夕食の時に探りを入れてみよう」

「おう」

この家……そして、イリナさんが『願いの珠』と関係あるのかどうか。

年齢から考えて、イリナさんがその魔科学者ってことはないだろうけど……何かしら関係があるかもしれない。

「年齢からすると孫……かな。その魔科学者、20年程前に50代だったらしいから」

「名前は分からないのか？」

「聞いてないよ。そもそも、世間話ぐらいのつもりだったからね」

「そっか……よく世間話をそんなに覚えてるな」

「バカにしちやいけないよ、何気ない会話にだって有用な情報が含まれてるんだからね。」

実際、こうして役に立つことも多いよ」

「なるほど」

グリーの知識は大体本によるものだと思ってたけど、実際には世間話とか、風の噂とか、そういう他人とのコミュニケーションによって得た情報も多いんだろうな。

「と、ここか」

イリナさんに言われた部屋に着く。

3人どころか、5、6人ぐらい泊まれそうな広い部屋だ。掃除も行き届いてる。

ただ、少し気になったのは……、

「……本、多いな」

1つの壁が本棚で埋まってることだ。

読書家なのか……？

「魔法書や魔物図鑑に、名のある冒険者の手記、剣術の指南書……」

「……なんか、分野が微妙に物騒だな」

結構分厚い本もあるな……これを見る限りでは、グリーと張り合えそうさ。

そんなことを思いつつ、荷物を置き、部屋を出ようとしたところで、気になるものが目に入った。

「あれ、この絵……」

本棚とは反対側の壁に掛けられた絵。

育ってる野菜の種類は違うけど……さつき外で見た家庭菜園の絵だ。

「イリナさんが書いたのかな？」

「みたいだね、ほら」

グリーが絵の右端を指差す。

そこには、irena garudidesとサインが入れてあった。

“イリナ ガルディデス”って読むんだよね？

「おお、『精霊語』で書いてある。

俺は勉強苦手だから、なんとか読むぐらいしかできないけど、こういうので名前とか書くとかつこいいいな」

「まあ、普通の人は精々簡単な単語や読み方が分かるぐらいだろうね。逆に精霊も『人語』はあまり理解できないらしいよ」

「え、そうなのか？でも、『詠唱』とか普通に『人語』じゃ？」

「あれは『言霊』によって精霊に呼びかけてるからね。意味が通じなくても、意思が通じれば大丈夫なんだよ」

「あー、そうなんだ」

「古代魔法の中には『精霊語』を使うものもあるらしいけどね。

僕もある程度は勉強してるけど、そこまで詳しくは……っ！
「グリー？どうしたんだ？」

突然グリーが何かに気づいたかのように、驚愕の表情を浮かべた。

「……いや、何でもないよ。……まさか、ね……」
「……？」

グリーは頭を横に振り、部屋を出ていった。

この絵が、どうかしたのか……？

もう一度絵をよく見てみるが、特におかしいところはない。こつこつ
う芸術の類はよく分からないけど、素人にしてはうまいと思う。

他にも木や花に川、魔物の絵なんかも飾ってあるけど、普通にうまい
絵だ。

……グリーは一体、何に驚いたんだ？

「ハデイくん？」

「あ、おう」

グリーに呼ばれて、俺は部屋を後にした。

まあ、何でもないって言うってたし、気にする必要もないか。

第47話 森の中の家（後書き）

では、次回予告です！

「ハデイだ！

突然の来客にも関わらず、俺達によくしてくれるイリナさん。
夕食の席で話をするうちに、仲良くなっっていくんだけど……。

次回、冒険者ライフ！第48話『願いの珠』！

どうしたんだグリー？変な顔して……」

第48話 願いの珠

「お待たせー!!」

「待たせてごめんなさい」

居間で待つこと十数分。

メリスとイリナさんが料理を持ってきてくれた。

「手伝います」

「あ……ありがとう」

イリナさんの手から料理を取り、机へと並べていくグリー。

普段は結構紳士だよな、こいつ。

……俺には銃とか突き付けてくるのに。

「ほら、ハデイも手伝ってよ!」

「あ、悪い悪い」

料理の量は多かったけど、4人で協力したおかげで、すぐに並べ終わった。

「それじゃ!手を合わせて下さい!」

「……………」

メリスの台詞に、子供か、とツッコミたくなっただが、別に悪いことをしているわけではないので黙っておく。

「いただきます!」

『いただきます』

メリス指示のもと、しっかりと手を合わせて食事を始める。木の実を使ったパンに野菜と魔物の肉が入ったスープ、焼き魚に果物と自然味あふれる食卓だ。

少し薄味だけど、素材の味が生きてておいしい。調味料をあんまり使っていないのかな？

「おいしい！！イリナって料理上手なんだね！！」

「ありがとう。でも、メリスも手伝ってくれたじゃない」

「えー、私野菜やお肉を切っただけだよ？」

楽しそうに話しながら食事を進める2人。なんか、すっかり仲良くなってるな。

微笑ましく思いつつ、ゆつくりと料理を堪能する。

「ごちそう様ーーーー！！！」

聞こえない！俺には何も聞こえない！！

「えっ……と……？」

イリナさんの困惑した声が聞こえてくる。

そりゃ困惑するよな！！どこのバカが人と談笑しながら1分未満で食事を終えるんだよ！！ああ、こここのバカか！！

「メリス」

「ん、何？」

「空気読め」

「何で！？」

うるせえよ、ここのバカ!!

「……メリス、おかわりする?」

「本当!? ありがとうイリナ!!」

すげえ! この人普通に対応してる!

「む、このメリスの扱い……」。

イリナさん、油断ならない相手だね……!!」

「待てグリー、何の対抗心だそれは」

つてか、夕食の時に探りを入れるんじゃないかったっけ?

すでにそんな空気じゃなくなってるんだけど。

「そついえば……あなた達、冒険者よね?」

「え、はい、そうですけど……」

「すごいイリナ!! どうして分かったの!?!」

「ほら、ハデイさんとグールドさんが、腕輪をしてるから」

「あ、本当だ!!!」

「待てメリス、お前のその反応はおかしい」

まるで今知ったかのような反応をするメリスに、思わずツツコむ。

「え、あ、し、知ってたよもちろん!! 忘れてなんて全然ないよ!

「!」

「……………」

忘れてたのか、こいつ。

「私、ずっとここに住んでるから、冒険者の話に興味があるの。良かったら、聞かせてくれない？」

「ずっと……ですか？」

「……ええ」

イリナさんの返答に、グリーは少し考えるような顔になる。

「よし！そういうことなら話そうよ！私達の冒険談の数々を！！」

「おう、何がいいかな……」

「じゃあまずは！この前の『赤ちゃんのお守』の話を……」

「冒険談を話せ！！」

よりもよってそれかよ！！冒険者のイメージがぶっ壊れるぞ！！

「えーとね、私とハデイが新婚夫婦に間違えられたんだよ！」

「ストップ！！グリーストップ！！」

「ってか、2週間以上前の話でキレんな！！」

「勘違いしないでくれハデイくん、僕は怒ってなんかいない。

ただ、君への殺意が抑えきれないだけだ……！！」

「余計怖いわ！！」

銃を取り出そうとするグリーを必死に取り押さえる。

「それでね、その後ビスケット町を旅立ったら、途中の森でこわい魔物が襲ってきて……」

「メリスてめえ！！普通に会話を続けてんじゃねえ！！」

「ハデイ、なんて言っただけ？あの魔物！」

「まずグリーを止めてくれ！！」

「……そんなに長い名前だっけ？」

「名前じゃねえよ！！」

「『バトルプラント』だよ、メリス」

「そうそう、それぞれ!!」

「会話しながら銃を取り出そうとすんなグリー!!」

「一旦会話を止めやがれメリス!!」

ちくしょう、こいつらいつも俺をないがしろにしやがって！
覚えてろよ!!いつか目に物見せてやる!!

「ハデイ、そのセリフ雑魚っぽいよ?」

「心を読むなあ!!」

肉体的にはグリーに、精神的にはメリスに追い詰められて、俺は
体どうすれば……!!

「……ふふ」

と、ふいにイリナさんの笑い声が聞こえてきた。

「あ……ごめんなさい。

……あなた達、本当に仲が良いのね」

「……仲が良い……?」

この状況のどこを見てそう思ったんだ……?

「うん!!もっちろん!!」

「僕達は運命共同体だからね、仲が悪いはずがないよ」

「待てコラ!!」

人に危害加えようとしていて、その発言はどうなんだ!?

「……ハデイは、私達のこと嫌いなのか？」

「いや、そんなことはないけど……」

「そっか！そうだよな！良かったー！！」

嬉しそうに笑うメリス。

……本当、こいつには敵わないよな。

「……何を見惚れてるんだい？ハデイくん」

「見惚れてねえ！！銃を向けるな！！」

……こいつにも敵わない。別の意味で。

「それで話の続きだけど、チョコレート町でレイラって子に会ってね……」

その後、メリスはここ最近の冒険や依頼の話をイリナさんに話した。チョコレート町でレイラに会ったことから始まり、精鋭部隊『ソレイユ』や他の冒険者達と協力して、魔物の軍団と戦ったこと、港町ヨーグルトで冒険者ギルドへ行き、そこで受けた依頼でブラッディヴァインと戦ったこと、海釣り船の護衛でアザがシーサーペントを一撃で倒したことで、ミカン村では自分が風邪をひいて、危うく審査の申請が間に合わなくなりそうになっただけで、出発が延びたことで、3年前の反乱の話が聞けたこと、など。

……なんか、思い出すとなつかしいな。まだ、そんなに時間経ってないのに。

「そっか……本当に冒険者は、そんな冒険をしてるのね……」

「あれ、イリナひょっとして、冒険者に興味があるの？」

「ええ、冒険者もそうだけど、世界を旅して回るっていうことに興味があるわ」

「そうなんだ！じゃあ、そのうちこの森を出て、旅とかしようって思ってるの？」

「……………」

「……………イリナ？」

「あ……………うん、そうね。……………いつか、きっと」

少し暗い顔で呟くイリナさんに、メリスは首を傾げる。

んー……………この家に住んでるのに、何か理由がありそうだな……………。ひょっとすると、それは……………、

「……………そういえば、まだ聞いてなかった」

「え、何を？」

「あなた達が、こんな森の奥で道に迷ってた理由」

「うっ……………」

そっぴや言ってなかったな……………。

ってか、この人が『願いの珠』に関係があるとしたら、正直に話していいか分からないし……………どうしたものか。

……………とりあえず、無難に『狩り』に来たってことにしておこう。イリナさんは冒険者についての知識も持つてるみたいだし、これなら納得してくれるはずだ。

「俺達がこの森に来たのは……………」

「『願いの珠』を捜しに来たんだよ！！」

「そうそう、『願いの……………ってうおい！！……………』」

このバカあっさりとバラしやがった！！

こいつに警戒心はねえのか……………って、しまった！こいつイリナさんと仲良くなってたんだって！警戒なんてしてるわけねえか！！

「なんでも、どんな願いでも叶えてくれる魔法の道具なんだって！
！ロマンチックだよね！！」

俺の心境なんて全く知らず、さらに続けるメリス。

……もういい、今更止めても遅いし、全部言っちゃえ。

「……………」

「この森のどこかにあるって聞いたんだけど、イリナは知らない？」

「あるって断言すんな。そもそも存在自体疑わしいんだからな？」

「もー！ハデイにはロマンが足りないよ！！」

「いや、お前が子供過ぎるだけだろ。そんな話酒場でしたら、その場にいる冒険者全員に笑われるぞ」

「あの人達はいつも笑ってるでしょ！！」

「そういう意味じゃねえよ！！」

……しまった、いつもの調子で会話を遮ってしまった。

俺とメリスが言い争いを始めたせいか、イリナさん黙っちゃってるし。

「それで、どう？手掛かりとか！関係ありそうなことだけでも良いんだけど……………」

「…………ごめんなさい、知らないわ」

イリナさんは少し顔をうつむかせ、呟くような声で言った。

んー、知らないのか…………。いや、言われたことを丸呑みにするのはダメだよな。ウソついてる可能性もあるし。

「そっか…………んー、やっぱりないのかなあ……………」

がっかりしたように呟くメリス。

……こいつは全く疑わずに丸呑みにしてんな。一応冒険者（正確にはまだ違うけど）なのに大丈夫か。

「……………ねえ」

「ん、なあに？イリナ」

「もしも……もしも、『願いの珠』が手に入ったら、あなた達はどんな願いを叶えてもらうの？」

と、イリナさんが質問をしてきた。

どんな願いつて……、

「それ以前に、カオスに捜せって言われたから捜してるだけで、別に俺はそこまで欲しくないけど」

「ええっ！？ハデイもしかして、何にも願いがないの！？」

「いや、そうは言っていないだろ。俺にだってあるぞ、欲しい物の1つや2つ」

「例えば？」

「金」

「……………」

「待てメリス、なんだそのかわいそうな人を見るような目は」
「だって……………」

確かに、最近はそんなに金に困ってないし、必要以上に金を手に入れたら、怠けてしまつて逆に良くないのかもしれない。

それでも！金はあるに越したことはない！！なかつたら絶対困るからな……！！

「もー、ハデイったら、せつかくどんな願いでも叶うのに、そんな願いでいいの？」

「じゃあ、お前だったらどんな願いを叶えるっていうんだ？」

「私？私はね……」

よくぞ聞いてくれました、と言わんばかりに自信満々な様子でしゃべり始めるメリス。

まあこいつのことだから、どうせそんな大した願いじゃないだろうけど……。

「超高級な宝石専門店に並ぶような、超高級なアクセサリー……もしくは時価数億Gユールドの宝石が欲しい……」

「やっぱりか！……ってか、俺と大差ねえじゃねーか……」

「一緒にしないでよ！私はハデイみたいに卑しい願いじゃないもん……」

「金が卑しいなんて考えは偏見だ……」

「……ってか、金が卑しいものだったら、世の中のほとんどの人間は、卑しいもののためにがんばって働いてるってことになるぞ……」

「魔法の道具を使って手に入れようとするのが卑しいの……」

「……だったら、お前が言ったアクセサリーも同じだろ……」

ギャーギャーと、いつもながらに口ゲンカをしていた。

……だから、俺とメリスは見る事ができなかった。

「……悪いね、なんだか騒がしくて」

「……」

「イリナさん？」

「あ……ううん、なんでも……ない」

この時、イリナさんが、どんな顔をしていたのかを……。

「うわー！広ーい！！」

夕食と風呂の後、雑談をしているうちに11時になってしまったため、俺達は泊まらせてもらう部屋へと来ていた。

メリスは騒ぎ過ぎ………とりたいところだけど、本当に広いよな、この部屋。客間か何かなのか？それにしても広過ぎだと思っけど……。

「お布団、ここに置いておくわ」

「ありがとな、イリナ」

俺がお礼を言うと、イリナは微笑みで返してくれた。

3時間以上雑談していたおかげで、とりあえず、タメ口で話せるくらいには仲良くなれた。

……『願いの珠』の情報は、結局何も得られなかったけど。

「私も部屋で休むわ。おやすみなさい」

「おやすみ」

「おやすみー！！」

「おやすみ」

イリナが出た後、布団を敷き始める。

……なんか、布団で寝るの久しぶりだな。宿屋は大抵ベッドだもんな。

「にしても、結局『願いの珠』の情報はなしか」

「そりゃそうだよ、イリナは何も知らないって言ったでしょ？」

「お前……うん、まあ、そうだな」

雑談してた時も、特におかしいところもなかった。

それに、一宿一飯の恩があるのに、あんまり疑うってのもよくないよな。

そもそも、俺は『願いの珠』の存在自体、怪しいと思ってるし……。

「……そうかな」

「グリー？」

「いや……何でもないよ。とりあえず、今日のところはもう休もう。

昼歩いたせいで疲れてるしね」

「だな……んじゃ、おやすみ」

「おやすみ……」

「……おやすみ」

だいぶ疲れていたのか、俺の意識はあっという間に闇の中へと落ちていった……。

「……きて……起きて！！ハデイ！！」
「……あ？」

慌てた様子のメリスに、体を揺らされる。

……なんだ、もう朝か？全然寝た気がしないんだけど……。

「って、まだ1時間しか経ってねえじゃねーか！！」

メリス、何のつもり……」

「また、あの“変な気配”がするの！！」

「……え？」

変な気配って……。

「ここに来る途中で感じたものと、同じものかい？」

「うん！！」

俺と同じく起こされたと思われるグリーの質問に、メリスは力強く
うなづく。

「……気のせい、とかじゃないんだな？」

「違うよ！だって、こんなにはつきり感じるもん！！」

「……もう少し静かにしろ。イリナが起きちまうだろ」

「う……」

黙ったメリスをしり目に、布団から起き上がり、夜桜を腰に差す。

「んで、場所は？」

「あ……うん！！えっと、とりあえず外だよ」

「……流石に、家の中にはないだろうからね」

「え？」

「いや……早く行こう、またここに来た時みたいに、いつ気配が消えるか分からないからね」

メリスに先導され、俺達は外へと出た。

……完全に真っ暗だな。何にも見えない。

「ほら2人とも、懐中電灯」

「用意がいいな」

「さっすが兄さん！」

「森の中だからね、日が落ちたら真っ暗になるのは当たり前だろう。それでメリス、場所は？」

「えっと……こっち！！」

メリスは家の裏口へ回り、そこからまっすぐのびる道を指差した。俺達が来たのとは反対の道だな。

「……あ、イリナに一言言っておかなくていいかな？」

「いいだろ別に。それだと起こさなきゃいけないし」

「……起こす必要は、ないと思うけどね」

「……グリー？」

「いや……まだ、確信はないよ。それより、早く行こう」

……グリーの考えてることが少し気になるけど、とりあえず、進んでみるか。

メリスの言った道を進むこと数分……。

「……おい」

「あ、あれ……？」

俺達の前には、高い岩の壁が広がっていた。
……うん、行き止まりだ。

「何にもないじゃねえか!!」

「え、で、でも！確かに気配が……あれ？」

と、メリスが驚いたような顔をする。

「き、消えちゃった……」

「……はあ」

俺は思わずため息をついた。

「やっぱり、気のせいだったんじゃないか？」

「ち、違うよ!!だって、確かにさっきまでは……」

「って、言われてもな……」

信じたいのはやまやまだけど、実際、何にもないわけだし……。

「……」

「って、グリー？何やってんだ？」

グリーが壁に近づき、懐中電灯で照らしながら、注意深く見ていることに気づく。

「……おかしいと思わないかい？」

「え？」

「この道」

グリーは俺達が歩いてきた道を見ながら言う。

「邪魔になるような草木が刈られてる、明らかに、人為的に作られた道だ。」

「……だけど、その道が、この壁で不自然に途切れてる」
「……あ」

「言われてみれば……。」

「でもそれって、誰かがここまで道を作ったけど、壁に当たったから、そこでやめた。とか」

「……だったら、すぐにまた植物が生えて、道は消えてしまっはすだ。見た感じ、刈られてまだ3日も経ってないよ。」

「もちろん、ハデイくんが今言ったことが、たまたま3日以内に行われたって可能性もあるけど……。」

「グリーは口を止めて、壁のある部分に手をかける。」

「よく見るとそこには、切り込みのようなものがあった。」

「グリーが手に力を入れると、その部分の岩がはがれ……、」

「……どうやら、そうじゃないらしい」

「……レバー？」

「グリーがそのレバーを下げると、ガコンという音と共に、壁の一部がへこむ。」

「そして、その壁の中央が割れ、左右へと開いていく。」

「……そうして、道の先に、洞窟の入口ができあがった。」

「隠し、洞窟……!？」

「……全く、面白い仕掛けだね」

やれやれ、という感じにグリーが眩く。

「わざわざこんな仕掛けを作って隠してるってことは、この先には、人には見られたくない何かがあるってことだ。」

「……2人とも、心の準備はいいかい？」

「おう！」

「うん！！！」

俺とメリスは元気よく返事をする。

散々疑ったけど……『願いの珠』が本当にあるんじゃないかって、俺でも思えてきたからだ。

洞窟に入り、暗い中歩くこと数分……出口が見えてきた。

「……ここは……」

洞窟を抜けると、目の前に広場のような開けた場所が広がった。

森の中と違って月や星の光が遮られないし、そこら中に淡い光を放つ、街灯のような物が置かれているため、結構明るい。上には夜空が見えるから、さっきの洞窟は洞窟っていうより、ただの壁みたいなものだったみたいだ。

「ハデイー！あれ！！！」

メリスの指さす方を見る。

そこには……直径3m程ある巨大な宝玉が、台座の上で、虹色に輝いていた。

これが……まさか……！！

「……見つかっちゃった」

「……え？」

宝玉の後ろから、1つの影が現れる。

「5年間、私1人でも隠せてただけ……」

「……な、なんで、ここに……」

「案外、あっけなく見つかってしまうものね……」

肩をすくめるその人物を、メリスは驚愕の表情で見つめる。

「イリ、ナ……！？」

「……ええ、私よ？」

微笑みを浮かべるイリナ。

……だけど、それは最初に自己紹介をした時や、数時間前に雑談をしていた時に見せたものとは、明らかに違う、思わず、背筋に寒いものを感じるような、無機質な笑みだった……。

「……ねえ、夕食の時に話したこと、覚えてる？」

「え？」

「冒険者に興味があるって……言ったでしょう？」

「……ただ、私は冒険者には、なれないから。それに……これが、最後だから。」

「1つ、わがままを言わせてほしいの」

無機質な微笑みを浮かべたまま……イリナは、右手に握った細身の剣を、俺達へと向けた。

「私と……戦って」

第48話 願いの珠（後書き）

では、次回予告です！

「メリス、だよ。」

『願いの珠』を見つけた私達に、剣を向けるイリナ。

どうして、こんなことに……私達は……！

次回、冒険者ライフ！第49話『イリナ・ガルディデス』……。

……どうして？イリナ……！！」

第49話 イリナ・ガルディデス(前書き)

ものすっごく遅れてしまっただけで本当にごめんなさい!!
ようやく更新できました!!

第49話 イリナ・ガルディデス

「戦って、って……」

俺達は剣を向けてきたイリナを見て、呆然としていた。

「イ、イリナ、何言って……」

「そ、そうだよー！なんで、イリナと戦わなきゃ……！」

慌てふためく俺とメリス。

そうだよ、俺達とイリナが戦う理由なんて……！

「『ディザイア・ガーディアン願いの守護者』……」

そんな俺達に、グリーの呟きが聞こえてきた。

「そういうことなんだろう？『イリナ・ガルディデス』」

「……驚いた、気づいたの？この名前の、意味に」

「意味……？」

「ああ……メリス、杖を貸してくれるかい？」

「え、う、うん」

グリーはメリスから杖を借りると、先端を使って地面に文字を書き始めた。

i r e n a g a r r u d i d e s

「これ……イリナの名前だろ？」

「そう、そして」

グリーはさらに、その下に文字を書いていく。

「……精霊語で、『ディザイア・ガーディアン願いの守護者』はこう書くんだ」

d e s i r e g u a r d i a n

「……………っ!!」

地面に書かれた文字を比較して、ようやく俺は気づいた。

「アナグラム……!!?」

「……そういうことだよ」

「え?え?」

いや、なんでメリスが分からないんだよ。魔法使いだろこいつ。

……あーでも、こいつ頭の回転悪いからな。精霊語もあんまり知らなさそうだし。

「ハデイ、何か言った?」

「えー!アナグラムってのはな!文字の並び替えのことだ!!」

メリスの体が赤く光り始めたため、さつさと答えを教える。

「並び替え……?」

「ほら!irenna garudidesを並び替えると、desire guardianになるだろ!!」

「……………えー……………あー……………」

メリスが地面に書かれた文字と格闘すること数分。

「本当だ!!」

「遅い!! 時間かかり過ぎだ!!」

ほら! イリナが呆れた顔で待ってるぞ!!」

シリアスっぽい雰囲気になったのに、ぶっ壊しやがってこの野郎!!

「ガーディアンっていても、私はゴーレムじゃない。普通の人間よ。」

……」

イリナはまた、無機質な微笑みを浮かべた。

「この珠を守るのが、私の役目なの。」

だから、あなた達が私と戦うのは、必然なのよ」

そう言つて、イリナはゆっくりと剣を構え直す。

……なんだか、少し嬉しそうに見えるな。案外、戦いが好きなんだろうか？

「ハデイ……」

メリスは杖を抱え込み、不安げな声を上げる。

……今日会ったばかりとはいえ、メリスが一番イリナと仲良くなつてたもんな。

当然、戦いたくなんてないはずだ。

「ハデイくん、どうするんだい？」

グリーからも声をかけられる。

ただし、こつちからは不安な様子は感じられない。
……というか、俺の答えぐらい予想してそうだな。

「……………どうするって、決まってるだろ」

俺は剣を構えるイリナを見据えた。

イリナは『願いの珠』を守るのが役目。だから、『願いの珠』を狙う俺達と戦わなきゃいけない。

でも、俺達はイリナと戦いたくなんてない。

……なら、話は簡単だ。

「行こう、メリス、グリー」

「……………え？」

「……………」

きびすを返し、入り口へと歩き出す俺を見て、メリスからは疑問の
声が、グリーからは小さく微笑む気配がした。

「ちよっ……………ちよっと、どういう、つもり？」

イリナは戸惑ったような声を出す。

どういうって……………。

「夕食の時にも言っただろ、イリナ。

俺達がここに来たのは人に頼まれたからであって、別に『願いの
珠』が欲しくて来たんじゃない」

「つ……………で、でも、言ってたじゃない！！」

「お金が欲しいとか、宝石が欲しいって！！」

「そりゃ、叶えたい願いが全くなかった言われたら、そんなこと

はないけどな」

「なら、どうして!？」

大声を出すイリナに、俺は笑って言ってやった。

「一宿一飯の恩があるからな。

恩人と戦ってまで叶えたい願いなんて、俺達にはねえよ」

イリナは『願いの珠』を狙う奴と戦わなきゃいけない。俺達はイリナと戦いたくない。

……だったら、『願いの珠』を狙わなければいい。ただそれだけで俺達はイリナと戦わずに済むんだ。

「……うん！私も、イリナと戦いたくなんてないもん!！」

「メリスもこう言ってることだし、僕も異存はないよ」

2人も笑顔を浮かべ、俺を追ってきてくれた。

良かった、これで一件落着……、

「……ふざけないで」

安堵した俺の耳に、強い怒りを孕んだ声が聞こえてきた。

「やっと……やっと、終わると思ったのに……どうして、終わらせ
てくれないの……？」

これからも、私に苦しみ続けるっていうの!？」

「イ、イリナ……？」

イリナから発せられる殺気に、俺達は思わず硬直した。

終わらせる……？苦しみ……？一体、何を言ってるんだ？

イリナは左手を……その中指につけられた指輪を、胸の高さまで上げた。

次の瞬間、その指輪が緑色の光を放つ。

「な、何だ!？」

戸惑う俺達に構わず、イリナはそれを口にした。

「……地表より気流の集いを呼ぶ 我は風を操る者なり!!」

「っ!?! 2人とも、伏せるんだ!!」

グリーがとつさに俺達2人を抱え込み、地面へと倒した。

「切り裂け ハリケイド!!」

数m上で、何かが空を裂く音がした。

次いで、何かが断ち切れる音。

……そして、次に目に入ったのは……、

「……………っ!!」

俺達が来る時に通った、そして、今まさに通ろうとしていた洞窟が、轟音と共に崩れ落ちていく様だった。

あまりの出来事に、それがイリナの仕業だと理解するのに、俺には数秒間必要だった。

「何でだ……イリナさん!!」

俺達に覆いかぶさり、かばってくれたグリーが、起き上がり、イリナをにらみつける。

「『願いの珠』を守るのが、君の役目なんだろう！？」

「だったら、僕達と戦う理由はないはずだ！！」

「うるさい……うるさい！！」

大声で怒鳴るイリナ。その顔は怒り一色に染まっている。

「もう、嫌なのよ……こんな物のために、私はずっとこの森にいきやいけない。」

「こんな物、守りたくなってるのに！！」

ぎり、と音が聞こえてきそうな程、強く歯をかみしめるイリナ。

『願いの珠』を、守りたくない……？

「……じゃあ、どうして、守ってるの……？」

メリスの言う通りだ。

守りたくないなら、守らなければいいはず。

メリスの言葉を聞いたイリナは、数秒の沈黙の後、ぽつりと言った。

「……『イリナ・ガルディデス』」

「……え？」

「これはあなたが言った通り、『ディザイア・ガーディアン願いの守護者』のアナグラム。」

「……これ、私の本名なの。……偶然だと、思う？」

「……っ！！」

その考えに至った瞬間、俺は一瞬、思考が停止してしまった。

俺の考えを察したのか、イリナは自嘲気味に微笑んだ。

「……私は、『願いの珠』を守るためだけに育てられた。これを作

つた、魔科学者に」
「そんな……………」

イリナの生い立ちを聞き、悲しみをあらわにするメリス。

「…………でも、守りたくなんてないんだろう？」

「だったら、やっぱり守る必要なんてないじゃないか」

「あ…………そ、そうだよ！！」

イリナ言っただでしょ！？旅を試してみたいって！『願いの珠』なんて放つておいて、さっさと出て行けば……………」

「仕方ないじゃない。私、この森から出られないんだもの」

「…………え？」

硬直したメリスから少し顔をそらして、イリナは吐き捨てるように言った。

「どんなふざけた技術なのか、知りたくもないけど……………」

私ね、『願いの珠』と繋がってるの。だから、私はこの森から出られない。

…………それだけじゃない。

『願いの珠』が願いを叶えるのは一度だけ。叶えたら、消えるの。…………私と、一緒に」

「なっ！？」

「う、うそ……………！！」

俺とメリスは驚愕の声を上げた。

ウソ……………だろ？『願いの珠』を使ったら、イリナが、消える……………！？

「さっき、言っただでしょ？これが、最後だって……………私は冒険者には、なれないって。」

……だから、最後に一度だけでいい、戦ってみたいの。本物の、冒険者と……!!」

イリナの言葉に同調するように、指輪が再び光を放つ。先程とは違い、次は黒い光を。

「古代の時より培われし魔力の力よ 聞け！我の言葉を！」

「っ!!この詠唱……やめるんだ!!イリナさん!!」

あせったように叫ぶグリー。しかし、その言葉も意に介さず、イリナは続ける。

「我が望むは一時の力！削るは我が命！

我を喰らい、弱小なる我に絶対たる力を!!古代魔法『血印』!

！」

イリナがそう叫んだ瞬間、イリナの額に赤い魔法陣が浮かび、体を禍々しい赤い光が包み込んだ。

「グリー、あれは……!!?」

「……古代魔法『血印』。」

命を力に変える……この国で定められている『禁忌魔法』の1つだ!」

「い、命!?」

「3対1だもの、こうでもしないと、話にならないでしょう?」

イリナは下ろしていた細身の剣を再び俺達に向ける。

その目には暗い光が宿っており、その薄笑いに俺は思わず恐怖の念を抱いた。

「さつき……私のことを恩人って言ったわよね？だったら、戦って……私はずっと、『願いの珠』に縛られてた。その上これと一緒に消えるなんて、嫌なの。」

「最期ぐらい、死に方ぐらい！自分で選びたいのよ！！」

イリナの目は狂気に染まっていた。

死を覚悟した……いや、死を望む者の目。

でも、俺達は……くそ！！どうしたらいい！？どうしたら……！！

「……………」

思い悩む俺の前に、グリーが進み出た。
そして、

「……………D級冒険者、グルード・テナス」

「っ！？グリー！？」

『名乗り』を上げ、『風切り』をイリナに向ける。

「グリー、何で……………！！」

「出口が崩れて逃げられないんだ。戦うしかないだろう」

「……………！！」

「……………それに、君は放っておけるのかい？あんな風になってしまった、彼女を」

「……………そうやってグリーはまっすぐ、イリナを見つめる。その目には、一点の迷いもない。」

「……………」

……そうだよな。理由は分からないけど、イリナは『命を削る魔法』まで使つて、俺達と戦おうとしてる。

それでも戦わないなんて、そんなの、ただ逃げてるだけだ。

……しっかりしろ。俺はさっき、イリナを恩人だって、自分で言ったんじゃないか！

だったら、ちゃんと向き合つべきだ！！

「D級冒険者、ハデイ・トレイト！！！」
クラス

『夜桜』を引き抜き、イリナを、相手を、まっすぐに見据える。

「兄さん……ハデイ……」

「……メリス」

後ろからの声で、半分放心状態のようなメリスに気づく。

「メリス、お前は……」

俺が声をかけた途端、メリスははっとし、数秒、イリナを見つめた。そして、

「……『魔導師』、メリス・テーナス！！！」
ワイザード

メリスもまた覚悟を決め、『紫光』を構える。

「……大丈夫か？」

「……うん、大丈夫。」

友達だもん！ちゃんと、向き合わなきゃ！！！」

きつ、といつになく真剣な面持ちなメリス。

……うん、心配はいらなかったな。
そう心の中で呟き、イリナへ視線を戻す。

「……………ありがとう」

ほんの一瞬、イリナの目が、元に戻った気がした。イリナの家で、俺達三人と楽しく話していた目に。
しかしそれも束の間、その目に再び狂気が宿る。

「私は……………イリナ・ガルディース！！」

次の瞬間、イリナは剣を振り上げ、凄まじい速さで斬りかかってきた。

ガギイインツ！！

「っ……………！！」

二つの刃がぶつかり、金属音が闇夜に響く。
……………魔法の効果か！？移動速度も、威力も、剣閃の速度も！シントさんよりも上だ！！
やばい、押し切られ……………！！

ドンツ！

「っ！！」

銃声とほぼ同時に、イリナが大きく一步引く。
助かった……………ってちょっと待て！！

「おいグリーー！！銃は流石に……」

「剣しか狙ってないよ」

「あ、ああ、なるほど」

そんなことを話してる間に、イリナの指輪が緑の光を放つ。

「地表より風の集いを呼ぶ！吹き飛ばへ ハリケン！」

直径1m程の小さな竜巻が現れ、襲いかかってくる。

やべっ……！！

「大気より火の集いを呼ぶ 燃えろ フレイア！」

後ろからメリスが炎を放ち、竜巻へとぶつける。2つの魔法は見事に相殺され、共に消えていった。

「って、同じレベルの魔法なのに……メリスと互角!？」

「古代魔法『血印』は、身体能力だけじゃなく、魔力も引き上げる。

最も、それを使う前から『ハリケイド』を使っていたから、元々の魔力もウィザードクラス魔導師級なんだろうけど……！」

再びグリーはイリナへ銃を向け、引き金を引く。

しかし、放たれた銃弾はイリナの持つ剣で弾かれてしまった。

続けざまに数発放つが、全て同じように弾かれるか、よけられるからだ。

「……おまけに、反射神経や動体視力まで上がってるみたいだね。

困ったもんだ」

そういつてグリーは肩をすくめる。

でも、今の銃撃は無駄じゃなかった。
その隙にメリスがもう一度『集中』を始めてるし、俺も間合いを詰
められたからな！

「はあああつ！！」

「つ！！」

全力を込めた渾身の一撃。

しかし、それはあっさりといリナに受け止められる。

……魔法の効果とはいえ、同年代の女にあっさり受け止められると、
ちよつとシヨックだな。

まあ、今はそんなのどうでもいい！

「魔科学者に育てられたって言ったよな……！」

それじゃ、お前はその魔科学者の……！」

「違うわ、私はあの人の子供なんかじゃない」

罅迫り合いをしつつ、気になったことを聞いてみた。

返答は予想と違ったけど。

「この森に捨てられていたそうよ、それをあの人に拾われた。

物心ついた時からずっと、家事ばかりさせられてたわ！」

「くっ！！」

押し切られ、弾き飛ばされそうになるのをなんとか耐える。

さらに、続けざまに放たれた斬撃を、ギリギリの所で受け止める。

「小さい頃はまだ良かったわ。

あの人は研究ばかりであり構ってくれなかったけど、家事さえ
ちゃんとこなせば後は好きな事ができた。

読書をしたり、絵を描いたり、冒険者に憧れて、魔法や剣の練習もした！

タルト町に連れていってもらったこともある。誕生日に本や、絵を描く筆を買ってもらったこともある！

……だけどー！！」

再び剣が押し切られたため、とっさに後ろへ退き、間合いを取って剣を構え直した。

くそっ……正面からじゃ勝てねえ……！！

「……10年前、10歳の誕生日のことよ。

突然こう言われたの、『願いの珠が完成した』って」

「っ……！！」

「今でも鮮明に覚えてるわ、その時の言葉。

『お前とこの珠を繋げた、もうお前はこの森から出られない。そして、この珠が消えた時、お前も消える。この珠を壊した時も同様にな』」

カタカタと、イリナの持つ剣が音を立てる。

怒り………当たり前だ。拾われて、10年間ずっと育ててもらってイリナにとって、その魔科学者はきつと、親も同然だったんだ。

………なのに、裏切られた。

「初めから、そうする気だったのよ。

その時に全部白状してくれたわ。20年前、あの人はこの森で『願いの珠』を作り始めた。その時から、完成には少なくとも10年かかるだろうと予測していたらしいわ。

だから、私を拾ったの。『願いの珠』を守る番人として、育てるために……！！」

イリナの顔が歪み、赤い光を纏った体は、ワナワナと震えていた。

「自分がもう高齢だから、代わりの人材が欲しかったらしいわ!!
ふざけてる!! だったら『願いの珠』で、不老不死でも願えばいいのに!!」

「……そう言ったら、笑われたわ。『そんなことをしたら、この珠が消えてしまうだろう』って。

意味が分からない。あの人、何のためにこれを作ったのかしら」

イリナは忌々しげに『願いの珠』を睨みつけ、そして、俺へと向き直った。

「5年前にあの人は老衰で死んだわ、研究で寿命を削ってたんでしようね。

「……だけど、これは残ってる。

おまけに、あの人が昔タルト町で『願いの珠』の話をしたことがあつたらしくて、それが未だに伝説として残ってるの。

「……だから、たまにあなた達みたいなのが来るのよ。

ずっと、うまくごまかして、隠し通せてただけど……ふふっ、見つかった」

軽い調子の声で、イリナは笑いながら言った。

「でもね、別に悲しくもなるともないの。

「……だって、やっと終わるんだもの。いつこれが見つかるか、ずっと怖かった……そんな時間が、やっと終わるんだから!!」

「……イリナ……!!」

そうか、それが、理由なのか。

イリナの目に宿っている、狂気の……。

……でも、本当にそうなのか？イリナは、本当に……。

「自殺すればいいって思ったことも何度かあるわ。でも、できなかった。」

これに負けるみたいで嫌だったし、何より……こんな私にも、願いがあつたから。」

自由に世界を旅する……冒険者に、憧れてたから……！」

イリナの指輪が、緑色に光り輝く。

まずい、また魔法を……！」

「ハデイくん！下がるんだ……！」

グリーの声に振り向くと、丁度メリスが『集中』を終えたところだった。

俺が退避のために走り始めたのと同時に、二人が『詠唱』を始める。

「大気より炎の集いを呼ぶ 我は炎を束ねる者なり」

「地表より気流の集いを呼ぶ 我は風を操る者なり」

メリスの持つ杖の先にゆらめく炎。その炎に四つの炎が収束し、1mを超える炎塊と化する。

イリナの周囲の風がうねり、渦巻き、轟々と音を立てながら、左手へと集まっていく。

……そして、

「燃え盛れ ブレイアム……！」

「切り裂け ハリケイド……！」

大木を焼き尽くす巨大な炎塊と岩盤を断ち切る真空の刃が正面から

激突する。

「っ!!」

ちようどぶつかった地点の近くにいた俺は、剣を地面に突き立てて生じた爆発と衝撃波に耐えなければならなかった。……近くっていても、十分退避してたはずなんだけどな。

これが、基礎魔法レベル3同士の衝突……!!
地面が大きく削られ、土煙が舞い、イリナの姿も見えなくなってしまった。

「風よ集え ハリケ」

しかし、それも束の間、イリナが発動した魔法で強風が起き、土煙はあつという間に吹き飛ばされた。

「ここに来たのは、ほとんどが冒険者だったわ。そもそも、こんな森の奥地に来るなんて、冒険者や兵士でもないが無理なものね。

……みんな、気の良い人達だった、あなた達みたいに」

フツと、イリナの顔に陰りが見られた。

「私も、この人達みたいに生きられたらって、思ったわ。

……でも、それは無理だから。

だったらせめて、少しでも近づけないかなって、思ったの」

寂しげに笑うイリナに、グリーが言葉を投げかけた。

「イリナさん……君が、冒険者に近づきたいと思っているのなら、
1つ、大きな間違いを犯してるよ」

「え……？」

「冒険者に、死にたがっている人間なんて、1人もいない！！」
「っ……！」

「進んで危険な道に行く者ならいるよ。だけどそれは、その危険を乗り越え、より強くなるためだ。」

自ら終わりを望む者なんていない」

キツ、とグリーはイリナを睨みつける。

「君は生きたくないのか！？イリナさん！！」

「………生きたいわよ………自由に生きたい！！」

グリーの言葉に、イリナも大声で応えた。

その顔は、やっぱり狂気に染まっているけど………でも。

………泣いているように、見えた。

「だけど、出れないの………この森から出れない！！」

『願いの珠』と繋がれた時から、何度も出ようとしたわ。でも、見えない壁みたいなものに弾かれた。

どれだけ剣をぶつけても、何度魔法をぶつけても！その壁は壊せない！！」

そう叫ぶイリナの目には、涙が光っていた。

………気のせいなんかじゃない！イリナは、きつと………！！

「だから………もういいの。」

もうここで………終わらせたいのよ！！」

カツ、と指輪が緑色に光る。

「地表より気流の集いを呼ぶ！我は風を操る者なり！！」

これは……また『ハリケイド』か！！

やばい！メリスはさっき魔法を使ったばかりだ、間に合わない！！

「メリス！！」

グリーがメリスに一声だけ呼びかけた。

その意図を理解したのか、メリスは『集中』を始める。

「グリー！どうする気だ！？」

「レベル3は無理だけど、今のメリスなら、レベル2なら間に合うよ」

「って、基礎魔法レベル2で、レベル3に対抗する気か！？そんな無茶な……！」

と、そこで俺はようやく気づいた。

グリーの構える銃が、緑色に光っていることに！

「切り裂け　ハリケイド！！」

「大気より火の集いを呼ぶ……」

俺達に向かつて襲い来る巨大なカマイタチ。

一方、メリスはまだ『詠唱』の段階だ。

……間に合わない。

ドオオオオオオオオオン！！

……グリーの援護がなかったら、だけどな。
『爆風の魔弾』によってカマイタチは大きく威力をそがれる。
さらに、

「燃える フレイア!!」

続けざまに放たれた炎によって、カマイタチは完全に消滅した。
あつぶねえ……かなりギリギリだったな。
……というか、さつきから気になってただけど。

「イリナ、その指輪は……?」

「……ああ、これ?」

俺に伝えるように、イリナは左手の中指につけられた指輪を三人に見せる。

あれが光った後、イリナは『集中』なしで魔法を使っている。
一体……。

「これは、『願いの珠』の試作品よ」
「なっ!?!」

『願いの珠』!?!……いやでも、試作品って……。

「『魔法石』は知ってる?自然界から採掘される、魔力を蓄える性質のある石よ。

それを加工して、より魔力を蓄えられるようにした物が『魔法玉』。

そして、その中でも特に優れた物は『魔宝玉』と呼ばれる。

『願いの珠』は、とてつもない魔力を蓄えた『魔宝玉』なの」

目線を『願いの珠』へと移す。
なるほど、あの虹色の輝きは、魔力によるものなのか。

「なるほどね……それなら全てつじつまが合う」
「グリー？」

「なぜ、魔科学者はこの森で『願いの珠』を作ったのか。そして、『願いの珠』が完成するのに、10年という歳月がかかった理由」

グリーは一呼吸おいて、説明を始める。

「『魔宝玉』に魔力を蓄えるには、大きく分けて2つの方法がある。
1つは魔法使いが直接魔力を与える方法。

もう1つは、大気中の魔力を蓄えさせる方法だ」

「……そうか！この森は……」
「そう、『神佑地』だ」

『神佑地』。『土地神』や『守り神』が存在する土地のことだ。
普通の土地と比べて、大気中の魔力が濃く、質も良いらしい。

「つまりあの『願いの珠』は、少なくとも『神佑地』の濃い魔力を
10年間に渡って蓄え続けたわけだ。

どれほどの魔力が溜まっているのか、想像するだけで恐ろしい。

……メリスが気配を感じたのも、当然だろうね」

「え……あつ！ハデイ！私が感じた変な気配、あれだよ！」
「何っ！？……ってか、遅えよ気づくの……！」

「うーん、でも、さっき洞窟の前では、何も感じなかったのに……」
「おそらく、入口が閉まっていたからだろうね。」

これを隠すために、何か細工でもしてあるのかもかもしれないし」

グリーはさらに続ける。

「そうなるよ、『願いの珠』の仕組みも想像がつくね」
「仕組みって、ただ願いが叶うってだけじゃないの？」

「どうして願いを叶えることができるのか、ってことだよ。」

『魔法』ははつきり言っつて、なんでもありだ。その代わり、対価として相応の魔力が必要になる」

「つまり、『願いの珠』ってのは……」

「人の願い……その『言霊』を元に擬似的な『魔法』を作り出し、蓄えた莫大な魔力を用いてそれを発動させる『魔導装置』……ってところじゃないかい？」

グリーの答えに、イリナは首を縦に振る。
マジか。できるのかよ、そんなこと……。

「正解よ。もつとも、私が説明を聞いたのは10年前だから、細かい仕組みなんて覚えてないけど」

「……後は、君と『願いの珠』が繋がってる、というのがよく分からないんだけど……『願いの珠』を作れるような魔科学者なら、それぐらい可能かもしれないね」

グリーは説明しつつ、何かを考えているように見えた。
一体、何を……？

「この指輪の『魔宝玉』は、『願いの珠』と比べたら全然大したもののじゃないらしいけど。」

それでも、基礎魔法レベル3を10回ぐらい使える魔力を蓄えられる」

「10回!?!」

俺は思わず戦慄した。

魔力が少ないとはいえ、『魔導師』^{ウィザード}の称号を持つメリスですら、基礎魔法レベル3を2回も使えば魔力が無くなるってのに、10回！？

「となると、長期戦は不利だね……」

「あ、でも兄さん！私、ブレイアムなら後4回ぐらいできると思うよ……」

「……え？」

俺はもちろんのこと、グリーも一瞬目を丸くする。

「あ……その杖の効果かい？」

「うん！そうだと思う……！」

嬉しそうに『紫光』を抱えるメリス。

『夜桜』や『風切り』もすごい武器だけど、『紫光』もそれに劣らない代物だったみたいだ。

「……それでも、イリナさんはまだハリケイドを6回は使えるはずだから。やっぱり、早めに終わらせるべきだね。」

そのためには……ハディくん」

「おう、分かってる」

俺は『夜桜』を持つ手に力を込める。

「彼女は死を望んでる。だけど、それは彼女の本意じゃない。」

……イリナさんは、生きたいんだ」

「分かってるっての」

俺はキッと、狂気に吞まれるイリナを見る。

さっきイリナは、『もついい』って言った。『自由に生きたい』、

でも、『もういい』って。

……ウソだ。そんなの、ウソだ。

剣からも、魔法からも、イリナの気持ちさがビシビシと伝わってくる。

生きたい。

この森から出たい。

自由になりたい！

……諦めたくない！！

「だから、助けたいって思えるんだ！！」

剣を交える度に、心の叫びを聞かされてる気分だ。

そう何度も聞かされてちゃ、見捨てる気も失せるっての！！

「っ……！！」

俺の言葉を聞いて、イリナは動揺したようだった。

しかし、すぐにまた、その目は狂気に染まってしまっ。

「助けたいって……そう思ってくれるのなら、ちゃんと、殺す気で戦ってよ！！」

イリナの持つ指輪が緑色に光る。

それを見ても、もう俺が焦る必要はない！

「2人とも、頼んだ！！」

『了解！！』

メリスの体は赤、杖は紫、そしてグリーの持つ銃は緑の光を放つ。

「地表より風の集いを呼ぶ！我は風を操る者なり！

切り裂け ハリケイド！！」

「大気より火の集いを呼ぶ！燃えろ フレイア！！」

『ハリケイド』に『フレイア』と『爆風の魔弾』が向かい、激突する。

爆風と衝撃波に耐えながら、俺は足に意識を集中した。

カオスの話では、『爆風の魔弾』が使えるのは2回まで。

メリスが『ブレイアム』を使うのには時間がかかるから、もう『ハリケイド』に対抗する手段はない。

だから……これで、決める！！

「縮地！！」

足にためた力を解放し、一気にイリナへ近づく。

強力な魔法を使った直後の不意打ち、普通ならとても対応できないが、イリナは『血印』の効果か、反応し、剣を振ってきた。

「ああああああああああああ！！！！」

『縮地』の勢いをそのまま剣に乗せ、思い切りイリナの剣へとぶつける。

普通に斬り合えば力負けしちまうだろうが、これだったら勝機はある！！

2つの刃が重なり、そして……。

一方の刃が、もう一方の刃を、切り裂いた。

「っ!?!?」

剣を斬られ、驚愕に目を見開くイリナ。

その隙を逃さず、俺はイリナの首へ剣を突き付けた。

「……………」

数秒の間を置いた後、イリナの体を包んでいた赤い光が消え、イリナは目を閉じ、両手を上げる。
それを確認して、俺は告げた。

「俺達の勝ちだ、イリナ」

「……………ええ」

そう応え、ゆっくりと目を開くイリナ。その目には、もう狂気の色はなかった。

「それで?……………やっぱり、殺してくれないの?」

「当たり前だ、まだ言うのかよ」

「……………『願いの珠』、使わないの?」

「……………ああ」

イリナの瞳が哀愁の色に染まる。

俺は思わず、目を背けてしまった。そうだ、これじゃ、何の解決にもなっていないもんな……………。

そんな俺を見て、イリナは力なく笑った。

「……………ごめんなさい。まだ会って間もないあなた達に、無理なお願

いをしちやって」

「……………」

俺は、イリナの顔を見ることができなかった。

……………何か方法はないのか。……………何か！！

「そのことなだけでさ」

その時、グリーが前へと進み出た。

「実は、1つ叶えたい願いができたんだ」

「は……………？おい、グリー！？」

思わず怒鳴った俺を、グリーは片手で制する。『大丈夫』、と。

……………信じるぞ、おい。

「……………どんな、願いなの？」

「みんなが望む願いだよ」

グリーはイリナに笑顔を向けた後、『願いの珠』へ顔を向ける。

「『願いの珠』は、どんな願いだって叶えられるんだろっ？」

「……………ええ、そのはず」

「だったら」

グリーはもう一度イリナに笑顔を向ける。

「『イリナ・ガルデイデスを願いの珠から解放する』って願いも、もちろん叶えられるんだよね？」

……え……？……あ……！！
そう、だよな。どんな願いでも、叶えられるんだもんな……！！
俺だけじゃない。メリスも、イリナも、思わず思考停止状態になっ
ているようだった。

「に、兄さん……！！」

「グリー……お前って奴は……！！」

歓喜に震える俺とメリスに笑顔を向けるグリー。

「……本、当に……？」

「うん」

「だ、だって……そんな……！！」

「イリナさん」

グリーは真剣な眼差しをイリナに向ける。

「君は、もっと早く気付いていたんじゃないのかい？

こうすればいいってことに」

「……それは……だって、私は『願いの珠』と繋がってるから、
願いの珠』が、使えなくて……！！」

「他の人に頼めばいい、とは思わなかったのかい？」

「だ、って……！！」

イリナの瞳から、涙がこぼれる。

「みんな……楽しそうに、話してたから……！！

私、なんかのために……その願いを、諦めるなんて……！！」

「……そうか」

泣きじゃくるイリナの頭に、グリーは優しく手を乗せた。

「大丈夫」

「っ……………」

「大丈夫だよ。もう、君はこんな物に囚われなくていい」

「う……………あ……………」

「自由に、生きていいんだ」

「う……………っ……………あ……………ああああ……………！！」

せきを切ったように涙を流すイリナの頭を、グリーは優しくなでる。

…………… ったく、本当に大した奴だよ。お前は。

「……………グリー」

「うん、頼んだよ」

俺は傾き、ゆつくりと『願いの珠』へ顔を向ける。

イリナを今まで縛っていた物、それを使ってイリナを開放するなんてな。

「そんじゃ、叶えてもらおうか。俺達の、願いをよ！」

俺は『願いの珠』へ歩み出した。

『言霊』を使うんだよな？とりあえず、手を触れて願いを言ってみればいいかな。

そんなことをのんきに考えていた。それぐらい、俺は安心しきっていた。

もう、これで終わりなんだ。万事うまくいったんだ。

俺は、そう思っていた。

……その時だった。

ギョロッ……

「……………え……………？」

『願いの珠』の、その白い表面に、赤い目玉のようなものが現れる。次の瞬間、それは大きく見開き、俺に焦点を当てた。

「なっ……………なん……………！？」

それだけではない。

ミシミシという、まるで骨を砕くような音と共に、『願いの珠』は形を変えていく。

4か所が枝のように伸び、一度折り曲がって地面に着いたかと思えば、その先端が五つに分かれ、獣の足のような形になる。

さらに、後ろの部分が盛り上がっていき、天使を思わせる、巨大な翼に変わる。

最後に、球体の体の上に、これまた天使を思わせる、赤く輝く光の輪が現れた。

その、異形としか言い表せない姿に、俺達は全員、言葉を失う。

そんな俺達に目を向け……それは、甲高く、奇怪な産声を上げたのだった……。

第49話 イリナ・ガルディデス（後書き）

では、次回予告です！

「グリーだ。

突然姿を変え、暴れ出す『願いの珠』。一体、どうなってるんだ！？」

これは……一体、何なんだ？

次回、冒険者ライフ！第50話『豹変』。

……諦めないよ、絶対に！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3302o/>

冒険者ライフ！

2012年1月14日02時46分発行